

アクセル・ワールド
君の隣にいるために

フラッピー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

加速世界にある人物が立っていた。

背中に二つの剣、腰に二つの銃を付けていた。

その人物の名は、『ブラウンクリエイト』

※注意点

この作品はFateなど型月シリーズやFEとのクロスオーバーとなっております。

あらかじめご了承ください。

オリジナル要素もかなり多いのでそこところもよろしくお願いします

目次

序章 奨真と楓子	1	第8話 加速世界へ	87
人物紹介（ネタバレあり）	1	第1章 加速世界での2人	
第1話 出会い	25	第1話 加速世界での出会い	101
第2話 一緒に登校。一緒に下校	35	第2話 ブラックロータス	110
第3話 一緒にゲーム	43	第3話 エネミー狩り	121
第4話 歩く練習	53	第4話 奨真の必殺技	134
第5話 突然の別れ	64	第5話 告白	142
第6話 橘奨真は倉崎家の養子になる	72	第6話 対面	そして……
第7話 楓子へのプレゼント	80	第7話 ネガ・ネビユラスの集まり	150
		第8話 レッドライダーの死とネガ・ネビユラス崩壊	181

第2章 新たなバーストリンカー

第1話 梅郷中 | 197

第2話 日下部繪登場 | 207

第3話 シルバークロウ | 218

第4話 クロウvsアッシュ | 227

第5話 黒雪姫の事故 | 240

第6話 ネガ・ネビュラス復活

250

第3章 動き出す者たち

第1話 ホワイトコスモス | 263

第2話 甘い2人 | 274

第3話 意外な助っ人 | 286

第4話 クロムデザイナー | 299

第5話 激闘は終わり、そして

305

第6話 孤児院 | 315

第7話 弟子へのご褒美 | 331

第8話 昼休み | 343

第9話 尾行 | 354

第4章 新たな敵、新たな仲間

第1話 新学期早々のトラブル

361

第2話 ライムベル | 378

第3話 デート。そして…… | 388

第4話 投影 | 403

第5話 アンクルとエイトの訓練

第15話	決着	567
第14話	能見との決戦	556
第13話	沖繩での戦い	539
第12話	翌日の朝	522
第11話	お泊まり『後編』	509
第10話	お泊まり『前編』	494
第9話	対面	482
?		470
第8話	タンタルアングルはどんな人	453
第7話	アッシュの小さな優しさ	440
第6話	奪われた翼	427

第16話	集結	582
第5章	バーストリンカー達の日常	
第1話	ローカルネット荒らし	605
第2話	アクセル・アサルト	629
第3話	崩壊	641
第4話	お見舞い	661
第5話	外国の人	679
第6話	帰宅する者	692
第7話	転校生	705
第8話	自己紹介	721
第9話	アルトリア敗北	739
第10話	強者現る	749

第1話 マシユ・キリエライト

第7話 元どおり

932

761

第7章 インフィニットバースト

第12話 緊急事態?

第1話 領土戦

776

945

第13話 ダイエット一週間

第2話 黒雲

797

958

第14話 温泉合宿

第3話 夏祭り

819

971

第6章 闇に落ちる仲間

第4話 加速できないバーストリン

第1話 白夜の過去

カー

844

985

第2話 激突

第5話 女神ニユクス

858

993

第3話 アンクル対サルファポッド

第6話 真打ち登場

871

1006

第4話 紅蓮の聖女

第7話 七王集結

888

1020

第5話 黒い影

第8話 助け合い

903

1029

第6話 あきら対白夜

第9話 ミッション終了

915

1041

第8章 夏休み

1223	第1話	ショッピング	1199
	第2話	旅行	1187
	第3話	計画	1178
	第4話	海水浴でハプニング	1160
	第5話	寂しさ	1146
	第6話	レミの想い	1138
	第7話	ナンパ	1131
	第8話	花火	1113
	第9話	バイキング	1095
	第10話	小さいのは罪?	1082
	第11話	コンテスト	1073
	第12話	フランスからの来訪者	1055

1240	第13話	ダークアヴェンジャー	
	第9章	加速世界の聖杯	
	第1話	阻止するために	1365
	第2話	復活の災禍の鎧	1347
	第3話	英霊級エネミー	1336
	第4話	恐怖	1321
	第5話	女子会	1308
	第6話	構ってほしい皇帝様	1297
	第7話	強くなるには…	1285
	第8話	奇跡の出会い	1265
	第9話	アーチャーの力、ダークの先祖	1252

a	第10話	レイカー対ネロ	1380
d	第11話	殺人鬼襲来	1393
e	第12話	修行の終わり	1411
w	第13話	ういういの友達	1424
o	第14話	遊園地	1436
r	第15話	着ぐるみの中の人の正体	1450
k	第16話	アルトリアの苦勞	1468
s	第17話	英雄王	1483
—	第18話	伝えること	1495
—	第19話	1人を守るために	1504
—	第20話	unlimited	1516
—	—	—	1516

—	第21話	死闘の終わり	1524
—	第10章	聖杯復活後の加速世界	—
—	第1話	図書館デート	1535
—	第2話	2人の放課後	1549
—	第3話	幼馴染み3人	1559
—	第4話	パペットの力	1567
—	第5話	有名人?	1582
—	第6話	副担任。初めての恥じらい	1603
—	第7話	見学?	1626
—	第8話	『直死の魔眼』	1654
—	第9話	白雪たちの尾行	1667
—	第10話	幼馴染3人とその師匠	1671

第2話	黒の王 v s 黒の剣士	1921
第1話	新たな黒雲	1909
第11章	神々の黄昏	
第16話	訪問	1886
第15話	ジルバの実力・新たな魔眼	1864
1849		
第14話	レイカー&ブラッド	1769
1周年記念	2人の恋物語	1755
第13話	新撰組	1734
第12話	鑑賞。噂	1715
第11話	記憶喪失の青年	
1696		

第3話	協力	1936
第4話	共闘・黒雪はシリカタイプ？	1952
第5話	異界へのゲート	1972
第6話	まるで1つの戦争？	1990
第7話	愛人？	2008
第8話	ガイコツさんと野武士面と最愛の人とツツコミ役？	2024
第9話	絶剣	2040
第10話	戦闘という名のリハビリ	2059
第11話	白の王	2073
第12話	黄の王とドSモード白雪姫	

2206	第22話	イリヤVSプレミア	2198
	第21話	魔法少女	2192
	第20話	災禍の鎧	2183
	第19話	手がかりなし	2171
	第18話	改めて自己紹介	2160
	第17話	天然お色気な子	
2147	第16話	3人のコンピネーション	2137
	第15話	あきらを探せ	2129
	第14話	親友との再会	2108
	第13話	鎧騎士	2088

	第31話	塔の番人	2354
2343	第30話	最後の島ニールハイム	2327
	第29話	休息	2313
	第28話	VS白の王	2299
	第27話	黄金の騎士	
2263	2周年記念	倉崎荘の管理人さん	2249
	第26話	VS緑の王	2237
	第25話	VS青の王	2229
	第24話	呪いの力	
2218	第23話	その少女は剣を造る	

第32話	バベルの塔	
第33話	災禍再び	
第34話	精神世界	
第35話	絶望と希望	
第36話	神獣級エネミー	
番外編	入れ替わり	
第36話	変身と犠牲	

2536248424482415239523822366

人物紹介（ネタバレあり）

橘奨真

本作の主人公。（オリキャラ）

幼い頃から何かを作るのが得意な青年。

正義感が強くて友達思い。

ただ正義感が強すぎて行き過ぎた行動もしばしば。

学力は平均より少し上で運動神経はそれなりである。

欠点がないように見えるが実は極度の方向音痴であり、蝶類の虫が大嫌い（蛾とか模様の入ったタイプは失神寸前のレベル）

楓子とは幼馴染であり恋人である。

かなりのイケメンで、異性からは好かれており告白もよくされる。

そのせいかクラスメイトの男子からは嫉妬の目を向けられることが多い。

小学生の時に事故で右腕を失い、代わりに義手をつけている。

担当医であるユウキのことは尊敬してはいるが、彼女の変な行動で振り回された時は

立場が逆転することも。

楓子のことを誰よりも大事に思っている。

バーストリンカーとしての腕も高い。

旧ネガ・ネビュラスには用心棒バウンサーとして入った。

論とは楓子の弟子と聞いて知り合いになり、彼女の稽古もすることがある。

白の王、ホワイトコスモスとは一緒に対戦を観戦したりする仲でもあり、彼女の相談にも乗ったりしている。

趣味は何かを作ることとトレーニング。

容姿イメージ

『ブラック・ブレット』の『里見蓮太郎』

デュエルアバター『ブラウンクリエイト』

アビリティ：作成クリエイトイング合体デュアルクロス

必殺技

l : u n l i m i t e d b l a d e w o r k s
アレンミテッドブレイドワークス

無限の剣を作り出す結界を作り出し、自由自在に剣を操る。
結界の中の剣を自分の手に吸い寄せすることもできる。

2：クレイジーバレット

銃から跳ね返る弾丸を放ち、相手に少しずつダメージを与える。

3：ストームソード

両手に剣を持ち、高速回転しながら全方向にカマイタチを発生させる。

心意技

投影

形や特性をイメージして武器を作り出し、実体化させる。

ジ・イクリプス

目に見えない速度で27連撃の攻撃を放つ。限界を越えれば以上の連撃を放つこともできる。

スターバーストストリーム

高速で両手の剣を操り、16連撃を放つ。

千の武器の雨
サウザンドレイン

周りにあるオブジェクトを剣に変えて相手に集中攻撃をする。

鋼鉄の壁
アイアンウォール

周りの鉄を集めて鋼鉄の壁を作り出す。

壁はかなり硬く、そう簡単には壊れない。

強化外装

バスターソード×2

シヨックリボルバー×2

ブースターレッグ

ハイジャンプレッグ

デュアルクロス後

ガンブレード×2

ジエツトレッグ

特殊モード

オルタナティブモード

・倉崎楓子

本作のメインヒロイン

奨真の幼馴染みであり恋人。

凄く美人でスタイル抜群。

学力では奨真より上で運動神経は人並みにある。

本人曰く胸が重いせいで思ったように動けないこともあるらしい

1人で街中を歩くと必ず一回はナンパされる。

普段はものすごく優しいが怒るとものすごく怖い。

奨真が言うには『優しい人ほど怒ると怖い』とのこと。

奨真と一緒に行動することは多く、よく彼の方向音痴に振り回されては説教の繰り返し

し。

奨真のことが好きすぎるせいかな大胆な行動に出ることが多く、友達の前でも平気でもんでもないことを言うこともある。

ネガ・ネビユラスでは4人の幹部、四^{エレメンツ}元素の風を司る。

黒雪姫は親友であり、彼女のことをサツちゃんと呼んでいる。

謡を溺愛しておるが、よく自分の胸で窒息しそうにしている。

綸は子でもあり彼女の師匠でもある。

綸からは『本当は怖いレイカー先生』と思われる。

デュエルアバター『スカイレイカー』

アビリティ：浸透打法

必殺技

1：ファイアーシヨック

相手に近づき、素早いアッパーを繰り出す。

2：ファイアーコンビネーション

自慢の速さと足技を活かし、相手に蹴りのコンボを食らわせ、トドメに飛び蹴りを食らわせる。

心意技

1：ウインドヴェール

自分の周囲に風の発生させ、自分の身を守る。

2：スワールスウェイ

手から緑色の小型竜巻を発生させ攻防両用に使うことができる。

強化外装

ゲイルスラストー

黒雪姫

梅郷中生徒会副会長。原作のヒロイン。

その美貌から『黒雪姫』^{スノーブラッック}の二つ名で呼ばれており、生徒たちの憧れの的になっている。楓子とは昔からの中で親友。

幼い頃に姉である白雪姫にブレインバーストをコピーしてもらう。

それから黒のレギオン『ネガ・ネビュラス』のレギオンマスターになる。

無制限フィールドを歩いていたら、一人でエネミーを相手にしている奨真を見かけて声をかける。

楓子と奨真が知り合いと知って、2人の仲を取り戻すのを手助けしようとする。

当時は奨真をレギオンに誘おうとしたが、用心棒として入ると言われ、正式加入をさせることができなかった。

奨真と楓子の仲が元どおりになって数日後、帝城を攻略すると言うが、見事に失敗に終わる。

自分のせいでみんなを危険な目に合わせてしまい、自分からレギオンを解散させた。

三年後、ハルユキをブレインバーストに誘い、親となる。

ハルユキがバーストリンカーになって少し経った後、暴走した車に轢かれ、重傷を負う。

意識を取り戻した後、もう一度レギオンを復活させた。

白雪姫とは長年喧嘩をしていたが、クロムデイザスターとの戦いの後、奨真のおかげで仲直りする。

現実世界では、奨真や楓子、白夜やあきらからは『サッチ』謡には『サッチん』それ以外には『先輩』と呼ばれている。

ハルユキのことは異性として好きである。

デュエルアバター『ブラックロータス』

アビリティ：終決之剣

必殺技

1：デスバイピアーシング

高速突進と共に、剣を突き立てる

2：デスバイバレッジング

脚部の剣を用い、秒間100発の蹴りを繰り返す。

心意技

1：ヴオーパルストライク

右腕の剣から突きと同時に光条を放つ

2：スターバーストストリーム

16の鋭い連撃とともに同じ数の星を流星の如く放つ強烈な技

3：ジ・イクリップス

自身を高速回転させ、周囲を巻き込む27連撃を繰り返す

有田春雪

杉並区にある私立梅郷中学に通う。2033年4月23日生まれ。タクムとチユリとは幼馴染であり親友。小柄かつ肥満な体型と内向的な性格により小学校の頃から、パシられるなどのいじめを受けており、耐え切れなくなると男子トイレの個室に逃げ込み学校ローカルネットに接続し、設置されていたスカツシユゲームをやりこんでストレスを発散していた。ある日、いつものように荒谷にパシられ、頼まれたものを渡した後、トイレに向かったときに派遣で来ていた奨真と偶然出会う。そして次の日、黒雪姫に出会い、ブレインバーストに招待される。黒雪姫にグローバルネットに繋ぐなど言われたのに繋いでしまい、早速対戦を挑まれ、ボロ負けしてしまう。その日、黒雪姫と昼食を食べている時に荒谷が来て、黒雪姫のおかげで見事学校を退学させることができた。その数日後、黒雪姫と下校中に荒谷が乗った車が突っ込んできて、黒雪姫が重傷を負ってしまふ。意識不明の黒雪姫に対戦を申し込ませない為に、ずっとそばにいた。その時、親友のタクムが黒雪姫に対戦を申し込んでいた犯人と知り、戦うことになる。無事仲直りすることが出来て、黒のレギオン『ネガ・ネビュラス』に加入する。

デュエルアバター『シルバークロウ』

アビリティ：飛行

必殺技

1：ヘッドバット

頭頂部にエネルギーを集中し、標的にぶつける

2：急降下重攻撃ダイブアタック

空中より滑空し、キックを行う

3：受け返しガードリハーサル

防御の構えを行い、受けて攻撃に対して強烈なカウンターを放つ

4：空中連続攻撃エアリアルコンボ

激しい連続攻撃の後、4連続のダイブ・アタックを見舞う大技

心意技

1：光線剣連撃

レーザーソード

掌より伸びた光線剣を用いる4連撃

2：光線槍

レーザーランス

掌にエネルギーを集中し、長射程の光線を放出する

3：光線投槍

レーザーキャベリン

光線槍の射程をさらに長くし、投げるように放つ。

4：トリスアギオン

太陽光を翼に受け、凝集させ、超強力な光線を三方向に放つ

5：メタトロンウイング

四聖メタトロンの力を借り、光速翼より速い時速1225 kmという音速のスピードを出すことができる

6：光速翼

ライトスピード

翼に光を集め、時速1000 kmのスピードを出すことができるようになる。

雪ノ下白夜

雪ノ下孤児院に住む最年長者。奨真の親友。奨真の親友だから楓子のことももちろん知っている。小学校のころ、重傷を負った奨真の見舞いに行き、その時に奨真をブレインバーストに招待する。中1のとき、奨真からレギオンのみんなで集まると言われ、自分も行くことになった。その時、あきららを見た瞬間一目惚れして即告白する。同時にあきららも告白してきて、付き合うことになる。レギオン解散してからでもあきららとは何度か会っており、デートにも行ったりしている。ブレインバーストでは何度か奨真と

タツグを組んだりもしている。1つ年下にマシユ・キリエライトという後輩がいる。

デュエルアバター『エメラルドルーク』

アビリティ：吸収

必殺技

1：ドレインクラッシュ

盾で攻撃を防ぎ、その衝撃を吸収して、相手に跳ね返す。吸収した衝撃は放たない限り、盾に残る

2：グランドデス

盾を思い切り地面に叩きつけ、地割れを起こす。

3：ホロウシールド

強化外装である盾の偽物を作り出し、攻撃を激減させる。

心意技

1：ジュエルコーティング
宝石を手足につけて、自身を強化させる。他の人にも装着可能。

2：ライフドレイン

相手を掴み、HPを奪い、自身を回復させる。

3：
???

強化外装

ダイヤモンドシールド

氷見あきら

黒雪姫と同年。ネガ・ネビユラスの四元素^{エレメンツ}の『水』を司る。メガネをかけた短髪の中性的な容姿の人物で、語尾に「なの」と付けるなど特徴的なしやべり方をする。レギオン内では主に情報収集を担当する。白夜とは初めて会ったときに一目惚れして告白し、白夜も同時に告白して付き合うことになる。白夜のことはびやーくんと呼んでいる。白夜に自分の恥ずかしい場面を見られたり、白夜がラツキースケベに会うと、必ず白夜に目潰しをする。雪ノ下孤児院にはよく泊まりに行ったり、手伝いをしにいつている。旧ネガ・ネビユラス解散後、『ザ・ワン』と呼ばれる用心棒^{バウンサー}をしていた。ブラッド・レパードこと掛居美早は従姉であり「子」。リアルでは「アキ」「ミヤア」と呼び合う間柄。

デュエルアバターは『アクアカレント』

アビリティ：流体音感

必殺技

1：氷結時代
アイス・エイジ

手に氷を発生させ、地面に手をつけて辺りを氷で覆う。

2：流水突・蒸気爆
ハイドロ・イラプション

拳の先で水蒸気爆発を発生させ、標的にダメージを与える。

3：アクアホール

相手の足場を水に変え、溺れさせる。

4：ヴェイパーストリーム

自身を水蒸気で透明化させ、相手に接近し、重攻撃をする。

心意技

1：代替爆弾
コピーボム

ダツシユから連撃を行い、その場に自身の形状を模した爆弾を残して離脱する

2：相転移・鋭
フェイストランス・キーン

氷の軽装甲とカタールで武装

3：相転移・硬
フェイストランス・アダマント

氷の重装甲を纏う防御用の武装

4：激渦流
メイルストロム

らせん状に束ねた高圧の水を前方に放出する、攻撃的心意の大技

5：水圧縛鎖
ハイドロ・リストレイント

高圧の水でダメージを与えるとともに、動きを封じる

6：スキューアフロスト

地面に氷の波を作り出し、相手の足を凍らせる。

7：水流護アクア・スキン

水の加護により、水属性ダメージへの耐性が増大される

四埜宮 謡

情報を更新中……

黛 拓武

情報を更新中……

倉嶋 千百合

情報を更新中……

立花 伶弥

情報を更新中……

白雪姫

情報を更新中……

日下部 綸

情報を更新中……

上月 由仁子

情報を更新中……

掛居 美早

情報を更新中……

ジャンヌ・ダルク

情報を更新中……

マッシュ・キリエライト

情報を更新中……

アルトリア・ペンドラゴン

情報を更新中……

月折リサ

情報を更新中……

ジャンヌ・ダルク・オルタ

情報を更新中……

両儀式

情報を更新中……

烏野蓮

情報を更新中……

浅上藤乃

情報を更新中……

序章 奨真と楓子

第1話 出会い

俺にはある特技がある。それは物作りだ。

材料さえあれば色々と作れる。電化製品は作れないが子供が楽しめるようなものを作ることができる。

そんなことができるからなのか俺はクラスでは人気者だ。自分でこんなこと言いたくはないけど。

でもそれらができるから人気があるだけでなかったら誰も俺に近づいてこない。だから俺に友達と呼べる人はいない。

今日は低学年は午前だけの授業だったから俺は家に帰った後昼ご飯を食べてすぐにいつもの公園にいった。いつもの場所で何か作っていると誰かぎ話しかけてきた。

「何を作ってるのですか？」

顔を上げると俺の学年のマドンナと呼ばれてるぐらい人気者の倉崎楓子さんだった。実際に会うのは初めてかな

「適当に何か作ってる。ん？」

倉崎さんを見ると車椅子に座っていた。よく見ると足がなかった。

「倉崎さん、その足……」

「ああ、気にしないでください」

倉崎さんは足がないからずっと車椅子なのかな。

「倉崎さん。ちょっと足を触ってもいいかな？」

「え？」

「ああ変な意味じゃないよ！」

「いいですけど……」

俺は倉崎さんの許可をもらい足に触れた。足がないってこんなことなんだ。

「そうだ！」

俺は今ある材料である物を作ることにした。

「あの、今度は何を作ってるんですか？」

「ちよつと待ってね。すぐにわかるよ」

数時間がたってようやく完成した。

「倉崎さん。これ」

「え？あの、これは？」

「義足だよ」

「義足ってそんな物も作れるんですか!？」

「ちゃんとしたものは作れないよ。だから大体で作ってみただ。とりあえず付けてみてよ」

「う、うん」

倉崎さんは俺の作った義足を取り、足につけようとしたが上手くつけられなかった。俺も一緒につけようとしたが俺も倉崎さんもまだ子供だ。つけることができなかった。

「と、とりあえず病院に行こう」

「う、うん。あの、これは放置していいのですか？」

「うんいいよ。こんなもの誰もとらないよ。俺が車椅子を押してあげるよ」

「ありがとうございます」

歩き始めて数分がたつてようやく病院についた。

中に入ると入院してる人がたくさんいた。

「君たちどうしたの？」

「え、えつとこの義足をこの子につけてもらいにきました」

「え!?!義足を作ったの!?!」

「で、でもちゃんと作れてるわけではないですよ！」

「と、とりあえずこっちにきて」

俺と倉崎さんは看護師さんについていった。病室に入って倉崎さんは義足をつけてもらった。

「どうかな？歩ける？」

「試して見るね」

そういうと倉崎さんはゆっくり立ち上がった。歩けるか心配していると倉崎さんはゆっくりと足を前にも出していった。

「歩ける…。歩ける！」

「凄い！君凄いよ！子供なのに義足作れるなんて!!」

「……やった……。やったー!!!」

俺は嬉しかった。とにかく嬉しかった。自分が作ったものが辛い思いをしていた人を救えたことが。

「でもまだ完全に完成してないから時々でいいから俺のところに来てね」

「本当にありがとう!!あの！お名前を聞いてもいいですか？」

「橘奨真。二年だよ」

「私は倉崎楓子。私も二年だよ」

「知ってるよ。だって君は人気者じゃないか」

「橘さんだつて人気者だつて聞いたことがありますよ」

「奨真でいいよ。俺は作る才能があるから人気なだけだよ」

外を見るともう日が落ちかけていた。

「もう帰ろう。送っていくよ」

「ありがとうございます！」

倉崎さんを車椅子に座らせて病院を出た。

「あの出来たら連絡先も交換しませんか？」

「え？」

「ここであつたのも何かの縁ですし、奨真君、義足の調子を見てくれるっていつてたから

お互い連絡先を知ってたほうがいいと思って」

「いいよ。じゃあ連絡先を送るね」

俺はニューロリンカーを操作し連絡先を倉崎さんのニューロリンカーに送った。送った後、倉崎さんから連絡先がきた。俺はそれをニューロリンカーの連絡帳に保存した。

「なあ、俺たちってもう友達なのか？」

「もうとっくに友達ですよ。これからよろしくお願いしますね、奨真君」

「ああ。ここが君の家なのか？」

「はい！ありがとうございます！それではまた明日！」

「ま、また明日」

友達か……。俺にも出来たんだな。俺はいつもよりゆっくりと家に帰っていった。

第2話 一緒に登校。一緒に下校

次の日、俺はいつも通りの時間に起きて朝ごはんを食べて学校に行こうとした。玄関のドアを開けるとたまたま倉崎さんと出会った。

「おはよう倉崎さん」

「おはよう奨真君。楓子でいいですよ」

「わかったよ楓子ちゃん。今日は車椅子なんだね」

「昨日帰ったらお父さんとお母さんにその足どうしたの！ って言われて。今日も歩く練習も兼ねて歩いていこうと思ったけど止められちゃった」

「いきなりはやっぱりきついと思うよ」

「そうですか。それじゃあ一緒に学校に向かいましょう！」

「うん。俺が押して行くよ」

俺は楓子ちゃんの手椅子を押しながら一緒に学校へ向かった。途中で視線を感じた。気がしないでおこう。学校について楓子ちゃんのクラスの三組の前まで送って行った。

「ここまで送ってくれてありがとう」

「気にしないで。じゃあね」

「また放課後」

楓子ちゃんと別れ、俺は自分に教室に入った。席に座った途端教室にいた人が俺のところに来た。

「奨真君！これ作ってよ！」

「俺が先だぞ！」

「私だよ！」

「俺だ！」

何か揉めてるみたいだが俺は無言で作業に取り掛かった。

1時間目は国語。今はニューロリンカーがあるから教科書の忘れ物の心配もいらない。ニューロリンカーに表示されている教科書を読んだ。

2時間目は算数。算数は得意だから簡単だった。

3 時間目は工作。俺の特技を活かせるから好きな授業だ。

4 時間目は音楽。歌うといろいろとスツキリするから好きだ。

5、6 時間目は三組と四組の合同体育。けど俺は足の調子が悪いと嘘をついて見学した。

グラウンドの隅に行くと楓子ちゃんがいた。車椅子だから体育ができないからだ。

「奨真君も見学ですか？」

「うん、足の調子が悪くてね」

「嘘ですよね」

「なんでわかったの？」

「なんとなくです。なんで嘘をついたの？」

「やる気が出ないんだ。あとつまらない」

「つまらない？」

「俺に頼みごとをするのに俺の頼みは聞いてくれない。連携が取れないんだ。だから個人プレーのほうが俺は好きなんだ」

「なら今度私と連携プレーの練習をしましょう！」

「でも楓子ちゃん運動できないんじゃない」

「運動以外にもありますよ。それはゲームです！ゲームのマルチプレイなら大丈夫ですよ」

「ゲームか……。いいね！」

「それじゃあ今日の放課後私の家で遊びましょう!」

「うん!」

俺と楓子ちゃんは一緒にみんなの体育の様子を見ながら見学した。

放課後、カバンを背負って廊下に出ると楓子ちゃんが迎えに来ていた。

「奨真君行きましょう!」

「うん!」

俺は楓子ちゃんの車椅子を押して学校の門を出た。

『奨真君って楓子ちゃんと仲いいのかな?』

『どうせなんでも作れるから物で釣ってんじゃねえか?』

『あーなんかありそう』

なんでそんなことを平気で言えるのかな。確かに義足は作ったけどまだ完成じゃないし、そんなことで楓子ちゃんと友達になんかならない！

「奨真君。気にしないで。私は奨真君の事をそんな風に思っていないよ。だからそんな暗い顔しないで」

「う、うん」

「それじゃあ行きましょう！」

楓子ちゃんは腕を上にあげた。俺も反射的に腕を上にあげた。

「お、おー」

俺と楓子ちゃんは、楓子ちゃんの家に向かって歩いて行った。

第3話 一緒にゲーム

「ただいま」

「お帰りなさい。あら？その子は？」

「紹介するわ。友達のカズマ君。マサ君、私のお母さんよ」

「こ、こんにちは。カズマ君です。楓子ちゃんと仲良くさせてもらってます」

「楓子が友達を連れてくるのは初めてね。どうぞ上がって」

「お、邪魔します」

俺は楓子ちゃんのお母さんに招かれて中へ入った。楓子ちゃんは車椅子から家の中

で使う車椅子に乗り換えようとしていた。

「手伝うよ」

「ありがとう」

「優しいね」

「いえ、俺は当たり前前的事をしてるだけですよ」

俺は楓子ちゃんを別の車椅子に乗り換えさせた。ふと、下駄箱の隣を見ると、昨日俺が作った義足があつた。

「これ」

「これって奨真君が作ってくれたんだね。楓子のために作ってくれてありがとうね」

「お母さん。私早くこの義足を使いこなせるようになりたい！」

「今度練習しましょ」

「うん！あ、奨真君も手伝ってくれる？」

「もちろん！」

「さあ！私の部屋に案内するわ！」

「ゆっくりして行ってね」

「はい！」

俺は楓子ちゃんに部屋に案内してもらった。部屋の前には『楓子』と書いていた。早速部屋の中に入るとぬいぐるみなどがあつた。テレビの前にはゲーム機があつた。早

「このゲームよ！」

「RPGか」

「協力プレイでやりましょ！」

「うん！」

ゲーム機をつけて、俺と楓子ちゃんはコントローラーを持った。メインメニューが出てきて協力プレイモードを始めた。

「楓子ちゃんは魔導師なんだね」

「奨真君はバランスのいい剣士だね」

協力プレイはボスバトルモードを始めたから早速ボスが出てきた。

「グリフォンはそんなに強くないからすぐに倒せるよ。一緒に頑張ろ！」

「うん！」

俺は剣を、楓子ちゃんは杖を装備した。戦闘が始まりグリフォンは攻撃してきた。俺と楓子ちゃんは左右に避け、攻撃を仕掛けた。

「楓子ちゃん！補助魔法をお願い！」

「わかったわ！」

楓子ちゃんは呪文を唱え、俺のステータスを見ると攻撃力と防御力が上がっていた。俺はグリフォンの後ろへ回り込み、楓子ちゃんは風魔法で攻撃をした。10回目の攻撃の時、クリティカルヒットになり体力が大幅に減った。

「このままいけばいけるわ！奨真君！風魔法を唱えるから風の上に乗って！」

「うん！わかったよ！」

俺は楓子ちゃんの風魔法の上に乗る、グリフオンの背中に乗った。俺は背中に剣を思い切り突き刺した。グリフオンのHPがゼロになり、クリアの画面が出てきた。

「やったあ!!」

俺と楓子ちゃんはハイタッチをした。

今思えばこんな風に遊んだのは初めてだ。友達と遊ぶってこんなに楽しいんだな。

「どお？連携ができると楽しいでしょ！」

「そうだね。ありがとう」

「ど、どういたしまして」

お礼を言うと楓子ちゃんは顔を赤くしていた。『どうしたの?』と聞いたけど『な、なんでもない!』と言ってゲーム機の電源を消した。

外を見るともう暗くなっていた。ニューロリンカーの時計を見るともう6時になっていた。

「こんな時間だから今日は帰るね」

「うん。ねえ、これから一緒に学校に行かない?」

「いいけど急にどうしたの?」

「奨真君と一緒に登下校するのが楽しいの。他の人はどこか壁があるように接してくるけど、奨真君は気軽に接してくれるから一緒にいると楽しいの。奨真君は楽しい?」

「俺も楓子ちゃんみたいなのは初めてだから一緒にいて楽しいよ」

「ふふ。私達ってなんだか似てるね」

「そうだね。明日土曜日だから義足を使いこなす練習しない？義足もまだ完成してないから完璧に作りたいし」

「うん！明日はよろしくね」

「うん」

俺と楓子ちゃんは部屋を出て玄関まで行った。するとリビングから楓子ちゃんのお母さんが出てきた。

「今日は楓子と遊んでくれてありがとうだね。またいつでもきてね」

「はい！楓子ちゃん、またね。お邪魔しました」

俺は楓子ちゃんの家を出て家に帰った。

「楓子。友達ができてよかったね」

「うん！」

橘奨真君。歩くのを諦めていた私に希望をくれた男の子。今日一緒に遊んで私は彼の事をもっと知りたくなった。

「あんなに優しい子はそう簡単に出会えないから仲良くしなさいよ」

「もちろんだよ！明日も一緒に遊ぶ約束をしたんだ！あと私が義足を使いこなす練習に付き合ってくれてるって言ってくれたんだ！」

「そう。よかったね」

「うん！」

明日が楽しみだなあ。私とお母さんはリビングに入って今日奨真君と何をしたのかを話した。

第4話 歩く練習

カチヤカチヤカチヤ

俺はいつもの公園のジャンクパーツを置いている場所でパーツの整理をしていた。いつも散らかっていたら楓子ちゃんに笑われると思ったからだ。数分後、整理し終わると楓子ちゃんが義足をつけて車椅子でやってきた。

「こんにちは奨真君」

「こんにちは楓子ちゃん」

挨拶をして楓子ちゃんは俺の隣にきた。

「これは何ですか？」

「楓子ちゃんの義足の調整をするためのパーツだよ。元々ここにあったやつだけど」

「わざわざごめんなさい」

「俺がやりたくてやってるから気にしないで。早速練習しようか」

「うん」

楓子ちゃんは立ち上がったが、まだ慣れていないためぎこちなかった。俺は楓子ちゃんを支えながらゆっくり前へ進んだ。

「まずは右足から行こっか」

「う、うん。あの、奨真君。絶対に離さないでね」

「わかった。楓子ちゃんがちよつとずつ歩けるようになるまで離さないから。ほら、ゆっくりね」

「……う……う……う……う……う……う……!? ああ!?」

「危ない！」

倒れそうになった楓子ちゃんを正面から支えた。元々支えてたからすぐに対応できた。

「大丈夫？」

「うん。ありがとう」

「まだ義足の動きが悪いな。ちよつと座ろつか」

「う、うん」

ベンチに座って俺は楓子ちゃんの義足を調整し始めた。義足の関節の部分はいじつ

たりしてみた。

「どお？曲げれる？」

「う……うう……ダメ。曲がらない」

「俺が手でやれば曲がるけど自分の意思では曲げられないってことか。……意思？あ！
そうだ！」

俺は閃き、ジャンクパーツの山からあるパーツを探した。必死に探していると楓子
ちゃんが話しかけてきた。

「何か思いついたの？」

「うん！あつた！コレコレ」

「それは？」

「制御チップだよ。これを義足に組み込んで楓子ちゃんのニューロリンカーで制御できるようにしようかなって」

「そんなことができるの!?!」

「まだわからないから試しにやってみようかなってね。ちよつと義足をいじるよ」

俺は楓子ちゃんの義足にチップを組み込み始めた。

「あとは楓子ちゃんのニューロリンカーと接続すれば大丈夫だよ」

「うん」

楓子ちゃんはニューロリンカーを操作して義足の制御チップのIDを登録して接続した。

「どう？曲げれる？」

そう問いかけると楓子ちゃんはゆっくりと足を曲げ始めた。

「曲げれる……曲げれる!!ほら、奨真君！曲げれたよ!!」

「よかった！成功したんだ！よし、じゃあ早速歩いてみようか。さっきよりは上手く歩けると思うよ」

「うん！」

さっきと同じように俺は楓子ちゃんを支えて楓子ちゃんは歩き始めた。まだぎこちないが足が曲げれるようになったため、だいぶ歩けるようになった。夕方まで調整と練習を繰り返してもう支えなしでも歩けるんじゃないかって思えるくらい歩けるようになった。

「ねえ奨真君。私頑張って一人で歩いてみるからあそこで待っていてくれない」

「うん、わかったよ」

俺は楓子ちゃんから約30メートルぐらい離れたところに立った。

「……………うう……………うう……………うう……………」

（大丈夫かな？心配だ）

俺はそんな風に不安に思っていたがそれと同時に頑張れと応援していた。

「あと……………ちよつと……………」

楓子ちゃんは最後の一步を踏み出して俺のところへ辿り着いた。その瞬間、楓子ちゃん俺に向かって飛びついてきた。

「やったよ！私一人でここまで歩けたよ！」

「凄かったよ。よく頑張ったね」

「これも奨真君のおかげだよ！ありがとう!!」

そう微笑んだ楓子ちゃんは可愛かった。そんな楓子ちゃんに俺は見惚れてしまった。

「ん？どうかしたの？」

「その…楓子ちゃんの笑った顔が可愛くて」

「え!?!」

「あ……ご、ごめん急に変なこと言って」

「あ、ありがとう」

「と、とりあえず今日はもう帰ろう。続きは明日にしてさ」

「う、うん」

俺は楓子ちゃんを車椅子に乗せて家まで送った。

「送ってくれてありがとう。家でも歩く練習をするわ。あの感覚を忘れないうちに慣れたいから」

「頑張ってるね、でも無理はダメだよ。それじゃあまた明日」

「うん！また明日」

私は奨真君が帰っていくのを見送って家に入った。家の車椅子に自分で乗り換えた。そのままリビングにいくと、お母さんがご飯を作っていた。

「おかえり楓子。奨真君に手伝ってもらったの？」

「ううん。自分で乗り換えたんだ。いつまでも奨真君に頼ってちゃダメだし、せつかく少し歩けるようになったんだから」

「本当に！凄いいじゃない！これも奨真君のおかげね!!」

「本当に奨真君のおかげよ。奨真君がいたから私は歩くことに希望を持てた」

「でも歩けるようになったのは、楓子の努力もあるんじゃない」

「そうかな？」

「そうよ。私は直接見てないけど努力しなかったらそこまで歩けるようにならないわ」

「ありがとうお母さん」

「さて、お父さんが帰ってきたら驚かせましょ！」

「うん！」

第5話 突然の別れ

楓子ちゃんが初めて歩けるようになって2年が経った。俺と楓子ちゃんはもう四年だ。月日が経つのは本当に早い。楓子ちゃんは2年前と比べてもう完璧に歩けるようになっていた。そして今は夏休みだ。

夏休みの間、俺の両親は仕事で海外に行くことになったからその見送りで楓子ちゃんと楓子ちゃんの両親と一緒に空港に来ていた。

「褒真。一人でも大丈夫？」

「大丈夫だよ。家事もある程度できるようになったからさ」

「それなら安心。定期的にお金を振り込むね」

「わかったよ」

「楓子ちゃん。奨真のことよろしくね」

「はい！」

「銀次さん。リカさん。奨真のことをよろしくお願いします」

「任されました」

「お二人は安心してください」

「ありがとうございます」

母さんと父さんは頭を下げてお礼を言った。そういえば母さんが楓子ちゃんの両親が面倒を見てくれるって言ってたような。

「それじゃあ言ってくるね。奨真。銀次さんとリカさんの言うことを聞くのよ」

父さんと母さんは荷物を持って飛行機に向かつていった。しばらく経つと、飛行機は離陸した。何事もなかったらしいけど。

「奨真君、家まで送って行くよ」

「ありがとうございます」

「奨真君、行く」

飛行機が見えなくなるまで見送って、俺は楓子ちゃんに引つ張られながら銀次さんの車に行つた。車に乗って十分後、家に着いた。

「送ってくれてありがとうございます」

「それじゃあまたね。不審者には気をつけるんだよ」

「はい」

「またね、奨真君」

「うん、またね」

倉崎一家が帰って、俺はテレビの電源をつけた。

夜になってレトルトのカレーを作ってご飯を食べた。やっぱりカレーは母さんのカレーが一番だな。そんなことを考えながら俺はカレーを食べた。食べ終わり、食器を洗い、風呂に入って寝巻きに着替えた。ふとテレビを見るとニュースがやっていた。

『ニュースをお知らせします。今日午後8時23分、羽田空港を出発した飛行機が太平洋付近で墜落した事故が起きました。乗客は全員死亡との報告があります。原因は未だ不明です。引き続き調査を行なっています』

「……………え?……………」

この飛行機って父さんと母さんが乗っていた飛行機だよな。

嘘だ。嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ

「嘘だああああああああああああああああああああ

!!!!!!」

ただひたすら叫び続けた。こんな現実を受け入れたくなかった。信じたくなかった。

「ああああああああああああああああああああ

!!!!!!」

俺は喉が潰れるまで叫び続けた。

「お父さん、お母さん。これって奨真君のお父さんとお母さんが乗っていた飛行機だよ
ね」

「……ええ」

「そう……だな」

そんな……こんなニュース、奨真君が見たら。

「奨真君が心配だよ!!」

「そうだな。ちよつと様子を見に行こう」

「私も行く!」

「気をつけてね」

「ああ、行つてくる」

私はお父さんの車に乗つて、奨真君の家に向かった。家の前について、私は玄関の前に立った。外まで聞こえるくらい大きな叫び声が聞こえてきた。この声は奨真君。ニュースを見たんだ。

『あああああああああああああああああああ』

もう聞いてるだけでこっちまで辛くなつてしまいそうな叫び声だった。

「楓子。今日は帰ろう。その方が彼のためだ。一度落ち着かせてあげよう」

「うん……」

奨真君。決して自分自身を見失わないでね。明日来るから待つてね。私は心の中でそう言つてお父さんの車に帰った。家に入るとお母さんが心配した顔で玄関に立っていた。

「奨真君はどうだった」

「……………しばらくそつとしておいたほうがいい」

お父さんは首を横に振ってそう言った。

「そう……………。明日一緒に行って見ましょう」

「うん……………」

「……………ああ」

私はお風呂に入って着替えてベッドの中に入って深い眠りについた

第6話 橘奨真は倉崎家の養子になる

朝起きたら俺はリビングで寝ていた。

「何で俺ここで寝てるんだ？」

とりあえず顔を洗いに洗面所に行き、鏡を見ると目が赤く腫れていた。ああそつか。俺は泣き疲れて眠ってしまったんだ。てことは父さんと母さんが死んだのは夢じゃないんだ。

「……………」飯食べよ」

冷蔵庫から卵を取り出して、フライパンにのせた。出来上がった目玉焼きをさらに乗せ、さつき焼いた食パンと一緒に食べた。

食べ終わると皿を洗って自分の部屋に閉じこもった。ただ静かなところで一人になりたかった。誰も部屋に入れたくなかった。そんなことを思っていると玄関のインターホンが鳴った。出たくなかった。出たくないが出らないわけにはいかない。俺は部屋を出て玄関のドアを開けた。そこには楓子ちゃんと楓子ちゃんの両親がいた。

「……どうしたんですか」

「君のことが心配でね」

「奨真君……」

「俺は大丈夫ですよ。ほら、楓子ちゃんもそんな顔しないで」

「え？」

俺の微笑みながら楓子ちゃんに言った。微笑みながら言っても作り笑いだ。楓子ちゃんに心配をかけさせたくないから。

「……………そ……いだよ」

「え？」

「嘘言わないでよ!!!」

「本当は辛いんでしょ!!なのに何でそんなに笑ってられるの!!!両親がいなくなつて奨真君は何も思つてないの!!!」

「……………辛いに決まつてるよ。辛いに決まつてるだろ!!!悲しいに決まつてるだろ!!!でもこうでもしなきゃ自分自身が壊れてしまうんだよ!!だから……だから!!!っ!?!」

「続きを言おうとしたけど言えなかった。いきなり楓子ちゃんが抱きついてきたからだ。」

「やっぱり辛かったんだね。でもあなたは一人じゃない。私がいる。辛かったらいつでも」

も私がそばにいるから。だからもうそんな悲しい笑顔をしないで……」

楓子ちゃんは泣いていた。自分が泣いてしまうくらい俺のことを心配してくれていたんだ。なのに何で俺はあんなことを言ったんだ。そんな自分がバカみたいに思えてきた。

「…………ごめん…………ごめん…………」

いつの間にか俺も泣いていた。楓子ちゃんの後ろを見ると楓子ちゃんの父さんと母さんも泣いていた。数十分後、俺は落ち着きを取り戻した。

「落ち着いたかい」

「はい。お騒がせしてすみません」

「いいのよ。そうそう、もし奨真君がよかつたらなんだけど」

「?何ですか?」

「家の養子にならないか」

「え?」

「お父さん、どういうこと?」

「奨真君さえよかったら一緒に暮らさないかってことだよ」

「あの……いいんですか。俺が……その……一緒にいても」

「いいからこうやって言ってるんじゃないか。それでどうする?」

「こんな嬉しいことを言われたのは初めてだ。俺の答えはもう決まってる。

「ご迷惑になると思いますが、これからよろしくお願いします」

「奨真君！これから一緒に暮らせるね！」

「これからは父さんって呼んでくれよな」

「私も母さんって呼んでね」

「はい！父さん、母さん！」

あ、養子になったのはいいけど苗字とか今俺が住んでる家はどうなるんだ。

「早速市役所に行くか。奨真君。この家のことは心配ないよ。売ったりしないからさ。いつかまた奨真君が戻ってこれるように残しておくから」

「ありがとうございます」

「じゃあ早速奨真君の荷物をまとめましょう！」

「奨真君！私も手伝うよ！」

「ありがとうございます」

なんか今日は感謝してばかりだな。この恩はいつか必ず返さなきゃな。父さん以外で中に入って荷物をまとめた。三人でやったから直ぐに終わった。荷物を車の後ろに乗せて、俺は後部座席に乗った。隣には楓子ちゃんが座っている。

「奨真君」

「何？」

「これからもよろしくね」

「うん！」

俺は笑いながらそう言った。市役所に行き、俺は養子になった。でも俺の苗字は橘のままにしてもらった。家に帰って部屋に案内してもらって、荷物を片付けた。

「これからここで暮らすんだな」

父さん、母さん。俺、父さんと母さんが死んだのは悲しかったよ。でも楓子ちゃんの父さんと母さんが養子にしてくれたんだ。だから俺は前を向いて進み続けるよ。

第7話 楓子へのプレゼント

倉崎家の養子になって二週間がたった。倉崎家の暮らしにもだいたい慣れた。部屋でパソコンをいじっていると楓子が入ってきた。(一緒に暮らし始めてから楓子ちゃんのことを呼び捨てで呼ぶようにした)

「奨真君、もうお昼だよ」

「ああ、わかったよ」

パソコンをシャットダウンし、一階に降りた。降りると母さんが昼ご飯を作ってくれていた。

「ご飯できてるよ」

「ありがとう」

俺は母さんが作ってくれた昼ご飯を食べた。食べていると楓子が話しかけてきた。

「ねえ奨真君。午後から一緒に買い物に行かない？」

「いいけど、何か買うの？」

「ノートやその他色々」

「わかった。じゃあ一時になったら行こっか」

「うん！」

『よかったじゃない楓子。奨真君とデートできるじゃん』

『も、もう！お母さん！』

なんか二人でコソコソ喋ってるけど、内容が全然わからないな。まあいつか。食べ終わって、俺は部屋に戻って出かけるために着替えた。着替え終わって玄関で待っていると楓子が部屋から出てきた。

「お待たせー」

「じゃあ行こっか」

俺と楓子はショッピングモールに向かって歩いて行った。ショッピングモールについて、楓子は文房具屋に向かった。俺は適当にぶらぶらしているとあるものに目がいった。それはネックレスだ。勿論本物は買えないから安いレプリカの方を買った。ニューロリンカーで俺の両親の遺産を見ると、使いきれないぐらいのお金があった。

「これだけのお金使い切ることばできないんじゃないか」

そんなことを言いながら文房具屋の前まで戻ると、楓子が中から出てきた。

「お待たせ。あら？その袋は？」

「後で説明するよ。取り敢えず、ちよつときてくれないか」

「う、うん」

俺は楓子の手を取り、ショッピングモールの屋上の楓子も知らない所に向かった。

「わあ！凄いい景色！屋上にこんな所があったんだ」

「この間見つけたんだ。なあ楓子。これ」

俺はさつき買ったネックレスをあげた。

「これは？」

「ネットレスだよ。っていつても本物じゃないけどな」

「でもなんで急に？」

「その……楓子に似合うと思って……でもいつかちゃんとしたものをプレゼントするよ」

「ありがとう。大切にするね！」

「じゃあそろそろ帰ろうか」

「うん！」

俺と楓子はショッピングモールを出て、行きと同じ道で帰っていた。

信号で止まっていると誰かが楓子とぶつかった。そのせいで楓子が道路に飛び出してしまった。楓子はバランスを崩してそのまま道路の真ん中で倒れた。隣を見るとトラックが走ってきていた。

「楓子!!」

俺の体は直ぐに動いた。このままじゃ楓子がトラックに轢かれてしまう。だから俺は楓子の元へ走り、向こうの歩道に投げ飛ばした。その瞬間俺の意識は闇へと消えた。

「奨真君!!奨真君!!目を覚まして!!」

奨真君は私を庇ってトラックに轢かれてしまった。ぶつかったと同時に奨真君の右腕はトラックの下敷きになってしまっていた。トラックは直ぐに後ろに下がったけど、奨真君は意識を失って目を覚まさなかった。

「誰か!!誰か救急車を呼んで!!」

私がそういうと誰かが連絡して救急車がきた。私も一緒に救急車に乗って、病院へ向かった。

第8話 加速世界へ

奨真君が病院へ運ばれて直ぐに手術が始まった。私は手術室の前で待っていると、お母さんがきた。少し遅れてお父さんが仕事を早退してやってきた。

「楓子！」

「お母さん、お父さん！奨真君が……奨真君が!!」

「落ち着くんだ。今は手術が終わるのを待ってしよう」

私達は手術が終わるのをずっと待ち続けた。待っている時間がとても長く感じた。数時間後、先生が手術室から出てきた。

「先生！奨真君は大丈夫なんですか！」

「命に別状はないよ。でも腕の損傷が酷すぎたみたいだった。もう治すことは不可能だった」

「どういうことですか？」

「彼の右腕を切り落とすしかなかったんだよ」

「そんな……どうして……どうして!!どうして!!どうして!!どうして!!どうして!!
ならないの!!私があの時、直ぐに体を動かしていれば奨真君があんな目に会うことはな
かったんだ」

「楓子!落ち着きなさい!」

私が奨真君に迷惑をかけてるんだ。ならもう奨真君と関わらなければ奨真君が酷い
目に会うことはない。でも、最後に一回だけ奨真君に会いに行こう。

「先生。奨真君の部屋はどこですか？」

「403号室だよ」

「ありがとうございます」

私は部屋を聞いて奨真君の元へ向かった。お父さんとお母さんは先生に怪我の具合などを聞いていたからあとで来るみただった。部屋の前まできて扉を開けると、一番奥のベッドで奨真君は寝ていた。

「奨真君。ごめんね。私があの時ちゃんとしていたら奨真君がこんな目に会うことはなかったよね。だから私なりにけじめをつけるよ。私が貴方と関わらなければ貴方は不幸なことにはならない。だから幼馴染という関係を終わらせよう」

私は眠っている奨真にそう言って立ち上がった。私はさつき言ったことを書いたメッセージを奨真君のニューロリンカーに送って部屋から出て行った。廊下でお父さんとお母さんとすれ違ったが、そのまま帰って行った。

「楓子大丈夫かしら」

「あれは酷いな。奨真も右腕がなくなるくらいに重傷を負ったが、楓子自身も重傷だな。あのままじゃ楓子の心も壊れてしまう」

「私たちに何かできることはないのかな」

「何もないかもしれない。けど、楓子のことなら奨真がきつとなんとかしてくれるはずだ。奨真があんな楓子の見たら放っておくはずがないからな」

私は家に帰って手を洗って、最初に奨真君の部屋に入った。理由は今日貰ったネツクレスを返すために。ネツクレスを机の上に置いて、私は部屋を出て、自分の部屋に入った。ベッドの上でうずくまって大声で泣いてしまった。

「うわああああああん!!!」

「ん」

目を開けると知らない天井が見えた。

「(ハ)ハ(ハ)は。」

辺りを見渡すと、怪我をした人や看護婦さんがいた。そつか。ここは病院か。俺は確か楓子が轢かれそうになって助けたんだよな。そこから意識がなくなつて。

「目が覚めたんだな」

「白夜」

隣を見ると、俺の親友の雪ゆきのノ下した白夜びやくやがいた。

「聞いたぞ。楓子ちゃんを命懸けで守つたんだつたな。お前は本当に凄いと思うよ」

「楓子は無事なのか」

「ああ、無事だぞ。体の方はな」

そうか……よかった。……ん？体の方は？

「ちよつと待て。体の方はつてどういうことだ」

「昨日お前の病室に向かったら楓子ちゃんの両親にあつて昨日のことを聞いたんだ。お前が轢かれて腕がなくなつたのが自分のせいだと思つてかなり責任を感じているみたいなんだ。でも親つてすごいよな。すれ違つただけで様子がおかしいことに気がつくんだからさ」

腕？俺は自分の右腕に違和感を感じてみて見ると右腕がなくなつていた。もしかして、轢かれた時に治らないぐらいの重傷を負つたのかな。あれ？ニューロリンカーがメッセージを受信している。俺はメッセージを開くと楓子からのメッセージだった。俺はゆつくりとメッセージを見ていった。

「!?なんだよこれ……」

「ん? どうした?」

「ふざけんなよ!!何が幼馴染という関係を終わらせようだ!!俺は終わらせないぞ!!」

「お、落ち着け!ここは病院だから!」

「ご、ごめん」

「とにかく何かあつたんだな」

「ああ、すぐにでも楓子の所に行かなきゃ」

「それが無理なんだ。ここに来る前、看護婦さんに奨真がどれぐらい入院するか聞いた

ら一年って言うていた。治療の件などがあるかららしい」

「そんな……」

「こんな時にこんなことを言うのはなんだけど、ちよつと直結して話そうぜ」

「別にいいけど」

俺は直結用ケーブルを受け取ってニューロリンカーに刺した。

『で、いきなりどうしたんだ』

『奨真は一年間入院だから絶対に暇だと思ふから面白いアプリケーションの招待をするよ』

白夜は指を動かしてあるアプリケーションを俺のニューロリンカーに送った。俺はすぐにインストールした。

『ブレインバースト？』

『簡単に言えば対戦格闘ゲームだ。でもただの格闘ゲームじゃないんだ』

『何が違うんだ？』

『これは加速世界でやるんだ』

加速？

『試しにバーストリンクって言うてみるよ』

『わかった』

『バーストリンク!!』

そう言った途端世界は変わった。まるで時間が止まっているような世界だ。

「すごいだろ。これが加速なんだ。明日対戦を申し込むからな」

「その前にルールを説明してくれ」

「ああそうだった。ルールは簡単、対戦に勝つこと。ブレインバーストをやっている人はバーストリンカーと呼ばれてその人たちと対戦するんだ。始めた人は必ずポイントを持っていて、ポイントを稼いでレベルを稼ぐんだ。勝つとポイントが貰えて、負けたらポイントが減る。レベルアップでもポイントは消費する。このポイントがゼロになればブレインバーストは強制アンインストールされ、二度とブレインバーストができなくなる。その時の記憶がなくなる。それが嫌ならひたすら勝ち続けることってことだ」

「かなり危ないけど面白そうだな。ちなみに白夜のレベルは？」

「俺はまだ2だ。レベルを一つあげるのもかなり時間がかかるからな。じゃあまたな」

「おう！」

その日俺は特にやることなく、看護婦さんに腕を見てもらうだけだった。

次の日、起きると白夜からメッセージが来ていた。

『起きたら連絡してくれ。対戦を申し込む』

『起きたぞ』

メッセージを返信すると対戦を申し込まれてブレインバーストを起動した。すると世界がまた変わった。今度は世紀末のような世界だった。

「おお！お前のアバターかっこいいな！」

白夜の声が聞こえたから隣を見ると鎧のようなものをきた人物がいた。建物の鏡を

見ると俺もその鎧のようなものを着ていた。

「なあ、これって脱げるのか？」

「脱げねえよ」

ふーん。俺は上を見ると格ゲーでよく見る体力ゲージと名前と時間が見えた。HPを見るとブラウンクリエイトという名前があった。もしかしてこれが俺の名前なのか。

「大体はわかってきたみたいだな。まあ今回はタイムアップにするか」

「ああ」

カウントがゼロになり、タイムアップになった。対戦が終わると現実世界に戻ってきた。白夜に感謝しよう。俺はニューロリンカーを操作して白夜にメッセージを送った。

『ありがとな。こんな面白そうなアプリを教えてください』

『おう！じゃあまたな』

『ああ！』

数ヶ月後……

加速世界の東京都のビルの屋上で一人のプレイヤーが下を見下ろしていた。背中に二つの剣を背負い、腰に二つの銃を装備していた。銅のようなカラーのしたプレイヤーの名前は、『ブラウンクリエイト』

第1章 加速世界での2人

第1話 加速世界での出会い

俺は病院のベッドでニューロリンカーを操作していた。

「本当に暇だ。早く退院したいよ……」

そういえば今日は外出許可を貰ってるんだった。久しぶりに家に帰るか。楓子にも話があるしな。

そんなことを言っているとブレインバーストで対戦を挑まれ、俺は加速した。

「挑まれたのは久しぶりだな。えーっと『スカイレイカー』か」

対戦相手を待っていると、相手プレイヤーが現れた。

空色のカラーか、しかも女？

「あんたが相手か。女だからって手加減はしないぞ」

「そう言ってもらえて光栄です」

カウントがゼロになり、勝負が始まった。

俺は腰の銃『シヨックリボルバー』を手に取り、相手の足元を撃った。

「チツ。素早いな」

「それぐらいでは当たりませんよ」

こいつ同じレベル4なのにそれ以上の力があるのか。まあレベル4同士でここまで
のやつは初めてだが。

考え事をしすぎたせいかな、後ろに回り込まれた。

「っ!?!しまった!?!」

「ファイアーショック！」

「ぐう!!」

スカイレイカーの技のアップパーをまともにくらい、俺は宙を舞った。そのまま地面に叩きつけられたが俺はすぐに態勢を立て直した。

「結構やるじゃねえか」

俺は銃を構えて撃ち続けた。スカイレイカーは全て避けるが、だんだんあいつの動きが分かるようになってきた。あとはタイミングだ。

集中……集中……集中だ。

「(っ)っだー！」

動きを先読みして銃を撃った。銃弾はスカイレイカーに当たり、動きを止めた。

「当たってしまいましたか。けど次はそうはいきませんよ。あら？体が動かない？」

「ショックリボルバーの銃弾は当たれば、少しだが相手をスタンさせることができる。そろそろ効果も切れるか」

「本当ですね。当たらなければいいってことですね」

「じゃあ第2ラウンドといこうか」

俺は銃をしまい、背中の剣を手に取り、構えた。

「今度は二刀流ですか。面白そうですね」

「まだまだこれからだ。着装ブースターレッグ！」

足に強化外装『ブースターレッグ』を装備し、俺は突っ込んだ。剣を振りかざしたが、

スカイレイカーは腕でガードした。

「お、重い……」

「まだまだだつて言つただろ」

もう片方の剣を横に振り、俺はスカイレイカーを吹っ飛ばした。

「強いですね。それに強化外装もたくさん持つてるのですね」

「作つたんだよ。俺のアビリティでな」

「作つた……か……」

「リアル割れになるが、俺は現実の世界では作ることは不可能なことになったからこのアバターが生まれたんだろうな。片腕がなかったら何も作れないかな」

「え？……もしかして……奨真……君……？」

え？なんで俺の名前を……まさか!?

「楓子なのか？」

「そんな……なんで……」

「お前もバーストリンカーだったのか」

話している間にカウントがゼロになりドロローになった。勝負が終わり、現実に戻ってきた。

「ここで対戦を挑んできたってことは、楓子は近くに」

窓を見ると、楓子が病院を見ていた。ベッドから降り、俺は急いで病院の外に向かっ

た。

「すみません、通してください」

廊下の人たちを避け、外に出た。楓子は門のところまで走っていた。片腕がない状態で走りにくいがあることを考えてる暇はない。

「待ってくれ！楓子!!」

楓子の名前を呼ぶと、楓子は止まった。けど、こつちに振り向かなかった。

「……何……もう私は貴方と関わらないって言ったでしょ。メッセージにもそう書いたはずよ」

「ならなんでここにいたんだよ」

「たまたま通りかかっただけよ」

「嘘つくな。じゃあなんで病院のほうを見てたんだ」

「見てない!!」

楓子は走り出したが、俺は楓子の腕を掴んだ。

「待て！」

「離して!!」

「離さない！話だけでも聞いてくれ！」

「嫌!!聞きたくない!!」

「あれは楓子のせいじゃない！俺がしたくてしたただけだ！！だから自分のせいだとか言わないでくれ！！幼馴染という関係を終わらせるとか言わないでくれ！！」

「もうやめて！！」

パチンツ

俺は頭の中が真っ白になった。俺は何をされた。頬がヒリヒリする。そっか、引っ叩かれたのか。

「あ……………っ！！」

前を見ると楓子は走っていくのが見えた。けど俺は追いかけることができなかった。病院の自分の病室へ戻ってベッドに入り、俺は頭を抱えた。

「どうすればいいんだ……………クソッ！！」

第2話 ブラックロータス

あの一件から一ヶ月がたった。いつも通りベッドで寝ていると看護婦さんがニコニコしながらやってきた。

「ど、どうかしたんですか？」

「橘君にとってとてもいい話を持ってきたの！実は橘君の義手が届いたの！」

「義手？でも俺そんなこと知りませんけど」

「あなたのお父さんとお母さんが頼んできたのよ」

「義手って凄く高いんじゃない？」

「そこまで高くないよ。そんなことより義手をつけるからついてきて」

看護婦さんについていき、俺はある病室に入った。そこには他の看護婦さんと先生がいた。

「やあ、そこに座って右腕を出して。義手をつけるから」

俺は先生の言う通りに右腕を出した。看護婦さんが本物の腕そっくりの義手を持ってきて、先生と一緒に俺の右腕につけた。義手の使い方を教えてもらった。

「君がある女の子に義足を作っていた技術を参考にしたよ。ニューロリンカーで制御すれば大丈夫。使いにくいけどすぐに慣れるよ」

「ありがとうございます」

「あとはリハビリかな」

「退院までに使いこなせるように頑張ります…」

それからリハビリを繰り返し、義手にも慣れることができた。そして退院の日がきた。俺は今まで世話してくれた先生と看護婦さんに礼を言つて家に帰つていた。一年間も入院してたから勉強とか大変だろうな。そんなこと考えてると家の前に着いたみたいだ。

「ただいま」

「おかえり褒真君！」

「ただいま母さん。楓子は？」

「楓子はまだ……部屋に閉じこもっているわ。ご飯は一緒に食べるけど食べ終わつた

「らすぐに部屋に行くの」

「楓子のことなんだけど俺に任せてくれないかな。時間はかかるかもしれないけど絶対にいつもの楓子に戻してみせるから」

「父さんの言ってた通りね。わかったわ。奨真君に任せる」

「そうそう、義手のことなんだけどありがとう」

「いいのいいの」

ガチャッ

二階の部屋のドアが開いた音が聞こえた。階段を見ると楓子が降りてきていた。

「楓子」

「っ!？」

楓子は俺の顔を見ると早足でリビングに入り、数秒で出てきて部屋に戻って言った。

「楓子……もう。あの子喉が渴いたらああやって降りてくるけどすぐに部屋に戻るの」

「そうか。俺もとりあえず部屋に戻るよ」

「部屋に入って机の上を見ると、去年俺が楓子にあげたネックレスのレプリカがあった。」

「自分が受け取る資格はないってことなのか」

俺はネックレスを引き出しに直してベッドに寝転んだ。

「アンリミテッドバースト」

俺は無制限フィールドでエネミーを狩り続けていた。

「駄目だ！この程度じゃ全然駄目だ！もっと強いやつと戦わないと！」

「どうしたんだ？」

「っ!？」

振り向くと黒く尖ったデュエルアバターがいた。こいつ見たことがある。

「絶対切断じやねえか」
ワールドエンド

「私のことを知っているんだな。無限の剣製」

あれから俺はレベルも上がり、レベル7まで上がった。死に物狂いでエネミーを狩り続け、対戦に勝ち続けていたらしいの間にかレベル7になっていた。そして俺についた二つ名が絶対切断ことブラックロータスが言った無限の剣製とバーサーカーだ。

「俺に何の用だ」

「君は以前、私のレギオンのメンバーと戦ったと聞いてな。君と戦って以来様子がおかしいから君に聞きにきたんだ。単刀直入に言うが、レイカーとリアルでも知り合いなのか？」

「ああ」

「君は楓子のことをどう思っているんだ？」

「決まってるだろ。楓子は俺の大事な家族だ。それ以外何もない」

「そうか。なら君に楓子のことを頼んでも構わないか？」

「ああ。楓子は俺がなんとかする」

「楓子と接触したいなら私のレギオンに入らないか？実は前から君をレギオンに勧誘しようと思ってたんだ」

「俺をレギオンに入れるために楓子を利用する気か!!」

「そんなことするわけがないだろう!!私は親友として本当に心配しているのだ!でも私ではどうすることもできなかった。だから君に頼るしかないのだ。楓子の件とレギオンの勧誘は全く関係ない。それにレギオンに入るのも無理強いはしない。入るかどうかは君次第だ」

俺は悩んだ。

悩み続けた。

悩み続け、俺は答えを出した。

「レギオンには入らない。けど用心棒としてなら構わないがそれでもいいか」

「構わない」

「わかった。じゃあ改めて自己紹介をしよう。俺はブラウンクリエイト。レベル7だ」

「私はブラックロータス。レベル9だ。これからよろしく頼む」

俺たちは互いに自己紹介をし終え、帰還ポータルに帰って行った。

「白夜にも相談するか」

俺はニューロリンカーを操作し、白夜にメッセージを送信した。
ニューロリンカーの時計を見るともう7時を回っていた。
とりあえず晩御飯を食べよう。俺は部屋を出て下に降りた。

学校の宿題をやっていると奨真からメッセージがきた。

『明日の午後、無制限フィールドに来てくれ。話はそこでする』

奨真のやつ急にどうしたんだ。まあいいか。

『わかった』

俺は宿題を終わらせて晩飯を食いに下へ降りた。

第3話 エネミー狩り

無制限フィールドで俺は白夜を待っていた。バスターソードの調子を見ていると白夜が来たみたいだ。

「来たぞ。それより急にどうしたんだ？」

「もうちょっと待ってくれ。他にも呼んでいるんだ、来たか」

「すまない、遅れてしまった」

俺が呼んだ人物はブラックロータスと四^{エレメンツ}元素の2人だ。

「く、黒の王!？」

「君は宝石の番人^{ジュエルガードナー}」

白夜はネガ・ネビュラスとは初対面だな。この機会に紹介しておこう。

「まずは自己紹介だな。俺はブラウンクリエイト。親しい人にはエイトって呼ばれる」

「俺はエメラルドルーク。よろしくな！」

「私は黒の王、ブラックロータス」

「アクアカレント。カレンって呼んで欲しいの」

「アーダーメイデンと言います。よろしくなのです」

ブラックロータスはもう1人のエレメンツの『グラフィイトエッジ』も呼ぶつもりだったみたいだが本人は用事だったらしい。

「早速だが俺は君たちに聞きたいことがある。まずは君たちはレイカーとリアルでも知り合いか？」

「ああ」

「そうなの」

「はい」

「勿論俺もだ」

「あの、エイトさん。エイトさんは奨真さんなのですか？」

「どうしてそう思う？」

「フー姉の様子がおかしくなったのは奨真さんが大怪我をしたのを聞いたからなのです。そして今、エイトさんはリアルのフー姉のことを聞いてきた。だからエイトさんは

奨真さんなのかなって」

「凄いな、正解だよ。他にも聞きたいことがあるんだ。俺が入院してる間、楓子の調子はどうだった」

俺が一番聞きたいのはこのことだ。とにかく聞き出さないと。

「フー姉は昔と変わりました。どこか暗いような気がするのです」

「私も同じなの。笑っているけど全部作り笑いな」

「学校でもそうだな。俺が話しかけても暗い顔して何も答えないからな」

「ボーツとしてる時が多いな」

なるほどな。楓子の心はかなり重傷を負っているようだな。早く何とかしないと！
でもどうすれば……………

「ありがとう、教えてくれて。楓子のことなんだけど俺に任せてくれないか。時間はかかると思うがいつもの楓子に戻してみせるから」

「褒真さん！私もお手伝いしたいのです！」

「その気持ちだけで充分だよ。それにこれは俺と楓子の問題だからな。俺がするしかないんだ」

「わかりました……」

「実行するのは任せるが、それまでは手伝わせてほしい」

「すまないな」

「仲間同士で助け合うのは当然なの」

「俺もだぜ。ダチが困ってたら助けるのは当然だ」

「みんな……ありがとう」

楓子はこんないい仲間にも恵まれてるんだな。楓子……お前の仲間たちはこんなにもお前のことを心配してくれてるんだぞ。

「ちよつと待て。仲間同士って言ってたけど俺たちってあまりあつてないよな？」

「俺はネガ・ネビユラスの用心棒だ」

「私がスカウトしたんだ」

「マジか!?俺もそろそろどつか所属しようかなあ」

「ルー君もネガ・ネビユラスに入ったら?ロータスも誘う気だったらいいの」

「そうだな。せっかくこうやって会えたから君もネガ・ネビユラスに入らないか？」

「黒の王からスカウトが来るなんてな。勿論入るぜ！」

「これからよろしく頼む」

「じゃあとりあえずリアルの方で何とかしてみせるから、今日は解散するか。っ!？」

「この気配!? 凄い数だ!!」

「エネミーがたくさんなのです！」

「これはちよつとまずいの！」

「とりあえず俺の後ろに!!」

ルークは強化外装『ダイヤモンドシールド』を装備し、構えた。俺たちはルークの後

ろに回り、戦闘態勢に入った。

「うおおおおお!!!」

「やあああああ!!!」

俺は両手にバスターソードを持ち、ロータスと一緒にエネミーを一掃していた。

「流石無限の剣製だな」

「そつちこそ流石レベル9だぜ！」

「フレイムトールンツ！」

「メールストロム！」

2人とも流石エレメンツだな。2人で一掃している。

「メイデンは常に俺の後ろで撃ちまくってくれ！カレンはやばくなったら俺の後ろに

！」

「はいなのです！」

「わかったの！」

早速敵が来たか！

「リフレクト!!」

俺は必殺技でエネミーの攻撃をガードした。カレンの方を見ると後ろからエネミーが襲おうとしていた。カレンはまだそれに気づいていない。

「カレン！危ない！」

「きゃあっ!?!」

俺はカレンに覆い被さるるようにカレンをエネミーから守った。そのせいで俺はエネミーから攻撃を受け続けた。

「フレイムトールンツ!!」

「熱っ!!」

メイデンが助けてくれたが矢が刺さってしまった。

「ああああごごごごめんなさいです!!」

「き、気にするな。カレン、大丈夫か?」

「う、うん……ありがとうなの」

「あ、ああ」

俺はカレンを立たしてエイトの方を見た。どうやら終わったみたいだな。

「エネミーも無事倒せたわけだし、一旦帰還ポータルに帰ろう。楓子のごことは任せてくれ」

「頼んだぞ」

「お願いします」

「任せたの」

「頑張れよ」

「よしー。」

俺たちはそう言って帰還ポータルに入り、現実に戻った。

第4話 奨真の必殺技

部屋で楓子を元に戻そうといろいろと考えたがなかなかいい考えが浮かばず、二年が経ってしまった。前に話しかけようとしたが俺の方を向かずに逃げ出してしまった。どうしようか考えているとある方法が思いついた。

「もう決闘しかないな。そうと決まれば早速楓子のところに行こう」

対戦くらい受けてくれるだろう……。俺はそう考えながら楓子の部屋の前に来た。

「楓子。入るぞ」

中に入ると楓子は椅子に座って本を読んでいた。

「楓子、もうこんなことは終わらせよう」

「どうやって」

「俺たちはバーストリンカーだ。決闘で決着をつけよう。俺が負けたら楓子の言うことを何でも聞く。俺が勝ったら俺の話を聞いてもらう。どうだ？」

「……わかったわ」

「この戦いで終わらせよう!!」

「バーストリンク!!」

俺はスカイレイカーに対戦を申し込んだ。そして対戦のステージに変わった。

「世紀末ステージか」

「お！あれって無限の剣製じゃん!!」

「マジで!!」

「キャアア!!こつち向いてー!!」

ギャラリーがいるみたいだがこの戦いを見られるわけにはいかない。

「君ら悪いけどこの試合を見るのはまた今度にしてくれないか!!」

「ちえーせつかく見れると思ったのに」

すぐに帰ってきてくれてよかったよ

「行くぞレイカー!!」

「本気で来なさい!!」

俺は剣を構えて突っ込んだ。切りかかったがレイカーは上に避け、空中から攻撃して来た。

「はあ!!」

「ぐっ!」

速度は速いが軽いな。これなら簡単に押し返せる。

「おお!!」

俺は押し返して、攻撃を仕掛けた。

「うう!まだよ!!」

レイカーは後ろへ後退し、構えた。

「着装！ゲイルスラスタ―！！」

「それがお前の強化外装か……なら！！着装！ハイジャンプレッグ！！」

俺は強化外装、ハイジャンプレッグを使い、レイカーのところまで跳んだ。

「そう簡単にこれれると思わないでね！！ウインドボール！！」

心意技か！！このままだと直撃する！

「ぐあ！！」

俺は直撃して地面に落ちた。時間もまだまだあるし、体力も残ってる。こっちもそろそろ本気で行くか。俺は剣を上投げ、腰の銃も上に投げた。

「デュアルクロス！！」

二つの武器を一つの武器に合体させた。上から落ちて来た二つの武器を手を取った。

「ガンブレード!!」

俺はガンブレードを構えてハイジャンプレッグで跳んだ。

「ウインドボール!!」

「同じ手を喰らうかよ!!」

ハイジャンプレッグでさらに上へ跳んで、ウインドボールの範囲外に出た。

「落ちろおお!!」

「きゃあああ!!!」

レイカーは地面に落ちていき、俺は追いかけた。それから俺たちの戦いは続いていた。お互いの体力も残り少しになっていた。

「お互いそろそろ限界だ。これで終わらせよう!!」

「そうね」

俺は溜まった必殺ゲージを全て使い必殺技を使った。

「アunンliリmiミtedテ ドblade ドworkクs!!」

「ファイアーコンベクション!!」

俺は結界を貼り、剣を自分の手元に吸い寄せた。そしてレイカーの連続技に対抗した。一発防いで剣は壊れ、二発目はもう片方の剣で防ぎ、剣を吸い寄せる。それとずつと繰り返した。レイカーの連続技が終わり、トドメのチャンスが訪れた。

「これで終わりだああああ!!!」

（私の技が防がれてる時は気がつかなかったけど、奨真君のこの連続技は『ジ・イクリップス』だわ。こんなの食らったら勝てないわよ）

レイカーの体力を最後まで削り、俺は勝利した。

第5話 告白

加速世界から現実に戻ってきた。俺は約束通り、楓子に話を聞いてもらうように言った。

「約束だもんね。ちゃんと聞いわ」

「楓子、俺の右腕のこと自分のせいだと思ってるのか？」

「ええ、私があの時すぐに体を動かして入れば奨真君が私を助けようとして右腕がなくなることはなかったもの」

「確かにお前を助けて腕は無くなったけど、俺はお前のことを恨んでなんかない。それにお前じゃなかったらあそこまで必死に助けようとしなかった」

「でも!!私のせいで奨真君は大事な腕がなくなつて奨真君の好きな物作りもできなくなつた!!」

「楓子の命が無事なら腕の一本くらい安いもんだよ。あと新しい腕も貰えたしな」

「え?」

「楓子も気づいてるだろ。俺の右腕があること」

「ごめんなさい。全く気づかなかつた」

「二年間この腕で過ごしてたのに……。まあいいや、これは義手だよ」

「義手?」

「そう、義手」

「これが義手」

そう言つて楓子は俺の右腕の義手にそつと触れた。すると楓子の目から涙が出ている。

「ごめんなさい、ごめんなさい。奨真君を私と同じようにしてしまつて」

「え？」

「私は足がなかったから奨真君に作つてもらつた義足をつけてる。私の場合は産まれた時からだからしょうがないけど、奨真君は違う。私が奨真君を私と同じようにした。本当に私は最低よね。奨真君も本当はこんな私嫌いよね」

「そんなこと！」

「ないって言い切れるの!!私は奨真君の大事な腕を奪つた!!それだけじゃない!二年前病院で私はあなたの話を聞かずに頬を引つ叩いた!この三年間あなたのことをずっと

避け続けた!!こんな私をあなたは嫌いじゃないって言い切れるの!!」

「言い切れるよ!!」

「っ!?!」

「確かに楓子は俺に酷いことをし続けたかもしれない。頬を引つ叩かれたしずっと避けられた。でもそのおかげで俺は気づいたんだ。俺は楓子がいなかったらダメなんだってこと。楓子がいないだけで心が壊れそうだった。だから俺はお前がいなかったら何もできない人間なんだ!俺にはお前が必要なんだ!!だから!!いつもの楓子に戻ってくれ!!」

気づいたら俺は泣いていた。

「……しも」

え?

「私も！この三年間辛かった！！自分から避け続けたのに奨真君がいなくて心が壊れそうだった！！私も奨真君と同じ！！奨真君がいなかったら何もできない人間なの！！今までのことを許してとは言わない。でも！！私にはあなたが必要なの！！」

俺はその言葉聞いて楓子思い切り抱きしめた。楓子も俺の背に手を回して抱きしめてきた。

「楓子！！楓子！！」

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！奨真君！！奨真君！！」

それから俺たちは抱き合いながら泣き続けた。一時間後、俺たちはお互い体を離れた。

「ねえ奨真君。その……本当にごめんなさい」

「何度も謝るなよ。それに俺はお前のことを怒ってなんかいないから」

「……ありがとう」

「……なあ楓子」

「何？」

「前さ……幼馴染という関係を終わらせようって言ってただろ。前までは終わらせたくないと思ってた。今日で幼馴染を卒業しよう」

「どう……いう……こと？」

「その……これからは恋人としての関係になりたいと思って」

「ごめん。聞き間違えたと思うからもう一回言つて?」

「ああもう！俺はお前のことが好きだからこれからは幼馴染としてじゃなくて恋人として付き合いたいんだよ！」

二回も言いたくなかったんだよ。告白なんて初めてだし……恥ずかしいし。

「ありがとう。私もこれからは恋人としてあなたと付き合いたいです！」

俺はその返事を聞いて、思わず楓子に抱きついた。

「きやつ!?! 奨真君?」

「ありがとう。俺を受け入れてくれて」

「こっちの台詞よ。こんな私を好きだって言ってくれてありがとう」

俺は楓子から体を離れたが、俺たちはすぐに体をくっ付けた。そしてそのまま俺たちの顔は近づいていったが。

「なんだか騒がしいけど何かあった？」

母さんが部屋に入ってきてしまった。ていうかこの状況かなりマズイんじゃないか……。

「ええと……。母さんは見なかったことにするからごゆつくり……」

「ちょっと待ってええ!!!」

俺と楓子は母さんのところへ急いで向かった。

第6話 対面

そして……

俺と楓子はさっきの出来事を母さんに話した。

「……というわけなんだ」

「そうなの。やっと仲直り出来たのね。しかもお付き合いもしたんだ！これは父さんに報告しなきゃ！」

「俺と楓子は血の繋がった家族じゃないから……その……た、例えばだけど……け、結婚もできるのかな？」

一応確認しなきゃな………いつか本当に結婚したいし。

「大丈夫じゃない？わかんないけど」

「け！結婚?!」

楓子が『結婚』の単語に反応してしまった。

「た、例えばだからな！」

「でも……いつか本当に結婚したいね」

「気は早いけど、いつかはな」

「あのーイチャイチャは後でいいかなー。そろそろ晩御飯も作りたいたいから楓子手伝ってー」

「あ、うん」

楓子は母さんの後ろについていき、台所に向かった。もう晩御飯の時間か。

「ただいま」

父さんが帰ってきたみたいだ。

「奨真。楓子と仲直りしたんだな。奨真ならできるって信じてたぞ」

「ああ、やっとだよ」

「それとお前ら付き合ってたんだな！母さん！今日は赤飯お願い!!」

「わかってますよー!」

「へっ!?!」

そういえばなんで父さんは仲直りしたと付き合ったことを知ってるんだ!?!俺は母さんの方を見ると、意地悪そうな顔をした母さんがいた。

いつの間にメッセージ送信したんだよ……。

数分後、晩御飯ができて、俺たちは椅子に座った。

「「「いただきます」」」

本当に赤飯炊いてるよ……。

「三年経ってやっと元どおりだな」

「本当にごめんなさい」

「いいのいいの。私たちは楓子が元気になればそれでいいんだから」

「でも楓子。これだけは忘れるなよ！これも全部奨真のおかげだってことを。奨真に感謝するんだぞ！」

「私たちも奨真君には感謝してるのよ。私たちは何もできなかったけど、奨真君のおかげで元どおりになったことを」

「うん、絶対に忘れない」

そんなに感謝されることをしたかな…。

俺はやりたいことをしただけなんだけど。

「まあこの話は終わりにして、お前らは恋人同士になったんだよな」

「え、まあ」

「う、うん」

「どういう風に付き合ったのか教えてくれ！」

「母さんも聞きたい！」

この両親は……まったく。まずは楓子と話し合うか。俺は隣に座っている楓子連れ
て一旦リビングを出た。

「どうやって伝える?」

「もうそのまま言ったらいいんじゃない。どうせすぐバレると思うし」

「そうだな」

俺と楓子はリビングに戻り、どういう風に付き合ったのかを伝えた。

「そうか、本当に似たもの同士だな」

「素敵ね」

「奨真、楓子をよろしく頼むぞ。楓子も奨真のことを支えてやるんだぞ」

「任せてくれ」

「任せて」

「それを聞いて安心したよ。ん？メッセージが来てるな」

父さんはそう言つてニューロリンカーを操作した。メッセージを確認し終えて父さんは立ち上がった。

「父さんと母さんはこれから昔の友人と出掛ける約束ができたから行つてくるな」

「留守番お願いね」

「わかった」

父さんと母さんは食べ終わった食器を台所に持っていき、そのまま出掛けた。俺と楓子も食べ終わり、食器を台所に持っていった。

「そっだ、風呂はどうする?」

「奨真君先に入っていいよ」

「わかった」

俺は脱衣所に入り、服を脱いで風呂場に入った。

湯船に浸かって暫く経ち、風呂場の扉が開いた。

父さんと母さん何か忘れ物でもしたのかな。

俺は後ろを向くと、体にタオルを巻いた楓子が入って来た。

「ええ!?!何で!!」

「今日だけ……いっしょに入りたくなって……」

「いいいや……でも…」

俺は暫く楓子のことを見続けていた。

「あ、あんまり見ないで。奨真君のエッチ」

「ぎ、ごめん!!」

俺はすぐに楓子から顔を逸らした。暫くしたら出ていくだろう。だがそう思った俺が間違いだった。楓子は湯船に浸かってきた。そして後ろから抱きついてきた。

「っ!?!」

「お願い、暫くこのままできさせて」

「で、でも……」

「お願い」

そう言われても、いくらタオル越しでも……楓子の胸が背中に思い切り当たって感触がするの……。

でも我慢するしかないか。

数分後、楓子はやっと離れてくれた。そして今はお互い背中合わせで湯船に浸かっている。

「おお俺先に体洗うから」

「背中流してあげるよ」

「いいよっていつてもするんだろ？」

「もちろん！」

「……はあ……好きにしてくれ」

楓子は俺の背中を洗ってくれた。

「大きな背中。やっぱり男の子だね」

「今更何いってんだよ」

「ふふ、ちよつとそう思っただけ」

俺は洗い終わり、風呂場を出ていこうとしたが楓子に手を掴まれた。

「楓子さん？何してるのかな？」

「私の背中も流して♪」

「はあ!?それは……」

「ダメ？」

そんな顔しないでくれ!断ろうにも断れない!

「……はあ……わかったよ俺の負けだ。好きにしろ」

「やった♪」

俺は楓子の背中を洗った。背中を洗い終わると楓子はとんでもないことをお願いしてきた。

「前もお願い♪」

「ちよつと待て!!それは流石にダメだろ!!」

前も洗うってことは……楓子の胸も洗うってことだろ。

「好きにしろっていったのは奨真君でしょ?」

「うっ!?……………わかった」

「お願いします♪」

楓子はそういつて俺のほうに体を向けた。

俺は楓子の肩からゆっくりと洗い始めた。

今父さんと母さんが出掛けてくれていて本当に良かったと思っている。

肩を洗い終わり、胸へと手を移動させた。

「うっ……………ああ……………」

「頼むから声だけは出さないでくれ!!」

「そ、そんなこと言われても……」

ああダメだ……。もう……。無理だ……。

そこからの記憶は残っていないかった。

気がついたら自分のベッドの上で寝ていた。

「良かった……。気がついた。ごめんね、ちよつと調子に乗りすぎたみたい」

「き、気にするな」

あれ？　そういうえば俺のニューロリンカーはどこにあるんだ？

「なあ楓子、俺のニューロリンカーは？」

「これね、はい」

「ありがとう。そうだ、明日ネガ・ネビユラスのみんなとリアルで会わないか？夏休みはまだまだあるしさ」

「え!?! 奨真君どうしてネガ・ネビユラスのみんなのことを知ってるの!」

「まあ加速世界で何回か会ってるし、俺は用心棒で白夜はメンバーだしな」

「知らなかった……。じゃあ連絡してみるね」

楓子はニューロリンカーを操作し、メッセージを送っていた。
俺も白夜にメッセージを送ろう。

「サツちゃんもいいよだって、後はサツちゃんが連絡するみたい」

「白夜もいけるってさ。さて、そろそろ寝るか」

「ええ」

俺は布団に入ったが、楓子も布団に入ってきた。

「今日は一緒に寝よう？」

「わかった」

俺は楓子と一緒に寝た。

次の日……。

俺と楓子は一緒に待ち合わせの場所へ電車で向かった。

電車を降りて、待ち合わせ場所の梅郷中学の門に向かった。門に着くと、白夜以外のみんながいた。

「楓子、もう大丈夫なのか？」

「ええ。心配かけてごめんなさい。もう大丈夫よ」

「それは良かったの」

「良かったのです」

「まずは自己紹介からしようか。俺は橘奨真。デュエルアバターはブラウンクリエイターだ」

「一応私もね。倉崎楓子。デュエルアバターはスカイレイカー」

「黒雪姫だ。デュエルアバターはブラックロータス」

「氷見あきら。デュエルアバターはアクアカレントなの」

「四埜宮謡です。デュエルアバターはアーダーメイデンなのです」

自己紹介が終わると白夜が遅れてやってきた。

「ごめんごめん！遅れてしまった！」

白夜は眼鏡を外してそういった。

「自己紹介がまだだったな。俺は雪ノ下白夜。デュエルアバターはエメラルドルークだ」

白夜は自己紹介をし終えて、俺に誰が誰なのか聞いてきた。

俺は全員答えると白夜は「サンキュー」っていった。

すると白夜は突然あきらのところに向かった。あきらを見るとあきらも白夜のほうに歩いていった。

「あの！一目惚れました!!俺と（私と）付き合ってください!!」

「「ええええええ!!」」

「ふっふっ」

新しいカップルが誕生……か。

「おほん!! とりあえずどこかに移動しようか。2人は初めてだな。案内するよ」

「ああ」

「それじゃあ行こうか」

俺たちは黒雪姫についていき、その場を移動した。

第7話 ネガ・ネビユラスの集まり

俺たちは今、黒雪姫に連れて来てもらった公園でくつろいでいた。

「奨真君と白夜君とフーコは同じ中学なんだな」

「ああ」

「じゃあ住んでるところは渋谷なの？」

「おう！心配するな、いつでも会いに行くからさ」

「私からも会いに行くの」

この二人は……。付き合って1時間も経ってないのにバカカップルになってる。

「ラブラブなのです」

「私と奨真君も負けてないよ！」

「そうなのか？」

「ええ！奨真君！こっちに来て」

「あ、ああ」

少し嫌な予感がするんだが……。そんなことを思いながら立ち上がって楓子の隣に座った。

「どうした？」

「ふふ、えい」

「ウプツ!？」

「なっ!？」

「おお」

「大胆なの」

「フーねえの胸に埋もれてるのです」

一瞬何が起きたのかわからなかったがういういが言ったことで理解できた。

俺は楓子の胸に埋もれてるんだな。

ってええええええ!？」

「んー!んー!!」

「あん、奨真君暴れないで……」

「しよーにいとフーねえが少しエッチイのです」

「ういうい!? 見てはダメだ!!」

「えい」

「ぬおー!! 目がああああ!!!」

あ、暴れたらダメだ。そうだ。肩を叩いてギブのサインを送ろう。

「んー、んー! (ギブ、ギブ!!)」

「そろそろいいかな」

サインを送ると楓子は俺を解放してくれた。楓子は俺たちの学年の中でもスタイル

抜群だから胸に埋もれてる間はめちやくちや苦しかった。

「し、死ぬかと思った。つて白夜は何で目を抑えて倒れてるんだ」

「びゃーくんが悪いの……」

「不可抗力だ……」

「サツチんまだなのですか？」

「ご、ごめん！」

「たぶん白夜はあきらみに目潰しを食らって、ういういは黒雪姫に目隠しをされてたみたいだ。」

「そうそう、私のことは黒雪姫じゃなくても構わないぞ。例えばフーコやあきららが呼んでるサツちゃんやサツチとか」

「そ、そうか。じゃあサツチって呼ぶよ」

「じゃ、じゃあ俺も……」

やっと復活したみたいだな。

「びゃーくんは胸が大きい方が好きなの？」

「そんなことねえぞ。ていうかそんなこと気にしないな。まあ褒真は好きだろうな」

「やかましい！」

「フゴツ！」

俺は白夜の腹に肘で殴った。

「な、何するんだ……」

「余計なことを言うからだ」

「なるほど。びゃーくんは気にしない、しよーくんは大きい方が好き。覚えておくの」

「覚えなくていいからな!!」

「わ、私も……いつか……」

「大丈夫よ。サツちゃんも大きくなるわ」

「うう……」

「しよーにい、私も大きくなるのですか？」

「ま、まあなるんじゃないか。ういういは小さいしな」

「が、頑張つて大きくするのです！」

「私も頑張っちゃおう♪」

「フーコは充分大きいだろう!!」

「は、はははは………」

「お前も大変だな………」

「……がんば」

「………はあ」

それからはみんなで無制限フィールドに行つてエネミー狩りをしたり、近くのショツピングモールで色々を見て回つた。

時間を見るときもう6時を回っていた。

「そろそろ帰るとするか」

「ういうい、帰り道は気をつけるのよ！」

「んー！んー！」

「楓子、ういういが苦しそうだから」

「待ってくれ、まだお互い連絡先を教えてなかったはずだ」

「そうだったな、あきらとしかまだ交換してなかった」

「じゃあそつちに連絡先を送るよ」

俺たちはニューロリンカーを操作して連絡先を交換した。交換し終えて俺たちは今

来た電車に乗った。

ん？早速サッチからメッセージが来たみたいだ。

『デュエルならいつでも受けて立つぞ』

ははは。まさかレベル9からこんなことを言われるなんてな。

『その時はよろしく頼む』

俺はサッチのニューロリンカーにメッセージを送信した。

「奨真君？どうかしたの？」

「ん、今日みんなに会えてよかったと思っただけだよ」

「確かにな、あきらみたいな子とも出会えたしな！」

「それはよかったな」

「またみんなで集まろうね」

「ああ」

この時の俺たちは楽しいことでいっぱいだった。

けど一年後、まさかあんなことが起こるなんて思いもしなかった。

第8話 レッドライダーの死とネガ・ネビュラス崩壊

今加速世界ではある問題が出ていた。

『災禍の鎧』の復活。

災禍の鎧を完全消去するために七王が討伐に向かっていた。

俺はその様子を陰で見っていた。

『グオオオオオオオオ!!!』

『……………』

グランデは相変わらず無口だな……。

グランデが防いで、ナイトとロータスが接近で、レディオ、ライダー、ソーン、コスモスが遠距離で攻撃していた。

そんなに時間はかからず、戦いは終わった。

災禍の鎧がストレージにないか確認しているみたいだな。

俺はずっと様子を見ていた時、事件は起きた。

ロータスがライダーを不意打ちで殺したのだ。

「っ!?!あいつ何やってるんだ!!」

他の王達は一斉にロータスに攻撃し始めた。だが白の王、ホワイトコスモスだけは攻撃しなかった。

ロータスはすぐにその場から逃げていった。

「ホワイトコスモス……。何か隠しているな」

現実世界でネガ・ネビュラスの主要メンバーが集まった。(俺はまだ用心棒だが)
サッチが話があるらしい。

「みんな、今日ネガ・ネビュラスは帝城を攻略しようと思う」

「帝城って神獣級エネミーがいるところだろ！俺たちで大丈夫なのか」

「わからない。けど我々はさらなる高みを目指すには帝城の攻略が必要だと思う」

「まあ俺は構わないが……」

「私も大丈夫なの」

「私もなのです」

「私もいいわ」

「奨真君はどうする？ 私としては君の力が必要なのだが」

「悪い、俺はいけない。この後予備の義手の調整があるから病院に行かなきゃならない。ローカルネットからも遮断されてるしいつ終わるかもわからない」

「そうか……」

「まあ、俺の分まで頑張れよ」

「ああ」

「つとそろそろ時間だ。俺は先に帰るよ」

「わかった。またな」

「さよならなのです」

「またなの」

「じゃあなー」

「奨真君！車に気をつけてね！」

「……ガキじゃねえんだから。じゃあな」

俺は先に帰り、そのまま病院に向かった。

義手の調整が終わり、俺は病院を出た。

俺はあいつらが心配になってきた。

帝城を攻略なんて神獣級エネミーを相手にする。

あんな奴らを倒すなんてほぼ不可能だ。

嫌な予感がする。俺はすぐに無制限フィールドに飛んだ。

「アンリミテッドバースト!!」

「帝城はあつちだな。デュアルクロス！ ジェットレッグ!!」

俺はブースターレッグとハイジャンプレッグをデュアルクロスさせ、ジェットレッグを着装した。

「もつと速く……もつと速く!!」

飛び続けると上を誰かが通過した。

あれはレイカー？

何かあつたんだな。急ごう!!

俺は帝城の奥へと飛んでいった。

奥まで行くとメイデンがいた。

「メイデン!!」

「しよーにい……」

「大丈夫だ。すぐに逃げるぞ!!」

俺はメイデンを抱き抱え、もう一度飛んだ。後ろを振り向くと、朱雀が追ってきていた。

「このままじゃ追いつかれる!!もつとだ……もつと速く!!」

俺はジェットレグを限界まで加速した。

「おぉおぉおぉおぉ!!
!!!!!!」

なんとか振り切ったみたいだな。

「しよーにい!!怖かったよお!!」

「もう大丈夫だ」

「奨真君…」

「ロータス」

「…：…すまない。私のせいで」

「自分を責めるな。誰もお前のせいだなんて思ってないはずだ」

「しよ、奨真か？」

「ん？」

声のする方を振り向くとカレンを抱き抱えたルークがいた。

「っ!?!何があった!!」

「チツ。やられた。俺は大丈夫だか、カレンがレベルドレインを食らっちゃった」

「しくじったの……」

カレンのレベルが1に下がっていた。その時の詳しい内容を聞いた。

「くっ!!」

「カレン!!」

まずい!このままじゃ無限EKだ!

「おおおお!!」

俺はカレンの前に立ち、盾で攻撃を防いだ。

「ぐう!!」

「ルーくん!!」

「お前は……俺が守る」

チツ、流石神獣級エネミーだな。もう限界だ。
そんな時だった。意外な人物が助けてくれた。

「……………」

「グ、グリーンングランデ!？」

「ということなんだ」

「グランデの奴、どういうつもりなんだ」

「わからねえ。だが助けてくれたのは事実だ」

「大丈夫!？」

レイカーも逃げ切ったみたいだな。

「しよ、奨真君!？」

「みんなにも言っておくが一応ここではデュエルアバター名で頼む」

「す、すまん」

「……みんな聞いてほしい。今日限りでネガ・ネビュラスは解散する」

「なっ!?! どうしてだよ!?!」

「私はみんなを無限EKにしてしまいそうになった。私はマスター失格だ」

そう言って、ロータスは走って帰還ポータルに帰って行った。

「……本当にレギオンを解散させやがった」

ルークたちに聞くと所属レギオンが消えていたらしい。

「サツちゃん……」

「サツチ」

「サツチん」

「……とりあえず帰還ポータルに向かおう」

俺たちは一度帰還ポータルに向かって現実に戻った。

「……早く帰ろう」

俺は走って家まで帰って行った。

「ただいま」

家に帰るとまだ父さんたちは帰ってきてなかった。とりあえず楓子のところに行こう。

「楓子、入るぞ」

中に入ると、ベッドの上で座っている楓子がいた。

「楓子」

「………奨真君」

楓子に近づいて行くと、楓子が抱きついてきた。そして俺の胸の中で大声で泣いた。

「うわああああん!!!」

俺はそんな楓子を黙って見ることしかできなかつた。

理由はこんな時なんて言ってもやればいいのかわからないからだ。

こうして加速世界ではネガ・ネビュラス崩壊という噂が広がっていった。

第2章 新たなバーストリンカー

第1話 梅郷中

僕はニューロリンカーを使つて授業を受けていた。

すると僕のもとに一件のメールが来た。

僕は先生にバレないようにメールを見ると、いつものメッセージがきていた。

『ブタくん^①に今日のコマンドを命令する！焼きそばパン二個と、クリームメロンパン一個と、いちごヨーグルト三個を昼休み開始から五分以内に屋上まで持つてこい！チクつたらチャーシューの刑だかな！』

昼休みになり、僕は約束通り屋上に持つて行った。持つて行ってすぐに出ていけと言

われ、僕は一度トイレに行った。

「なんだよコマンドを命令つて！意味被つてんだよバーカ！つて言えたらなあ」

そんなことを嘆いているとトイレに誰かが入ってきた。

あれ？この人ここの制服じゃない。誰なんだろう？

「あの一！」

「……………ん？どうした？」

「えつと……………あなたはここの学校の生徒じゃないですよね。一体誰なんですか？」

今までの僕はこんなことを言えなかったかもしれない。けど、この人が誰なのかすごく気になった。

「君が知らなくて当然か。俺は今日一日だけこの学校に派遣されたんだ。主に雑用とか

だがな。つとまずは自己紹介だな。俺は橘奨真、高校一年だ。君は？」

「あ、有田春雪です！」

「有田君か……。覚えておくよ。それじゃ」

僕は橘さんの背を見送って、トイレの個室に入った。

「ダイレクトリンク」

僕はフルダイブし、ピンクのブタのアバターになった。

そのまま僕は走り出していくと、なにか騒がしい声が聞こえた。

この階段の上かな？

階段を一段ずつ上がっていくとそこにはとても綺麗な黒髪の蝶のアバターの人
がいた。

僕はその人に見惚れてしまった。暫く見ていると、彼女と目が合ってしまった。

焦ってしまい、僕は階段から転がるように落ちた。

「いてて……。綺麗な人だったな」

僕はもう一度走り出し、いつものゲームをするところに向かった。

「……………今のは？」

「姫？どうしたのですか？」

「……………すまない。少し席を外すよ」

「わかりました」

私はさっきのピンクのブタが気になってこっそり後を追った。

彼はこのゲームをしているのか？

っ!?! 凄い記録だ。

私は彼をずっと見ていた。

彼ならきつとあの世界でも活躍するのでは？ 賭けてみる価値はありそうだ。
そう思いながら私はその場を後にした。

「はあ……はあ……もう一回やろ」

「コラツ!!いつまでやってんのよハル!!」

「うわっ!?!ってなんだよチュかよ……」

「なんだよじゃないでしょ!せつかく呼びにきてやったんだから感謝してよね」

「俺はそんなこと頼んでないぞ」

「ふーん、そんなこと言うんだ」

なんか嫌な予感がするぞ……。

その予感は見事的中してしまった。

僕はチュに無理やりログアウトさせられた。

「いつてえ!!ってチュ!?!なんでここに!?!」

「無理やり呼び戻しにきたのよ」

「お前ここ男子トイレだぞ」

「別にいいの〜」

「お前な……」

俺とチユはトイレからでて、廊下を歩いた。

「ハルってお昼まだだったでしょ？だから、はいこれ」

「これってタクの余りかよ」

「違うよ。それにタツくんの学校は給食だし」

「……ごめん、いらないや」

「え？なんで？一緒に食べようよ」

「いらないうって言ってるだろ!!」

僕はチュが持っていたバスケットを振り払ってしまった。中のものは飛び出し、ぐちゃぐちゃになってしまった。

「っ!?!」

僕はその場から逃げ出してしまった。

「大丈夫？」

「……あなたは？」

「橘奨真。今日1日だけだけどよろしく」

「は、はい」

あの子さつきの子だよな……。なにかあったのか？
まあいい、とりあえず彼女の手伝いをするか。

「これでよし」

「ありがとうございます。あ、アタシは倉島千百合です」

「倉島……」

「えっと、アタシの苗字がどうかしたのですか」

「いや、君の苗字が俺の恋人と似てたからね」

「へえ、彼女さんがいるんですね」

「ああ、つとそろそろいくよ」

「は、はい！」

……せつかくここに来たんだし、久しぶりにあいつに会ってみるか。

「その前にここどこだ？」

第2話 日下部繪登場

「なんとか食堂に来れたな。ん？」

食堂の奥の席に黒髪ロングで見覚えのある女子生徒がいた。
俺はそいつに近づいていった。

「よう、久しぶりだな。黒雪姫」

会うのも久しぶりだが『黒雪姫』と呼ぶのも久しぶりだな。
けどここではこう呼んだ方がいいかもな。

「む、奨真君？なんでここに？」

「派遣だ。今日1日だけだな」

「あの……姫？こちらのイケメンさんは？」

イケメン？どこにいるんだ？

俺は周りを見たがサツチに話しかけているイケメンなんてどこにもいなかった。サツチを見ると、何故か呆れた顔をしていた。

（全く。自覚はないのか）

「えつと……あなたですよ」

「ん？俺か？」

「は、はい」

「こちらは私の友人の橘奨真君だ」

「橘奨真だ。黒雪姫と仲良くしてやってくれ」

「も、もしかして彼氏とかですか!？」

「ああいや俺にはもう彼女がいるから」

「そうだぞ。私たちはただの友人だ」

「そ、そうですか……」

「ああそうだ。黒雪、大事な話があるから少し直結しようか」

「うむ。構わないぞ」

俺はそう言うと、サッチはポケットから直結用ケーブルを取り出し片方を自分のニューロリンカーに付け、もう片方は俺に渡して来た。ケーブルを受け取り、自分のニューロリンカーに付けた。

『それで話とは？』

『お前まだデュエルアバターを封印してるのか？』

『あ、ああ……』

楓子の足の件とあの時の帝城のことをまだ気にしてるのか。

『はあ……まったく。いつまで逃げ続けるんだ。いい加減向き合えよ』

『それは……その……』

『まあ俺らはお前のことを待ち続けるから』

『………すまない』

また顔が暗くなつたな。まったく……。

『その、話は変わるが私はある人物に加速世界を紹介しようと思つてるんだ』

『ん？つてことは？』

『その人物を子にしようと思つてな。彼なら加速世界を変えてくれる気がするんだ』

『へえ。それは楽しみだな』

『そろそろ昼休みが終わるから教室に戻るよ』

『わかった』

俺は直結用ケーブルをニューロリンカーから外し、ケーブルをサッチに返した。

さて、仕事を再開するか。

放課後になり、俺の仕事も終わって駐車場に向かった。俺は自分のバイクに乗り、梅郷中の門を出て帰って行った。

家について、俺はバイクを停めて家に入った。

「ただいま」

「おかえりなさい」

リビングから楓子が出てきた。その後ろから誰かが出てきた。

「お、お邪魔してます…」

「綸か。今日は特訓だったのか？」

「は、はい…」

「今日は頑張って勝ち続けていたわ。この調子ならすぐにレベル2になるわ」

「へえ、いつか対戦して見たいな」

「が、頑張って強くなります！」

日下部綸。それが彼女の名前だ。綸は楓子の子であり弟子でもある。彼女は兄のニューロリンカーでブレインバーストを遊んでいるから彼女のアバター、『アッシュローラー』でいるときは兄の意識に変わるらしい。

「それにしてもアッシュローラーのときはバイクを乗り回すのに、リアルでは自転車も

「まともに扱えないなんてな」

「そ、それは言わないでください！」

「パフエクトミスマツチ完全不一致ね」

「し、師匠……」

「さて、外も暗くなってきたし、送って行くよ」

「あ、お願いします……」

「気をつけてね」

「ああ」

「お、お邪魔しました」

俺と繪は外に出て、俺はヘルメットを繪に渡し、ヘルメット被ってバイクに乗って繪を家に送って行った。しばらくバイクを走らせ、繪の家の前にたどり着いた。

「ありがとうございます……」

「ああ、じゃあな」

繪を家に送り終え、俺は家に帰って行った。

「ただいま」

「おかえりなさい。あ、そうそう。今日梅郷中に派遣されたんだよね。どうだった？」

「雑用ばかりだったよ。あとはあいつに会ったな」

「サツちゃんね……」

「なんか自分も子を持つらしいぞ」

「へえ。いつか綸とも対戦するのかしら？」

「インストール出来たらだけだな」

「ふふつ、そうね。さ、そろそろご飯が出来るわよ」

「そうか、父さんと母さんが帰ってくるのって明日だよな？」

「ええ。なんだか新婚さん気分ね」

「あ、ああ。さ、飯にしよう！」

新婚か……あと5年か。

俺はそんなことを考えながら飯を食べた。

飯を食べ終わって風呂に入ったが、今日も楓子が入ってきた。

なんかも慣れてしまった。そんな自分が怖いんだが……。

風呂から出て、寝間着に着替えて自分の部屋に入ってベッドに寝転んだらまた楓子が入ってきた。

「ふふっ。今日も一緒に寝よ」

「ああ、おやすみ楓子」

「おやすみなさい奨真君」

第3話 シルバークロウ

怖い夢を見た。あれはなんだったんだろう。

まあいいや。

そうだ、母さんに昼ご飯代を貰わなきゃ。

「母さん。昼ご飯代頂戴」

「うーん。ハル、リンカー切れてる」

あ、忘れてた。

僕はニューロリンカーをグローバルネットに接続して、昼ご飯代を貰って学校に向かった。

マンシヨンのロビーを出て道路に出ようとした時、世界が変わった。

「え？なんだこれ」

周りを見ると建物がたくさん壊れていた。

歩いて見るとガシヤンガシヤンとロボットが歩く音みたいなのが聞こえた。

手を、足を見て見ると銀色の装甲を身にまとっていた。

僕は思わず顔に手を当てると顔がヘルメットのようになっていた。

上を見ると格ゲーでよく見る自分と相手のHPと制限時間が表示されていた。

「シルバー……クロウ」

これが僕の名前なのか？

『イエーイ!!!』

僕は声のする方を見るとバイクに乗ったガイコツがいた。

「久しぶりの世紀末ステージだぜ!!行くぜええ!!オラオラオラオラオラ!!!」

あれって僕を狙ってるのか!!まずい!!相手は絶対に経験者だ!!どうすれば!!戦えばいいのか!!

ドカアアアアン
!!!!!!

「勝てるわけねえ!!!」

『ハハハハ!!災難だったな!』

『笑わないでくださいよ!! 本当に怖かったんですから!!』

『君がグローバルネットに接続したからだろう。私は言ったはずだぞ』

『うう……すみません』

『そうだ。せっかくだから君のデュエルアバターを見せてくれないか? 私に対戦を申し込んでくれ』

『ええ!?! 僕先輩と戦いたくないですよ!!』

『タイムアップでドロローにすればいい』

『わ、わかりました』

僕は先輩の言う通り、対戦を申し込んだ。

「あれ？先輩のアバターは？」

「ああ。私のデュエルアバターは訳あって封印しているんだ」

「そ、そうですか」

「これが君のアバター『シルバークロウ』か。いい名前だ。色もいい。フォルムも好きだ」

「でもなんだかザコっぽく見えるんですが……」

「そうか？私はそうは見えないぞ。君は今朝、アツシユローラーに負けたんだな？」

「は、はい。名前を見ると『アツシユローラー』って書いてました」

会話をしていると時間がなくなり、現実に戻ってきた。

『話を戻そうか。放課後、他のバーストリンカーに対戦を挑まれる前にそのアツシユローラーに対戦を挑むんだ』

『ええ!!今朝ボコボコにされたのに勝てる訳ないですよ!!』

『HPをゼロにしなくても勝つ方法ならあるぞ』

『え?それって?』

『まあ私の言う通りにすれば大丈夫だ』

『は、はあ』

僕と先輩は直結ケーブルを外して、昼ご飯を食べ始めた。

「姫、そろそろ教えてくれませんか?私たちは気になって死んでしまいそうです。この

子とどのような関係で？」

「うむ。簡単に言おうと、私が彼に告白して彼がフったのだ」

「へ？ええええええええ!!!」

「「「ええええええええ!!!」」」

「なんであんなこと言うんですか!!僕絶対またいじめられますよ!!!絶対ですからね!!!」
「私は事実を言ったまでじゃないか。それに君も満更でもなさそうだったぞ」

言いながら先輩は自分の仮想デスクトップを操作し、指先を弾く仕草を見せた。する

と僕のメールボックスのアイコンが点滅した。クリックするとカレーのスプーンを持ったまま、ポカンと間抜け顔を晒す自分の写真だった。

「ぎゃあああ!!!いつの間にとったんですか!!ていいうかなんでとったんですか!!」

「記念にな」

記念って……。

「もっと胸を張れ。私にフラれた男子は多くともその逆は君だけなんだぞ」

「いやいや!!そもそも僕そんなことしてませんしされてませんよ!!」

「ひどいな。また傷ついちゃうな。つとそんなことより、校門を出れば君のニューロリオンカーはグローバル接続される。接続されたらすぐにアツシユローラーに対戦を挑め。心配するな。私が教えた方法ならきつと勝てる」

「は、はい！頑張ります!!」

僕は意を決して校門を出て、すぐにアツシユローラーに対戦を挑んだ。

第4話 クロウvsアッシュ

「へいへいへーい!!!まさかテメエから挑んでくるとは思わなかったぜ!!」

(落ち着け。先輩の言う通りにすれば絶対に勝てる)

ハルユキは緊張して体が硬くなっていたが、深呼吸をし黒雪姫が言っていたことを思い出して落ち着かせた。

「そうそう!!今朝テメエに勝ったおかげでレベル2になったんだぜ!!俺様メガクール!!!」

「今朝と同じと思ったら大間違いだぞ!!」

「なら！俺様と踊れええええ!!!」

「まったくリアルと全然違うなあいつ。相手はシルバークロウか……。初めて聞くバーストリンカーだな」

「エイトも来てたのか」

「奨真が後ろを見ると観戦用ダミーアバター姿の黒雪姫がいた。

「まあな。あいつがお前の子か？」

「ああ」

「見た所特徴的なものはなさそうだな」

「それはわからんぞ。戦いで進化するのがバーストリンカーだろ？」

「ま、そうだな。とりあえず観させてもらおうか」

「はあ……はあ……このまま逃げ続ければ大丈夫だろ」

僕は先輩の言う通り先制でダメージを与え、高いビルの屋上へと逃げた。このまま逃げ続けてタイムアップで勝つという作戦だ。

「流石に登ってこないだろう」

そう信じて下を覗いて観た。するととんでもない光景が見えた。

「このキャラス野郎!!!!」

「ええええええ!!!!!!」

アッシュローラーがバイクに乗って壁面走行して登って来ていた。
そして屋上に来てしまった。

「レベルアップボーナスで何にするか悩んだが、必殺技も走行速度アップも蹴って壁面走行にしたんだよね、俺様大々正々解!!」

まづいまずいまずい!!!

「オラオラオラオラオラ!!!!もつともつと踊れえええ!!!!」

「うわあああああ!!!!」

に、逃げるだけでも精一杯なのにダメージなんか絶対に与えられない!!! どうすれば!!!
そうだ。これはゲームだ。なら何処かに必ず弱点があるはずだ。

よく見て観察するんだ。あのバイクの弱点を!!

「つ!?あれだ!!!」

頼む!一度でいい。動いてくれシルバーバークロウ!!あいつより速く!!

僕はアツシユローラーの突進をギリギリで避け、両手を伸ばし、ダメージを覚悟して
バイクの後輪を覆う黒いフェンダーの縁を掴んだ。

「オラオラオラ!!! テメエの貧弱な体で俺様のハイパーマシーンを止めれると思うなああ
!!!」

「ぐわああああ!!!」

足が痛い。摩擦して足の裏が焼けそうだ。でもまだ離すわけにはいかない。

まだだ。まだだ。

「ヒヤッハー!!! さっさと離れたほうがいいんじゃない!!」

「は、離すわけにはいかない!!」

「ならそのままHPが無くなるのを待つておくんだな!!」

まだだ。まだだ。

僕はチャンスはずっと待ち続けた。

待ち続けるとようやくチャンスがきたようだ。

「そこだあああ!!!」

アツシュローラーがアクセルをし直すために手を放した瞬間、僕は後輪を思い切り上にあげた。

「ぬおっ!?!」

後輪をあげたおかげでバイクは止まった。

「な!! 何いいいい!!!
!!!!!! 離しやがれこのキャラス野郎!!!」

「嫌だね! 悔しかったら前輪回してみろよ!」

後輪を持ち続けてようやくタイムアップになった。
対戦が終わってバーストアウトした。

「まさかアッシュがニュービーに負けるなんて……」

「私が教えた必勝法だ。なかなかやるだろ」

「ま、次はアッシュが勝つがな」

「それはどうかな？次もクロウが勝つさ」

「ふん。次が楽しみだ」

「じゃあそろそろバーストアウトするよ。それじゃあ」

「ああ」

サッチがバーストアウトして、しばらくすると後ろから一人のバーストリンカーが姿を現した。

まあ薄々感づいていたがな。

後ろを見ると真つ白のアバターがいた。

その人物は七大レギオンの白の王『ホワイトコスモス』だった。

「何で一緒に見なかった？」

「その……私がサツちゃんと一緒にいる資格は」

「ないって言いたいのか。まあ確かにないかもしれないが、それを本人に聞いたのか？」

「……………」

姉妹揃って頑固というか。面倒な姉妹だな。

「ま、あいつとどう接したいかはお前が決めることだ。俺は助言を言うだけだ」

「……………ありがとう」

「俺もそろそろバーストアウトするよ。サッチと話し合うんだつたらまずはレッドライダーのことを謝るんだな」

「うん」

「じゃあな」

俯いたコスモスから視線を外し、俺はバーストアウトした。

「どうだった？ 綸は勝ったの？」

「残念ながら負けちゃったよ。俺もそろそろ稽古をつけてやるかなー」

いつも修行は楓子に任せっきりだったし、そろそろ俺も稽古つけてやらないとな。アツシユもきつと今回の敗北がきつかけでもっと強くなりたがると思うし、繪も今頃悔しがってるだろうな。

「ふふっ。繪もきつと喜ぶんじゃない。奨真君のこと大好きだし」

「そうなのか？嬉しいけど、俺には楓子がいるからな。楓子以外の子とは付き合ったりはしないよ」

「ありがとう。私も奨真君以外の子とは付き合ったりしないよ」

俺たちはソファに座ったまま抱き合ってキスをした。
軽く触れるだけのキスだ。

「さ、そろそろお父さんとお母さんが帰ってくるわ」

「そうだな。あ、晩御飯の準備手伝うよ。父さんと母さんも疲れて帰ってくると思うからごちそうを作ってやろうか」

「ええ。頑張りましょう！」

俺と楓子はごちそうを作るために台所へ向かった。

晩御飯を作りながら俺は絵の特訓メニューも考えた。

第5話 黒雪姫の事故

長い出張から帰ってきた父さんと母さんにごちそうを作った翌日、学校が終わって放課後、俺と楓子と繪は『パティスリー・ラ・プラージュ』に来ていた。

「あの……なんでここに？」

「ん？今日から俺も繪に稽古をつけるから、その前にケーキを奢ろうと思ったんだ」

「え！ほ、本当ですか!？」

「そうよ。繪は昨日負けたから悔しがってると思ってる。そろそろ稽古をつけてやろうって言うってたわよ」

「師匠と愛真さんの特訓ですか……。が、頑張ります！」

「お待たせしました。苺のショートケーキ3つです」

「サンキューミャア」

俺がミャアと呼んだ人物はこの店の経営者『掛居美早』。

七大レギオンの二代目赤の王『スカーレットレイン』の右腕『ブラッドレパード』である。三獣士の第一位でもあるかなりの実力を持ったバーストリンカー。

「NP。これは当然のこと。ごゆっくり」

ミャアは厨房に戻っていった。

「はむ……おいしいー！」

「このケーキは本当においしいわね！」

「ああ、ここのケーキが一番美味しいな！」

「THX。そう言つて貰えると嬉しい」

「これは？」

「私からのサービス」

「えっと……私も貰つてもいいんですか？」

「NP。私はこの店の経営者」

「じゃありがたいがたく貰うわね」

俺たちはミヤアがサービスでくれた紅茶を口に入れた。

うん、美味しい。

ケーキを食べ終え、店を出た。

「また来るよ」

「THX。いつでも来てね」

「それじゃあね」

「ズッ、ズッ馳走様でした」

俺たちはミヤアと別れて、俺は駐車場に停めていたバイクを押して、三人で歩いた。すると楓子がおかを思い出したように俺に言った。

「そういえば今日の晩御飯のおつかいを頼まれてたんだった。奨真君先に帰ってて」

「わかった。綸もこの後何かあるか？」

「わ、私は兄の病院に行きます。もう病院の前ですし……」

横の大きな建物を見ると、そこには病院があつた。
ここに綸の兄貴が入院してゐるのか。

「そうか。じゃあ先に帰るよ」

「あ……今日の夜加速世界で！」

俺は楓子と綸と別れて、バイクを走らせた。

梅郷中の前を通り過ぎ、そのまま走っていると向かいの車線から車が暴走して横に突っ込んで来た。

俺は咄嗟に加速した。

「バーストリンク！」

今は車にAIが搭載されているから車が暴走するなんてありえない。

AIが壊れているか、AIを停止させたかのどちらかだろう。

ありえるとしたら後者だろう。

俺は突っ込んで来た車に近づくと、そこには見覚えのある人物がいた。

「サ、サッチ!？」

「奨真君!?! どうして!?!」

「バイクを走らせてたら突然車が突っ込んで来たんだ。だから俺は加速した」

蝶の姿をしたアバターのサッチとピンクのブタのアバターの人がいた。

「奨真君って……もしかして奨真さんですか!?!」

このブタの声どこかで聞いたような……あ!!

「有田君か!?!」

「奨真さんもバーストリンカーだったんですか」

「ああ、お前の子か？」

「そうだ」

「じゃあ君がシルバーバークロウか」

「は、はい」

「ってこんなことをしてる場合じゃないな。現実のサッチたちを見るとかなり危険な状況だ。」

「これは報いなのだろうな。人の心を弄んで来たからな」

「え……」

「奨真君。すまないがハルユキ君と二人で話したい」

「わかった。絶対に死ぬなよ」

「ああ。私を誰だと思っている」

「黒の王、ブラックロータスだろ。じゃあ、また後でな。バーストアウト！」

俺は現実に戻り、バイクのタイヤを横に滑らして、急ブレーキをかけた。あの車との衝突はなんとか避けることができた。

俺はバイクを降り、有田君とサツチのところに駆けつけた。

「っ!?!有田君!大丈夫か!」

「イテテッ。っ!?!先輩!!先輩!!」

「サツチ!!」

建物にもたれて大量の血を流したサツチがいた。俺は突っ込んで来た車の運転手のところに向かった。どうやら中学生みたいだ。年は有田君と同じか。

「ヒヤハハハハハ!!!ざまあねえな!!!この俺に舐めた口を開くからだ!!そのせいでお前の大事な先輩が死んじまったよ!!!」

こいつ狂ってやがる!!有田君に恨みがあるみたいだが、まさか殺そうとするなんて!!

「テメエ!!俺の大事な友達に何してるんだ!!!」

俺はそいつの顔面を右腕で思い切り殴った。右腕は義手だから殴った時変な音が聞こえた。倒れたそいつを見ると鼻が曲がっていた。

「イテエエ!!!」

曲がった鼻を押さえて倒れていたそいつは警官に無理矢理立たされ、パトカーに放り込まれた。俺はそれを見終わり、すぐに救急車を呼んだ。

「今救急車を呼んだ！もうすぐ来るはずだ！」

「あ、ありがとうございます!!」

「礼はいらん！君はそのままサッチと一緒にいてやれ」

救急車が来て、意識不明のサッチを中に入れて有田君も中に入っていった。俺はそれを見送り、バイクに乗って家に帰った。

第6話 ネガ・ネビユラス復活

「ただいま……」

「おかえりなさい。……どうかしたの？」

昼とは違う雰囲気気づいた楓子が俺の様子を伺ってきた。
でも俺はさっきの出来事を言っていないのかがわからなかった。

「いや、なんでもない」

「嘘、何かあったんでしょ。ちゃんと行って」

「……………はあ。やっぱり楓子には敵わないな。わかったよ、ちゃんと言うよ」

楓子に嘘は通用しないんだっとな。

もう本当のことを言おう。

「実は、サッチが突っ込んできた車に轢かれたんだ」

「え……………サッチちゃんか？」

「ああ」

「サッチちゃんが……………そんな……………」

楓子はサッチが轢かれたことを聞くと、涙を流しながら跪いた。

「明日、朝一に杉並の病院に行つて来る。きっと大丈夫だ」

「……うん」

翌日……

「じゃあ行って来るよ」

「気をつけてね」

「ああ」

玄関の扉を開け、バイクに乗って杉並に向かった。
アクセル全開だが安全運転で病院まで走った。

数十分後、杉並の病院に着いた。

俺はバイクを駐車場に停めてヘルメットをバイクにかけ、ロビーに向かった。

「ん？」

あれは有田君か？

もしかしてずっと待っていたのか。

なんか悪いことをさせてしまったな。さっさと行くか。

「あ！奨真さん！」

「有田君。ずっと待っていてくれたんだな。ごめん」

「いえ……僕がここにいたいからずつといたんです。きつと先輩も一人より誰かが近くにいる方がいいと思うから」

自分にかけていた毛布を畳みながら俺にそう言ってきた。

前までは少し怯えていたように見えていたが、今は少し違うな。

しつかりしてるといふかサッチのことを大切に思ってるというか……まあそんな感じかな。

今度は有田君は誰かに気づいたのか俺の後ろの方を見て手を振っていた。

「おーい！タクーー！」

俺もつられて後ろを見たがあいつからは何か嫌な予感がした。

有田君とあいつは知り合いみたいだが、サッチはあいつを知ってるのか？

いや、知らないはずだ。

なら何であいつはここに？

「フッ」

「!？」

嫌な予感が当たってしまったようだ。あいつの口元を見ると『バーストリンク』言おうとしていた。

「バーストリンク！」

俺はすぐにあいつに対戦を挑もうとしたが、そもそも名前がわからなかった。でもそんなことはすぐに解決したようだ。

俺が対戦を挑もうとしなくても彼が挑んでくれた。なら俺は観戦でもしようか。

煉獄ステージみたいだな。見晴らしのいいところはどこだ？

「こちらが空いてますよ」

「ありがとう」

俺は近くにいたバーストリンカーに席を教えてもらい、建物の屋上の端に腰をかけた。

親切なバーストリンカーだな。

確かにここならよく見える、ええつと『シルバークロウvsシアンパイル』か……。

あれがあいつのデュエルアバター。

近接の青か。

そういえば席を教えてくれたバーストリンカーは一体……。

「つてお前かよ、コスモス」

「どうも」

「サツチが意識不明ってことも知ってるのか。まあ知ってなかったらこの近くにいないか…」

「正解ですよ」

「折角だし、リアルでも会ってこいよ」

「ううん」

「まだ会えないってか。ま、そんなことは後にして対戦を見るか。喋ってるうちに結構進んでるみたいだしな」

『スパイラルグラビティドライバー！』

シルバークロウはシアンパイルの必殺技をまともにくらい、建物の底に落ちていつ

た。

「勝負ありましたね」

「いや、まだ決めつけるのは早い。何が起こるかわからない。もしかしたらパワーアップして戻ってくるかもしれないだろ。戦いで進化するのがバーストリンカーだ」

「でも流石にあれをまともにくらえばおしまいだと思いますけど……」

確かに俺から見てもそう思う。

だが同時にまだ何かあるかもしれないとも思う。

どっちが一番ありえると聞かれると、俺は何かあるかもしれない方に賭ける。

シルバークロウが落ちていった穴を見ていると、突然何か光の速さで飛び出してきた。

「!?まさか……本当に!!」

「戦いで進化するのがバーストリンカーだって言ったる」

光の速さで飛び出してきたものを見ると、銀翼の翼を生やしたシルバークロウがいた。

「つてあれは飛行アビリティ!?」

「飛行アビリティだと……レイカー以外のやつで飛べるやつなんて初めて見たな」

「わ、私もです」

シルバークロウはシアンパイルに急降下していった。

同時にシアンパイルも必殺技で対抗しようとしていた。

だが必殺技は避けられ、シルバークロウの攻撃を受け、宙に浮いた。どうやら決着が着いたみたいだな。

「す、すごいですね。まさか勝っちゃうなんて」

親友同士の本気のぶつかり合いか……。

昔の俺と楓子みたいだな。

「お前もあいつらを見習ってサッチと本気でぶつかれよ」

「え！でもレベル9同士だとサドンデスに……」

「加速でじゃない。現実でだ」

「……そうね。いつまでも逃げてちやダメだもんね。私も今度サッチちゃんに会うわ」

「ま、頑張れよ。ん？」

下がなんか騒がしいな。すると今度はシルバークロウが黒く尖ったデュエルアバターを抱えて空高く飛んできた。

よく見るとお姫様抱っこだな……。

「聞け、六王の、レギオンに連なるバーストリンカーたちよ!! 我が名はブラックロータス!!」

ロータス。

意識が戻ったんだな。

このことを楓子にも伝えてやらないとな。

「我と、我がレギオン『ネガ・ネビユラス』、今こそ雌伏の網より出でて偽りの平穩を、破らん!! 剣を取れ!! 炎を掲げよ!! 戦いの時来たれり!!」

ネガネビユラスの復活か。

また加速世界が騒がしくなりそうだな。

これも全部あのシルバークロウのおかげか。

「ネガ・ネビユラス……」

「どうした？まさかいつかネガネビユラスvsオシラトリ・ユニヴァースでもやりたいとでも思ってるのか」

「ううん。そんなことは思わないよ。サツちゃんかネガネビユラスを復活させてよかったって思っただけ」

「そうか。そろそろバーストアウトしようか」

「ええ」

「バーストアウト！」

第3章 動き出す者たち

第1話 ホワイトコスモス

俺は今、同い年の女の子に校舎裏に連れてこられていた。

この後何を言われるのかは大体予想できた。

「あ、あの！前から好きでした！私と付き合ってくださいー！」

やっぱりか……。これで何回目なんだよ。俺には楓子がいるのにもう……。

「気持ち嬉しいけど、俺には楓子がいるから」

「あら？奨真君？何してるの？」

グッドタイミング。

楓子が来てくれて助かった。

これで本当に付き合ってることを証明できる！

「く、倉崎さん！」

「楓子。実はこの子に告白されて」

「そうなの、ごめんなさい。奨真君と私はもう恋人同士だから」

「ほ、本当に付き合ってたなんて……。スタイル抜群で美人。か、勝てるわけないよー
！」

あの子は泣きながら猛ダツシユで立ち去っていった。

あの子を見ているとなんかかわいそうに見えた。

確かに楓子は美人でスタイル抜群だし……。

「奨真君？私の体をジロジロみてどうしたの？」

「え!? ああいやあの子が言ったように楓子は美人でスタイル抜群だなんて思ってた……」

「あら、ありがとう。じゃあご褒美として今日は私を抱き枕にしてもいいわよ」

「じゃ、じゃあ喜んでそうさせてもらおうよ」

「ふふっ」

俺は楓子を今日一日抱き枕にするという男子からしたら最高な約束をして、学校から出た。

「それにしても本当に奨真君はよく告白されるね」

「本当だよ。学校でよく楓子と一緒にいるのになんでなんだろうな」

「いつそのことみんなを集めて私たちは付き合ってるってことを証明したら?」

「例えば？」

「みんなの前でキスをするとか。ただのキスじゃなくて濃厚な」

「そ！それは流石に……」

「ふふっ、冗談よ」

よかった。

そんなこと学校でできるわけない。

一生恥ずかしい思いが残ってしまう。

「ん？」

「奨真君？」

前から歩いてくる白い制服を着た女の子に目がいった。
俺はあの子を知っている。

あの子を見ているとむこうも気づいたようだ。

「よ、白雪姫」

「どうも。こんにちはは奨真さん」

「えっと。この子は？まさか浮気！」

「違う違う！この子は白雪姫。バーストリンカーだよ」

そう。この子はバーストリンカー。

デュエルアバターはホワイトコスモス。

サツチの実の姉である。

「白雪姫です。デュエルアバターはホワイトコスモスです」

「ご丁寧にも。私は倉崎楓子。デュエルアバターはスカイレイカーよ」

「白雪はサッチの実の姉でもあるんだ」

「え!?! そうなの!!」

「は、はい」

「それにしても本当に白が好きだな。サッチは黒で白雪は白。まるでオセロだな」

「小さいときよく言われました」

「はは、どこか出かけるのか?」

「いえ、今帰ります」

「そうか。止めて悪いな」

「いえ、それでは失礼しますね。奨真さん、倉崎さん」

「ああ」

「ええ」

俺と楓子は白雪の背中を見送って歩き出した。

「それにしても奨真君が白の王とリアルでも知り合いだったなんて。いつ知り合ったの？」

「ネガ・ネビュラス崩壊の時だな。崩壊した後、俺はレッドライダーのことで疑問に思っていたことがあったから白の王に会いにいったんだ」

「疑問？」

「あの時他の王はサツチに襲いかかった。けど白の王だけは攻撃しなかった。それだけじゃない。あの時の彼女は頭を抱えていた。だから俺は彼女に会いにいった」

「それで、何を話したの？」

「理由を聞いたたら、『攻撃しなかったんじゃない。本当はあの子を守りたかった。でも体が動かなかった。自分のせいであの子に酷いことをさせてしまったのに』って」

「自分のせい？」

「そのことに関しては教えてくれなかったな」

「そう…」

そろそろ暗くなってきたな。早く帰るか。

「早く帰ろう。日が暮れてきた」

「ええ」

「ただいまー」

あれ？まだ帰ってきてないのか？
すると俺のニューロリンカーにメッセージがきた。

母さんからか。

『今日は父さんと母さん仕事で帰ってこれないから。ご飯は適当にやって』

仕事か……。

「今日父さんと母さん仕事で帰ってこれないってさ」

「わかったわ。じゃあ今日は私が作るね」

「サンキュー」

夜になり、楓子が作った晩御飯を食べて、食器を洗って風呂に入り、リビングでゆっくりしていた。

あ、そうだ。

「楓子」

「何ー?」

俺は楓子を隣に座らせ、俺は楓子に抱きつき、ソファに押し倒した。

「キャツ! 奨真君?」

「今日は俺の抱き枕になってくれるんだよな」

「ええ。思い切り私を抱きしめて」

俺は楓子を抱きしめたまま、楓子の胸の中で眠った。

第2話 甘い2人

「ん……」

むにっ

「ん……何だ……これ？」

俺は寝ぼけながら体を起こし、手で触っている柔らかいものに目を向けた。
柔らかいものの正体が楓子の胸だった。

「わあああああああ
!!!!!!」

俺は咄嗟に手を離した。

楓子はまだ寝ていたが今ので起きてしまった。

「ううん……………奨真君……………大きな声出してどうしたの？」

「いいいいいや何でもない!! って楓子!! 服!! 服!!」

胸を触ってしまったことはバレてないが、体を起こした楓子は服がかなり乱れていて、肌が露出していた。

「服がどうかしたの？」

「乱れてるから早く直してくれ！」

「あら、本当ね」

楓子は乱れた服を直していった。

今何時だ？

「7時か。学校までまだ時間があるな」

「そうね。奨真君昨日はちよつと損したんじゃない？」

「何で？」

「だって1日抱き枕よ。エッチなことをしてもよかったのに」

「んなことできるか。俺らまだ高校生だぞ」

「なら高校を卒業したらしてくれる？」

「しまった……。まあでも大人になればいつかはするんだし……。

「はあ……。その時はその時だ」

「ふふっ。じゃあ楽しみにしてるわね」

「さ、さあ早く朝ご飯にしよう」

飯だ飯だ。

「準備できたか？」

「ええ」

俺と楓子は家を出て、鍵を閉めて学校に向かった。

「そういえば朝起きる前胸を触られてた感じがしたけど」

やばい……。このままじゃバレる！

「た…多分自分で触ってたんじゃないか！ほら！寝ぼけてたとか！」

「んーそうね。きつと寝ぼけてたのね」

ホッ。

よかった。

何とかバレずに済んだかもな。

安心してると急に楓子が俺の耳元に顔を近づけ、何か言った。

「触りたかったらいつでも触っていいからね。奨真君になら触られても平気だから」

「へっ？」

思わず間抜けな声を出してしまった。

楓子を見ると走って先に進んでいた。

俺はしばらくその場に立ち尽くしてしまった。

「……………バレてんじゃねえか」

「奨真君！早く早く！」

「ああー！」

俺は微笑みながら楓子の後を追っていった。

楓子のところに追いつき、手を繋いで一緒に並んで歩いていった。

「いつから知ってたんだ」

「ふふっ奨真君が声を上げる前から」

「最初からかよ……」

まさか最初からバレてたなんて、隠そうとしていた自分が恥ずかしく感じる。そんなことを考えているとニューロリンカーにメッセージが届いた。

俺は指でメッセージボックスを押すと、サッチからのメッセージが来ていた。

「どうしたの？」

「サッチからメッセージが来た。えーと何何？」

放課後……ハルユキの家

ハルユキside

「二二アンリミテッドバースト！」「二二」

僕はその言葉を口にし、加速した。

「ここが無制限フィールド。リアルの地形と一緒？」

「それは対戦ステージでもそうだよハル」

「ハルユキ君。自分のHPのところを見てくれ」

「ええと、あ！制限時間がない！」

「そうだ。だから無制限フィールドなんだ」

ならここでもいらくらでもいることができるってことか！

「さて、そろそろ行こう。あいつも待ってるだろうしな」

「あいつ？」

「マスター。その人はいったい？」

「行けばわかるさ」

行くっていつてもこの人数で飛べるかな……。

飛べたみたいです。

タクが僕の足を肩に乗せ、ニコが背中、先輩が僕の腕の中。
正直かなりしんどい。

「そろそろ目的地だ」

「じゃあ降りますね」

ゆっくり下降していき、タクが足を離して僕は足で地面につけた。

「ここなのか？」

「ああ。ここで待っていれば災禍の鎧は来るはずだ」

「よし！降りるぞ」

僕らは大きなクレーターの中に入り、中央に向かった。
すると誰かが立っているのが見えた。

「誰かいますね」

「あいつが私たちを待ってくれてた強力な助っ人だ」

「来たか。ロータス」

「!? ブラウンクリエイト!!」

「え!? まさか……本物!!」

え?え?あの人はいつたい?

「ハル!あの人はブラウンクリエイト。レベル8のバーストリンカー。無限の剣製の二つ名を持つてる人だよ!」

レベル8!?確かに凄いきどたくがそんなに興奮するような人なのか?

「ハルユキ君。彼は君もよく知っているよ。エイトは橘奨真君だ」

「え?ええ!?!」

奨真さんのレベルが8!?

第3話 意外な助っ人

「奨真さん!？」

「ロータス。ここでリアルネームはNGだ。ちゃんとデュエルアバター名で呼んでくれ」

「あ、ああすまない」

「ここに他の奴がいたらどうするんだよ。
ん?」

「シアンパイル。ネガ・ネビユラスに入ったのか」

「は、はい!」

「……そうか。もう問題を起こすなよ」

「はい……」

「ええとここではなんて呼べば……」

ああそうだった。

旧ネガ・ネビユラスのみんなや一部の者以外俺のことをなんて呼べばいいか言っ
てな
かったな。

「俺のことはエイトって呼べばいい。クリエイトなんて言いにくいだろ」

「わかりました！」

「で、黒いの。エイトを呼んだのはお前か？」

「ああ。強力な助っ人も必要かと思つて頼んだんだ」

「レイン、もうすぐで来るんだよな。『クロムディザスター』が」

「そのはずだ」

災禍の鎧を待っているとは何故か俺たちの周りが囲まれていた。

まあこんなことをする奴なんてあいつ以外いないか。

「お前が仕組んだのか!! イエローレイオ!!」

「お久しぶりですねえ。黒の王、二代目赤の王。さあお前たち!! あいつらを始末しろ!!」

レイオが命令して他のバーストリンカーが襲いかかつて来た。

必殺ゲージを溜めておいて正解だったな。

「数が多すぎる！」

「来い！インビンシブル！！」

「くっ！ライトニングシアンスパイク！！」

「デスバイピアーシング！！」

まだ使うには早いな。

あれも時間制だし。

俺は背中中のバスターソードを手に取り、構えた。

「油断するな！相手はあの無限の剣製だ！！一斉にかかれ！！」

10人以上のバーストリンカーが全方位から一斉に飛びかかってきたが俺は剣を重ねて、上のやつを攻撃して高く飛び上がった。

あいつらから少し離れたところに着地し、俺はブースターレッグを装備して突っ込ん

だ。

「はあ！」

ザシユツ！

「ぐあああああ!!」

「やつを止めろ！」

「ダメだ！止まらない!!」

俺は襲いかかってきたバーストリンカー全員を斬っていった。

「ふう……。呆気なかったな」

「やはり強いですね。ブラウンクリエイト。でも今度はそうはいけませんよ!!」

まだまだいるみたいだな。
ならそろそろ使うか。

「くたばれえええ!!!」

「u^アn^ンl^リi^ミm^テi^ッt^ドe^ド b^ブl^レa^イd^ドe^ド w^ワo^クr^クk^スs!

俺は必殺ゲージを全て使いきり、無限の剣を作る結界を作り出した。
結界はクレーター全体に貼ることができた。

「やつに剣を握らせるな!!」

「うおおお!!」

「遅い!!」

劍を吸い寄せ、突っ込んできたバーストリンカーを斬りつけた。

「「まだまだ!!」」

「はあ!!」

俺は相手を斬る度に劍を吸い寄せ、新しい劍を作っていた。

「ぐああああ!!」

っ!?今のはパイルか!!

まずい!無限PKになっちゃおう!

頼む!早く来てくれ!!

「タク!!」

「ぐっ!くそ!!離れろ!!」

「ニコ!!」

「クロウはパイルを頼む!!ロータス!!一緒にレインを助けるぞ!!」

「は、はい!!」

「ああ!!」

「どけ!!」

俺は他のバーストリンカーを蹴散らし、レインのもと向かった。

結構な数だな。

結界の時間はあと少しか。

俺は剣を吸い寄せ、レインに群がっているバーストリンカーたちに投げつけた。

ザシュツ!!

「ぐああ!!」

「す、すまねえ助かった」

「油断するなよ。ロータス。お前はレディオのところに行け！」

「ああ！デスバイピアーシング!!」

クロウたちは大丈夫か？

クロウのところに行くとかかなり苦戦していたみたいだ。

「クロウ！一旦離れろ!!」

「でもタクが!!」

「巻き込まれたくなかったら離れろ!!」

「わ、わかりました!!」

俺はブースターレッグで一気に近づき、高速回転をしてカマイタチを作った。

「ストームソード!!」

「お前たち一旦離れろ!!ひっ!」

ロータスがレディオのところまで行ったようだな。

「初めて会った時からお前のことが大嫌いだったよ!!」

「くっ!!」

敵の数もかなり減ってきたな。

そろそろあれを使うか。

「デュアルクロス!!ガンブレード!!」

二つのバスターソードとショックリボルバーをデュアルクロスしてガンブレードを作った。

同時にあいつも来たみたいだ。

「リザレクト・バイ・コンパッション！」

「うう…。あれ、まだ1時間経ってないはずじゃ」

「すぐに構えなさい。来ますよ」

「「!?!」」

「遅いぞコスモス」

「すみません。道に迷ってしまって」

「ホワイトコスモス!!何故ここに!!」

「ロータス!今は私のことは気にせず、目の前の敵に集中しなさい!!話は後でするから
!」

「わ、わかった…」

俺はここに来る前にホワイトコスモスに連絡しておいた。
理由は助っ人つてのものもあるがロータスと仲直りさせるためだ。

「エイトさん。この人は?」

「純色の七王の一人、白の王ホワイトコスモスだ」

「「ええ!」」

「お、おいエイト！どういことだよ！！なんで白の王がここに来るんだ！！」

「助っ人だ」

「おしゃべりはもうおしまいです。来ますよ！」

「白の王が来たからどうした！！俺たちはまだまだいるんだ！！かかれ！！」

俺たちは一斉に構えて襲いかかってきたバーストリンカー全員を相手にした。

第4話 クロムディザスター

「ヘイルストームドミネーション!!」

「ストームソード!!」

「スパイラルグラビティドライバー!!」

「ヘッドバット!!」

「ベネディクト!!」

俺たちは必殺技を一齐に放ち、周りの奴らを一掃した。
ロータスとレディオも凄まじい対決をしていた。
その時にあいつが現れた。

「デバイスバランキング!!」

「フュータルフォーチュン……っ!?」

「[[[[[?!]]]]」

赤い大剣がレディオの体を貫いた。

この嫌な感じはあいつしかない!!

「おいレイン!! どういうことだ!! あいつが来るには早いだろ!!」

「わからねえ!! あいつが来るにはまだ時間があったはずだ! なのにどうして!!」

俺たちは考えたが何故ここにあいつがこんな早く来れたのかわからなかった。だがクロウが何かわかったみたいだった。

「電車の中で加速したんだ!!」

なるほど。

それならあいつが早く来れるのもわかるな。

レディオを見るとまるで手品のように煙幕を作って、クロムディザスターから遠く離れたところにワープした。

「くっ、お前たち撤退だ!!」

レディオは撤退命令を出したがクロムディザスターはそれを逃さなかった。
黄のレジオンのみんなを襲い始め、捕食し始めた。

「ぎゃああああ!!」

「ひいひいひい!!」

「に、逃げろ!!」

このままじゃあいつの思うつぼだ!!

早くあいつを止めなきゃ!!

俺はクロムディザスターに突っ込み、ガンブレードを振り下ろした。

「ぜやああああ!!!」

ガキンツ

装甲が硬すぎて腕を斬るどころか傷一つつけることができなかつた。

だが少しでもダメージを与えたはずだ。

俺は一旦離れようとしたがクロムディザスターに腕を掴まれ、噛みちぎられてしまった。

「がああああ!!!」

「「エイトさん!!」」

「畜生!!ヘイルストームドミネーション!!」

レインがインビンシブルでクロムディザスターに攻撃して煙幕を作り出し、その隙にロータスが助けに来てくれた。

「大丈夫か!!エイト!!」

「あ、ああ。腕一本くらいどうってことはない。さて、黄のレギオンは退却したみたいだし、俺たちも本気で行こうぜ」

「わかった!」

俺とロータスは剣を一本に集中させ、一気に攻撃を放った。

「ヴオーパルストライク!!」

俺の片手剣だけの心意技だ。

ここに心意技を知らないやつはクロウとパイルだけだ。

二人にはいつか教えるつもりだったしちちょうどいいだろう。

「エイトさん!今のは……」

「このことについてはまた後日教える!!」

「は、はい!」

第5話 激闘は終わり、そして

「もういつちよいくぞ!! ヴォーパルスドライブ!!」

俺はさっきのヴォーパルスドライブとは違い、クロムディザスターに猛突進していった。

貫くことはできなかったが体の横に傷つけることができた。

「グオオオオ!!」

「くそっ!! 逃げるぞ!!」

「ハルユキ君!!」

「ハル!!君の翼が頼りだ!!」

「俺も行く!!クロウ!行くぞ!!」

「は、はい!!」

「デュアルクロス!!ジェットレッグ!!」

俺はジェットレッグで飛び、クロウは翼で逃げて行くクロムディザスターを追いかけた。

クロムディザスターは手からロープのようなものを壁にくくり付け、逃げていった。くそっ!どうすれば捕まえられる!!

ロープ……!?!?そうか!!

「クロウ!!あいつが次ロープを出した時ロープを自分にくくり付けろ!!そしてあの塔の上まで行け!!」

「はい!!」

(奨真さんの言う通り、ロープを出した時に自分にくくり付ければいいんだな。一度でいい!もつと速く!!)

「今だああああ!!!」

クロウはクロムデザイナースターよりも速く飛び、あいつが出したロープを自分にくくり付けた。

そして塔の上まで上がっていった。

俺も続いて上に飛び、クロウのところまで追いついた。

「今だクロウ!!ロープを切れ!」

「はい!!ぜやああ!!!」

クロウがロープを切り、クロムディザスターは下に落ちていった。
俺とクロウは落ちていくクロムディザスターに急降下して俺は片手で剣を突き刺し、
クロウは拳を腹に食い込ませた。

『僕は……強く……なりたいんだ。それだけなんだ……』

クロムディザスターの本体が出てきて俺たちにいった。

『君なら……わかってくれるよね？君も…力が欲しいんだろ……？』

「だからって何をしても許されると思ってるのか!!」

「そんなものを使っても本当の強さなんか手に入らない!!強くなりたなら例え何年か
かっても地道な努力が必要だ!!お前はそれを辞めたんだ!!」

「!!」
「!!」

クロムディザスターは勢いよく地面に激突し、地面が凹んだ。鎧はもう原形を留めれていない。

「ありがとな。あとは任せてくれ」

レインはそういつてクロムディザスターに近づき、とどめを刺した。

「終わったのですね」

「ああ」

「エイト！そろそろ話してもらおうか！何で白の王がここにいるんだ！」

一難去ってまた一難か……。

でも俺は二人を仲直りさせるきっかけを作ったわけだし。

「エイトさん。私が自分で言いますわ。ロータス……私はあなたにどうしても言わな

きやならないことがあるの」

「何だ……」

「許してとは言わない。けどこれだけは言わせて。あの時は本当にごめんなさい」

「っ!?今更!!私はお前のせいであんな目にあっただぞ!!」

「信じてとは言わない!あれは私のせいでもあつて私の本心ではないの!!」

「どういうことだ!!」

「私は操られていたの……」

「お前が言いたいのはそのような能力を持ったバーストリンカーがいるということか」

「そうです。そのバーストリンカーは加速研究会に所属しています。そして私はその事

実を知り、加速研究会会長を降りた。そしてあの事件が起き、私はロータスを守る事ができなかった」

「なら黒幕はそいつか。そいつの名前は？」

「確かグレーマインドでしたわ。ブラックバイスがスカウトしたらしいですわ」

「じゃあ私は今までその確認もせずに勘違いをしていたのか……」

「あなたは悪くないわ。全部私のせいなの」

「いや、これは私のせいでもある」

「私のせいなの」

なんかめんどくさくなってきたな……。

「ああもう！どっちも悪かった！これでいいだろ！ほら！仲直りの握手！」

「い、ごめんなさい」

やっと仲直りしたか……。

「これからは空いた時間を少しずつでいいから埋めていけよ」

「ああー！」

「ありがとうございます！」

姉妹喧嘩が終わると同時に変遷が来たみたいだ。

「さて、帰るか」

「エイトさん！今度エイトさんのこともっと教えてください！」

「僕も！」

「アタシも知りてえな！」

「レインは知ってるだろ……」

エイトさん……いえ、奨真さん。
本当にありがとうございます。

ドクンッ

あれ？何だろう。なんか奨真さんのことを考えると体が熱く感じる。

「っ!?!もしかして……私……奨真さんのことが……」

「姉さん？」

「っ!?!いいえ何でもないわ!」

どうしようどうしようどうしよう!!

奨真さんのこと好きになってしまったわ!!

第6話 孤児院

あきら side

ここに来るのも久しぶりなの。

いつもはびやーくんがバイクで会いに来てくれたからこっちはたまにしか来なかった。

あ、まだ言っていなかったの。

私はびやーくんが暮らしている孤児院に来ているの。

びやーくんは生まれてすぐに親を亡くし、ここに引き取られたって聞いたの。

しよーくんも親を亡くし、フーコの養子になったって聞いたの。

話はこれぐらいにしてそろそろインターフォンを押さなきゃ。

ピンポン……

『私出るー!』

私がインターフォンを押してすぐに誰かが出て来た。
声で誰かわかったけど…。

「あつー!あきららお姉ちゃんだー!」

「美^{みな}奈。久しぶりなの」

「え!!あきららお姉ちゃん来たの!!」

「本当だ!!あきららお姉ちゃんだ!!」

美奈に続いてぞろぞろと出て来た。

そしてこの孤児院の院長さんが出て来た。

「お久しぶりです、あきらさん」

「お久しぶりです」

「どうぞゆっくりしていつてください。あなた達。あきららお姉ちゃんを案内してあげて」

「「はーい！」」

私は子供達に案内してもらい、孤児院のリビングに入った。

「今日も白夜お兄ちゃんに会いに来たの？」

「そうなの、でも今日はびゃーくんに来ることは言っていないの」

「じゃあ今から呼んでくるね！」

美奈がリビングから出て行き、ドタドタと階段を上がっていく音が聞こえた。

私は荷物を置いて、座布団の上に座ると寿也君としやが話しかけて来た。

「ねえねえ！あきらお姉ちゃんは白夜お兄ちゃんと付き合つてどれくらい経つのか？」

懐かしいな。

ネガ・ネビユラスのみんなが集まった時、私はびやーくんに一目惚れして思い切つて告白しようとしたらびやーくんも告白して来たから本当にびっくりした。

「3年ぐらい経つの？」

「デートはどれくらいしたの？」

「数えられないくらいしたの？」

「ちゅーは何回した？」

「え、ええと……」

こ、これはさすがに答えづらい質問なの……。

寿也君は調子に乗るところいうことをぐいぐい聞いてくる。

「コラッ！ 寿！ あきららが困ってるだろ！」

びゃーくんが二階から降りて来て、寿也君の頭に軽く拳骨を下した。
寿也君は少しだけ痛そうにしていた。

「痛いよー！」

「お前が悪い！ ごめんなあきら」

「ううん、気にしなくていいの」

「そっか。それより急にどうしたんだ？」

「たまにはここに来たいと思ったの。それと今日はびやーくんを驚かせようと思って来たの」

「急に来たからびつくりしたよ。でも、寿也と美奈、香奈かなも嬉しそうだな」

「あきらお姉ちゃん！いつもの膝枕してー！」

香奈は私の膝枕がお気に入りみたいで、私が来る度にこうやって膝枕をお願いして来る。

「いいよ。ほらっ」

私が膝を叩くと香奈は私の膝に頭に乗つけた。

「んー気持ちいい」

「ふふっ」

「ねえねえ！この荷物何ー？」

「そういえば凄い荷物だな」

忘れてた……。

私は横に置いていた荷物の中からあるものを取り出した。

「それは？」

「みんなの分のお昼ご飯なの」

私を取り出したのは大きなお弁当箱。

3年前は料理なんか全くしなかったけど、付き合い始めてから料理をするようになった。

「よし！そろそろ昼飯の時間だしあきらが作ってくれた弁当を食うか！お前ら準備を始

めるぞー！」

「「はーん」」

びゃーくんはみんなを連れて、準備を始めに行つた。

「白夜君はよく動いてくれてとても助かるわ」

「びゃーくんはこの孤児院の中で最年長ですもんね」

「ええ、他の子達の面倒も見て大変なのに私たちの手伝いもしてくれるから」

びゃーくんは子供達の面倒を見て院長さんの手伝いもして、さらに今通っている高校の勉強もしている。

もちろんブレインバーストも。

始めてここに来た時、それらを全て行なっていたのを見たときは超人だと思った。

実際超人だけ……。

「あきらー。準備出来たぞー！」

「あ、うん！院長さんもどうぞ食べてください」

「ありがとうございます」

私はお弁当箱を全て取り出し、机の上に置いて蓋を開けた。

中には焼き魚を食べやすいように小さく切ったものや唐揚げ、サラダ、などちゃんとバランスのとれた料理を入れていた。

「「「「いただきます！」」」」

お箸を手に取り、みんな食べ始めた。

「美味しいな！この唐揚げどうやって作ってるんだ？」

「それは……秘密なの」

さすがにびやーくんにも味付けは教えられないの。
ごめんね。

「おいしい！」

「うめえ！」

「私もこんなおいしいものを作れるようになりたいな！」

「大きくなったらきつと作れるの」

「こんなおいしいものはそう簡単に作れませんよ。たくさん作っただんですね」

「びやーくんにおいしいものを作ってあげたかったので」

最初は何度も失敗したの。

ミヤアにも手伝ってもらってやっとおいしいものを作れるようになった。

「あれ？びやーくん頬にご飯粒がついてるの」

私はびやーくんの頬についたご飯粒をとり、それを食べた。

食べた後びやーくんを見ると何故かびやーくんは顔を赤くしていた。

「どうかしたの？」

「ふ……いや……」

びやーくんはそう言ってまた食べ始めた。

私も早く食べちゃおう。

お弁当を食べ終えて、私たちは片付け始めた。

「美味かったよ。じゃああきら、上に行くか」

「うん」

私とびやーくんは二階に上がり、びやーくんの部屋に入った。

私はベッドに腰掛け、びやーくんは椅子に座った。

「そういえばこの前用心棒バウンサーの仕事があつたんだよな。どんな奴だった？」

「あのシルバークロウだったの。安全マージンを取らずにレベルアップしたせいで全損危機だったらしいの」

「ははは！リアルで見て見たいな！」

「私はリアルで見たの。まさかあんな感じでリアル割れするなんて思わなかったの」

「どんな感じだったんだ？」

「カフェでぶつかった時に、タブレットを落として彼の写真を見られたの」

その前に胸を触られたけどこれを言うたびやーくんは暴走してしまいそうなので言わないでおこう。

「あらら。シルバークロウって新生ネガ・ネビュラスに入ったんだよな。お前はまだ入らないのか？」

「まだエレメンツが集まるのは早いと思うの」

「そっか…」

「びゃーくんの方こそまだ入らないの？」

「悩むな…。ま、俺もまだかな。でも」

びゃーくんは立ち上がり、私の隣に座って抱き寄せた。

「っ!？」

「お前がネガ・ネビユラスに戻る時は俺も一緒だ」

「びゃーくん」

「あきら」

私たちの顔は少しずつ近づいていった。

私は目を閉じてびやーくんの唇と私の唇を重ねた。

しよーくとフーコもよくしているけど、ラブラブ度なら負けないの。
しばらくして唇を離れた。

それからはお互いの学校の話やブレインバーストのことを話した。
時間のことを忘れて話していたから外はかなり暗くなっていた。

「そろそろ帰るね」

「おう！また遊びに来いよ！」

「あきらお姉ちゃんまた来てね！」

「その時はまた膝枕してー！」

「おいしいご飯も食べたい！」

「また遊びに来るの。お邪魔しました」

私は歩いて駅まで行き、電車に乗って家に帰った。

家の中に入り、洗い物をしてからお風呂に入り、ベッドに寝転んだ。

「ネガ・ネビユラス……。びゃーくんは私が戻る時に一緒に戻って言ってたけど本当はすぐにでも戻りたいはず……。……ごめんねびゃーくん」

私は瞳から少しだけ涙が流れたがすぐに拭き、そのまま眠った。

第7話 弟子へのご褒美

「アツシユ。あの岩の柱まで走ってここまで帰って来い」

「へい!!」

「タイムは30秒だ。……3……2……1……」

「ちよつ!!ちよつと待つてくませえ!!」

「……0!!」

「ひいひいひい!!」

俺とレイカー、アツシユは無制限フィールドでアツシユに修行をつけていた。

いつもはレイカーが修行をつけているが、今日はアツシユがレベル4になってから初めて俺が修行をつけている。

「あなたもなかなか鬼ね」

「お前よりはまだマシだと思っぜ」

「あら、そうかしら？」

さてと……そんなことを話していると帰って来たみたいだ。

「ゼエ……ゼエ……タ……タイムはどうですか？」

「ええとタイムは……30秒ジャストだな」

「イエエエエイ!!! さすが俺様!!! ギガクール!!!」

「ギリギリだがな（だけどね）」

「そ……それは言わねえでくだせえ……」

次はどうしようかな……？

次はこれにするか。

俺はショックリボルバーに威力をチャージし、地面に撃った。
地面に大きな穴が空き、残骸が宙を舞った。

「これを全て撃ち落とせ」

「へい!!ハウリング・パン・ヘッド!!」

それから数回繰り返した。

理由は俺が全て撃ち落とすまで終わらないと言ったからだ。
レイカーにも言われたが俺もなかなか鬼だな。

「や……やつと撃ち落としたぜえ」

「お疲れ。これならクロウの飛行アビリティにも対応できるんじゃないやねえか」

「なるほど!!ありがとうございます!!」

「今日はこれくらいにするか」

「へい!!」

「それじゃあ帰りましょうか」

俺たちはゆつくりと帰還ポータルに帰っていった。

帰還ポータルについてアツシユが俺に話しかけてきた。

「エイトの兄貴。これからも綸のことをよろしくお願いします!!」

アツシユは頭を下げ、俺にそう言ってきた。

俺はそんなアツシユに頭を上げさせた。

「頭上げろよアツシユ。綸の兄貴のお前からの頼みを踏みにじったりしねえよ」

「ありがとうございます!!」

「ふふつ、私には頼まないの?」

「もちろん師匠にもお願いしたいです!!」

「あらあら。任せてちょうだい」

レイカー……

顔は見えないが絶対に笑ってなかつただろ……。

そして俺たちは現実に帰った。

「……………ふう」

「あの……………ありがとうございます……………兄も凄く喜んでました」

「おう、気にするな」

「……………ふう」

「繪？大丈夫なの？」

「…すみません…少し眠くなってしまいました」

「あらあら。おいで繪」

楓子はソファに座って繪を自分の膝の上に寝かした。
膝枕だな。

「お母さんにしか見えないな」

「それなら奨真君はお父さんね」

「まあ…そう…なるな」

なんか照れるな……。

頭を撫でたりして寝かしている時、楓子は何か思い出したようだ。

「あ！今日の晩御飯のおかずを買いに行かなきゃ！奨真君！綸のことお願いね！」

「あ、ああ」

楓子は綸を俺の膝の上に寝かして、買い物バッグを持って出かけた。

「ってなんで膝枕なんだ……」

「ふゆう……あれ？私は……夢でも見てるのでしょうか？」

「ん？」

「奨真さんに膝枕してもらってるなんて……夢に決まっていますもんね」

んーどうしようかな。

夢ということにしてあげるか。

「ああ、夢だぞ」

「ですよね……夢ですよね」

一度目を覚ました綸だが、また眠気が来たのか目を擦っていた。

「夢なのに……凄く気持ちよくて……なんだか……幸せ」

俺は綸の頭をそつと撫でた。

「膝枕に……なでなで……幸せ……夢……覚めなきやいいのに」

綸のことは見てると本当に自分の娘のように見えてきた。

子供なんか持ったことないけど、自分の子供を持つ父親ってこんな感じなのかな。

なんか俺も眠くなってきたな。

楓子が帰ってくるまで寝るか。

「ただいまー」

さっ！早く買ってきたものを整理しましょう！

私は整理するためにリビングに入った。

そこには膝枕をして眠っている奨真君と膝枕してもらって寝ている綾がいた。

「あらあら。本当に親子みたいね」

「ん……あれ？楓子、おかえり」

「おはよう、奨真君」

「ううん……師匠?……あれ……奨真さんの膝枕って夢じゃなかったの……?!?」

繪は立ち上がって奨真君に頭をペコペコと下げていた。

「ごめんなさいごめんなさい!!」

「頭上げろって! そんなに頭振ってたら倒れるぞ!」

確かに見てるだけで倒れそうになるわ…。

奨真君が止めて繪は頭を下げるのをやめた。

「そ、そろそろ私帰りますね! お邪魔しました!」

繪は恥ずかしいのかカバンをもって帰っていった。

「送っていくぞ……つてもう帰ったか」

「綸ってば恥ずかしがり屋さんなんだから」

「食材整理手伝うぞ」

「ありがとう。じゃあお願いしようかな」

私と奨真君は買い物バッグから食材を出したりして整理した。

今度は私も膝枕してもらおうかな……。

第8話 昼休み

「ううう………また寒くなってきたな」

学校の教室で俺は手を擦って温めていた。

「お前はいつも倉崎さんと熱々じゃねえか」

「うるさい……それとこれは別だ。っていうかそこまで熱々じゃねえしいつものことだし」

「自慢か!!自慢なんか!!」

なんで怒られてるんだ……。

ん？ 昼飯の時間か………昼飯!?

「やばい!! 楓子と中庭で待ち合わせしてたんだ!!」

「……アホか」

俺は急いで教室を出て、階段を下った。

三階だから一階まで時間がかかるな。

一階についてダッシュで中庭に向かった。

中庭にはもう楓子がベンチで座って待っていた。

「いめん楓子!!」

「……………」

「楓子？」

呼びかけると楓子は顔をにっこりとしながら無言で振り返った。

その笑顔がなんか怖い……。

遅れたから怒ってるのかな…。

「その……本当にごめん」

「ひどい！私との約束を忘れてたなんて……。毎週ここで一緒にお昼食べようって言ったのに……」

しまった……泣かせてしまった。

「本当にごめん!!何でも言うこと聞くから!!」

「何でも……………ふふつ、じゃあ今度は……………何して貰おうかなー」

何でもって言った俺が間違ってた……………。

よく見るとさつきまでの楓子の泣き顔は嘘泣きだったみたいだな。

前にもこんなことあって同じことを言つてとんでもないお願いをされた。
今度は何をお願いしてくるんだ。

「じゃあ今度は……………膝枕をお願いしようかな」

「へ？それだけ？」

「もう一個いいの？じゃあお互い裸で添い寝とか？」

「いいいい一個でいいです！膝枕でいいです！」

「そう?」

何てこと言い出すんだよ……。

「でも約束を忘れるのはめっ!!だよ」

「ごめんなさい……」

「ざっ!早くお昼食べましょ!」

楓子はベンチに置いていたカバンから弁当箱を出した。
俺は楓子の隣に座った。

「はい、あーん」

「あ、あーん」

毎週こうやって食べさせてくれるがやっぱり恥ずかしいな。

ここつていろんな人から丸見えだし……。

例えば……。

『いつも橘は倉崎さんとイチヤイチャしやがって!!』

『倉崎さん橘君と……羨ましい!』

『爆発しろ!!橘だけ!!』

丸聞こえなんだが何で俺だけあんなこと言われなきやならないんだよ……。

「おいしい?」

「うん、美味しいよ。学校で楓子の手料理を食べるのは週に一回だけだからさらに美味しく感じるよ」

「ありがとう」

俺と楓子はお互い食べさせあつて昼飯を食べ終わり、ベンチでゆっくりしていた。

手を繋ぎながらのんびりと冷たい風に当たっていると楓子が頭を俺の肩に預けてきた。

「災禍の鎧の討伐お疲れ様。でもまさか白の王がサツちゃんのお姉さんだったなんてね。今でもびびつくりするわ」

「……………加速研究会……………グレーマインド」

「奨真君？」

「また、加速世界が荒れるかもな」

「……そうね」

未だ謎の存在である加速研究会、そしてコスモスを操ってロータスにライダーを殺させるように命令したグレーマインド。

「そろそろ戻ろう」

「え、ああ」

今はまだ深く考えないでおこう。

放課後……………

俺は下駄箱で靴を履き替え、校門で待ってる楓子のところに向かった。

「お待たせ。じゃあ帰るか」

「ええ」

楓子は俺の腕に抱きついてきた。
腕に柔らかいものが当たってるが気にしても仕方ない。

加速世界……

「……………どうする？」

「また俺が操って呼び戻そうか？」

「いや、それだと意味はない。あの方自身の意思で戻ってもらわなきゃ」

「わかったよ。会長代理」

加速世界である組織が動き出そうとしていた。

その組織は加速世界に大きな影響を与えるだろう。

組織の目的は何なのか？

それはまだ誰にもわからない。

第9話 尾行

こんにちは。

私は白雪姫。

突然ですが私は今尾行をしています。

尾行している人物は……。

「奨真君。次はどこに行く?」

「うーんそうだなあ」

私が好意を抱いている奨真さん。

倉崎さんと出掛けてるのを見かけて2人がどうい関係なのか気になって尾行を始めた。

「どういう関係なのか調べなきゃ！」

「……2人は……恋人同士」

「へっ？」

今……何て？

私は急に後ろから話しかけてきた少女に驚くことを忘れて問いただした。

「今の本当ですか!？」

「は……はい。その……あなたも奨真さんが……好き……なのですか？」

「あなたもつてことは……」

「はい……私も……奨真さんが……好きなんです。でも……」

もう付き合ってたなんて……。

この恋はもう実らないのですね…。

でも私は!!

「私はそれでも諦めない!!あなたもそれでいいのですか!!」

「え?」

「確かに奨真さんは倉崎さんと付き合ってるけど、諦めなければチャンスは必ずきます!!だからチャンスを待ちましょう!!」

「そう……ですね……わ、私も頑張る!」

私たちは握手をして絆を深めた。

そういえばまだ名前を聞いてませんでした。

「ところであなたは？」

「日下部綾。あなたは？」

「白雪姫です。よろしくお願ひしますね」

「はい！」

「早速共に尾行をしましょう！」

私と綾さんは尾行を始めた。

あら？2人はあの店に入ったみたいですね。

「お、追いかけてみましょう……」

「え、ええ」

この店って………下着屋さん!?

男性である奨真さんの中に入れるなんて……倉崎さんチャレンジャーですね。そういえば私倉崎さんのことは何も知りませんでしたね。

「あの………繪さん。倉崎さんってどんな人なんですか？」

「ええと………大雑把に言う………美人でスタイル抜群………」

「スタイル抜群………ってことは」

「もちろん………巨乳」

「………」

ゆつくりと視線を倉崎さんに向けて全身を見た。

美人で………出てるところは出て引っ込んでるところは引っ込んでる。

それよりもあの胸。

私と綸さんはお互いの胸を見て私は綸さん、綸さんは私の胸を見て見比べた。顔を合わせて固い握手を交わした。

「同士！」

そんなくだらないことを言っていると2人は外に出て行った。

私たちはすぐに追いかけた。

それからは他の店を見て回ったりして時間を潰したりしていた。

もう帰る時間なのか2人が帰って行くのが見えた。

「……………」

「け、結構楽しかったですね！」

「は、はい！」

「そうだ！ 綸さんの連絡先を教えてください！」

「あ、はい。……どうぞ」

綸さんが指を弾くような動作をして、私のニューロリンカーに連絡先を送信した。

私も指を弾いて、連絡先を送信した。

そして私たちは最後にある約束をした。

「頑張って牛乳飲もう！」

私たちは別れて、お互いの家に帰っていった。

第4章 新たな敵、新たな仲間
第1話 新学期早々のトラブル

あれから数ヶ月が経ち、季節が変わり、学年も変わって新学期が始まった。

「ふあああ………」

「随分と眠そうだね、ハル」

「シヤキつとしなさいよ……」

「んなこと言われても……校長先生の話し長いんだよ」

さつきまで僕たちは体育館で始業式を行なっていた。

それで校長先生の話が長すぎて眠くなってるわけなのです。

「ねえねえハル、タツくん。アタシにもそのブレインバースト？っていうやつをコピーしてくれない！」

チユは僕たちにブレインバーストをコピーして欲しいって言ってきた。

コピーってことは僕かタクのどっちかがチユの親になるってことだ。

でもその前にコピーできるかもわからないし、チユってゲーム苦手だろ……。

僕はタクにチユにブレインバーストをコピーするかどうか相談した。

「どうする?」

「もうブレインバーストについてはほとんどバレてるし、いいんじゃないかな」

「わかった。でもどっちがチユの親になる?」

「じゃあ僕がなるよ」

僕たちはチユにブレインバーストをコピーすることに決め、チユを僕の家に来るように言った。

「タツくんからコピー出来なかったらハル、お願いね」

「えー……」

奨真
s i d e

始業式が終わって俺は教室の自分の席でだらけていた。

そんなときに楓子が呆れた顔で俺のところに来てきた。

「はあ……奨真君。もう放課後だよ」

「え……あ、ああ」

「大丈夫?」

「大丈夫大丈夫。さて、帰るか」

「ええ」

「ちよつといいかな」

俺と楓子が教室を出て帰ろうとした時に後ろから声をかけられた。
声からして女子生徒だろう。

俺と楓子は振り返ったがこんな女子生徒は知らない。

「ええと君は？」

「倉崎さん。ちよつと橘君を借りてもいいかな」

「え、ええ……。奨真君はどうするの？」

「なんか俺に用事があるみたいだしこの人についていつてみるよ」

「わかったわ。じゃあ私は先に帰るね」

「おう」

楓子は先に帰って行き、俺はこの女子生徒についていった。

「先に帰るって言ったけどやっぱり心配だわ。こっそり後をつけてみよう」

「えっと……こんなところに連れて何の用なんだ」

「はつきりと言うわ。この私と付き合いなさい!!」

「はっ。」

いきなりこんな学校の人気のないところまで連れてきて何を言うと思ったら付き合い合えだど……。

しかも命令形だし…。

馬鹿馬鹿しい、断ろう。

「断る。あんたも知ってるだろ。俺は楓子と付き合い合ってることを」

「もちろん知ってるわ。知った上で言ってるの」

何言ってるんだ……。

断れることをわかって言っただってことか。

「だから、彼女のことを忘れてもらおうと思っ
てね」

「何……」

女子生徒はそう言っ
ていきなり俺に抱きつ
いてきた。
俺は必死に引き剥が
そうとしたが全然離
れない。

「離せ！」

「じゃあ私と付き合
いなさい！」

「断る!!」

「じゃああの女のことを意地でも忘れさせてやる！」

今度は顔を近づけさせてきた。
これは嫌な予感がする。

「っ!？」

「うん？」

その嫌な予感の中ってしまった。
何故なら楓子がここにきてしまったからだ。

「變真君……………何……………してるの…」

俺は女子生徒から離れ、楓子のもとに向かった。

「違うんだ楓子!!これには訳があつて!!」

「訳って何?あの状況で何かあるの……………」

「あの子がいきなり抱きついて」

パチンツ！

「褒真君のバカ!!嫌い!!もう知らない!!」

俺は楓子に思い切り引つ叩かれ、楓子は走つてその場から去ってしまった。

どうしよう……早く誤解を解かないと……本当に嫌われてしまう。

俺は早くその場から去ろうとしたがさっきの女子生徒に腕を掴まれた。

「……離せよ」

「あんな女ほつときなつて。それに嫌いって言つてたじゃん。だからあんなビッチはほつといて私と付き合えつて」

……もう我慢の限界だ!!

俺は思い切り腕を払い、女子生徒と向き合った。

「俺のことは何を言われても構わないが、楓子のことを悪く言う奴はどんな奴だろうと絶対に許さない!! チャンスをやる、今この場で楓子のこと悪く言ったことを謝るなら許してやる。だがもう一度楓子のこと悪く言うならこの右腕でお前をぶん殴る!! 相手が女だろうと関係ねえ!!」

「ひっ!!……………ごめんなさい。もうしません」

ちよつと怖がらせすぎたかな。

ま、こんな奴にはこれくらいがちようどいいか。

「あと一つだけ教えてやる。俺は楓子以外の女とは付き合わない。ついでに理由も教えてやる。彼女以外に相応しい女はこの地球上どこを探してもいない。それぐらい俺は彼女を愛している」

俺は座りこんだ女子生徒を放って急いで家に帰った。

家に入り、俺は楓子の許可を得ずに楓子の部屋に入った。

「楓子!!」

「……何できたの。あの人のところに行ったらいいじゃない」

「あんな奴放ってきたに決まってるだろ!それに俺は楓子以外の奴と付き合ったりしない!!好きになったりしない!!」

「じゃあそれを証明してよ!!!」

証明つてもうあれしか思いつかない!

俺は楓子を思い切り抱き締め、キスをした。

「んん?!……ふう……んあ……」

楓子は離れようと抵抗したが俺はそれを許さなかった。
諦めたのか楓子は俺からのキスを受け入れた。

「……はあ、これでいいか」

「……さっきのことは誤解だったってことはわかったわ。でもまだダメ、私のこと愛してくれてるならそれをもっと証明して」

「………わかった。覚悟は出来てるか?」

「………もうとっくに出来てるわ」

「……………そうか」

俺は楓子をベッドに押し倒して一つになった。

幸いだったのは今日も父さんと母さんの帰りが遅かったことだ。

第2話 ライムベル

「ぎゃあああああ
!!!!」

「せい！せい！！せーい!!!」

「タク!!助けてくれー!!チユを止めてくれ!!」

「ハル、もう少しの辛抱だよ」

僕は今、チュにめちやくちや殴られていた。

まず何でこんなことになってるか説明しなきゃね。

放課後僕の家でタクがチュにブレインバーストをコピーしようとした。

見事コピーすることに成功して次の日、僕たちは早速加速した。

まずは僕が対戦相手になってタクと一緒に色々とレクチャーをした。

それでチュが自分の必殺技が何なのか気になって僕を殴って必殺ゲージを溜めていた。

「ていうかわざわざ俺を殴らなくてもオブジェクトを壊せばいいだろ!!」

「いいじゃん別に。あ、溜まったみたい！早速いくよー!! シترون・コール!!」

「えええ!!」

僕はやられると思い咄嗟に目を瞑った。
けど何のダメージもなかった。

「何も……………ない？」

「何なのよこれ!!こんなんでやっていけるの!!」

「うーん、デバフとか無いのかな？ハル、状態異常が無いか見てくれないか」

「ええと……………あれ？」

どういうことだ。

僕はさっきまでチュにボコボコにされたはずなのにHPが全快まで回復していた。

「どうしたのハル？」

「HPが全快まで回復してるんだ」

「えっ!?それって本当かい!!」

「え、うん」

「凄……チーちゃんのデュエルアバター『ライムベル』はバーストリンカーの中で最も

珍しいヒーラーだ!!」

「奨真君……奨真君」

「ううん……」

「もう……本当にお寝坊さんなんだから。えい！」

「んん…………んん？…………あれ、布団がない。って楓子何してんの？」

「何してるでしょう♪」

見た感じ布団を広げて持つてるようにしか見えないが何で片手で持つてるんだ？

ん？何か落ちたな。俺は楓子の足元に落ちた何かを見るとそれが楓子が着てる寝間着だっということがわかった。

「まだ寝ぼけてるんだな。じゃないと楓子が服を脱いでるなんてありえない。もう一回寝よ」

「もう！寝ようとしないで!!」

「わかったからその格好で抱きつくな!!」

「じゃあ早く起きてね。もう……奨真君を起こす方法がこれしか思いつかないのに」

楓子、もっと他に方法があると思うぞ。

まあいい、さっさと着替えよう。

俺は着替えて部屋を出ると、ドアの前で楓子が待っていた。

「はあ……体中がまだ痛いわ」

「俺も同じだ……」

「もう絶対に浮気なんかしないでね」

「浮気なんかしてないししようとも思わない。俺は楓子以外の奴と付き合ったりしないから、もう心配するな」

「その言葉、信じるわね」

「ああ」

俺と楓子は一階に降りると既に母さんが起きていた。

「おはよう」

「おはよう。学校がないからっていつまでも寝てちやダメよ」

「はい……」

「ふふっ」

あ、そうだ。

「楓子、今日の午後どこか出かけないか？」

「それってデート？」

「まあそうだな」

「わかったわ。午後まで楽しみにしてるね」

「ああ」

俺は朝ごはんを即行で食べて二階に上がり、デートプランを考えた。

第3話　デート。そして……

昼飯を食べて、約束のデートの時間になった。

俺は出かける用の服に着替えて玄関で楓子を待った。

「……遅いな」

数分後、楓子はいつものバッグをもって玄関まで来た。

「お待たせ」

「よし！じゃあ行くか！」

俺と楓子はドアを開け、俺はバイクのヘルメットを楓子に渡して、バイクに乗り楓子を後ろに乗せてエンジンをかけて出発した。

信号に引つ掛かり、青になるのを待っていると楓子が話しかけて来た。

「これからどこに行くの？」

「着いてからのお楽しみだ。ほら、しっかり掴まってるよ」

「うん！」

俺がそう言つて楓子は掴まる力を強めた。

そのせいで背中には楓子の胸が強く当たっている。

……しつかりしろ。運転中だ。

俺は余計なことを考えるのを辞め、運転に集中して目的地に向かった。数分が経つて、目的地に到着した。

「水族館？」

「そう。二人で水族館なんてまだ行ったことないだろ」

「そういえばそうね。早速行きましょう！」

「あれ？ 奨真君に楓子ちゃんだー！」

この声は聞いたことがあるな。

特に俺が病院でよく世話になった人の声だ。

後ろを振り向くといつももの白衣は着ていなくて、紫色の服を着ている女性がいた。

「紺野先生!!」

「やあやあ久しぶりだねー!」

俺のリハビリの専属トレーナーの『紺野 木綿季』先生がいた。

先生は昔、AIDSだったらしいが病院の先生たちが必死で治療をして完治することができ、誰も自分と同じ目には合わせたくないと思い医者になることを決意して、医者の資格を取ることが出来たらしい。

「二人はもしかしてデートかな？」

「はい。先生は？」

「ボクは今日は仕事がないから息抜きとしてきたんだ。今日は友達を呼ぼうと思ったけどみんな仕事だと言ってたんだ」

「旦那さんですか？」

「そうなんだー。あ、折角のデート邪魔してごめんね！それじゃあねー！」

紺野先生は走って水族館の中へ入っていった。
俺と楓子もゆっくり歩いて中に入っていった。

「見て！ウミガメよ!!」

「おお！なんか近づいてきたぞ！」

俺と楓子は今、カワウソの餌やりが出来るところに来ていた。だが俺がいくら餌をあげてもなかなか食べてくれない。

「なんか……悲しいな」

「可愛い！」

それに比べて楓子があげるとカワウソはすぐに食べる。つていうかほとんどのカワウソが楓子のところに行つてるような……。楓子も餌をあげ終わったみたいだし、次に行くか。

俺たちは水族館の屋上のイルカショーに来ていた。

「わあ！ 凄いね 奨真君!!」

「ああ！ あんな高いところまで飛ぶなんてな！」

俺と楓子は結構前の方で見ていたからかなり迫力があつた。
さつきジャンプしたイルカが水の中に飛び込んだ。

そのせいで水がかなり……あれ？この水こっちにきてないか!?

バシャーン!!!

「……………」

「だ、大丈夫?」

「大丈夫だ。問題ない」

水が思い切り俺にかかってしまった。

運が良かったのか楓子には全く飛んできていなかった。

「ハックション!!」

「拭いてあげるよ」

「悪いな」

俺はイルカショーの後、休憩所で楓子に濡れた服をタオルで拭いてもらっていた。
結構長かったんだな。

結構暗くなってる。

水族館の外ではイルミネーションが点いていた。

もうすぐで時間だ、そろそろ移動しよう。

「楓子。ついてきてほしいところがあるんだ」

「わかったわ」

俺と楓子は立ち上がり、俺は楓子の手を取ってある場所に移動した。

その場所はさっきいた休憩所とはまた違う場所の休憩所。

その休憩所は建物の中にある休憩所ではなく、外から景色が見ることが出来る休憩所だ。

もう暗くなってるから人も何人かいた。

俺はイルミネーションの近くに寄り、楓子と向かい合った。

「楓子。大事な話があるんだ」

「話？」

「俺は前にも言ったが楓子以外の女とは絶対に付き合ったりしない」

「うん」

「楓子のことを一生愛し続ける」

「うん」

「だからさ……3年後、20歳になったら……俺と結婚してくれないか」

「え？」

「まだこんなことを言うのは早いかもしれない。でも前みたいなことがまたあるかもしれない。だから俺は今日言うことにしたんだ」

「そう……………なの」

「それで楓子。返事を聞かせてくれないか」

「……………はい！私をあなたの……………未来のお嫁さんにしてください！」

楓子は今までで一番最高の笑顔を俺に見せて言ってくれた。

俺は嬉しくなり思い切り楓子を抱きしめた。

「奨真君？」

「今はこうさせてくれ」

「……………うん」

俺はいつの間にか泣いてしまってたみたいだ。
俺は涙を隠すように楓子の胸の中に続けた。
しばらくしてようやく涙が止まり、俺は顔をあげた。

「3年後が楽しみだわ」

「ああ」

俺と楓子は夜にきらめくイルミネーションを背景にし、キスをした。

「青春だねえ」

まさかこんなところでこんないいものが見れるなんて！
あとで神威かむいに伝えよーつと！

ボクは立ち上がり、ゆつくりとその場をあとにした。

第4話 投影

俺が楓子にプロポーズ（仮）をして数日が経った。

俺は無制限フィールドの自分で購入した店で俺のアビリティを使って強化外装を作っていた。

俺の『作成』のアビリティはエネミーなどからドロップしたアイテムを強化外装に作り変えることができるから店には作った強化外装が沢山飾られていた。

カランカランッ

お、今日も客が来たみたいだな。

「一旦中断するか」

俺は強化外装を作るのを途中で辞め、鍛冶スペースから出て店に入った。

「いらっしやい！」

「おお!! 本当に無限の剣製がいるんだ!!」

「何か探し物か？」

「ええと……銃型の強化外装が欲しいな」

「具体的にはどんなやつだ？」

「連射ができて軽いものがないな」

連射ができて軽いものか……。

ええと……どこだったかなー。

俺は店の倉庫に入り、客の欲しい強化外装を探していた。しばらく探していると、いい感じの強化外装が見つかった。

「これはどうだ？」

「ええと……軽いな。試し撃ちってできるのか？」

「その梯子を下っていけば訓練場がある」

客は地下の訓練場に行つて銃の試し撃ちに向かった。

俺も一緒にいって行き、様子を見た。

ダダダダダッ!!

お！上手く使えてるな！

「いやー使いやすいなこれ！なんて名前なんだこれ！」

「それは『シューターXYZミニ』だ。XYZシリーズの一つだ」

「XYZシリーズ？」

「XYZシリーズは俺が作った初心者でも扱いやすいもののシリーズだ。今回あんたが使ったのは軽くて連射もしやすく2丁拳銃もできる。XYZシリーズは種類も豊富で結構人気があるんだ」

「へえー！そんなものがあるんだ！」

「それでそれは買うか？」

「もちろん買うぜ！」

客の試し撃ちも終わり、一階へ戻って会計をした。

「何個欲しい？」

「二つくれ！」

俺は客から50BPを貰って強化外装を渡した。

強化外装を渡すと客は上機嫌で帰って行った。

「そろそろ素材集めでもするかな……」

俺は店を出て鍵を閉め、素材集めのためにエネミーを探した。

しばらく歩くと遠くから騒がしい声が聞こえてきた。

俺は気になり、声のする方へ向かうと二人のバーストリンカーがもめていた。

「あんた何様なのよ!!」

「あなたはもう用済みだからそう言ったんですよ。十分にポイントも稼げましたし新しいパートナー候補も見つけたしね」

「僕には君が必要だって言ったのは嘘だったのね!!」

「嘘ではないさ。あの時の僕は君が必要だっただけで今はもう必要ないのさ。さて、このままだと必ず僕に復讐してくるだろうし今ここで始末しようかな」

「どういふこと……」

「ほら、あそこにエネミーが沢山集まってるでしょう」

「っ!?!まさか!?!」

「そのまさかだよ!!」

「きゃああああ!!!」

っ!?あのバーストリンカー、自分の腕の触手を使ってあの子をエネミーの大群に投げたのか!!

早くあの子を助けないと無限EKになってしまう!!

俺は急いでエネミーの大群に駆け寄り、あの子を助けに行った。

「嫌ー!!誰か……誰か助けて!!!」

「デュアルクラス!!ガンブレード!!」

俺はあの子の周りにいたエネミーを範囲攻撃で吹っ飛ばした。吹っ飛ばしたただだから全然倒せていない。

「え……」

「お前を助けにきた。いいか、俺のそばから離れるな」

「は、はい！」

俺は剣を構え、襲いかかってくるエネミーを一体一体確実に倒していった。だがエネミーの数が多すぎて体力はかなり消費してしまう。

「この子の前では使いたくないが……もう使うしかない!!」

俺は剣をストレージにしまい、手を前に出し、集中した。

「イメージしろ。武器の性能を……形を……」

俺はあの子を楓子の元に連れていき、この力のことを教えるのを覚悟して心意技を使った。

「トレース・オン
投影開始!! エクスカリバー!!!」

俺は何もないところから剣を作り出し、それを実体化させた。

エクスカリバーを両手に取り、力を剣に注ぎ、地面に思い切り叩きつけた。

「はあああああ
!!!!!!」

力が注ぎ込まれた剣を叩きつけたことにより、地面は爆発して周りのエネミーは爆風に巻き込まれ、全滅した。

あの子には離れるなど言ったから無事だろう。

「はあ……………はあ……………はあ……………大丈夫か？」

「ほええ……ハッ！だ、大丈夫です!! あ、ありがとうございます!!」

「それはよかった……それよりも酷いやつだなあいつ。自分の前のパートナーにこんなことするなんて」

「あいつ……絶対に許さない!!」

「ま、今後は関わらなければいい」

「は、はい……あの、さっきの技はいつたい……」

「あーその事なんだけど……やっぱり気になる?」

「まあ……はい」

ま、聞かれることを覚悟してたから使ったんだし楓子の元に連れて行って説明するか。

一緒に加速したからまだいるはずだ。

「じゃあちよつとついてきてくれ。っとその前に君の名前は？」

「タンタルアングルです！アングルと呼んでください！」

「俺はブラウンクリエイト。エイトでいいぞ。じゃ、早速だけど落ちないようにしつか

り掴まってるよ」

「え？」

俺はアंकルを背中に背負い、ジェットレグで楓子がいるプレイヤーホームに向かった。

「きゃああああ!!!」

「よし! ついたぞ」

「し、死ぬかと思った」

いきなりここまで飛んで連れてくるのは早すぎたか。
ここにくるだけでかなり伸びてしまっている。

「あら？ エイト、早いわね」

「まあ……色々とあつてな」

「その子は？」

「この子はタンタルアングル。この子を助けた時に心意技を使って見られてしまったんだ。だからアングルに心意技のことを教えようと思つて……」

「見られたならもう教えるしかないわね。初めまして、アングル。私はスカイレイカー、よろしくね」

「よ、よろしくお願いします！」

「早速だけど今から言うことは絶対に誰にも言わないでね。たとえそれが仲のいい友達でも……。それが約束できるなら話すわ」

「わ、わかりました！約束します！」

「あなたはエイトのある技を見たのよね。それはどんな感じだった？」

「ええと……普通の必殺技とは違って光っていました。それと物凄い破壊力でした！」

「『光っていた』。確かに普通の必殺技は光らないわね。でもある技では光るの。それを心意システムと言うの」

「心意システム……？」

「心意システムとは加速世界で設定されている事象を自分の感情や心の力、イメージ等で制御し事象オーバーライドの上書きをすることを言うの」

「事象の上書き……」

「これを聞くだけだと凄く協力的な力のように聞こえるけど、この心意システムにも欠点があるの。それは心意を乱用すると自らの心の闇に飲まれるという事。だからこれは決して広めてはならないものなの」

「アングルは災禍の鎧のことは知ってるか？」

「もちろん知っています」

「災禍の鎧も自分の負の心意に飲まれた結果、ああなってしまったんだ。心意は災禍の

鎧を誰でも作り出すこともできる。だからこれを公開していないんだ」

「そうなんですか……」

あとはアングルに心意システムを教えるかどうかだな。

「あのー！お願いがあります！私にもその心意システムを伝授してください！！決して悪用なんかしません！！」

「………わかりました。なら私が伝授しましょう。でも……私の訓練はとても厳しいです。覚悟は出来ますか？」

「ちよつと待てレイカー！心意システムを教えるなら俺が教えるよ！」

「もちろんエイトにも手伝つて貰いますよ。でも私が伝授します」

「……………わかった」

「覚悟は出来てます!!」

表情は見えないがこの子の目はやる気で満ち溢れているに違いない。

「では早速訓練を始めます！まずは心意システムの簡単な扱い方です。それはイメージをすることです！」

「それだけですか？」

「ええ！それでは頑張つて♪」

「つてちよつと待つてえええ!!!」

楓子はアンクルを下に突き落としていった。

そういえばアツシユの時もこうだったような……。

本当に鬼だな。

「大丈夫かな？」

「きつと大丈夫よ！奨真君、強化外装を全部渡してちょうだい」

「え？何で？」

「すぐにわかるわ」

俺は楓子の言う通りに強化外装を全部楓子に渡した。

「で、どうするんだ？」

「ふふっ……えい」

「え？」

「奨真君も頑張つてね♪」

俺は楓子に押されて下に突き落とされた。

きつとこれは俺も一緒に登つてこいつていうことだろう。
でも……。

「何でさあああああ!!!」

こうして俺とアングルは楓子の地獄の訓練を開始した。

何で俺まで訓練に参加しなきゃならないんだ。

そんなことを考えてながら落ちていると何か降ってきた。
これは石？の周りに紙が貼ってるな。

ええとなになに？

『アंकクル一人だと心配だから一緒にいてあげてね♪』

……そういうことか。

「なら何で強化外装を俺から回収したんだよおおおお
!!!!」

第5話 アンクルとエイトの訓練

「ぎゃあああああ
!!!!!!」

ズドンツ!!

私はレイカーさんに心意システムのアドバイスを教えてもらった途端、突き落とされてしまった。

もう訓練は始まってることかな…。

「イタタタ………何とか生きてる」

でもどうやって登ろう……。この塔は今は鉄でできてるし……。次の変遷を待とうかな？

ん？なんか空から降ってきましたね……。あれって……。人!?

「あああああああ
!!!!!!」

「わあああああああ
!!!!!!」

ズドンツ!!

びびびびつくりした!?

いったい誰が降ってきたんだろ?

「イテテテツ……レイカーのやつ、俺から強化外装を回収しやがって……」

「エイトさん!? どうして落ちてきたんですか!？」

「あーレイカーに頼まれたんだ。アンクル一人だと心配だからってな。でもだからって強化外装を回収しなくてもよかったのに……」

「た、大変ですね」

「さてと、登るか」

「え？どうやって登るんですか？」

ろ。こんな鉄の塊なんか剣かなにかで突き刺すこともできないのにどうやって登るんだ

あ!! そうだ!! 突き刺すことができないなら突き刺すことができるようにイメージすればいいんだ!!

「イメージ……イメージ……」

(コツをもう掴んだのか?)

「はあ!!」

私は腰に装備している小太刀に雷を纏わせ、塔に突き刺して登り始めた。

「おおー!これなら心配いらないな。俺も登るか!」

下を見るとエイトさんが登り始めてきた。

え!? どうやって!?

「エイトさん!?強化外装ないのにどうやって登ってるんですか!？」

「心意技で触れた部分を武器に変えたんだ」

よく見るとエイトさんが触れた部分が剣になって持つ部分を掴んでいた。

「つていうか私雷を纏った小太刀を突き刺しているのに感電とかしないんですか?」

「してるよ……めちやくちやビリビリきてるよ」

「す、すみません」

「俺のことは気にしなくていいから上に登れ」

それから数時間が経過してようやく頂上に辿り着いた。
辿り着いたと同時に変遷が始まった。

「運がよかったな。登ってる時に変遷なんか来たら振り出しだぞ」

「あら、早いですね」

「レイカーさん！次は何をするのですか？」

「その必要はもうないわ。あなたはもう心意システムを習得したわ」

「え？」

「イメージをして心意システムを使うことができた。あとは自分の使いやすい心意技を作るだけよ」

「は、はい！ありがとうございます！！先生！！」

私はレイカーさんのことをいつの間にか先生と呼んでいた。
でも本当に先生みたいだし！
これからも先生って呼ぼう！

「せ、先生？」

「ははははは!!レイカー先生か!似合うじゃねえか」

「そ、そう？」

「これからよろしくお願いします!!先生！」

「わかったわ。よろしくね、アングル」

「さて、そろそろ現実世界に帰るか」

「そうね」

「はい！」

私はエイトさんと先生についていって帰還ポータルで現実世界に帰った。

奨真 s i d e

「二人目の弟子だな、先生」

「もう！茶化さないでよ！」

「痛い痛い！」

俺は楓子を先生と呼んで茶化すと楓子が俺の肩をポカポカと叩いてきた。
実際あまり痛くないが……。

「今度家に呼ぶか」

「そうね。奨真君、疲れたでしょ？ここに頭乗せて」

「わ、わかった」

俺は楓子の膝の上に頭を乗せて膝枕をしてもらった。
楓子膝枕は本当に気持ちいい。

「眠く………なってきたな。寝てもいいか？」

「ええ、ゆつくりしていてね」

俺は楓子に膝枕をしてもらった状態で眠った。

第6話 奪われた翼

黒雪姫 s i d e

私は今、飛行機の中から景色を見ていた。

何故飛行機に乗ってるかって？

それは私たち三年生は修学旅行で沖縄に来ているからだ。

だから当然ハルユキ君やネガ・ネビユラスのみんなに会うことができないのだ。

「はあ………ハルユキ君に水着姿を見せたかったな」

「溜息なんかついてどうしたの姫？」

「わああ!?! ってなんだ恵か。脅かさないでくれ」

横から急に話しかけて来たのは『若宮恵』私の友達だ。

「姫が勝手に驚いたんでしょ。それより! 自由行動のとき一緒に回りましょうよ!」

「そうだな。沖繩の街を見るのが楽しみだな」

ハルユキ君たちが心配だが、今は修学旅行を楽しむとするか。

黒雪姫 s i d e o u t

ハルユキ s i d e

「ぐう…………ちくしょう！」

「無駄ですよ先輩。先輩では僕には勝てません。あなたの翼は僕が貰いましたからね
!!」

人のアビリティを奪うなんて……。

まさか僕の翼はもう戻ってこないのか……。

それだけじゃない、このままじゃチュまであいつの手に渡ってしまう！

「まだだ！まだ勝負は終わってない!!」

「もう終わってるんですよ!!」

ダスクテイカーは左手の触手で僕の体を縛り、地面に思い切り叩きつけた。その衝撃で僕のHPがゼロになった。対戦が終わって現実世界に帰って来た。

「フハハハハ!! 残念でしたね有田先輩!!」

ダスクテイカーこと能見征二にお腹を思い切り蹴られ続けた。

「もうやめて!!」

そんな時にチユが間に入って来た。

「私があんたの仲間になる! それでいいでしょう!!」

「それはありがたい!! ならもう先輩に手を出すのはやめましょう。有田先輩、倉嶋先輩に感謝するんですね」

そう言って能見はその場から去っていった。

それよりもチュが能見の仲間になるってどういうことだよ!!

「チュ!!なんであいつの仲間になるって言ったんだよ!!」

「こーでもしなきゃあんたを助けることができなかつた!!ただそれだけよ……。じゃあねハル」

「待てよチュ!!」

僕は何度も呼び止めたがチュは振り返らずに去っていった。

ちくしょう!! どうすればいいんだよ!!

ハルユキ side out

褒真 side

「へえ、お前は沖縄なんだな」

『いいだろ!!ま、お土産楽しみにしてろよ!』

「楽しみにしてるよ!」

俺は学校の休憩時間中に白夜と電話をしていた。

白夜の修学旅行の場所は沖繩か……羨ましい。

そんなことを思いながら教室にいる楓子の元へ帰ろうとした時に1人の女子生徒とぶつかった。

「ああすまん。大丈夫か……って白雪?」

「はい、大丈夫です……って奨真さん!」

なんで白雪がこんなところに？

あ、もしかして。

「白雪ってこの高校に入ったんだな」

「はい！私が今住んでるところから近いっていうのもありますし………あとは奨真さんと一緒の高校に入りたかったんですけど」

家から近いのか。

あと最後なんか言ったような気がしたが……。

「最後なんか言ったか？」

「いいいいえなんでもありません!!それでは私はこれで失礼します!!」

白雪は首を横に振って走ってその場から立ち去っていった。

なんだったんだいったい？

キーンコーンカーンコーン!

「あ」

やばい!!早く戻らなきや遅刻扱いになる!!

「あああああああ
!!!!!!」

遅刻はなんとか免れたが授業が終わった後楓子に説教をされてしまった。

褒真 s i d e o u t

白夜 s i d e

「ふー。たまには1人で散歩するってのもいいな」

俺は今1人で沖縄の街を散歩していた。

1人なのは俺が他の班の人たちと今日だけ別行動をとることにしたからだ。

「奨真のお土産もだけど、旧ネガ・ネピユラスのみんなの分も買わなきゃな！あきらの分は何にしよう？」

そんなことを考えながら歩いていると見覚えのある後ろ姿があった。

あれは絶対に忘れない。

だって彼女は……。

「あきらさー」

「へ？びゃーくん!？」

俺の最愛の恋人の氷見あきらだったからだ。

第7話 アッシュの小さな優しさ

白夜side

俺は沖縄の街を歩いていると偶然あきらと遭遇した。
でもなんであきらがここに？

「なんであきらがここに？」

「びゃーくんこそ！私は修学旅行で来てるけど……」

「俺もそうだ」

まさか2人とも修学旅行の場所が同じで日にちも同じとはな……。

こんな偶然そうそう無いぞ。

まあでも、ここでこうやってあつたんだ。

俺があきららに言うことはただ一つ。

「なああきら。一緒に街を回らないか？」

「うん！」

俺とあきららは手を繋いで、沖縄デートを始めた。

白
夜
s
i
d
e

o
u
t

場
所
は
変
わ
っ
て
東
京
……
そ
し
て
次
の
日
……

世
紀
末
ス
テ
ー
ジ
……

「ヒヤッハー!!今回は勝たせてもらおうぜキャラス野郎!!」

「……………」

ハイテンションでアツシユはバイクに乗りながらクロウの元へやってきたが、クロウは翼を出してないことに疑問を感じて聞いた。

「ん?おいクロウ。おめえ翼はどうした?」

「え?ええと……………今回は翼なしでどこまでアツシユさんと戦えるか試したくて……………」

「ふーん。へっ!!翼があつてもなくても俺様が勝つんだぜ!!行くぞクロウ!!」

アツシュはバイクでクロウに突進したが、横に軽々と避けられる。だがアツシュはすぐに方向転換し、後ろからクロウに攻撃した。

「うああああああ!!!」

「へいへいへーい!!!」

『あちやー、これだと今回のアツシュ対クロウ戦はアツシュの勝ちだな』

『流石に翼なしだと勝てないでしょ』

アツシユとクロウの戦いを見ていた観客たちはそれぞれ感想をなどを言っていた。
アツシユ自身は今回の戦いにはやはり納得がいつてなかった。

「……………つまんねーな。やめだやめだ!!それにこんなんでも勝つても嬉しくもなんともねえよ!!」

「……………」

「なあクロウ。何があつたんだ?翼はお前の自慢の武器だろ。なのになんでも使わねーんだ。本当は試したいんじゃないんだろ」

「……使わないんじゃないんで使えないんです」

「ん？」

「僕の翼は……奪われたんです」

「なっ!？」

翼を奪われたことを聞いたアッシュは驚きを隠すことができなかつた。
それはそうだ。

人のアビリティを奪うことなんて普通はありえないからだ。

「……………クロウ。一度バーストアウトしたらすぐに無制限フィールドに來い!! わかったな!!」

「は、はい!!」

2人は同時にバーストアウトして、無制限フィールドにやってきた。

「アツシユさんは……………?」

「きたなクロウ。後ろに乗れ」

「は、はい」

クロウはアッシュのバイクの後ろに乗り、しっかりとアッシュの体を掴んだ。アッシュはそれを確認してバイクを走らした。

「あの………これからどこに行くんですか？」

「ついたらわかる」

「は、はあ」

アツシユがバイクを走らせて数分が経って、アツシユは目の前の塔に突進した。

「アアアアアツシユさん!!前!!前!!」

「しっかり掴まってろよ!!」

アツシユは塔にぶつかりにいったわけではなく、ウィリーをして、壁面走行で上に登っていった。

最大速度で走ったから頂上にすぐにたどり着いた。

「え、ええと……ここは？」

「あれ？アッシュ？どうしたんだ？」

クロウは聞き覚えのある声を聞いて、声のするほうに向いた。そこには銅のようなカラーのデュエルアバターがいた。

「エイトの兄貴!!師匠はいますか？」

「エエエエイトさん!？」

「クロウ！久しぶりだな！」

「私は初めてですね」

エイトの後ろからドアが開いて、車椅子に乗ったデュエルアバターが出てきた。

「エイトさん、この人は？」

「初めまして。私はスカイレイカー。アツシユの師匠ですよ、鴉さん」

「初めまして、シルバークロウです！よろしくお願いします！」

「で、どうしたんだ」

そう聞いてきたエイトにクロウはエイトとレイカーに事情を説明した。

「なるほどな……」

「鴉さん、私の弟子になりますか？」

「え？」

「今の鴉さんではそのダスクテイカーに勝つことは出来ないでしょう。だから鴉さんにはもっと強くなる必要があります」

「俺も賛成だな。まあでも、レイカーの弟子になるならそれなりの覚悟は必要だな」

「僕はもつと強くなりたい！レイカーさん！僕を弟子にしてください!!」

「わかりました。それでは早速開始しましょう！」

「クロウ。師匠の訓練は本当にやばいからきいつけろよ」

「え？」

「アツシユ、何かいいましたか？私にはもつと訓練内容をきつくしてほしいと聞こえましたが？」

「いいいいいいえ!!そんなことは一言も!!あつ!!このあと用事があるんだつた!!それで俺様は失礼します!!」

アツシユはまるで逃げるかのようにバイクに乗って塔から降りていった。

「これから私が言うことは決して他の人には言わないでくださいね」

「はい!」

レイカーはクロウに心意システムについてのことを教えた。

そしてアングルのときと同じようにクロウを塔から突き落とす。だが今回はエイトは突き落とされなかった。

「流石にHPがなくなるだろ」

「こんにちは!!さっきここに来るときに誰かが落ちてきましたけど何かあったんですか先生?」

「新しい弟子よ。登ってきたら仲良くしてあげてね」

「はい!もちろんです!」

「さて、クロウが登って来るのを待つか」

第8話 タンタルアンクルはどんな人？

「結構時間が経ったな」

「でもなかなか上がってきませんね」

まだコツを掴めてないか、それとも変遷で振り出しに戻ってしまったか。

「きつとすぐに登ってくるわ」

「その根拠は？」

「鴉さんは本気で強くなりたいてって思っていた。それだけよ」

「なるほどな」

「鴉さん？そういうデュエルアバター名なんですか？変わってますね」

アンクルはなんか勘違いをしている気がするような。

まあとりあえず説明するか。

「鴉さんっていうデュエルアバター名のやつなんかいると思うか？名前にクロウがついているから鴉さんなんだよ」

「ええ！鴉さんっていうデュエルアバター名じゃなかったのですか!？」

今日俺はアングルについて一つわかった。

こいつはアホだ。

「アホかお前は」

「ちよつ！ちよつとアホってなんですか!?!私こう見えて勉強はできるんですよ!」

こう見えてって……見た目がアホそうだってことは自覚してるってことなのか？

「ほおー。例えば何ができる?」

「計算ができます！ $1+1$ は2!!」

これを聞いた俺のレイカーは呆れることしかできなかった。

「はあ……」

「じよ、冗談ですよ！ $3562 \times 7859 \parallel 27993758$!!」

「「おおー」」

今度は逆に驚くことしかなかった。

あれは適当に数字を言っただけ算をしたと思う。

なのに正解を出した。

「す、凄いな」

「えへへ、もっと褒めてもいいんですよエイトさん！」

「あーやっぱりさっきの言葉取り消そうかな」

「うわーん!!先生!!エイトさんがいじめてきます!!」

「よしよし」

アンクルは泣きながらレイカーに抱きつきにいつた
って!?

「いじめてねえよ!!訳のわからないことを言うな!!」

「コラッ!エイト!女の子をいじめちゃダメでしょ!」

「レイカーまで何いってんだ!」

よく見るとレイカーのやつ、絶対この状況を楽しんでるだろ。

「はあ……もういいや。そういうことにしとけ」

そんなくだらないことをしているとクロウが登ってきたみたいだ。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「お疲れ様です！これで心意システムについて教えることはなくなりました」

「え？もう終わりですか？」

アツシユもアンクルもそうだったがやっぱりそうなるよな。
だつてここまで心意で登ってくるだけだからな。

「へー君がクロウ君か。なんか細いね」

「そういうお前はちっこいだろ」

「エイトさんは黙っててくださいよ！」

「えつと……あなたは？」

「私はタンタルアンクル！アンクルって呼んで！よろしくね」

「シルバークロウです！よろしくお願ひしますアンクルさん」

二人が自己紹介を終えたことだし、ちよつとアドバイスをしてやるか。

「クロウ。心意システムはいろんな戦い方がある。自分の得意な戦い方で技を作ればいい。あとは修行あるのみだ」

「はい！ありがとうございます！」

「鴉さん。あなたに私の翼を貸してあげましょう」

「え？翼？」

レイカーの翼つてゲイルスラストーしかないよな。

予想は当たり、レイカーはゲイルスラストーを渡す約束をした。

「私から向かいに行きますのでここにきてくださいね」

「わかりました！」

「当然俺も行くぞ」

「あ！私も行っていいですか？先生とエイトさんのリアルも知りたいですし！」

「ええ、いいわよ」

「やったー！」

そんな喜ぶことか？

俺は別にいつ会っても構わないんだが。

まあいいや。

早く現実世界に帰ってハルユキに会う準備をしなきゃな。

「じゃあ現実世界に帰ったらすぐに向かうからな」

「はいー！」

そして現実世界に帰ってきた俺と楓子はもう私服に着替えていたから家を出て、駅に向かった。

バイクに乗らなかったのはハルユキやアンクルと会って少し歩くからである。

それだどこかにバイクを止めに行かなきゃならないから電車で行くことにした。

第9話 対面

ハルユキ s i d e

「ええつと……ここでもいいのかな？」

僕は修行が終わってからエイトさん／奨真さんとレイカーさんとアンクルさんのリアルと会う約束をしてファストフード店の前で待っていた。

しばらく待っているところある女性に声をかけられた。

しかも美人さんだった。

「あなたが鴉さんですね」

「えっと、もしかしてレイカーさんですか？」

「ええ、そうですよ」

「でもなんでわかったんですか？」

「こんな時間に制服でずっとここにいる中学生なんてそうそういませんよ」

た、確かに……。

あれ？こっちに向かっている人は奨真さんかな？

「楓子、一人で先行くなよ」

「ごめんごめん、鴉さんがどんな人か気になって」

なんか知り合いみたいな感じだな。

「お、お待ちせしましたー!!」

レイカーさんたちがきた方向と逆の方向からアンクルさんと思われる女の子がやってきた。

「これで全員だな。まずは自己紹介だ。俺は橘奨真、デュエルアバターはブラウンクリ

エイトだ」

「倉崎楓子です、デュエルアバターはスカイレイカーです」

「有田春雪です、デュエルアバターはシルバークロウです」

「立花伶弥たちばなれみです！デュエルアバターはタンタルアンクルです！」

「よし！まずは移動するか」

僕たちはどこかに移動を始めた。

その途中で僕は師匠と奨真さんがどういう関係なのか気になって聞いてみた。

「あの！師匠と奨真さんはどういう関係なのですか？」

「あ！わかりました！二人は恋人同士ですね！いやー先生は超絶美人で奨真さんは超絶イケメン！絵になりますねー」

え！もしかして本当に恋人同士なのかな！

「ま、まあそうだな。恋人同士だ」

「奨真君、別に夫婦でもいいのよ。だって私は奨真君の婚約者なんだから」

え……婚約者？
え、ええええ
!!!!

「ええええ!!!」

「こ、こここここ婚約者!?!」

「楓子! 恥ずかしいからやめてくれ!」

「そう? 私は全然恥ずかしくないけど」

「俺が恥ずかしいんだよ！はあ……まあいいや。とりあえず喫茶店についたし中に入るぞ」

「ええ」

「はい！」

僕たちは喫茶店に入り、席に座って直結ケーブルをニューロリンカーにつけて直結し、加速して師匠からゲイルスラストーを受け取った。

「鴉さん。あなたならきつと大丈夫よ。頑張つてね」

「はい！頑張ります！」

僕は先に帰ってその場を後にした。

ハルユキ
s i d e
o u t

奨真side

「いやー先生が奨真さんの婚約者だったなんて。ちなみにプロポーズの言葉は？」

「それはね」

「ああああ!!! 言うな言うな!!」

「秘密よ」

「ええー」

「まったくレミのやつ……。」

隙があつたらすぐにこんな事を聞く。
ああそうだ。

「レミ。せつかくだし家にくるか？」

「え？いいんですか？」

「もちろんいいわよ。私も歓迎するわ」

「もしかして……一緒に暮らしてるのですか？」

レミのやつ今日で何回驚いてるんだろうな。

「ああ」

「ええ」

「もう結婚したらいいんじゃないですか？」

「法律でまだ無理だろ。アホなこと言っていないで行くぞ」

「あー！またアホって言いましたね!!」

ギヤーギヤー喚くレミとそれを優しく見守っている楓子と一緒に家に帰った。

第10話 お泊まり『前編』

電車を降りて家に帰ってる途中で俺は見覚えのある人の後ろ姿を見つけた。
向こうも俺達に気付いたみたいで振り向いた。

「奨真さん！」

「綸と白雪」

「何をしてるの？」

「か……買い物をしていたんです……」

「へえ、つていうか二人仲よかつたんだな」

この二人が一緒にいるところを見るのは初めてだな。

「あの一この二人は？」

「く、日下部繪です」

「白雪姫です。よろしくお願いします」

「立花伶弥です！よろしくね！」

そうだ。

せっかく二人に会ったんだし、二人も家に招待するか。

「二人とも。今日家に泊まらない？」

「え？」

「あの……急に家に行っても……迷惑じゃ……」

誘おうと思ったら先に楓子が言ったみたいだな。

でも繪は迷惑になるんじゃないかと思ってるみたいだ。

「迷惑なんかじゃねえよ。俺からも言おうと思ってたし」

「それに私もこれから家に泊まるんですよ」

「だから二人さえよかつたら来るか？」

「じゃ……じゃあお言葉に甘えて」

俺たちは繪と白雪を加えて家に向かった。

家に入るともう母さんが帰ってきていた。

「おかえり！楓子から事情は聞いたから準備万端よ！綸ちゃん、白雪ちゃんいらつしやい！そしてあなたが伶弥ちゃんね。いらつしやい！」

一瞬で凄い量を喋ったな……。

っっていうかいつの間に楓子は母さんに言っただ？

俺は楓子に小声で話しかけた。

「いつの間に話したんだ？」

「奨真君が三人と話してる時に伝えたわ」

「そうか」

「四人ともお風呂に入ってらっしゃい！あゝ、心配しなくてもうちのお風呂は広いからね
！」

「そうよ。だからいつも奨真君とあんなことやこんなことも」

「だああああああ!!!
楓子やめろ!!」

「あ……あんなことや……こんなこと……」

「しよ、奨真さん!? 先生に何やってるんですか!?!」

「その話はもう終わりだ!! ほら! 早く風呂に入ってこい!!」

まずほとんど楓子が俺が入ってる時に入ってきてるんだろ……。

「ぜーったいに覗かないでくださいよ!!」

「覗かねえよ!!」

「あ、奨真君。楓子達の着替えをお願いね」

「あ、ああわかった」

四人は風呂場に向かい、俺は着替えを取りに行った。

楓子
s i d e

私たちは脱衣所に入り、服を脱いでいた。

私はブラを外そうとした時、何か視線を感じた。

「何？」

「い、いやーさすが先生だなーっっておもって…」

「繪さん。少しは成長しましたか？」

「いえ……全然です。白雪さんは？」

「私もです……」

みんなの視線は私の胸を見ていた。

「だ、大丈夫よ！みんなも大きくなるわ！でもいいことばかりじゃないのよ！肩もこるのよー！」

「それは持つてない人にはわからないです！」

「ええ……」

「でもどうやって大きくなったんですか？」

「どうやって大きくなったかか……」。

「もうあれしか思いつかないけど……」。

「いつの間にか大きくなってたつていうのもあるけど、やっぱり奨真君に愛されてるからかな」

「う、羨ましい」

「いいですね！私にも触らせてください!!」

「キャアアツ!!」

私は伶弥に胸を揉まれていた。

そろそろお風呂に入らなきや奨真君が入れないままなのに。

そんな時だった。

「おーい。着替えを置いて……とく……ぞ……」

「「「え？」」」

楓子
s i d e
o u t

奨真
s i d e

「これとこれでいいかな」

俺は俺と楓子が中学の頃にきていた服を持って浴室に向かった。けど脱衣所の方はなんか騒がしかった。

まあでも風呂呂の中で騒いでるんだろ。

俺はそう思っただアを開けたが、俺の予想は外れてしまった。

「おーい。着替えを置い……とく……ぞ……」

「「「え？」」」

俺が見た光景は下着姿の綸と白雪と伶弥、そして伶弥に胸を揉まれている楓子だった。

俺は驚きのあまり、フリーズしてしまった。

「きゃあああああ!!! 奨真君見ないで!!!」

そう言われて俺は思考が回復した。

「(い)い(い)い(い)めん!!!」

俺はすぐに脱衣所を出ようとした時、伶弥がこっちをみてこう言った。

「奨真さん。最低です」

うぐっ!?

結構きつい。

はあ……。

なんか今夜は長く感じそうだな。

第11話 お泊まり『後編』

「はあ……」

さっき俺はみんなの着替えをうっかり覗いてしまった。
不可抗力でもレミにああ言われたのはショックだった。
他の子にも悪い印象を与えてしまったかもしれない。

「奨真君も男の子なんだね」

俺が落ち込んでる時、母さんが俺に話しかけてきた。

「母さん。俺はもともと男だし落ち込んでる時にそんなこと言わないでくれ」

「あら？相当参ってるみたいね。で、どうだった？みんなのは・だ・か♪」

「参ってるように見えてるのにそんなこと聞かないでくれよ!!それに裸じゃなかったし下着着けてたし!!」

「そんなところも見てたんだ」

「うぐつ！一応答えるけど……みんな……よかつたよ」

「その中で一番は？」

グイグイくるな……。

母さんもわかかってると思うけど答えるか。

「ふ、楓子……だ」

「やっぱり！ 奨真君ならそういうと思ってたわ！」

そういうと思ってたら聞くなよ!!

俺は心の中でツツコミ、立ち上がった。

そろそろ上がってくると思い、部屋に着替えを取りに行つて、脱衣所の前で待つことにした。

「おーい。楓子まだかー？」

『もうすぐよー！あと着替えるだけだからもうちよつと待ってねー！』

俺は楓子が出てくるまで待っていると脱衣所から声が聞こえてきた。
たぶん着替えながら何か話してるんだろう。

『奨真さん本当に最低です！覗かないって言って覗いてるじゃないですか!!』

『でも……あれは不可抗力だと…思うんですが……』

『うんうん』

『レミ。あんまり奨真君を責めないでね』

『先生がそういうなら……』

みんな優しいな……。

俺を許してくれてるのか。

着替え終わったみたいで脱衣所から出てきた。

「お待たせ！つてなんで泣いてるの？」

「いや……みんな優しいなって思ってた」

「そ、そう？」

いつの間にか泣いていた俺は脱衣所に入って風呂に入った。

奨真が風呂に入って数分後、奨真がリビングに来た時はもう晩御飯が並べられていた。

奨真が入ってる間に四人が作ったらしい。

「「「「いただきます！」」」」

「おお！美味しいなこれ！誰が作ったんだ？」

「あ！それは私が作ったんですよ！」

奨真が食べた肉じゃがはレミがつくったものだった。

他にも論はポテトサラダ、白雪は豚肉の炒め物、楓子は唐揚げがテーブルに並べられていた。

「みんなの料理どれも美味しいな！」

「やりましたね繪さん！」

「はい！白雪さん！」

白雪と繪はハイタッチして楓子とリカは微笑んで見守っていた。

食べ終わり、片付けを終わらせてから奨真はリカに三人はどこで寝るのかを聞きにいった。

「母さん。三人はどこで寝るんだ？」

「さすがに楓子の部屋にみんな入らないから一人だけ奨真君の部屋になるわ。誰が奨真君の部屋で寝るかはちゃんと話し合ってるね」

「おい……マジか」

「!?!」

「私先生と一緒にがいい!」

「繪さん。ここは公平にじゃんけんで決めましょう!」

「ま、負けません!」

「じゃーんけーんぽん！」

繪はチヨキを出し、白雪はグーを出して白雪が勝った。

「奨真さん、今夜はよろしくお願ひします！」

「お、おう」

「奨真君。白雪に変なことしたらダ・メ・よ」

「っ!?わ、わかりました……っ……つてするか!!」

「なら安心ね」

それなら時間が過ぎ、寝る時間になった。
奨真と白雪は楓子の部屋の前で別れた。

「おやすみなさい」

「お、おやすみなさい」

「おやすみー!」

「おう、おやすみ」

「おやすみなさい」

奨真と白雪は中に入り、奨真は自分のベッド、白雪は床にひいている布団に入った。奨真が寝ようとした時、白雪が話しかけた。

「奨真さん」

「ん？どうした？」

「ありがとうございます。私とサツちゃんを仲直りさせてくれて」

「気にすんな」

「奨真さんならきつと……私のこと救ってくれるはずですね」

「?どういう意味だ?」

「ふふっ、なんでもありません」

白雪はそう言って眠り、奨真も白雪が寝たのを確認してから眠った。

第12話 翌日の朝

次の日……。

俺はいつもより早く起きて考え事をしていた。

それは昨日白雪が言っていた言葉だ。

『奨真さんならきつと……私のこととも救ってくれるはずですね』

どういふことだ？

白雪には何か秘密があるのか？

まさか加速研究会とグレーマインドが関係してるのか？

「……ちよつと外を走ってくるか」

俺は横で寝ている白雪を起こさないようにして着替えて、外に走りに行った。

「はあ……はあ……はあ……」

しばらく走っているとフードを被った青年とすれ違おうとした。

その時、青年は小さな声で、いや……まるで俺にしか聞こえないような声で言った。

「あなたが橘奨真さんですね」

「っ!？」

俺は驚き、立ち止まって青年をみた。

その青年も足を止め、こっちに振り向いた。

「何で俺の名前を知ってる」

「あなたほどの学校の有名人はそうそういませんよ。自己紹介がまだだったね。俺は葉山三郎。あなたがバーストリンカー『ブラウンクリエイト』だということももちろん知ってます」

「何故知ってる。お前は何者だ！」

「会長から聞いてないんですか？なら言いましょう。『グレイマインド』って言えばわかるかな？」

「っ!？」

こいつがグレイマインド。

白雪を操り、サツチにライダーを殺すように命令したやつか！

俺は顔を覚えようと葉山の顔を見ようとしたが、フードを深く被ってるせいか見ることができなかつた。

「お前の目的は何だ！何故コスモスを操ってロータスにライダーを殺させた!!」

「さあ？何ででしょうね？とりあえず俺は用事があるから失礼するよ。また会うといいですね、ブラウンクリエイト」

俺は追いかけることが出来なかった。

葉山と名乗ったやつから出てきた禍々しいオーラにビビってしまったからだ。

「お前の目的はいつたい何なんだ」

誰もいない道で俺はそう囁いた。

俺は家に帰り、扉を開けて自分の部屋に戻ろうとした時に楓子と会った。

「奨真君、どこに行ってたの？」

「早く目が覚めたからちよつと走ってきた」

「そう。白雪が心配してたわよ」

「わかった」

俺は自分の部屋に入ろうとしたが、もしかしたら白雪は着替えてるかもしれないと思

い、ノックをした。

何故か楓子はそれを見て小さく笑っていたが気にしないでおう。

「白雪、入っても大丈夫か？」

『奨真さん!?!は、はい!大丈夫です!』

俺は白雪の了承を貰って中に入った。

中に入ると白雪は私服に着替えていた。

相変わらず白いな……。

「なあ白雪、ちょっと聞きたいことがあるんだけどいいか？」

「は、はあ……大丈夫ですが……」

白雪ならグレイマインドのことを知っているはずだ。
そのことを聞いてみよう。

「グレイマインドとはリアルでも知り合いか？」

「っ!？」

「その反応は知ってるってことでもいいのか？」

「……………」

「無言でも知ってるってことにするぞ?」

「……………知ってます。でも、それがどうかしたんですか」

「あいつの……………加速研究会の目的を教えてください」

「……………私は会長の座を降りたので詳しくはわかりませんが教えましょう。彼らの目的は私です」

「どういうことだ?」

「私の心意は消えたものを生き返らせることができるのは知ってますよね。その力を悪用してとんでもないものを呼び出すつもりなのです」

「でも何で白雪を操ってサッチにライダーを殺させたんだ？ライダーと加速研究会は関係ないだろ？」

「それが関係があったのです。ライダーは私以外で加速研究会の目的を唯一知っていたレベル9。それを止めようとしたライダーが邪魔だったのでしよう。そして私は不意を突かれて操られてしまった」

「なるほどな……。それでそのとんでもないものって？」

「それは……この加速世界を変えてしまうかもしれないもの……聖杯」

「聖杯？」

「聖杯については私もわかりませんが、それはとんでもないものだってことはわかりま
す」

「聖杯については加速研究会に聞くしかないってことか……」

「そうですね」

でも俺と白雪だけでは成すすべもない。

ネガ・ネビユラスのメンバーを集めるか……他のレギオンにも協力してもらえないな。

「このことについてなんだけど、ネガ・ネビユラスのメンバーが全員集まった時にしても構わないか？」

「大丈夫です」

「白雪。お前は絶対に救ってみせる、だから心配するな。お前には俺たちがついてる」

「っ!?!……………はい!」

白雪は満面の笑みを浮かべて、俺と白雪は部屋を出た。
出ると部屋の前には楓子とレミと繪が立っていた。

「朝ごはんが出来てるわよ」

「奨真さんが遅いからなかなか食べれないじゃないですか！白雪さんに何したんですか
！」

「何もしてねえよ!!」

「お……落ち着いて」

朝から騒がしいが、そんなことを気にせず下に降りて朝ごはんを食べた。それから片付けをして、三人を見送るために外へ出た。

「「ありがとうございます！」」

「いつでも来いよ」

「歓迎するわ」

「はい！奨真さん、言つときますけど先生は渡しませんよ！」

「そんな生意気なことを言ってるのはこの口か！ だいたい楓子は最初から俺のもんだ
！」

「いい痛いです！ ごごごめんなさい！ 引つ張らないで！」

「仲……いいですね」

「喧嘩するほど仲がいいとはこういうことですね」

「ふうっ」

レミと軽く戦ってから、三人を見送った。

それにしてもあいつは本当に俺をいじるのが好きだな……。

「さて、中に入るか」

「えええ！」

楓子は俺の腕にしがみついて体を密着させてきた。

そのせいで楓子の柔らかいものが腕に当たってしまう。

「楓子、当たってるんだが」

「ふふっ、当たってるのよ♪」

「そ、そうか」

俺は理性を保ちながら、今後どうするかを考えた。

第13話 沖縄での戦い

黒雪姫 *side*

「うむ。君たちの頼みはその面倒事を作ってるやつを退治をして欲しいってことではないんだな」

「はいー！」

「なら構わない。じゃあ今日の夜でいいかな？」

「わかりました！」

私は沖縄のバーストリンカーの女の子二人に面倒事を作っているやつを退治を依頼された。

特に断る理由もないので依頼を受けることにした。

そして夜……

私は琉花と真魚を連れてホテルのエントランスの端の方の椅子に座って直結した。

「アンリミテッドバースト！」

「ネエネエ！こつちこつち！」

「待ってよー！」

「元気な子たちだ」

私は二人の後を追うと、古ぼけた店が見えてきた。

二人はその中に入っただけだったので私も中に入ると、そこには懐かしいやつが座っていた。

「師匠ー！強力な助っ人を連れてきましたー！」

「強力な助っ人っていったって相手は神獣級エネミーもいるんだぞ。どうせなら黒の王とかを連れてきて」

「相変わらずだな、クリキン」

「私がクリキンと呼んだ人物は真っ赤なボルトの形をしたデュエルアバター『クリムゾンキングボルト』だった。」

「うお!?! ロ、ロータス!?! お前から本当に黒の王を連れてきてくれたんだな!!」

「そんなにすごい人なの!!」

「ビックリです」

私はとりあえず座ろうと思い、クリキンの隣に座った。

するとまた扉が開き、私は扉を見るとまた懐かしい人物二人と出会った。

「こんなところに店なんかあったのか」

「でも落ち着けそうなの」

「ル、ルーク!?それにカレン!？」

「つて!?!ロータス!?!なんでここに!?!」

「ルーくんが続いてロータスまで……。今日はいろんな人と出会うの」

私は二人を座らせて、色々と話をした。

「へえ、君たちも修学旅行なのか」

「俺も最初カレンと会った時は焦ったぜ」

「私もなの。でもここでもルーくんと会えて嬉しいの」

「ここでもラブラブなのか……」。

「できれば私もハルユキ君と……いや、今は考えるのをやめておこう。」

「そんな時、いきなり店が揺れ始めた。」

気になり外に出ると、神獣級エネミーをテイムしたバーストリンカーがいた。

「ネエネエ！あいつです！」

「お前が面倒事を作ってる張本人か！」

「面倒事とは失礼だな。このニツクの技を試してただけさ」

「それが迷惑なんだよ!!」

「そうだそうだ！」

「ドルフィン、メロウ。そこらへんに落ちてる金属を一ヶ所にまとめてくれ」

「了解です！」

「わ、わかりました！」

多分クリキンはあれを使う気なのだろうな。

「何をしようとしているのかわからんが、この俺『サルファポッド』とニツクの敵ではない
！」

「俺も手を貸すぜ！ロータス！」

「私もなの！」

「二人とも……心強い!!」

私たちは心意技を使って神獣級エネミーを無視してサルファポッドに攻撃した。

「ヴオーパルストライク!!」

「メイルストロム!!」

「グランドデス!!」

私は黒い光を放ち、カレンは水を放ち、ルークは盾を地面に叩きつけて地割れを作った。

相手も技で対抗してきた。

「チャコールスモーク!!」

「煙幕か!」

「私に任せて!」

カレンは水で煙幕を払おうとしたがサルファポッドが追い打ちをかけてきた。

「スコーキングインフェルノ!!」

「ドレインクラッシュ!!」

ルークが私たちの前に出て、盾で攻撃を防いでくれた。

「この煙は煙幕ではない。これは火薬だ!!」

「うわああああ!!」

私たちは衝撃で吹っ飛び、地面に叩きつけられてしまった。

「師匠! 準備出来ました!」

「よっしゃあ!!」

私は顔をクリキンに向けると、鉄の塊が全てクリキンに集まっていくのが見えた。
やがてクリキンは巨大ロボットに変身した。

「な、なんだあれ?」

「わからないの」

「この姿になったクリキンは今の赤の王が出てくる前までは加速世界で最強の遠距離砲撃型と呼ばれていたんだ」

私たちはオブジェクトの陰で二人の戦いを見ていたが、クリキンは敗北してしまっ
た。

「ドルフィン！メロウ！クリキンを頼む！」

「りよ、了解！」

「オーバードライブ！モードブルー！」

「フェイズトランスキーン
相転移鋭！」

「ジュエルアームド！」

「チャコールスモーク!!」

サルファポッドはまた煙幕を作ってきたが同じ手は効かない！

「スターバーストストリーム!!」

私は16の光を放ち煙幕を払っていった。

煙幕が出て相手の視界も悪くなって間にルークは後ろへ回り込み、サルファポッドにドレインクラッシュで吸収した衝撃を放った。

「落ちろおお!!」

「ぐああ!!」

だがサルファポッドは神獣級エネミーからは降りなかった。

くそっ! どうすれば!

私がそんなことを考えていると突然もう一人のバーストリンカーが現れた。

それはまるで魔法少女のようなアバターだった。

そいつは何か言って、フィールドを変えた。

フィールドは海に変わって、ドルフィンとメロウがシェイプチェンジした。

二人は泳いでサルファポッドの周りに渦潮を作って二人を離れさせた。

「やりやがったな! 来いニツク!!」

サルファポッドは神獣級エネミーを呼んだが、ずっと操られて嫌だったのか、サル

フアポッドを襲った。

そしてサルフアポッドのHPは無くなった。

フィールドは元に戻って、私はルークとカレンの元に駆け寄った。

「助かったよ。ありがとう」

「いや、気にすんな」

「な、なあ二人とも。もう一度ネガ・ネビユラスに戻ってきてくれないか？」

「「うん？」」

「ネガ・ネビユラスは復活したんだ。でもまだ勢力は足りない。そのためには君たちの力が必要なんだ!! 君たちだけじゃない! ういういやフーコ、奨真君にグラフの力が必要だ!」

「……そこまで頼まなくても戻るつもりだったぜ」

「もちろんなの。ただいま、サツチ」

私は嬉しくなり、涙を流していた。

デュエルアバターだから涙なんか出ないが、私は泣いていた。

そして笑いながら言った。

「ああ! おかえり……ルーク、カレン!」

こうして新生ネガ・ネビユラスに、エレメンツの一人、アクアカレントとネガ・ネビユ

ラスで一番の防御力を持つエメラルドルークが加わった。

第14話 能見との決戦

ハルユキ side

「これで決着をつけよう！」

「ああ！」

「……………」

この前は中途半端に終わってしまったけど、今回は無制限フィールドだ。制限時間もないし即離脱もできない。

せつかく師匠から翼を借りたんだ。
負けるわけにはいかない!!

「「アンリミテッドバースト！」」

無制限フィールドにきて、僕らは能見が来るのを待っていた。
そして能見は翼を広げて降りてきた。

「さてと、逃げずにきましたか。じゃあ……」

能見はアイテムストレージからあるアイテムを取り出し、僕に投げた。

「これに自分のポイントを全部入れてください。決着がつけばその中に入ったポイントは勝者のものです」

「……わかった」

僕は自分が持つてるポイントを全てアイテムの中に入れた。

タクも自分のポイントを全部入れた。

「それじゃあ始めましょうか!!」

「っ!？」

僕は戦闘態勢に入ったが何処からか突然黒い板が僕を挟もうとした。

「ぐう!!なんだこれ!!」

「バイス! 足止めを頼んだぞ」

っ!?! タク一人じゃ危険だ!!

僕はタクに逃げるように言おうとしたが声が出なかった。

「無駄だよ。その中では声を発することはできない。しばらくそこでじっとしててね」

「ハル、大丈夫。僕も修行して強くなったんだ。簡単にはやられないさ」

タクはそう言つて、自分の強化外装の先端を握つた。

強化外装は光り、タクが剣を抜刀するような動作をすると強化外装の形が刀に変わった。

「シアンブレード!!」

「リアルな剣道で負けて、こっちの世界で勝つつもりですか！笑わせるな!!」

能見も負けじと心意で禍々しい剣を作り、タクと戦つた。

剣が激しくぶつかり合い、お互いの体力が少なくなってきた時、能見はチユのところ

に行き、腕を掴んだ。

「能見!!チーちゃんに触るな!!それにチーちゃんはこの戦いに関係ないはずだ!!」

「確かにここで倉嶋先輩を殺してもサドンデスにはならない。けどこうやることはできないんですよ!!」

能見は左手の触手をチユの腕に絡めて引き千切った。

嫌な音が鳴り、チユは腕を抑えて悲鳴をあげた。

「ああああああ!!!」

「やめろ!!頼む……やめてくれ……」

タクはシアンブレードを手から離し、地面に落として膝をついてしまった。能見はそれを見て、タクをいたぶり始めた。

シアンブレードを握れないように両腕を切断して、ジワジワとHPを削っていった。

(やめろ!!やめろおお!!)
!!!

僕は体が崩壊してもおかしくないぐらい力を出し、黒い板から脱出した。

そのせいで僕は力を出し切ってしまい、地面に手をついてしまった。

黒い板を操っていたデュエルアバターも驚いてるみたいだった。

「バイス。君が手を抜くなんてらしくないじゃないか」

「私は常に全力だよ。逆に彼が凄いなだよ。褒めるなら彼を褒めるべきだね」

「まあいい。バイスの拘束から抜け出したのは素直に褒めてあげましょう。でもそこからは何もできない!!おとなしく友達が消えるのを見てるがいい!!」

「つ!?や、やめろおお!!」

僕は立ち上がって能見のところに駆け寄ろうとした時、突然黒い光が能見の近くに落ちた。

能見は慌てて避けて、タクから離れると黒い光がやってきた方向を見た。僕もつられて見ると、そこにはあの人があった。

「先……………輩……………」

ペガサスのようなエネミーに乗った先輩がこちらを見ていたのだ。先輩はエネミーから降りると、手綱を回収してエネミーを逃していた。

「遅れてすまない！」

「先輩!!」

「マスター!!」

「あいつは私が足止めしておく！君たちは君たちの敵を討つんだ!!」

「はー」

タクは立ち上がろうとしたがそれを僕が止めた。

「ハル？」

「タク、あいつは俺にやらせてくれ」

「……わかった」

僕はゲイルスラスターを装着させようとした時、突然声が聞こえてきた。

「悪いけど、君はもう終わりだ」

何も無いところからいきなり灰色のデュエルアバターが出てきた。

いや、出てきたというかまるではじめからそこにいたかのように現れた。

「インビジブル透明化か」

「この距離で避けるのは不可能だ。マインドコントロール！」

灰色のデュエルアバターの目を見ると、視界が歪んで見えるようになっていた。そのまま僕の意識は消えるかと思ったが、また新たな助っ人が現れた。

「やっと見つけたぜ!!」

突然現れた新たな助っ人の攻撃を灰色のデュエルアバターは避け、僕は技から解放された。

意識は元に戻り、視界も良くなってきてから彼を見ると両手に剣を構えた奨真さんがいた。

第15話 決着

目眩もなくなり、意識も元に戻ってきた僕は奨真さんのところに駆け寄った。

「奨真さん！どうしてここに？」

「ん？サツチに言われてきたのもあるが、途中であいつを見つけてな」

奨真さんの目線にはフードを被った灰色のデュエルアバターがいた。

僕はあいつを見た瞬間目眩がして……。

「あいつは人を操る力を持っている。気をつけろ」

「は、はい」

「全く……次から次へといろんな人が来ますね」

「クロウ。お前にこれをやる」

奨真さんは靴型の強化外装をストレージから取り出し、僕に渡してきた。

「これは？」

「ジェットレッグだ。ゲイルスラスターと一緒に使えばさらに早く飛べるはずだ」

「ありがとうございます！」

僕はジェットレッグを受け取り、空に飛んでいる能見のところに向かうために装着した。

「着装!!ゲイルスラスター!!ジェットレッグ!!」

「決着をつけましょう!!この世界に飛行能力者は二人もいない!!」

僕は腕を前に出し、銀色の腕から光を放った。

「レーザーランス!!」

「くう!!」

「まだだ!!もつとだ!!」

イメージだイメージ!!

「イメージ!!!」

あと少しで届くところでゲイルスラスターの出力が下がり、速度が下がってしまった。

ゲージがチチチツと下がっていき、エネルギーゲージを輝かせていた最後の1ピクセルが、消えた。

能見はチャンスと思い、笑みを浮かべて右腕を振りかざそうとした。もうダメだと思ったけど、師匠と先輩、奨真さんの声が聞こえた。

『……………さあ、鴉さん。もう少し』

『……………ほら、頑張れ。もう少しだけ』

『……………お前の力はこんなもんじゃねえだろ』

三人に右腕を引かれ、背中と肩を押された感じがしてゲイルスラスターのゲージがチチツとまた増えていった。

そして残る力の全てを右手に集中させた。

「なにっ!？」

「いっけえええ!!！」

僕は相打ちになっても構わない。

タクが勝って僕のポイントを渡して、僕の全てを託されるなら僕の戦いは無駄にはならない。

だが、あともう少しというところで最悪なことが起きてしまった。

「シトロン・コール!!!」

チュがベルから放った光を能見に浴びせて、HPを回復させた。

ひび割れ、焼け焦げた装甲を癒して、やがて全てが元どおりになってしまった。

「……なんで………なんでなんだよ!!! チュ!!!」

「………く、くは、ははは」

「!!!」

「見ろ、全く健気な忠誠じゃないか!? どうだ……これが、力! これが、支配するということごとだ!! 友情! 絆! そんなもの要るか! 略奪による支配!! それこそが、唯一、絶対的な力なんだ!! ははは……はははははははははは!!」

もうだめだ。

僕のHPはもう少ない。

満タンの能見に勝てるわけない。

「さあ………、決着の時だああ!!」

僕は目を瞑り、体が分散される覚悟をした。

その瞬間……。奇跡が起きた。

目を瞑っててもわかるくらいに光が能見から放たれていた。

僕は目を開け、能見を見ると翼が光、そして消えていった。

「な……………」

能見は両眼を見開き、喘いだ。

「な……………ぜ……………なぜ、僕の翼が、消えて……………」

能見は翼を無くしたことにより、地面へと落下していった。
すると今度は僕の背中に何かが生えた。

この感覚は……………。

「お……………おかえり、ありがとう」

僕の背中から銀翼の翼が生えた。

そして落下している能見に突進した。

僕はゲイルスラストターとジェットレック、そして翼を使い、猛スピードで急降下した。翼は無くなったけどHPは満タンだ。もうこれで決めるしかない!!

「レーザーランス!!!」

右手から放った光線が能見を貫いた。

そのまま落下した能見は地面に激突し、クレーターをつくった。

僕はスピードを落とし、地面にゆっくりと着地した。

僕とタク、チュは砂埃ができているところに向かった。

そこを見ると頭と胸郭、左手から再生しかけた短い触手だけの能見だった。

「……………なぜ。なぜ……………僕の翼は消えるんだ」

「それは、あたしの力が『回復』じゃないからよ」

「ど、どういう……ことだ」

「あたし、バーストリンカーになった時からずっと不思議に感じてた。何であたしに『回復』なんて力を与えられたんだろう、って。でもね、この間ハルとタツくんがあんたと戦った時に、あんたをヒールした時気付いたの。あの時、回復したのはアバターと傷だけじゃなかった。右手の武器まで復元した。そんなのヒールじゃなくて修理だ。それでわかったんだ」

チユは息を吸い、能見にはつきりと告げた。

「あたしの力は『回復』じゃない。時間を巻き戻す力なの。技をかけたアバターの時間を

さかのぼらせる。だからこの力を使えば、きっとハルの翼を取り戻せる。ダスクティカーがシルバークロウのアビリティを奪う前まで時間を巻き戻して、全部なかったことにできる、って」

「そう…だったのか」

「……何だと……。裏切ったのか。この僕を裏切ったのか!!」

「裏切ってなんかない。最初は動画のことで脅されたから仲間になったけど、それ以降のことは動画と関係ない。自分の意思で従い、必殺技をレベルアップして巻き戻せる時間を延ばすため……そして今日のこのワンチャンスを狙うためよ。だからあたしは、あれからあんたの仲間になってなんかいない!!」

「全く……どいつも、こいつも、馬鹿ばかりか。お前らにはもううんざりだ。僕は帰るよ。全員のリアルをばら撒いて、始末は誰かに任せるさ。僕は転校して、また僕の王国を創る。さあバイス！僕を連れて離脱しろ！」

「それは無理な話だよ。この状況でできると思う？」

「なら……マインド!!僕を連れて」

「無理だな。無限の剣製に隙を作ることがどれだけ難しいか」

「……なら努力しろ！主力の僕がいなくなれば『研究会』だって困るだろう」

「それは違うな。お前は主力じゃない。主力はこの俺だ」

「じゃあそろそろ帰ろうかマインド君」

「ああ」

黒いアバターは地面の影に潜り、マインドは透明になって消えていった。
残された能見は自力でそこから逃げようとしていた。

「くそ、くそくそくそ!!認めない!!絶対に認めない!!」

「……………哀れだな」

「誰か……誰でもいい。僕を助けろ！ そうだ、ポイントをやるぞ。なんならレギオンにも入ってやる。だから」

「ハル……終わらせよう」

「……………ああ」

僕はゆっくりと能見に近づき、右手に光を纏った。

「っ!? 嫌だ!! 失いたくない! 僕の加速だ!! 僕の方だ!!」

僕は右手を振りかざし、能見を真っ二つにした。

能見のアバターは消えて、空を舞って散った。
長いようで短かった戦いは幕を降ろした。

第16話 集結

能見を倒し、一息ついていた。

「終わったな。ハルユキ君」

「はい……」

「チツ！逃げられたか!!」

「奨真君。あいつはあの時姉さんが言っていた……」

「ってことはあの灰色のアバターがグレーマインド!?」

「この場でグレーマインドのことを知っているのはチユ以外全員だ。だからチユは何のこと? って言いたい顔をしていた。」

「グレーマインド? それに奨真君? …… …… ってあなたは橘奨真さんですか!？」

「えっ!? チユ、奨真さんを知ってるのか!？」

「知ってるよ! 去年学校であったもん!!」

学校であつたって……もしかして奨真さんが派遣で来たときかな……。

「チユリちゃん……。君がライムベルだったのか」

「は、はい……」

「……回復か。その力、しっかりと磨けよ」

「へ………あ、はい!!」

チユは奨真さんにそう言われて気合の入った返事を返した。
するとチユは俺とタクの方を見た。

「あんたたちだけじゃ心配だから……あたしも入ってあげるわ。ネガ・ネビユラスに」

「え？」

い、今なんて？

「いいですよね！先輩！」

「もちろんだ！これからよろしく頼むよ！チュリ君！」

(ネガ・ネビユラスのメンバーが少しずつ増えていつてるな)

「そうそう、ネガ・ネビユラスはハルユキ君とタクム君だけじゃないよ」

「え？ どういうことですか？ だって僕とタクと先輩しか……」

「そうだ。今のネガ・ネビユラスは先輩を入れても3人だけのはず。
なのに他にもいるっていったい……。」

「奨真君もよく知る人だ」

「俺のよく知る人？」

奨真さんのよく知る人……………。
いつたい誰なんだろ……………。

「カレンとルークだ」

「っ!？」

カレン？ルーク？その人が奨真さんのよく知る人なのかな？
よく見ると奨真さんは固まっていた。

「……………そうか」

……なんか気まずいな。

とりあえず現実世界に帰るように言わなきゃ。

「と、とりあえず帰りましょうよ」

「あ、ああ」

僕は帰還ポータルに向かい現実世界に帰った。

それから数日が経ったある日、先輩が僕の家に来て来た。ソファーに座った先輩はどこか怒ってるように見えた。額に怒りマークがついてそうな感じがする……。

「その………本当に心配をかけてすみませんでした」

「心配した!! 本当に心配した!! もし君がいなくなったらって考えたら恐くなった!!」

「すみません………」

先輩は僕に抱きついてきて涙を流した。僕は先輩に謝ることしかできなかった。

「……でも、無事でよかった。それに領土も守ってくれたしな。何かして欲しいことはあるか？」

僕が先輩にして欲しいことは……。

「ずっと……ずっと僕の側にいてください」

「………な、!?………ななな何をいつてるのだ君は!？」

へ？僕何か変なこと言ったかな？

僕はさっき自分が言ったことを振り返った。

「……!? ちや、ちやうんです!! 決して変な意味で言ったわけじゃ!!」

「……はあ、わかった。ずっと君の側にいるよ。未来永劫な」

先輩はそう言って笑った。僕もつられて笑って、部屋には僕らの笑い声が響いた。

あ、そうだ。師匠と奨真さんにあれを返さなきゃ。

「先輩。これから僕はレイカーさんと奨真さんに借りてたものを返しに行きます。先輩も一緒に来て欲しいんです」

「……わかった」

僕はニューヨークリンカーの連絡先から師匠の連絡先を探し、メッセージを送った。送った後、僕と先輩は約束の場所に向かった。

奨真 s i d e

「……………」

「どうした楓子？」

「鴉さんがここに来て欲しいって」

「わかった。一緒に行くか」

「うん！」

俺は楓子をバイクの後ろに乗せ、ハルユキ君が言っていた場所に向かった。目的地につき、俺はバイクを止め、歩道橋に登っていった。

「奨真君、ありがとう」

「何が？」

「さつき奨真君が言ってくれたおかげで立ち直れた」

「……そうか」

俺たちは歩道橋を登って歩いて行くと、ハルユキ君とサツチがやってきた。
楓子とサツチは目を合わせたがすぐにそらしてしまった。

「あの一借りてた翼を返しにきました」

「取り戻したのですね。あなたの銀翼、希望を」

「はい」

楓子とハルユキ君は直結して加速した。

「バーストリンク」

「確かに受け取りました」

「奨真さん。あなたにも借りてたものを返しにきました」

俺はテーブルを受け取り自分のニューロリンカーにつけて、直結して加速した。

「バーストリンク」

「確かに受け取った」

「それではわたしはこれで」

楓子は一礼をして後ろを向き、歩いて行った。

けど、俺は楓子の元へは行かなかった。

なぜなら俺は今ここでサツチと元の関係に戻って欲しかったから。

ハルユキ君も同じことを思っていたらしく、サツチのことを見ていた。

サツチをここに連れてきたのも楓子と元の関係に戻って欲しかったからだろう。

「フーコ!!」

「「っ!?!」」

「帰ってこいフーコ！私にはお前が必要だ!!」

「……………サツちゃん」

楓子は振り返ると涙を流していた。

サツチも涙を流していた。

二人は走り、抱き合って泣いた。

俺は楓子が投げた鞆を取りに行き、ハルユキ君のところに向かった。

「よかったですね。二人が仲直りして」

「ああ、そろそろ他のみんなも呼び捨てで呼ぶか。これからもよろしくな、ハルユキ」

「はい！」

それから数分が経って、二人は泣き止んだ。

そして楓子はサツチにこう言った。

「私ね、足が戻ったの」

「本当か!?!よかったじゃないか!?!」

「ええ！」

「あつ！先生!!」

声ができる方を見ると、楓子のことを慕っているレミがこつちにやってきた。レミの隣には懐かしい人がいた。

「レミ、それと……」

「お久しぶりです！しよーにい、フーねえ、サツチん」

「「ういうい!?!」」

なんでういういがレミと一緒にいるんだ？

たまたま会ったから。いや、そもそもういういとレミは知り合いじゃないはず……。

「なんでレミがういういと?」

「たまたま会って友達になったんです!」

「久しぶりね!ういうい!」

「んー!んー!」

ういういを見ると、楓子の胸の中に抱きしめられて苦しそうにしているういういがいた。

「楓子！ういういが苦しそうだから！」

「あ、ごめんねういうい」

「相変わらずなのです……」

「ういうい、さつきフーコにも言ったのだが、戻ってきてくれないか？」

「もちろんなのです！」

「ありがとう！奨真君はまだ用心棒としてネガ・ネビュラスにいたけど、正式にネガ・ネビュラスに入ってくれないか？」

そうだった。俺は旧ネガ・ネビユラスでは用心棒だったんだ。
そうだな……………。

「そうだな、そろそろ正式にメンバーに入るか」

「なになに！ネガ・ネビユラス!! 私も入りたい!!」

「君もバーストリンカーなのか？」

「はい！立花伶弥です！アバターはタンタルアンクルです！」

「なら大歓迎だ！よろしく頼むよ！レミ君」

「任せてください！」

レミもネガ・ネビユラスのメンバーか………なんか旧ネガ・ネビユラスが全員集結した感じだ。

あとはグラフだけか……。

「いやーそれにしても奨真さんがうちちゃんと知り合いって聞いた瞬間、この人実は口リコン!?って思ったけど先生も知り合いだったみたいだから安心しました！」

「ロリっ!？」

「こんのやろう！」

隙あらば余計なことを言いやがって!!

「誰がロリコンだコラア!!」

「いいい、いたいいたい!!ごめんなさい!冗談ですから!」

俺はレミの頬を思い切り引っ張った。

「ううう、赤くなってる……」

「」「あははははははは!」「」

「「……はは」

歩道橋の上では俺たちの笑い声が響いた。

エレメンツ最後の一人、グラフィイトエッジを除いて、旧ネガ・ネビユラスのメンバーが集結した。

第5章 バーストリンカー達の日常
第1話 ローカルネット荒らし

「遅いな……」

「もうすぐ来ると思うわ」

『うわあ……凄い美人さんだ』

『キヤアアアツ!!何あの人かっこよすぎる!!』

放課後。

奨真と楓子は今、梅郷中の校門の前に立っていた。

奨真と楓子は梅郷中の生徒ではないから、梅郷中の生徒からしたら珍しく感じるのだからか、いろんな声が聞こえてきた。

二人が梅郷中の校門の前にいる理由は待ち合わせもあるが、黒雪姫から一緒に手伝つて欲しい依頼があるからである。

「おーいー！」

「やっと来たか」

声の主は奨真の親友、雪ノ下白夜であった。

白夜の隣には氷見あきらも一緒に走って来ていた。

「悪い！遅れた！」

「遅くなっちゃったの」

「気にしないで」

「よし、揃ったし行くか！」

奨真達は黒雪姫のいる生徒会室へ向かったが、なぜか奨真は別の方向に行っていた。

「奨真君!?!どこに行くの!?!」

「どこって生徒会室だけど」

「そっちは体育館よ！」

「えっ?」

実は奨真は方向音痴で初めて来る場所になると、目的地とは全く別のところに向かってしまうのだ。

初めて来る場所に迷うのは誰にでもよくあることだが、奨真の場合は地図を見ても全然違うところに行くのだ。

だから、道を覚えるまで誰かが一緒にいないとすぐに迷子になる。

「お前の方向音痴は相変わらずだな」

「しよーくん、面白いの」

「ほっとけ……」

「ほらほら、拗ねないの。さあ、行きましょう！」

楓子は奨真の腕を引いて、黒雪姫達がいる生徒会室へ向かった。

生徒会室……

「失礼します」

白夜を先頭に、順番に生徒会室へ入っていった。
中にはもう黒雪姫達が座って待っていた。

「すまないな、呼び出したりして」

「ダチが困ってたら助ける！それが俺のポリシーだ！」

白夜は胸を張り、拳を胸に叩いた。
それを見たあきは目を光らせていた。

「びゃーくんかつこいいの！」

「へへへ」

「黒雪先輩。この人たちが先輩の言つてた友達ですか？」

「ああそうだ。紹介するよ。眼鏡をかけた男子が雪ノ下白夜。同じく眼鏡をかけた女の子が氷見あきら。そしてこの胸の大きい美人さんは倉崎楓子だ」

黒雪姫は立ち上がって3人の自己紹介をした。

そして黒雪姫と白夜達3人は奨真がいないことに気づいていない。

「サツちゃん。私だけ自己紹介がひどいのは気のせい？」

「気のせいだ」

とりあえず座ってくれと言って3人を座らせたが、ようやく奨真がいないことに気づいた。

「そういえば奨真君は？」

「奨真君なら……あれっ!? 奨真君は!？」

「まさか……迷子になったんじゃない!!」

「まずいの! すぐに連絡しないと!!」

「私が連絡するわ!!」

楓子は梅郷中のローカルネットを使ってニューロリンカーで奨真に電話をした。電話をかけてすぐに奨真とつながった。

「奨真君!!今どこ!!」

『今は……ええつと……職員室前だ』

「待つてて!!すぐに行くから!!絶対にそこから動かないでね!!」

楓子は奨真の場所がわかってすぐに電話を切り、奨真のいる職員室前に向かった。ハルユキとチユリ、タクムの3人は奨真のことについて話していた。

「ねえハル、タツくん。奨真さんって方向音痴なの?」

「僕はリアルではあったことがないからわからないな」

「俺もそこまでは知らないかな……」

タクムの隣に座っていた黒雪姫は頭に手を当てて、呆れた顔をしていた。白夜とあきらもやれやれって感じの顔をしていた。

「フーコも大変だな……」

楓子が奨真を探しに行ってから暫くして、奨真の腕を引っ張ってきた楓子が帰ってきた。

「お疲れフーコ」

「た……ただいまサツちゃん。さて、奨真君。そこに正座」

「えっ？ いや今から依頼についての話をするんじゃない……」

「いいから正座しなさい!!」

「は、はい……」

楓子は奨真を無理矢理正座させて、説教をしていた。それを見たハルユキはかなり驚いた顔をしていた。

「あんな奨真さん初めて見ました……」

「私は昔一度だけ見たな」

「あれも似たようなもんだったよな……」

「あの時は本当に大変だったの……」

3年ほど前に旧ネガビュメンバ―で集まってシヨツピングモールに行った時に奨真一人だけ迷子になったのだ。

楓子はすぐに連絡して奨真を探しに行ったが、奨真はいろんな場所に移動していて全員で探してもなかなか見つからなかった。

見つかった後は楓子から説教を受けたのである。

「全く奨真君は！知らないところに行く時は私から離れちゃダメってあれほど言ってるでしょ!!」

「すいません……」

「ブレインバーストの時の奨真さんとは大違いだね」

「っていうかあの2人って付き合ってるのかな？」

「付き合ってるよ。前会った時に言ってた」

「へえ、そうなんだ。奨真さんは将来尻に敷かれるだろうなあ……」

確かに最近の奨真は楓子に説教をされてばかりなので尻に敷かれると思われてもおかしくないだろう。

「フーコ。その辺でやめてあげてくれ。奨真君が小さくなってるよ」

「……はあ。わかったわ。奨真君！家に帰ったら説教の続きよ！」

「ええ……」

楓子と奨真は席に座り、黒雪姫は全員が集まったのを確認してから本題に入った。

「ハルユキ君たちにはもう言ったが、白夜君とあきら、フーコに奨真君を呼んだのは、梅郷中のローカルネット荒らしの調査に協力して欲しかったからだ」

「ローカルネット荒らし？」

「ああ、以前から下校時刻までダイブしていた生徒が何者かに襲われたらしいんだ」

「襲われたって大丈夫なのか？」

「襲われたといっても装備を剥ぎ取られただけらしい」

「それはそれで大丈夫じゃないと思うの。とりあえず、えい」

ブスッ。

何がとりあえずなのかはわからないが、あきらは手をピースしてから白夜がかけている眼鏡をとり、そのまま指を白夜の目に刺した。

もろに食らった白夜は地面を転がっていた。

「ぬおー!!目がああああ!!つかどうか何がとりあえずなんだ!!」

「装備を剥ぎ取られたって聞いてびゃーくんはエッチな想像したと思ったから」

「してねえよ……」

「奨真君。説教を時間、延長してほしい？」

「絶対嫌だよ!!」

どうやら楓子も奨真が変な想像をしたと思ったみたいだった。

「この4人についていけない……」

「ほら、夫婦喧嘩はそれくらいにして。早速調査を開始しようと思う。4人にはゲストIDを送ってあるからそれを使ってくれ」

「「「「「ダイレクトリンク「「「「「」

梅郷中ローカルネット内にダイブしたみんなのアバターは、奨真は鍛冶屋の格好をしたアバター、楓子は背中から羽が生えた女神のようなアバター、白夜は西洋騎士の防衛兵のアバター、あきらは頭にカワウソの耳を生やした探偵のようなアバター、黒雪姫は大きな蝶の羽を生やしたアバター、ハルユキは小さなピンクの豚のアバター、タクムはブリキ兵士のアバター、チユリは猫のアバターである。

ダイブした時はもうローカルネット内はもう暗くなっていた。

作戦通り、女性陣が囿となり、男性陣で捕獲する方法でいくためにそれぞれ場所です
タンバイした。

「はあ……これが終わったら説教か……」

「ドンマイ」

「あははは………」

奨真達4人は女性陣に誰かが近づかないか見張っていた。

女性陣はローカルネット荒らしに勘付かれないように普通に話していた。

すると突然、刃物が擦れる音がして、全員がそつちを見るとかぼちやのマスクを被ったアバターが大きな鎌を持ってこちらに歩いてきていた。

かぼちやアバターは女性陣を追い掛け、女性陣は作戦通り二手に分かれた。黒雪姫と楓子、チユリとあきらで分かれ、かぼちやアバターはチユリとあきらを追っていた。

「かかったわね！」

「みんな！任せたの！」

射的の屋台の中へ上手く先導して、かぼちやアバターは射的の的になった。

「くらえ！」

「観念しやがれ！」

「射撃は得意じゃないがなんとかなるだろ！」

「FPSなら誰にも負けないぞ！」

4人は銃を乱射し、かぼちやアバターのかぼちやの仮面を破壊することに成功した。仮面の中身はなんと女の子だった。

「「「お、女の子!」」」

「チッ！」

少女は高く飛び、奨真達とは逆の方は着地したがすでに楓子達が回り込んでいた。

「もう逃げられないぞ！」

「へっへーん！」

「おとなしく降参しなさい！」

「逃がさないの！」

逃げ場がなくなった少女はまた高く飛び上がり、大鎌を銃に変形させて銃口を奨真達に向けた。

少女は銃を放ち、全員に命中させる。

命中した奨真達は当たったところを見ると、何か模様のようなものが浮き上がっていた。

すると少女は呟いた。

「ゲート・オープン」

た。
奨真達から浮き上がっていた模様は光り、そしてどこか別のところに転移させられた。

「「「うわあああああ
!!!!!!」」」

「「「きやあああああ
!!!!!!」」」

別の場所に転移させられた奨真達は、辺りを見ると見たことのない世界だった。

第2話 アクセル・アサルト

た。
梅郷中ローカルネットから別の世界へ転移させられた奨真達は地上へと落下してい

「フゴッ！」

「痛い」

「ゴフッ！」

「あ、ごめんタツくん」

「よつと……」

「ありがとう奨真君」

「どういたしまして」

「でも説教の時間は減らないわよ」

「わかってるよ……」

「あ、先輩！」

「ふむ、ここは重力が弱いらしい」

落下して、白夜は頭から落ちて、あきらは尻餅をついて、タクムは大の字になって落ちて、チユリはそのタクムの上に落ちて、奨真は楓子をお姫様抱っこしてゆつくりと着地して、楓子は奨真にお姫様抱っこしてもらって、黒雪姫はゆつくりと着地した。

黒雪姫の言う通り、重力は弱いが勢いよく頭から落下した白夜は地面に突き刺さり、これがもし水の中なら犬○家のようになっていただろう。

「ここはいつたいたいところなの？」

「ローカルネット……じゃないわよね」

「チ、チーちゃん。早く退いてほしい…」

「何よ！あたしが重いつて言いたいのだ!!」

「皆さん！早く白夜さんを助けるのを手伝ってください！」

ハルユキはみんなを呼び、一斉に白夜の頭を引き抜いた。

「し…死ぬかと思った」

「お前犬〇家みたいになってたぞ」

そんなことを言っていると、さっきの少女が宙に浮かんでやってきた。すると少女は奨真達に自分の名前と今いる世界のことを教えた。

「私はダシユカ。そしてここはアクセル・アサルト。さあ！行くわよ！！アサルトリンク！！」

ダシユカは大鎌から銃弾を放つと、また何かの様相が出てきて、ダシユカはそこに突っ込んだ。

突っ込んだダシユカは今度はブレインバーストに出てくるデュエルアバターのような姿で現れた。

ダシユカは大鎌を奨真達に振り下ろし、攻撃してきた。攻撃は強力で、避けても衝撃が奨真達を襲っていった。

「くそっ！あんなのどうやって相手にすれば!!」

「それに何だあのアバターは。ここはブレインバーストじゃないだろ！」

避け続けていた奨真達だが建物が崩れ、黒雪姫を襲った。

黒雪姫は瓦礫の下敷きになるかと思われたが、黒雪姫が腕を振ると、瓦礫は真つ二つに割れた。

黒雪姫の腕を見ると、ブラックロータスの腕になっていた。

何故自分のデュエルアバターの腕になったのか気になり、時間を見てみると、時計が止まっていた。

そこで黒雪姫はここがどういう世界なのか気づいた。

「なるほど。みんな！デュエルアバターをイメージするんだ!!そして叫べ!!」

「よし！」

「ええ！」

「はい！」

「やってやろうじゃない！」

「わかりました！」

「反撃開始だ！」

「了解なの！」

「「「「「バーストリンク!!」」」」」」

全員が叫び、それぞれのデュエルアバターになったのだが……。

「あれ？なんか中途半端？」

「完全にはならなかったみたいね」

「そのようだな」

「何で私だけこんなに露出が多いの？」

「つてええ!!？」

「な、何だこれ!!？」

「動けねえ!!？」

「何でこんなことに!!？」

黒雪姫とチユリ、楓子とあきらは中途半端なデュエルアバターだが、その中であきらだけは自分のデュエルアバター『アクアカレント』が相転移フレイズトランスキーンをした時に着く氷の装備を纏っているだけなのである。

ハルユキはピンクの豚のアバターに『シルバークロウ』の羽が小さく生えただけで、タカムはパイルドライバーになり、白夜は自分がいつも使っている盾になり、奨真は自分のアバターと全く関係ない槍型になっていた。

「コラッ！集中しないからだ！」

「くそっ！突然降ってきた尖った石を見た瞬間集中が乱れたか！」

「っ!?!皆さん！来ます!!」

黒雪姫は先に突っ込み、攻撃を受け流していた。

「チーちゃん！僕を使って!!」

「よーし！いくわよ！」

「あきら！俺を使え！ゴフツ！」

「わかったの！あとどうしたの？」

「鼻血が……」

「楓子！ゲイルスラスターで飛びながら俺を使え！」

「わかったわ！」

みんなそれぞれ武器を持ち、ダシユカに挑んでいった。

楓子はゲイルスラスターを装着し、尖った石を見て槍型になってしまった奨真を抱えた。

奨真の頭の部分は槍の先端部分にあるため、楓子が抱えると顔面が楓子の胸にもろに当たってしまう。

(俺……………違う意味で生きて帰れるかな?)

第3話 崩壊

ダシユカの猛攻を避けながら、黒雪姫達は戦っていた。チユリはダシユカの大量の小型ビットに追われていた。

「もう！しつこい!!ライトニングシアンスパイク!!」

「チ、チーちゃん!?!いきなり大技!?!」

チユリはタクムを抱えて狙いを追ってきているビットに向け、『ライトニングシアンスパイク』を放った。

それからチユリはタクムがブレインバーストで使う技を連発していた。

「スプラッシュステインガー!!」

「ああ!!弾が勿体無い!!」

「ニヤツハハハ!!かいかーん!!」

技を連発するチユリは楽しそうで、タクムはかなり疲れていた。

また、別のところではあきららが盾になった白夜を使って戦っていた。

主に盾で殴って戦っていた。

「あきらー!右だ!!」

「了解なの！」

白夜は右から攻撃が来ることをあきらみに伝え、あきらはその方向から来る攻撃を盾でガードした。

次々に降り注いでくるビットを盾で跳ね返し、宙に浮いてる瓦礫を足場にして後ろに飛んだ。

「ところでびゃーくん。盾で殴ったりしてるけど痛くないの？」

「めちやくちや痛いけど、無制限フィールドの痛覚2倍よりはマシだ」

「なんかごめんなの」

「気にすんな」

そしてまた別のところでは楓子が槍になった奨真を使って次々に降り注いでくるビットを落としていた。

「くっ！キリがないわ！」

「め、目が回る……」

「あー！ごめんね！でももうちよつと頑張つて！」

楓子は槍になった奨真を振り回したり突いたりしたりしてゐるから、奨真は目を回してゐるのである。

そしてゲイルスラスタで飛ぶときは槍を抱えて飛ぶため、奨真の顔面は楓子の胸にもろに当たり、理性も限界に近づいていた。

(ふふふ楓子の胸が!!耐えろ俺!!)

「頑張つて耐えてね!奨真君!」

「えっ……声に出てた?」

「出てたわよ!『耐えろ俺』つて!」

「そ、そうか」

どうやら楓子は奨真の顔面が自分の胸に当たっていることに気づいていないらしい。

また別のところでは黒雪姫は一人でダシユカと戦っていた。

ハルユキも戦いたいのが、自分の武器である翼は小さすぎて全然役に立たなかった。戦えないハルユキだが、ダシユカの弱点に気づいた。

(っ!?!あいつももしかして!)

ダシユカの弱点に気づいたハルユキのところにチユリとタクムがやってきた。

「チユリ!あいつの弱点がわかったんだ!」

「えっ!?ならそのことを早く先輩に!!」

チユリはハルユキにそのことを黒雪姫に伝えるように言うが、ハルユキは何故か困っていた。

「で……でもそんなこと……先輩も気づいてるはずだよ。わざわざ僕が言わなくても……それに気づいただけで……何か対処する方法があるわけじゃないし……」

ハルユキの話聞いていたチユリはイライラし、右手に装着してるタクムにハルユキの頭をぶつけた。

ハルユキは痛がっていたが、同時にタクムも痛がっていた。

「うじうじとうつとおしいわね!!いい!先輩も女の子なの!たまには男の子にグイッと引つ張ってもらってガツンと言ってもらいたいときだつてあるの!!」

「っ!？」

「そうだけハルユキ!!お前も男なら女の1人でも守ってみせろ!!」

「びゃーくんいいこと言うの」

「鴉さん!サツちゃんを守ってあげて!」

「はい!」

(そうだ!先輩も空中を自由に動ければ!)

ハルユキは小さな翼を使い、黒雪姫のところに行き、弱点を伝えた。

「先輩!あいつには物理攻撃力だけでは勝てません!動きの隙を狙って攻撃する速さが
必要なんです!」

「わかった！ならあいつが旋回する時を狙えばいいのだな！」

「流石先輩！」

「でもどうする！いくら低重力でもやつのほうが有利だぞ！」

「僕が先輩の翼になります！」

「っ!？」

「だからサツ……先輩は物理攻撃だけに集中してください！僕を信じて!!」

「…………ふふつ。やっと私を見て話してくれたな」

「あ、その…………こんなちんちくりんな羽で頼りないですけど…」

「この空間もブレインバーストと同じようにイマジネーション……………心意が機能している。なら、思うことこそが力になる。君は今、何を望むんだい？」

黒雪姫にそう聞かれたハルユキはこれしか思い浮かばなかった。

（僕が望むこと…………。それは…………先輩と…………飛びたい!!）

黒雪姫の背中にいたハルユキの体が光り、そして黒雪姫の翼となり一体化した。

「行きましよう!!先輩!!」

「ああ!!」

黒雪姫は翼を広げ、高速で無数のビットを破壊していった。
あきらとチユリ、楓子が相手をしていたビットも破壊した。

「何っ!?!」

一瞬でビットを破壊されたダシユカは驚きを隠せなかった。

「凄いなこれは!!自分の翼で飛ぶのがこんなにも素晴らしいものなのだ!!」

「先輩凄い!!」

「マスターさすがです!!」

「助かったの!!」

「凄いわよサツちゃん!!」

ビットを全て破壊した黒雪姫はダシユカに接近し、減速する旋回時を狙って攻撃した。

ダシユカの武器の大鎌を破壊し、ダシユカを叩き落とした後、上からトドメを刺した。

「「ダイブアタック!!」」

2人の『ダイブアタック』を直撃したダシユカは爆発した。すると黒雪姫の後ろから、倒したはずのダシユカの声が聞こえてきた。

『ねえ』

「「っ!？」」

『ありがとう。やっと……終われる』

そう言ってダシユカは光の粒となり、消えていった。

ダシユカが消えると、アクセル・アサルトの世界が崩壊していった。

「サツちゃん、これは?。」

「フィールドが崩壊する」

『いっただよ』

光の玉のダシユカがゲートを作り出し、脱出口を作った。

黒雪姫達はそこに入り、アクセル・アサルトから脱出した。

アクセル・アサルトでの戦いから数日が経ち、代々木公園に8人はいた。

「アクセル・アサルト……か」

「奨真君も大変だったね」

「本当だよ。終わってからは楓子の説教があるし、アクセル・アサルトでも振り回される

し、楓子の胸が顔面にもろに当たったりしたし」

「奨真君？もしかして私が必死に戦ってる時に呑気に私の胸の感触を味わっていたの？」

「呑気じゃねえよ！俺は色々やばかったよ!!」

「でも私の胸の感触を味わっていたのは事実よね」

「それは……その………すまん」

「まったく……。前にも言ったでしょ。私の胸を触りたかったらいつでも触ってもいいって」

「それって本気なのか？」

「ええ！本気よ！」

「ええつと……なんてリアクションすればいいのかわかんねえな」

楓子は奨真に近づき、耳元で囁いた。

「じゃあ帰ったらする？」

「それはまた今度な」

「むう」

「拗ねるなよ……今日はこれで勘弁してくれ」

奨真はそう言つて楓子の唇に自分の唇を重ね、キスをした。

「……今日はこれで我慢するわ」

「しよ、奨真さん大胆すぎますね!!」

「まったく……私たちがいることを忘れてないか」

いつの間にか奨真と楓子の周りにはさつきまで別の場所にいた6人が集まってきた。

「そういえばびやーくん。あの時私がびやーくんを武器にして使おうとした時、何があったの？鼻血でも出たの？」

「実際出てないがそんな感じがしたよ」

「で、何があったの？」

「……お前のアバターを見た時に、その……なんかエロくて……その……」

「っ!?!えい！」

あきらは指をピースにしてまた白夜に目潰しをした。

「目があああ!!!」

「そんなこと………恥ずかしいの」

「これがあきらの照れ隠しなんだな……」

「白夜さん、ご愁傷様です」

「ねえタツくん。私もタツくんに目潰しをしてもいい?」

「いきなりなんで!?!そんな堂々と恐いこと言わないでよ!!」

「いやーなんとなく?」

「なんで疑問形なのチーちゃん!?!」

この後解散して、奨真と楓子は家に帰り、奨真は楓子に膝枕をしてもらったらしい。ちなみにあきらは白夜の孤児院に泊まり、白夜はあきらに膝枕をもらったが子供達にちよつかいをかけられ、ゆっくりできなかつたらしい。

第4話 お見舞い

「はあ……」

俺は今、病院のベッドで横になっていた。
なんで病院にいるかというと……。

「奨真君も災難だね。まさか疲労で倒れるなんて」

「まさかこんなことになるなんて思いませんでしたよ」

「日頃無理しすぎなんじゃない。楓子ちゃんから聞いてるよ。最近遅くまで学校の備品の修理をしてたんでしょ」

「紺野先生って結構楓子も連絡をとってるんですね」

「そうだよー！一緒に買い物に行ったりもするしねー！」

そんなに連絡をとってたんだな。

それよりも疲労で倒れるなんて……無理しすぎたかもな。

「紺野先生！次はこちらですー！」

「はーい！じゃあ奨真君またね！」

「あ、はい」

紺野先生は一週間の入院って言ってたよな。

一週間暇だな……。

ベッドでゆっくりしているとなんかドタドタと騒がしい音が近づいてきた。病室のドアが勢いよく開かれてクラスの女子たちが押し寄せてきた。

「橘君!!倒れたって聞いたけど大丈夫!!」

俺はびっくりして頭が混乱していた。

「え、ええつと」

「私お見舞いの品を持ってきたの！」

「そんなの私だって持ってきたよ！」

「私が先に渡すの！」

一応個室だけでもこんだけ騒がれたら他の人たちに迷惑をかけてしまうな。
早く騒ぎを沈めよう。

「お、落ち着いて！他の人に」

「他の人に迷惑になるでしょ。静かにしなさい」

ドアの方を見ると手にフルーツの盛り合わせを持ってニッコリと笑った楓子が立っていた。

楓子の笑顔を見た女子たちは一斉に黙った。

やっぱりあの絶対零度スマイルは怖い……。

「あ、あー！私急用思い出しちゃった！じゃあね橘君！」

「わ、私もだったー！」

1人が帰り出した途端、他の女子たちも帰り始めた。そして俺と楓子の2人だけになった。

「まったく奨真君は甘いんだから。注意しなきゃダメな時はちゃん注意しなきゃダメじゃない」

「はい、いめん」

「最近の奨真君はみんなにチャホヤされちゃって……。私なんだか心配だわ」

「心配？」

「……もう鈍いんだから。奨真君が他の誰かに取られるんじゃないかってこと」

ああ、そういうことか。

楓子はそんなことを心配してたのか。

「楓子」

俺は楓子を椅子に座らせて向き合った。

「俺たちは恋人同士だよな」

「ええ」

「じゃあさ、俺が今から彼女にして欲しいことが何かわかるか？」

俺は楓子に微笑みながら言った。

楓子も何かわかったみたいでゆっくりと近づいてきて唇を重ねてキスをした。いつもは楓子が積極的にしてくるが今回は俺が積極的に深いキスをした。

互いの唇は離れ、もう一度向き合った。

「心配しなくても俺は楓子以外の人とは付き合ったりしない」

「本当に？」

「本当だ。まだ疑うんだったらもう一回キスをするか？」

「ええー！」

俺と楓子はもう一回キスをしようとしたが、病室に入ってきた紺野先生に止められた。

「あのー2人とも。イチャイチャはまた今度でいいかな」

「わあああ!!」

「確かにベッドもあるからいい感じになってるけど、いくらなんでも病室では……」

「しししませんよ!!」

「まあとりあえず楓子ちゃん。持ってきたフルーツを食べさせてあげなよ」

「は、はい！」

楓子は持つてきたフルーツの盛り合わせの中からリンゴを取り出して、ナイフで皮むきを始めた。

皮を剥き終わるとリンゴを食べやすいサイズに切ってくれて、爪楊枝を刺した。楓子は爪楊枝の刺さったリンゴを取り、俺に食べさせようとしてくれた。

「はい！あーん！」

「あ、あーん」

「それと、いい加減出てきたら？」

ん？他に誰かいるのか？

紺野先生はそう言うのと、ドアの陰から白雪と綸が出てきた。

「あんな場面を見た後だと入りづらいのはわかるけど、せつかくお見舞いに来たんだからや」

「白雪、もしかして最初から最後まで見たのか？」

「綸、そうなの？」

「はい……」

は、恥ずかしすぎる……。

サツチたちに見られたばかりなのに白雪と綸まで……。

俺と楓子は恥ずかしくてお互い顔を合わせられなかった。

「綸さん。奨真さんと楓子さんっていつもあんな感じのキスをしてるのですか？」

「わ、私も……見たことないので……わかりませんが……たぶん……やってないと思う……」

綸と白雪が何か話してる時、紺野先生が俺のところに来て、小聲で話しかけてきた。

「奨真君ったら楓子ちゃんだけじゃなくてこんな美少女2人まで……隅に置けないなー、うりうりー」

紺野先生は肘で俺の腕をグリグリしながらそう言ってきた。

地味に痛い……。

「さてと、僕は仕事に戻るから。3人とも暗くならないうちに帰るんだよ」

「「はー！」」

紺野先生は病室を出て行った。

「奨真君、ちゃんと休憩は取らなきゃダメよ！倒れたら元も子もないんだから！」

「そうですよ！心配する人だっているんですから！」

「無理は……ダメ……ですよ」

「ああ。気をつけるよ」

「じゃあ私はそろそろ帰るね。しばらくここで寝ることになるけど、帰ってきたらまた一緒に寝ようね。おやすみなさい」

「ああ。おやすみ」

まだ夕方だけどな……。

「わ、私もそろそろ失礼しますね！おやすみなさい！」

「わ……私もそろそろ……失礼します」

「あ、ああ。おやすみ」

だからまだ夕方だけだな…。

楓子と白雪と綸が病室を出て行ったから一気に暇になった。

晩御飯の時間まで寝るか。

「そういえば2人はなんで奨真君が倒れたことを知ってるの？」

私は奨真君の病室から出て、帰ってる時に白雪と綸に聞いた。

「私は学校で噂してるのを聞きました」

「私は……今日白雪さんとあつて……どこに行くのかを聞いたら……奨真さんのお見舞いに行くと……聞いたので」

そういうことなのね。

私はその後、私と奨真君がキスをしてるところを見てどう思ったのか聞いた。

「2人は私と奨真君がキスをしてるところを見てどう思った？」

「えっと……なんか凄くなって思いました」

「凄かったです……これが大人なんだあ……って思いました」

「そう……」

でもやっぱり恥ずかしいな……。

「楓子さん！」

「っ!?!ど、どうしたの?」

「わ、私！負けませんから!!」

私って白雪にライバルと思われてるのね。

「受けて立つわ」

「はい!」

「……………わ、私も」

私達は話しながらゆっくりと、帰っていった

第5話 外国の人

???
s
i
d
e

「ふう……。久しぶりの日本。みんな元気にしてるかな？」

「そうですね。久しぶりにあの子達に会うのが楽しみです！」

「もぐもぐ……。あ、食べますか？」

「どこで買ってきたのですか？」

「あそこで売ってました」

「とりあえず一旦解散してまた後日会いましょう！」

「そうですね！」

私たち3人は空港で解散した。

???
s i d e
o u t

奨真 side

俺は自分の部屋のベッドの上で寝転んでいると、母さんが部屋に入ってきた。

「奨真君。今日から外国の人が数日間泊まることになるから、仲良くしてあげてね！」

「いきなりだな……。で、その人の名前は？」

「それは来てからのお楽しみよ！」

母さんは笑顔で言つて部屋から出て行つた。

さつき母さんが外国の人が数日間泊まるつて言つたことに一つ気になったことがあつた。

「部屋はどうするんだ？」

「奨真君。これから来る外国の人と一緒に迎えに行つて欲しいつてお母さんが言つてたわ」

「ん、わかつた」

俺は立ち上がり、楓子と一緒に外国の人を迎えに行った。

奨真 s i d e o u t

???
s i d e

「な、なんでこんなことに……」

私は2人と別れて、空港で迎えに来てくれる2人を待っていると3人組の男の人たちにナンパされてしまった。

「いいじゃん！楽しいところに連れてってやるから！」

「ずっとここでいてもつまんねえだろ！」

「ほらほら！」

私は腕を掴まれそうになったけど、私はある言葉を呟いた。

「バーストリンク」

私は加速して掴まれそうになったのを回避した。
あんまりこの力を使いたくなかったけど……。

「っ!?今の避けたのか。まあいい、今度こそ」

「あんたら何やってんだ」

「「っ!?」」

私は声のする方を見ると、懐かしい2人がいた。
ナンパしてきた人たちはあの2人に襲いかかった。

「その女もなかなか良さそうだな!!」

「楓子を変な目で見るやつはどうなるかわかってんだろうな？」

っ!? 凄い殺気……。

あれ、あの人たちは気付いてないのかな？

「わかんねえな!!」

ナンパしてきた人たちの1人が殴りにいったけど、男性は避けて、腹を殴った。他の人たちも殴りにいったけど、男性に殴り返され、気絶した。

「ふう……ま、こんなもんだろ」

「ありがとう奨真君♪あの人と私を守ってくれて」

「気にすんな。それに楓子を変な目で見るようなやつは許せないしな」

奨真……楓子……あっ!!

思い出した……あの2人は!!

「お久しぶりです!!奨真君!!楓子ちゃん!!」

私は嬉しくなって2人に抱きついた。
突然のことで2人は驚いていた。

「えっ!?ど、どういうこと?」

「わ、わからん……」

「2人とも忘れたんですか!!私ですよ!!ジャンヌ・ダルクですよ!!」

「「ジャンヌ……」」

2人は思い出そうとして考え込んでいた。

「あつ!!お前あのジャンヌか!!」

「本当にあのジャンヌなの!!」

「そうですよ!!あのジャンヌですよ!!」

ようやく思い出しましたね!!

私は嬉しいです!!

「お前……なんか変わったな」

「そ、そうですか？」

「ええ。聖女って感じがするわ」

「だって私は聖女ジャンヌの子孫ですから」

「そういえばそんなこと昔言ってたような……」

「ねえ、もしかして私たちの家に数日間泊まるって言ってた外国の人って」

「たぶん…ジャンヌだろうな」

「これから数日間よろしくお願いしますね！」

私は2人についていき、家に案内してもらった。

第6話 帰宅する者

「ただいま」

「お、お邪魔しまーす」

家に入って、ジャンヌは自分の荷物を玄関に置いた。

俺は母さんのところに行って部屋をどうするのか聞いた。

「部屋はどうするんだ？」

「部屋ならもう準備してあるわ」

「余ってる部屋なんかあったか？」

「あら？忘れてたの。もう一部屋余ってるよ」

「そ、そっか」

俺と母さんは楓子とジャンヌのところに向かった。

「久しぶり、ジャンヌちゃん。ささ！疲れたでしょ！奨真君、これから泊まる部屋に案内してあげて！」

「俺もどこかわかんないんだけど……」

「余ってる部屋って……奨真君の部屋の隣だと思うわ」

「わかった。ジャンヌ、ついてきてくれ」

「うん！」

「よいしょっ」

「あ、いいよ！自分の荷物は自分で持つよ！」

「いいからいいから」

「ううう……わかった」

俺はジャンヌの荷物を持って部屋に案内した。

俺の部屋の隣だからここかな。

俺は扉をあげて中に入ると、中は一通り揃っていた。

「今日からここがお前の部屋だ」

「わあ！素敵な部屋ですね！」

「好きなように使ったらいいからな」

「はい！ありがとうございます！」

俺は荷物を床に置くと、ジャンヌは荷物を整理し始めた。

「手伝うよ」

「だ、だだだ大丈夫ですよ!!」

「1人だと大変だろ。だから手伝うよ。俺はこの荷物を整理するよ」

「わああああ!!! ぞ、それは!!」

俺は荷物の中で分けられた袋の一つを取り出し、中から出すと、黒い布のようなものが出てきた。

「ん?なんだこれ?」

「ううう………」

「ど、どうした?」

「それ……私のパ、パンツです………」

「へっ!?すすすすすまん!!!」

俺はその黒い布をすぐにジャンヌに渡した。

もしかしてこの袋の中って全部ジャンヌの下着なんじゃ……。

「ジャンヌ、奨真君。何かあった？」

あ、まずい……。

楓子に見られてしまった……。

「ジャンヌ。私が手伝うわ。奨真君はドアの前で待っていて♪」

「わ、わかった」

「あ、それと後で説教だから♪」

「ひっ！」

俺は2人が荷物の整理が終わるのを待ち、その後は楓子に説教をさせられてしまった。

???
s i d e

「急に帰ってきたらビックリするかな？」

私はそう思いながらインターフォンを押した。
すると中から美奈が出てきた。

「はーい！あー！！マシユお姉ちゃん！！」

「どうした美奈？つてマシユ!？」

「お久しぶりです！白夜さん！美奈！」

「とりあえず中に入れよ！」

私は中に入り、リビングに向かった。

「あ！マシユお姉ちゃんだ！！」

「香奈、久しぶり！」

「どおおりやあああ！！」

むにゆ

「ひゃん!？」

私は誰かに後ろから胸を揉まれた。

まあなんとなく誰がやったのかはわかるけど。

「マシユお姉ちゃんまた大きくなったー?」

「さあ?どうでしょう?寿也」

私は笑いながら寿也に振り向き、拳骨を下した。

「痛い……」

「私の胸を揉む癖は治ってたいみたいね」

「まったく寿世のやつ……」

でも……なんだか懐かしいな。

「あ、そうだ。まだ言ってなかったな」

「え？何がですか？」

「おかえりマシユ」

「あ……た、ただいま」

第7話 転校生

俺と楓子は今、学校の廊下を歩いて教室に向かっていった。

そういえばなんかジャンヌが『今日は2人をびつくりさせるね!』とか言ってたけど、
どういう意味なんだ?

「おはよう」

「「おはよう!」」

挨拶をすると、みんな元気よく挨拶を返してくれた。

「今日もラブラブだな!!」

「羨ましいわ!!」

「うるさいな……。羨ましかったらお前達も彼女や彼氏を作れよ」

「作れたら苦労しねえよ!!」

「倉崎さんみたいな美人を彼女にしやがってこの野郎!!」

「イテテテテ!!」

俺は首に腕を引つ掛けられ、頭をグリグリとされた。
紺野先生もよくするけど、結構痛い。

「あ、そうだ！今日転校生が来るらしいけど、倉崎さん知ってる？」

「ううん。転校生？」

「情報によると外人らしいよ！」

「おお！女子がいいな！」

「私たちはもちろん男子がいい!!」

やつと解放されたか……。

転校生か……。いったい誰なんだ？

「誰なんだろうね？」

「さあな」

「おーい、席につけー」

先生が来て、教室にいる生徒達は席に着いた。すると、先生は転校生の紹介を始めた。

「おーい、入ってこーい」

『はーい!』

ん?なんかきいたことある声だな。

教室の扉は開かれて入ってきたのは、金髪の美人さんだった。やっぱり見たことがある。しかも最近見た。

まさか……。

「自己紹介をしてくれ」

「はい！フランスから来ました！ジャンヌ・ダルクです！これからよろしくお願いします！」

やっぱりか!? やっぱりジャンヌか!?

もしかしてびつくりさせるってこういうことか……。

隣を見ると楓子も驚いていた。

「うおおおお!!! 美人がきたー!!!」

「金髪だああああ!!!」

「倉崎さんと並ぶかもしれない美人!!」

男子どもうるさすぎるだろ……。

「奨真君。ジャンヌが言ってたことってこういうことかな？」

「たぶん……そうだろうな」

「質問があるやつは今聞いていいぞ」

「はい！ジャンヌさんはあのジャンヌ・ダルクの子孫かなにかですか？」

「はい！そうですよ！」

「はい！ジャンヌさんは好きな人はいますか？」

「いますよ！」

「「ええええええ！！！！」」

あいつ好きな人がいたのか。
初耳だな。

「だ、誰なんですか？」

「それは……」

そう言つてジャンヌは俺と楓子のところにやつてきた。

そして俺と楓子の間に入って抱き寄せてきた。

そのせいでジャンヌの胸が少し当たる……。

「ここにいる奨真君と楓子ちゃんです！」

「えっ!?!もしかして2人はジャンヌさんと知り合いなの？」

「橘君と倉崎さんってフランスに行ったことがあるのかな？」

「私は中学2年まで日本で暮らしてたんだ。それから2年くらいフランスに行ってまた帰ってきたんだ」

「じゃ、ジャンヌ。苦しいからそろそろ離して欲しいな…。奨真君も困ってるし」

「あ、ごめんごめん。2人とも、びっくりした？」

「そりやあびつくりよ。いきなり転校してきたんだもん」

「確かにな……」

「橘!!お前倉崎さんだけじゃなくて、ジャンヌさんとも知り合いだったのか!!」

「だからなんでお前らはキレてんだよ!!!」

「はいはい。そろそろ授業始めたいからおとなしくしろよー。あ、ジャンヌさんは橘の隣だからー」

「わかりました!」

ジャンヌは俺の隣に座り、午前の授業を受けた。

昼休み……。

屋上で俺と楓子とジャンヌの3人で昼飯を食べていた。

「このこの購買で売ってるものってどれも美味しいね！」

「それは言えてるな」

「ジャンヌ。私のお弁当もあるからね」

「久しぶりの楓子ちゃんの手料理！いただきます！」

「奨真君も。はい、あーん」

「あ、あーん」

ジャンヌの目の前でもやるのか……。

「2人とも相変わらずラブラブだね」

「ふふっ♪ありがとう♪」

「俺はちよつと恥ずかしいけどな」

「堂々としてればいいんだよ！そうすれば恥ずかしくないよ！」

「そうよ奨真君。堂々とね」

「うーん」

「あ、そうだ。今度私の友達を紹介しようと思うんだけど」

「フランスでできた友達か。気になるな」

「そうね。じゃあ私たちの友達も紹介するからみんなで集まりましょ！」

「そうだな。俺から連絡しておくよ」

俺はニューロリンカーのメール機能でサツチにメッセージを送った。
ジャンヌも友達にメッセージを送り終えたみたいだ。

「集まる日が楽しみね」

「そうだな。よし、そろそろ戻るか」

「ええ」

「うん！」

俺たちは屋上から出て、教室に帰っていった。

第8話 自己紹介

俺たち3人は集合場所であるハルユキの家まで来ていた。

「ここか？」

「そうみたいね」

「インターホン押してみたら？」

「そうだな」

俺はニューロリンカーに表示されているインターホンのボタンを押した。
押すと中からハルユキが出てきた。

「あー！ 奨真さんに師匠！ どうぞ中に入ってください！」

俺たち3人は中に入ってリビングに案内してもらった。

リビングに入ると、もうみんな集まっていた。

見たことない人もいるが……。

「それじゃあみんな集まったみたいだし、自己紹介するのでしょうか」

サッチが立ち上がったってそう言ってもう一度座り、順番に自己紹介を始めた。

「私は黒雪姫だ。そうだな……呼び方は好きなように呼んでくれ」

「有田春雪です！僕も好きなように呼んでください！」

「黛拓武です。よろしくお願いします」

「倉島千百合です！よろしくねー！」

「橘奨真。よろしくな」

「倉崎楓子です。よろしくお願ひしますね」

「立花伶弥です！」

「四埜宮謡なのです。よろしくなのです」

「雪ノ下白夜だ。ま、よろしく頼むわ」

「氷見あきら。よろしくなの」

「掛居美早。よろしく」

「上月由仁子だ。気軽にニコって呼んでくれ」

「白雪姫です。好きなように呼んでください」

「日下部繪です。よ…よろしく…お願いします」

こっち側の自己紹介を終え、ジャンヌ側の自己紹介が始まった。

「ジャンヌ・ダルクです！気軽にジャンヌと呼んでください！」

「マシユ・キリエライトです。よろしくお願ひします」

「もぐもぐ……」

この金髪の人ずっとなんか食ってるな……。

ハルユキが近づいて、彼女になにか言っていた。

「む、すまない。食事に夢中になっていた。改めて自己紹介しよう。私はアルトリア・ペンドラゴン。趣味は剣術だ。よろしく頼む」

「みんな外人なの」

「それに日本語ペラペラだな。あたしは英語なんか全く話せないから助かるけど…」

「そういえば私は一番最初に来たが、すでにアルトリア君がいたな。ハルユキ君、どういうことなんだ？」

「え、えーつと……実はですね」

「私はこの家でお世話になるからだ」

「何っ!？」

「へえ！アルトリアちゃんハルの家に住むことになったんだ！」

「お久しぶりですね。アルトリアさん。また剣道の相手をしてください！」

「いつでも相手になろう！だが、私に簡単に勝てるの思うな」

「4人は知り合いなの？」

「まあ……はい」

「アルトリア君……羨ましい……」（小声）

「白夜さん。今日の献立はどうしましょう？」

「ん？うーん、そうだな……」

「ちよつとまつてほしいの。2人はどういう関係？」

「俺たちは元々同じ孤児院で暮らしてたんだ。けど、マシユが海外に料理の修行に出かけてな。ついこの間帰ってきたんだ」

「本当にそれだけなの？」

「大丈夫ですよ。私たちはただの家族です。だから心配しないでください」

「そう……なら安心なの」

なんか俺とジャンヌと関係が似てる人たちが多いな。

アルトリアはなんか……王族のイメージが強すぎる。

マシユは……世話好きなお姉さん……まあ俺より年下だが……。

「この子可愛いね！」

「でしょ！ああ！ういうい可愛い！！」

「んー！んー！」

「……あの人も大きいですね、綸さん」

「……そう……ですね」

「先生！ジャンヌさん！ういちゃんが窒息しそうです！」

レミが2人にそう言って、ういういは解放された。

まあ……ジャンヌも胸は大きいほうに入るし……2人に抱きしめられたら窒息しそうですね。

「つていうか奨真さん！」

「ど、どうした？」

「奨真さんって本当に胸が大きい人が好きですよね!!先生だけじゃなくジャンヌさんまで手を出してたのですか!!」

「待って待って!!なんだそれ!!手なんか出してねえし!!それに別に胸が大きい人が好きとかじゃねえ!!」

「じゃあ聞きますよ!!ジャンヌさん!奨真さんって胸が大きい人が好きなのですか!」

「うーん。楓子ちゃんと付き合ってるから好きなんじゃないかな」

「ほらやっぱり!!」

「おいジャンヌ!! 変なこと言うなよ!!」

「この女の敵!! 変態!!」

「お前ちよつと黙れ!!」

「奨真さん!! 喧嘩はダメです!!」

「お……落ち着いて……ください……」

白雪と綸に止められて、俺はやつと落ち着きを取り戻した。
ちなみにレミは俺が軽く頭を殴ったからおとなしくなった。

「あの……白夜さん。奨真さんってああいう人なんですか？」

「なんて言ったらいいんだろう……」

「しよーくんは面白い人なの」

「それはわかったのですが……」

「ハルユキ、お腹が空きました」

「ええ!?早いですよ!さつき食べたばかりじゃないですか!」

「そう言われましても……」

俺もちよつと腹が減つたな……。

楓子の手料理が食べたい。

「じゃあ少し早いがお昼にしよう。私たち女性陣が料理を作ろう!」

「『『賛成！』』」

「奨真君。出来上がったら一番に食べさせてあげるね♪」

「それは嬉しい！」

「ふふっ。だって顔に書いてあったよ。私の手料理が食べたいって」

「そ、そうか」

「ハルユキ君。キッチンを借りてもいいかな？」

「もちろんです！」

「料理作れない組はどうすりやいいんだ？」

「みんなと待ってればいい」

「りょーかい」

「じゃあ俺たちはゲームをしながら待とうか」

俺と白夜、ハルユキとタクム、ニコとアルトリアの6人はトランプなどをやりながら

待つことにした。

第9話 アルトリア敗北

「ほい、上がり」

「また變真が一位か……」

「ぐぬぬ……」

「ア、アルトリアさん。落ち着いて」

「奨真！もう一度勝負です！」

「懲りねえなお前」

「負けるのは悔しい！どうしても勝ちたい！」

俺はトランプで勝ち続けたせい、アルトリアは頬を膨らませて悔しがっていた。そして何度も勝負を挑んでは俺に負け続けていた。

「サツちゃん!？」

「黒雪さん!?!その切り方じゃ指を切断しちゃいます!!」

「む、ならこうか？」

「それでもダメなのです!!」

なんかキツチンが騒がしいな……。

「なあニコ。お前本当は料理できるんだろ？」

「ああ、できるよ。けどめんどくさーからしなかった」

「サツチの手伝いをしてやってくれよ」

「めんどくせーけど、あれをほっとくわけにはいかねえか」

ニコは立ち上がってサツチたちの手伝いをしにいった。

「奨真！さあもう一度です！」

「奨真さん。アルトリアさんはこうなったらもう止められないので、みなさんの料理ができるまで相手をしてあげてください」

「わかったよ……」

それから数分間、料理ができるまで俺はずっとアルトリアの相手をしていた。でもアルトリアは俺に勝つことができなかった。負ける度にアルトリアは頬を膨らませ、拗ねたりしていた。そして今は部屋の角で体育座りをしていた。

「「「お待たせ!!」」」

女性陣が料理を持ってきて、アルトリアは匂いに反応して目を光らせて帰ってきた。

「腹が減っては戦はできぬ! 褒真! 食事が終わったらもう一度勝負です!」

「トランプはもうやめないか…」

「それならブレインバーストで対戦したらどう？」

「えっ!？」

もしかしてアルトリアもバーストリンカーなのか!?

「あの……ここにいるみなさんはバーストリンカーなのですか？」

「そうだぜ。マシユは知ってるけど、アルトリアとジャンヌもバーストリンカーなのか？」

「はい！昔奨真君と対戦をしました」

「私はあまり対戦をしたことはありません」

「奨真さんとアルトリアさんの対戦を見てみたいです！無限の剣製対剣聖！」

「いつの間に剣聖なんて二つ名が……」

「まさかここにいる全員がバーストリンカーだったなんてな。じゃあ飯食ったら勝負するか？」

「望むところですよ！」

俺たちは食事を始め、楽しい時間を過ごした。

数分後……。

「やっぱり楓子ちゃんには料理で勝てないなあ……」

「ふふっ。ジャンヌもだいぶ腕が上がってるわよ」

「まったくお前どんだけ料理ができねえんだよ……」

ふう……どの料理も美味かったな……。

さてと、早速アルトリアに対戦を申し込むか。

「アルトリア。勝負を始めようか」

「ええ！」

「じゃあ私たちは観戦をしてるわね」

「アルトリアさん！ 奨真さんなんかサクッと倒しちゃってください！」

「どっちも頑張ってください！」

レミはアルトリアの応援をしてるが……まあどうでもいいや。
俺はアルトリアに対戦を申し込むために加速した。
みんなも観戦するために加速した。

「「「バーストリンク！」」」

第10話 強者現る

加速して、俺たちは対戦フィールドのところで立っていた。

俺の前には黄色に輝いたデュエルアバターが剣を構えて立っていた。

「それがお前のデュエルアバターか。えーっと……」

「トパーズキングだ。キングと呼んでくれ」

「俺はブラウンクリエイト。エイトって呼んでくれ」

「うむ。エイト、武器を構えるんだ」

俺はキングの言う通り、背中の剣を取り、構えた。

「よし！いざ勝負!!」

「ハッ!!」

楓子
s i d e

「みなさん！ここからならよく見えますよ！」

私たちはコスモスが連れて来てくれた場所で2人の戦いを観戦していた。

「よく見えますね！」

「クロウ、はしやぎすぎて落ちないようにねー」

「ベル！俺そんなに子供じゃねえよ！」

「おおおらあああ!!このキヤラス野郎!!」

「へっ!?!」

クロウの後ろから突然アツシユがバイクの前輪で突進した。

クロウはバイクの下敷きになって、アツシユはアクセルとブレーキを同時にしていた。

「イダダダダダダツ!!何ですかアツシユさん!!」

「てめえ誰の許可を得て繪の手料理を食ったんだ!!あああん!!」

「ちよちよちよちよつと待ってください!!アツシユさんと繪さんはどういう関係で!!」

鴉さんはアツシユが綸の兄だつてことは知らなかつたわね。
アツシユが怒つてるのもきつと、綸の手料理をライバルに食べられたくなかつたの
ね。

「鴉さん。アツシユは綸の兄で、綸のブレインバーストでのデュエルアバターはアツ
シユなのよ」

「ええ!?!お兄さん!!」

「てめえにお兄さんと呼ばれる筋合いはねえ!!」

「イダダダダダダッ!!」

「てめえらしい加減にしろ!!」

ニコが2人を止めて、やっと落ち着いて見ることができると。

そういえばマシユのデュエルアバター名は知らなかったような……。

「みんなに自己紹介しますね。私はアンバーフラッグ。好きなように呼んでね。みんなよろしくね」

「私はサクラシルド。シルと呼んでください。よろしく願います」

私たちの後ろで立って、大きな旗を持っていたのはジャンヌ。大きな盾を持っていたのがマシユだつてことがわかった。

「よろしく頼むよ。では、観戦の続きをしようか」

ジャンヌとマシユと一緒に、私たちは観戦の再開した。

楓子
s i d e
o u t

奨真
s i d e

「やあああ!!!」

「はあああ!!!」

ガキンツ!!

俺とキングは何度も剣を交えた。

交えたからわかる。

キングはそらのバーストリンカーとは違う!

こいつは強い!

少しでも気を抜けばやられてしまう!

「ぐうう……」

「くっ……」

俺とキングは一度下がりがり、態勢を整えた。

そしてもう一度突っ込んだ。

キングは両手で構えた剣を振りかざした。

俺は両手の剣でキングの剣をずらし、右足を軸にして時計回りに回転した。
そして両手の剣を同時に振りかざした。

「がああ!!」

キングは防御できず、そのまま吹っ飛んだ。

必殺ゲージも溜まったな。

これで終わらせよう。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「はあ……はあ……はあ……はあ……お互い限界のようだな。次で終わらせようか」

「全く同じことを考えていたぜ」

「ふっ」

キングは目を瞑り剣を上にあげて、力を集中していた。
俺も剣をしまい、必殺技を発動した。

「u^アn^ンl^リi^ミm^テi^ッt^ドe^ド b^ブl^レa^イd^ドe^ド w^ワo^クr^クk^スs!!」

俺は無限に剣を作る結界を張って、剣を吸い寄せ、キングに突っ込んだ。
キングはまだ目を瞑り剣を上にあげたまま、動かなかった。
今がチャンスだ!!

「はあああああ!!!」

だが無闇に突っ込んだのは間違いだった。
キングは目を開き、剣を力強く振り下ろした。

「エクスカリバー!!!」

「っ!?!」

俺は避けることが出来ず、衝撃を正面からくらってしまった。
俺のHPはゼロになり、キングに敗北した。

第11話 マシュ・キリエライト

「ああ……負けたー」

「なかなか楽しい戦いでした」

俺はアルトリアとブレインバーストで対戦をして、敗北した。

あの技はなんか俺の心意技に似てるような……。

「まさか奨真が負けるなんて」

「びっくりなの」

「アルトリアさんは剣の腕は凄いです。僕も何度か稽古をつけてもらってるんです」

「でもゲームはとても弱いですけど…」

「料理も全然だしねえ」

「ハルユキ！チユリ！余計なことは言わなくていい！」

「「い、い、い」めんなさいー！」

アルトリアがあんなに強いとは思わなかったな。
もしかしたら今まで戦ってきた中で一番強かったかもしれない。

「私もアルトリアさんと戦ったことがあります、あの一撃は私の盾でも防ぐことが出来ませんでした」

「まああの威力だもんね」

「なあ3人とも」

突然サッチがアルトリアとマシュとジャンヌの3人に話しかけた。

「よかつたら私たちのレギオン『ネガ・ネビユラス』に入らないか？」

レギオンの勧誘か。

まあアルトリアとジャンヌは実力あるし、マシユもアルトリアと戦ったくらいだし実力もあるのだろう。

「うん！喜んで入るよ！」

「私もです！」

「私も入ります」

「ありがとう！それじゃあ3人とも。これからもよろしく頼むよ」

新たに3人が加わってネガ・ネビユラスのメンバーがまた増えたな。
これでネガ・ネビユラスは13人になった。

「さて、まだ早いが解散にするか」

みんなで片づけをして、それぞれの家に帰っていった。

倉崎家……………

「ふう……………」

「どうしたの奨真君？」

「アルトリアは強かったなあと思ってな」

「観戦してたけど本当に凄かったね」

「ああ。なあ楓子」

「何？」

「ちよつと失礼」

俺は楓子を抱きしめ、ベッドに倒れこんだ。
そして唇を重ねた。

「ん……」

最近あまり楓子とこういうことしてなかったからいつもより長いキスをした。

「2人ともー。リカさんがご飯だって言っ……てるよ……」

あ……しまった……。

ジャンヌが下から上がってきて、キスをしてるところを見られてしまった。それに気づいて、俺と楓子は唇を離れた。

「えーつと……その……ご、ごゆつくり……」

「待て。何か用があつたんだろ？」

「あ、そうそう。リカさんがご飯だって言ってたよ」

「わかった」

「じゃあ行こっか」

「ああ」

俺と楓子、ジャンヌは下に行き、晩御飯を食べに行つた。

孤児院……

「あの、あきらさん。急に泊まるって言いましたけど両親には連絡したんですか？」

「それは大丈夫なの」

「そうですか」

「あきらお姉ちゃん！膝枕して！」

「マシュお姉ちゃん！おっぱい揉まして！」

「香奈。ここに頭乗せて」

「寿也。怒るよ」

「わーい！」

「ご、ごめんなさーい」

「ほい、お茶だ」

「ありがとう」

「ありがとうなの」

私はびやーくんから湯呑みを受け取って、お茶を飲んだ。
うん……おいしいの。

「白夜君。ちよつと手伝ってー」

「はーい！じゃあちよつと行ってくる」

びやーくんは院長さんに呼ばれて、私たちから離れていった。そうだ。マシュとびやーくんがどうやって知り合ったのか聞いてみよう。

「マシュ。びやーくんはどうやって知り合ったの？」

「そうですね。あれは私が小学校の時、私の家族は事故にあつたんです。私の両親は事故で亡くなり、私はずっと泣き続けました。そんな時に、白夜さんと出会ったのです。泣き続けた私を慰めてくれて、私が泣き止んだ時にこう言ったのです。『俺が住んでる孤児院に来ないか？』って。私はとりあえず白夜さんについていき、孤児院に入りました。院長さんもいい人で、幼稚園児の子たちも可愛かった。そして私は暮らすことを決めたのです」

「そうなの」

「でも帰ってきたときはびっくりしました。まさか白夜さんに彼女がいたなんて」

「えへへ」

「あきらさん。白夜さんのこと、これからもよろしくお願いしますね！」

「任せてなの！」

「それじゃあ晩御飯を作りに行きましょう！」

「了解なの！」

私たちは立ち上がって、キッチンに向かった。

第12話 緊急事態？

領土戦……

「はああああ!!!」

「ふん!!」

「くっ！硬い！」

「軟弱な青系ごときに傷つけられるものか！」

「レオニーズの領土でもう一度言ってみろ!!」

シアンパイルと緑のデュエルアバターはぶつかり合うとき、後ろの方でライムベルが悲鳴をあげた。

「きゃあああ!!」

「っ!?!ベル！」

ベルを心配したパイルは声をかけた。

「あたしは大丈夫！でも今、2人抜かれちゃった!!」

ベルを倒した2人のバーストリンカーが先に進んでいた。でもその2人の前に2人のバーストリンカーが立ちはだかった。

「2人だけならお前だけで充分だろ」

「ええ」

1人がそう言って、もう1人は車椅子に乗っていた。

その車椅子に乗っているバーストリンカーは足が戻ったスカイレイカーであった。

だが、何故か車椅子に乗って戦っていた。

「負傷兵だからって手加減しねえぞ!!」

「俺たちは冷酷な兵士だからな!!」

（負傷兵じゃないけどな……。レイカーもこの2人を試すために車椅子に乗ってるんだろうな）

「兵隊ごっこをしたいなら、リアルでサバゲーでもしているんですね」

2人のバーストリンカーは銃を放ち、レイカーは車椅子を上手く動かして、回避した。

そして弾丸はもう1人のバーストリンカーに向かったが、背中の2つの剣で全て斬られた。

「ふふっ。さすがエイトね。私も頑張っちゃおう」

レイカーは2人のうち1人に接近し、首を斬り落とした。
そしてそのままもう1人の首も斬り落とした。

「さすがだな」

「ふふっ。ありがとう！」

レイカーとエイトよりも更に後ろの方では盾を構えたルークとシル、2人の護衛のカレンとメイデンが退屈そうにしていた。

「……暇だな」

「はい、暇です」

「来ないの」

「来ないのです」

「構える必要あるか？」

「ルーク、念のためですよ」

「キングも勝手に突っ込んでどこかに行っちゃったの」

「キングさんなら大丈夫なのです。……たぶん」

「やあああ!!」

「な、なんだこいつ!?!?ぐああああ!!!」

「一人で突っ込んできやがって!!」

エリアの上空……

「あのー先輩」

「どうしたクロウ？」

「あれってキングさんですよね」

クロウが見る方向をロータスも見ると、キングが一人で突っ込んで敵を斬っていた。

「やれやれ。そろそろ行くか」

「はいー！」

クロウはロータスを離し、ロータスは落下しながら戦闘態勢に入り、クロウは地面に急降下しながら突っ込んだ。

有田家……

「「「かんぱーい！」「」」」

領土戦に勝利したネガ・ネビユラスは有田家で祝杯をあげていた。
有田家にはハルユキとタクム、チユリ、黒雪姫、アルトリアしかいないが。

「今日の領土戦の勝率は7割五分。今まで最高の記録です！」

「楓子姉さんやみんなが後ろにいますごく安心だし！」

「そうだな。まあ本人たちは中々きてくれないが」

「仕方ないですよ。みなさんの家は遠いですし」

「マシユは孤児院、ジャンヌは奨真の家に住んでるからな」

みんなでそんなことを言っていると、突然電子レンジが鳴る音がした。

見ると、ハルユキが冷凍のピザを持って机に置いていた。

「あー！ハルまた食べてる!!」

「いいだろ別に。今日は6戦もしたんだし、もう腹ペコペコなんだよ」

「リアルでは、ママのラザニア食べて30分しか経ってないんですけどー」

「向こうでは半日戦ってただろ」

「もー」

チユリは何かを思い出し、ハルユキに聞いた。

「あ、そうそう。ちよつと確認しておきたいんだけど、先週の健康診断、大丈夫だったの？」

「んーなんか再来週に再検査とかメールで来ただけ」

それを聞いた3人は驚いた。

「えっ!？」

「それ本当なの!？」

「え、なんだよ急に」

「それは困ったことになるかもしれないな」

「黒雪、どういうことなんですか？」

「今年から健康診断にスコア制が導入されてな。一定の値を出せなかった生徒は強制的に健康増進プログラムに参加させられるんだ」

「メールで通達あったの知らなかったのかい」

「……………見た……………ような」

「スルーしたんでしょー！ハルって昔から嫌な知らせとか見なかったふりして忘れちゃ
うこと結構あるもんねー」

「んなことねえよ!!」

「いや、ハル昔からそういうところあったよ」

「タクお前もか！」

「確かにあったような」

「アルトリアさんまで……」

「でもこれは本気で困ったことになりそうですね、マスター」

「そうだな」

「本気って？」

「健康増進プログラムは毎週土曜の午後から夜まで実施されるんだ。しかも開催する場

所は区の医療施設だから、ローカルネットからは隔離されてるんだ」

「つまり、君は領土戦には参加できなくなるんだ」

「えっ!? そ、そんな…」

ハルユキは落ち込み、手に持つてるピザが落ちそうになるが、ハルユキはそれを食べようとしてチュリに頭を叩かれた。

「まだ食べるかあんたは!!」

「だって勿体無いだろ!!」

「なら私が食べましょう」

アルトリアはハルユキの向かいに座り、ピザを食べ始めた。

「でもこれは問題だよハル。もう選択肢は2つしかない。少しでもスコアを向上させるか、あるいは諦めてプログラムに参加するか」

「げ、現状維持っていう選択肢は？」

「ないね。残念だけど」

「えつと……スコア向上って具体的に何すれば……」

「君にはもうわかってるだろ」

「仕方ないわね！ねえハル、騙されたと思って来週の一週間、あたしに全てを預けてみない？」

「騙されるなら嫌だ」

「じゃあ犬に噛まれたと思って」

「それ酷くなってるぞ!」

ニコニコしながら言うチュリに対してハルユキは突っ込んだ。

「ふーん。じゃあハルは領土戦に出られなくてもいいんだ」

「そ、それは……」

「ハルユキ。もう諦めてチュリの言う通りにした方がよいのでは?」

「古今東西ありとあらゆるダイエットをやってきたこのチュリ様に任せておけば、ハルもシルバークロウもびっくりするくらいのスリム体型になるわ!」

こうしてハルユキのダイエットが始まった。

始まる前にハルユキはアルトリアに対してこう思った。

(アルトリアさんってあの身体でいったいどこにあれだけの量が入ってるのかな……)

「もぐもぐ……」

第13話 ダイエット一週間

ハルユキたちは今、梅郷中のプールにきていた。

「ダイエットって言ったらまずは運動！さあ！バンバン泳いで貰うわよ!!」

「う、うん……」

「頑張ってね♪お兄ちゃん♪」

ハルユキはプールサイドを見ると、そこには水着をきたニコと美早、黒雪姫とアルトリアが椅子に座っていた。

その近くにはタクムと白雪姫がいた。もちろん2人も水着である。

「な、なんでニコたちまで!？」

「だってー、お兄ちゃんが痩せるために頑張ってるって聞いたら居ても立っても居られないもん♪」

「ハードラック」

美早が腕を組むと、胸が強調された。

それをみたハルユキはすぐに視線を変えて、ゆっくりと黒雪姫の方を向いた。

ハルユキは黒雪姫の脚を眺めて、顔を赤くしていた。

「カラー!!よそ見しない!!さあ一往復目開始!!」

「は、はい!」

ハルユキは集中して泳ぎ始めた。

「……………何だ?」

「いや、少しは育ったんだなーと思ってな。一緒に風呂入ったあの時よりは」

「か、関係ないだろお前には!!」

「だな。目の錯覚か。……ハカセの隣にいるお前に激似のやつはお前の姉か？」

「ああそうだ」

「お前の髪の色を白にしたただけみたいに見えるな。あとは体型か」

「む……」

白雪姫は黒雪姫と少し違って、身長は少し高く、胸は黒雪姫よりもある。

「どうしたのサツちゃん？」

「い、いや……」

「黒いのはあんたの体型を見て嫉妬しフゴツ!!」

黒雪姫はニコの腹を膝で殴って、言わせないようにした。

ニコは腹を抑えて、白雪姫は驚いて手で口を隠した。

「いらんことを言うな」

「全く、みんな胸の話をして、あんなの邪魔なだけじゃないですか」

「たまに邪魔になる」

アルトリアが言った後に美早が答えた。

その直後、アルトリアは暴走しかけ、美早に突撃しようとしたがタクムと白雪姫が必死に抑えた。

「お、落ち着いてくださいアルトリアさん!!」

「け、喧嘩はダメです!」

「あなたはそんな立派なものを持つてるから言えるんですよ!! 持っていない人たちを敵にまわしましたね!!」

「美早さんは何もしてませんから!!」

「○□◎\$%#△×∥€÷!!!」

「アルトリアさん! 暴走しすぎて何言ってるかわかりません!!」

それからハルユキが泳ぎ終わるまでアルトリアの暴走は続いた。

二日目……

「ハル！二日目は筋トレよ！食事もアタシがつくつてあげるから感謝しなさいよ」

その日はハルユキは筋トレを完璧にすることが出来ず、チユリ特製の野菜料理を食べただけとなった。

三日目……

タクムと一緒にランニング。

だが、ハルユキにはタクムと同じペースはまだ早かった。

四日目……

梅郷中の剣道場を借りて、アルトリアと剣道をした。(チユリは観戦)
アルトリアが強すぎて試合にならなかつたり、力が強すぎて気絶したりした。

五日目……

トレーニングジムでチユリ、白夜とマシユ、綸がハルユキの相手をしていた。もちろんみんなトレーニング用の服に着替えている。

「みなさん今日はハルをよろしくお願いしますね」

「はい。まずは軽くランニングです」

マシユはハルユキをランニングマシンの上に乗せて、最初は遅いペースに設定した。

それから徐々にペースを上げていった。

そして休憩した。

「はあ……はあ……」

「ハルユキ君。息が上がるのが早いですよ」

「マシユさんは凄いですね……」

「白夜さんとうちやってトレーニングをしましたから」

マシユは足を組んで、手を後ろにおいて上を見た。
そしてマシユは昔のことを少し話した。

「実は白夜さんは……私の憧れなんです」

「へっ?」

「私は事故で両親を亡くして、孤児院に入ったんです。入った当時はまだ両親のことを引きずって、部屋に閉じこもってました。そんな時、白夜さんは私を無理矢理部屋から引っぱり出して、近くの公園で走ったりしたんです。ただ走ってるだけなのに楽しくて……私はこんなことで私を笑顔にしてくれた白夜さんに憧れて、いつも白夜さんに引っ付いてました。どこにいてもいつも一緒に私が中学に上がる頃にこのジムに白夜さんと一緒にくるようになったんです。そして白夜さんが高校に上がる頃に私は一年間フランスに料理の修行に行っただんです。私の料理で白夜さんに少しでも恩返しが出来なくて」

「そうなんですか。あの、マシユさんは白夜さんのことが好きってことなんですか？」

「好きですよ。でも私は家族でいる方がいいんです。だから告白はしません。それに白夜さんにはもうあきらさんがいますし」

「そうですか」

「さ、休憩はおしまい。そろそろ戻りましょうか」

「はい！」

マシユの次は綸がフィットネスバイクで足の運動をした。

「これで……足を鍛えましょう。それに」

「それに？」

「これなら……自転車に乗る……練習が……できる」

「へ、へえ」

それから数時間……

「次が最後で一番きついで」

「い、いったい何を？」

「ここにあるトレーニングマシンを一通りやつてもらおう」

「えええ!？」

「ハル！これもハルのためなの！頑張りなさい!!」

「わ、わかったよ……」

そしてまた数時間が経った。

「き、きつかった……」

「今日はこれで終わりだ。明日は奨真が相手をしてくれるからな」

「は、はい……」

七日目……………

「またここですか？」

「このトレーニングジムはステージもあるからな。ここでブレインバーストでする決闘をリアルでするんだ」

「ええ!?!怪我しちやいますよ!!」

「大丈夫だ!ちゃんと防具を使わしてやるよ」

「しよ、奨真さんは？」

「俺はいらない。とにかく構えろ」

「わ、わかりました」

ハルユキと奨真はお互い構えて戦闘態勢に入った。

それから数時間、そしてその日はずっと決闘だけで終わった。

夜にハルユキの家に黒雪姫とチユリ、タクムとアルトリアが集まり、ハルユキの体重が減ったかどうか確認したが……。

「一週間もあって……何で300グラムしか落ちないのよ!!」

「俺が知りたいよお!!」

「でもあれだけやって何故落ちないのでしょうか」

「はあ……あ、楓子姉さんからだ。ハルんちのサーバーでとっていい？」

「ああ……」

『どうです？ 減量ははかどりましたか？』

「それが全然なんです！ ハルったら何をしてもちっとも痩せてくれないんです！」

『体質の問題かもしれないわね。中には水を飲むだけで体重が増える人もいるみたいだし』

『俺はその逆でどれだけ食べても体重は増えないな』

『奨真君。女性の前であまりそういうことは言わない方がいいわよ』

『わ、わかった』

電話越しで楓子が奨真に笑いながら少し怒っているのが見えた。

「どうしよう姉さん！もうあと一週間しかないのに！」

『私に1つ考えがあります。私に任せてくれませんか、鴉さん？』

「え？師匠がですか？」

ハルユキは怯えたように楓子に聞いた。

『私が知ってる温泉で体質改善に効果があると言われていたところがあるんです。来週
の土曜に領土戦の後に、みんなでそこにダイエット合宿をするのです』

「あそこか楓子？」

『そう、あの温泉よ』

『あそこならいいんじゃないか』

「先輩も奨真さんも行ったことあるんですか？」

『ええ。実はバーストリンカーたちに密かに有名な温泉があるのよ。ふふつ、ちなみに
混浴よ』

「「えええ!!!」」

第14話 温泉合宿

そして土曜日。

領土戦が終わり、みんなでダイエット合宿をするために、ハルユキと黒雪姫、タクムとチユリ、アルトリアが梅郷中の校門で待ち合わせをしていた。

しばらく待つと、二台の車がやってきた。

「全員いるな。よし、後ろに乗ってくれ」

全員荷物を持ってそれぞれ車に乗っていった。

ちなみに運転してるのは奨真と白夜で、奨真の車の助手席には楓子が、白夜の車の助手席にはマシユが乗っていた。

奨真の車に乗っているのは、奨真と楓子、ハルユキと黒雪姫、謡とジャンヌ、白雪姫

と絵である。

白夜の車に乗っているのは、白夜とマシユ、あきらとレミ、タクムとチユリ、アルトリアである。

(2人はちゃんと免許を持っている)

車内ではみんな話したりしていた。

奨真の車内……

「奨真さんって車の免許も持ってたんですね」

「ああ。今の時代は16歳で取れるからな」

「ちなみに私も持ってるのよ鴉さん」

「師匠もなんですか」

「私も来年には取れるな」

「私もそろそろ取ろうかな」

白夜の車内……

「温泉かあ……。久しぶりに行くな」

「私もです」

「私もなの」

それから数時間後……

旅館に着いて、奨真と白夜はみんなを下ろしてから駐車場に向かった。
駐車場に停め終えて、玄関に行くと、みんな待ってくれていて部屋の鍵をもらい、一緒に部屋に向かった。

部屋割りには

奨真、白夜、ハルユキ、タクム。

楓子、黒雪姫、チユリ、綸、白雪姫、レミ。

マシユ、アルトリア、ジャンヌ、あきら、謡。……である

奨真たちの部屋に全員あつまって、ハルユキのダイエットメニューを伝えた。

「まずは今晚から明日まで絶食してもらいます」

「うう……この一週間まともに食べてないんですが」

「その調子で体内環境を整えて、本番の明日に備えてください。いいですね？」

「は、は、は」

「……………あの！ハルユキ君…」

「はい……………」

「えつと……………頑張れハルユキ君」

黒雪姫はそう言って、部屋から出て、他のみんなも揃って出て行った。

「はあああ……………。タク、俺もうダメかも。あとのことは頼む、リンカーとホーム

サーバーのメモリ領域は絶対に覗かずに消去しといてくれ」

「まあまあ。あと一週間じゃないか」

「そうだけ。頑張れよ」

「一週間なんて短いもんだ」

「タクム、白夜さん、奨真さん」

温泉内……

湯には楓子と膝の上に座る謡、楓子の隣に座るチユリがいた。

「それで、明日からハルにどうやってダイエットさせるんですか？」

「そうねえ。あなたがいろんなことを試してダメだったでしょ？だからもつと根っこの部分に触れてみようと思うの」

「根っこ？」

「鴉さんは幼稚園や小学校低学年のときは痩せていたのよね？」

「はい！あの頃はかつこよくて密かにモテてたんですよ！」

「なら、何故太ってしまったのか？そこから探る必要がありそうですね」

「何故太ってしまったのか……わからないのです」

「それはまだわからないわよ、ういうい」

3人は立ち上がり、タオルを持って脱衣所に行こうとした。

「何故太ってしまったのか……。あ、そういえば」

「あ、入れ違いだね！」

「ジャンヌさんとマシユさん、アルトリアさん」

「いい湯加減よ。ごゆっくり」

「失礼しますね」

「ゆっくりと浸かるとしよう」

「チーコ、今何か言いかけなかった？」

「あ、はい。そういえばハルが太り始めたのって、両親が離婚してからだったような……」

「ふむ……」

「フーねえ？」

「なんでもないわ。さ、早く着替えましょう」

旅館の通路……………。

楓子と謡、チユリは部屋に戻ろうとしたとき、奨真とバツタリ会った。

「奨真君、どこに行くの？」

「何か飲み物買いにな。楓子も何か飲むか？」

「いいの？」

「ああ。よかったら2人にも」

「ああ大丈夫ですよ！せっかく温泉旅館に来たんですから2人でゆつくりしてください！」

「私とチユリさんは先に部屋に戻ってるのです」

チユリと謡は早足で部屋に戻っていき、奨真と楓子の2人だけになった。

「あいつら……。ま、いつか。楓子、何か飲むか？」

「それじゃあコーヒー牛乳で」

「は、いよ」

奨真は店員さんにお金を渡して、コーヒー牛乳を2つ買った。
一本を楓子に渡し、もう一本は自分で飲んだ。

「そういえば奨真君と温泉旅館に来るのは初めてね」

「そうだな。まあ2人つきりじゃないが」

「ふふつ。今度は2人つきりで来ましょう」

「ああ。あれ？もうなくなつたか」

「私の飲む？」

「いや、新しいの買って来るよ」

「……………奨真君」

「ん？」

奨真は振り向くと、楓子はあと少しのコーヒー牛乳を口に入れ、口移しで奨真に飲ませた。

「んん?!」

奨真は驚き、楓子は全部飲ませても唇を重ねるのをやめなかった。
奨真は目を閉じ、キスを受け入れた。

「………いきなりすぎるぞ」

「いいじゃない。買う手間が省けたでしょ」

「まあそうだけど……」

奨真と楓子は瓶を返した後、奨真は楓子の手を引いてさつきまでいたところに戻った。

すると奨真は楓子を壁にもたれさせて右手を顔の横に置いた。
そう、壁ドンだ。

「しよ、奨真君？」

「さつきいきなりやってきた仕返しだ」

「え？」

奨真は壁ドンをしながら楓子の唇を自分のと重ねた。

楓子は驚いたが、それを受け入れた。

さつき奨真がやられたことと同じだ。

「もう……」

「言っただろ。さつきの仕返しだ」

「ねえ……家に帰ったら続きしよ？」

「………ああ」

「やった！奨真君大好き!!」

「おっと！ありがとうございます。さ、そろそろ戻ろう」

「ええ！」

奨真と楓子は手を繋いで、それぞれの部屋に戻った。

その後は、男子全員で風呂に入りに行った。

けどハルユキは部屋にはいなかったから3人で入った。

温泉内……………

「明日からどうなるか……」

「だな。楓子は結構厳しいからハルユキが倒れなきやいいけど」

「そ、そんなにですか？」

「ああ」

2人は見事にハモった。

「ハル、大丈夫かな」

「心配になってくるな」

「まあ楓子もやりすぎないようにするはずだ。心配するな」

3人は湯から上がり、脱衣所に入って浴衣に着替え、部屋で晩飯を食った後、3人は寝た。

翌日……

3人は起きると、ハルユキは部屋でずっと寝ていた。どうやらハルユキは初日から体調を崩したみたいで、楓子とチユリが持ってきたお粥も食べなかった。

それから一週間が経って、再検査の日。

ハルユキはなんとか健康増進プログラムを回避した。

そして領土戦。

「全く。いい加減なつくりの体よね。ちよつと食べれば今は完全に元どおりだし」

「本当に残念です。いろいろと工夫を考えてたのに」

「いいじゃないですか！とにかく検査はクリアしたんですから！」

「だね。それに痩せたハルなんて今更想像しづらいし」

「ええ……そりゃ酷いよタク……」

「あ、そういえば帰った後、奨真君と楓子ちゃんラブラブだったね！」

「ジャンヌ!!なんで知ってるんだよ!!」

「えーだって丸聞こえだったよー。だって私の部屋は奨真君の隣だしー」

「は、恥ずかしい……」

「私はそうでもないけど」

「楓子。お前少しは恥じらいを持ってよ」

「っ!?!みんなきたよ!」

全員が同じ方向を見ると、緑のレギオン『グレートウォール』のメンバーが来ていた。

「では、行こうみんな！」

「「「おお!!」」」

「ネガ・ネビユラス！出撃!!」

第6章 闇に落ちる仲間

第1話 白夜の過去

奨真たち『ネガ・ネビュラス』はハルユキの家で集まっていた。

ネガ・ネビュラスのメンバーだけじゃなく、白の王『ホワイトコスモス』である白雪姫、『アツシユローラー』である日下部繪も集まっていた。

「これから加速研究会の情報を話そうと思う」

「加速研究会ですか？」

「まあほんの少ししか情報はないが」

「奨真君。ぜひ教えてほしい」

「ああ。俺が持つてる情報は白雪を操ってサッチにライダーを殺させた黒幕、グレーマインドのリアルな正体だ」

「それって凄い情報ですよ!!」

「奨真。そいつの正体は？」

「グレーマインドの正体は『葉山三郎』というやつだ」

「っ!？」

「葉山三郎……。聞いたことがないな」

「葉山三郎って私や奨真さんたちがいる学校の人じゃ!？」

「ああ。俺もそう思って学校名簿を見たが、そいつの名前が消えていた」

「あいつか……」

「白夜さん……」

「どうした白夜？」

「あいつは俺が殺す！」

「びゃーくんどうしたの!？」

白夜は立ち上がり、ハルユキの家を出て行った。

あきらはすぐに追いかけたが、もう白夜はいなかった。

あきらは戻ってきてもう一度座った。

「あんなに怖いびゃーくんは初めて見るの」

「あいつがあそこまでなるなんて初めてだよな」

「ねえマシユ。あなたなら何か知ってるんじゃない？」

「楓子ちゃん、どういうこと？」

「マシユは白夜君と同じ孤児院に住んでる。なら白夜君が『葉山三郎』の名前を聞いてあんな風になる理由は知ってるんじゃないかと思ってるね」

「……………楓子さんは凄いですね」

「知ってるのね」

「はい。その前に白夜さんの本当の苗字を知る必要があります」

「本当の……苗字？」

「白夜さんの最初の苗字は雪ノ下ではなく、『牧瀬』だったのです」

「『牧瀬？』」

「白夜さんは昔、自分を育ててくれた人の苗字を使ってたんです」

「ちよつと待つてください。白夜さんは両親が亡くなった後、すぐに孤児院に引き取られたと聞いたのです」

「院長さん以外で白夜さんを育ててくれた人がいたんです。その人の名前は『牧瀬焰』。ただのサラリーマンです」

「白夜さんはその人とどうやって知り合ったんですか？」

チユリは気になったことをマシユに聞き、マシユも答えてくれた。

「白夜さんがいじめられてた子を庇ってボロボロになったときに、焰さんは白夜さんに

駆け寄ったのです。それからはいく会うようになって白夜さんは焰さんのことを本当の両親のように思っていました。でも、そんな時でした」

「何があつたんだ」

「葉山三郎が焰さんを自殺させるようにさせたんです」

マシユは白夜の過去を話してうちに涙が出ていた。

「自殺?!」

「いったい何があつたのだ!」

「いつものように私と白夜さんは焰さんの家で遊んでいました。そんな時、突然焰さんが働いている会社の社員さんが入ってきて、焰さんをクビにしたんです」

「何故なんですか？」

「会社で使う大事な資料を勝手に持ち込み、そして紛失した、という理由です。もちろん焰さんはそんなことをしてません!! 私たちも必死に言いました!! でも、社員さんは全然信じてくれませんでした。」

そして次の日、いつものように焰さんの家を行くと、何故か扉は開いていて私たちは中に入ると首を吊って自殺していたんです。数日後、焰さんを自殺に追い込んだ人と白夜さんの前に現れました」

「そいつが葉山三郎というわけか」

「はい……」

「酷すぎますよ!! いったい何の目的でそんなことを!!」

「わかりません」

「白夜にそんな過去が……」

「白夜君は葉山三郎がグレイマインドだということを知ったのなら、彼は何をするのかわからん。もしかしたら奴に近づくために加速研究会に入るか、それともリアルで本当

に殺人をするか……」

「っ!?!そうなる前に止めないと!!」

「白夜さんは殺人をするような人ではありません。たぶんあの殺すという言葉はブレイクバーストのことでしょう」

「それでもあいつは加速研究会に入るかもしれない。それだけは止めないと!!」

「私が止めるの!!」

そう言って立ち上がったのは、白夜の恋人であるあきらだった。

あきららは手を動かして、白夜に無制限フィールドに来てもらうようにメールを送った。

「今びやーくんにメールを送ったの!! 私はすぐに無制限フィールドに行くの!!」

「でも白夜さんが来なかったらどうするんですか!」

レミはあきららに聞いたらあきららは怒りながら言った。

きつと白夜に対して怒ってるのだろう。

「その時は今までで一番強力な目潰しをお見舞いするの!!」

「俺たちも行くぞ!!」

「ネガ・ネビユラスのメンバーが困っていたらそれを助けるのが私たちネガ・ネビユラスだ!!みんな行くぞ!!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」

「奨真さん!! 私たちも手伝います!!」

「わ、私も!!」

「繪、白雪。ありがとう!」

「アンリミテッドバースト!!」

奨真たちは一斉に無制限フィールドに加速した。

第2話 激突

無制限フィールドに来た奨真たちは白夜を探しに行つた。

しばらく走り続けると、白夜のデュエルアバターが見えた。

「何の用だ。俺は一刻も早くあいつを殺しに行かなきゃならねえんだ!!」

「だからって今の加速研究会に近づくのは間違つてる!!何をされるかわからねえんだぞ!!」

「それでも俺は!!」

「……………ならもう、力づくでお前を止める！」

「……………やってみろよ」

「っ!?!みんなすぐにここから離れるんだ!!」

ロータスはみんなを率いて、エイトとルークから離れた。

2人の気だけがぶつかり合うだけで近くの石ころなどが吹き飛んだ。

2人は同時に駆け出し、拳と拳がぶつかり合った。

エイトは何度も拳で攻撃したが、ルークは全てさばき、右ストレートを放った。

エイトもそれを避け、隙ができたルークの腹を思い切り殴った。

そして怯んだ隙をみて、かかと落としをした。

「がはっ！」

だがルークも負けじとエイトの右足を掴み、横に思い切り投げた。
ルークは立ち上がり、エイトに近づいて首を掴み、地面に叩きつけた。
そして今度は壁に追い込み、何度も叩きつけた。

「がああ!!」

今度はエイトがルークの首を掴み、自分の方に引き寄せ、頭突きした。
そのまま回し蹴りをルークに放った。

「はあ……はあ……」

砂煙はだんだん晴れていき、そこには盾を構えたルークがいた。

さっきの回し蹴りもあの盾で防いだのだろう。

「なら俺も！」

エイトは背中の中の剣を取り、宙に投げ、腰の銃も上に投げた。

「デュアルクロス！ガンブレード！」

エイトは突進して、剣を振りかざした。

だがルークはそれを全て防いだ。

いや、ただ防いただけではない。

エイトの攻撃を全て盾に吸収していたのだ。

「ドレインクラッシュ！！」

「っ!？」

ルークの攻撃を真正面から受けて、エイトは吹っ飛んだ。

「お前は俺のデュエルアバターと相性が悪い。俺が盾を使った時点で勝負は決まってるんだ」

「……………なら、吸収しきれないくらいの威力で攻撃すればいいだけだ」

エイトはゆっくり立ち上がった。

さっきの攻撃が痛すぎたせいか、フラフラだ。

「そんなフラフラで何ができる?」

「はあああ!!」

「ふん……」

エイトはさつきと同じように、何度も剣を振りかざした。
それをルークは全て盾に吸収した。

「何度やっても同じだ!!」

「おおおおお
!!!!!!」

「っ!?!何!?!」

エイトはただ剣を振りかざしただけではなかった。
エイトは心意技『ジ・イクリプス』を放っていた。

「ジ・イクリプス!!」

「それがお前の最強技か。ならそれも防ぐだけだ!!」

普通のジ・イクリプスは27連撃だが、エイトは限界を超えて、27連撃以上放った。
ルークも負けじと全て吸収しようとした。

(くっ!このままじゃ防ぎきれない!なら、エイトの技を止めるしかない!!)

「ドレインクラッシュ!!」

ルークは吸収した攻撃を全てエイトのジ・イクリップスにぶつけた。
すると凄まじい爆風が発生した。

離れたところで2人の戦いを見ていた他のみんなは爆風に耐えることで精一杯だった。

やがて爆風は晴れていき、2人がいた場所を見ると、倒れかけの2人がいた。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

「勝負は終わりだ……俺はもう行く……」

「ま、待て……」

ルークはその場から離れ、エイトは追いかけてしようとしたが、ダメージが大きすぎたせいでその場に倒れた。

「あいつのドレインクラッシュは……本当に効くな……」

「エイト!!」

「カレンか……ごめんな……。あいつを……白夜を止められなかった」

「ううん！そんなことないの！エイトは必死に止めようとしてくれた！！私が止めようとしたのに……代わりに止めようとしてくれて……」

「がはっ！」

「っ!?!今は回復しないと！」

「白雪さん！私に任せて！シトロン・コール!!」

ベルの必殺技で、エイトの傷は癒えていった。
だが、エイトの疲労は治ってなかったみたいだ。

「エイトはゆっくり休んで欲しいの。今度こそ私が」

「1人じゃ危険です！白夜さんが加速研究会に入ろうとすることは絶対加速研究会も知ってるはずですよ！白夜さんの力を利用するためにきつと妨害してきます！」

「でも全員で行ったら誰が重症のエイトの側にいるの！」

「だから5人くらいで行くんですよ！妨害してくるっていつでも全員が来れば加速研究会の正体がわかってしまいます。だから来るとしたらきつと少人数です。だからこつちも少人数で対抗するんです！」

レミが言ったことは間違っではない。

加速研究会は謎に包まれている。

なら、妨害してくるとしても少人数で来る確率のほうが高いだろう。

「わかったの。ならあと4人は？」

「私がいきます！たまには奨真さんにかっこいいところを見せたいし」

「私もいきます！」

「主が言いました！仲間を助けてあげなさいと！だから私もいきます！主が言わなくても助けると決めてましたが」

「なら最後の1人は僕が！僕の飛行アビリティがあれば追跡も可能です！」

「レミ、マシユ、ジャンヌ、ハル君……。ありがとうなの」

「あきら。みんなを頼む。無事に白夜君を連れて帰ってきてくれ！」

「もちろんなの！」

あきらたちは白夜を止めるために追跡を始めた。

レギオン内で起きた任務。

『ルーク奪回任務』の開始だ。

第3話 アンクル対サルファポッド

「この先をずっと進めばルークさんと遭遇するのでしょうか？」

「それはまだわからないの。だから今クロウが偵察に行ってもらってるの」

「あ、帰ってきたよ！」

先に偵察に行っていたクロウが戻ってきて、ルークの居場所を伝えた。

「みなさんお待ちせしました！この先を進めばルークさんがいます！でも気をつけてください！アンクルさんの言った通り、妨害してくる人がいます！」

「了解なの！」

「っ!?! みなさん避けてください！」

シルは敵の攻撃を感知し、4人に避けるように伝えた。

攻撃してきた方を見ると、巨人型エネミーをティムしたサルファポッドがいた。

「チイツ！仕留め損ねたか！だが次はないと思え!! 行け!!」

「みなさん私の後ろに!!」

シルは4人を自分の後ろに待機させ、必殺技を放った。

「ロードカルデアス!!」

シルは自分の盾をさらに大きくして、巨人型エネミーの攻撃を防いだ。けど巨人型エネミーの攻撃は続いた。

シルはずっと防ぎ続けたが、シルにも限界がある。

「ぐう……このままじゃやられる……」

「そのムカつく盾も限界がきたようだな！これでトドメだあ!!」

「はあああ!!」

「っ!?!ぐあー!」

サルファポッドはトドメの一撃を放とうとしたが、誰かに攻撃されて、エネミーの肩から落ちてしまった。

4人は巨人型エネミーのほうを見ると、肩の上にアंकルがいた。

「攻撃に集中しすぎて後ろが隙だらけよ!!」

「アंकルさん！」

「4人はルークさんを追いかけて!!こいつは私が足止めする!!」

「アंकル!1人じゃ危険よ!私も！」

「フランさん!最初に私は言いましたよ!こいつ以外にも妨害してくる人は必ずいます!そのためにも人数を温存しなきゃいけません!大丈夫ですよ!さっさとこいつを倒して後を追いかけますから!」

「ここはアンクルに任せるの！」

「アンクルさん！僕は信じてますから！」

「アンクルさん！必ず追いついてくださいね！」

「ここはお任せします！」

「に、逃がすかあ！チャコール」

「あんたの相手は私だあ!!クオーツテンペスタ!!」

アンクルは小太刀に電撃を浴びせて斬りつける心意技をサルファポッドが技を使う前に放った。

「き、貴様も心意を!?!」

「だから何！今は目の前の敵のことを考えておくことね！！」

「小賢しい！！」

アングルは何度も小太刀で攻撃をするが、サルファポッドも体術でそれに対抗してきた。

小太刀を一度宙にあげて、サルファポッドの目線を小太刀に集中させ、隙を見て足を引っ掛けた。

動けないように倒れたサルファポッドの足を思い切り踏み、空から落ちてきた小太刀を手に取り、首を切断しようとした。

「ふっ」

「っ?!?!があああ!!!!」

……がサルファポッドがタイムした巨人型エネミーの存在を忘れていたせいで、エネ

ミーの重い一撃をまともに食らってしまった。

アンクルは衝撃で吹っ飛び、エネミーはアンクルを両手で掴み握りつぶそうとした。

「ああああああ
!!!!!!」

「いいぞ！もつとやれ！」

エネミーはアンクルを片手で握り、地面に叩き落としました。

アンクルはボロボロになり、まともに動くことができなかつた。

「がはっ……」

「おいおい、もうお終いか？あれだけ大口を叩いてこの程度か？調子に乗るんじゃないやねえ
!!」

サルファポッドはブチギレて倒れたアンクルの腹を思い切り蹴った。

アンクルは徐々にHPを削られていき、残り2割になった。

「さっさと死にやがれ!!」

「があああ!!!」

(私は……………負けるの?こいつに負けて、みんなとの約束を守るの?そんなの……………そんなの……………絶対に嫌だ!!私は……………私は……………こいつを倒して、4人を追いかけて!ルークさんを連れて帰って!!そして……………みんなに頼られる……………奨真さんに頼られるような存在になりたい!!!)

アンクルは力を振り絞り、サルファポッドの攻撃に対抗しようとした。

だが、サルファポッドはエネミーを使い、アンクルの左腕を踏み潰した。

普通なら痛みでおかしくなるはずだが、アンクルは耐えぬいて、立ち上がった。

「こいつのどいかにこんな力が!?!」

「私は……負けない!!」

「この死に損ないが!!」

（今の私じゃ攻撃を全て避けることは不可能。なら、こいつらの動きさえ止まれば!）

「タイムストップ!!!」

アンクルは今、新たに心意技を覚えて、ブラックバイスの次に時間を操る力を発揮した。

エネミーの攻撃はアンクルの体ギリギリで止まり、サルファポッドはエネミーの隣で停止していた。

「はあ……はあ……はあ……と、止まった?」

アンクルは自分が時間を止めたことを信じられなかった。

でもこれでアンクルは有利になった。

「このまま攻撃すればどうなるのかな？」

左腕を抑えて、サルファポッドに近づいた。

少し突いてみたが、やはり動かなかつた。

「斬れるのかな？せやー！」

ガキンツ！

右手に持った小太刀でサルファポッドの左腕を斬ると、見事切断することができた。

「これなら身動きを取れなくすることもできる！いつ時間が動き始めるかわからないし、早くしないと！」

アンクルはサルファポッドが身動きを取れないように、両腕と両足を斬り落とした。

そして巨人型エネミーの両足を切断して、動けなくした。

「これで大丈夫かな？」

アンクルは傷ついた体を少しでも休ませるため、時間が動き始めるまで地面に座った。

座ってから数秒で時間が動き始めて、サルファポッドは時間が止まつてる間に受けた衝撃を一気に受け、後ろに吹っ飛び、エネミーはポリゴン状となり砕けた。

「っ!?!がはっ!!」

「っ!?!」

「ど、どういうことだ……いったい何が!?!お前何をした!!」

「それを答えるわけにはいかないわ」

「くそ！両腕と両足を斬り落とされたせいで身動きが!!」

「答えなさい！あんたは何で私たちの邪魔をするの？」

「お前と同じことを言っただけ。答えるわけにはいかない」

「そう……ならもう用はないわ。楽にしてあげる」

アングルはサルファポッドの首に小太刀を近づけ、そのまま首を刎ねた。

「っ!?!ぐう!」

アングルはサルファポッドとの戦闘でかなり傷ついていた。

本当はもうまともに動ける状態ではないのに、無理矢理体を動かしたせいで、もう限界だった。

「とにかく……ここを離れないと……1時間後にはあいつが……復活する。その前に遠くに……いかないと……」

アンクルは左腕を抑えて、重い足を引きずりながらその場所から離れた。

レミサイド

どれくらい遠くに来たかな？

あれからずっと歩き続けたような……。

「はあ………はあ………」

もう………意識が………遠のいていく………。
ごめんね………みんな………。

私は建物の陰に隠れて、背中を壁に預けた。

私………ここで………リタイヤみたい………。

あ………あれは………奨真さん？

あはは………幻でもあの人が出てきちゃうんだ………。

奨真さん………私………加速研究会の1人を倒しましたよ………。

……あ……奨真さんが笑ってる……褒めてくれるんですか……。

あれ……なんでこんなに嬉しいんだろう……。

いつもは……会っては喧嘩するような仲なのに……。

……ああ……そっか……いつも私が奨真にちよっかいかけてたのは……あ
の人にいつまでもみて欲しかったからなんだ……。

だから……あの人の恋人の先生に抱きついて嫉妬させたり、余計なことを言って困ら
せたりしたんだ……。

今思えば……私ってあの人に迷惑をかけたばなしだなあ……

ルークさんを連れ戻したら……あの人に……

……告白しよう

レミサイドアウト

立花伶弥 『タンタルアンクル』

リタイア

第4話 紅蓮の聖女

「アンクルさん遅いですね」

「きつと追いかけてきますよ」

「っ!?!みんな止まって!!」

フラン（ジャンヌ）は止まり、みんなを止めた。

3人は急なことで驚いて止まり、ジャンヌの元を集まった。

「ど、どうしたんですか？」

「早くルークさんを追いかけないと！」

「少し待ってください」

フランは腰につけた剣を抜き、さらにストレージから鎖を取り出し、剣にくくりつけた。
た。

そしてフランは目の前に剣を投げた。

すると、突然無数のナイフが壁から出てきた。

「やはりそうでしたか」

「い、今のはいったい……」

「壁からナイフが飛んできましたよ!?!」

「これはトラップです。仕掛けたのはおそらく加速研究会でしょう」

「でもよくわかりましたね。僕なんか全然わかりませんでした」

「私のアビリティは『看破』と言って、見破る力なんですよ」

フランのアビリティ『看破』はどれだけ凄いつラップでも見破ることができる。それだけではなく、相手が考えてることや今までしてきたことも見破ることができる。

『面白いアビリティだな。テイカーがいたらすぐに欲しがってただろうな』

「っ!？」

突然声が聞こえて、その瞬間、黒い影がハルユキの背後に高速で近づいた。けど、フランがそれより早くに回り込んで、旗で攻撃を防いだ。

「能力をわかっていて不意打ちですか？防がれることは考えなかったのですか？」

『わかってるさ。だからこうしたんだよ！』

「っ!？」

「フラン!!」

黒い影は旗と一緒にフランを拘束して、口から煙を出した。

フランは後ろにいたクロウを突き飛ばして、煙の範囲外に出した。

(これは……毒霧!?)

毒霧をまともに食らったフランは状態異常をみると、毒になっており、HPがほんの少しだが減り始めていた。

「3人は先に行ってください！」

「でもフランさんは毒状態に！」

「だからこそだよ！毒状態の私がいても足手まといになるだけ！なら1人で戦えば足手まといにはならない！さあ早く!!」

3人は先に進み、フランは黒い影と対峙した。

（口から毒霧を吐き出すなんて聞いたことがない……。まずはどういう仕組みなのか見破らないと）

フランはアビリティを使って黒い影を見た。

すると、とんでもないことに気づいた。

（つ!?デュエルアバターじゃない!?どういうこと!?）

そう思っただけでも黒い影を見続けた。

見続けると、黒い影の正体が人形だということがわかり、人形の手足など至る所に糸が結ばれていた。

糸の先を辿っていくと、うつすらだが、人影が見えた。

「あなたがこの人形を操ってるのですね！」

「ちよつと気づくのが遅かったな！」

人形は後ろからフランを拘束するように飛びついたが、フランはアビリティを使って、それを予測していた。

思い切り飛び、バック宙で避けた後、腰の剣で首を刎ねた。

人形はポリゴン状となって消えていき、フランはデュエルバター本体のところへ走った。

「チツ！」

移動を始めたデュエルバターは広いところに行き、フランと対峙した。

「ちよつとはやるみたいだな。だが、毒が回り続けてるんじゃないか？」

「ええ。少しきついですが、攻撃を予測できる私の方が有利です」

「ならこれも予測してたのか？」

デュエルアバターは指を鳴らすとフランの足元から人形が出てきた。けど、フランはそれも予測しており、簡単に避けた。

「私に攻撃を当てるなら私が予測するのを予測するしかないですよ」

「へえ。……はは」

「何がおかしいんですか？」

「今の俺じゃ勝てないってわけさ」

「なら今すぐ退いてください」

「……けど。時間を稼ぐことはできる」

デュエルアバターはストレージから新しい人形を出して、糸で結んだ。
そしてデュエルアバターは自分の名前を名乗った。

「せつかくだ。俺の名前を教えてやろう。俺はデスパペット。色は死の色である黒だ」

「アンバーフラッグです。それで、時間を稼ぐ？」

「お前のHPをゼロにするための時間稼ぎだ」

「毒ですか！その前にあなたを倒します！」

人形がフランに突撃するが、フランは旗を回して跳ね返し、少しずつパペットに近づいていった。

パペットは人形を操りながら距離を空けていた。

人形を操るだけだからパペットは簡単に距離を空けることができるが、フランは人形の相手をしているため、距離を縮めることができなかった。

「邪魔な人形ですね！それに剣で斬っても簡単に斬れない！」

「そりやそうだ！俺の一番の人形だからな！あと、人形が一匹だけじゃないことを忘れるなよ！」

「っ!?!しまっ」

フランは一匹の人形の相手に集中しすぎたせいで、背後からの攻撃を予測することができなかった。

人形は手を刀に変形させて、フランの体を貫いた。

「がはっ……」

「チャンス！これで終わりだ！」

「……………油断大敵ですよ！」

ザシユツ！

フランは襲ってきた人形の首を旗で刎ねて、人形に結ばれてる糸を思い切り自分の方に引っ張った。

パペットは咄嗟に糸を切ったが、もう一匹の人形にはまだ糸が結ばれていたもので、フランはその糸を引っ張り、パペットを自分の方に寄せて、身動きが取れないように抱きしめた。

「くっ！この！そんなことをしてもお前の毒が回って！」

「毒でHPがゼロになるとは思わないでね！」

フランは剣を取り、空に掲げた。

「主よ。この身を委ねます」

「な、何する気だ!!」

「浄化の炎よ。我が身とともに全てを!」

「は、離せ!!」

「ラ・ピュセル!!」

フランとパペットは周りの紅蓮の炎に包まれた。

『ラ・ピュセル』はフランの最強の必殺技であるが、自分のHPがゼロになる諸刃の剣でもある。

この技を喰らえば、どんなに強いやつでも無事に入られない。

やがて炎は晴れていき、その場所にはHPがゼロになったフランと膝をついているパペットがいた。

「はあ……はあ……。あんたは強い。けど、惜しかったな。もう少しHPを削った後に使えば相打ちにすることが出来たのに……」

パペットはゆつくりと立ち上がり、重い足を引きずってその場を去ろうとした。

途中でフランの方に振り返ってこう言った。

「また戦おうぜ。もちろん全力でな」

フランがいた場所から少し離れたところで、パペットはストレージの中を見ていた。

「あーあ。人形が足らなくなっちゃった……………」

（あの女……。アンバーフラッグだったか……。面白いやつだったな……）

パペットはウインドウを消して、空を見上げた。

「……………また、会いてえな」

ジャンヌ・ダルク『アンバーフラッグ』

第5話 黒い影

「どれくらい遠くに来たんでしょうか？」

「そろそろ追いつくころだと思わんですが……」

「見えたの！」

3人はルークをみつけて駆け寄ろうとしたが、強敵が姿を現した。

「っ!?!お前は!!」

「久しぶりだねクロウ君」

「ブラックバイス!!」

ルークは気づいてないが、地面から加速研究会副会長ブラックバイスが姿を現した。

「こいつは強敵ですよ!!」

「クロウさん!ここは2人で戦いましょう!」

「は、はい!」

「カレンさんはルークさんをお願いしますー！」

「2人とも、無理しないで!!」

2人はカレンを先に行かせて、ブラックバイスと対峙した。
そしてクロウはいきなり突っ込んだ。

「せやああああ!!」

バイスは地面に潜り、クロウの攻撃を避けて、そのまま必殺技を放った。

「シャドウ・ラーカー」

地面からバイスの体の一部の板を何枚か出してくっつけて、高速で回転した。
クロウはバイスの近くにいたせいで攻撃をくらってしまった。

「ぐわあ!!」

「クロウ君!!」

吹っ飛んだクロウを抱き止めて衝撃を少なくした。
すぐに立たせて、シルは盾を構えて防御態勢に入った。

「地面に潜るのが厄介ですね」

「私が隙を作るので、クロウ君は私が合図したら空から攻撃してください」

「はい!」

クロウは空を飛び、シルは突っ込んで盾で殴りにいった。

バイスはさつきと同じように地面に潜り、同じ必殺技を放った。

シルは盾を立てて、盾の上に回避した。
けど、衝撃のせいで盾は不安定だった。

「なかなか耐えるね君」

地面からバイスが姿を現し、シルは盾でバイスにアツパーを決めて、クロウに合図を送った。

「クロウ君！今です！」

「はい！ダイブアタック!!」

クロウは急降下して宙に浮いたバイスに飛び蹴りをした。
バイスは地面に叩きつけられ大ダメージを負った。

「グフツ……………油断したよ」

バイスはゆっくりと立ちがった。

大ダメージを負ったはずだが、ピンピンしていた。

「けど、それくらいじゃ僕は倒せないよ」

「なら!!レーザーランス!!」

「ミラーージュシールド!!」

クロウは手に光集め、それをバイスに突き刺すように手を前に出し、シルは盾を立てて、向かいに鏡に写ったようにもう一人の自分を作り出して、バイスを挟んだ。

そして盾を投げると、向かいにいる自分も同時に投げて、交換するようにしてバイスに攻撃した。

バイスはクロウのレーザーランスを自分の体一部を使ってガードしたが、シルの攻撃は防ぐことができなかった。

「その程度ですか?なら今度は僕がいきましょう」

「ヘキサヘドル・コンプレッション」

「っ!?!は、挟まれた!?!」

「ぐう……動けない……」

クロウとシルは大きな板で挟まれ、動くことができなくなった。

抜け出そうとした時、板は形を変えて、箱の形になって2人は完全に閉じ込められた。

「出せ!!」

「!?!の!!」

「無駄だよ。……………はあ!!!」

バイスは技を放ち、箱は爆発した。

「っ!?!ロードカルデアス!!」

シルは咄嗟にロードカルデアスを放ったが、完璧に発動する前に爆発に巻き込まれた。

爆風が晴れていくと、倒れたクロウと盾を支えに膝をついたシルがいた。クロウは僅かにHPはあるが、戦闘不能になっていた。

「はあ……………はあ……………ロードカルデアスでもこのダメージ……………」

「君も限界だろ。楽にしてあげるよ」

「ロード……ぐう……」

「ユニラトラル・ダート」

シルはロードカルデアスを発動することが出来ず、バイスの心意技をくらいそうになっただが……。

「うおおお!!」

バイスの心意技で放った体の一部を、突然現れた誰かが全て跳ね返した。

そのデュエルアバターは黒色で両手にはサバイバルナイフ型の強化外装が握られて

いた。

「おや？君は？」

「シャドウアサシン」

「なんで邪魔するのかな？」

「……………お姉ちゃんを虐めたからだ!!」

「え……………？」

シャドウの突然の発言でシルは思考が停止した。

有田春雪『シルバークロウ』

リタイア

第6話 あきら対白夜

倒れたシルとクロウの前に『シャドウアサシン』と名乗る黒いデュエルバターが現れた。

バイスは新手と思い、一瞬構えるが、すぐに警戒を解いた。

「君の相手をしてもいいけど、情報がなさすぎて不利だね。ここは大人しく退かせてもらおうよ」

バイスは地面の影に潜り、その場から消えていった。
シャドウはシルの元に駆け寄った。

「大丈夫？お姉ちゃん？」

「えつと……あなたは？」

「あ、この姿だと初めてだね」

そう言つてシャドウはいきなりシルの胸を揉み始めた。

一回だけ揉んですぐに離れた。

「ひゃん！」

「これでわかった？」

「こんなことする人なんて……もしかして、寿也？」

「そうだよ。お姉ちゃん！」

「で、でもどうして！なんでここが？あ、その前にいつからバーストリンカーに？」

「い、いっぺんに言わないでよー！」

「ご、ごめんね！いきなりすぎて頭が混乱して……」

「まずは1つ目、僕は2年前にバーストリンカーになったんだ。2つ目、たまたまお姉ちゃんたちを見かけたから追いかけた。3つ目、あいつはお姉ちゃんを虐めたから」

「な、なんで私がわかったの？」

「お姉ちゃんが帰ってきてから何度か対戦を観戦したからね」

2人は話していると、別の黒いバーストリンカーが現れた。

その脇にはフランとアングルが抱えられていた。

「ん？終わってたのか」

その黒いバーストリンカーはフランが戦った『デスパペット』だった。

シルはフランと別れる前にみたのは人形だったからパペットとは初対面だった。

「あなたは？」

「デスパペット。加速研究会の1人だ」

「っ!?なんで加速研究会の人が!!」

「待て待て!!俺はお前らと戦う気は無い!!」

「あなたに無くても私は……っう！」

「無理するな。バイスとあれだけ戦ったんだ」

倒れかけたシルをシャドウが受け止め、パペットはゆっくりと2人に近づいた。そしてパペットはシャドウに倒れてるクロウを連れてくるように頼んだ。

「君、あそこにいる銀のやつを連れてきてくれ」

「は、はいー！」

シャドウは遠くですつと倒れたままだったクロウの元にいき、肩に担いでパペットたちの元に戻ろうしていた。

シルは加速研究会の1人であるパペットが何故敵意無しでここにいるのかが疑問に

思っていた。

「あなたはなんでここに？」

「俺はさっきまでこの黄色い子と戦って、そのまま帰ろうとしたんだが……。……。な
んでかわからないが放って置けなかったんだ」

「加速研究会の人がいったい……。どういう風の吹きまわしですか？」

「どうもなにも、俺は戦闘不能のやつを痛めつけるほど根性は腐ってない。それより黄
色い子はHPは満タンだが気を失ったままだし、この子は傷も酷い。早く休ませない
と」

「そ、そうですね」

「お姉ちゃん。辛いと思うけど案内お願いしますよ」

「大丈夫よ」

「さて、行くか」

あきら side

私は先に進み続けるびやーくんを必死に追いかけた。

びやーくんはしょーくんと戦闘で体力を消耗してるはず。なら、近くまで行けば必ず追いつく！

必死に追いかけて、私はびやーくんの前に回り込み、道を塞いだ。これ以上行かせないために。

「あきら。お前も邪魔するのかわ？」

「びやーくん！昔のこと聞いたよ。何でなの………何で私に話してくれなかったの!!」

「お前が知って何か変わるのか!!」

びやーくんが怒鳴って、私は体を震わせたけど、びやーくんの目を見続けた。

びやーくんの心はきつと今は暗いところにいる。今救わなきや、びやーくんは遠いところに行ってしまう！

「私はびやーくんの力になりたいの！」

「っ!?!……俺がやろうとしてるのは殺しなんだぞ。お前はその手伝いをする気か!!そんなこと絶対にさせない!!」

「じゃあ何でびやーくんはやろうとするの!!」

「それは……」

「びやーくんは優しいよ。でも今のびやーくんはびやーくんじゃない。何で? 何でそんな風になったの?」

「俺はあの日からずっと復讐のためだけに生きてきた!!それを邪魔するならお前でも容赦しない!!」

もう何を言っても無駄なの……。

びやーくんは復讐のするためにその邪魔をしてる私を倒そうとしてる……。

なら、私は……。

「なら、私は全力で止めるの!!」

私は手に氷を作り、そして地面に手をつけて、心意技『スキューアフロスト』を使った。

氷はびやーくんの元に行ったが、ジャンプで避けられた。

でも空中では身動きは取れない。早速チャンスがきたの!!

私は地面を強く蹴ってジャンプしてパンチしようとした。

けどびやーくんは盾でそれを防いで、そのまま押し返した。

私は落下していき、地面に激突する前に受け身をとった。

前を見ると、盾を持って立っていたびやーくんがいた。やっぱりびやーくんが持つてる盾が厄介なの…。

まずはあれを何とかしなくちゃ。

「グラントデス!!」

「っ!？」

突然地面にヒビが入って、私は咄嗟にその場を離れた。

けど、びやーくんは私が避けるところを予測していて、避けたほうに先回りしていた。そして盾で思い切り殴ってきた。

「ぐう!!」

「……………もう諦めろ」

「……………何を？諦めるの？」

「俺を追いかけるな」

「……………それは私が決めるの」

私は立ち上がったって『スキューアフロスト』を放った。今度は横に避けられたけど、狙い通りなの！

「はあああ!!」

「無駄だ!」

盾で塞がれたけどどこれも私の狙い通りなの。私はその場をすぐに離れて、さっきいた場所に私の水分身を置いた。

びゃーくんは本体の私が離れたことはまだ気づいてなかったの。

私の攻撃はまだ止まらないの。

「コピー・ボム!」

「何っ!？」

水分身は爆発して水蒸気となって視界を悪くさせた。

その隙に私はびやーくんの後ろに回り込んだ。

そして私のおきの技を放った。

「フエイズ・トランスキーン
相転移・鋭!!」

「しまった!？」

私は氷を纏い、尖った氷で覆われた手足でびやーくんに攻撃した。

何発かはダメージを与えることができたけど、盾で防いできた。

ただ防いでるだけじゃなかった。これは私の攻撃の威力を吸収して、吸収した分の威

力を放つ『ドレインクラッシュ』だった。

「させない!!」

私は隙ができないように何度も何度も攻撃をし続けた。

攻撃してる分吸収されるが、それを放たれなければ意味はない。だから私は攻撃し続けた。

びやーくんも少し押されてるのに気づいて、放とうとするけど、放つタイミングが掴めなかったみたいなの。

そして私は渾身の一撃をびやーくんの盾に放った。

するとびやーくんは衝撃で後退した。

盾は………やっぱり吸収されたまま。近くに行くと、いつ放たれるかわからないの。
なら………。

「これで決めるの!!」

「はあ……はあ……お前の全てをぶつけてこい!! 耐え抜いてやる!!」

私は目の前に水の渦を作りだして、手には水を纏った。水を纏った手を水の渦に突っ込んで私の最強の心意技を放った。

これでびゃーくんを止める!!

「メイリストロム!!」

「ジュエルウォール!!!」

私は技を放ち、びやーくんが発動した盾に当たると、とてつもない衝撃が起きて、あたりは爆風に包まれた。

第7話 元どおり

あきら side

技がぶつかり合ってから、少しずつ爆風が晴れていった。

私は膝を地面について、びやーくんは倒れていた。

びやーくんは立ち上がろうとして、私は走ってびやーくんの元にいき、思い切りピントをした。

「びやーくんのバカ！バカ！バカ!!」

「や、やめー!」

「辞めない!びやーくんがいつものびやーくんに戻るまで絶対に辞めない!!」

「やめるんだ！お前の手がボロボロになるぞ！」

びゃーくんは私の手を掴んで止めた。

けど、私は手がボロボロになっても構わなかった。

「だって……こうでもしないとびゃーくんは……」

「なんでそこまで俺にこだわるんだ」

「びゃーくんは私たちの大切な仲間で、私の大切な人だから!!」

「……………」

「暗いところに行こうとしてる仲間を連れ戻そうとするのは間違いなの？困ってる仲間の力になりたいと思うのは間違いなの？」

「それは……………」

「私は間違いないと思うの。仲間ならそれくらい当然だと思うから。それともびゃーくんは私たちのことを仲間と思ってるの？」

「……………思ってるよ。だからこそ！お前らを巻き込みたくなかったんだよ!!なのに連れ戻そうとして……………」

「巻き込んでもいいじゃない!!私たちは仲間なんだからいっばい巻き込んでよ!!」

私はいつの間にか泣いていた。

びゃーくんが言うこと1つ1つが悲しかったから。

「みんなに頼るのが難しかったらまずは私から頼って欲しいの」

「いいの?」

「いいの。それにびゃーくんの目的はグレイマインドでしょ？それならもうみんなと目的は一緒なの」

「ごめん……。目が覚めたよ、俺が間違ってた」

びゃーくんはゆっくり体を起こして、私の方をみた。

私はびゃーくんに抱きついて、胸の中で泣いた。

「びゃーくん……。びゃーくん……」

「ごめんな……」

「みんなのところに帰ろう」

「いや、今はお前と一緒にいたい。みんなにはまた今度連絡する」

「……わかったの。みんなにはそう伝えておくの」

「ああ、ありがとう」

私たちはサツチたちに連絡してから近くの離脱ポータルに向かった。

あきら side out

黒雪姫 side

あきらから連絡が来た後、私たちは離脱ポータルに向かって現実世界に帰って来た。

「あきら、さすがだな」

「さすが白夜の彼女だな」

「2人とも…」

「ほら、行ってこいよ」

「うん！」

あきららは立ち上がってハルユキ君の家から出て行って、白夜君とどこかにいった。あきららが白夜君を連れ戻してくれたおかげで、我々のレギオンは元どおりだ。

「そういえばマシユは加速研究会のやつと親しくなったんだよね？」

「へっ？マシユさんそうなんですか？」

親しくなった？

いったいどういうことだ？

それになんで奨真君がそんなことを知ってるんだ？

「ハルユキさんは気絶してて知らなかったんですね。実はブラックバイスと戦つてるとき、ある人物が助っ人で来てくれて、その後に加速研究会の人が気絶したジャンヌさんとレミさんを抱えてやってきたんです」

「ある人物も気になるのだが、その加速研究会って誰なんだ？」

私はその加速研究会の人物が気になってマシユに聞いてみた。

「デスパペットです」

「デスパペット!？」

「ジャンヌさんどうしたのですか？」

「ういちゃんごめんね、驚かせちゃって。そのデスパペットは私が戦った人なんです」

「そういえばそんなこと言ってたような…」

「私は気絶してたからか全然わかりません……。サルファポッドを倒すのに精一杯でしたから……」

「でもどういふことなんだろうね。白雪は何か知らないの？」

「パペットは加速研究会の中でも一番まともな人です。もしかしたら異変に気づいて抜けるかもしれません」

「彼が仲間になれば心強いのですが……」

「ジャンヌさんが……そこまで……言うつてことは……それほど強いのですね」

加速研究会の人物も誰かわかったし、もう1人のある人物について聞こうかな。私は一度話を中断させ、マシユにもう1人のある人物について聞いた。

「マシユ、もう1人のある人物とは？」

「その人物は私の知り合いだったんです。また今度リアルで紹介します」

「わかった」

「とりあえず今日は解散にしませんか？ 白夜さん連れ戻しに向かった人たちは疲れてるんですし」

「そうだな。それじゃあ今日は解散にしよう」

黒雪姫 s i d e o u t

奨真 s i d e

俺は楓子とレミと繪と白雪と一緒に帰っていた。

そういえばレミは加速研究会の1人を倒したんだよな。

「レミ。加速研究会の1人を倒したんだよな」

俺はレミの頭を優しく撫でた。

するとレミは顔を赤くして俺から離れていった。

「ど、どうした？」

「い、いえ！その……あ、私の家はこの近くなので！それでは！」

レミはそう言って走って俺たちから離れて帰っていった。
何なんだ？

「レミのやつどうしたんだ？」

「「はあ……」」

「な、何だよ」

「鈍感さんにも困ったわ」

「そうですね」

「はい……」

3人は呆れてるみたいだけどいったい何なんだよ。
気になるのに教えてくれなさそうだしな……。

今度レミに聞いてみるか…。

獎金 side out

第7章 インフイニットバースト

第1話 領土戦

とあるスタジアム……

「はあ……はあ……はあ……」

（落ち着いて……。大丈夫、大丈夫よ）

女子体操選手『月折リサ』は呼吸を整え、自分自身を落ち着かせていた。彼女と同じ体操部のみんなも心配して見ていた。

「リサ……」

リサはもう一度深呼吸をして、目の前をみた。

(みんなが見てくれてる。期待に応えなきゃね！)

リサは走り出して、ロイター板の上で思い切り飛ばうとした。

……が、ロイター板が破損して上手く演技が出来ず、頭から地面に激突しそうになった。

「っ!?!」

「「あっ!?!」」

(このままじゃぶつかる!!)

「アンリミテッドバースト!!」

領土戦『渋谷』……

V S グレート・ウォール

「メイデン。援護お願い！」

「はいなのです！フレイムトールンツ！」

メイデンが放った矢は分散して神社の上に落ちた。

神社から2人のバーストリンカーが出てきた。

そしてその2人の前にレイカーが車椅子に乗って現れた。

「くそっ！」

「兄貴！ここは頼むよ！」

「おうよ！今日こそ俺の拳でKOを取ってやるぜ！レイカー!!」

ボクシング選手のようなバーストリンカー『アイアンパウンド』はレイカーの元に走り、ジャブを繰り返して放っていた。

メイデンの方では……。

「フレイムトールンツ！」

女のバーストリンカーに矢を放つが全て避けられてしまつて距離を詰められていた。

「ひゃあああああ!!!」

「くっ…この!!」

メイデンは逃げ回るように動き回り、相手を翻弄していた。

レイカーはアイアンパウンドの攻撃を車椅子を上手く使い、避けていた。

「ジャブ！ジャブ!!ジャブ!!」

アイアンパウンドは右手を後ろにして思い切り前に出し、拳の部分をロケットのよう

に飛ばした。

ロケットパンチはレイカーに当たったように見えたが……。

「くそ……」

レイカーの車椅子は破壊されたが、レイカーはジャンプして避けていた。

そして着ていた服を脱ぎ、自分自身のデュエルアバターを露わにした。

そのままレイカーはアイアンパウンドの拳の上に着地した。

「その足は反則だぜ……」

「相変わらず攻撃が馬鹿正直すぎるわよ、ケンちゃん♪」

レイカーは軽くジャンプして、アイアンパウンドの頭にかかと落としを決めた。

アイアンパウンドはダウンして、前を見ると、メイデンが逃げてくるのが見えた。

「フリー姉！」

「メイデン！」

レイカーもメイデンに近づき、そして、腰の部分を持って神社の前までぶん投げた。そしてレイカーはメイデンを追いかけたバーストリンカーと戦うことになった。

メイデンは上手く着地して、神社の前で一礼をしてから中に入り、その場をネガ・ネビュラスの領土にした。

レイカーも相手を倒して、メイデンの元に向かった。

「明治神宮確保」

「へっ！こつちも負けてられねえな！」

レインは小型の銃の強化外装を使って相手が召喚していた兵隊を撃ち抜いていた。

「あのクリスマスツリー女が必殺ゲージを溜めて、もう1人が兵隊を召喚してるのか」

「夏にクリスマスツリーはどうかと思う」

「七夕でもなんでもいいよ!!」

「レイン、地面に穴を開ける？」

「10秒くらいありや大丈夫だ。でもなんでだ？」

「後で説明する」

「まあいいや。じゃあ援護頼むぜパド」

「K。シェイプチェンジ」

パドは獣化して兵隊を一人一人確実に倒していた。
そして10秒がたって、レインは地面に銃を放った。

「それで終わりか？」

レインが打った後からひびびが大きくなり、地面に巨大な穴が空いた。

「おわわわわ!!」

「この卑怯者ー!!」

「……………暗いの嫌い……………」

レインも一緒に落ちかけたが、パドが尻尾で掴んだ。

「この下は地下鉄が通っている」

「先に言えつての!!」

「数が多いな」

「その方がやり甲斐があるだろ？」

「ま、そうだな。よし！久しぶりにアレやるか」

「よっしゃー！」

「ジュエルコーティング！」

ルークは盾から宝石をいくつか放ち、その宝石はエイトの武器や手足に付いた。

「気をつけろ！相手は無限の剣製と宝石の番人だ！！全員でかかれ！！」

「俺の武器は宝石で強化されてることを忘れるな！」

エイトは両手にガンブレードを構えて、大軍に突っ込んだ。

ガンブレードを軽々と振り回し、敵バーストリンカーを次々に撃退していった。ルークは攻撃を盾で跳ね返したりしていた。

敵はあっけなくダウンして勝負が始まって約5分で終わった。

「もう終わりか。幹部のやつはいないのかよ」

「俺がいるぜエイト！」

「グラフか」

空から降ってきたのは元ネガ・ネビユラスのエレメンツの1人『グラフアイトエツジ』だった。

「なんでそっちにいるのかは知らねえが、敵なら本気で戦うだけだ！」

「最初からそのつもりだぜ!!」

ルークは観戦して、エイトとグラフは剣を交えて、激しい戦いを繰り広げた。

アツシユはバイクの上に立ち、両手を上に上げてVの形を作つて高速回転した。対してクロウは空中連続攻撃エアリアルコンボで対抗した。

一発一発ぶつかるごとに火花が散つた。

アツシユは一旦離れて回転をやめ、もう一度ロケットを放つた。

不意を突かれたクロウはロケットに当たつてしまった。

空から地面に落ちたクロウの元にロータスが近づいた。

「油断しすぎだぞ?」

「す、すみません」

そんな2人の目の前に緑の王『グリーングランデ』が現れた。

グランデの隣にアツシユがやってきた。

「グランデ。この渋谷は元々ネガ・ネビユラスの領土だ。返してもらおうぞ!」

「過去なんか知らねえってんだ。過去は過去、今は今なんだ。そうだろボス！」

「……………」

「……………」

「そういうことだ!!」

「面白い!なら今日ここで決着をつけようか!!」

「せ、先輩!王同士が戦えばサドンデスになりますって!!」

クロウが必死にロータスを止めていると、グランデが手を前に出し、指をさした。

2人は気になってその方を見ると、見たことない黒雲がクロウたちの方に向かっていった。

違うところにも黒雲は広がって辺りを包み込もうとしていた。

「エイト！グラフ！勝負はまた今度だ！」

「っ!?!なんだあれ？」

「見たことねえな」

「なんだあれ？」

「嫌な予感がする」

「!?」

黒雲が近づくと共に、風が強くなってきた。

アッシュはバイクと一緒に吹っ飛び、グランデは盾で耐え、ロータスは地面に刃を刺して、クロウは手すりに掴まっていた。

けどクロウは耐えられず、そのままアッシュと一緒に吹っ飛んだ。

ロータスとグランデは吹っ飛ばされなかったがそのまま黒雲に飲まれてしまった。

「うわああああ!!!」

「はっ！わ、わわ！」

『来ないで……』

現実世界に帰ってきたハルユキは驚いてそのまま前に転がり落ちた。
同時にエイトたちも目覚めた。

「どういうことだ」

「回線切断か何かか」

「みなさん！アイコンを見て欲しいのです！」

謡の言う通り、ニューロリンカーに表示されているブレインバーストのアイコンを見ると、様子がおかしかった。

「グレーアウトしてる」

「バーストリンク！バーストリンク！くそっ！」

「か、加速できない！」

「あの黒雲に飲まれてから加速できなくなった……つてことか？」

「たぶんそうね」

「詳しく調べておくよ。今日は一旦解散にしよう」

「そうだな。……うん？」

「どうしたの奨真君？」

「右手の関節が……あれ……」

「ちよつと見せて？」

楓子は奨真の手を取り、指などを動かした。

義手については医者にしかわからないが、楓子でも奨真の義手の異変に気付いた。

「義手の調子が変よ？」

「あーメンテナンスするの忘れてたか……」

「右手がダメならバイクは乗れないんじゃないか？ 奨真は今日バイクで来てるけどどうするんだ？」

「バイクなら私の家に停めればいい。だから今日は電車で帰りたまえ」

「なんか悪いな」

「気にするな」

「ハル？ どうかした？」

「美早さん。いえ……大したことじゃないんですが」

「言ってみて？」

「聞こえたんです……『来ないで』って言う声が」

「それも気になるな。とりあえず明日梅郷中で調べてみるよ」

「頼むぜ」

「任せてくれ」

その場で解散して、それぞれの家に帰っていった。

電車内……

「はあ……」

「なんか悪いな楓子」

「ちゃんとメンテナンスしておきなさいって紺野先輩から言われてるでしょ？」

「うっ」

「全く……奨真君はうっかり屋さんなんだから。私がいないとダメね」

「これからは気をつけます…」

「ふふっ。そう落ち込まないの。病院まで付いていつてあげるから。ね？」

「あ、ありがとうな」

「どういたしまして」

電車内でも2人の周りはピンク色のオーラに包まれていた。

第3話 夏祭り

「どう？」

「……………うん。だいぶ動くようになったよ」

俺は右手の義手に違和感を感じてから楓子と一緒に直していた。メンテナンスを忘れてたらこんな面倒なことになるとは……
これからはメンテナンスに気をつけなきゃな。

「あ、サツちゃんからメッセージが来たわ」

「内容は？」

「黒雲の根源となるところの場所がわかったみたいよ。これから鴉さんの家に集まって明日に備えるらしいわ」

「ハルユキ君の家がネガ・ネビユラスの拠点みたいになっちゃったね」

「ははは、確かにな」

「サツちゃんは鴉さんLOVEだからね」

俺たちはそんな感じで笑っていると、またサツチからメッセージが届いた。内容は今日は夏祭りがあるみたいだから浴衣で来て欲しいそうだ。

「俺と楓子の分はあるけど、ジャンヌの分はあるのか？」

「こんなこともあると思って用意しました！」

そう言ってジャンヌは部屋から出て浴衣を持って来た。

楓子も部屋から出て、自分の部屋から浴衣を持って来た。

ここで着替えようと思ったけど、楓子もジャンヌも持って来たし……リビングで着替えるか。

「2人はここで着替えていいぞ。俺はリビングで着替えるから着替え終えたら降りてきてくれ」

「はい」

俺はクローゼットから浴衣を取り出して、リビングに向かった。

特に苦勞せずに着替え終えて2人を待っていると、リビングの扉が開かれて2人がやってきた。

「じゃーん！」

2人は俺の前に立って浴衣を見せてきた。

楓子は空色の浴衣、ジャンヌは白と黄色の浴衣だった。

うん。2人とも似合ってる。

「似合ってるよ」

「ありがとう！」

「奨真君。ちよつと手を貸して？」

「ん？いいけど…」

俺は楓子の言われた通り手を差し出すと、楓子は手を掴み、そのまま自分の胸に当てた。

「っ!? な、なな!？」

「気付いた？浴衣だから下着はつけてないのよ♪」

「んなことわかってるよ！」

俺はすぐに手を離した。

浴衣は下着を着けずに着るから楓子の胸の感触がいつもより柔らかく感じた。

「あらあら。もしかして…」

「さ、さあ早くいこう！みんな待ってることだしな！」

「逃げたね…」

「そうね」

なんか2人は言ってるけど気にしない気にしない。

バイクはサツチの家だし……そもそも3人乗りは無理だから結局は電車だな。

「今日は電車だね」

「車はお母さんが使ってるからね」

無事にハルユキの家に着くとすでにみんな揃っていた。

俺たちが最後か。

「お待たせ！」

「わあ！みんなすごく似合ってるよ！」

俺はリビングの扉のところまで立っていると、白夜がやってきた。

「浴衣姿の女子ってなんか新鮮だな」

「そうだな」

「あ、あの！奨真さん！」

女性陣の中から抜けてきた白雪と繪が俺のところをやつてきた。

ん？よく見るとレミもいるな。白雪の後ろに隠れてて全然気づかなかつた。

「どうした？」

「その……似合ってますか？」

白雪は白の浴衣、繪は水色の浴衣、レミは紺色の浴衣だった。

うん。似合ってる（2回目）

「似合ってるぞ」

「ありがとうございます！」

「あ、ありがとうございます……」

2人は顔を赤くしてから嬉しそうにしてその場から離れていった。
レミはまだ俺の前に立っていた。

「奨真さん……似合ってるって私もですか？」

「そうだけど？」

「うう……あ、あり……とう……ぐ……います……」

「何て？」

「な、何でもないです!!」

レミは俺に怒鳴って顔を赤くしてその場を離れた。
何なんだよいったい。

「はあ……」

「白夜までなんだよ？」

「いや、何も」

「そろそろ夏祭りが始まるので行きましょう！」

ハルユキはそう言つて、俺たちは近くでやっている夏祭りに向かった。夏祭りでは踊り、その後はいろんな屋台を回ることにした。

今は俺と楓子、ういういの3人で回っていた。

他のみんなもいろんなグループで回っていた。

「あ、金魚すくいなのです！」

「やってみるか？」

「はいなのです！」

「おっちゃん！3人分くれ」

「はいよ！君若いねえ。美人な奥さんと可愛い子供を連れてるから親子かな？」

「おじさん、ちよつとだけ惜しいです。私たちは親子ではないけど、彼は未来の旦那さんです！」

楓子は屋台のおっちゃんに説明して腕に抱きついてきた。

「楓子恥ずかしいって」

「お二人さん熱いねえ。ほれ、3人分だ！頑張りな！」

俺は金魚をすくおうとしたが、紙が破れてしまった。

「兄ちゃん残念だな」

「あはは……破れちゃった」

俺は容器を返して左右を見ると、楓子とういはいはすごい数の金魚をすくっていた。よく見ると紙が破れてない……。

「これくらいでいいかな」

「私もなのです。楽しかったのです！」

「お二人さん凄いな！これだけすくったなら景品はこれしかねえな！」

おっちゃんは段ボールの中をあさって、中から大きな袋を取り出した。袋の中には大量のお菓子が入っていた。

「この辺では売ってないお菓子の詰め合わせだ！持ってけ持ってけ！」

「ありがとうございます！」

「また遊びにきてくれよ！」

「また来ます！」

俺は2つのお菓子の詰め合わせを受け取って、みんなのところに戻った。
この後は花火だったかな？
楽しみだ。

第4話 加速できないバーストリンカー

花火を見る場所で待っていると、他のみんなも集まって来た。

「早いな」

「場所取りは大事だろ？」

「ふふつ。君らしいな」

パーン……

パーン……

「へえ〜」

「本物じゃなくてARなんだけどね」

「身も蓋もねえなハカセはよ…」

それにしても今の技術って凄いな……。

この時代に生まれてから改めて思ったよ。

「綺麗ね」

「ああ。でも」

「でも?」

「お前には負けるよ」

「あらあら。奨真君ったら」

「そこもイチャイチャは程々にしろ!! 見てるこっちが恥ずかしいわ!!」

ニコに怒られてしまったか……。

よく見ると何人か顔を赤くしてるな。

「顔を赤くしてるういうい可愛い!」

「んー!んー!」

「楓子ちゃん!? ういちゃんが窒息しそうだよ!」

「むう……」

「アルトリア? どうしたの?」

「美早……。いや、彼女も胸が大きいなと思ってな」

「そうですね。私も羨ましいです」

「白雪は私よりあるからいいじゃないですか…」

あつちではなんかアルトリアが落ち込んでるな……。

ん？あそこにいるのはハルユキとサツチか…。

「綺麗ですね」

「ああ」

「加速世界が大変なことになってるのにこんなことしていいのかって思ってたんですけど……やっぱり来てよかったです。みんな楽しそうですし」

「ふふ……ハルユキ君、君は考えたことがあるか？自分がバーストリンカーでなくなる
「とを」

「はい、でもうまく想像できないです。ただひたすら怖いだけで」

「そうだな。私も怖い」

「ポイントを全損すれば、ブレインバーストの消失とともに、バーストリンカーの時の記憶も失われる。それがあある種の救いにもなると思っっていたんだ」

「東京全土にソーシャルカメラネットワークの異常が及べば、我々は事実上バーストリンカーではなくなってしまう。そうである記憶を持ったまま……な。よもやこんな終わり方があるとは思わなかったよ」

「今日みんなで集まれてよかったよ。まあ、大事な作戦前に少々遊び過ぎてしまったがな。フーコやういういにニコ、それに奨真君たちも、口には出さないが恐れているんだ。わけもわからず爛れてしまうことを」

「……大丈夫ですよ」

「うん？」

「僕たちは加速世界がこのままなくなっていくのを黙って見ているほど潔くないですよ。先輩も言ってたじゃないですか。クレバーの撤退なんか犬に食わせろって。もし、加速ができなくなっても、それでも僕らはバーストリンカーです。先輩と僕を繋ぐものも、みんなと繋ぐものもなくなったりしません。僕は先輩に会うまでずっと孤独でした。現実なんかいらぬ、バーチャルだけあればそれでいいって思っていました。でも「ハルユキ君！」えっ？！」

サツチは大きな声を出して、ハルユキを見て、下の方に指を指していた。俺はゆっくり見ていくと、ハルユキの手はサツチの尻を触っていた。

「わあああああ!!!」

そのままハルユキは後ろに転がって土下座をしていた。俺たちはそれをただ見ているだけだった。

「ちちちちゃうんです!!ちちゃうんです!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!」

「…………ハルユキ君…………その…………は、話が吹っ飛んでしまったわ!!」

「ええ!?な、なんの話でしたっけ!え、ええと…………すみません」

「謝らんでいい!!」

「「「ええ!」」」

いいのかよ…………。

次の日、俺たちはハルユキの家で目覚め、朝食を食べてから作戦に移った。早速ニューロリンカーに直結用ケーブルを付けて、準備を整えた。

「みんないいか。このミッションは一発勝負だ。これを逃せば次はないかもしれない。気合い入れていくぞ！」

「「「おお!!」」」

「叫べっ!!」

「「「アンリミテッドバースト!!」」」

第5話 女神ニユクス

煉獄ステージ……

「前より範囲が広くなってるな」

「よし！早速試すぞ！来い！インビンシブル!!」

叫んだレインの周りに強化外装『インビンシブル』が現れ、レインはそれに乗った。銃口を黒雲に向けてレーザーを放った。

「ビートブラストサチュレーション!!」

少し穴が空いたが、人が通れるほどの穴は空かなかった。

穴も少しずつ消えていったから通るのは難しいな。

「何発も撃てば通れるが、その前に必殺ゲージが無くなっちゃまう」

「俺様のマシーンでも難しいぜ…」

「っ!? 誰だ!!」

ロータスが向いた方向を見ると、ビルの上に緑の王『グリーングランデ』が立っていた。
た。

そして飛び降りて俺たちのところにゆっくりと歩いてきた。

「……………」

「ボス……………」

「あの雲見覚えがある」

「「「しや、喋った!」「」」

いつも無口だからなんか新鮮なような……。
それよりも見覚えがある？

「どういうことだ」

「私も見覚えがあります」

「コスモスもなのか？」

「あれは女神ニユクスのものだ」

「ニユクスだと!？」

「ニユクスか…」

「エイトさん、ニユクスって？」

「お前らは知らなかったな。ニユクスはメタトロンよりも強い力を持っている神獣級工ネミーだ」

「ちよつとお待ちなさい!!わたくしはあんな奴より劣っていませんわ!!」

「メ、メタトロン落ち着いて!!」

クロウの後ろから手のひらサイズのメタトロンが飛び出してきて、俺の目の前で怒鳴ってきた。

「しもべもしもべです!!あなたも何故言い返さないのでですか!!」

「そ、そもそもニユクスのことがわからないし」

「落ち着け」

俺はメタトロンに軽くデコピンをお見舞いした。

「あいた！何するんですか！」

「少し落ち着けてことだ」

「エイト。話を戻してもいいか？」

「あ、ああ。すまんロータス」

話を戻してロータスたちはまた話しだした。

でもおかしいぞ……。

ニユクスは封印されたはずじゃ……。

「封印されたんじゃないのか？」

「また目覚めたんだらう。とにかく、これはもう放って置くわけにはいかない。すぐにニユクススの元に向かうべきだ」

「我々もそうしたいのだが、黒雲を通るには穴を開けなければならない」

「パーセクウォール」

「心意技？」

あれは絶対防壁であるグランデの心意技『パーセクウォール』。

どんなものも寄せ付けない壁を放つようにしたものだ。

そのまま黒雲に突っ込んで、大きな穴を開けた。

あれならいけるかもな。

「つたく。可愛げのねえおっさんだな。なら、チェンジ！ドレッドノート!!」

レインのインビンシブルが変形して車の形になった。
これなら全員乗れるだろう。

「っ!？」

「コスモス？」

「すみません、皆さんは先に行っててください。私も後から追いかけます」

「コスモスさん。それなら私も残ります！」

「アングルさん？」

「何か用事があるんですよね？なら私も行きますよ」

「ありがとうございます！」

「2人とも！後から追いかけて来いよ！」

「はい！」

「勿論です！」

コスモスとアングルを残して全員ドレッドノートに乗り込んだ。

「全員乗ったか？グランデ。黒雲に近づいたらあなたの出番だ！」

「心得た」

「振り落とされるなよ！しっかり捕まってるな！」

ドレッドノートは動きだして激しい揺れが襲った。

あいつ必殺ゲージ貯めるためにわざとオブジェクトを破壊してるな。

「あはは！楽しい！」

「ふゆう……」

「メイデン大丈夫？」

「主よ。ここにいるみんなに安全を」

「今だグランデ！」

「パーセクウォール」

ドレッドノート全体に壁を張って黒雲に突っ込んだ。

「グランデ、どれくらいもつの？」

「あと2分」

「「ええ!?!」」

「そ、そういうのは早めに言ってよねグッさん」

2分かよ!

それまでに着くのか!

ん、ちよつと待て。あれって!?

「レイン!!前見ろ前!!」

「ああ?つてうわあ!?!」

レインは咄嗟にカーブして衝突を避けた。

けど、少しダメージを受けてしまったみたいだ。

「あと10秒」

はあ!?

あと10秒!?

「急いでレイン!!」

「わかってる!!」

「4……………3……………2……………1……………」

ゼロになる前にギリギリで黒雲から抜けることができた。

レインは停止して、俺たちはドレッドノートから降りて、近くにある建物の方に向かった。

「あれって、オリピックスタジアム?」

「偵察に！」

「待てクロウ！迂闊に近づくな！」

「えっ？」

オリンピックスタジアムの上に浮いている要塞から円盤型のエネミーが出てきて、エネミーはロケットのようなものを発射した。

クロウはすぐに引き返してきたが、転んで落ちていた。

ロケットのようなものは地面に突き刺さると、本来の形に変わった。
飛龍型のエネミーだったみたいだ。

「グギャアアア!!!」

「うわああああ!!!」

「ニュクス配下のエネミーなのです！」

「数が多すぎます！皆さん、とりあえず私の後ろに!!」

全員グランデとシルの後ろに回って様子を伺った。
円盤型エネミーは3体、飛龍型エネミーは複数か。

「まずは円盤型エネミーを落とすぞ!!」

「[[[[「おぉー」]]]]」

「ネガ・ネビュラス！出撃!!」

第6話 真打ち登場

大量の飛龍型エネミーが空を飛び回り、俺たちのところに突っ込んだらしてきた。地上に近づいてきた奴から少しずつ相手をしていった。

「はあ!!」

ザンツ！ザシユツ！

俺は地上に近づいてきた奴を2つの剣で確実に倒していった。

「エイト！後ろだ！」

「っ!？」

「おらあ!!」

後ろから襲いかかってきたエネミーをルークが倒してくれた。

「助かったぜ！」

「一匹一匹は弱い！確実に倒すぞ！」

「ああー！」

他のみんなの方を見ると、俺たちと同じように一匹一匹確実に倒していつていた。

「おらおらおら!!」

「ヘイルストームドミネーション!!」

「ファーストブラッド!!」

「フレイトーレンツ!!」

「エクスカリバー!!」

「主よ!みんなを守りたまえ!我が神は^{リユミノジテ・エテルネッル}ここに在りて!!」

フランが補助専用の必殺技を使ってくれたおかげで、俺たちの攻撃力や俊敏力が高まった。

これでさらに戦いやすくなった!

「おお!てりや!!くつ……数が多すぎる!」

「メイルストロム!!」

「みんな怯むな！このまま押していくぞ!!」

だがこのままじゃいつやられるかはわからねえ！

早くあの円盤型エネミーを狩らなきゃ！

「シル！ルーク！手を貸してくれ！」

「はい！」

「おう！何すりゃいい！」

「2人の盾を重ねて踏み台を作ってくれ！」

「了解!!」

ルークとシルは盾を重ねて踏み台を作ってくれて、俺を上には飛ばす準備をしてくれた。

俺は全力疾走して、地面を蹴って、盾を踏み台にして思い切りジャンプした。

「スターバーストストリーム!!」

16連撃の心意技を放ち、円盤型エネミーを落とそうとした。だが、飛龍型エネミーが守るように重なり合って、俺の攻撃を防いだ。

「チツ!どうすれば!」

「くそっ!!離れろ!!」

「レイン、っ!?!」

「このままじゃ無限EKに!?!」

まずいぞ！早く助けに行かなきゃ！
っ!?

ズドンッ!!!

あの紫の雷は……。
まさか……。

「つたくなんなのよこのザマは……。みんなボロボロじゃない」

「パープルゾーン!?!」

「勘違いしないでよロータス！別にあんたを助けにきたわけじゃないからね！グランデに頼まれたから仕方なくきたのよ」

「……………」

「グギヤアア!!」

「きゃああ!!」

「ベル！ロードカルデアス!!」

「頭を下げな！」

「っ!?!」

突然聞こえた声に2人は反応して、頭を下げた。

すると、水色のビームのようなものがエネミーを撃ち落としていった。ビームがきた方を見ると、2人の侍と1人の騎士がいた。

「相変わらず独断戦が好きなようだな、ロータス」

「ブルーナイト!？」

「お前の気持ちも分からなくもないが、ここはひとつ、協力しあってもいいんじゃないか？」

「何っ!? あのなら! こっちは昨日から散々!!」

「ま、まあまあ」

「ナイト、なんでここに來れたんだ？」

「なあに、簡単なことだ。グラウンデが道を作ってくれてたんだ」

「あーあの道か」

それなら通って来れるな。

それにしてもコスモスとアングルは遅いな…。

「ロータス。まずはあの円盤型エネミーを倒していこう」

「そうしたいのだが、飛龍型エネミーが私たちの攻撃を防ぐんだ」

「俺の技も防がれたしな」

「エイトの技もか…。ふむ…。なら全員で一体を攻撃して確実に倒していくんだ。これならどうだ？」

「わかった。それでいこう！ベル！王たちの手当てを頼む！」

「はい！みんな集まってー。あ、もうちよつと寄って寄って。そんな感じそんな感じ」

王たちは中央に集まり、ベルは回復技を発動した。

「シトロン・コール！」

「これが噂に聞く回復アビリティなのね」

「まさか自分が受けることになるとはな」

「リフレッシュリフレッシュ♪」

これで全員準備万端だな。

後は飛龍型エネミーを少しでも減らそう。

「エクスカリバー!!」

「やああ!!」

「っ!?!フラン！後ろです！」

「えっ？」

キングはフランの危険をすぐに伝えたが、もう少し飛龍はフランのすぐ後ろにいた。フランは身構えたが、突然後ろに引つ張られるように飛龍の攻撃を避けて、空を舞った。

その時、俺は見逃さなかった。

フランの体に糸のようなものがくっついていた。

そして、フランの体はある一人のバーストリンカーに抱えられた。

「誰だ！」

「ま、間に合いました！」

「コスモス!? それじゃああいつは…」

「あ、あなたはデスパペット!?」

「あぶねえ戦いしやがって。俺がいなかったらやられてたぞ」

「どうしてここに!?!」

「私が呼んだんですよ」

「コスモスが?」

「パペットなら協力してくれると思ひまして」

「なるほどな…」

「ライトニングジゴスラッシュ!!」

突然後ろから何か大きな音がして、俺はそつちを見ると、飛龍が真つ二つになって倒

れていた。

「真打ちは遅れて登場！なんてね♪」

「アングル!?」

「全く、エイトさんもまだまだですね。私が鍛えてあげましょうか?」

「調子に乗るな」

俺はアングルに軽くデコピンをお見舞いした。

アングルは額を抑えていた。

「痛い…」

「軽くやっただろ?」

「お前たち！こっちに来るんだ！作戦を実行する！！」

「エイトさん、作戦とはいったい？」

「全員であるの円盤型エネミーを一体に集中攻撃をして落とすんだ」

「わかりました！」

「パペットさん、そろそろ降ろしてもらってもいいですか？」

「ん？ああ、すまん」

「みなさん、エクスカリバーで道を作りました！さあ、今のうちに！」

「サンキューキング！」

俺たち6人は走ってみんながいる方向に向かった。

第7話 七王集結

みんながいるところに向かうと、もう全員集合していた。

「白の王!」

「何であんたが!」

「遅れてきたんですよ! もうそろそろもう一人もくると思うんですが…」

「もう一人? コスモス。それって誰だ?」

「エイトさんも他の皆さんも知ってる人ですよ」

「話は後だ！全員持ち場につけ！」

ナイトはみんなに指示を出して、全員が持ち場について構えた。

遠距離技を使える人は円盤型エネミーを、使えない人は使える人たちの援護という形になった。

「放て!!」

「千の武器サウザンドドレインの雨!!」

「ヴォーパルストライク!!」

「スウィープ!!」

「ベネディクト!!」

「メイルストロム!!」

「スワールスウェイ!!」

「フレイルムボルテクス!!」

「エクスカリバー!!」

「フロントアルサンダー!!」

「ライトニングシアンスパイク!!」

「レーザージャベリン!!」

全員で一体の円盤型エネミーに攻撃して撃ち落とす。落ちていったエネミーは立ち上がり、ライムベルに襲いかかった。

「あっ!?!」

「チーちゃん!!」

パイルはベルを庇ってエネミーに食われ、下半身だけ地上に落ちてきた。そして、H
Pがゼロになった。

「タクー!!」

「コスモス！お前の技で生き返らせないか!!」

「出来ないことはないのですが、その間大きな隙が出来ます!!」

「ならまずはいつを！スターバースト……っ!?!」

俺がスターバーストストリームを円盤型エネミー放とうとした時、突然エネミーの周りにメリーゴーランドのようなものが現れた。

この技って……。

「全く見てもらえませんか」

「お前は!？」

「いつまで隠れてたんですか!! イエローレディオ!!」

「隠れてたなんて人聞きの悪い。様子を伺ってただけですよ」

「それって隠れてるのと同じじゃないの？」

アングルがそう言いながら両手に小太刀を持って俺の方にやってきた。

「あんた、アタシたちの後をこっそりつけてきたのね！」

「正確に言えば白の王の後をつけてきたですけどね」

「そんなのどつちでもいいよ!!」

レイオはレインのインビンシブルの上に乗り、コスモスは椅子に座りながら他の王たちのところにいった。

そして今ここに、七王全員が揃った。

「グレイト！七王全員揃いやがったぜ！」

「はい！まさかこんな光景が見られるなんて」

「シルバークロウ「クロウ」」

っ!?!おっとグランデと被ったか。

「お先にどうぞ」

「悪いな。お前は自分の王を連れて、あの中に突っ込め」

「空は私たちが道を作るわ。みんな協力して！」

「『『『おお！』』』」

「どうやらグランデも俺と同じことを考えてたみたいだな。
さて、俺も久しぶりに暴れるか！」

「全員行くぞ！」

「『『『おお！』』』」

「着装！ゲイルスラスター！」

「着装！ジェットレッグ！」

俺はジェットレグ、レイカーはゲイルスラスタを装備して空に向かって飛んだ。
レイカーは途中でメイデンを担いで、空に飛んだ。

「ヴォーパルストライク！」

「フレイムトーレンツ！」

まだまだ行くぜ!!

「おおおお!!!」

「スーパーミナルストローク！」

よし！道は開いた!!

「クロウ！ロータス！今だ突っ込め！」

「はい！うおおお!!」

2人は中に入ったか。あとはここにいるエネミーを全滅させるだけだな。

「2人は中に入った！あとはここにいるエネミーを俺たちで全滅させるぞ!!」

「」「」おお！」「」

さあ！第二ラウンド開始だ!!

第8話 助け合い

あいつらは中に入っていたことだし、こっちはこっちの仕事をするか。

ゲージをみて必殺ゲージがたまっているのを確認して、エネミー集団のど真ん中にいった。

当然のようにエネミーは俺に襲いかかってきた。

「エイト!!」

「アunリliミmiテtedド ブlaレdeイ ワorクksス!!」

俺が技を発動して、辺りの風景が変わった。

初めて見る人は驚いているが、他のみんなはもう見慣れてるせいかな、俺から巻き込まれないように遠くに離れた。

「全員いい判断だ！」

楓子 s i d e

エイトがああ技を使ったってことは、もうエネミーのほとんどが全滅したと同じね。だって、エイトがああ技を使う度に威力も結界の効果も増幅していく。

だから効果時間は長いから結界が消える前に決着が着くわ。
エイトなら大丈夫！

「凄えな」

「あれがエイトさんの力ですよ！凄いでしょ！」

「なんであんたが自慢げなんだよ白の王」

「はっ!? つい…」

「何度見ても恐ろしいわね」

「ソーン、それは皆が思ってるはずさ」

「ナイトもそう思ってるのか？」

「ははっ、俺でも恐ろしいと思うものはあるぜルーク」

まあ確かにあの技は恐ろしいほど強力ね。

だって、エイトから数キ口離れたところに避難しないと巻き込まれてしまうからね。

「固有結界……か」

「キングさん？どうかしましたか？」

「いえ、大丈夫です」

（固有結界なんてものを使えるのはエイトただ一人だけ。どうしてなんでしょうか…）

フランのおかげで攻撃力も防御力も上がったわ。
よし！これなら！

「メールストロム!!」

「スウィープ!!」

「ベネディクト!!」

「フュータルフォーチュンウィール!!」

「パーセクウォール!!」

「フロントアルサンダー!!」

「スワールスウェイ!!」

「ヒートプラストサチュレーション!!」

「フレイムボルテクス!!」

「エクスカリバー!!」

私たちはさつきと同じ作戦でいき、円盤型エネミーを1体倒して、続いて2体目も倒した。

これで飛龍型エネミーはもう出なくなつたわ。

エイトも少しは楽に……っ!?

「エイト!?!」

「レイカー!?!危ないぞ!」

私はルークの声も無視して、エイトのところに向かっていった。

楓子 s i d e o u t

奨真 s i d e

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

くそ……数が多すぎる。

レイカーたちは円盤型エネミーを倒してくれたから、もうこれ以上増えることはないが……。

「はああ!!!」

ならあとは今ここにいるエネミーを倒すだけだ!!
あとは約50匹程度か。

「グギャアアア!!!」

「っ!?!しまっ!?!」

しまった!?!背後をとられた!

俺は目を瞑ったが痛みは感じなかった。

恐る恐る目を開くと、俺に襲いかかってきたエネミーを倒したレイカーがいた。

「レイカー!?なんでここに!?!」

「妻が夫を守るのは当然でしょ!!」

「とにかく助かった!」

「はは……俺は本当にいい妻を持ったぜ!!」

「手を貸すわ」

「サンキュー。あと50匹くらいだ。一気にいくぞ！」

「ええ！」

第9話 ミッション終了

「おおおお!!!」

「はああああ!!!」

固有結界の中で、俺とレイカーはエネミーと戦っていた。
数も残り少なかったおかげで相手にしやすかった。

「トレース・オン
投影開始!」

「っ!?!その剣は?!」

心意技で作り出した剣は青の王『ブルーナイト』が使っている大剣だ。

だからなのかレイカーは驚きを隠せなかった。

ブルーナイトの大剣はこの加速世界の中で一つしかない武器だから、それを作り出したことに驚くのも無理はない。

でも所詮偽物だから本物と同じ力を発揮することはできない。

それがこの心意技の唯一の弱点だ。

そして俺はこの大剣を使ってエネミーを倒していった。

すると突然、空に浮かんでいるスタジアムから、何かが出てきた。

「エイト、あれって…」

「あれが…ニユクス…？」

ニユクスが出てきたと同時に技の効果も切れて、元の風景に戻った。
その時、ナイトが俺たちを呼び戻した。

「ナイト。あれがニユクスなのか」

「そうみたいだな…。今ロータスとクロウが対峙しているみたいだ」

「今はロータスと鴉さんに任せるしかないわね」

俺、ナイト、レイカーの順で言っ、俺たちはただただ見ていることしかできなかつた。

けど、それもほんの少しだけだった。ロータスとクロウはニユクスを倒して、スタジアムが崩壊していつ、元の形に戻った。

その上には白いデュエルアバターが立っていた。

ニユクスを倒したといつても神獣級エネミーが死ぬわけないか……。

すると俺の目の前に紫色の光が飛んでいた。

まるでこっちにこいと言ってるかのようだった。

俺は光についていくと光は止まった。

今度は人の形になって目の前に現れた。

「っ!?!ニユクス?」

「どうも」

「みんなから離れたところに連れてきて何の用だ？」

「あの白いデュエルアバターは私がずっと守っていた。それを伝えたかった」

「エネミーがアバターを守る……か」

「おかしい？」

「いや……こつちにもそういう奴はいるからな」

メタトロンもその中の1人だしな。

「あと、あなたに伝えておかなきゃいけないことがあるの」

「うん？」

「聖杯って知ってる？」

「詳しくは知らないが、とんでもない力を持ったものだってことは教えてもらったな」

「そう、あれはとんでもない力を持っている。あれが目覚めてしまったら、この世界にあ

るエネミーが復活してしまう」

「あるエネミー？」

「英霊級エネミー」

「英霊級……？」

「詳しい力とかもわからない不明のエネミー。ただわかるのは私達の次に強い」

「神獣級エネミーのお前らでもわからないエネミー……か。とりあえずその聖杯について
なんだけど、復活させようとしている奴は大体見当がつく。こっちで任せてくれ」

「わかった。それじゃあね…」

ニユクスは手を振ってその場から離れていった。

俺もみんなのところに戻ると、みんな白いデユエルアバターと話をしていた。

「ほら、エイトも自己紹介！」

俺はレイカーに言われた通り、自己紹介をした。

「ブラウンクリエイト。君は？」

「ナイトライドウニカ。よろしくお願いします」

「彼女は我々ネガ・ネビユラスに入ることになった。レギオンも入っていないらしいからスカウトしたんだ」

「やること早いなロータス」

「これで14人だな。だいぶ増えてきたな。」

「また賑やかになりそうですね」

「ええ」

「その方が楽しいよ」

シル、キング、フランの順に言っていた。まあ確かに賑やかになりそうだな…。

「元会長」

「はい？」

「俺加速研究会抜けるわ。ほんであんたについていくよ」

「期待してますよ♪」

「へいへい」

「さて、帰ろうぜ！」

俺たちは帰還ポータルに向かい、現実世界に帰った。

「あ、あの、いきなり大勢で行って迷惑じゃないですかね？」

「なに：入院生活は暇だ。大勢でいった方がいい。経験者の私が言うんだ」

「何自慢げに言ってるんだよ」

「おい、俺も経験者だ」

「部屋とかわかるのか？」

白夜がサツチに聞くと、サツチは『もちろんだ』と答えた。
多分加速世界で教えて貰ったんだな。

「それじゃあみんな行こうか」

俺たちはサツチについていくことにした。

「あれ？あの人たちって……違う中学だよね……？」

「高校生の人もいるよ？」

「リサの知り合い？」

もうきてくれたんだ！

私は嬉しくなつて車椅子から立ち上がり、窓の外を見た。

みんなが……あそこにいる。

「ま、友達……かな！」

第8章 夏休み

第1話 ショッピング

「奨真君！買い物に行こう！」

「いきなりだな…」

「夏休みなんだし水着も買いたいと思って」

「なら、今から行くか？」

「ええ♪」

「ジャンヌは？」

「ジャンヌはマシユの家に行ったわよ」

「なら2人だけだな」

「そうね！さ、行きましょう！」

「ひ、引っ張るなよ」

俺は楓子に手を引つ張られながら玄関を出て、バイクに乗ってショッピングモールに向かった。

ショッピングモールについてバイクを駐車場に停めて、楓子からヘルメットを貰ってメットインの中にしまつて、中に入った。

「奨真君！私に似合う水着を選んでね！」

「お、俺が選ぶのか？」

「ええ！期待してるわ！」

こんなに期待されちゃあ、最高の水着を選ぶしかないな！
そうと決まれば水着売り場へ直行だ！

白雪姫 side

「綸さん！これはどうですか！」

「えつと……ちよつと派手すぎませんか？」

うーん。これは派手なのかな？

まあ確かに布面積は少し少ない水着ですが……。これを小動物系の可愛い綸さんが着たら男の人たちを悩殺だと思っけど…。

「これを着たら男の人たちを悩殺出来ると思いませんか？」

「そ、それは勘弁してほしいです……。それなら……。奨真さんを…悩殺したいです」

うーん。どれがいいかなあ……。

あ、これなら繪さんも気にいるはずです！

私が繪さんに見せた水着はクロバーの柄が入った緑色のビキニです。

「これならどうぞです！」

「か、可愛いです！これにします！あ、今度は私が白雪さんのを選びますね！」

そうやって繪さんは私の水着を選び始めました。

「これかな………やっぱりこれ？うーん……白雪さん何でも似合うから……迷う………
ここはあえて黒も………やっぱり白？」

凄く悩んでますね……。

ここまで必死に選んでくれるなんて……。

凄く楽しみです！

「白雪さん、凄く悩んだんですが………やっぱり白が一番似合うと思わせて……。」

見せてきたのは、花の模様が入った白いビキニでした。

わあ！凄く可愛いです！

「ありがとうございます！これにしますね！」

「お互いに…プレゼントですね…」

ふふっ、そうですね。あれ？

「？白雪さん？」

「繪さん、あそこなんだか騒がしいですね。行ってみましょう」

「は、はい！」

私たちは水着を持って、騒がしいところに向かった。

そこには奨真さんと楓子さんが買い物をしていた。

『きゃあああ！何あのカップル!!美男美女すぎるわ!!』

『あの女の子胸デカッ!!』

『あのカップルが雑誌に載ったらすぐに買うわ!!』

凄く騒がしいですね……。

まあ確かに楓子さんは美人ですし、奨真さんはかっこいいし……。

それに比べて私は……はあ……。

「うーん。悩むなあ」

「しよ、奨真君。私は奨真君が選んだものならどんなものでもいいのよ？」

「いや、それだと俺の気が治らない。やると決めたら全力で決めないと」

「こ、これはどう？」

「ほとんど紐だろそれ。ダメだダメだ」

「これなら奨真君もメロメロだと思っけど」

「俺は最初からお前にメロメロだし、それに選んでほしいって言ったのは楓子だろ？」

「そ、そうね。じゃあ任せるわね」

「任せとけ！」

奨真さんサラッとあんなこと言っちゃうんですから。

「し、白雪さん……」

「は、はい？」

「あの……なにか見られてる気がするんですが……」

「へっ？」

『あの巨乳の女の子もいいけど、この子たちもレベル高いぞ』

『小動物系で守ってあげたい！』

『まるで雪の女王のように綺麗！』

ど、どうしましょう……。

ここはお会計を済ませてここから離れなきゃ…。

「り、綾さん……お会計を済ませてからここを離れましょう」

「は、はい」

私たちはお会計を済ませて、水着売り場から離れた。

白雪姫 side out

褒真 side

小動物系の女の子と雪の女王のような女の子……？
なんかピンとくるな…。

「褒真君？」

「何でもない。おっ！これいいんじゃないか？」

俺は水色のビキニを持って楓子に合わせてみた。
うん！これだ！

「決めた！これだ！早速買ってくる！」

「えっ!?!しよ、奨真君!?!」

俺はレジに向かって店員さんに水着を渡した。

「か、かつこいい！はっ！いけないいけない…。こちら彼女さんにプレゼントですか？」

「はい！」

「かしこまりました！」

店員さんはプレゼント用の袋の中に品を入れて渡してきた。

俺はニューロリンカーに入ってるお金を店員さんに支払って店を出た。

あれ？楓子いないな…。

しばらくして楓子は店から出てきた。

ん？何か持つてるな。

まあいい。

「ほい」

「プレゼントまで……ありがとう！」

「気にするな」

「そんなに奨真君には……はい！」

「これはっ？」

「奨真君の水着よ！」

「えっ!?! いいのか？」

「いいも何ももう買っちゃったんだから♪」

「ありがとう」

「あとは……」

そうやって楓子は俺に顔を近づけて、キスをしてきた。
軽いキスだからすぐに唇は離れた。

「こんな場所だと恥ずかしいって……」

「いいじゃない! さ、帰ろう！」

楓子は俺の腕に抱きついてきた。

腕には柔らかい感触があるが、もう慣れた。

駐車場に向かってバイクに乗り、俺たちは家に帰った。

第2話 旅行

今日はみんなで海に旅行に行く日だ。

俺は荷物の準備をして、母さんから車を借り、先に車の中で待っていた。すると白夜からメールがきた。

メールの内容は『孤児院の子供たちもどうしても行きたいって聞かないから連れていくことにした。俺の車と奨真の車だけだと全員乗らないから院長さんも車を運転して行くことになった。予約は後から人数追加も出来たよな?』だった。

「まあ出来るよな……」

俺は『予約は後から人数追加できるぞ。みんなにもメールしておく』つとメッセージを送信した。

それと同時に楓子とジャンヌが車に乗ってきた。

「お待たせ！」

「忘れ物はないか？」

「ええ！ちゃんと水着も入っているわ！」

「私も大丈夫よ！」

「じゃあ行くか」

俺はメールアプリのグループにメッセージを送ってから車を出した。

黒雪姫 s i d e

私とハルユキ君、タクム君とチユリ君、ういういと姉さん、綸君とレミ君、アルトリア君の9人は梅郷中の門の前で奨真君たちを待っていた。

急遽人数が増えたとメッセージが来ていたが、何も支障はないな。

子供たちも海に行きたいはずだしな。

しばらく待っていると、奨真君たちがやってきた。

奨真君の車にはもうフーコとジャンヌとリサ君、白夜君の車にはもうあきらとニコ、美早とマシユ君が乗っていた。

「俺のところは後4人乗れる。白夜のところは2人、院長さんのところも3人だ」

奨真君はそう言って、私たちはそれぞれの車に分かれて乗ることにした。

奨真君の車には、奨真君とフーコ、ジャンヌ君とレミ君、ういういとアルトリア君、リサ君と繪君。

白夜君の車には、白夜君とあきら、マシユ君とニコ、美早と私、姉さん。

院長さんの車には、院長さんと孤児院の子供たち3人とハルユキ君、タクム君とチユリ君だ。

そして私達は泊まるホテルに向かうことにした。

黒雪姫 s i d e o u t

獎金 s i d e

車の中では後ろの方でみんな仲良く話していた。

「どんなホテルなんだろう」

「ご飯が美味しいところがいいです！」

「でもこれだけの人数なら凄いお金がかかるんじゃないですか？」

レミ、アルトリア、リサの順番で言つて、リサがお金について聞いてきた。

「まあ結構なお金はあるが、父さんたちが残した遺産がたくさんあるから。どうせ使うならみんなのために使いたいんだ。父さんたちもきつとそう言うはずだしな」

「い、遺産？」

「奨真君、リサたちにもいいの？」

「構わないさ。いつか知ることになるからな」

「わかったわ。リサ、レミ、ういうい、アルトリア、実はね……」

楓子が俺の本当の父さんと母さんが昔事故で亡くなったことを説明した。

説明が終わると、車の中は重い空気が漂っていた。

「ごめんなさい。そんなことがあったのに、気軽に聞いてしまつて」

「全然気にしてないよ。それより、今から旅行に行くんだからさ、今は忘れて目一杯楽しもうぜー！」

リサは暗い顔をしたが、俺は気にしてないと言った。

「……そうですね！今は楽しみましょう！」

アルトリアがそう言って、重い空気は無くなっていった。

途中で信号で止まって、青になるのを待っていると、楓子が俺の左手の上に手を重ねた。

「奨真君、あなたは1人じゃないわ。あなたには私やみんながいる」

「……………ありがとう」

「ラブラブなのです」

「いつものことだよー」

「ジャンヌさん、奨真さんの弱点を教えてくださいませんか？」

「レミ！変なこと聞くな!!」

「俺たちはそんな感じで盛り上がり、目的地に向かった。」

第3話 計画

数時間、車を運転してようやく目的地に到着した。

俺たちはホテルの駐車場に車を停めて、受付に向かった。

「予約した橘です」

「橘さんですね。お待ちしております」

「あの、もう一部屋って今からとれますか？」

「少々お待ちください。……………えっと、702号室が空いておりますが」

「それじゃあ4名でお願いします」

「かしこまりました」

702号室か……………。

俺たち男性組の隣だな。

ちなみに女性組は人数が多いので2つの部屋をとった。

「まずは荷物を置きに行きましょうか。荷物を置いたら一度奨真君の部屋に集合ね」

楓子はみんなに伝えて、自分たちの部屋に向かった。

701号室（男性組）

中は和風だな……。

「それにしても凄え広いな」

「この辺りでは一番高そうなホテルですよ？」

「まあ安くはないな」

白夜とタクムがそんなことを言っていたから、俺は安いホテルではないと言った。
2人は納得していて、ハルユキは外の景色を見ていた。

「凄いですね！海全体が見えますよ！」

俺たちは窓に近づき、外の景色を見た。

「おお！」

「オーシャンビューですね！」

さてと、とりあえず外の景色でも見ながらみんなを待つか。

楓子 s i d e

私たち女性組は途中で各部屋に分かれて部屋で荷物を置いていた。

703号室は私、白雪、サツちゃん、繪、ジャンヌ、レミ、ういうい。
704号室はあきら、美早、ニコ、マシユ、リサ、アルトリア、チーコ。

私たちの部屋では今、レミとういういが窓の外で景色を見ていた。

「わあ！」

「凄いホテルだね」

「奨真君が言うにはこの辺りのホテルでは一番高いらしいわ」

この海はたくさんの人たちが来るから、周りにはたくさんホテルがあるらしい。
私たちが泊まるホテルはその中で一番高いホテルなの。

「さて、そろそろ行くとしようか。奨真君も待つてるだろうしな」

サツちゃんは立ち上がって、私たちも立ち上がり、白雪が部屋の鍵を持って部屋を出た。

隣の部屋のあきらたちの部屋をノックして、行くことを知らせて、院長さんたちの部屋もノックして知らせて、奨真君の部屋に向かった。

「奨真君、来たよー」

『今開ける』

私たちは声をかけると、奨真君はドアを開けてくれて、中に入れてくれた。私たちは床に座って今日は何をするかを話し合った。

「今日は一日中海で遊ぼうか」

「あの、お昼はバーベキューとかはどうですか？」

「夜は花火とかどうでしょう？」

マシユと白雪は今日のことについて提案した。

みんなもそれに賛成した。

「花火は夕方買いに行くとして、バーベキューは海の家でセットを借りて、食材は近くの

スーパーで買う？」

「釣りとかで食材調達もありだな！」

「海を潜って採りにいくのもいいと思う」

ジャンヌ、ニコ、美早はお昼の食材について案を出した。
どれも良さそうな案ね。

「モリと釣竿なら遊び用でいくつか持って来てるぞ」

「なら肉とか野菜は買いに行くとして、魚などは海でとろうか」

「「賛成！」」

白夜君、そんなものまで持つてきていたんだ。
でも、遊び道具がたくさんあるのはいいことね！

「バーベキュー……ジュルリ」

「アルトリアさん、よだれよだれ」

チーコはアルトリアにそう言うと、アルトリアはよだれを拭いた。

「あの……そろそろ……海……行きませんか？」

「そうだな。今日やることは決まったし、着替えてから海に行くか！」

奨真君はそう言って、私たちは水着に着替えるために、部屋を出ようとした。すると寿也君はマシユに抱きついていた。

「マシユお姉ちゃん！僕らの部屋で着替えよう！」

「え、ええ!？」

「だってお姉ちゃんの水着を一番最初に見たいもん！」

「寿也、マシユちゃんを困らせないの」

「後で見せてあげるから……ね？」

「はーい……」

ね。
あきらから聞いたけど、寿也君はマシユのことがすごく好きだってことは本当なの

あ、そうだ！

後で奨真君と2人つきりになった時に水着を見せようかな！

私はそんなことを考えながら部屋を出て、自分たちの部屋に戻っていった。

第4話 海水浴でハプニング

「「海だあ！」」

「海なのです！」

ういういや子供たちは広い海を見て大はしやぎしていた。
まずは荷物を置く場所の確保だな。

「おい、この辺り空いてるぞー」

白夜とタクムは場所を確保して俺たちに知らせてくれた。

そのまま白夜たちの元に向かって、大きめのシートをひいて、その上に各荷物とクーラーボックスを置いて、パラソルをさした。

「それじゃあ昼飯まで自由行動だ」

俺はみんなにそう言うと、全員羽織ってる服を脱いで水着になった。

俺も水着になったが、楓子は上からまだパーカーを羽織っていた。

「脱がないのか？」

「奨真君、こっちききて」

「え、ちよ、おい！」

俺は楓子に手を引かれ、誰もいない更衣室の裏に来た。
こんなところに連れて来て何するつもりだ？

「奨真君。私をじっと見ていて」

「え、わ、わかった」

楓子の言う通り、俺は楓子をじっと見つめると、楓子はゆつくりとパーカーを脱ぎ始めた

その様子は何故かどこか色っぽかった。

……ん？

ファスナーが引っかかってないか？

「ん……んー……しよ、奨真君」

「引っかかったんだな……」

まあ楓子の胸は大きいからファスナーが引っかかるのは何となくわかるけど……。

「ほら、俺がやるよ」

俺はパーカーのファスナーを手に取り、下におろそうとした。

…が、当然楓子の胸を触ることになり、俺の心臓はバクバクしていた。

ファスナーを下におろすと、楓子はパーカーを脱いで、水着が露わになった。

「ふふっ。やっぱり一番最初は奨真君に見て欲しかったから」

「似合ってるよ」

「ありがとう！さ、みんなのところに帰ろう！」

「ああ！」

俺と楓子はみんなのところに走って戻った。

白夜
s i d e

俺とあきら、マシユの3人はみんなから少し離れたところで釣りをしていた。
おつと……きたきた！

「よっ！」

「びゃーくん凄いの！」

「これで3匹目ですね！」

「釣りは得意だからな！」

俺は釣った魚を水入りバケツの中に入れて、針に餌をつけて海の中に入れた。その場に座ろうとすると、マシユに何か起きた。

「マシユお姉ちゃん見つけたー！」

「ひゃん！」

「まーた寿か……。」

「マシユの胸を揉むの本当に好きだよなあ……。」

「と、寿也……そこは……ダメエ……ひゃん！」

「マシユお姉ちゃんのはやっぱり気持ちいいなー！」

「これ以上は放っておけないな。」

俺は立ち上がって寿を引き剥がそうと動いたら、たまたま近くにいたアルトリアが寿をマシユから引き剥がした。

「悲鳴が聞こえたから来てみましたが、寿也でしたか」

「アルトリアさん……た、助かりました……」

「むう……」

ん？なんか唸ってないか？

「マシユの胸は私よりも全然大きい……」

「何故私の知り合いは胸の大きい子ばかりなのですか！」

「へっ!? え、えつと……白夜さん、どうしましょう?」

「俺に振らないでくれ……」

白
夜
s
i
d
e
o
u
t

奨真 side

俺はパラソルのところに楓子のパーカーを置きに行くと、シートの上に院長さんは座っていて、すぐ近くで、白雪とサツチ、チユリの3人に体を砂で埋められたハルユキを見つけた。

その隣では綸とタクムが美奈と香奈の遊び相手をしていた。

「鴉さんが綺麗に埋まってるわね」

「しよ、奨真さん！師匠！助けてください！」

「奨真君、君も参加しないか？楽しいぞ？」

「楓子姉さんもどう？」

「すまん、俺と楓子は少し泳ぎに行こうと思ってな」

「ごめんなさいね。そういえばリサとレミとジャンヌは？」

「飲み物を買に行きましたよ」

白雪はレミたちの居場所を教えてくれた。

「そっか。じゃあ俺たちは泳ぎに行ってくるよ」

「「行つてらっしゃーい！」」

俺と楓子はゆっくりと歩いて、海の方に向かった。
水の中に足を入れると冷たくて気持ちよかった。

「えい！」

「うおっ!?!」

楓子は俺に海水を思い切りかけてきた。
俺も対抗して海水をかけた。

「きやつ！冷た〜い！それそれ〜！」

「負けねえぞ！つと、おわつ!?!」

「きやつ!?!」

俺はバランスを崩してしまつて、楓子を押し倒してしまつた。
……なんだこの柔らかいものは？

「しよ、奨真君……」

俺は楓子のことを見ると、楓子は顔を赤くしていた。

俺の視線は下へと下がっていき、俺の両手は楓子の両胸を揉んでいた。俺はすぐに手を退けて楓子から離れた。

「(バ)ン(バ)ン(バ)ン(バ)ン!!」

「もう………エッチなんだから……」

柔らかかったな……。

バチンツ!!

変なことを考えた俺は自分にマジビンタをした。
それを見た楓子は驚いていた。

「ど、どうしたの？」

「いや、なんでもない…」

楓子は心配して、俺の頬を見ていた。
密着しているせいで、楓子の胸が俺の胸板に押し潰されていた。
すると、突然強い波が来て、俺たちを襲った。

「プハッ！大丈夫……か!？」

「え、ええ。何とか」

俺がした行動は、楓子の両胸を隠すように揉むことだ。

「奨真君!?!ど、どうしたの!?!」

「じつとしていてくれ！お前の水着が波に流されたんだよ！」

楓子は自分の格好を見て、やっと自分の水着が波に流されたことに気がついた。

「ど、どうしよう!」

「とりあえず目を瞑って後ろを向くから、楓子は俺の背中に抱きついて見えないようにするんだ!」

「ええ!」

さてと……、どうしようかな…。

第5話 寂しさ

今、俺の後ろには、水着が流されて胸を露出してしまった楓子がピッタリとくつついてる。

何故なら、俺が楓子の胸を見えないようにこうしろと言ったからだ。

「どうすりゃいいんだ……」

レミside

奨真さんも先生もどこにいったんだろ？

みんなの代わりに探しに来たけど、手掛かりが全然ないなあ。

聞き込みでもしようかな。

「あの、すみません。この辺りに超絶イケメンと超絶美人を見ませんでしたか？ちよつと紺色っぽい黒髪の男の人と茶髪ロングで胸の大きい女の人なんですけど」

「胸の大きい美人……」

「あんたまさかその人に興味があるの!？」

「ち、違えよ！えっと、そんな感じの人は見てねえな」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

聞き込みでもダメかあ……。

いつたどこに言っただろう…。

『あんた絶対あの子が言っただ人に興味あったでしょ!! 私みたいな貧乳はやっぱり嫌なんだ!!』

『ま、まて！落ち着けぎやああ!!』

さつきの人……凄く怒られてるなあ。

……ん？

「これって……水着？」

なんでこんなところに水着が…？

波に流されたのかな？

それに見覚えがあるような……あつ!?

「これ先生の水着だ!？」

もしかしたら近くにいるかも！

私は海の方を探すと、海に入っている奨真さんと先生を見つけた。

「奨真さーん！先生！今そっちに行きますからー！」

「レミ!?!」

私は先生の水着を持って、奨真さんたちのいるところまで泳いでいった。
奨真さんたちのところについて、私は先生に水着をつけてあげた。

「ありがとうレミ」

「助かったぜ」

「砂浜まで流されてましたよ？」

「マジかよ……」

「そろそろお昼なのでみんなもう集まっていますよー」

「わかった。じゃあ戻ろうか」

私たちはみんなのところに戻っていった。

その時、私はあることをすると決めた。

今日、奨真さんに告白することを……。

レミ side out

奨真 side

俺たちはバーベキューセットを用意して、みんなで昼飯を食べていた。

「もらった！」ひよいつ

「なっ!? アルトリア! それ俺が狙ってたやつだ!」

「バーベキューは弱肉強食ですよ!」

「ぐぬぬ…」

「びゃーくん、私の食べる?」

「はははは」

「ういちゃん、頬にタレがついてるよ」拭き拭き

「ジャンヌさん、ありがとうございます！」

みんな楽しそうだな…。

旅行に来て本当によかったよ。

昼飯も食べ終わって、今はみんなシートの上で休憩していた。

「美味しかったね」

「そうだな」

「マシユお姉ちゃん！日焼け止め塗ってあげる！」

「え、じゃあお願いしようかな？」

本当にマシユのことが好きなんだな。

まあイタズラしなけりゃいいが…。

マシユはうつ伏せになり、寿也は日焼け止めを手につけて、マシユの背中を塗っていた。

「気持ちいい♪」

「おりゃー」

むにゅっ

「ひゃん！」

「えい！」ブスッ

「目がああああ!!」

また始まったか…。

しかも、日焼け止めのせいで手がヌルヌルになってるな。

「と、寿也！ダメ！そこは！」

「マシユお姉ちゃんのおっぱい柔らかい♪あ、そうだ！」

寿也はマシユから一旦離れて、楓子のところに来た。

すると、いきなり楓子の胸を揉み始めた。

「きゃっ！」

「凄い！柔らかい！」

そう言って離れて、次はジャンヌの方に行った。
まさか一人一人確認する気じゃないのか！

「楓子お姉ちゃんと同じだ！」

次に向かった先はアルトリアのほうだった。
なんか嫌な予感が……。

「……………」

「何故ノーコメントなんですか!!」

「寿！ストップだ！」

「アルトリアさん落ち着いてください！」

「せ、先輩！手伝ってください！」

「わ、わかった！」

アルトリアはハルユキたちが抑えて、寿也は白夜が抑えたおかげで、このことは収まった。

「楓子、大丈夫か？」

「え、ええ。ビツクリしただけよ」

「そうか」

俺たちはそのままシートの上で休憩することにした。

数時間が経って、夕方の砂浜で俺と楓子は海を眺めていた。

「綺麗ね」

「ああ」

あの海の向こうに、父さんと母さんはいるのかな……。あれからもう5年以上経ったのか。

「奨真君？」

「……なあ楓子」

「何？」

「キスしていいか？」

「いつもは聞かないのに急にどうしたの？」

「えつと……特に理由はないけど……ただ、楓子とキスがしたくて……」

「じゃあ、しよ？」

楓子は目を閉じて、俺からのキスを待つてくれた。

俺も目を閉じて、顔を近づけて、楓子の柔らかい唇に自分の唇を重ねた。

その時、俺は楓子を離したくないと思い、ひたすら唇を重ね続けた。

楓子も嫌がらずに、唇を重ねてくれた。

数秒が経って、俺は楓子と唇を離れた。

「奨真君、どうしたの?」

「えっ?」

「泣いてるよっ..」

「あれ……なんでだ……拭いても止まらない……」

ひたすら涙を拭き続ける俺に、楓子は優しく抱きしめてくれた。

「やつぱりお父さんとお母さんのことを思い出していたのね。辛いのは当たり前よね。泣きたい時はいっぱい泣いて？私の胸でよければ、いくらでも貸すから」

「うう……う……う……」

そっか……俺は怖かったんだ…。

父さんと母さんの時のように楓子を失うんじゃないかってことを…。

いや、それだけじゃない。

みんなを失うことも恐れていたんだ。

暫くして、俺は泣き止み、楓子をじっと見つめた。

「みつともないところを見せてしまったな」

「人間誰でも弱いところはあるわ。だから気にしないで？」

「はは。楓子、もう一回キスがしたい」

「今日は積極的ね」

「ダメか？」

「ダメじゃないわ」

俺は楓子の唇にそつと自分の唇を重ねた。
さつきとは違って、重ねてすぐに離れた。

「楓子、大好きだ」

「私も奨真君が大好き。絶対幸せになろうね」

「ああ」

褒真 s i d e o u t

レミ s i d e

告白しようと思ったけど、あんな場面を見てしまったら、私が入る隙なんてないよ…。
2人は本当に愛し合ってるんだなあ。

「レミさん？」

「どう……したんですか？」

「白雪さん、綸さん。私、奨真さんに告白しようと思ったんですけど、あんな場面を見てしまったら、間に入ることなんて……」

「確かにそうですけど、あとで奨真さん呼んで2人きりの時に告白すればいいじゃないですか」

「うんうん……」

「それにレミさんもでしたか」

「何がですか？」

「レミさんも奨真さんが好きなんですね。なんとなく予想してましたが」

「気づいてたんですか？」

「私たちなら……すぐにわかります」

「とにかく頑張ってください！」

「は、はい！」

よし！頑張ろう！

第6話 レミの想い

夕日を眺めてゆっくりしていると、後ろからレミが話しかけてきた。

「あの、奨真さん！」

「レミ? どうした?」

「奨真さんに大事な話があります。先生、奨真さんを借りてもいいですか?」

「ふふ、いいわよ。じゃあ私は先に戻ってるね」

楓子は立ち上がって、みんなのいるところに戻っていった。
俺も立ち上がって、レミと向かい合った。
何故かレミの顔は赤くなっていて、胸に手を当てていた。

「レミ?」

「ひゃい!」

「大丈夫か?」

「大丈夫です! 落ち着いて……私なら言える」

まるで自分に言い聞かせるように、レミは何かを言っていた。
すると、少しずつ落ち着きを取り戻していき、真剣な目で俺を見つめていた。

「奨真さん。私は、あなたのことが好きです」

「えっ……っ?」

今なんて言っただんだ……?」

俺のことが好き?」

「私は本気ですよ。本気であなたが好きなんです、1人の男性として」

「えつと……いきなりすぎて頭が回らないな…、ちよつと頭の中を整理させてくれ」

今レミは俺に好きだつて言つたんだよな……。

それつて告白……じゃないか？

でもなんでだ、いつもは余計なことを言つてくるくらいなのに…。

「奨真さんは今、なんで自分のことを好きだと思つてるんだと思つてますよね」

「え…」

「確かに私は、いつも奨真さんに迷惑をかけてました。でもそれは、本当はいつまでもあ

あなたに私という存在を見て欲しかったからなんです。まあ私も、それに気づいたのは最近ですけど」

レミは笑ってそう言った。

もしかして今までできてきたのは、全部俺に見て欲しかったからなのか？

そこまで俺のことを思ってくれていたのか……。

なら、ちゃんと返事もしないと失礼だよな。

「レミ、そう思ってくれていたのは本当に嬉しい。俺もレミのことは好きだよ。けど、ごめん。その……」

「……あはは、知ってますよ！ 奨真さんには先生がいるんですから！ でも、こうやって伝えないと、落ち着かなかったんです」

顔を下に向けて、レミは俺に抱きついてきた。もちろん俺は驚いたが、ゆつくりと抱きしめ返した。すると、レミは少しずつ涙を流した。

「レミ？」

「すみません、少しこのままでもいいかせてください」

「……わかった」

俺はレミが落ち着くまで、優しく抱きしめて、頭を撫で続けた。でも、俺のことが好きだったなんて……。今でも信じられないな。

しばらくすると、レミは俺から離れて、涙を拭いて、笑顔を見せてきた。

「ありがとうございます！落ち着きを取り戻しました！」

「そうか」

「ささっ！みなさんが待ってますよ！行きましょう！」

「お、おい！引つ張るなよ！」

そう言うが、俺は嫌そうにはしなかった。元々嫌ではないが、こんなに笑顔のレミは見たら嫌とは思えないからな。

さて、こんな場面を楓子に見られたら何を言われるか……。まっ、楓子ならわかってるくれるだろう。さっきもなんとなくレミの言いたいことをわかった感じだったし。最初は怒られるかと予想していたが、その不安はいつの間にかなくなっていた。他の人には茶化されそうだが……。

第7話 ナンパ

レミに告白されて、俺たちはみんなのところに戻ろうとしたが、面倒な場面を見つけてしまった。

「姉ちゃんちよつとくらいいいじゃねえか」

「嫌！離してください！」

「暴れるな！おい！抑えろ！

楓子がナンパされていた。

まったく……人の彼女をナンパしやがって!!

「レミ！いくぞ！」

「はい！先生を助けましょう！つて奨真さん!？」

なんかレミが驚いていたが、今はそんなことを気にしてる暇はない。

早く楓子を助けなきゃ！頭の中はそのことについてばいで、他のことは考えられなかった。

「おい！その手をすぐに離せ!!」

「あ？この女は俺たちが最初に見つけたんだよ。痛い目にあいたくなくなかったら諦めるんだな」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ！人の彼女に手を出しやがって!!」

男は殴りにきたが、俺は軽く避けて、義手である右腕で腹を殴りつけた。義手だから、すぐには立ってないだろう。その勢いで、俺は楓子を抑えてる男に近づき、手を掴んで逆の方向に捻り、手が離れた隙に、楓子を抱き寄せて、腹を思い切り蹴飛ばした。

「大丈夫か？」

「うん、ありがとう」

「おい」

「ひい！ごめんなさい！！」

男達は猛スピードで俺たちから遠く離れて、それと入れ違いでレミがやってきた。俺のスピードに追いつけなかったみたいだな。

「褒真さん速いです…。先生は大丈夫ですか？」

「褒真君が助けてくれたわ」

「それは良かったです！さ、みんなのところに戻りましょう！」

俺たちは気を取り直して、みんなのところに戻ろうとした。

戻ると、もうみんな集まっていた。どうやら俺たちが最後みたいだった。

「遅かったな、何かあったのか？」

サッチが尋ねてきたから、俺はさっきの出来事をみんなに話した。

「それならさつき私もナンパされましたよ？」

「アルトリアもか？大丈夫なのか？」

「振り返ちにしました」

「アルトリアさんなら普通に出来そうですね……」

「ハルユキ、それはどういう意味ですか？」

まあ確かにアルトリアなら簡単に出来そうだな…。

その時、ジャンヌが話を変えて、記念写真を撮ろうと言ってきた。もちろん全員が賛成して、海を背景にして並んだ。何故かわからないが、俺が真ん中だった。

「それじゃあ撮るよー！」

ジャンヌはボタンを押して、俺の隣に座った。

ボタンを押して3秒後、シャッターが鳴り、写真を撮り終えた。

撮り終えて、ジャンヌはカメラをいじっていた。

「何してるんだ？」

「このカメラで撮った写真をニューロリンカーの写真フォルダに入れてるんです。これをフランスにいる妹に送ろうと思って」

「妹がいたの？」

「うん！私にそっくりなんですよ！」

「へえ、それは見てみたいな」

「今度写真を見せますね！よし、送信つと」

「ん？何か来たわね。……………なにこれ？」

「どうかしましたか？」

「……なんでもないわ」

「ならいいのですが……。ああいったいつ帰ってくるのでしょうか!!」

「知らないわよ。好きにさせてあげればいいじゃない」

「あなたは私から消えないでくださいね！」

「うっとうしいわね！ 離れなさいよ！」

「さてと……とりあえずどういう状況だ？」

俺と楓子はジャンヌと少し話して、その後、みんなのいるところに戻ると、訳の分からない光景が見えた。

「と、寿也！ひゃん！そこはダメエ！」

「いいじゃん！もつと触らせてよ〜」

「うがああああ
!!!!」

「アルトリアさん落ち着いてください！」

「チーちゃんも手伝って！」

「わ、わかった！先輩もいきましよう！」

「ああ！」

「リサさん！ 私たちもいきましょー！」

「そうね！」

「目がああああ!!!」

「びゃーくんが悪いの！」

「また面倒なことが起きたな…」

「NP。楽しそうだから」

「そう言われればそうなのです」

えっと……本当にどうということだ？

俺たちがみんなと離れたのはほんの数分だろ？

なのになんでこんなことに？

「奨真さんたちが戻るほんの数分前、寿也君がいつものようにマシユさんの胸を後ろから揉み出したのです……」

「それで…アルトリアさんは止めたのですが…その時に…ペチャパイと言われて…」

「それでみんなに抑えられてるんだね…」

「はあ……腹減ったなあ……」

それから数十分が経過して、やうと騒ぎが収まった。

その数十分の間、マシユは胸を揉まれすぎて、水着が脱げて、大変なことになり、男性陣は一斉に目潰しを食らうことになってしまった……。

男

第8話 花火

マシユの水着が脱げるといふ事件は無事解決して、みんなで花火をしていた。花火は線香花火、ロケット花火、ネズミ花火などいろんな種類の花火があり、みんないろんなもので遊んでいた。俺と楓子は線香花火で遊んでいた。

「ねえ奨真君」

「んー？」

「野球拳しない？」

「ブフウ！」

突然の爆弾発言に俺は思わず吹き出してしまった。野球拳って負けたら服を一枚ずつ脱いでいくやつだろ。今の俺たちは水着だ。そんなことをすればすぐに決着がつく。その前にそういう問題ではない。

「な、なに言い出すんだ!!」

「だって最近の奨真君、全然私に対してドキドキしてないじゃない。今日も私の水着姿を見ても、全然ドキドキしてなかったし。だからこれならドキドキすると思ったんだけど」

「やりません!!」

「むう…」

隣で楓子は拗ねてしまい、三角座りしていた。そんなにしたかったのか？でもこのままだとなんか楓子が可哀想に見えてくるな。そう思い、俺は楓子の頭を花火を持っていない右手でそつと撫でた。

「えっ?」

「あんな楓子。面には出してないけど、これでもドキドキしてたんだぜ。だから拗ねるなよ。今はこれしかできないけど、家に帰ったらちゃんと相手するからさ」

「ふふ、それじゃあ楽しみにしてるわね」

楓子の機嫌は無事になおって、丁度線香花火の火玉が地面に落ちた。

次は違う花火で遊ぼうと思い、取りに行こうとしたが、突然悲鳴が聞こえた。声のする方を見ると、猛スピードでこっちに走ってくる白夜とハルユキ、タクムがいた。さらにその後ろを見ると大量のネズミ花火とニコが3人を追いかけていた。

「しよ、奨真！助けてくれ！」

「ニコ！ストップストップ！！」

「やめてくださーい！！」

「こ、こっちくるなー！！」

3人は俺の方へ逃げてきたせいで、俺もそれに巻き込まれることになってしまった。俺も一緒に逃げていると、今度はアルトリアが見えてきた。このままだとアルトリアも巻き込まれてしまうと思ひ、逃げろと言おうとしたが、言うのが遅くなり、一緒に逃げることになってしまった。

「今日の私こんなことばかりじゃないですかー!!」

「すまんアルトリア!!」

「それぞれー!あはは、楽しいー!」

周りに助けを求めたいが、絶対に巻き込まれてしまうから求めようにも求められな

かった。そんな時、美早がニコの後ろに回り込み、首を掴んで捕まえた。

「ニコ。そこまで」

「パド！いいところだったのにい…」

「みんな困ってる」

「わかったよ…」

美早のおかげで、俺たち5人は助かった。あとでお礼を言わなきゃ。

俺とアルトリアはそんなに走ってないからバテてないが、3人はバテバテだった。そ

んな3人を放つて、俺は楓子のところに戻りにいった。すると、そこには楓子だけではなく、マシユといういいもいた。

「2人もいたのか」

「奨真君が追いかけてた時に、2人がきたの」

「しよーにも一緒に遊ぶのです」

「折角ですし、4人で勝負しませんか？」

「勝負？」

「はい。線香花火で誰が一番長くもつのか、つという勝負です」

「よし、やるか」

俺たち4人はマシユから線香花火を受け取り、一斉に火をつけて、勝負がスタートした。勝負の間は全員無言で、集中していた。30秒が経過して、俺の花火が消えて、その5秒後にういういの花火が消えた。それから40秒、50秒が経っても、楓子とマシユの花火は消えなかった。1分が経過して、楓子の花火が消え、その直後にマシユの花火も消えた。

「私の勝ちですね」

「負けちゃったわ」

「凄かったです！」

「俺が最下位か」

「マシユお姉ちゃんが優勝したんだね！」

「寿也？見てたんだね」

「うん！勝ったお姉ちゃんになにかご褒美が必要だね！」

「ご褒美か……。なんだろう、嫌な予感しかしないんだが…。

「ご褒美？」

「えーい！」

「ひゃっ!？」

「やっぱりか…。」

俺の予想は見事当たり、寿也がマシユの胸を正面から揉んでいた。これで何回目なんだ？5回くらいしてそうだな。

「と、寿也！これって、私のご褒美じゃなくて……寿也のご褒美じゃない！ひゃん！」

「マシユお姉ちゃんへのご褒美だよー！だって僕に触られてる時、いつも気持ちよさそうじゃん！」

「そ、そんなこと……ないよお……」

「寿也君。マシユが困ってるでしょ？」

「じゃあ楓子さんのを触らせてー!」

「やん!」

今度は楓子の胸を揉み始めたか…。 ったくこのエロガキ…。

「やっぱり楓子さんのおっぱいも柔らかくて気持ちいいな」

「も、もう……口に出さなくていいの」

「しよーにい、フーねえ全然嫌そうには見えないのです」

「母性本能でも出てるんじゃないか？」

「しょーにい？怒ってるのですか？」

「全然怒ってないよ？」

「でも額に怒りマークが出てるのです」

「ちよつと楓子のところに行ってくるよ」

ういういの言う通り、俺はほんの少しだけ怒っていた。もちろん、なにも抵抗しない

楓子に対してだ。とりあえず、寿也を白夜のところ連れて行こう。

「寿也。白夜が呼んでたぞ？」

「わかったー」

「さてと……楓子？」

「は、はい？」

「ちよーつとこつちにきてくれ」

「う、うん」

「2人ともどこに行くんでしょうか？」

「わからないのです」

俺は楓子を連れて、人目のないところへきた。そこで楓子を壁に寄せて、思い切り壁ドンをした。

「しよ、奨真君？」

「楓子、俺は怒ってるんだぞ。寿也に胸を揉まれて嫌そうにできなかったことに」

「もしかして嫉妬してる?」

「ああ、嫉妬してるさ。本当はすぐにも楓子を俺の好きにしたいが、それは家に帰ってからだ。だから今はこれで我慢する」

俺は耳元で囁いて、楓子の唇に自分の唇を重ねた。軽いキスだから、すぐに唇を離れた。

「褒真君をドキドキさせるどころか、私がドキドキしちゃったわ」

「そうか？」

「ええ。ちなみにさつきのことなんだけど、寿也君に触られてる嫌そうにしてなかったのは、母性本能が自然に出てきてしまったの。でも、やっぱり奨真君が一番かな？」

「自分で言い出しておいてあれだが……恥ずかしいな」

「ふふ。さあ、みんなのところに戻りましょう」

「ああ」

俺と楓子はみんなのところに戻り、シートなどを片付けて、ホテルに荷物を置きに行った。

第9話 バイキング

時間は午後8時、俺たちはホテルのバイキングで晩御飯を食べていた。ただ、俺はあ
る人物の食べる量を見て、思わず固まってしまった。その人物はというと……。

「あむ……あむ……美味しいです！」

アルトリアが皿一杯に料理を乗せて、食べていた。あれだと俺たちの食べる量の約4
倍くらいか？あいつの体のどこに入るんだよ……。とりあえず俺も食べるとするか。
俺は最初にステーキに手をつけ、口の中に入れた。中では熱くて、柔らかい肉の感触が
あり、絶品だった。

「これは美味しいな！」

「へえ。ねえ、私にも食べさせて？」

「ああいいよ」

「あーん」

「へえ!?!ここで!?!」

「ダメ?今度奨真君に私の全てを捧げるから」

そ、そんな目で見ないでくれ!あと、なんかとんでもないこと言ったよな!

「わ、わかったから!変なこと言うな!あ、あーん」

「あーん。……………あ、美味しい!」

「だろ。じゃあ今度は楓子の肉じゃがを食べさせてくれ」

「もちろんいいわ。はい、あーん」

「あーん。……………お、美味しい！」

「ふふ、よかった」

俺たちはそんな感じでやり取りしていると、周りに集中的に見られていた。白夜たちにはもちろん見られているが、他の人たちにまで見られていた。

『きゃあああ!!いい!あのカップルいい!』

『本が!本ができる!!』

『彼女さん!もうちよつと!もうちよつと先まで行って!!いつそのことそのまま部屋で
一線超えちゃって!!』

ちよつと待て!!最後の人!!いろんな人がいるところでそんなこと言うなよ!!あと楓

子！顔を赤くするな！！

「い、一線……」

「楓子!？」

「ねえ奨真君。今日どこか空いてる部屋で」

「し・ま・せ・ん!!」

「むう……」

「なんの話ですか？」

俺たちが会話してるところを白雪が興味を持ち聞いてきた。流石に白雪たちにこんなことを教えるわけにはいかないな…。

「いや、なんでもない」

「そうですか？」

「ああ。……………なんか騒がしいな」

元々騒がしかったが、それとは別で騒がしかった。

「そ、そのことなんですけど……」

白雪は騒がしい方を指差して、俺に状況を見せてきた。そこでは、いつもの展開が待ち受けていた。

「と、寿也！ダメ！」

「待て寿也！流石にここではマズい！するなら部屋でやれ！」

「白夜さん!!どういう意味ですか!!」

「え「あきらストップだ！ここで白夜君に目潰しをすれば寿也君を抑える者がいなくなってしまう！」……わかったの」

「まーたマシユの胸を触ろうとしてたのか……。本当に懲りないな……。つていうか……。」

「おい、いつの間に俺の膝の上に来た？」

「今だけど？」

「食べづらいから降りてくれ」

「わかったよ…」

いつの間にかニコが俺の膝の上に座っていた。なんで座ってたのかはわからないが、とりあえず降りてもらい、晩御飯を食べ始めた。寿世のことは白夜やサツチたちに任せ、俺と楓子、ニコと美早、白雪と繪、リサとアルトリア、ういういは晩御飯を食べることにした。もう一度白夜たちの方を院長さんは頭を抱えており、美奈と香奈は寿世のことを気にせず晩御飯を食べていた。

「いいじゃんマシユお姉ちゃん！おっぱい揉ませてよー！あと母乳飲ませてー！」
「絶対嫌!!」

あのエロガキ！あの年であれだともういろいろとやばいだろ！大人になってセクハ

ラで訴えられるんじゃないか!!

「ハルユキ!!俺たちの部屋に対寿也用の縄が俺のカバンに入ってるから取ってきてくれ
!」

「わ、わかりました!」

ハルユキは急いで部屋に向かい、縄を取りにいった。対寿也用ってなんなんだよ
……。数分後、ハルユキは戻ってきて、白夜に渡した。縄を受け取った白夜は慣れた手
つきで寿也を縛った。

「ふう……これで大丈夫だ」

「もう大丈夫なの。ということ、えい!」ブスッ

「目があああ!!!」

「あ、あきらら!？」

「もう寿也は縛ってるから大丈夫だと思つて」

「ま、まあ確かにそうだが……」

サツチ……少しだけ引いてないか？

そんなことがあつて、俺たちは晩御飯を食べ終えて部屋に戻りにいった。ちなみに縛られた寿也は白夜に運ばれて、院長さんたちの部屋に連れていかれた。

第10話 小さいのは罪?

晩飯を食い終わってから、俺たちは一度部屋に戻り、そして風呂に入るために脱衣所へ向かった。もちろんちゃんと男女分かれており、混浴ではなかった。俺は特になんとも思わなかったが、楓子は少し落ち込んでいて、寿也はかなり落ち込んでいた。そんな寿也を白夜は慰めていた。

「そんなに落ち込むなよ……」

「お風呂でもマシユお姉ちゃんのおっぱい触りたいよー!!」

「あのなあ……マシユは優しいから何も言わないけど、普通の人なら嫌ってるぞ?」

「うう……だってマシユお姉ちゃんのこと好きなんだもん……」

「だったらその事をちゃんと伝えないとな」

「そのあとはおっぱいを触らせてもらおう!!」

「はあ……」

白夜も呆れているな……。まったく……。本当に懲りねえな。そんな感じで俺たちは浴場に入り、体を洗って湯船に浸かった。

「気持ちいいですねえ」

「だねー」

「疲れが癒されるぜ……」

「俺はサウナに行つてくるわ」

白夜は寿也とサウナに入り、俺とハルユキ、タクムは湯船に浸かっていた。

「そういえば奨真さんって本当に師匠と仲がいいですね」

「まあ付き合ってるしな」

「どれくらいになるんですか？」

「4年くらいになるな」

俺が楓子と付き合いだしたのは、あの事が解決してからだかな。思い出したらなんか懐かしく思えてきた。

「俺のことはいいとして……ハルユキ、お前はサッチとどうなんだ？」

「へっ!?せ、先輩とですか!?え、ええーつと………いつも通りといつかなんとといつか………」

「ハル、いつもマスターが色々とアピールしてるんだから、たまにはハルからアピールしない？」

「あ、アピールってなんだよ！」

「タクム。お前も人のこと言えないだろ？ チュリとどうなんだ？」

「中々振り向いてもらえませんか……」

「タク……お前も大変だな」

楓子 s i d e

私たちは体を洗って、今は湯船に浸かっていた。はあ……本当なら奨真君と一緒に入りたかったんだけど……。

「楓子姉さん？ どうしたんですか？」

「奨真君と一緒に入りたかったと思ってね……」

「相変わらず愛真さんLoveですね……」

「はあ……また大きくなったような……」

私の隣で、マシユは自分の胸を見て何か言っていた。たぶん寿也君がよくマシユの胸を触るから、大きくなったんじゃないかなあ……。

「マシユさんは寿也君に胸を触られてるから、大きくなるのは当然なのです」

「お、大きくなってもあまり嬉しくないです!」

「ぐぬぬぬ……。。何を贅沢言ってるんですか!世の中大きくなりたくてもなれない人がいるんですよ!」

アルトリアがマシユの胸を羨ましがり、その後ろで綸と白雪がショックを受けていた。

「大きくても不便なことばかり」

「それはない人にはわからないんです！」

「あなたたち2人はまだあるじゃないですか！」

「姉さんはまだある方だぞ!？」

「繪ちゃんもちゃんとあるよ?」

「おーい。黒いの、王様、ここの湯おもしれえこと書いてるぞ?」

「何て書いてあるんだ?」

「なんなんですか……………っ!」

私たちも気になり、ニコが言ってる湯の説明が書かれてる看板を見ると、確かに面白いことが書かれていた。看板には『胸を成長させる湯』と書いてあった。凄く嘘っぽいけど、それを信じる人が4名いた。

「この湯に入れば、私の胸も大きくなるのですね!」

「わ、私も入るとしよう！」

「繪さん！入りましょう！」

「は、はい！白雪さん！」

私たちは黙ってその光景を見ると、サウナから出てきたレミとあきら、リサが湯船に浸かってこっちにやってきた。

「先生。何やってるんですか？」

「この看板に何か書いてあるの」

「『胸を成長させる湯』と書いてるわ」

「効果はないと思いますが、大きくなることを祈ってあげますね」

ジャンヌは手を握って、目を瞑り、祈っていた。

「そういえばこのメンバーの中で一番胸が大きいのって先生ですよ？」

「じゃ、ジャンヌや美早も充分大きいとおもうけど？」

「楓子ちゃんの方が大きいよー」

「楓子が一番」

「さすがお色気担当のフーなの」

「そ、そんなことないわよ！」

「あの、邪魔して申し訳ないのですが、4人がのぼせてるのです」

「「「あつ……」」」

忘れてたわ……。私たちは4人を連れて浴室から出て、脱衣所で着替えて自分たちの部屋に戻ることにした。ちようど奨真君たちとあつて、一緒に部屋に戻って私たちは寝ることにした。

第11話 コンテスト

次の日、俺たちは起きて、朝食を食べに食堂に行き、食べ終わってから部屋に戻り、午前は部屋でゆっくりしてからフロントでチェックアウトして、車に荷物を積んだ。午後は昨日と同じように海に行った。

「夕方には帰るから、それまで遊ぼうか」

「そうね」

「あ、そこの人たち！」

突然声をかけられて、声の方を向くと、ピラ配りをしてる女の人がいた。

「俺たちですか？」

「よかつたらこれに出ない？」

そう言われてピラをもらい、内容を見ると……。

「水着美女コンテスト？」

「あなたのお連れの人たちならトップを狙えるわ！よかったら参加してね！」

女の人はそれだけ言って立ち去り、他の人にも配りにいった。水着美女コンテストか……。確かにここにいる女子メンバーはかなりレベルが高い。もしかしたらあの人が言っただように本当にトップを狙えるかもしれない。俺はそう思い、詳しい内容を見てみると、優勝賞品もあるらしく、その商品は神戸牛と書かれていた。

「神戸牛か」

「折角だし参加してみないか？みんなはどうだ？」

「そうね。なんだか楽しそうだし！」

「サツちゃんが参加するなら私も参加しようかな？」

「白雪さんが……参加するなら……」

「黒雪が出るなら私も出よう！（黒雪は私とスタイルは一緒だ。なら大丈夫だ……いろんな意味で！）」

「私も参加します！」

「私もー」

「なんか面白そうなので私も参加します」

「ちよつと恥ずかしいですが、私も参加します」

「あたしはパース」

「あたしは参加します。美早さんは？」

「MT。私も出る」

「私も出るの」

「私はパスなのです」

「ニコとういうい以外は出るみたいだな」

「おっ？よく見ると6人1組らしい」

「ならちようど6人6人で分けれますね」

「ではグループに分かれるとしようか」

「あ、僕ちようどクジ持ってますから、取ってくるのでそれを使ってください！」

ハルユキは車の方にクジを取りに行き、帰ってきてからグループ分けのクジ引きをした。1組目は楓子、サツチ、マシユ、綸、リサ、チュリ、2組目は白雪、ジャンヌ、アルトリア、レミ、美早、あきら、となった。

「黒雪と同じチームではない!？」

何故かアルトリアはかなり落ち込んでおり、そんなアルトリアを放置して、会場に向かった。

「はい！登録完了です！もうすぐ開始しますので、中でお待ちください！」

登録完了して、アルトリアは戻ってきて、参加する12人は舞台裏に向かった。残った俺たちは見やすい場所の確保に向かった。運が良かったのか、まだ人は少なく、一番前を取ることができた。

「ここからならよく見えるのです！」

「運が良かったですね！」

「さてと、優勝できたらいいな」

「できるだろ。あの12人はかなりレベルが高いぜ」

「ま、そうだな」

「もし優勝できたら、お肉私の孤児院で預かりましょうか？」

「いいんですか？」

「はい！それにみんなで集まれば焼肉パーティーができますし！」

「じゃあその時はお願いします」

「さあ！今年も始まりました！水着美女コンテスト！今年はこのチームが優勝するのか！そしてどんな美女が出てくるのか！」

お、始まったみたいだな。審査員は4人で点数をとっていくみたいだな。

「それでは早速1組目どうぞ！」

1組目は見た感じ、俺たちと同じ高校生のグループだった。観客たちの評価も高いみたいだ。そして気になる得点は34点と高得点だった。そして2組目は26点。3組目は27点。4組目は32点。5組目は23点だった。そして残ったのはあと2組だった。たぶん楓子たちだろう。いまは34点が最高だ。これを超えなければ優勝はできない。頑張れみんな！

「それでは6組目です！どうぞ！」

楓子たちか白雪たち、どっちが先なんだろう。俺は入場口を見てみると長い白髪の女性が出てきた。白雪たちのグループだった。

「「「おおー!!!」」」

観客たちは今までにない歓声をあげた。これは高得点期待できろぞ!

「あつ!美早さんが転んだのです!」

「えっ!?!」

俺は後ろの方を見ると美早が転んで倒れていた。近くにいたジャンヌが駆けつけて、肩を貸していた。

「だ、大丈夫!?!」

「NP。平気」

「何もないとこで転ぶなんて……きつとその胸が原因でしょう! 足元が見えなかったんですね! あははは………はあ………何か虚しく思えてきた。私はそんな経験がないから………」

「あ、アルトリアさん落ち込まないでください! 私も美早さんほどありませんからその気持ち凄くわかりますよ!」

「レミ……」

アルトリアは最初笑っていたが、少しずつテンションが下がり体を縮こませて落ち込んでいた。そんなアルトリアのもとにレミが駆けつけて慰めていた。

「あの子大丈夫かな？」

「何か落ち込んでるけど」

「でもなんか可愛くないか！」

「このグループレベル高いぞ！」

「俺はあの金髪で胸の大きい子が好みだ！」

「私あの落ち込んでる子が好き！」

「転んだ子水着取れろ！」

……………ん？今一人変態発言してなかったか？まあいい。

「あの白髪の子スラッとして綺麗！」

「眼鏡の子も可愛い！」

「落ち込んでる子を慰めてるあの子もいい！」

全員観客たちからかなり高評価なコメントを貰っていた。いつのまにかアルトリアは元気になり、美早に謝っていた。

「美早。笑ってすまかった……」

「気にしてない。だからあなたも気にしなくていい」

そして時間になり、審査員が得点をつけた。その点数は36点だった。見事一位を獲得して、俺たちの優勝は決まったが、まだ勝負は終わっていない。何故ならまだ楓子たちが残っているからだ。

「さあ！最後の1組です！7組目どうぞ！」

「「「おおおー!!!」」」

最初の歓声はさつきと同じだった。6人全員出てきて、アクシデントもなく、舞台の中央にたった。

「みなさん！こういうところではアピールが必要なんですよ！」

「あ……アピール？」

「そー！こんな風に！」

チユリは前に出て、笑顔でポーズを決めていた。それを見た観客たちはさらに歓声をあげた。

「ほらほら！みんなも早く！」

「え、えつと……私ならこうかな？」

「チユリ君、こうか？」

「こうですか？」

リサは体操で身につけた体の柔らかさを活かしてポーズを決め、サツチとマシユは座って、お互い背中を合わせてポーズを決めた。

「え……ええつと……ど、どうすれば……」

「うーん。こうかな？」

繪はオロオロしていて、楓子は胸を寄せて強調していた。その光景にみんな釘付けだった。もちろん俺もだ。

「ポーズだ！ポーズを決めている！」

「最初の子表情がコロコロ変わって可愛い！」

「あの2人は絵になる！」

「凄え体柔らけえ！体操でもやってるのか!？」

「あの子オロオロしてて可愛すぎるわ！もう守ってあげたい！」

「あの子胸でかつ!？」

凄え高評価だな……。6人は時間切れになるまでいろんなポーズを決めていた。時間切れになり、審査員が得点をつけた。なんと得点は39点だった。これで楓子たちのチームが優勝だ。表彰式も行われて、6人はトロフィーを貰っていた。そして賞品の神戸牛も貰っていた。コンテストは終わって、12人は俺たちのところに戻ってきた。

「奨真君！優勝したわ！」

「おめでとう！」

「皆さん凄かったですよ！」

「優勝おめでとうございます！」

「ありがとう！ハルユキ君、タクム君、奨真君」

「コンテスト結構時間かかったんだな。そろそろ帰る時間だ」

「じゃあそろそろ帰るか」

俺たちは車に着替えを取りに行き、更衣室で服に着替えて、また車に戻ってきた。あとはジャンヌと美早、アルトリア待ちで、その間は適当に喋っていた。

「は……恥ずかしかったです……」

「まあまあ綾さん」

「可愛かったわよ！ねえ奨真君！」

「オロオロしてるところ可愛かったぞ」

「はうう……」

「リサさんって本当に体柔らかいですね！」

「ずっと体操し続けたからね！」

「ハルユキ君！その………どうだった？」

「何がですか？」

「うう………な、なんでもない！」

「へっ!？」

「……ハルの馬鹿」

「ハル……」

「皆さんお待ちせしました！」

ジャンヌと美早、アルトリアが戻ってきて、全員来た時の車に乗って帰っていった。この二日間楽しかったなあ。またみんなで旅行とかに行きたいな。

第12話 フランスからの来訪者

「ったく……何で私まで……」

「確かこの辺りのはずですが……あ、ここですね」

謎の2人組が今いる場所は、奨真と楓子、ジャンヌが暮らしてる倉崎家だった。いたいなぜこんなところにいるのだろうか……。そして何の目的で来てるのだろうか？

褒真 s i d e

「はっ!!」

「どうした？」

「なんか嫌な予感が……」

ピンポーン！ピンポンピンポンピンポン
!!!

「うるさいな!! いったい誰なんだよ!」

俺はしつこくベルを鳴らす人を止めるために玄関に向かい、ドアを開けた。そこには首に触手のようなものがついたマントを着た男の人と頭を抱えてる黒い服を着た女の子がいた。

「誰ですか?」

「あなたが橘奨真さんですね! こちらの聖処女ジャンヌがいるはずなんです!」

「せ、聖処女?」

「あー簡単に言うとな、ここに姉さんはいるかどうか聞いてるの」

「ね、姉さん!!」

よく見ると、女の子はものすごくジャンヌに似ていた。ジャンヌが白ならこの子は黒か……。サツチと白雪みたいだな。

「と、とりあえず呼んでくるよ。おい!ジャンヌ!お客さんだ!」

俺が呼ぶと、ジャンヌは頭を抱えて出てきた。この女の子といい、2人とも似てるな……。

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

「あなたを迎えにきたのです！」

「私言いませんでした？日本で暮らすって」

「ほら、姉さんもこう言ってるじゃない」

「なあジャンヌ。この人は？」

「褒真君は知りませんでしたね。こちらはジル・ド・レエ。私と妹の執事みたいなものです」

ジャンヌはそう言って紹介すると、男の人はお辞儀をしてきた。俺も自己紹介をしてお辞儀をした。そのあとに、リビングから楓子の声が聞こえてきて、中に入れるように言われた。早速2人を中に入れてソファに座らせた。お客さんだから、楓子はお茶の入ったグラスを2つ持ってきて、2人に渡した。

「どうぞ。ゆっくりして言ってください」

「これはこれもどうも」

「……………」

「こちら！ちゃんとお礼を言いなさい！」

「わ、わかってるわよ！……その……ありがとう」

「いえいえ」

「それでこの子は？」

「あ、まだ紹介してませんでした！この子は私の双子の妹のオルタです！」

「姉さん、ちゃんとフルネームで教えないと………んん！私はジャンヌ・ダルク・オルタ。ジャンヌだと姉さんと被るし、ダルクでも被るからオルタってみんな呼んでるわ」

「じゃあ私もオルタって呼ぶわね。私は倉崎楓子。楓子って呼んでね」

「俺は橘奨真。好きなように呼んでくれ」

「じゃあ垂らしって呼ぶわね」

「はい？」

「ふふ……冗談よ。奨真って呼ぶわ。乳デカのあなたは楓子って呼ぶわ」

「へっ？あ、うん」

「2人ともごめんね！この子いつもこんな感じだから！」

「だ、大丈夫だ」

まさかジャンヌに妹がいたなんてな。見た目はほぼ同じだが、性格は違うみたいだな。なんていうか……毒舌？まあそんな感じだな。

「そんなことより！聖処女ジャンヌ！フランスへ帰りましょう！」

「話聞いてた!?!私は日本で暮らすって言いましたよね!!」

「もちろん日本は素晴らしいところです！ですがフランスも負けてないでしょう！ご先祖様も暮らしてたフランスですよ！さあ！飛行機が出るまでまだ時間はあります！さあ今のうちに荷物をまとめて！」

「落ち着きなさい！！」ブスツ！

「ああああ!!!」

「あーなんか久しぶりに見たような……」

暴走して話を聞かなくなったジルさんにジャンヌは思い切り目をついていた。その

光景は初めて見るはずなのだが、よくあきらが白夜にしていたからそこまで驚かなかつた。

「あなたは興奮すれば目玉が飛び出すんですから！あと、私はフランスに戻りません！」

「な、なぜ!？」

「私はここで暮らしたいからフランスから来たんです！それ以外に理由はありません！
帰る理由もありません！」

「ううう………わかりました………」

「終わった？じゃあそろそろ」

「ならわたくしもこの国で暮らします！大丈夫です！それなりに荷物はありますから
！」

「はあ!?ちよ、ちよつと待ちなさいよ!!暮らすってどこで!？」

「こんなこともあるかと、マンションを買っておきました！」

「ねえ、それって私も？」

「もちろんでございます！」

「あのーちなみにどのあたりなんですか？」

「あ、この辺りです」

楓子はジルさんが買ったマンシヨンの場所を聞くと、ジルさんはニューロリンカーの地図アプリで場所に印をつけて、俺と楓子のところに送信した。その場所はここから近いマンシヨンだった。

「これならすぐに会えますね。何か困ったことがあればいつでも頼ってくださいね」

「色々とすみませんね。さて、わたくしはそろそろ行きますね」

「先帰つてて。久しぶりに姉さんにあつたから色々聞きたいことがあるし」

「わかりました。それではわたくしはお先に」

ジルさんは荷物を持つて家に帰つていった。残つたオルタはソファに座りながらお茶を飲んでいた。飲み終わつて、グラスを楓子に渡すと、急に真剣な目つきになった。

「単刀直入に聞くわね。あなたたち2人つてバーストリンカー？」

「!?」

バーストリンカーという言葉に、俺と楓子は強く反応した。この言葉を知るのはブレインバーストを知ってる人だけだ。それを知っているとすることは、もしかしたらオルタもバーストリンカーなのかもしれない。俺はその確認をするため、自分がバーストリンカーだということを名乗り、オルタにもバーストリンカーなのかを聞いた。

「ああ、そうだ。君もそうなのか？」

「ええ、レベルは6よ。デュエルアバターはダークアヴェンジャーよ」

「へえ。俺はブラウンクリエイト、レベルは8」

「スカイレイカー、レベルは奨真君と同じ8よ」

「ふーん……ねえ、今からデュエルしない？」

「いいけど、どっちと戦うんだ？」

「私は2人とも気になるけど、奨真が気になるわね」

「わかった。俺が勝負を挑むよ」

「じゃあ私とジャンヌは観戦ね」

「そうですね！あ、奨真君！オルタはレベル6だけど、レベル6の中では最強クラスだと思っよ。下手したら7と同等かも。それくらい強いよ」

「それは楽しみだな」

俺はジャンヌに言われてさらに楽しみになり、早速対戦を挑むことにした。どれほどの実力なのか見せてもらおうか！！

「バーストリンク！！」

第13話　ダークアヴェンジャー

加速して、対戦ステージに来た俺たちは、ステージで突っ立っていた。場所は煉獄ステージで、あたりは赤く染まっていた。俺の目の前にいる黒いアバターは対戦相手であるオルタのようだった。その姿はジャンヌのアバター『アンバーフラッグ』の色を黒にしただけのようなアバターだった。

「アバターも似てるのか。レオニースのコバマガみたいだな」

「コバマガ？ 誰よそれ？ まあとにかく早く勝負しましょう。あ、私のことはダークでいいわ」

「俺のことはエイトでいい。さて、やるか！」

お互い戦闘態勢に入り、準備万端となった。同時に地面を蹴り、距離を縮めにいった。ダークが剣で先に攻撃を仕掛けてきて、俺は両手の剣で防いだ。

「簡単にやらせるかよ！」

「なら、これはどう！」

ダークは剣に力を入れると、剣から炎が出てきた。俺は危険を感じて、軌道をずらして、回避した。

「炎？」

「煉獄ステージだから威力は増すんだけど、避けられちゃ意味ないわね」

「アビリティか？」

「そ。私のアビリティは煉獄。煉獄の炎を付与することができるの」

「面白い！なら今度はこつちから！」

俺は思い切り2つの剣を振りかざした。ダークは剣で防いでさつきと同じように炎を付与してきたが、俺は剣を離して、しゃがみ込み、足を引つ掛けた。

「しまっ!？」

「はあー！」

足を引つ掛けてバランスを崩したダークに大きな隙ができ、勢いに乗り、横腹に回し蹴りを決めた。ダークは受け身に失敗し、そのまま転がっていった。勢いが収まり、ダークは横腹を抑えて立ち上がった。

「イタタ……なかなかやるじゃない」

「レベル8で弱かったら期待外れだろ？」

「それもそうね。じゃあ私も本気でいこうかな」

ダークはどこからかベルのようなものを出し、思い切り鳴らした。何かのバフでもつくのかと思ったが、なんの変化もなかった。自分自身には何もなかったが、急に影が俺たちを覆った。空を見ると、とてつもなくでかい竜が飛んでいた。

「なんだ……あれ……？」

その竜はダークのそばに降りて、彼女を背中に乗せた。

「これが私の必殺技の1つ、竜を呼ぶベル。そしてこの子は邪竜ファヴニールよ」

「どうやって相手すりゃいいんだ……」

「さあ！どう戦う!!」

ファヴニールは前足を俺の方に叩きつけにきた。俺はギリギリで避けたが、さっきいた場所を見ると、大きな穴が空いていた。

「おいおいマジかよ……」

「あははは！さあファヴニール！叩き潰しなさい！」

「クソツ！こうなったら……」

俺はガンブレードを持ち、ファヴニールの足元に行った。足元に辿り着いて、俺は構えた。

「ジ・イクリプス!!」

ファヴニールに斬撃を入れて、HPを減らしにいった。連撃でファヴニールは何度も怯み、攻撃させる隙を与えなかった。やがてファヴニールのHPはゼロになり、戦闘不能のメッセージが出てきた。どうやらファヴニールはダークのエネミーみたいだった。

「ファヴニールは倒したぜ！」

「ファヴニールを倒すなんて……。あの剣ヴァンキッシュ聖と戦った以来ね」

青の王とも戦ったことがあるのか。わざわざフランスからここまでできたのか、それともナイトがフランスまで行っただのか。まあとにかくジャンヌが言った通り、オルタはレベル6の中では最強だな。こんなでかいエネミーを操ることなんてほぼ不可能だ。それだけじゃない。自分のアビリティをうまく活用している。

「あははは！楽しい！実際に楽しいわ！」

ダークは手を振ると、煉獄の炎が俺のところまで飛んできた。付与するだけじゃなく、飛ばすこともできるのか？

「あなたがさつき心意技を見せてきたから、私も少しだけ見せてあげるわ」

ダークは何度も何度も手を振り、俺に煉獄の炎を飛ばしてきた。俺はうまく避け続けるが、炎が止むことはなかった。すると、俺が避けた先に炎の壁が出てきて、俺の周りを炎で覆った。抜け出せるとしたら上しかないな。

「汝の道はすでに途絶えた！」

炎の壁の隙間を除くと、剣を振りかざしたダークがいた。俺は抜け出そうと上を見ると、上には8本の槍があり、俺のところへ降ってきた。俺は投影して、剣を作り、防ごうとしたが、防ぎきれず、ダメージを負ってしまった。

「どう？ 私結構強いでしょ？」

「ああ。充分強いよ……」

「もっと凄いのを見せてあげるわ。けどその前に」

ダークは剣を振りかざすと、さつきと同じ槍が俺の足を貫通させた。そのせいで俺は

動くことができなかつた。

「これは憎悪によつて磨かれた我が魂の咆哮！ラ・グラン・ド・メント・デユ・ヘイン吠え立てよ、我が憤怒!!」

俺の周りを煉獄の炎で覆い、地面から大量の槍が俺を串刺しにしようとしてきた。けど、俺はそんな簡単にやられるわけにはいかないと思ひ、足に刺してる槍を投影で作りに出した剣で斬り、直撃は避けたが、何本かは俺の体にかすつた。

「私の最強の技を避けるなんて……」

「アなら今度俺の最強の技を見せてやる!
ン
リ
ミ
テ
ド
ブ
レ
イ
ド
ワ
ク
ス
!!」

固有結界を作り出し、俺は剣を両手に吸い寄せた。そして強化外装『ブースターレッツグ』ですぐに距離を縮めて、剣を振りかざした。ダークは腰につけてる剣で俺の剣を破壊したが、もう片方の剣で斬撃を入れた。破壊されたほうに剣を吸い寄せて、斬撃を入れた。ダークは防ぐことが出来ず、俺にHPを削られるだけだった。そしてダークのHPを全て削り、俺は勝利した。

「はあ……負けたわ……あなた本当に強いわね……」

「オルタも充分強かったぜ。何度やられると思ったか……」

「観戦してたけど、あれはレベル6とは思えないくらいの方だったわ……」

「惜しかったねオルタ」

「負けたのは悔しいけど、楽しかったわ。また戦いましょう」

そうやって、オルタは俺に手を差し出してきて、俺はその手を取り握手をした。

「いつでも相手になるぜ」

「本当はこの後楓子とも戦いたかったけど、もう疲れたから帰るわ」

「送るよ?」

「姉さん平気よ。私はもう子供じゃないんだから。じゃあね」

「いつでも遊びに来てね！」

オルタはリビングを出て、玄関で靴を履いて帰っていった。俺もさっきの戦いでかなり疲れてソファに寝転がった。すると楓子は俺の隣に座り、俺の頭を膝の上に乗せた。

「疲れたならゆっくり休んで」

「ああ……そう……するよ……」

俺はゆっくりと目を瞑り、意識を手放した。

第9章 加速世界の聖杯

第1話 阻止するために

夏休みも終わり、学生である俺たちは授業が始まった。初日から宿題テストがあつたが、俺と楓子はすんなりと解けた。ジャンヌはかなり苦労していたが、大丈夫なのだろう。そして3人で下校中、俺たちの後ろから白雪が追いかけてきた。

「しよ、奨真さーん！」

「白雪？ そんなに慌ててどうした？」

「その……すごく大事な話があるんです……。楓子さんとジャンヌさんも聞いてください」

「……」

「加速研究会が現在拠点としてる場所がわかりました」

「……」

突然のことに俺たちは固まってしまった。何故なら俺たちが捜し続けてる加速研究会の場所がわかったからだ。

俺はそのことについて詳しく聞きたくて、白雪に他の情報を聞くことにした。

「場所は？」

「場所なんですけど、みんな集まった時に言おうと思います。他のみんなにはもう連絡は取ってますので、明日の土曜日にハルユキさんの家に集合です」

「……わかった。じゃあまた明日な」

「はー！」

白雪はカバンを持ち直し、俺たちとは逆方向に向かった。俺たちも家に帰るために歩き始めた。

加速研究会の居場所がわかっただけでも大きな進展だ。ニユクスも白雪も言っていたが、あいつらが復活させようとしてる聖杯は危険なものだ。なんと少しでも阻止しなければ。

翌日……

俺はバイクで後ろに楓子を乗せて、ハルユキの家に向かった。ジャンヌはマシユたちと一緒に行くと言っていて、俺と楓子が先にハルユキの家に着いた。

ベルを鳴らすと、中からハルユキが出てきて、中に入れてもらった。俺たちが先だと思っていたが、すでに白雪とサツチ、チユリとタクム、アルトリアが来ていた。俺と楓子の次に白夜、マシユ、あきら、ジャンヌの4人が来て、その後ニコ、美早、リサ、レミ、繪、ういいういの6人が来た。全員が揃って、早速本題に入った。

「皆さん、急に集めてすみません。実は加速研究会の現在の拠点を見つけることができました」

「ふむ……姉さん、その場所は？」

「場所はここ、杉並からそう遠くない場所の洞窟の奥よ」

「なら早速乗り込むとしようぜ！」

ニコは拳を合わせて、いつでも戦える準備をしていた。もちろん俺もいつでも戦える。周りを見ると、みんなもそうだった。

「奴らの目的は聖杯の復活だ。私たちが止めるぞ!!」

「「「おお!!」」」

「叫べっ!!」

「「「アンリミテッドバースト!!」」」

加速世界に来た俺たちの前には、以前あった黒雲の事件の時にいた『デスパペット』と『グラフィトエッジ』がいた。

「よう、助っ人に来たぜ！」

「グラフィさん!?!」

「よ、デンデン久しぶり」

「呼び方は変わってないので……」

「白の王、これで全員か？」

「全員ですよ。みなさん、私とパペットについて来てください」

歩き出して、案内を始めたコスモスとパペットについていき、俺たちは加速研究会の元に向かった。途中まで来て、俺は人の気配を逃さなかった。俺だけではなく、パペットも気づいていたみたいで、気配がするほうに、糸を集めて作った槍を投げた。

「流石。パペット君だね……。君ほどの力を持つ者がどうして裏切ったのかな？」

気配がした方を見ると、地面の影から、ブラックバイスが姿を現した。俺たちはすぐに戦闘態勢に入り、捕獲するために動いた。

「全く……話の途中なのに……」

「俺が裏切った理由か？簡単なことだ、お前たちとは合わなかった。ただそれだけだ」

「惜しい人を失ったよ……」

「シルとルークはコスモスを守れ！」

「了解!!」

前に白雪は言っていた。聖杯を復活させるには、その心意の力を持つてる白雪自身が必要だと。ならバイスがここに来た目的は白雪を連れて行くため。なんとしてでも守らなければならない!

「きやああ!!」

「っ!? コスモス!!」

「何っ!? いったいどこから!？」

「さっきまでそこにはいなかったのに!？」

ルークたちのほうを見ると、コスモスは2人から離れていて、なぜか身動きが取れない状態だった。すると、コスモスの背後から姿が現れ、コスモスを拘束してる人物が出てきた。

「グレーマインド!!」

「残念だったな。白の王は貰った。マインドコントロール」

コスモスはマインドコントロールを受けて、眠らされていた。そして、グレーマインドはそこからすぐに立ち去り、それと同時にバイスも影に身を隠して、俺たちの前から

消えた。

「畜生……畜生!!」

俺は地面に拳を叩きつけて、コスモスを守れなかった自分に腹を立たせていた。俺がグレーマインドの存在に気づいて入れば、コスモスは攫われずに済んだというのに……。

「エイト……」

「まだ落ち込むのは早いぜ。なあ、パペット。あんたは加速研究会の居場所を知ってるんだろ? ならすぐにそこへ連れてってくれよ」

グラフはパペットにそう言うのと、パペットはついてこいと言って走り出し、俺たちも走り出した。しばらく走ると、目的地である洞窟の前に着いた。

「行き止まり？」

「どこかに隠し扉でもあると思うわ。みんなで探しましょう」

「ぶっ壊した方が楽です！みんなどいてください！エクスカリバー！！」

「ま、まて!？」

俺たちは何とか回避し、キングは壁に向かって全力のエクスカリバーを放った。壁は粉々になり、先に進めるようになったが、洞窟が崩れないか心配だった。

「き、キングさん!？崩れたらどうするんですか!!」

「大丈夫です！崩れたらまたエクスカリバーを放てばいいだけです！」

「あたしのシトロン・コールもあるしねー」

「チーちゃん……そういう問題じゃないよ……」

「まあとにかく、これで先に進める。急ごう！」

俺たちはさらにその奥へと足を向かわせた。コスモス、絶対助け出してやるからな!!

第2話 復活の災禍の鎧

「よく眠ってるな」

「君の洗脳のせいでしょう？」

「そうだけど、この力は最高だ」

「でも、2人だけで大丈夫かい？」

「平気だ。あいつらは間違いなく追ってくるが、それまでには終わるさ」

「なら早速取り掛かろうか」

コスモスを助けるためにだいぶ奥に進んだが、まだ最深部が見えてこない。早く行かないきゃコスモスが危ないっていうのに！それに洞窟だからエネミーも襲ってくる。

「邪魔するなあああ!!!」

「っ!?!落ち着けエイト!!」

誰かが俺に話しかけてくるが、そんなことは耳には入らなかった。エネミーを倒すことしか頭にない。もつとだ……もつと力を……一撃で倒す力を!!!

「まずいな……。エイトの様子がおかしくなってきた」

「グラフも気づいたか。少しだが、エイトの心が闇に染まっていつてる。まるで……。災禍の鎧みたいに……」

「災禍の鎧!?でも先輩!鎧は確かに消滅したはずじゃ!」

「確かにストレージにはなかった。けど、鎧を壊した時に、その破片が付いていたとしたら」

「破片が自身の一部になる……ということですか……」

楓子 s i d e

「何あれ……………あれがエイトさん？」

「あれはもうエイトさんじゃない……。災禍の鎧だよ……」

「そんな……………エイトさんが……………あんまりなのです……」

「エイト！エイト！！」

「待てレイカー！！死ぬ気か！！」

「離してグラフ！！あのままじゃエイトが！！」

「1人で突っ込むんじゃねえ!!俺も手を貸す!ベル!お前って時間操れるんだよな!お前も残ってくれ!あとはデンデンも頼む!」

エイトが……クロムディザスターになるなんて……。あんまりだわ……。なん
でエイトが……奨真君が……。

「4人では危険だ!私も」

「いいから行け!!」

「っ!?……わかった。パペット!案内を頼む!」

「よし！ついてこい！」

ロータスたちは隙をみて、エイトを抜いて、先に進んだ。私たちがエイトを助けな
きや！

「デンデン！お前は後方から弓で援護を！ベルは回復を頼む！」

「はいなのです！」

「わかりました！」

「なら私とグラフで」

「我が旗よ、我が同胞を守りたまえ！我が神リュミノジテ・エテルネツルここにありて！」

必殺技を発動した声が聞こえて、そつちを見ると、先に進まずに残ってくれたフラン
がいた。フランのおかげでステータスが一時的にだけ上がったわ。

「2人では危険です！私も一緒に！」

「いや、お前はベルの護衛を頼む！」

「ですが！」

「フラン！お願いね！」

「レイカーまで！も、もう知りませんよ！」

ベルの護衛をフランに任せて、私とグラフが突っ込んで、エイトを止めに行った。災
禍の鎧になってもやっぱりエイト自身が強いから、かなり苦戦する。

「はああー！」

私は後ろからスライディングして、足を引つ掛けようとしたけど、軽く避けられて足を掴まれてしまった。私は宙吊りになり、身動きが取れなかった。

「バーチカルスクエア!!」

「フレイムトーレンツ!!」

グラフは正方形の形をした斬撃を飛ばして、メイデンは複数の矢を放った。エイトは怯んで、私の足を離れた。私は尻餅をついて、グラフが私を抱えて一旦離れた。

「大丈夫か！」

「私は大丈夫。それよりも早くエイトを」

「皆さんくるのです！」

「っ!？」

「がああああ!!」

エイトは禍々しい剣で私たちに襲いかかってきた。咄嗟に避けたけど、すぐに私の方に襲いかかってきた。

「ヴォーパルストライク!!」

グラフの攻撃をまともに受けたのに全然ビクともしてなかった。ゲイルスラストーで避けたいけど、こんな狭い空間じゃ使えない。だから私は腕でガードしたけど、衝撃で吹っ飛ばされてしまった。

「きゃあー！」

壁に追い詰められた私は、動こうにも、衝撃が強すぎてまともに動けなかった。エイトはそれを見て剣を振りかざしたが、私には痛みがなかった。恐る恐る目を開けると、ギリギリで剣を止めたエイトがいた。

「レイ……カー……」

「エイト？ エイト!!」

「意識が戻ったのか!？」

「なら私のシトロン・コールで！」

「グ……グルアアアアア!!」

「ベル！下がって！」

エイトはまた剣を振りかざしたが、私はすでにそこから離れていた。その隙に、私は心意技を放った。

「スワールスウェイ!!」

「ヴォーパルストライク!!」

エイトは膝について、チャンスと思い、そのまま心意技を放ち続けた。その時、みんなが進んだ方からバイクの音が聞こえてきて、その方向からミサイルが飛んできた。

「師匠ー!アニキー!」

「アツシュ!?」

「アツシユさん!？」

アツシユがバイクで戻ってきて、エイトに突進した。エイトは突然の衝撃で、後退した。

「どうしてきたの!？」

「師匠! 俺だってアニキが心配なんすよ!! こんな姿になったアニキを放っておくなんて俺にはできねえっす!!」

「アツ……………シユ……………」

「っ!?! アニキ!!」

「ロー……………タスを……………連れ……………て……………こい……………ジャツジメント・プロ断罪の一撃……………で……………俺を……………」

「アツシユ！ダメよ！連れてきちゃダメ!!」

「アニキ……それはできねえつすよ……。それに、そんなのアニキじゃねえ。アニキは……こんなところで諦めちまう男なんすか……」

「アツシユ……」

「もう……自我を……保て……ない……早く」

「アニキのニセモンがああ!!てめえみたいなやつがアニキになるなんてワンハンドレッツドイヤー早えんだよ!!ハウリング・パン・ヘッド!!」

バイクから何発ものミサイルを放ったアツシユはエイトに喝を入れていた。何発も喰らったエイトは足を滑らして倒れた。もう今しかない!アツシユが作ってくれたチャンスが無駄にするわけにはいかない!!

「ベル!!お願い!!」

「シトロン・コール!!」

ベルは必殺技をエイトに放ち、エイトはHPを回復した。けど、私たちの目的はそれじゃない。時間をさらに巻き戻して、エイトがクロムデイズターになる前にすること。私たちの作戦はうまくいって、エイトは元の姿に戻った。

「エイト!!」

「おいおい大丈夫か?」

「アニキ!」

「エイトさん!」

「エイト君!」

私はすぐにエイトに駆け寄り、彼の体を抱えた。でも、どれだけ揺すつても意識は戻らなかった。

「意識が戻る前に、災禍の鎧の破片を探そう」

私たちはエイトの体のどこかにある破片を手当たり次第探した。すると、エイトの背中にキラんと光った何かが見えて、私はそれをエイトから引き剥がすと、それが災禍の鎧の破片だということがわかった。

「貸してくれ」

「ええ」

災禍の鎧の破片をグラフに渡すと、グラフは剣で破片を粉々にした。もうこれでエイトがクロムデザイナーになることはないわ。

「ん……」

「エイト！」

「レイカー？あれ……なんで俺……」

「心配しないでいいわ。もうあなたはクロムデイザスターになったりしないわ」

「アニキ!!大丈夫なんすか!!」

「アツシユ……ごめんみんな……迷惑かけたな」

「迷惑ぐらいかけろよ。その分俺たちがいくらでも面倒見るさ」

「そうよ。夫の面倒を見るのが妻の役目なんだから」

私はエイトを抱き寄せて、ぎゅつと抱きしめた。

「さて、お邪魔虫は退散するでしょうぜ」

「はいなのです！」

「そうですね！」

「俺はいますよ！アニキのそばにいてえっす！」

「はいはい、アツシユさんはこっちー」

「は、離してくれベル！俺様はアニキのそばにいい！」

ベルがアツシユを引つ張つて、フランがバイクを押して、みんな先に進んでいった。私はずっとエイトを抱きしめ続けた。

「レイカー、苦しい」

「嫌、離さない。心配したんだよ」

「ごめん……」

「許さない」

「どうすれば許してくれるんだ」

「もう……私たちの前から……いなくなろうとしないで」

「もしかして……断罪ジャッジメント・ブローの一撃のことか？」

私は頷き、エイト抱きしめる力を強めた。もう離したくないという気持ち私をそうさせた。

「あんなこと……私が許すと思ったの……。……バカ」

「ごめんな」

「もう、そればかり」

「それしか言えないからさ」

「ふふ、もういいわ。けど、今日の夜」

「わかったよ……好きにしてくれ」

「ふふ、じゃあ進もつか。早くコスモスを助けなきや」

「ああ、そうだな！」

私はエイトに肩を貸して、ゆっくりと先に進んだ。エイトを回復させつつ、無理をさせないために。コスモス、少し遅れるけど、絶対に助けるから。

第3話 英霊級エネミー

黒雪姫 side

エイトをレイカーたちに任せて、残った私たちは先へと進んでいた。だいぶ奥へ進んでようやく深く最深部へとたどり着いた。そこには縛られて身動きが取れなくなった姉さんがいた。

「コスモス!!」

「やあ、遅かったね。ここまで来たのは褒めてあげよう。けど、もう手遅れさ」

「どういうことだ!」

「もうすぐで聖杯が復活するということさ」

「あああああああ
!!!!!!」

バイスがそういうと、同時にマインドが姉さんを操り、苦しめはじめた。姉さんは悲鳴をあげて、とても苦しそうだった。その上を見ると、無数の光が集まり、形になっていった。

「完全に復活する前に白の王を助けるぞ！」

「ヴォーパルストライク!!」

「ライトニングシアンスパイク!!」

「レーザーランス!!」

「束なれ糸！ストリングランス!!」

「エクスカリバー!!」

私たちは遠距離技でバイスとマインドに攻撃し、聖杯の復活を止めに行った。だが、バイスが体の一部を盾にして、自分とマインドを守った。

「接近戦なら、ライトニングジゴスラッシュユ！」

「スクラッチ！」

「ふん！」

「えっ？」

バイスはガードしてるのに、2人の攻撃を避けて蹴り飛ばした。その行動に2人も驚いて、避けることも防ぐこともできなかったみたいだ。その間にマインドは姉さんの力を利用して、聖杯を完全に復活させてしまった。

「先輩……あれが……」

「まさか……聖杯？」

「そのまさかさ！もうこの女には用はねえ！」

聖杯を手にとったマインドは姉さんを放り投げた。地面に激突しそうになるが、クロウが飛行アビリティで地面に激突する前に、抱き抱えた。そしてマインドはまた聖杯を空に投げて、今度は呪文のようなものを唱えた。

「——告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ

誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、

我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

呪文を唱え終わると、聖杯からは無数の光を放ち、その光は外へと向かっていった。その中の一つが私たちの前に落ちて、少しずつ人の形になっていった。

「さてと、俺たちは退散しようぜ」

「そうだね、ネガ・ネビユラスの諸君。健闘を祈るよ」

「待て！……くそ！」

「黒の王。まずはこいつだ」

「動かないですね」

「しもべ、下手に動いたら死にますよ。あれは封印されたはずの英霊級エネミーの1人、クラスはバーサーカー『ヘラクレス』です」

英霊級エネミー？そんなものは聞いたことがない。でも、わかるのはメタトロンの言う通り、下手に動いたら確実にやられる。ここは……。

「みんな！撤退だ！今の我々ではこいつには勝てない！」

「ヴアアアアア!!」

ヘラクレスは声を上げて、私たちに襲いかかってきた。でも相手をしたらダメだ。今は逃げることに専念しなければ！

きた道を通って脱出するが、ヘラクレスの足が早すぎる。このままじゃ追いつかれて全滅だ。こうなったら。

「キング！エクスカリバーで洞窟を崩せないか！」

「出来ませんが！崩すならそれなりに時間は必要です！」

「なら、クロウ！キングを抱えて、先に進め！キングは私たちが来るまでに準備をしていてくれ！」

「は、はい！」

姉さんをパイルに任せて、クロウはキングを抱えて、飛行アビリティで先へと進んだ。私たちの視界から見えなくなるくらい遠くへ行つたみたいだ。逃げ切るにはもうキングに託すしかない。

「マスター！どんどん追いつかれてきてます！このままじゃ！」

「みんな頑張るんだ！キングのところまでなんと少しでも走り切るんだ！」

「で、でもやばいですよー！」

「チツ！」

パペットは手につけた強化外装から糸を出し、後ろに糸で壁を作った。だが、ヘラクレスは力で薙ぎ払い、スピードも遅くなることはなかった。やはり、どんなことをしてもあのエネミーには通用しないみたいだ。

「パペット、何をしてもう無駄だ！逃げることだけを考えろ！」

私たちは走り続けると、ようやく力を溜めたキングが見えてきた。これに賭ける！全員がキングを追い抜くと同時に、力を溜めた全力のエクスカリバーが放たれた。

「エクス!!カリバー!!!」

あまりの威力のせいで、洞窟は崩れ始めた。あとはここから脱出するだけだ。走っていると、グラフたちと遭遇して逃げるようにいった。その先ではエイトと、エイトを抱

えたレイカーも見えた。あとはルークたちだけだ。

走り続けて、入り口が見えてきた。洞窟に異変を感じたのか、ルークたちは洞窟の外に出ていた。全員なんとか洞窟を脱出することができたみたいだ。ヘラクレスも当然出てくることはないみたいだ。

「何があった？」

「聖杯が復活したのだ」

「はい、それでエネミーが出現して……」

「っ?!おい、あれはなんだ？」

グラフが空に指を指して、その方を見ると、聖杯から放たれた無数の光がこの加速世界全体に落ちていった。まさか……あんな怪物みたいなやつが次々に出てくるのか

……。その一部が、また私たちの近くに落ちた。そこから赤い服をきた女の子が歩いて出てきた。変なことを言いながら……。

「ナイス！ ナイス！ ナイス！ ナイスバディ！ 余はローマの皇帝だー。見よ！ その者たちよーこのナイスバディな余を！」

「……………あれって？」

「エネミー……………なのかな？」

「ただの女の子にしか見えませんね」

クロウとベル、パイルは順番にそう言った。パイルの言うようにただの女の子にしか見えない。まさかこの子も英霊級エネミーなのか？

「む？ ポカーンとしててどうしたのだ？ 余はローマ皇帝『ネロ・クラウディウス』だぞ？ 嬉しくないのか？」

「いきなりそんなこと言われても頭が追いつかないの」

「で、あんたはエネミーなのか？」

「余を知らないのか!? 余は英靈級エネミー、クラスはセイバー、ローマ皇帝の『ネロ・クラウディウス』なのだぞ！」

「んなこと急に言われても知らねえよ……」

エイトの言う事はもつともだな。あきらがさつき言った通り、頭が追いつかない。とにかくこの子は味方なのか？

「君は我々の敵なのか？ それだけ聞きたいのだ」

「敵？ なぜ余が主らの敵なのだ？」

「何もしないところを見ると、敵ではなさそうよ」

「ローねえ、フーねえの言う通りなのです」

「そうか…。変なことを聞いてすまなかった。とりあえず我々は行くよ」

「離脱ポータルにか？すぐそこにあるからそこから帰ると良いぞ！」

「わざわざすまない。じゃあ我々は失礼するよ」

「礼には及ばぬ！」

私たちは英霊級エネミー『ネロ・クラウディウス』と別れ、現実世界に戻った。帰ったあとは英霊級エネミーについて調べなくてはな……。

第4話 恐怖

「グアアアアアア!!!」

なんだ……頭が……意識が持っていかれそうだ……。

あれは………楓子……?おい……どこ行くんだよ……?待つてくれよ……置いてかないでくれよ!

楓子は俺から少しずつ離れて言っていた。俺はそのあとを追いかけ続けたが、楓子は止まらなかつた。追いかけてる時、また頭が痛くなってきた。この感じは……クロム・デイザスターになつた時みたいだ。

待てよ……待つて言ってるだろ!!!どこ行くんだよ……なんで俺を置いて行くんだよ……。

俺はいつのまにか手で楓子を押しえつけていた。その姿の俺は醜く最悪だった……。

「っ!?……………はあ……………はあ……………はあ……………」

眼が覚めると、俺はいつもいる自分の部屋のベッドの上にいた。さっきのは夢だったのかもしれない。けど、あんな夢を見たせいで、呼吸は荒くなっていた。とりあえず落

ち着くために、息を整えていた。

「とりあえず水を飲もう」

俺はベッドから降りて、部屋を出て水を飲むために台所に向かった。リビングに入ると、ソファに座った楓子がいた。楓子はリビングのドアが開いたときに俺に気づいて、こつちにやってきた。

「おはよう奨真君。よく眠れた？」

「……………ああ」

「奨真君？」

台所に向かつて水を一杯飲むと、俺は楓子から逃げるようにリビングから出て行った。楓子はそんな俺を心配して追いかけてきた。

「大丈夫？顔色悪いよ？」

「少し……1人にしてくれ……」

俺は心配してくれた楓子を放つて、階段を登り、部屋の中に閉じこもった。楓子に会うのがこんなに怖く感じるなんて……。俺は、いつのまにか楓子に会うことに恐怖を感じていた。俺から離れてしまうかもしれない。嫌われるかもしれない。そんなネガティブな思いが、俺を少しずつ変えていった。

楓子
s i d e

奨真君………。なんだか様子がおかしかった。まるで、私から逃げてるみたいに。でもなんでそんなことをしてるのかがなんとなくわかっていた。きつと……クロムデイザスターになってしまったから、また他の人を傷つけてしまうかもしれない。そういう思いが出てきて、奨真君は誰ともいたくないのかもしれない。

「ねえ楓子ちゃん、奨真君の様子がおかしかったよ?」

「きつと、昨日のことのせいね」

「ちよつと見てきますね!」

「待つてジャンヌ!今は………そつとしておきましょう」

「でも!」

「その方が奨真君のためよ。今いつでも、彼を無意識に傷つけてしまうかもしれない。」

お昼になつたらまた様子を見にいくわ」

「わかりました……」

ジャンヌを説得して、とりあえず朝は様子を見ることにした。朝は過ぎて、お昼になつても奨真君は降りてこなかった。流石に放っておけなくなつて、私は奨真君の部屋に向かった。ドアを優しくノックして奨真君に声をかけた。

「奨真君、入るよ」

ドアを開けて中に入ると、ベッドの上で体を縮こませた奨真君がいた。目元をよく見ると赤くなつていた。たぶん泣いてたのね……。私はゆっくりと奨真君に近づくと、奨真君は少しづつ離れていった。

「奨真君。ご飯くらい食べなきゃ体に悪いよ。奨真君の好きなものでもなんでも作つてあげるわ」

「放っておいてくれ……」

「そんな状態の奨真君を放っておけないわ。部屋から出たくないならおにぎりとか作ってあげるわ」

「頼むからもう放っておいてくれ!!」

奨真君は大きな声で私に怒鳴ってきた。昨日のことまで酷い状態になるなんて……。でも、こんな状態の奨真君を尚更放っておけない。私はまた声をかけようとしたが、奨真君は大きな声で話し続けた。

「怖いんだよ！もうクロムディザスターにならないとしても、誰かを傷つけてしまってもいけない！レギオンのみんなを、白雪や綸を……誰よりも大事な楓子を傷つけたくないんだよ!!」

「奨真君、私の話を聞いて」

「だから！もう放つておいてくれ!!」

パチンツ！

私は見ていられなくなり、奨真君の眼を覚ますために頬を思い切り引つ叩いた。突然のことで奨真君も驚いていた。

「いいから話を聞きなさい!!奨真君は昨日あんなことが……クロムデザイナーになってしまったから、またあんなことが起きるかもしれない。そう思ってるのね」

私が奨真君に聞くと、彼は小さく頷いた。

「確かに怖くなるのはわかるわ。けど、こんな状態になった奨真君を放っておくなんて私は出来ないわ!それにね、グラフも言ってたじゃない。迷惑ぐらいかけろってその時は私たちが面倒を見るって。あと、奨真君が思ってるより、私たちは弱くないよ。だから、何も怖がらなくていいの」

私は言いたいことを言って、奨真君を優しく抱きしめた。子供をあやすように頭を撫でて、奨真君の乱れた気持ちを落ち着かせた。やがて、奨真君は落ち着いて、顔を上げた。

「ごめん……………色々ありがとうございます」

「何かあったらいつでも私を頼って？私の胸ならいつでも貸すわ」

「わかった……………。早速だけど、おにぎりを作ってくれないか？少しだけ腹減って…」

「はいはい♪塩でもいい？」

「なんでもいいよ」

「わかったわ」

私は台所に向かって、炊飯器からご飯を取り出して、3つほどおにぎりを作った。私

はおにぎりを両手で持って、奨真君の部屋に入った。

おにぎりを渡すと、奨真君はばくばくとがつついていた。数分で食べ終えて、私は奨真君の隣に座って、デザートが欲しいか聞いた。

「奨真君、デザート欲しい？」

「そう……だな……」

奨真君は何故か顔を赤らめて欲しいと言った。私は何が欲しいか聞いた。

「何が欲しい？あ、もしかして私？」

冗談半分でそう言うと、奨真君は私に抱きついてベッドに押し倒してきた。突然のことで、私は頭が追いつかなかった。

「えっと……奨真君？」

「楓子だって言ったら……どうする？」

「へっ？」

私は思わず間拔けな声を出してしまった。奨真君は私の顔をジッと見つめていた。

「楓子に励まされてから、君が欲しいという感情が収まらない。だから……その……」

「……いいよ。いつもは私からだけど、今日は奨真君の好きにして？」

私は奨真君を抱きしめて、唇を重ねた。その後、私は奨真君の好きなようにされた。でも、1日で奨真君を元どおりにさせてよかったわ。

第5話 女子会

聖杯と英霊級エネミーが加速世界に現れて3日が経った。現れてから奨真たちはまだ一度も加速世界にダイブしてなかった。そして今日は聖杯と英霊級エネミーを復活させてしまったのは自分のせいだと思いついて、白雪を励ますためにチユリの家に女性陣が集まることになっていた。

楓子 s i d e

「さあさあ、みんな集まったことだし、そろそろ始めましょう！『女の子だらけのお泊まり会』〜！」

「え、えつと……これはいつたい？」

「姉さんは最近元気がないからな。少しでも元気になって貰いたくてみんなで企画したんだ」

「それにこういうことはまだ一回もやってなかったからね」

この企画は確かにみんなで作ったけど、本当はそれを言い出したのは繪なのよね。繪は白雪の親友だから、落ち込んでるところを見たくなかったのよね。でも、その気持ちがあるからお泊まり会とかを考えることができたんだけどね。

「白雪さん……元氣……出してください……」

「繪さん……」

「白雪さんは……何も…悪くない……です…。悪いのは…加速研究会……のせい…です。だから…落ち込まないで……ください…」

「そうよ。それにね、英霊級エネミーも危険だけど、悪いエネミーばかりじゃなかったのよ。本当に危険なのは聖杯ね。あれだけをなんとかすればいいわ」

「楓子さん…」

「もー！今日はそんな話はナシナシ！せっかくのお泊まり会なんだからお題か何か出そうよー！」

「そうね。せっかくのお泊まり会なんだから、暗い話はナシにして楽しまなきゃね。でもお題ね。何かいいお題があればいいけど……」

「あの一、ここは定番の恋バナとかどうですか？」

「レミさんいいですねそれ！」

恋バナかく。早速定番のお題ね。私が話すとしたら奨真君とのイチヤイチャやラブラブなことしかないけど……。他はどんなことを言うのかな？

「そういうえばみんなって好きな人とかいるの？」

「私はもちろん奨真君♪」

「私はびゃーくんなの」

「アタシは今はいないかな。リサさんは？」

「私もまだ……」

「あたしもいねえな」

「私は好きな人はいませんが、料理を作ってくれる人が好きです」

私、あきら、チーコ、リサ、ニコ、アルトリアの順番で言った。サツちゃんはきつと鴉さんね。レミ、綸、白雪は奨真君かな？

「私は……その………」

「黒雪先輩はハルですよね」

「なっ!?何故それを!？」

「あれでバレないと思ったサツちゃんが不思議なのです」

「サツちゃんつたら可愛いんだから」

「う、うるさい！」

「ミヤアは誰なの？」

「NO。私はいない」

「私もいませんね」

「私は……お恥ずかしいのですが、白夜さんです」

美早、ジャンヌ、マシユの順番で言つて、マシユの好きな人を聞いて私たちは驚いた。白夜君のことが好きだったんだ。孤児院も一緒だし、ずっと一緒に暮らしてたから惹かれていったのかもしれないわね。私と奨真君みたいに。

まだ言つてないのは、ういうい、綸、白雪、レミの4人ね。ういういは誰なんだろう？もしかしてういういもないとか？

「私はしよーにいなのです」

「ういちゃんも!?!」

「あ、3人は知ってるのです。3人とも奨真さんなのです」

「「え……ええーつと……」」

3人ともういういの言葉で完全に黙ってしまったわね……。レミは口笛を吹いて、白雪は顔を両手で隠して、綸に関しては顔を真っ赤にして目を回していた。

3人の反応はなんだか面白いわね。レミは告白してたのをコツソリ見たけど、綸と白雪はしないのかな。

「わ、私たちのことより、先生！先生と奨真さんは普段どんなことをしてるのですか？」

レミは突然私に話を振ってきて、一瞬だけ反応に困ってしまった。うーん、そうねえ。普段何してるかよね……。

「私は朝は寝坊助の奨真君を起ここしにいつて、その後朝ごはんを食べて学校に行つて、

授業受けて、お昼ご飯一緒に食べて、その後にキスして、放課後も一緒に帰って、家でまたキスして、奨真君に膝枕してあげて、ある時は部屋で一緒に」

「すすす、ストップストップ!! 楓子姉さんそれ以上はダメな気がします!!」

私はチーコに口を塞がれて、話すのをストップされてしまった。ここからが一番のお楽しみなのに…。

でも、私ばかり言うのは不公平よね。まずはサツちゃんに聞こうかな。私はサツちゃんの後ろに回って抱きついて、サツちゃんと鴉さんのことについて聞くことにした。

「サツちゃんは鴉さんとうなの? 私ばっかり喋るのは不公平だから2人のことも聞きたいわ」

「(、)こらフーコ!」

「サツチとハルくんのこと聞きたいの」

「わ、私は別に何も無い！第一付き合っていない！」

「でも、本当は付き合いたいはず」

「そうだ！本当は付き合いたい……って何言ってるんだ私は!？」

「黒雪ちゃんの可愛いところが見れましたね」

ジャンヌがそう言うと、サツちゃんは白雪と同じように顔を両手で隠して地面をゴロゴロと転がっていた。やっぱり姉妹はどこか似てるわね。

「恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい！」

「次は私なの。私はフーみたいなおことはまだしてないけど、キスならしたの。たまに孤児院行って、びゃーくんと一緒に子供達と遊んだり、マシユと一緒に院長さんのお手伝いしてるの」

「院長さんはいつも助かってるって言ってました」

「私もフーには負けなくらいイチャイチャしてるの。けど、唯一負けてるものがあるの」

「あの……それって……」

繪が聞いてみると、あきは手を自分の胸に当てて、そこからは動かなかった。他のみんなは気づいたみたいだけど、私はわからなかった。

「えっと……何なの？」

「胸なの」

あきらがそう言うと、みんな自分も勝てないと言うようにうんうんと頷いて、私の胸をジツと見つめていた。

「ちよ、ちよつと待つて！ジャンヌと美早も大きいじゃない！」

「楓子ちゃんには負けますよー」

「YES、ジャンヌの言う通り」

「じゃ、じゃあマシユは！最近大きくなつたつて！」

「全然負けてますよ。つてサラツと恥ずかしいこと言わないでください！」

「綸さん、私たちはいつまでも同士ですよ！」

「は、はい！」

「ムムム……」

「楓子姉さんはスタイルいいですからね〜」

「さすが先生です！」

「あはは……」

「フーねえの胸のせいでいつも苦しいのです……」

綸と白雪は同士とか言つて、アルトリアとサツちゃんはなぜか唸つていて、チーコとレミは尊敬の眼差しみたいな目で見ていて、リサは話についていけなくなって笑つていた。ういうい、なんだかごめんね。でもういうい可愛いから……。

「じゃあちよつと触らせてもらおうか！」

ニコが後ろに回り込んで私の胸を鷲掴みしてきた。

「きやあつ!？」

「あ、私もー」

「それじゃあ先生！失礼します！」

その後はチーコとレミも混ざって、相手をするのが辛かった。終わった後はみんな疲れて寝ることになった。

第6話 構ってほしい皇帝様

聖杯が復活してから、いたるところに英霊級エネミーが現れるようになった。普通のエネミーと違うといえば、エネミーの方から襲いにきたりはしないことだ。ただ、こっちから仕掛ければ攻撃をしてくるが。まあこれはどのエネミーも変わらないな。

だが、英霊級エネミーの力はまだまだ謎だらけだ。そんなエネミーでもわかってることとは、セイバー、バーサーカーというクラスがあること。けど、この2つだけじゃない気がする。

「ま、直接この目で確かめればいいか」

俺は塔から飛び降りて、ジェットレグでうまく着地した。辺りを歩いていくと、待ち伏せしてたかのようにこの前のエネミーが出てきた。

「また会ったなー！」

「お前はこの前の……」

「ほれほれ、言ってみるがよい！」

「確かネロだったか？」

「大正解なのだ〜！覚えてくれて余は嬉しいぞ！」

「つていきなり抱きつくな！」

「エイト……？」

っ!?!この声は……

俺はブリキ人形のように首を回して後ろを見ると、黒いオーラを放ったレイカーがいた。アバターで表情はわからないが、ニツコリと笑ってるのだろう。その笑顔がものす

「く怖い……。」

「何してるのかな？」

「むっ？其方はこの前の」

「スカイレイカーです。よろしくネロさん。エイト、早くその子から離れて」

「ひっ!？」

俺は咄嗟に離れようとすると同時に、ネロもレイカースマイルに恐怖したのかすぐに離れた。そして近くのオブジェクトの陰に隠れた。

「こ、怖いのだ……。」

「あらあら？怖がつてるの?。」

「はあ……、ネロ、こつちにこい。何か話があるんだろ？」

「う、うむ！そうであった！其方、余と一っ勝負しないか？」

「勝負？あのなあ、神獣級エネミーとあまり変わらないお前と戦っても勝てねえよ」

「余はこの世界に来てからずっと暇だったのだー！相手してほしいのだー！」

「駄々っ子かお前は!!」

ネロは地面に転がって駄々をこねていた。その様子は本当に子供にしか見えなかった。

「わかったよ……。勝負すればいいんだろう？」

「本当か！なら早速戦うぞ！」

「レイカー少し離れていてくれ」

「わかったわ」

レイカーが離れたのを確認して、俺はガンブレードを持った。ネロも同じように赤い剣を出していた。

「では、こちらからいくぞ！」

「っ!?!早い!?!」

咄嗟に剣を交差させてネロの剣を防いだが、そのまま吹き飛ばされてしまった。なんて力なんだよ……。

「ガードしなかったらやられてた……」

「余は強いであろう!まだまだいくぞ!」

ネロは何度も剣を振りかざし、俺はそれを防ぐことしか出来なかった。力だけじゃなく速さもある。けど、必ず隙はあるはずだ。

相手を観察するために、ガードしながら相手の様子を見ていった。………なるほど、ここが隙だらけだな。

「そこだー！」

俺はネロが剣を振りかざすタイミングに合わせてしゃがみこみ、足を引つ掛けた。すると、ネロはうまく引つかかり、体が地面に激突した。

「なぬ!?!しまった!?!」

俺はそのままネロの上に蹴り上げて、ガンブレードで地面に叩き落とした。これにはネロも驚いた様子を見せていたが、まだピンピンしていた。

「痛いのだ……。今のは油断したのだ…」

「その割にはピンピンしてるじゃねえか」

「それでも痛いものは痛いのだ！其方だつてそうであろう！」

「その気持ちはわかるが……。つてなんの話だこれ」

「そんなことはどうでもよい！」

「お前から始めたんだろ!!」

「とにかくいくぞ！」

俺は次の攻撃に向けて体制を立て直した。ネロの攻撃がくる直前で空から剣が降ってきた。

「誰なのだ！余は今この者と戦っておるのだぞ！」

「それは済まない。いや、その少年が気になってね」

「さつさと姿を見せるのだ！」

「君は怒りやすいのかな？まあいい、今そちらに行く」

辺りを見ると、ビルの上から赤い服をきた男が現れた。その男は俺を見ると、何か納得していた。

「なんだ？」

「なるほど、君だったのか」

「だから何が？」

「エイト、ネロ。その人は？」

「わからないんだよ。いきなり俺を見て何か一人で納得するし……」

「君は私と同じ力を持っている」

「同じ力？」

「こちらでは心意と言うのかな？ こういうものだ。 トレース・オン 投影開始」

「っ!？」

「おおー！ 剣が出てきたぞ！ 其方は手品師か！」

「君もこういうことをできるのだろうか？」

「余のことは無視か！」

確かにそれは俺の心意技と同じだ。でもエネミーがプレイヤーと同じ技を使えるなんてありえるのか？いや、絶対にありえないはずだ。

「なんでお前が俺の技を……」

「これだけじゃないさ。君の必殺技も使えるよ」

「アunンliリmiミtedド ブlレaイdド ワoッrクkスか？」

「そうさ。君は今なぜ自分と同じ技を使えるのか気になってるはずだ」

「ああ。普通はありえないからな。プレイヤーとエネミーが同じ技を使えるなんて」

「それはだな……」

エネミーはそう言うと、少し間を置いた。そしてもう一度口を開くと、とんでもない

答えが出てきた。

「正直私にもわからないのだよ。心意技が同じなのはあり得るが…」

「なんだそれ!! さっきの間はなんだったんだよ!!」

「あの、ずっと気になってたんですが……貴方は?」

あ、忘れてた。そういえばまだこいつの名前を聞いてなかった。人型で喋るといふことは、もしかしたら英霊級エネミーなのかもしれない。

「私の真名はまだ教えないが、クラスだけ教えておこう。私はアーチャーだ。今はアーチャーと呼んでくれ」

「アーチャー? つてことは弓兵なんですか?」

「ん? ちょっと待て、剣を作っていたのにアーチャーなのか?」

「私はアーチャーだが、どちらかという和白兵戦が得意なのでね」

なるほど、そういう英霊級エネミーもいるんだな。これで3つ目のクラスが明らかになったな。だが、まだアーチャーの目的を聞いていない。

「で、あんたの目的は？」

「君の必殺技を見せて欲しい」

「理由を聞こうか」

「君は私と同じ技を持っているからね。どんなものなのかこの目で見たいのだよ」

俺の技を見たい……か。それぐらい構わないが、それなら俺もアーチャーの技を見る権利ができるわけだ。まずはそれを伝えないとな。

「そのかわりお前の技も見せてくれ」

「構わないよ」

よし、これで成立だな。さっきのネロとの戦いでゲージが溜まっていた。ネロ……そういえばネロの声が聞こえないな。

「なあレイカー。ネロは？」

「ネロならあそこで……」

レイカーが指差した方を見ると、ダンボールの中に入って、『構ってください』と書かれた札を持ったネロがいた。何してるんだあいつ……。

「何してるんだ？」

「構ってほしいのだ……」

「はっ？」

「その者が出てきてから余の相手をしてないではないか！余のことは無視するし、結構辛いのだぞ!!」

「君を無視したつもりはなかったのだが……」

「思い切り無視してたではないか!!」

「ネロ、落ち着いて。ネロもこっちにきて会話に参加しよう?」

レイカーはしゃがんでネロと視線を合わせて、そう言った。すると、ネロはダンボールから出てきて、俺とアーチャーのところに来た。だが、何故か札はまだ持っていた。

「それで何の話なのだ？」

「今からエイトがアーチャーに必殺技を見せるのよ。ネロも見てみる？」

「うむ！」

さてと……始めるか。

第7話 強くなるには…

アーチャーに技を見せて欲しいと言われ、俺はネロとの戦いで溜まった必殺ゲージを消費して技を放った。

「unlimited blade works!」

固有結界を作り、辺りの景色を変えた。ネロは初めて見たからかなり驚いていた。アーチャーの方を見ると、周りを見て固有結界をジロジロと見ていた。

「おお！世界が変わったのだ！」

「見せてやったぞ」

「なるほど。私の思った通りまだまだなようだな」

「まだまだだ？」

「君の固有結界はまだまだ未完成だ。というより、この固有結界の力を最大限まで発揮出来ていないといったほうがいいかな」

「技の力を最大限まで発揮出来ていない？今まではこれが最大と思っていたが、アーチャーが言うにはまだまだ上があるみたいだ。つまり、俺はまだまだ弱いということか？」

「さて、次は私の番か」

「固有結界の時間が切れるまでは無理じゃないのか？」

「まあ見ていたまえ。」

I ^体am ^はthe ^劍bone ^でof ^出my ^来sword. ^い
 S ^血teel ^潮is ^はmy ^はbody, ^鉄and ^心fire ^はis ^確my ^不blood. ^子
 I ^幾have ^たcreated ^のover ^戦a ^場thousand ^をblades. ^超

Unk^たno^だwn^のto^一death^度も敗走はなく。
 Nor^たknow^だnto^のlive^一も理解されな^もい。
 Have^彼with^のstood^者pa^はin^常to^にcreat^独e^りman^劍y^のweap^丘ons^で。
 Yet^故,^にthose^そhands^のwill^涯never^にhold^味world^はany^勝thing^利。
 So^そas^のI^体pray^は,^はUNL^とIMIT^劍ED^でBLA^出DE^来TER^てWOR^いKS^た」

アーチャーが呪文を唱え終えると、さつきまで張っていた俺の固有結界が消えていき、また新たな固有結界が張られた。それは俺の固有結界とよく似ていて、違ふところは巨大な歯車のようなものがあつた。だが、そんなことよりも、俺はなぜ自分の固有結界が消えたのかがわからなかつた。

「なんで俺の固有結界が……」

「それは君の固有結界が私よりも劣っているからさ」

「おお！其方も固有結界を使えるのか！」

こんな簡単に負けるなんて……、同じ技を持つ者としてやっぱり悔しいな……。

「どうした？」

「こんな簡単に負けたから……悔しいなと思ってな……」

「そうか」

「ねえアーチャー。今はアーチャーのほうが上かもしれないけど、必殺技を強化すれば、アーチャーを越えることができるのよね？」

「ああ」

「あ、でも必殺技を強化するならレベルを上げなきゃダメよね？ エイトのレベルは8だから……」

「レベルは関係ないさ。確かにレベルを上げて強化するのが普通だが、別にそれをしな

くても強化できるさ」

「それって？」

「己自身を鍛えることだ。簡単に言えば経験だな」

「経験……」

「ネロだったかな？君は自分の技をどうやって強化した？」

「むっ、余か？余は鍛えて鍛えまくったぞ？自身を強化するならそれが一番だからな！」

「そういうことだ。もちろん君だけじゃない。彼女も鍛えれば技を強化できるぞ」

「私も？」

「そんな方法があったのか……」

「そこで提案なんだが、エイトでいいのかな？」

「あ、ああ」

「私が鍛えてあげようか？」

「えっ……」

「むっ！ずるいぞ！余だつてエイトを鍛えてやりたいのだ！」

「同じ技を持つ者が鍛えたほうが効率はいいだろう？」

「そ、そうだが……。なら、レイカーよ！余が其方を鍛えてやるぞ！」

俺はいきなりそう言われて、頭の中がごちゃごちゃになっていた。エネミーに鍛えてもらうなんてことはなかったし……。そもそも誰かに鍛えてもらったことなんてなかった。

たからな。レイカーも同じようにかなり動揺していた。

アーチャーが鍛えてくれると言ってくれた時は、正直嬉しかった。だが、他のみんなを放つて自分だけ強くなってもいいのか…。頭の中ではそういう感情が出てきた。

「それは嬉しいが、仲間を放つて自分だけ強くなるなんて……俺には出来ない」

「仲間か……」

「あ、この前いた者たちか？」

「そうよ。私もエイトと同じように、自分だけ強くなるなんて出来ないわ」

「なら、その仲間たちも一緒に鍛えればいい。なに、私には知り合いが多いのでね」

エネミーにも知り合いがいるとは思わなかったな。もしかしてエネミー同士で交流を深めたりするものなんだな。もしかして、1対1で鍛えるのか？

「そんなに多いのか？」

「まあね。それでどうする？」

「みんなには説明しておくから、また今度でもいいか？」

「構わないよ」

「じゃあ少しの間待っていてくれ。また来るから」

「私はこの辺りでいるから、何か用があったら叫んでくれればいい」

「わかった」

「余も待つておるぞ！」

俺はジェットレグ、レイカーはゲイルスラスターを装備して、レイカーのホームがある塔の最上階に登った。その光景を下で見っていたネロは何か叫んでいた。

『其方は飛べるのか!?余も飛びたいのだ!乗せてほしいのだー!』

『君は子供なのか?』

『誰が子供だ!余はローマ皇帝なのだぞ!』

ネロはアーチャーにまで子供扱いされるのか。まああの身長と態度だと誰でも子供扱いするよな。それにしても、今気づいたが、アルトリアに似すぎだろ……。ある部分は結構あつたが……。

「エイト?なに想像してるの?あとアルトリアに失礼なこと考えなかつた?」

「俺が何を考えてたか気づいてるだろ……」

「アルトリアと似ているけど、胸は凄くあるって考えてた？」

エスパーかよ……。

「私の胸じゃ不満？」

「んなことねえよ。っていうか楓子のほうが大きいだろ……」

「そ、そう？」

自覚は無し……か……。

俺は腕に抱きつかれた時、いつも楓子の胸が腕に当たって理性を保ってるのに……。

「あと、俺は楓子一筋だからな」

「ありがとう♪現実世界に戻ったらまたデートしようね」

「ああ」

最上階について、ホームの近くにある帰還ポータルの中に入り、現実世界に帰った。

まさかエネミーがプレイヤーを鍛えてくれるなんてな……。みんなが聞いたらどんな反応をするか……。加速研究会は聖杯を復活させて、必ず勢力を上げてくるからな、俺たちも強くならなきゃ……。。

第8話 奇跡の出会い

アーチャーたちと一度別れて現実世界に帰ってきた俺と楓子は、みんなに連絡をとり、ハルユキの家に集合することになった。アーチャーが俺たちを鍛えてくれると言ってくれたことをみんなに伝えるために。全員集合すると床に円を描くように座り、俺は話を振った。

「英霊級エネミーが私たちを鍛えてくれる？ どういうことだ？」

「俺にもさっぱりなんだよ……。技を見せ合った後、鍛えてやるって言ってきたんだよ」

「で、でも、英霊級エネミーが鍛えてくれるってことはかなり強くなれるんじゃないですか？」

「ハル君の言う通りなの」

確かにハルユキの言う通り、あいつら英霊級エネミーに鍛えてもらえれば強くなることはできる。俺もあの時、すぐに答えを出すつもりだったが、みんなのことを考えると1人だけ強くなることなんてできなかつた。

「ならば、一度会ってみてはどうでしょうか？それで決めればいいだけです」

アルトリアは提案を出すと、みんなその提案に乗り、無制限フィールドに加速することにした。全員で直結用ケーブルをニューロリンカーにつけて、叫んだ。

「「「アンリミテッドバースト!!」」」

加速世界に来て、俺はみんなを連れて、アーチャーがいる場所に向かった。そこにはすでに、ネロが寝転んでその場にいた。

「むっ？ おお！ エイトではないか！ もう余に会いたくなつたのか！」

「そんなんじゃないよ。アーチャーは？」

「アーチャーなら呼べばくるとか言つてなかつたか？」

「あ、そうだったな。おい！ アーチャー!!」

大声で呼ぶと、ビルの屋上にアーチャーが姿を現し、飛び降りて俺たちのところに現れた。

「呼んだか？」

「みんな連れて来た。だから、そっちの仲間とやらを紹介してくれ」

「了解した」

アーチャーはそう言うと、弓を構えて、矢を空に放った。

「今のは？」

「ただの合図さ。ほら、みんな来たぞ」

矢を放って数秒で、俺たちの周りには何人かの英霊級エネミーが現れた。1人ずつ見ていくと、そこには驚かざるを得ないことがあった。その中にはアルトリアと瓜二つといえるエネミーがいた。

「嘘だろ……」

「なんで……アルトリアさんが……」

「あの……あなたは？」

ルークとチユリが驚いて声を漏らし、アルトリアは恐る恐るそのエネミーに問いかけると、エネミーは答えてくれた。

「私はランサー。真名はアルトリア・ペンドラゴン」

「なっ!? どういうことだ! 私たちの目の前にいるアルトリアと名前が全く同じだなんてありえるのか!」

「何を言ってるのだ。私はブリテンの王。同じ名前のもなんていない」

「あの! ここでリアルの名前を出すのはよくないとわかっています、私の名前はアルトリア・ペンドラゴンなのです!」

「ほう、なら貴様の剣を見せてもらおうか」

「こ、これです」

キングは強化外装であるエクスカリバーをエネミーに渡した。エネミーはまじまじとエクスカリバーを見て、小さく笑った。

「これはエクスカリバー。私が使っていた剣だ」

「あのー、もしかしてですが、ここにいるエネミーであるアルトリアさんは、私たちの知るアルトリアさんのご先祖ではないでしょうか？」

キングが使っているエクスカリバーがエネミーが使っていたエクスカリバーと同じとわかり、コスモスはもしかしてと思い、ご先祖ではないかと言った。

「……………」

「キング？」

「ご先祖様………？ご先祖様！」

キングはエネミーに抱きつき、涙を流していた。初めて会うご先祖様に感動したのだらうな。

「全く……しようがない子だ」

「すまないが、話を進めてもいいか？」

アーチャーのことを完全に忘れていたな。他にも知らないエネミーがいっぱいいるから自己紹介してもらわないとな。

「ライダーです。真名はメドゥーサ」

「おう！俺はランサー！真名はクー・フリーンだぜ！」

「キヤスター。真名はメディア。どいつもこいつも鎧ばかりじゃない！」

「そして最後は余だ！余はローマ皇帝ネロ・クラウディウス!!」

ん？地味に少なく感じるのは気のせいか？

俺はアーチャーに他にもいないか聞くことにした。

「アーチャー、これだけか？」

「いや、他にもいるが、面倒だから来たくないとか言っていてな」

「なんだよそれ……」

「誰を鍛えるかは我々が決めることにした。この場にいる5人に選ばれなかったものも落ち込む必要はない。私が示した場所にいくと、私の知り合いがいる。もしかしたら力

を見せろとか言ってくると思うが、まあ頑張ってくれ」

「アーチャーたちが選ぶ……というのか……。アーチャーは俺を鍛えると言っていたが、4人は誰を選ぶんだ？」

「私はキングにしましょうか」

「よ、よろしくお願いします!!」

「なら私は……この銀色にしましょうか」

「えっ!? ぼ、僕ですか!？」

「あなた以外いないでしょう？」

「よ、よろしくお願いします!!」

「メディアはどうするのだ？」

「うるさいわねアーチャー！今考え中よ！この中で誰が一番可愛いのか……」

このメディアとかいうエネミーは可愛いものならなんでもいいのか？そんな理由で決めるのかよ……。

「全員鎧を脱ぎなさい！！ダミーアバターになるのです！！男以外！！」

俺たち男は眼中にないということか？それはそれでなんか悲しいな。女性陣はダミーアバターになると、メディアは一人一人見ていった。あ、そういえば……。

「アツシュ、お前もならないのか？」

「何がですかアニキ？」

「いやお前のダミーアバターは綸だろ？」

「わ、忘れてやした!」

アツシユはダミアアバターになると、女性陣のところと並んだ。メディアはだんだん興奮してるように見えた。そして、繪を見ると、鼻血を出して抱きしめた。

「この子可愛いじゃない!!」

「ふえっ……?えっとお……」

「あのーメディアさん。あと一人残ってますよ?」

「あら?ごめんなさいね、えっとお……っ!?」

楓子がメディアにそう言って、メディアは繪の隣にいるういういを見ると、固まって動かなくなつた。

「きやあああ!!可愛い可愛い可愛い!!!なんなのよこの子!!こんな可愛い子がこの世界にいるなんてええ!!私夢でも見てるのかしら!!」

もう手がつけれられないのではないかと思うくらいメディアは暴走していた。確かにういういは可愛いからあーなるのもわかるが……。その前にあの状態のメディアはどこか楓子と似ていた。

「決めたわ!!私この子を育てる!!優秀な子に育てるわ!!」

「よ、よろしくなのです!」

「きやあああ!!ああもう!!本当に可愛い!!」

「なあアーチャー」

「どうした?」

「キャスターって魔法とかが得意なんだよな？ういういはアーチャーだから、アーチャーに鍛えてもらおう方がいいんじゃないか？」

「その心配はいらない。メデイアは遠距離攻撃もできる。それに魔術も使えるから、あの子にはピッタリだと私は思うが」

「余はもちろんレイカーだ！前から予約しておったからな！」

「よろしくね、ネロ」

「うむ！任せるがよい！」

「最後は俺だな。んー、できれば槍使いの方がいいんだが、槍使いがいらないからなあ……」

クー・フリーンはかなり悩んでるみたいだな。けど、悩むのを一瞬でやめて、パイルのところに向かった。

「お前に決めた！」

「あ、ありがとうございます!!」

「残ったものはこちらに来てくれ」

選ばれなかった12人はアーチャーのところに向かい、他の英霊級エネミーがいる所を教えてもらっていた。そして、鍛えるために全員バラバラに散っていった。

俺とアーチャーも移動するために歩いていった。数十分歩くと、建物が崩れる音が聞こえてきた。

「な、なんだ!?!」

「どうやら誰かが戦ってるみたいだ。私が見てくる、君はそこで待っていてくれ!」

「あ、おい！」

アーチャーは走って俺から離れていった。アーチャーは待っていてくれといっていたが、俺だつて気になる。だから、俺も走り、爆風のするところに向かった。そこには弓を構えたアーチャーがいた。

「アーチャー!!」

「っ!?なぜきた!!」

「気になるからきた!それだけだ!」

「まったく……怖いもの知らずにもほどがあるな」

アーチャーが弓を構えて狙つてる方向を見ると、そこには見覚えのあるデュエルアバターが人型のエネミーと戦っていた。エネミーもきつと英霊級エネミーのはずだ。しかもあの凶暴っぷりはバーサーカーだ。

『つたくしつこい!!』

『ヴァアアア!!!』

あの声って……まさか!?

「アーチャー!!まだ矢は撃つなよ!!」

「なにつ!？」

言うのは少し遅く、アーチャーは矢を放っていた。その矢は2人の間に落ちて、爆風を作った。俺はその場に行くために走り出すと、アーチャーも一緒に追いかけてきた。

「どうしたのだ!」

「知り合いがいたんだ!」

「痛たた……。つたくなんなのよ!! 変な奴に襲われるし矢は降ってくるし!!」

「やっぱりダークか!!」

「何よ!! つてエイト!?!」

「再開を喜ぶのはまだ早いぞ! バーサーカーはまだ動いてる!」

爆風は晴れていき、バーサーカーが姿を現した。そいつはかなり大柄な男で、片手で大きな斧を持っていた。

「君たちはそこで見ているんだ!!」

「1人で大丈夫なのか!?!」

「大丈夫さ! 私の力を見せてやろう!」

アーチャーは両手に剣を持ち、バースーカーに突っ込んでいった。

第9話 アーチャーの力、ダークの先祖

後ろに下がって俺とダークはアーチャーとバーサーカーの戦いを見ることにした。その戦いは凄まじかった。

「凄い……。あれが英霊級エネミーの……。戦い……。なのか？」

「な、なんなのよその英霊級エネミーって……」

「聖杯が復活したと同時に現れたエネミーだ。その力は神獣級エネミーの次に強い」

「なによそれ！私そんなの知らないわよ！」

「知らなくて当たり前だ。それが起こったのは最近だからな」

「あの赤いやつもその英霊級エネミー？なの？」

「ああ、アーチャーって言うんだ」

「はあ？弓使ってないのにどこがアーチャーなのよ？」

ダークが言った通り、アーチャーは弓は使わず、ずっと二本の剣を使っていた。攻撃を剣で受け止めて壊れてもすぐにまた同じ剣を作り出していた。俺よりも投影するの
が早い。

「はあー！」

「グオオオオオ!!!」

「貴様、バーサーカーなだけはあるな！攻撃力も私よりは上だな。だが、バーサーカーであるお前は考える頭を持たないのが欠点だ!!」

すると、アーチャーは剣をバーサーカーの周りに雨のように降らして、剣の檻を作っ

た。そして、アーチャーはバーサーカーから離れると弓矢を構えていつ出てきてもいいように準備していた。バーサーカーが檻を壊して出てきた瞬間、アーチャーは矢を放った。

「喰らえ!!カラドボルグ!!」

「グオオオオ!!!」

その矢はバーサーカーの体を貫くと、背後にあつた壁に突き刺さつた。矢は壁にめり込んでいた。バーサーカーはというと、体を貫かれたと同時に倒れた。

「た、倒したのか?」

「倒したというか瀕死だな。英霊級エネミーは簡単には死なないのさ。そんなことよ
り、その彼女は大丈夫か?」

「ぜ、全然平気なんですけど!」

「足が震えてるぞ？」

「う、うっさいわね！」

「ははっ、君たちは知り合いなんだね。自己紹介が遅れてしまったな。私はアーチャー、真名は今伏せている。今はアーチャーと呼んでくれ」

「ダークアヴェンジャー。ダークで構わないわ」

2人は自己紹介をし終わったみたいで、俺はどこで鍛えてくれるのかを聞くことにした。

「で、目的地はどこなんだ？」

「ここだとバーサーカーもいるから危険だな。もう少し先に進もうか。よければ君も来るか？」

「はっ？私？というかあんたたち何してたの？」

「アーチャーが俺を鍛えてくれるんだよ」

「はあ!? エネミーがプレイヤーを鍛える!? 何よそれ!!」

「彼はもつと強くなる。だから、同じ力を持つ私が鍛えてあげるのだよ。技を最大限まで引き出すために」

「エイトは十分強いのにさらに強くなるの!？」

「俺は強くならなきゃならない。加速研究会を止めるためには……な」

「加速研究会ねえ……。いいわ、私もあんたたちについていくわ。そして私も強くなる！」

「基本はエイトを鍛えるから君を鍛えるのは難しいが、それでも構わないか？」

「別にいいわよ。見てそれを盗むから。つてそんなこと聞くならなんで最初に聞いたのよ」

「それもそうだな。さて、いくとするか」

新たにダークが加わり、改めて目的地へと進んだ。さっきの1から数キロ離れたところで止まった。周りは草原で覆われたところだった。

「こんなところで修行？何も無いじゃない」

「岩を割ったりする修行じゃないのだよ。技の熟練度をあげるためなのでね」

「へえ」

「早速だが、何をすればいい？」

「君の投影を見せてくれ」

「わかった。トレス・オン 投影開始」

俺が作り出した剣はどこにでもあるような剣だった。

「質はなかなかのものだな。だが投影に時間がかかりすぎだ」

「今のでかかりすぎなの!？」

「たしかに、さっきのアーチャーの戦いの投影と比べれば俺の投影なんてまだまだ遅い」

アーチャーのように早く投影するには、投影するものを早く頭に浮かべ、それを実行しなければならぬ。だが、いくら早くても集中しなければ投影は無理だ。集中しながら早く頭に浮かべて実行しなければならぬのか……。これはきついな……。

「まずは投影の修行だ。目標は1日で完全なものとするのだ！」

「はい！」

「じゃ、私は頑張ってる2人のために食料でも調達してくるわ」

ダークが食料調達に行き、俺はアーチャーと修行を始めた。

「トレース・オン投影開始！」

「遅い！」

「トレース・オン投影開始！」

「集中していないぞ！」

「トレース・オン投影開始！」

「また遅くなってるぞ！」

トレース・オン
「投影開始！」

「集中はできてる！あとは早くするだけだ！」

トレース・オン
「投影開始！」

「さつきよりマシになってるぞ！そのいきだ！」

思った以上に修行は地獄だ。早くすれば集中力が切れる。集中すれば早くすること
ができない。この二つを同時にするのはなかなか骨が折れそうだ。

そして数時間が過ぎ、ダークが帰ってきた。せっかくだからダークに見せてやるか。

「戻ったわ……って何よ？」

「ダーク、見ていてくれ。投影開始！」

「早っ!? あ、あああ、あんたたった数時間でマスターしたの!？」

「アーチャーとの修行がそれほど地獄だったってことだ」

「で、その本人は？」

「今日の修行はここまででって言ったあと昼寝してくるとか言ってたな」

俺はそう言っただけで草原に寝転んだ。すると、ダークも俺の隣に来て、同じように寝転んだ。

「ふーん。あんた、数日はこの世界にいるの？」

「まあな。他のみんなもそうだろうな」

「そう」

「なあダーク」

「何よ急に？」

「お前のご先祖様ってジャンヌ・ダルクなんだよな」

「一応ね」

「一応ってなんだよ？」

「歴史上ではジャンヌ・ダルクは一人しかいないでしょ？でもね、それは大きな間違いなの」

「間違い？」

「本当は2人いた。そのもう1人が、私と同じ名前のジャンヌ・ダルク・オルタ。彼女は姉のジャンヌとともにフランスを救った。けど、彼女は報われなかった。どれだけ頑張っても、結局は姉のジャンヌがいいように言われる。それが彼女を復讐者に変えたの。きつと許せなかったんでしょね。頑張っても頑張っても、彼女を見てくれる人がいなかったことに」

俺はダークの話を黙って聞いていた。

「そして彼女はフランス軍に捕縛され、火刑になった。フランスの人たちはみんなオルタを恨んでいた。そして彼女はこう呼ばれた。『竜の魔女』と。でもそんな彼女を恨んでない人もいた。それが姉のジャンヌだったの。彼女はずっと泣いていた。心から泣いていた。火刑になる彼女のことをずっと許してあげてくださいと言っていた。その時にオルタは気づいたの。こんな近くに私を見てくれる人がいたのになんで気づかなかったんだらうってね。火炙りにされながら彼女はそればかり考えていたそうよ。彼女が亡くなつて数ヶ月後にジャンヌは子供を授かった。それが私たちの先祖の内の1人よ」

「えっ!? ジャンヌって子供を授かっていたのか!? でも歴史では……」

「学校の教科書が全て真実とは限らないの。話を戻すわよ。そして先祖の名前はみんなジャンヌ、ダルクだった。けど、ごく稀に双子として生まれてくるの。それが姉さんとこの私、ジャンヌ・ダルク・オルタよ」

「そうなんだな。お前のご先祖様は本当に大変だったんだな」

「私も母さんやばあちゃんやジルに聞いただけだから真実とは限らないけどね」

「でも、これでお前のことを知れたよ。ありがとう」

「な、何よ……礼を言われる筋合いなんてないんだから……」

「俺が言いたかったただだよ。だからお前は気にしないでいい」

俺は立ち上がり、ダークに手を差し伸べた。ダークはその手を掴み、俺はダークを立たした。

「軽く火で炙ってあげるから、アーチャーを呼んできなさい」

「ああ」

俺はダークに背を向けて、アーチャーを呼びに行くことにした。

ダーク side

何よまったく……。ありがとうって何よ……。

「それはこっちのセリフだ……」

ダ
ー
ク
s
i
d
e
o
u
t

第10話 レイカー対ネロ

場所は変わって、レイカーはネロと一緒に修行をしていた。修行をしていたのだが……。

「ね、ねえネロ。これってなんの修行？」

「むっ？何を言っておるのだ？花嫁修行に決まっておるだろ？」

今レイカーがしているのは料理、その前は掃除や洗濯などをしていた。だからエイトたちがいるような外ではなくて、建物の中だった。

「私は強くなりたいたいんだけど？」

「わかっておる！だが、女ならまずはこちらくらいできるようにならなきゃな！」

「私家事なら全部できるんだけど？」

「そ、そうなのか？」

「だから……お遊びはもう終わりよ？」

「ひっ!？」

辺りの空気が一瞬で凍り付いてしまった。レイカーが絶対零度スマイルをすると、ネロは怯えてガクガクと震えた。その震えた声で修行を開始しようと言った。

「ででで、では修行を始める！」

「まずは何をやるの？」

「そうだな、余はまだ其方の実力を知らない。だからまずは余と戦おう！」

「わ、わかったわ！」

剣を取ったネロはレイカーに突っ込んだ。ネロの斬撃は早く、避けることが出来ず、ガードすることしかできなかった。そのせいでレイカーの体力は少しずつ減っていた。

このままじややられると判断したレイカーはゲイルスラストで上空に飛び、ネロから離れた。そして手を出して、風を作り出して、それを放出した。

「スワールスウェイ!!」

「ぬっ!？」

ネロは驚き、避けるのを忘れて剣で防ぐことにした。風の力は強く、ネロは飛ばされて壁に激突した。

「がはっ！」

「まだよ！はあああ!!」

「ああああ!!!」

ゲイルスラスターを使ってネロに飛び蹴りをすると、ネロは腹を抑えていた。その隙を見て、足技を繰り返して使った。

だが、ネロもやられるわけにはいかないと思い、剣で足を防いだ。そしてそのまま跳ね返した。

「余も少し本気でいくとしよう。我が才を見よ！万雷の喝采を聞け！しかして讚えよ！開け！黄金の劇場よ！」
『ラウス・セント・クラウディウス童女謳う華の帝政』！』

辺りは劇場のようなどころに変わり、ネロは突進してレイカーに斬りつけた。剣からは炎が出てきていた。レイカーは倒れて、立ち上がろうして周りを見たときに気づい

た。これはエイトと同じ固有結界ということに。エイトとはまた違うが、間違いないく固有結界だった。

「こ、これは……？」

「これが余の技よ！どうだ！参ったかー！」

「ま、参ったわ……」

ネロは固有結界を解除すると、レイカーに手を差し出した。その手を握ってレイカーは立ち上がった。

「其方の力はよくわかったぞ。其方はスピードはなかなかのものだった。あとはそれをどう活かすか……だな」

「そ、それだけ？」

「いや、もちろん他にもやることはあるぞ？だがいつペンにしても頭がパンパンになる
と思ったのだ。だからこそ、少しずつ課題を減らしていくのだ！」

「少しずつ…」

「そう焦るでない。きつとエイトも同じことをしておるに決まっておる」

「…そうね」

「うむ！だが、今日はもう遅い。ご飯を食べてゆつくり休んで、明日に備えるぞ！」

「え、ええ」

レイカーとネロは建物の中の空き部屋に入り、休むこととなった。最初はキッチンとかが使えるのか心配だったが、ちゃんと使えるみたいだった。料理はレイカーが作り、ネロは棚に入っていた容器を出したりして準備をしていた。

料理が完成して、椅子に座り、手を合わせた。

「いただきます」

ネロはレイカーが作ったシチューを口に運んだ。そしてネロは感動した顔でレイカーに言った。

「うむーやはり其方が作るものはどれも絶品だなー」

「口にあつてよかつたわ」

「余もこれくらい料理ができるようになれば……エイトを落とせると思うのだが……」

「ネロ？今何か言つた？」

本日2度目のレイカースマイルが出て、ネロはまた怯えた。

「ひっ!?! い、いや、余だつてエイトが好きなのだ!」

「ネロも?」

レイカースマイルをやめて、ネロに問うた。するとネロは怯えるのをやめて話し始めた。

「う、うむ! 余はエイトのことを気に入ったのだ! だからどうかしてエイトを振り向かせてみたいのだ!」

「ちなみに理由は?」

「構つてくれるからだ!」

「そ、それだけ?」

「今はそれだけだが、余がエイトと関わり続けると、絶対に余はさらにエイトのことを好

きになる！そしていつかローマ皇帝の婿として……」

「ね、ネロ？申し訳ないんだけど……」

「むっ？どうしたのだ？」

「私ね、現実世界でエイトと付き合ってるの」

「な、なな、なぬっ!?そ、それは本当か！」

「え、ええ」

「余の恋は早く散るのか……」

「お、落ち込まないで！」

「まあよい！婿は無理でもドキドキさせることは可能だ！あ、そういえば其方のダミー

アバター？を見せてくれぬか？メディアのときはなつてなかったからだろ？」

「いいわよ」

指でメニュー画面を操作すると、レイカーはデュエルアバターからダミーアバターになった。現実世界のレイカーを初めて見るネロは目を輝かせた。

「おお！これほどの美人だったとは！余といい勝負だぞ！」

「それは嬉しいけど、なんだか恥ずかしいわね」

「其方がこんな美人なら、エイトは美男子だな！」

「ふふつ、鋭いわね。正解よ！」

「おお！なら尚更見たくなってきたぞ！」

「修行が終わったたら頼んでみるといいわ」

「うむ！」

場所が変わってエイトたちがいる草原……

「ヘックシユン！」

「うわっ!?!びっくりした……」

「風邪かなあ？」

「この世界で風邪なんか引くわけないでしょ……」

「それもそうだな……」

「そんなことよりも、早く寝て明日に備えなさい。アーチャーなんかとつくに寝てるわよっ。」

「ああ……おやすみ」

「おやすみ……」

場所は戻ってビルの空き部屋……。

「というか其方の胸は大きいな。余よりあるんじゃないか？」

「そ、そんなことないわよ」

ネロは自分のと比べていた。ネロもなかなか大きいのが、比較するとレイカーの胸の方が余裕で大きかった。

「むむむ……。余もなかなか自信はあるのだが……」

「そ、そんなジロジロ見ないですよ！もう寝るよ！」

「ま、待つのだ！余も寝るのだー！」

2人は寝室に入ると、ちゃんとベッドもあり、そこで寝ることにした。

第11話 殺人鬼襲来

アーチャーとの特訓が始まって3日が経った。いつも通りアーチャーと模擬戦をする予定だったが、無制限フィールドにいる他の人たちが騒いでいたため、急遽中止となった。

「今日はいつもより騒がしいな」

「なんなのよまったく……」

「今日は中止とするか」

「な、なんで？」

「これだけ騒がしいと、何かあったのだらう。まずはそれを片付けるとしよう」

「あー！ やつと見つけたー!!」

声のする方をみると、息を切らしていたアンクルがいた。アンクルも修行中だと思いが、なんでこんなところに？

「おや、どうしたのかね？」

「どうしたもこうしたもないですよ！ あなたが示したところに行けばいると言っていたのに誰もいなかったんですよ!!」

「ん？ それはおかしいな。まさか何処かに行ったのか？」

「アーチャー、お前は知り合いに頼んでるんだよな？ アンクルを鍛えるのは誰か知ってるんじゃないか？」

「ああ、その名はジャック・ザ・リッパー」

「ジャック・ザ・リッパーってあの殺人鬼!? あんた大丈夫なの!？」

「実力もかなりある。安心していい」

「いやそうじゃなくて! 示した場所にいなかったんでしょ!! なら他のリンカーたちを襲ってるんじゃないのかって言ってるのよ!!」

「……………」

「な、何か言いなさいよ!」

「すぐに見つけ出すぞ!!」

「何も考えてなかったんじゃないの!!」

「と、とにかくいろんな人から聞いて探し出そう!」

「は、はい！あ、ちよつといいですか」

「どうした？」

「この黒い人誰ですか？」

「今更っ!？」

そういえばアングルはダークと会うのは初めてだな。けど、今は時間がないから軽く紹介するか。

「ダークアヴェンジャー。レベル6だ」

「ちよつ!?!あんたもつといい紹介の仕方があるでしょう!?!」

「時間がないんだから詳しくは後だ！」

「とりあえずダークさんですね、私はタンタルアンクルです！アンクルで構いません！」
「わ、わかったわよ！」

軽く紹介してから俺たち4人は聞き込みを開始して、ジャック・ザ・リッパーを探し始めた。

楓子
s i d e

「今日も余と実戦形式の訓練だ！気合い入れていくぞ！」

「ええ！」

「むっ？ちよつと待つのだ」

戦闘態勢に入った途端、ネロは私を止めた。すると、ネロは辺りを見回していた。

「ネロ？」

「静かに……何か来る……」

意識を周りに集中して、いつ来てもいいように備えた。でも、いくら待つても全然来なかった。そうして油断してしまったときに、何かがきた。

「マリア・ザ・リッパー！！！！」

「っ!？」

咄嗟に横に飛び、直撃は避けたけど、傷が深すぎた。そこからは激痛が走り、立ち上がれなかった。

「ああああ!!!」

「レイカー!!其方何者だ!!」

「知りたい?」

痛みを耐えてると、急に霧が出始めていた。霧を吸うと、急に苦しくなった。HPゲージを見ると、毒状態になっていた。

「な、なんで?」

「この霧のせいだな。あまり吸うな」

「ネロは………平気なの？」

「余は英霊級エネミーなのでな。これくらい効かないのだ！」

霧はだんだん濃くなっていき、周りの建物が見えなくなっていく。そんな状態なのに、何かが私たちに襲いかかってきていた。

「ぬう………一体誰なんだ！」

「わたしたちの名は……ジャック・ザ・リッパー」

「っ!?!切り裂きジャックか!?!」

「切り裂きジャック!?!」

切り裂きジャックってあの有名な殺人鬼!?!そんな人も英霊級エネミーだなんて……。

「この霧の中でわたしたちに攻撃を当てるのは難しいよ？だから諦めたら？」

「霧が邪魔なら消すまでだ！我が才を見よ！ 万雷の喝采を聞け！ しかして讃えよ！
開け！黄金の劇場よ！ 『童女謳う華の帝政』！」
ラウス・セント・クラウディウス

固有结界を作ると同時に、ネロはジャックに斬りつけた。ジャックはガードしたのか、剣と剣がぶつかり合う音が聞こえた。その方を見ると驚くほどの光景が見えた。あの切り裂きジャックが小さな女の子だったってことに。

「こ、子供？」

「あーあ、バレちゃった」

「どうする！まだ余と戦うか！」

「本当は逃げ出したいところだけど、せつかくだから一人殺しちゃうね」

「っ?!レイカー!!逃げるのだ!!」

「え……」

私は逃げようとしたが、その時にはもう目の前にジャックがいた。ナイフを振りかざして、私はくらうのを覚悟して、目を閉じた。

HPがゼロになると思っていたが、ナイフの軌道がズレたのか、直撃は避けていた。

「あれ?ズレちゃった……」

「はあ……はあ……、なんとか生き延びたけど……体をうまく動かせないわ……」

「レイカー!!無事か!!」

「ネロ……ええ、大丈夫」

「今度こそ殺しちゃうね？」

もう一度ナイフを持ち直すと、ジャックはまた襲いかかってきた。ネロは私の前に出て、反撃しようとしていた。そんな時、突然ジャックの足に矢が刺さった。ジャックは突然のことでバランスを崩すと、そのまま転がった。

「い、痛いよお……」

「な、なんとか間に合ったか」

「ほんつとうにギリギリよ!!」

「レイカー!!大丈夫か!!」

「エイト……大丈夫じゃないかも……」

「ほら、掴まれ」

エイトが肩を貸してくれて、私はなんとか立つことができた。そして駆けつけてくれたエイトとアーチャー、ダークとアंकルの4人とネロと私で、ジャックの元に歩いていった。ジャックは矢が刺さった足を抑えながら苦しんでいた。

「い、痛いよお……」

「この子があのジャック・ザ・リッパー？」

「どう見ても子供にしか見えないけど？」

「でもナイフ持ってますよ？」

「でも、これが現実だよ。この子がジャック・ザ・リッパー。アंकルの師匠になる」

「お、おじさんたち誰？」

ジャックはアーチャーたちをみると、さつきとはまるで別人のように怯えていた。その時、私の体は自然と動いて、ジャックを抱き寄せた。

「怖がらないで、私たちは別にあなたの敵じゃないわ」

子供をあやすように頭を撫でると、ジャックは落ち着いてきたのか体を私に預けてきた。もうさつきのような殺意も感じなかった。

「よくわからんが、解決したのか？」

「私に聞かないですよ……」

「余もよくわからんな」

「アーチャーさん、子供を怖がらせちゃダメですよ」

「そ、そんなつもりはないのだが……」

「よしよし……」

私は頭を撫で続けると、ジャックはとんでもないことを言った。

「おかあさん……」

「へっ?」

「なっ!?!」 ↑ エイト

「はあっ!?!」 ↑ ダーク

「ええ!?!」 ↑ アンクル

「おかあさん! おかあさん!」

「おかあさんって私？」

「うん！」

「よ、余は！」

「…………名前なんていうの？」

「ネロだ！ネロ・クラウディウス！」

「じゃあネロさんだね！」

「余は母と呼んでくれないのか!？」

「わたしたちのおかあさんはレイカーおかあさんだけー」

あはは……なんかおかあさんって呼ばれるようになって……でも、こういうのもいいわね。せつかくだし、この世界ではこの子の母親になつちやおうかなー。あ、それならお父さんも必要ね。

「ふふ、ねえジャック。おかあさんのお願い聞いてくれる？」

「うん！なにに！」

「この茶色の人がいるでしょ？この人は私の大事な人なの。この先はわかる？」

「うん！おとうさん！」

「お、おとうさん!？」

「エイトさんがついに子持ちに……」

「うわあ……」

「いやいや！俺が言わせたわけじゃないからな！レイカー！変なこと言わせるなよ！」

「いいじゃない♪私がこの子の母親なら父親はもちろんエイトじゃない♪」

近い将来、そういうことになるんだし、予行演習ということなら納得してくれるかな？

「わ、わかったよ……」

「おかあさん！おとうさん！」

「よしよし♪」

「なんだろう、あの2人を見てると私が遅れてる感がすごいんですけど……」

「言わないで、虚しくなる」

こうして、最初は戦闘だったけど、最終的にはこの世界で私とエイトに子供ができたのであった。

「余はもう完全にスルーか！」

「私の方がスルーされてるが？」

第12話 修行の終わり

ジャックが俺とレイカーの子供になって、俺たちはまたそれぞれの修行場所に戻っていった。アングルもジャックと一緒に修行が始まったし、俺も修行の続きができるな。

「君の必殺技はまだ未完成だと言ったのは覚えているかい？」

「あ、ああ」

「なら次は君の技を完全なものへとさせようか」

「ふーん。それは面白そうね」

「ああ、よろしく頼む！」

「つと思ったが、邪魔者が来たみたいだ」

アーチャーの目線の先を見ると、バーストリンカーが1人立っていた。そのリンカーは俺たちを襲うために武器を持っていた。

「お前がブラウンクリエイトか！加速研究会の目的のために死んでもらう!!」

「どうやら下つ端みたいだな。幹部級ではなさそうだし」

「はあ…。あんたの相手は私よ」

「姉ちゃん！そこをどいたほうが身のためだぜ！」

「一撃で終わらせるわ。これは憎悪によって磨かれた我が魂の咆哮！
ラ・グロントメント・デュ・ヘイン
吠え立てよ、我が憤怒!!」

「な、なんだこの炎!?!ぐああああ!!!」

炎はリンカーを飲み込むと大きく燃え上がった。やがて炎は消えていき、そこにはH
Pがゼロになったリンカーがいた。

「話にもならないわ」

「君、なかなか強いではないか」

「当然でしょ！レベル6のなかではトップクラスですし！」

「君にもふさわしい人を探しておくよ」

「な、ななな！何言ってるのよ！いきなりふさわしい人なんて…」

「ダーク、お前の師匠になる人を探すってことだ」

「?!?!?!?
!?!?!?」
「そ、そんなことより修行始めたらどうなのよ!!」

「そ、そうだな。全く……何を怒ってるのやら」

「なんか言った!!!」

「い、いや何も！エイト、彼女はどうしたのだ？」

「それについては触れないでやれ」

黒雪姫 side

「おいおいどうした？黒の王つてのはそんなもんか？」

「な、なんのこれしき」

私はもう一度戦闘態勢に入ると、彼女に突っ込んだ。腕や脚で攻撃をするが、全部避けられるか、防がれるかの2つだ。はつきり言うと、彼女は私よりも遥かに強い。

「デスバイバラージング！」

「おらああ!!」

私の必殺技も意図も簡単に押し返される。何日も模擬戦をしているが、私が一撃を入れたことは一度もない。

「これは父を滅ぼし邪剣！クラレント・ブラッドアーサー!!」

「ぐああああああ!!!」

衝撃波で吹っ飛ばされた私は、立つことができなかつた。やはりあれを食らうと立てなくなるな。

「模擬戦は終わりだ、次は基本的なことだ」

「基本的なこと？」

「お前はまだ無駄な動きが多いんだよ。だから俺に簡単に避けられたり防がれたりするんだよ」

「速さには自信はあるのだが…」

「俺から見ればまだまだだ。それくらいで満足してたらこの先思いやられるぞ?」

基本的なことといっても、何をすればいいのかわからない。

「では、どうすればいいのだ?」

「決まってるんだろ、動きを先読みするんだよ。相手の動きを見て、次にこうくるってことを先読みするんだよ。そうすりゃ、自分自身も攻撃を防げるし、攻撃に関しても避けられたりしたいな」

「なるほど」

「だからさつきと同じだが、実戦形式でするぞ!早く構えろ!!」

「わ、わかった!」

黒雪姫 side out

あれから一週間が経って、最初に全員別れたところにまた集合することになった。集合すると、他のみんなの師匠となるエネミーもいた。

「一週間ありがとな」

「礼には及ばないさ。いつでも修行をつけてやるさ」

「それじゃあ俺たちは一旦戻るよ」

「ああ」

俺たちは離脱ポータルに入り、現実世界へと帰っていった。

帰ってきて俺たちはすぐにその場で寝転んだ。かなり疲れたからそれなりに疲労は溜まってるんだろうな。

「「「疲れたああ」」」

「楓子お……」

「奨真君……」

俺は楓子を抱き寄せると、疲れを取るために楓子という名の癒しを取っていた。今はこれしかできない……。

「み、みんなよく頑張った……。今日は帰ってゆっくり休むとしよう……。ハルユキ君、すまないが泊めてもらってもいいか……?」

「へっ?!いい、いいですけど……」

「ぼ、僕は明日剣道の試合があるので……」

「アタシも部活ウウ」

明日もそれぞれ予定がある子もいて、もう帰ることにした。俺も帰ろうと駐車場に向かおうとした時、ういういに止められた。

「しよーにい、フーねえ。お願いがあるのです!」

「お願い?」

「実は明日学校のお友達と遊園地に行くことになったのですが、そのための引率の人がお友達のお母さんだけなんです。だから」

「ういちゃんは2人には引率としてついてきてほしいんだね!」

たしかに引率の人が1人だけならいっぺんに面倒を見るのは難しいな。ういういはそれを考えて俺と楓子に頼んできたわけか。

「別に構わないよ、俺も楓子もジャンヌも暇だからな」

「あ、実は私、明日1日アルバイトがありました……」

「そうなの？それはしょうがないわね。私も暇だから付き合うわ。何よりもういういの頼みだもん！」

「待ち合わせ場所は？」

「お二人は一度9時に私の家に来てください。そのあと待ち合わせ場所に案内するので
す」

「車は友達のお母さんが出すのか？」

「はいなのです！大きい車なのでみんな乗れるのです！」

「わかった。じゃあ明日9時に」

ういういと約束をして、ジャンヌを白夜たちのところの車に送り、俺は楓子をバイクの後ろに乗せてそれぞれの家に帰ることになった。

第13話 ういいういの友達

朝起きて、俺と楓子は出かける準備をした。昨日ういいういと約束した時間までにういいういの家に行くことにした。家につくと、すでにういいういは家の前でリュックを背負って待っていた。

「しよーにい！フーねえ！」

「ういいういー！」

「おはよう」

「おはようございませすなのです！それでは、お友達の家案内するのです！」

ういういは俺たちの前を歩き、友達の家に案内してくれた。ういういの友達かあ……。ちよつと気になるな。数十分歩くと、人が集まつてる家の前に着いた。どうやらこの子たちが友達みたいだな。

「お、謡じゃねえか！遅かったな！」

「ういういごめんね！急なお願いして」

「イリヤちゃん、気にしなくていいのです」

「それでこの人たちなの？」

俺と楓子に話しかけてきたのは肌が黒めの女の子だった。肌が白い子とすごく似てる。

「橘奨真、よろしく」

「倉崎楓子です、みんなよろしくね」

「「「よろしくお願いしまーす！」「」」」

「あらあら、あなたたちなのね」

声ができる方を見ると、きつきの肌が白い女の子とよく似た女の人だった。多分この人が引率の人なんだろうな。

「アイリスフィール・フォン・アインツベルンです。気軽にアイリと呼んでください」

「イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです！」

「クロエ・フォン・アインツベルンよ」

「美遊・エーデルフェルト」

「桂美々です。よろしくお願いします」

「嶽間沢 龍子だ！タツツンでもなんでも呼んでくれや!!」

「栗原雀花、今日はよろしくお願いします」

「森山那奈亀。ななきで大丈夫です」

えつと……白い子がイリヤ、黒い子がクロエ、クールな子が美遊、大人しそうな子がミミ、メガネの子がスズカ、目が細いピンク髪の子がななき、そしてこのハイテンションすぎる子がタツコだな。

「私だけじゃ見きれるか不安だったので、とても助かります」

「あーいえ、全然気にしないでください」

「そうですよ、困った時はお互い様ですよ」

「ありがとう、奨真君、楓子ちゃん。あら？この名前どこかで……」

アイリさんは俺と楓子の名前をどこかで聞いたことがあるみたいで、思い出そうと考
え込んでいた。

「あれ？奨真と倉崎？どうしたんだ？」

「ん？士郎？なんでここに？」

「なんでって、ここ俺の家だぞ？」

「で、でも士郎君。あなたの名字は衛宮じゃ……」

「それについては私から説明するわね！」

突然目の前に現れたアイリさんに驚いた。すると、アイリさんはどこからかホワイト

ボードを持ってきてペンで書いていった。

「実は私の主人の名字が衛宮なのよ。そして士郎は養子として私たちの家族になったの。だから衛宮なのよ。あ、この2人は士郎の妹になるわね」

「な、なるほど」

「そうだ！ちよつと待っててね！」

アイリさんは一度子供達のところに向かうと、先に車に乗せてまたこっちに戻ってきた。そしてまたさっきの説明が始まった。

「それでね、主人の名前が切嗣っていつてね、クールでカッコいいのよ！」

「あ、アイリさん。その切嗣さんは？」

「今は海外出張中なのよ」

「あら？奥様？まだいらしたんですか？」

士郎の後ろから、また新しい人が出てきた。その時に気になったのが『奥様』という単語だ。

「アイリさん、この人は？」

楓子は気になり、俺よりも先に聞いていた。アイリさんが言うには、この人はメイドらしい。

「士郎、お前の家どうなってるんだ？」

「あはは……」

「さて、そろそろ行きましようか」

「皆さん、お気をつけて」

「は、はい」

俺はアイリさんの車の助手席に乗り、楓子はその後ろに乗った。とうにかこの車結構デカイな……。ミラー越しに後ろをのぞいてみると、さっきのホワイトボードをなおしている士郎とメイドさんがいた。いつもあんな感じなのかな……。

車を走らせてしばらくすると、高速道路に入った。車内では楓子が子供達に質問攻めを受けていた。

「ねえねえ！楓子さんと奨真さんってどんな関係なの！」

「あ、それ私も気になってたんですよ！」

「それ私も〜」

クロエが質問をして、スズカとななきも気になっていた。

「私と奨真君は恋人同士よ」

「わっはっはっは〜!!それは祝わねえとな!!」

タツコは立ち上がり、お祭りをするみたいに暴れていた。そんな時、アイリさんとめめた。

「タツコちゃん、暴れすぎたら車の底が抜けて死んじゃうかもよ?」

「ひえええええ!!!」

地味に恐ろしいこと言うなこの人。しかも満面の笑みのままだし……。

「奨真君、士郎と仲良くしてあげてね。楓子ちゃんにも伝えておいてくれる？」

「はい」

「ママ、そろそろかな？」

「もうすぐよ、だからイリヤもおとなしく待ってるのよ？」

「はいー！」

もうすぐでつくつくと知り、つくまで少し仮眠をとることにした。

???
s
i
d
e

「これを着るの?」

「こつちの仕事がいいって言ったのはあなたでしょ?」

「いや、そうだけど……」

これってどう見ても着ぐるみだよな?こんなん着るなんて恥ずかしくて死んじやう

わ……。でも、仕事だから仕方ないわね。私はライオンの着ぐるみを着て外に出ていった。

第14話 遊園地

目的地に到着して、俺たちは早速中に入ることになった。遊園地の中にはいろんな動物の着ぐるみがいっぱいた。それをみたういたちは目を輝かせていた。

「動物がいっぱいなのです！」

「わあ！」

「はいはい、ちゅーもーく！まずはママから注意事項です。1人でどこかに行かないこと、もし迷子になったら必ず迷子センターに行くこと。あと、困ったことがあったら私たちに言ってね」

「」「」「はーいーいー」「」「」

「奨真君と楓子ちゃんもそれでいいかな？」

「はー」

「それじゃあいっぱい楽しみましょう！」

場所は変わってスタッフルーム。そこでは着ぐるみを着た1人の女性が必死に風船に空気を入れていた。

「ふん！ふん！ふん！ふん！」

その数はおよそ500個、この数を作るのに2時間という時間は使っていた。

「も、もう無理……これ以上は無理だわ……」

暑いのか、着ぐるみを脱ぎ始めた女性。その正体はジャンヌ・ダルク・オルタであった。

「しかし、これ本当に暑いわね……いつそのこと下着のまままで着ようかしら」

試しに服を脱いで、もう一度着ぐるみを着た。どうやらさつきよりはだいぶ涼しかったみたいでいきいきとしていた。

「どうせこれ着てるとバレないし、大丈夫でしょ」

そう思いながら、オルタは服をロッカーに入れてスタッフルームから出て行った。

あれから1時間くらいたったかな？結構いろんなところに回ったけど。

「しよーにいい！これ乗りたいのです！」

「ん？コーヒーカップか。よし、乗るか！」

「じゃあ私ママと乗るー！」

「クロがママと乗るなら……、楓子さん！一緒に乗ってください！」

「ふふっ、いいわよー！」

俺たちは全員でコーヒーカップに乗ることにした。俺とういはいはぐるぐると回しまくりに、イリヤとアイリさんはゆつくりと回し、楓子とクロエは2人とも回しまくっていた。中でも一番激しかったのはタツコと美遊の2人だった。タツコは自分でコーヒーカップを回してそれに酔い、美遊は顔色一つも変えずにぐるぐると回っていた。その光景がすごくシユールに見えた。

「は、吐きそう……」

「タツコが回しすぎるからだ!!」

「美遊ちゃんは大丈夫だったの？」

「あ、楓子さん。はい、全然大丈夫です」

「久しぶりにはしゃいじやったわ〜」

「あなたははしゃぎすぎのような……」

「あ、もうすぐパレードの時間よ!」

「みんなで行くのです!」

ういういとクロエを先頭に、パレードの場所に向かった。すでに人がいっぱいいたが、なんとか場所を取ることができた。できたのだが、パレードが始まると人がごちゃ混ぜになってみんな離れ離れになってしまった。俺はとりあえず人混みから離れると、すでにういういたちは集まっていた。

「みんないるか?」

「フーねえがないのです!」

「まさかまだ人混みの中じゃ!?俺は楓子を探してくるから、ういういたちはここから離れるなよ!」

俺はもう一度人混みの中に入り、楓子を探し始めた。あちこち探すと楓子が入混みの中で押しつぶされそうになっていた。

「しよ、奨真君!」

「楓子!手を!」

「う、うん!」

楓子の手を掴んで、人混みの中から脱出して、みんなのところに戻った。

「あ、楓子さん!大丈夫ですか?」

「本当に大丈夫だったか?人混みの中で変なところ触られてたりしてないか?」

「えつと……実はお尻と胸を……」

「まあ、その大きな胸じゃあねえ」

「触ったやつ一発殴ってくる」

「だ、ダメよ奨真君!!」

楓子に触れていいのは俺だけだ!! つと落ち着け落ち着け……ここで暴走したらダメだ……。

「奨真さんが暴走しそうになってるんですけど……」

「イリヤちゃん、イリヤちゃんのお母さんが見当たらないんですけど」

「「「ええ!?!」」」

たしかにアイリさんが見当たらない！まさか人混みに飲まれたのか!?

「どどどどどうしよう!!」

「みんな落ち着いて、まずは迷子センターに行きましょう。もしかしたらアイリさんも心配して向かってるかもしれないわ」

急いで迷子センターに向かい、中に入ると、そこには見覚えのある金髪の女の子がいた。

「ジャンヌ!」

「え、奨真君!?!もしかしてこの遊園地に来てたの!?!」

「そうだけど、お前はここで何を?」

「バイトですよ、迷子センターで子供達の面倒を見てるのですよ」

まさかジャンヌが言ってた1日だけのバイトってここだったのか……。つとそんなことより……

「なあジャンヌ、ここに白髪の女の人見なかったか？」

「うーん、そういう人は見てないかな」

「ママ、どこに言っちゃったんだろ」

イリヤが顔を暗くしていると、俺のニューロリンカーに電話がきた。かけてきた相手はアイリさんだった。俺はすぐにでて、イリヤたちにも見えるようにした。

「アイリさん！今どこですか！」

「それが、たまたま入ったアトラクションが来訪者1000人目だったのよ」

「そのアトラクションは？」

「ウエディングドレス試着体験」

それってアトラクションなのか？アトラクションじゃなくてももうただの店だと思うのだが……。

「だからしばらくはそっちに戻れないのよ」

「だったら俺と楓子で面倒を見るんで、アイリさんはゆっくりしてください」

「いいの？」

「もちろんですよ」

「なら、お願いしちゃうかな。イリヤ、みんな、2人の言う事を聞くのよ？」

「「「はい」」」

アイリさんは電話をきり、俺も画面を元に戻した。

「それじゃあ行くうか」

「楽しんでね。あ、あとオルタも何処かにいるから」

「おう、見かけたら声かけて見るよ」

「じゃあね、ジャンヌ。お仕事頑張つて！」

迷子センターをでた俺たちは、再びアトラクションを回ることにした。すると目の前に不良と対峙するライオンの着ぐるみを着た人がいた。

「やんのかコラ!!」

着ぐるみの人がかかってこいという感じで構えており、不良は殴りにかかった。拳を華麗に避けて、左アツパーを決めてKOした。不良は気絶して、その場で放置することになった。

「あの人凄いわね」

「綺麗な左アツパーだった。私もイリヤを守るために身につけないと」

「地味に恐ろしいこと言わないで美遊!!」

それにしても綺麗な左アツパーだったな。ん？あの着ぐるみの人、こつちを向いた途端態度が変わってないか？まるで知り合いを見たような……

(ちよ、ちよつとなんで奨真がいるのよ!!あと楓子までいるじゃない!!しかも今の私着ぐるみの中は下着のみなんだけど!!) ↑オルタ

「と、とりあえず移動しましょうか」

楓子の言う通り、まずは移動だな。

第15話 着ぐるみの中の人の正体

アイリさんが帰ってくるまでいろんなところを回った俺たちは、フードコートで休憩をしていた。一番気になるのはあの着ぐるみの人がずっと俺たちの跡をつけてることなんだよな。

(気づいてないわよね!?!私だつてこと気づいてないわよね!?)

かなり焦ってるみたいだな。顔は見えないけど、なんとなくわかる。

「私喉乾いちやつたなあ。ちよつと自販機まで行ってくるね!」

「あ、クロエ!一人で行くな!」

飲み物を買いに自販機に一人で行くこうとしたクロエを追いかけて、その場から離れ

た。追いついて、二人で自販機で飲み物を買ってから、みんなのところに戻ろうとする
と、見覚えのある後ろ姿と見たことない後ろ姿が見えた。

「白雪？」

「へっ？」

「お嬢？どうかしましたか？」

やっぱり白雪だ！っともう一人は？

「白雪、その人は？」

「あ、紹介します。こちらは」

「自分で自己紹介をしますよ。俺は烏野蓮。白雪お嬢の護衛をしている」

「お、お嬢？」

「昔からの友人なんです、何故か私とサツちゃんのことをお嬢と呼ぶんですよ」

「へえ」

「私もひとつ聞いてもいいですか？その子はいったい……」

白雪は視線を落として見ていたのはクロエのことだった。俺はこの子のことを軽く紹介した。

「この子のはクロエ・フォン・アインツベルン。うーいういの友達だ」

「うーちゃんのですか、可愛らしい子ですね！」

「ありがと♪あ、早く戻らなきやみんな心配してるわ」

「そうだな。じゃあ白雪、護衛さんとデート楽しめよ！」

「デ、デート!?!」

俺は白雪をからかってから、みんなのところに戻りにいった。かなり顔を赤くしていたな。

「デートじゃないんですが……」

「そうです！私は奨真さんとデートしたいのです！」

「地味に傷つくんですけど」

「はわわ！ごめんなさい！悪気はないんです！」

「悪気がない分余計に傷つきます……」

「あ、帰ってきた！」

「遅かつわね、何かあったの？」

「たまたま白雪と会ってな」

「おいお前！きつきからずつと俺らの後をつけてたよな！何が目的だ！」

突然タツコの声が聞こえたから、そっちを向くと俺たちの跡をつけていた着ぐるみの人にのしかかるタツコがいた。そしてタツコは着ぐるみの頭の部分を勢いよく引つ張ると、中からまたまた見覚えのある人が出てきた。

「お、オルタ!？」

「おおー、顔色悪」

「も、元々よこれは！」

「タツコ、とりあえず離れるんだ」

タツコはオルタから離れると、オルタもようやくといった感じで立ち上がった。

「ば、バレちゃしようがないわね！私はここでアルバイトをしてるわ！」

「いや、知ってるから」

「せっかくなつかよく決めたのに邪魔しないでよ!!」

「あはは……」

「な、なんかすまん」

「あとね！そのガキンチョのしっけなつてなすぎすぎよ!!」

オルタがイライラしながら俺の方に近づくと、オルタの後ろからタツコが思い切り飛び蹴りをした。うん……たしかにしっけがなつてないな……。

「え、ちよ、ちよっ!?!」

もちろんオルタはバランスを崩した為、俺が抱えることとなった。

「大丈夫か？」

「え、ええ、だいじょ……う……ぶ……」

オルタはなぜか目線を下に向けていた。

(これ抱えられてるのよね……。それで私今下着のみよね……。いや……。いや……)

「いやああああ!!!
!!! 触るなああああ!!!」

「なんでだああああ!!!
!!!」

俺はオルタの回し蹴りをまともに食らって吹っ飛んでしまった。加速世界でもないのにこんなに吹っ飛ぶとは思わなかった……。

「奨真君!？」

「こ、この女怖え……」

「はあ……はあ……」

楓子 s i d e

奨真君が吹っ飛んだ……。と、とにかく奨真君の所に行かなきゃ!

「だ、大丈夫!？」

「だ、大丈夫……じゃない……」

「肩貸すから捕まって」

奨真君に私の肩を貸して、オルタのところに向かった。オルタはまだ興奮していて、ういういに止められていた。

「お、落ち着いてくださいなのです！」

「タツコ!!早く謝りなさい!!」

「お、やるかやるか!俺と勝負するか!」

「何煽ってるのよタツコ!!」

「コラッ!オルタ大人気ないよ!」

「だ、だってこのガキンチョが！つて奨真……」

オルタが奨真君をみると、急に大人しくなった。多分さつき思い切り蹴飛ばしたから申し訳なく思ってるのね。

「その……悪かったわ……。ちよつと頭の中が真っ白になっちゃったから」

「き、気にするな……」

「あと、ちよつとお願いがあるんだけど……」

お願い？ いったい何だろう？

そう思っていると、オルタは後ろにいるタツコちゃんのを頭を片手で掴み、私たちに見せてきた。

「このガキンチョ本気で殴っていいかしら？」

「いいい、痛い痛い!!」

「もちろんダメよ」

「ぐぬぬ……」

頑張つて怒りを抑えてるわね……。そんなにタツコちゃんにいじり倒されたのかな
……。

「はあ……まあいいわ。私は仕事に戻るから、残り1時間、楽しんでいきなさい」

「お、おう……」

オルタはそう言って去って行ったけど……。大事なものを忘れてる気がするんだけどなあ……

ま、いつか♪

楓子 s i d e o u t

オルタ s i d e

「ああああ!!! 着ぐるみの頭の部分忘れたああああ!!!!」

オルタ s i d e o u t

奨真 s i d e

あれから1時間経って、遊園地の駐車場でアイリさんを待っていた。すると、トテとアイリさんが走ってきた。

「ご、ごめんなさい！待たせちゃったわ！」

「いえいえ。あ、ドレス試着体験はどうでした？」

「すっごくよかったわ！楓子ちゃんも今度行ってみるといいわ！」

「それじゃあ、そうします！」

楓子のドレス姿か……

『奨真君、似合ってるかな？』

『ああ、凄え似合ってる』

『よかった。ふふ、明日から夫婦ね』

『そうだな』

『これからもよろしくね。あ・な・た♪』

「ゴフツ！」

「しよーにいい!?!」

想像したら……鼻血が……。

「ママ！早く帰らなきゃ、奨真さんが大変なことになりそうな予感が!!」

「それじゃあ帰ろっか♪」

結局俺は車の中で気絶したように眠って、楓子に心配されることとなってしまった。

奨真 s i d e o u t

ジャンヌ s i d e

ふう……：トラブルもなく終わってよかったですね！奨真君たちはオルタと出会えたのかな？

「つてオルタ？何してるの？」

「姉さん、見ての通り着替えてるんだけど？」

「それは見ればわかりますが、あなたまさか下着のみで着ぐるみ着てたんですか!？」

「しよ、しょうがないじゃない!!暑かったんだもん!!姉さんはノースリーブに白衣だけで終わりだけど、私はこのクソ暑い中、着ぐるみを着るのよ!!」

「それでも何かあつたらどうするんですか!」

「全くもつてその通りですぞ!いくら着ぐるみを着ていても、そんな姿じゃまるで歩く痴女じゃないですか!」

.....ん？

私は急に聞こえた声に反応して振り向くと、何故かジルが扉の前で立っていた。

「ジル？何であなたがここに？」

「もちろんお迎えに来たのです！職員さんに事情を説明すれば、すんなりと通してくれました。そしてここにいと教えられ、こうして中に入ってきました」

「死ねええええええ！！！！」

「何故ええええええ！！！！」

私とオルタは見事なコンビネーションで、ジルの飛び出した目玉を突きました。

第16話 アルトリアの苦勞

皆さん、お久しぶりです。アルトリア・ペンドラゴンです。突然ですが、皆さんはどんな女性が理想ですか？なぜそんな事を聞くかって？理由はですね……

私の周りには巨乳が多いからです!!皆さんと比べれば私なんてちっぽけすぎます!!特に楓子とジャンヌと美早!この3人は大きすぎて注目を浴びすぎです!だからこれを機に男性陣に聞きたい!皆さんはどんな女性が理想ですか!!

「1人で何を喋ってるのだ?」

「い、いえ、なんでもないです」

黒雪に聞かれてましたか……。まあいいです。今話しかけてきたのはいつも黒の服を着ていて、同じ胸の寂しい仲間、黒雪姫です。

「おい、何か失礼な事を考えたな？」

「気のせいです。あ、目的地に着きましたよ？」

「全く……。何故私が合コンなど……」

「こちらのセリフです、私は巻き込まれた側ですから」

そう、私は巻き込まれた側です。なんで私が合コンなど……。そして今店内に入ると、黒雪の友人と思われる人が先に席に座っていた。

「あ、姫！こつちこつち！つとそちらの方は？」

「アルトリア・ペンドラゴンです」

「アルトリアさんですね。私は若宮恵です。今日はよろしくお願いしますね！」

そして私と黒雪は席に座ると、男性陣がやってきた。

「おお！かわいい子ちゃんだらけじゃん！」

「好みの子いるかなー？」

「ま、まあまあ」

「誠君！」

「恵、知り合いか？」

「ええ！私の友人です。そして他の人たちはそのまた友人です」

「木瀬誠です」

「俺小池和志！よろろ！」

「兵藤慎二！よろしくー！」

「アルトリア・ペンドラゴンです」

「黒雪姫」

「若宮恵です！」

自己紹介も終えて、まずは話し合いですね。

20分経過しましたが、その……誠は普通なのですが……。

「連絡先交換しよーよアルトリアちゃん！」

「あ、ずりー！俺も俺も！」

この2人はチャラすぎます。私はこのような男性は苦手です。というか何故私ばかり……

「それはできません」

「いいじゃんー！」

「あ、ごめん、ちよつと席を外すよ」

「私もちよつと外すね」

「誠と恵はどこかに行つてしまいましたね。黒雪は吞氣に水を飲まずに私を助けてください！」

「あの恵つて子可愛かったなあ！」

「もうちよつとだけ胸欲しかったけどなあ」

「ピクッ」

何故だろう、今の単語に私と黒雪は反応してしまいました。

「お前はやつぱり？」

「もちろん巨乳さ！男のロマンだぜ！！」

「わかるわかる！！貧乳は罪だもんな！」

イラつとききますね……。竹刀があれば思い切り仕留めてますが……。

「おい」

「んっ？」

「貧乳は罪と言ったな。私に喧嘩を売ってるのか？」

黒雪!:

「いや喧嘩売ってるつもりはないさ。でもなあ」

「何が言いたい？」

「世界中の男は胸の大きな女性が好きなんだよなあ」

カッチーン、もう我慢の限界です！ここでこの変態どもを成敗してくれる！！

「胸胸胸！！さつきから胸ばつかうるさいですよ！！貧乳がなんなんですか！！悪いんですか！！私たちも好きでこんなサイズではないのですよ！！それもわからんと言いたい放題言ってる！！もう帰ります！！行きますよ黒雪！！」

「えっ!?ちよちよ!!」

黒雪の手を引いて店から出ようとすると、途中で恵とすれ違いましたが、私たちはそのまま店の外に出ていった。

「怒ってたね……」

「そう……だね……。たぶん僕の友達が原因だろう……」

「……はあ……」

「そんなことがあったんですか？」

「ええ！だからタクム！私のストレス発散の相手をしてもらおう！」

私は梅郷中の剣道場を借りて、タクムと向き合っていた。なぜ借りたか？私はこの生徒ではないからです。

「ストレス発散の相手をできるかどうかはわかりませんが、剣道なら相手をできます！」

「いきます!!やあああ!!!」

私は突進して竹刀を横に振りかざした。タクムは私の攻撃を竹刀で流し、上手く回避した。だが、それは計算の内です！流された竹刀を今度は逆方向に振りかざした。それは防げなかったのか、胴にはいった。

「痛たたたた……。さすがはアルトリアさんです」

「これくらいでへばってもらっては困ります。さあ、まだまだいきますよ！」

「は、はい」

それから1時間ほど、何度も打ち合った。ですが………少々やり過ぎてしまいました………。強くやり過ぎたせい、タクムはへ口へ口になっていた。

「その……タクム……少々やり過ぎてしまいました」

「い、いいですよ……。僕もいい経験ができましたから」

「立てますか？」

「はい、なんとか」

「おーいタクー！ 迎えに……きた……ぞ？」

ハルユキがきましたね。私たちを見た途端を引いた顔をしていましたが。

「何があつたんですか？」

「実はかくかくしかじかで」

私は今まであつたことを全て話しました。

「へ、へえ……、アルトリアさんも大変ですね」

「それで、2人に聞きたいのですが」

「はい？」

「お二人はやはり、胸の大きな女性が好みですか？」

「へっ？」

私がそう聞くと、2人は固まってしまいました。

「そ、そんなわけないじゃないですか！」

「そ、そうですねよ！」

「本当ですか？」

「「本当です!!」」

「それならよかった……」

「ほら、帰りましょう！アルトリアさんの大好きな夕飯が待ってますよ！」

「わかりました！」

私は微笑み、3人で学校を出た。

一週間後……

「と、寿也！ひゃん！ダメ！そこは！」

「いいじゃん！もつと触らせてよ！」

「寿也！マシユお姉ちゃんが困ってるでしょ！！」

私はたまたま見てしまった。マシユが寿也に胸を揉まれてるところを……しかも公園で……。特に男の人はマシユの胸をガン見していた。やはり……やはり……この世は胸なのか!!!

第17話 英雄王

加速世界で俺はアーチャーに鍛えてもらっていた。鍛えるというより簡単な模擬戦だ。もちろん勝ち目はないと思っているが、俺は同じ戦闘スタイルのアーチャーと戦って、戦闘スタイルを研究する。

「せやああああ!!!」

「甘い!!」

「そうくると思つたぜ!」

アーチャーに軌道をずらされたのをうまく使い、足を引つ掛ける。予想外だったのか、アーチャーはバランスを崩し、それを狙いにいった。だが、アーチャーはそれをうまく対応し、手を地面について後ろに飛んだ。着地する場所に狙いを定めてガンプレー

ドを投げた。

「っ!?!」

「決まった!」

「ロー・アイアス!!」

「何!?!」

アーチャーが何か叫ぶと、紫色の透けた盾のようなものが出てきた。ガンブレードはそれに当たると簡単に跳ね返り、地面に突き刺さった。

「惜しかったな」

「決まったと思ったんだがな」

「なかなかよかったぞ。かなり成長している」

「ありがとう」

「さて、私は少し用があるから失礼するよ。すぐに帰ってくる、君はゆっくりしていたまえ」

「わかった」

俺は地面に寝転び、体を休めることにした。あの盾、俺も心意で使えるのかな……。

「何事も訓練だな」

そんなことを言っただけで俺は目を閉じた。その時、俺は何か来るのに気づき、咄嗟にその場から離れた。

「何だ!?!」

「ほお……今のを避けるか」

俺がいた場所はいくつかの剣が突き刺さっていた。これは……アーチャー？ いや、声が違う。

「誰だ!？」

「ふん、貴様に名乗るわけがなからう。図が高いぞ!!」

「人？英霊級エネミーか!」

「貴様は聖杯を手に入れるためには邪魔でなあ。だからここで退場してもらおう」

そう言ってエネミーの背後から無限の剣が矢のように降ってきて俺に襲いかかってきた。

「この!!」

ガンブレードで弾くが、数が多すぎるため、全て弾くことはできず、足や体に突き刺さった。

「くっ……………」

「フハハハハ!!無様よなあ!」

「聖杯が欲しいなら加速研究会を襲えばいいだろ!!」

「それは最初に考えたが、我にとって最も脅威なのはお前だと判断した」

「何っ!?!」

「だから先に貴様を始末するとっ!?!」

「そこまでだ！」

振り向くと、そこには矢を構えたアーチャーがいた。

「貴様……王に刃向かうとどうなるかわかっておるのか？」

「ふん、知らんな」

「貴様も始末してくれる!! 王の財宝!!」

ゲート・オブ・パピロン

「エイト! 手伝え!!」

「ああ!! ジ・イクリップス!!」

俺は心意技、アーチャーは投影した剣で対抗した。だが、いくら弾いても終わる気配はまったく来なかった。

「エイト！このまま突っ込むぞ！」

「ああ!!」

俺は剣を弾きながら、エネミーに突っ込みにいった。そのまま剣を振り落としたが、最後まで振り切れなかった。

「な、何だこれ……」

「天の鎖、惜しかったな」

「後ろがガラ空きだ!!」

アーチャーは後ろから襲うが、エネミーは剣を取り出し、アーチャーの攻撃を受け止めた。

「ふん、甘いな。雑種」

くそー！この鎖のせいで動けない！

「これで邪魔者は消えた」

「今ここで俺を倒してもバーストポイントが減るだけだ」

「なら何度でも殺せばよい。さらばだ……っ!？」

俺は覚悟したが、辺りの景色が一斉に変わった。これはアーチャーの技だ。

「ふん、雑種が」

「その鎖に無限の武器、貴様は英雄王ギルガメッシュユだな」

「ほお、我を知ってるのか。まあよい」

ギルガメッシュと名乗るエネミーはアーチャーのほうを向くと、鎖は消えて俺は地面に落ちた。

「エイト、今すぐここから逃げろ」

「んなことできるかよ!!」

「いいから逃げるんだ!!今の君ではこいつには勝てない!!私が足止めするから早く!!」

「足止めか?なら俺も手伝うぜ」

「っ!?!誰だ君は!」

「黒くて糸を操るアバター。デスパペットか!?!」

「俺の糸は簡単には切れない。こいつを止めることなら出来るぜ」

「しかし！」

「ごちゃごちゃの喧しいぞ！」

「なめるな!!」

デスパペットは糸をふつてきた剣にくくりつけ、他の剣を一斉に弾いていた。

「エイト、お前は白の王……お嬢に知らせてこい！」

「……………絶対死ぬなよ」

俺はそう言ってその場から走り出した。

絶対……絶対にあいつを倒せる力を身につけてやる!!

「行つたか」

「もう面倒だ。この一撃で終わらせる」

「何？」

「来るぞ君！」

パペットとアーチャーは咄嗟にギルガメッシュから離れた。ギルガメッシュは後ろからある剣を抜き、飛んだ。

「起きろエア」

「まずいぞ……君！私の後ろに回れ!!」

「っ!?!」

パペットはすぐにアーチャーの後ろに回り込んで攻撃に備えた。

「エヌマ・エリシュ!!!」

強烈な一撃がアーチャーたちに襲いかかるが、アーチャーも防ぐために対抗した。

「ロー・アイアス!!」

だがギルガメッシュのほうに力は上で、盾は一瞬で壊れて2人に襲いかかった。2人は一瞬で吹き飛び、場所は崩壊して、そこには誰一人いなかった。

第18話 伝えること

現実世界に帰ってきた俺は、今後のことを考えた。俺を始末しにきたエネミー、英雄王ギルガメツシユ。今のままでは確実に勝てない。どうしたら……。

「奨真君？」

「っ!?! 楓子か、ビックリさせるなよ」

「失礼ね、奨真君が勝手にビックリしたんじゃない。それより、何かあったの？」

「こういう時の楓子はすごく鋭い。今嘘をついてもバレてしまう。だから俺はさつきまであったことを話した。」

「そう……そんなことが………奨真君」

「ん？」

「もう無制限フィールドに行っちゃダメ。そのエネミーに狙われてやられるだけだわ」

「そんなわけにはいかない！俺はバーストリンカーだ！」

「加速なら対戦でも出来るわ。だから私たちがエネミーを倒すまで絶対にダメ！」

「ダメだ！アーチャーも生きてるかわからないんだぞ!!あんな化け物みたいなやつに勝つなんて無茶だ!!」

「無茶でもやらなきゃダメなの!!」

「……………そうか…………、勝手にしろ…………」

俺はそういつてリビングを出て、外に出かけることにした。

楓子 s i d e

奨真君には悪いけど、これも奨真君の為だわ。みんなを集める必要があるわ。私はまずサツちゃんに連絡を取ることにした。

『楓子か？どうした？』

「サツちゃん、今すぐみんなを集めて。場所は代々木公園だから」

『……………何かあったのか？』

「そのことについて話すから」

『わかった。連絡を取っておこう』

アーチャーを生死不明まで追い込んだエネミー。危険度はかなり高いけど、私たちがやるしかない。奨真君を守るために！

楓子 side out

褒真 s i d e

俺は家の近くの公園のベンチに座って、今後のことを考えた。どうすればいいんだ。楓子たちを止めなきや絶対にギルガメツシユにやられる。でも……………。

「隣いいかな？」

「え、あ、はいどうぞ」

突然女性に声をかけられて、俺はベンチの端に座った。あ、そうだ。パペットが白雪にギルガメツシユのことを伝えてほしいっていつてたっけ。とりあえずメツセージを送って、空に顔を向けた。

「何かあったの？」

「えっ？」

「君を見てると何かあったんだなあって思ったんだけど、もしかして当たってた？」

「まあ……はい」

「もしかして彼女と喧嘩？」

「そんなんじゃないですよ。ただ、このままでいいのかなって思いまして……。俺が何もしなかったらよくないことが起きそうで……。でも、それを伝えたくても……。なんて言ったらいいのか。また心配をかけそうで……」

「ぶつからなきゃ伝わらないことだってあるよ」

「えっ？」

今のは……どこかで聞いたことが……。

「昔友達から教えてもらった言葉なの。自分がどれだけ真剣でも何もしなかったら伝わらない。だからこそ、ぶつかって自分の気持ちを相手に伝えるの」

「その友達って……紺野先生ですか？」

「もしかして木綿季の知り合い？」

「知り合いというか病院でお世話になった人です。あなたも先生と知り合いだったんですか？」

「ええ、木綿季には感謝してるわ。あ、自己紹介がまだだったね。私は桐ヶ谷明日菜、高校の教師をしてるわ」

「橘奨真です。高校生です」

「ふふ、じゃあどこかでまた会うかもね。それじゃあね」

「は、はい」

明日菜さんは立ち上がり、公園を後にした。先生の知り合いか。そんなことを思っていると、白雪が俺に気がついたのか、こっちまで走ってきた。

「白雪？」

「エネミーが奨真さんを狙ってるって本当ですか!？」

「ああ、その事なんだけど、楓子はギルガメツシュを倒すまで無制限フィールドには来なくなって言ってきたんだが、俺はそれを止めようと思う」

ぶつからなきや伝わらないことだってある。確かにその通りだ。なんとしてでも、楓子たちを止めなきや！

「それなら私に任せてください！皆さんを説得してみせます！」

「白雪だけに任せるわけにはいかない。これは俺自身の問題でもある」

「ですが、エネミーに狙われてるなら無制限フィールドに行かないほうが！」

「わかってる。でも、俺自身が言わなきや意味がないんだ」

「……………わかりました」

「心配してくれてありがとうな。よし、今すぐ無制限フィールドに行くぞ！」

「はい！」

「アンリミテッドバースト!!!」

第19話 1人を守るために

加速世界に来た俺はみんなを探すためにホームから出ようとした。その時、この世界での俺とレイカーの子供、ジャックに声をかけられた。

「おとうさん、おかあさんのところに行くの？」

「ああ」

「おかあさんにも言ったけどね、英雄王に勝てないと思うよ」

「いや、勝てるよ。俺なら勝てる」

「なんで？」

「ギルガメッシュも俺と似てるからだよ」

「そんな理由なの？」

「ああ、じゃあ行ってくるよ」

「いつてらっしゃい」

扉をあけて外に出ると、すでにコスモスが待っていた。俺は覚悟を決めるために両頬を叩いて気合を入れた。

「それじゃあ行きませうか」

「ああ」

楓子 side

私たちネガ・ネビユラスとアツシユ、レイン、レパードは英雄王ギルガメツシユを倒すために集まり、探索をしていた。

「英雄王って言うぐらいですから相当強いですよ。そんなエネミーに勝てるんですか？」

「珍しく弱気だなクロウ」

「先輩は怖くないんですか？」

「怖くないっていったら嘘になる。だが、みんないるんだ。絶対に勝てる」

そうよ。ここにはみんながいる。みんなでいけば勝てないわけがない！

「貴様らが探してるのは我か？」

「「「「?!」」」」

声がする方に振り向くと、黒いジャージを着た金髪の人が立っていた。さつきまでのいる気配がなかったのに!?

「先生、もしかしてこの人が……」

「あなたが英雄王ギルガメツシュね」

「いかにも。さて、貴様らのはあの茶色の雑種の仲間か」

もしかしてエイトのことじゃ……。やっぱりこの人がギルガメツシュ!!

「みんな！一斉にかかれ!!」

ロータスの指示で一斉に攻撃を始めた。ギルガメッシュの周りを囲んでいたから逃げ場はないわ!!

「甘いわけ!!」

「[[[[[[?!]]]]」

急に体が動かなくなった……? 私は手足を見ると鎖で縛られていた。私だけじゃなく、みんなも鎖で縛られていた。でも、この鎖はどこから?

「考えが単純すぎたな。貴様らはまだまだだ」

そう言ってギルガメッシュはどこからか剣を取り出した。いったいどこから取り出してるの……。

「フレイムボルテクス!!!」

「なにっ!？」

メイデンを縛り忘れたのか、完全に不意をつかれたみたいだった。けど、惜しくもギルガメツシユは避けてメイデンに剣の雨を降らせた。

「きゃあああああ!!!」

「雑種ゴトキが……まあよい。貴様らにも同じ目に合わせてやろう。王ゲート・オブ・バビロンの財宝!!」

「!!!」
「!!!」
「!!!」

メイデンと同じように剣の雨が降ってきた。鎖に縛られてるせいで身動きが取れない私たちはまともに喰らい、全員瀕死状態になってしまった。

「みんな……すぐに回復させてあげる……から」

「我がさせると思うか？」

「あああああああ!!!」

「ベル!!」

ベルが回復させようとした瞬間をギルガメッシュは見逃さない。剣でベルの腕を強化外装ごと切り落とした。

「ここまで強いなんて……私たちはまだ何もできてないのに……」

「雑種ごときが我と同等に戦えると思っておるのか？さて、貴様らを始末すればあいつもくるだろう」

ダメ……今ここで私たちがやられたら、エイトを探すためにこの世界を壊すかもしれ

ない。エイトはこの世界には来ないけど、世界が壊されるのは避けないと……。

「まだ……よ……。まだ……行かせない……」

「ほお？まだ起き上がるか？その根性は褒めてやろう。だが、もう終わりだ」

「誰が終わりだつて？」

突然声が聞こえて、ギルガメッシュの足元に火がついた。ギルガメッシュは避けて、声のする方を見た。私もつられて見ると、そこには旗を持ったダークがいた。

「なんでここに……？」

「あれだけ派手にやってたら嫌でもわかるわよ……」

「貴様はなんだ？」

「何って知り合いだけど？この状況でそんなこともわからないの？馬鹿なの？」

「貴様……我を怒らせたな!!」

「ダーク!!逃げて!!」

束になつても勝てなかった相手にダーク1人だけで勝てるわけがない!このままじゃ……!—

「舐めないでよね!!」

「ほお……、なかなかやるではないか」

「これならどう!」

ダークは剣を操り、ギルガメッシュの上に黒い槍を作り出し、そのまま降らせた。ギルガメッシュはそれに気づき、また剣を出現させて、全て弾いた。

「ちっ！厄介な力ね。宝物庫みたいにバンバンと取り出して！」

「貴様鋭いではないか。そうだ。我は宝物庫に無数の武器を内包しておく。さて、褒美をやるう」

ギルガメツシユは宝物庫から私たちを縛った鎖を出して、ダークの手足を縛った。ダークは必死に抜け出そうとしているけど、できないみたいだった。

「我の手で始末してやるう」

「少しずつダークに近づき、剣を突き出すギルガメツシユ。私は止めるために立ち上がったけど、痛みが襲い、バランスを崩して倒れた。このままじゃダークがやられる!？」

「ダメエエエ!!!」

「ベネデイクト!!」

「ちっ！さつきからどいつもこいつもトドメの瞬間で邪魔しよって!!」

「この技って……コスモス？それと後ろにいるのは……………」。

「エイト……………」？」

「巻き込んでしまつてごめんな。ここからは俺の戦いだ」

「なんで？きちやダメつて言ったのに……………なんで!!」

「あとで罰でもなんでも受ける。だから今はそこでジツとしていてくれ」

「エイト……………。あなたはなんでいつも……………自分から危ない目に……………」。

「きたか……………雑種」

「お前の目的は俺だろ。今すぐダークを離せ」

「貴様がきたからもうこいつには用はない」

ギルガメツシユは鎖を宝物庫にしまい、解放されたダークはその場に倒れた。

「ギルガメツシユ、アーチャーとパペットはどうした？」

「ふん、あいつらは死んださ。糸を使う雑種は生きてるかもしれないがな」

「そうか……。ギルガメツシユ……。俺を本気で怒らせたな」

アーチャーが死んだと言われて、エイトの怒りが溜まっていつていた。それは激しい怒りとは違い、静かな怒りだった。そして2人は向かい合い、静かに構えた。

第20話 unlimite blade work

S

『君は自分の技のことをまだなにも知らない』

『どういうことだ？俺は知っていたつもりなんだが』

『その答えを見つけるのは君の役目だ。私が教えても意味がないからな』

『答え……か……』

アーチャー、俺は見つけたよ。自分なりの答えを。そうだ、俺は勘違いしていた。俺の技は武器を作るだけじゃない。自分の心を形にすることだった。

体は剣で出来ている。血潮は鉄、心は硝子。幾たびの戦場を越えて不敗。ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし。担い手はここに独り。剣の丘で鉄を鍛つ。ならば、我が生涯に意味は不要ず。この体は、無限の剣で出来ていた!!

「u^アn^ンl^リi^ミm^テi^ドt^ドe^ド b^ブl^レa^イd^ドe^ド w^ワo^クr^スk^スs^{!!}!!」

技を発動して、辺りの景色を変えた。そう、俺の最強の技の固有結界だ。ギルガメツシユは驚いていたが、アーチャーの時と同じ技だからすぐに落ち着きを取り戻した。

「勘違いしていた。俺の技は剣を作るだけじゃない。剣を無限に内包した世界を作ることもできるんだ」

「固有結界か。それで、こんなものを作って何ができる?」

ギルガメツシユは剣を放ってきたが、俺は辺りに突き刺さっている剣を手を使わずに自在に操り、全て弾いた。

「なっ!？」

「驚くことじゃない。この結界では俺の思い通りに剣を操ることができる」

「ふん、偽物の分際で」

「そうだ。この固有結界のものは全て偽物だ。だが、偽物であって本物でもある。そう、この技そのものが矛盾した技。それが俺の最強の技だ。お前が本物だというなら、俺はこの技でお前を叩き落とす。いくぞ英雄王、武器の貯蔵は十分か？」

「……………思い上がったな、雑種！」

ギルガメツシユはまた剣を放つが、俺は剣を手に取り、弾いていった。少し弾くと剣

は壊れるから、移動しながら弾き、剣がなくなればまた拾う。

「くっ！」

一歩下がると、それに追い打ちをかけるように剣が降ってくる。だが、俺も剣を同じように放ち、全て弾く。

「何故、雑種ごときの剣が……」

「わからないのか、千を超える武器を持つお前は、エネミーの中でも頂点に立つだろう。だが、お前は王であって戦士じゃない。一つの武器を極限まで使いこなす道を選ばなかった。半端者だ!!」

「ぐっ……贗作を作るその頭蓋、一片たりとも残しはせん!!」

そうだ。こいつは一つの武器を使いこなさなかった。もちろん俺も複数の武器を扱う。けど、俺とギルガメツシユには大きく違う点が一つある。それは、俺が作成という

技を使いこなしたことだ。それが俺とギルガメツシュの大きな違いだ。

「ちっ！ちよこまかと目障りだ！」

ギルガメツシュは発射口を増やし、さらに剣を放つ。俺も対抗して剣を放ち、一つ一つ確実に落としていった。少しずつギルガメツシュに近づき、剣を振りおろした。ギルガメツシュは剣を取り出し、俺の剣を受け止めた。

「はあああ!!」

「くっ……バカな……この我が……このような贋作に……」

「言っただろ！この技は偽物であつて本物。矛盾した技だつてな！そしてお前が相手なら、先に剣を用意してる俺が、一步先を行く!!」

力一杯剣をおろし、ギルガメツシュの持っていた剣を砕いた。

「おの……………おのれおのれ!おのれ!!」

頭に血が上ったのか、剣筋が荒く軌道がわかりやすくなった。ギルガメツシュの剣の上に弾くと、その剣は俺の頭上に降ってきて、他の剣も降ってきた。俺はすぐに反応して後ろに飛ぶと、ギルガメツシュはまた剣を放つ。

「おのれ!!貴様ごときに本気を出さねばならんとはな!!」

遂に本気を出してきたギルガメツシュ。発射口はさっきの2倍以上になり、俺を襲った。だが、俺は自分の手にある剣と、周りにある剣で全て弾く。

「うおおおおお!!!」

一気に近づき、距離を縮める。それに焦ったのか、ギルガメツシュの剣の数が多くなっていった。俺は剣が降ってくる直前でハイジャンプレッグで空高く飛ぶ。ギルガメツシュは少し遅れて俺の存在に気づき、上を見た。その時の俺はアーチャーが使っていた盾を作り出した。アーチャーのものには劣るが、少しは防げるだろう。

「ロー・アイアス！」

「ちっ！落ちろおお!!」

全ての攻撃を盾で防ぐが、盾に限界がきて壊れてしまう。だが、俺は勢いを維持して、またアーチャーが使っていた武器を作る。白い剣を作り出し、ギルガメツシュのところ
に落ちていく。

(まずい、エアを使わなくては！)

俺はギルガメツシュが急いで取り出したものに嫌な予感がして、ギルガメツシュの腕
を思いきり切り落とした。そしてそのままもう一つ黒い剣を作り、振りかざす。

「認めよう……………今はお前が……………強い!!」

「ギルガメツシュウウウ!!!」

ギルガメツシユは後ろへ飛ぶが、俺の剣のほうが早く、ギルガメツシユの胴体を切り裂いた。それと同時に技の効果が切れて、元の世界に戻った。

「お前はバーストリンカーを舐めすぎていた。それがお前の敗因だ」

第21話 死闘の終わり

何があつたの……？どうしてギルガメツシュが膝をついてるの？もしかして……エイトが勝つたの？

「我は舐めすぎていたのかもな……。がはっ……………」

「そうだ。それがお前の敗因だ」

「ふっ……………我の負けだ……」

ギルガメツシュはそのまま倒れて動かなくなつた。消滅しないということは死んではいないのね。今のうちにとどめをしたほうが……。

「まてレイカー」

「今のうちにとどめをしたほうが」

「いや、こいつはもうそんなことをしないだろう」

「どうして？」

「……………勘かな？」

「……………はあ。きちやダメって言ったのにここに来て…………」

「それでも……………それでも俺はここに来なきやダメだったんだ」

「ばか……………心配したんだよ……………。もしギルガメッシュに負けたらどうしようって…………」

「……………」

「帰ったらお説教だからね……」

「覚悟しておくよ……」

私はエイトに抱きつき、静かに涙を流した。顔を上げてエイトを見つめ、少しずつ顔を近づけた。エイトも顔を近づけて、もう少しで当たるところで……。

「コホンツ……。私たちを忘れているぞ？」

「うええええ!」

「あんたらの行動は見られないわ」

「先生らしいですね。エイトさんはとりあえず吹っ飛ば」

「ラブラブなのです!」

「あはは……なんか邪魔しちやってすみません師匠」

「熱々ですなあ!!さすがアニキ!!最高にシビレルウウ!!」

「でもすげえな。束になっても勝てなかったやつ相手に1人で勝つなんてなあ」

「凄かったの」

いつのまにか周りにはみんなが集まっていた。ダーク、アングル、メイデン、鴉さん、アツシユ、ルーク、カレンはエイトに声をかけていく。

「アングル、あとで覚えておけよ……」

「ギクツ……」

「ははは、いつも通り賑やかだな」

「えっ？」

私たちは声のする方に振り向くと、死んだと言われていたアーチャーが立っていた。その横には。パペットも一緒にいた。

「アー……………チャー……………？なんで……………」

「奇跡的に生き残れたという感じかな。心配かけてすまない」

「つたく……………生きてるならもつと早く来いよ」

「すまなかった、今まで気を失っていたのでな」

「お嬢……………心配をおかけしました」

「お、お嬢？」

「あっ!?! し、しまっ!?!」

お嬢?なんでパペットがコスモスのことを……?いつもコスモスのそばについているからそう呼ぶようになったとか。

「姉さんのことをお嬢と呼ぶ……。もしかして…」

「ロータス!ちよつとこっちに来い!!」

パペットはロータスの手を引いてみんなから離れていく。でもすぐに戻って来た。

「リアル割れになるところだったぞ」

「す、すまない。とにかく姉さんもよく知る人物だ」

「あっ!?!もしかして」

「お嬢!!」

「えっ!?!ちよつ、ちよつ!?!」

今度はコスモスの手を引いて離れていく。姉妹だからなのか、行動が一緒だわ……。パペットもまたお嬢って呼んでしまってるし……。そして戻って来た。

「もう隠しても仕方ないか。俺はロータスとコスモスの友人だ。また今度リアルで会いに行くから」

「へ、へえ……。先輩の友人……。今まで友人らしい人は聞いてなかったからなんか新鮮だなあ」

「クロウ?どういう意味かな?」

「へっ!?!い、いや変な意味じゃないです!」

「やはり賑やかだな。さて、こいつは私がなんとかしておこう」

アーチャーは気を失ったギルガメッシュを抱えると、その場を後にしようとした。けど、何か思い出したのか、こつちをみた。

「そうだ、そろそろ私の本当の名を覚えておこう」

そういえばアーチャーの本当の名前は誰も知らなかったわね。

「私の真名は」

ギルガメツシユとの死闘の次の日、私は奨真君と一緒に校舎の屋上でお昼ご飯を食べ、風にあたりながらゆっくりと過ごしていた。

「エミヤ……か」

「まさか衛宮君と同じ名前だったなんてね……」

「まあ偶然だろう……」

「どうかしたの？」

「いや……昨日の楓子の説教が……」

そういえば昨日は奨真君が帰ってきた後、すぐに説教をしたわね。数時間説教をしたせいか、奨真君は今日も疲れが取れてなかった。

「ご、ごめんなさいね。私もそこまでする気は無かったの」

「気にするな。悪いのは俺だからな」

「次の授業まで時間があるから、膝枕してあげるね」

私は正座して、奨真君の頭を膝の上に乗せた。奨真君の頭をそつと撫でると、奨真君は少しずつ瞼を閉じていった。

「疲れてるもんね。ゆっくり休んで」

私はゆつくりと顔を近づけて頬にそっとキスをした。

「ありがとう、大好きな奨真君」

第10章 聖杯復活後の加速世界

第1話 図書館デート

「図書館か……久しぶりに来るような……」

「そう？ 私はよく来るけど？」

「今はニューロリンカーの中に電子書籍があるだろ？ だからあまり図書館には来ないとか」

俺と楓子は今、渋谷の図書館に来ていた。今日は土曜日で学校もないから、ゆっくり図書館デートってところだな。

「こういうのもいいよ？ 奨真君もたまには読んでみたら？」

「そうしようかなあ」

いつもは電子書籍で読んでいるから、分厚い本を読むことはあまりない。俺とは逆で楓子はこういう本をよく読むらしい。

「あ、あった」

どうやらお目当ての本を見つけたらしい。楓子は本を取ろうとするが、高くて取れないみたいだ。流石にあの高さでは俺でも届かないな。何か踏み台のようなものがあったらいいけど……。

「これじゃあ取れないわ……」

「楓子、脚立を見つけたからこれを使え。下は俺が支えておくよ」

「あら、ありがとう！よいしょっ……」

楓子が脚立に上って、俺は脚立を抑えた。無事に取れたか気になって上を見ると、楓子の服装がミニスカートだからなのか、太ももが丸見えだった。

「よし、取れたわ！」

楓子の太ももがっ!?ダメだ!これは見ちやダメな気がする!!

「ありがとう!おかげで目当ての本が取れたわ!」

「そ、そうか。それにしても相変わらず凄い本の数だな」

「約10万冊はあるからね。これほどの紙の本は今では貴重ね」

10万冊って聞いた瞬間、俺は驚きが隠せなかった。これだけの本の中から目当ての本を見つけるのに苦労しそうだからだ。

「でもさ、紙の本ってやっぱり持ち運びが不便じゃないか？重いし」

「たしかに読むだけなら電子書籍の方がいいと思うわ」

読むだけなら楓子も電子書籍の方がいいみたいだ。じゃあ楓子が紙の本にこだわるのは他にも理由があるのか？

「でもね、私は本のデザイン、装丁、紙の質感、そして残された書き込みも全てが大切な情報だと思うの」

「デザインや紙質もか？」

「ええ、そういった部分には本の中身に対する出版側の思いが詰まっていたりするの。例えばこの本だけど、最初のページに筆者のサインが入ってるでしょ？これも本の中身に對する思いなのよ？」

「このサインがか？」

「奨真君だって、好きなアーティストからサインをもらうのは嬉しいでしょ？それと同じで、この本を買ってくれた読者に喜んでもらおうと思つて残したもののよ」

「なるほどな、たしかに買った時にサインが書かれていたら嬉しいな。でもそれだったら電子書籍でも買えばあるんじゃないか？」

「うーん、もちろんあるけど、やっぱり形として欲しいじゃない？」

「たしかに」

なるほど、楓子は紙の本には形に残るものが多いし、自分なりのこだわりがあるから好きなんだな。

「奨真君も読みたい本があれば取つてあげるよ？」

「い、いや！それだとまた目のやり場に……………あ」

しまった……つい口が滑ってしまった……。

「どういうこと？」

「それは……その……」

「もしかして……さつきも？」

「じ、事故だ！あれは事故だ！」

「えっちな」

「ええつと……」

やばい……何を言っても無駄になってきた……ここはもう認めるしか……。

「ふふ、冗談よ。奨真君になら何度でもみられても構わないし！」

「そ、それはそれでどうなんだ？」

「あそこの席が空いてるから早く行こ！」

「話を逸らしたな……」

楓子を取りにいった席に俺は座った。楓子は本を開くと、俺にも見えるように見せてきた。

「うわあ……こうやって見ると読むの大変そうだな。電子書籍だと分厚さとかないから全然気にしなかったけど……」

「そう？でもこの方がどれくらい読んだのかわかりやすくして私は好きよ？」

「俺には無理っぽいな……」

ほんと……楓子はよくこんな分厚いものを読めるな……。俺だったらギブアップしてしまいそうだ。

「ん? 『ゾーン』か……」

「何十年前の考え方だけど、アスリートの集中状態が極限まで高められた状態を『ゾーン』って呼んでたらしいわ」

んんっ!? 今度は楓子の胸が!?! 机の上に乗った楓子の胸の谷間が!?!

「でも、その状態に至るには脳をある程度コントロールする必要があったみたいね」

「へえ、まるで心意みたいだな」

「そうね。心意は現実世界というゾーンのようなものね」

「まあこのゾーンは知識よりも感覚で使うほうがよさそうだな」

「それは人それぞれだと思うよ？ 感覚よりも知識の方が使いやすかったり、感覚の方が使いやすかったり」

「そ、そうなのか？」

「そりやそうよ。人には誰だって得意不得意があるもの。それを工夫してどう使うかよ」

「なるほど、深いな」

「というかさつきから楓子の胸元が気になって集中できない!! 楓子は気づいてないのか!？」

「あれ? こんな本あったか？」

「あ、それは私が借りた本よ」

「楓子が？見た感じ絵本だけど……」

「単純に好きな作家さんだからね。久しぶりに読みたくなつて。」

「へえ、なんか可愛い絵だな」

「そうなの！このオバケちゃん！なんだかういういに似てて！」

「ふ、楓子？」

「もうかわいくて仕方ないのよ！それがまたお話の雰囲気とマッチしてて、最後には虜にならざるを得ないというか！」

「楓子落ち着けて、興奮しすぎだ」

「あら、さっき私の胸元をチラチラ見て興奮していた奨真君に言われたくありません！」

バレてたのかよ……。そういえば楓子はこういうのに鋭いもんな……。隠してたのが馬鹿みたいに思えてきた。

「気づいてないと思ってたの？」

「ま、まあな」

「奨真君が私をえっちな目で見るのに気づかないわけないじゃない！」

「なんで嬉しそうなんだよ……」

「だって、奨真君が私をそんな風に見てくれてるってことは私の体に興味があるってことじゃない!!嬉しいに決まってるじゃない！」

そこまで興奮するものか……。まあ楓子の言う通り、楓子の体に興味はあるが……。

「楓子は彼女だから、もちろん興味はあるけど……」

「あら？もしかして襲えないとか？奨真君って意外とチキン？」

楓子はそう言うと、俺を誘うかのように机に肘をつき、手を頬に当ててこっちを見つめた。まったく……言ってくれるな……。それならこっちにも考えがある。

「誰がチキンだって？」

「ひゃっ……」

俺は椅子ごと楓子に近づくと、手を楓子の腰に回して抱き寄せて、唇を重ねた。まだお仕置が必要だな。ここはこの図書館の中でも人気がない場所だ。そうそう人は来ないだろう。だから俺は腰に回してた手を楓子の胸に持っていく、そのまま2、3回揉んだ。

「んっ……」

「俺が本気になればこんなことだってできるぞ？ まあこの続きは家だな。ここは公共の場だ。こんなところでするわけにはいかない」

「そ、そんなこと言っつて私の胸を揉んだじゃない」

「ま、まあそうだけど、あれは楓子へのお仕置きというか……」

「それで、感想は？」

「……………柔らかかった」

「ふふ、よかった！ さあ、本を直して帰りましょう！」

「あ、ああ」

本を元の場所に直して、図書館を出る。そしてそのまま家に帰ったが、そのあとのことは語るまでもないな……。

第2話 2人の放課後

白夜 side

「さて、帰る準備もできたし、そろそろ行くか」

教室で帰る準備をし終え、俺は教室を出る。外にはマシユが迎えにきていた。言い忘れていたが、マシユは俺と同じ学校に通っている。学年は一つ下だ。

「遅かったから迎えにきました」

「悪い悪い、委員会の仕事が長引いてしまったな」

「そうなんですか？あ、そういえば今日はあきらさんは一緒に帰れないんですたよね？」

「忙しいとか言ってたな。確かあきらも委員会だったか？」

「さあ？もうすぐ院長さんが車で迎えにきてくれるらしいですから、いきましよう！」

「そうだな」

廊下を歩く俺たち。そのままグラウンドに出ようと思ったが、1人の男子生徒がマシユを呼び止めた。

「キ、キリエライトさん！」

「は、はい？」

「す、好きです！僕と付き合ってください!!」

「え、えーつと……」

マシユは告白され、戸惑っていた。どう返事するんだろうな。

「ごめんなさい。私あなたのことをよく知りませんので」

とても申し訳なさそうに謝ると、男子生徒は落ち込んでその場から去っていった。

「わ、私のどこを好きになったのでしょうか？」

「どこだろうなー？」

マシユ自身は気づいていないが、俺の学年ではマシユファンクラブというものが作られている。まあ活動内容は学校内でのマシユの盗撮とかだな。そのせいで先生に写真を没収されていた。ちなみに何故ファンクラブが作られたかという点、マシユの写真集を作りたかったそうさ。優しい、成績優秀、家庭科部の人気者、スタイルがいい、頼れる後輩といろんなスキルを持ったマシユだからこそ作りたかったと聞いた。

「あ、マシユちゃん！この間貸してくれたレシピ返すね！」

「あ、はい」

女子生徒は指をマシユの方に弾いた。多分レシピのデータをマシユのニューロリンカーに返したんだろう。

「とても参考になったわ！ありがとうございます！」

「お役に立ててよかったです」

「あれれ？マシユちゃんまた胸大きくなっただけ？」

「な、なってますん!!」

「ほんと？あ、白夜君はカップ数とか知ってるの？」

「えっ？知らないけど？」

「実はね」

「わあああああ!!! 恥ずかしいですよ!!!」

「じゃあ自分の口で言ってみなさいよー!」

「ううう………Eカップ………です…」

「らしいよー!」

「へ、へえ」

そんなに成長してたのか……。あきらが聞いたら落ち込みそうだな……。そんなことを思っていると、校舎の扉から誰かが走って入ってきて、マシユの後ろに抱きついた。そしてその手は胸に。こんなことするのって……

「マシユお姉ちゃん遅いよー！」

「ひゃん！」

「僕は小学校だから終わるのは早いんだよ！待ちくたびれちゃったよ！」

「わ、わかったから……はう！胸を触るのはやめて！」

「白夜君、いつもこんな感じなの？」

「まあ、そうだな」

「マシユちゃんも大変だね」

「呑気にそんなこと言っていないで……やん！助けてくださいよ！」

「わ、わかったよ。ほら、寿也、帰るぞ」

「疲れたからマシユお姉ちゃんおんぶしてー」

「はあ……はあ……おんぶだけだからね」

「鞆は持つてやるよ」

「ありがとうございます」

俺はマシユから鞆を受け取り、女子生徒に別れを言つて校門を出た。門の前にはもう車が停まっていた。俺は助手席に座り、マシユは後部座席に座った。

「今日は外食なのか？」

「ええ、たまにはそういうのもいいでしょう」

「たまには……ね」

その日の夜は孤児院のみんなで焼肉を食べに行った。特に喧嘩も起こらなくてよかった。それとマシユの焼き加減が上手すぎた。

そして車を孤児院に停めて、中に入る。

「さて、私はお弁当箱を洗いますね」

「ねえ、マシユお姉ちゃん。宿題わからないところあるの」

美奈がマシユのところへ宿題を持ってきていた。教科を見ると、俺の苦手な教科だった。低学年のものでも、苦手なものを教えるのは難しいからな。だからマシユに頼んだらう。

「俺がやっておくから教えてやってくれ」

「すみません、じゃああつちにいこつか」

俺は弁当箱を洗剤で洗い、食洗機に入れてニューロリンカーでボタンを押した。さて、そろそろ風呂も溜まる頃だろう。

「マシユー、先に風呂に入ってこーい」

「あ、はーい！」

俺はリビングにいき、眼鏡を外して座り込んだ。やっとリラックスできると思ったら、風呂場から悲鳴が聞こえた。

『きゃあああああ!!!』

「マシユお姉ちゃんまた寿也君にやられたのかな？」

「そうだなー」

「助けないの？」

「大丈夫だろう」

『寿也！入浴中は入ったらダメって言うてるじゃない!!』

『いいじゃん！いいじゃん！』

それからしばらくして、ヘロヘロになったマシユが寝間着姿で出てきた。俺もその後に入り、数分で出た。

「ん?」

リビングに入ると、カーペットの上で4人が寝転んでいた。美奈と香奈はマシユと寿也を挟むように寝て、寿也はマシユの胸に顔を埋めて、マシユはそんなことに気づいてないように寝ていた。俺はそっと毛布をかけて、自分の部屋に戻ることにした。

第3話 幼馴染み3人

「てや!」

「せい!」

「おおりやああ!」

クロウ、パイル、ベルの3人は無制限フィールドでエネミー狩りをしてBPを稼いでいた。ある程度倒した後、場所を移動しようとした。

「そろそろ移動しよっか」

「だな」

「この辺も狩り尽くしちゃったからねー」

3人はゆつくりと歩いていくと、地面に座り込んで泣いているリンカーを見つけた。もちろん放つては置けなかった3人は駆け寄り、ベルが優しく声をかけた。

「どうかしたの？」

「ひくっ……ひくっ……お姉ちゃんとはぐれて……」

「姉妹でここにきたんだね」

「うん……」

「じゃあアタシ達も一緒に探してあげろ！」

「そうだね、小さな子を一人で歩かせるわけにはいかないし」

「じゃあここから移動していろんな人に聞いてみようよ！」

「うん！」

小さなリンカーには明るさが増して立ち上がる。4人で移動を開始して姉を探し始めた。数時間探し続けたが、手がかりも掴めず、見つけることができなかった。

「お姉ちゃん……」

「もしかして……悪い英霊級エネミーにやられたとか」

「ちよつとハル!!縁起でもないこと言わないでよ!!」

「げ、ごめん！」

「でも手がかりも掴めないとなると……探すのはかなり困難だね」

「あ、君ってレギオンとかに所属してるの？」

「レギオン？青のレギオン」

「タク！それならコバマガさんに聞いてみたら！」

「なら早速領土に行ってみようよ！」

「でも他のリンカー達に追い出されるかも……」

「事情を話せば大丈夫だよ！」

「じゃあ早く行こう！」

パイルは歩き疲れたリンカーを背負い、レオニーズの領土まで向かった。また数時間歩くと、運が良かったのかコバルトブレードとマンガンブレードと出会うことができ

た。

「むっ？君たちは黒のレギオンの」

「お久しぶりです！」

「久しぶりだな、こんなところまできて何か用事でもあるのか？」

「はい、実はこの子の姉を探してまして」

パイルは背負ってるリンカーを2人に見せて事情を説明する。同じレギオンのメンバーだからなのかすぐに誰だかわかったみたいだ。

「ラビっ!？」

「コバマガお姉ちゃん！」

「「ラビ？」」

「あ、ラビというのは愛称だ」

「名前はクリームラビット。だからラビなのだ」

「君たち、ラビを見つけてくれてありがとう！コバルト、早くリーラを呼んでくるのだ
！」

「ああ！」

コバルトは走ってどこかにいき、あるバーストリンカーを連れてきた。

「ラビ!?よかった！」

「お姉ちゃん!!」

2人は抱き合って再開を喜んだ。それをみた5人はよかったよかったって感じて見
ていた。

「コバマガさんも探してたんですね」

「ああ。あと、私たちのことを1人のように呼ぶのはやめてくれないか」

「す、すみません」

「あ、自己紹介ですね！私はこの子の姉のミルクリーラと言います。あの、妹が迷惑をか
けてませんか？」

「いえいえ！とてもお利口で可愛らしかったですよ！」

「もうはぐれたりするなよ？」

「はーい」

「それじゃあ僕たちはこれで失礼します」

「ああ、ありがとうな」

「いえいえ！」

クロウ、パイル、ベルの3人はレオニーズの領土から離れて少しエネミー狩りをして離脱ポータルに向かった。

第4話 パペットの力

加速世界……ここに聖杯が復活して数週間が経った。未だに活動を開始しない加速研究会。あいつらの目的は……。

「どうしたパペット？浮かない顔してるが」

「表情は見えないだろ」

「何、勘さ。ところで君はこんなところで何をしてる？」

「何も、ただ歩いてるだけだ。お前こそ何しにきたんだ？ロータス」

俺が歩くと再びロータスは俺の後を追ってきた。本当にこれといった目的はないけど、ロータスは俺に何かようなのか？そう思ったとき空から何か降ってきて俺の上に

落ちてきた。

「ぐへっ!？」

「痛いのだ……。あのアーチャーよくも余をぶん投げおったな!!」

「ネロ?」

「むっ?おお!ロータスではないか!久しいな!」

「そ、そうだな。とりあえずそこを退いて貰えないか、彼が死にそうだ」

「おっ?そこで何をしておるのだ?」

「は、早く退いてくれ……」

「すまんすまん」

俺の上にいるネロという人物が退くと、俺はゆっくりと立ち上がる。

「で、あんたは？」

「余はローマ皇帝、ネロ・クラウディウス！」

「ということはエネミーか」

ローマ皇帝……か。

「お、わかるのが早くて助かるのだ！つてそんなことをしてる場合ではない！あのアーチャーめ!!」

「アーチャー……エミヤのことか？」

「いや違う、また別のアーチャーだ！」

「見つけましたよ！」

女性の声が聞こえてきて、そつちに顔を向けるとツノの生えた女性が怒りながらやってきた。あのツノつて本物なのか？それとも幻覚？

「ま、また余をぶん投げるのか！」

「いえ！今度は射抜いてあげます！」

なんでこんなに空気が悪いんだ……。何があつたんだ……。

「余が何かしたのか!!」

「しましたよ!!初対面の私にいきなり襲いかかるなんて!!しかも服の中に手を突っ込むなんて!!」

「あれは余なりのスキンシップだ!!」

「それが問題なんです!!」

英霊級エネミーつていうのは全員こうなのか? いや、エミヤは落ち着いているか。

「ふ、2人とも落ち着きたまえ。それよりも君は誰なんだ?」

「あ、自己紹介ですね。私は巴御前。トモエと呼んでください。クラスはアーチャーです」

「私はブラックロータス。よろしく」

「デスパペット」

「わかりました。よろしくお願ひしますね」

トモエは頭を下げ、もう一度頭をあげると、さっきまでであったツノがなくなっていた。やっぱり幻覚だったのか？

「そうだ。ネロとトモエに聞きたいことがあるのだが」

「むっ？どうしたのだ？」

「君たちは聖杯によって復活したエネミーだよな？君たち英霊級エネミーは普段何をしているのだ？」

「余はただぶらついておるだけだが？」

「私は鍛錬ですな」

「ならお前らは俺たちに敵対することはないのか？」

「余からはもちろんないが、相手が敵対してきたら話は別だ。襲ってきたら迎え撃つ」

「ですが、英霊級エネミーは私たちのような者ばかりではありません。善の人もいれば、悪の人もいます。それだけは忘れてはなりません」

復活したばかりの時のヘラクレスみたいな感じか。そういえばあれ以降ヘラクレスとは一度も遭遇していない。絶対に死んではないはずだが。

「ま、そういう者はあまりいないがな！」

ネロたちとそんな会話をしていると、人の気配がしてきた。普通の気配ではなく殺意だ。

「誰だ」

「名乗る者でもありません。通りすがりの殺し屋です」

「たった一人で私たちを殺す気か？」

「それは不可能だ。いくらお前が強くても、数では敵わないだろう？」

「それはどうですかね!!」

リンカーは小刀型の強化外装を4つ周りに投げると、突き刺さったところから線を繋いでいき、やがて四角形が出来て、俺とリンカーはその中にいた。

「何の真似だ？」

「一気に相手が無理なら1人ずつすればいい。賢明な判断でしょう？」

「確かにな。なら俺かお前のどちらかのHPがゼロになるまで出られないというわけだな」

「そういうことです!!」

リンカーは走り出し、小刀を投げてきた。俺は手袋型の強化外装から糸を出し、束ねて小刀を弾き飛ばす。糸を束ねたまま、それを武器にして俺は殴りかかる。糸の棒は見事直撃した。だが、何故か感触は軽かった。

「残像？」

「大当たりいい!!」

背後から声が聞こえ、後ろを振り向きながら棒を回すと直撃したが、また感触が軽かった。

「素早さだけは自慢できますから、簡単には当たりませんよ!!」

「なるほどな、だったら俺からは当てなくていいんだな」

そう思った俺は糸を緩めて手袋の中に糸を回収した。そして今度は手際よく糸を操り結界を張る。

「俺からは当てなくていい？意味のわからないことを言うんですね!!」

俺の周りを警戒せずに突っ込んできたリンカー。指を少し動かし、張っている糸の少しずらしてリンカーに絡ませた。リンカーがそれに気づいた時にはもう遅く、すでに俺の手駒になっていた。一本の糸が絡まれば、後は一気に絡ませればいいだけだからな。やがて体中に糸が絡まり、全く身動きが取れない状態になった。

「な、何故……」

「結界にも気づかないとは、お前もまだまだだ」

それだけ告げると、新たな糸を取り出して束ね、リンカーの首を刎ねた。リンカーはHPがゼロになり、人の形がなくなり、ダウン状態になった。同時にリンカーが作った結果が消えて、そこから脱出できた。

「外から見ていたが、中々の戦いだっただぞ」

「其方も強いではないか！」

「素晴らしい戦いでした！」

「俺が一枚上手だったただけだ」

「そんなこと言って本当は照れてるのではないか？」

「そう言っただけで近づくまで俺の頬を突つく。アバターだから直接当たってないんだが。」

「そうだ！其方らは加速研究会？という組織を追っておるのだな？余達もその手助けをしようと思っただけ！」

「えっ!?!」

「加速研究会？」

「その加速研究会という組織の悪い噂を聞くことがあるのだ。何やら余達が住むこの世界を自分たちの好き勝手にするつもりらしい。そんなことはもちろん余は許さない」

「なるほど、ならば他にも仲間が必要ということになりますね。私もお手伝いしましょう」

エネミーがリンカーの手伝いをしてくれるのか。それは心強いな。

「それは心強い。是非君たちの力を借りたい！」

「任せるがよい！」

ネロはそう言うのと、トモエと共に俺たちから去っていった。俺もそろそろ現実世界に帰ろうと思い、ロータスと離脱ポータルに向かう。離脱ポータルが見えてくると、いきなりトモエの悲鳴が聞こえてきた。

『だ、だから何がしたいんですかあなたは!?!』

『其方もなかなかの美人ではないか!よい!実によい!』

『いい加減にしなさい!!』

『痛いのだ!!』

「ここまで聞こえてくるとは……ネロは何をやっているのだ?」

「知るか」

離脱ポータルに入り、現実世界に戻った。

???
s i d e

ここが杉並か……なるほど、住みやすそうな場所だ。

「ええつと……これから住むマンションは……」

俺は地図を広げてあたりを確認する。ニューロリンカーは使わないのかつて？あれの地図アプリは好きじゃない。こっちのほうが俺に合ってる。

「さっさと見つけて、寝るとするか。荷物も少ないし、あとで片付ければいいか」

肩にかけていた革ジャンに袖を通し、目的地へと向かった。

第5話 有名人？

???
s i d e

まったく……面倒なことに巻き込まれたな……。

マンションを目指す前に銀行に寄ったら強盗かよ……。俺もついてないな……。

「おい!!早く金持ってこい!!」

「人質がどうなってもいいのか!!」

俺もその人質の1人なんだが………全員で5人か。こういうのには関わりたくないな。かっただけ、仕方ないな。

「やるか」

ハルユキ s i d e

「あれ?なんか騒がしいですね?」

「ん?あれは……警察ではないか?」

「銀行強盗ですかね?」

「そうみたいだよ」

銀行強盗か……。この辺で起こるなんて珍しいな。でも、帰り道はこの道しかないし……先輩は家に遊びにくるから僕の家に行きだし。

「な、なんだ？中が騒がしいな」

「誰も突入はしてないよな？」

「何が起こってるんだ？」

警察の人たちはなんか混乱してる？悲鳴は聞こえてくるけど、声を聞くと、悪そうな人の混乱した様子の声も聞こえる。

「ちよ、ちよつと中覗いてみます？」

「何言ってるのよハル！危ないに決まってるじゃない!!」

「だ、だからズーム機能で見るんだよ！」

「それなら安全だな」

「じゃあ見てみましょう」

僕らはニューロリンカーのズーム機能を使って中を覗いた。中では一般人らしき人がマスクを被った人たちと乱闘していた。

「た、たった1人で5人を相手にしてる!?!」

「武術の達人なのでしょうか？」

「と、とりあえずこのまま見てみよ！」

僕らは中をずっと覗き見ることにした。

ハルユキ side out

???
side

俺はいつも持ち歩いてる護身用のナイフを取り出し、バレないように手に縛った縄を切る。あとは隙ができるのを待つだけ。

ここにはいろんなものが揃っている。いざとなればそれを活用すればいい。そんな

ことを考えてると、1人の強盗が俺の方に近づいてきた。やはり見張りは暇なんだな。

「子連れが多いな。おっ?お前よく見たら女みたいな顔した男だな。それに変な格好だ」

変な格好は余計だ。あとこいつ隙だらけだな。なら今がチャンスだ。

「動くな」

「っ!?!」

「動いたら死ぬぞ?」

「い、いっ!?!」

俺は手に取ったナイフを首筋に当てる。男は驚いて俺の額に銃口を当てるが、俺との距離が近すぎたせいで、男は俺に腹を蹴られて吹っ飛ばされた。

「やれやれ……こんなものか？」

「リーダー！頭を打って気を失ってます！」

「チッ!?全員かかれ！」

全員が発砲する前に、近くにある机を倒して上に重ねてバリケードを作る。これで他の人を巻き込むことはないだろう。

「お前たちは絶対にここから出るな」

忠告だけして、俺は飛び出す。銃口の位置を確認して銃弾をかわす。普通の人間ならできないと思うが、俺はできる。

「な、なんで当たらないんだ!!」

「シヨットガンを使え!!」

「その前に終わらせる」

椅子を手に取り、思い切りぶん投げる。1人に命中して、さらにもう一つ投げて追い討ちをかけた。これで動けないだろう。あと3人。

「このやろ!」

男がナイフを取り出し、俺に切りかかってくる。だが、俺から見たらナイフ捌きがまだまだだ。だから俺は全てナイフで防ぐか弾いている。そろそろ防ぐのも飽きたから、俺は本気で殺す気で顔の横にナイフを突き出し男の被ってるマスクを少し切った。

「おい!後ろ危ないぞ!」

「っ!?!」

誰かが叫んでくれたおかげで助かったな。あとで感謝しなくちやな。さて、俺の隙を狙ったやつを後悔させてやろう。

俺はナイフを投げつけ、男の背後にある壁に突き刺す。男はチャンスと思い、襲いかかってくるが、見事俺の罠にかかった。俺が投げたナイフにはある仕込みをしている。取っ手の部分に糸をくくりつけておいた。糸を勢いよく引つ張り、自分の手元に寄せた。男が俺に接近した時点で、男の首筋には俺のナイフが当てられている。それにビビった男は気を失った。

「ふう……こんなものか」

「「おおおお!!!」」

な、なんだ？こいつらを倒したら他の人たちから拍手を貰うことになった。あ、そうだ。さつき俺に手助けをしてくれたやつに感謝の言葉を言わなきゃ。

「あ、顔がわかんないや」

「君すごいな、武術の達人かなにかか？」

「この声、さっきの声と同じだ。ならこいつが……。」

「別にそんなんじゃないよ。あ、さっきはありがとう。おかげで助かった」

「ふふつ、初対面なのにもう仲良くなってるの？」

「楓子、それはどうかかわからないけど」

「自己紹介がまだだったな。俺は両儀式、よろしく」

「式か。俺は橘奨真。こっちは俺の恋人の」

「倉崎楓子です。よろしくね式」

「こちらこそ、恋人同士か。デート中に巻き込まれるなんて災難だったな」

「今日は運がなかったみたいだよ」

落ち込んでるみたいだな。そりやそうか。

「あ、奨真さん！師匠!!」

「奨真君！楓子！大丈夫か！」

また増えたな……。ん？よく見たら警察が追いかけてきてるじゃないか。無理矢理入ったのか。

「こ、こら！君たち！まだ調査中なんだからダメじゃないか！」

「別にいいだろ、調査っていう調査なんかないし」

「あ、あるよ!」

「じゃあ俺が説明するよ。ここに5人の強盗がきて、そいつらを俺が倒した。これでいいか?」

「そ、それだけじゃっ!」

うん?急に黙り込んでどうしたんだ?

「着物にその上から赤の革ジャン……、ま、まさか君……あの両儀式か!」

「そうだが?」

「式って有名人なの?」

「いや、有名人ではないけど、ただの高校生だ」

「両儀式を知らないのか!? この人が事件に関わると必ず犯人を無力化するというすごい人なんだぞ?!」

「それはそいつが弱いだけだろ?」

「でも式。さっきの強盗のときだが、あれは人が簡単にできる技じゃないと思うんだが」

「大したことじゃないんだけど……まああれだ、経験?」

「修羅の道を通ってきたということか?」

「先輩、それはちよつと違うんじゃないですか?」

「それよりもあんた、仕事に戻ったほうがいいんじゃないか?」

「そ、そうだな! 君たちも早く帰るんだよ!」

警察はパトカーに乗り、仕事に戻ったみたいだな。他の警察はこの場の片付けか。

「ていうかよく見たら凄い美形な人だね！」

「チュ!?」

「チーちゃん!？」

「タツくんもかつこいいけど、式さんもイケメンだね！」

「タクム君とはまた違うタイプだな」

「はっ? さつきから何言ってるんだ?」

「ねえ奨真君、サツちゃんや鴉さんは気づいてないのかな?」

「そうみたいだな」

奨真と楓子は小声で何か話してるみたいだけど、なんとなく内容はわかる。この4人は気づいてないみたいだし、教えておくか？

「なんか勘違いしてるみたいだけど………」

「俺は女だぞ？」

「「「えっ?」」」

奨真と楓子はやっぱりかっついていう顔で見てるな。2人は俺が女だつてことには気づいてたか。

「「「ええええええっ!?!」」」

「そんなに驚くことか?」

「4人はわかつてなかったみたいだし、驚くんじやないか?」

やれやれ……。

「お、女の人だつたんですか!?!」

「見てわからないのか?」

「わ、わからん……」

「酷い言われようだな……」

「そ、そういうえば師匠と奨真さんは学校が終わってからこつちにきたんですか？ 服装が制服だからもしかしてと思っただけですけど」

「まあそうだな、電車でここにきてデートっていうわけだ」

「その時にこの銀行に入ったら巻き込まれたの」

「お二人とも災難でしたね」

「この眼鏡に俺と同じこと言われてるな。そういうえば名前聞いてないな。」

「お前らの名前は？」

「黒雪姫だ」

「倉嶋千百合です！」

「あ、有田春雪です！」

「黛拓武です」

「さつき聞いたと思うが、両儀式だ」

これで自己紹介は終わったな。さて、いつのまにか落としてしまったナイフを探したら、荷物を持って移動だな。その時、小さな女の子が俺の荷物を持ってこっちにやってきた。よく見たら鞆に収まったナイフも一緒にあった。

「これお姉ちゃんの物？」

「ああ」

女の子に優しく微笑む。

「はいこれ！」

「ありがとう」

荷物を受け取ると、黒雪姫が女の子に問いかけた。

「君、この人をよく女だつてわかつたな」

「えっ？わかるもん！だつて！ちゃんとお胸もあるもん！」

「そこかよ……」。

「で、でも私と同じ大きさだよな。なら彼女も仲間？」

黒雪姫はなんか一人でブツブツの言い始めたし、放っておくか。

「さて、そろそろ行くよ。マンションを探さなきゃいけないからな」

「どんなマンションですか？」

「確か……こんなところだ」

写真を送信するとハルユキは驚いた。いやチユリとタクムもだ。

「ここって僕らが住んでるマンションですよー」

「そうなのか？じゃあ道案内頼もうかな」

「わかりました！」

「あ、そうだ。式、俺と楓子の連絡先だ」

俺のニューロリンカーに2人の連絡先が送信された。俺は登録して、2人と別れてマ
ンションを目指した。

第6話 副担任。初めての恥じらい

いつものように目覚ましの音で起き上がり、伸びをしてから制服に着替える。机の上
に置いている鞆を持ち、部屋を出る。

「あ、起こきこささななききや」

下に降りる前に必ず楓子の部屋をノックする。返事がなかったら部屋に入り、布団の
中を確認する。いつもは俺よりも先に起きてるみたいだが、今日は目覚ましを合わさな
かったのか、まだ寝ていた。

「おーい、朝だぞー」

「ううん……ふああ……おはよう」

「おはよう、早く着替えてこいよ。下で待ってるから」

「はーい」

部屋を出ると、ちょうどジャンヌと会った。もう着替えてるみたいだった。

「おはよう、楓子ちゃんは寝てるの？」

「今起こしてきた。先に下に行っておこう」

「そうだね」

下に行き、リビングで母さんが作った朝ごはんを食べていると、着替えた楓子がリビングに入ってきた。

「今日はお寝坊さんなのね楓子」

「目覚ましかけるの忘れちゃってたわ」

「楓子も早く食べるー」

「はーい」

朝ごはんを食べて、顔を洗って歯を磨き、俺は玄関で楓子とジャンヌが準備を終えるのを待った。2人はやってきて、玄関を出て、学校に向かう。

「「「いってきまーす！」」」

3人で歩いてると、楓子がある話題を振る。

「そういうえば今日新しい先生が来るらしいよ」

「そうなのか？」

「うん、クラスの子が言ってたわ」

「どんな先生なんだろうね？」

「噂だと凄い美人なんだって」

「へえ〜」

美人か……。何故かあの人が頭に出てきた。あの人は美人だったし、高校の教師をやってるって言ってたからな。

「ま、そんな偶然ないか」

「何が？」

「いや、なんでも」

そんな話をしていると、学校につき、俺たちは教室に入る。

「あ、橘！お前あれ知ってるか？」

「もしかして新しい先生のことか？楓子から聞いたよ」

「すつげえ美人らしいぜ！この俺が言うんだ！間違いない！」

「どこからそんな自身が出て来るかは知らんけど、俺は特に興味ないよ」

「うるせい！倉崎さんがいるからか！嫌味か！」

「あ、ちなみにスタイル抜群だつてよ！」

「だから興味ないつて」

「どうせ家でもイチャコラしてんだろ！目に見えるよ！」

ったく……こいつらはこんなんだから彼女もできないんじゃないか？

「男子は何やってんだか……」

「あはは……」

「席につけー！ホームルームを始めるぞー」

先生の声で俺たちは席に座る。ホームルームでは、俺たちのクラスに新しい副担任が来るらしいからその自己紹介らしい。

「入ってきてください」

「はっ」

その声はどこか聞き覚えのある声で、扉の方を見ると、栗色の長い髪の女性が入って

きた。

「初めまして、桐ヶ谷明日菜です。今日からこのクラスの副担任を勤めることになりました。よろしくお願いします」

「あ、明日菜さん!?!」

俺は不意に立ち上がって大きな声を上げてしまった。そのせいでみんな俺の方を向く。

「おい橘……お前なんでこの人のこと知ってんだよ!!」

「どういうことか説明しろおおお!!」

せ、説明しろって言われても……。なんて説明したら……。

「橘君には以前道案内をしてもらったのよ」

明日菜さんがなんとかカバーをしてくれた。その言葉に納得したのか男子たちは静かになる。

「このホームルームの間に聞きたいことを聞いておけよー。ただし、不純な質問は無しだぞー」

「桐ヶ谷先生は結婚してますかー！」

「け、結婚は……まあ……はい」

結婚はしてるのか……。初耳だな。ま、そりやそうか。俺も明日菜さんのことはまだ何も知らないしな。

「担当科目は何ですかー！」

「担当科目は国語です。一応どの教科も出来るから分からないことがあったら何でも

「言ってるね」

それからホームルームの間はずっと質問攻めだった。短い時間でよく大量の質問をしたな。

「ねえ奨真君」

「ん?」

「いつ道案内したの?」

「あ、あーいつだったかな? 忘れちゃった」

「そ、そう?」

実際会ったのはギルガメッシュのことで楓子と喧嘩した後だから、このことを説明すると、楓子もあのことを思い出してしまふ。だから俺は嘘をつくことにした。ごめんな

楓子。

「よし、質問タイム終わり！ 桐ヶ谷先生、今日は初日ですので、このクラスでの授業態度を見ていてください」

「わかりました」

1時間目は数学だから、俺はニューロリンカーの学校用のファイルの中から数学のファイルを表示する。明日菜さんは教室の後ろで待機していた。

「あれ？ここどうだったっけ？」

「どうしたの？ わからないところがあつたらデータをコピーして送信して」

「あ、はい」

データをコピーして指を明日菜さんの方にスライドしてデータを送る。明日菜さん

は問題を理解してわかりやすく説明してくれた。

「ありがとうございます」

「どんどん質問してね」

「桐ヶ谷先生ー！ちよつときて欲しいです！」

「はーい」

「むう……」

「ん？どうした楓子？」

「なんでもないわ」

楓子は俺から顔を逸らす。怒らせちゃったのかな……。そして、1時間目が終わり、

休憩時間になると明日菜さんのところにクラスのみんなが集まる。俺と楓子はまだ席に座っている。

「な、なあ楓子」

「……何」

「もしかして怒ってる?」

「怒ってない」

いや、絶対怒ってるだろ……。もしかして明日菜さんのやりとりのせいか?もし、そうなら楓子の機嫌を直さないよ。

「なあ楓子。さっきの明日菜さんとのやりとりのことで怒ってるのか?」

「ふん……デレデレしちゃって……」

「いや、してないよ……。それに俺には楓子がいるから他の人にデレデレなんかする必要がないよ」

「じゃあ証明して」

「へっ?」

「は・や・く!」

「こ、こんなところでいいのか?」

「い、いの!」

みんなは明日菜さんのほうに集中してるから見られる心配はないな。俺は楓子の顔に近づき、キスをした。あまり構ってあげてなかったから、楓子も寂しかったんだろうな。そんなことに気づけなかった俺は……。楓子の彼氏失格かもな。

「ごめん……俺彼氏失格だよな」

「えっ？」

「あまり構ってあげられなかっただろ。だから楓子に寂しい思いをさせてしまった」

「そ、そんなことないわ！私も今日は……怒りすぎちゃった……。ごめんなさい」

「あー楓子が謝ることはない！全部俺の責任だ」

「あ、謝らないで！私も悪いから！」

「……………」

「……………」

無言になる俺と楓子。数秒後。

「…………ふふ」

同時に笑ってしまった。

「あはは、俺たちつてどこか似てるよな」

「そうね。あ、奨真君」

「今度はなんだ？」

聞き返すと、楓子は俺の耳元にやってきて、小声で話した。

「帰ったらまた楽しもうね」

「仰せのままに、お姫様」

なんて言ってみただけど、かなり恥ずかしいな。

「きやつ!？」

「えっ? うお!？」

楓子はバランスを崩して、俺に倒れかかった。俺も後ろに倒れて大きな音があった。背中に痛みが走るけど、前には柔らかい弾力があつた。

「あらあら、橘君も男の子ね」

「倉崎さん大胆!」

「橘ああ……」

前が見えないけど、見られてるのはわかる。これは非常にまずい。

「ご、ごめんね！大丈夫!？」

「あ、ああ」

それから学校に在る間、俺と楓子はみんなにあの場面を見られてしまったせいか、恥ずかしくて話すことができなかつた。ていうかよく考えたら俺も楓子もこんなに恥ずかしい思いをしたのは初めてだと思ふ。サッチたちの前でも楓子は平気だったが、流石に今回はダメだったみたいだ。理由についてだが、俺にもわからない……。

放課後。

家に帰った俺と楓子は、俺の部屋のベッドに座り込んでいた。

「な、なあ楓子」

「な、何？」

「ええつと……今日の弁当も美味しかったよ」

「そ、そう。ありがとう」

会話が続かない。いつもはなんともないんだけど、流石にあれをみんなに見られてしまったらこうなるか……。

「な、なんでこんなに恥ずかしいんだろ……。 奨真君！」

「っ!?! は、はい!?!」

「キスして！」

「は、はい!?!」

「濃厚なキスをお願い！それぐらいしないと頭からあのことが離れないの！」

「わ、わかった！いくぞ」

俺は今までなかったことがないくらいカチカチになって楓子の顔に近づく。けど、キスする寸前で止まってしまった。こ、こうなったらヤケだ！俺は楓子を抱きしめて押し倒し、キスをする。長い長いキスをして、俺は楓子を見る。激しくしたせいかな、楓子の制服が乱れていた。

「なあ楓子。俺こんなにガチガチになったのは初めてだ」

「わ、私も……いつもならなんともないのになんでなんだろう」

「こんな状態でもいいのか？」

「も、もちろん！それに時間が経てば治るわ！」

「わかった」

俺は楓子を押し倒したまま、一緒に倒れた。

数時間後。

「た、確かにいつのまにか治ったよ」

「でしょ?」

か。今日は父さんと母さんは帰ってこれないんだよな。晩御飯は自分たちでやれって事

「ねえ奨真君。ちよつとだけ未来の話をしよ?」

「未来?」

「ええ、いつ結婚するとか、どんな家に住むとか、子供は何人ほしいとか」

未来……か。

「未来の話なんてし出したらキリがないんじゃないか？」

「そうかな？ じゃあ将来子供は何人ほしい？ それだけ聞かせて」

「子供……か。 1人だと絶対に寂しいと思うから、2人以上は欲しいかな」

「ふふ、じゃあ私も頑張るわ」

「つてまだ先の話だろ？」

「それもそうね」

晩御飯は……まだいいか。今はこの時間を堪能しよう。楓子は俺の胸に顔を埋めて
幸せそうな顔をしていた。俺は頭をそつと撫でて眠りに落ちた。

第7話 見学？

今日も学校に行くと、また教室が騒がしかった。なにやら今日はちよつとしたイベントがあるらしい。

「今日はなんなんだ？」

「実は今日は有名人がここにくるんだよ！」

「「有名人？」」

俺と楓子とジャンヌは聞き返す。するとクラスの子がそのことについて話します。

「あの両儀式がくるんだよ!!」

「式が？それがなんなんだ？」

「あれ？式って杉並に住んでなかった？」

「ちよつと待て!?式!?式だと!?お前ら会ったのか!？」

「あ、ああ」

「サインは!?サインは貰ったのか!？」

「も、貰ってないよ」

「もつたいない!!もつたいないぞ2人とも!!」

「だ、だからどうしたんだよ！」

とりあえず興奮してるこいつを落ち着かせることにした。ようやく息を整えると落

ち着いて話します。

「お前らは両儀式がどんな人か知ってるか？」

「事件に式が関わったらどんな犯人も無力化するんだろ？」

「それもそうだが、両儀式にはまだあるんだよ」

「「ん？」」

「両儀式は俺たちと同じ年なのに女優をやっているんだ!!」

本当なのか？そんな雰囲気は出してなかったけど……とりあえず調べるか。ニューロリンカーの検索アプリで両儀式と検索する。すると、両儀式についての情報がでてる。たしかに女優と書かれている。

「奨真君、どうだった？」

「たしかに女優と書かれている。えっと……代表作は……」

「両儀式の代表作は『空の境界』!!主人公の名前はそのまま両儀式!!噂では両儀式の知り合いが書いたものらしい!!」

「へえ」

「席につけー、ホームルームを始めろ!」

担任の先生と明日奈さんが入ってきて、俺たちは席に戻る。だが、一部では明日奈さんの周りに行っていた。

「先生って本当に綺麗ですよね!!」

「絶対女優になれましたよ!」

「ちなみに年齢は！」

「も、もう！女性にそんなこと聞かないの！」

全く……アホども。

「年齢か……。紺野先生と知り合いって言ってたから、たしか」

「奨真君？その先は言っちゃダメよー？」

「いい痛い痛い」

担任の先生が明日奈さんの周りにいる子を席に戻すと、話し始めた。

「もう噂は回ってると思うが、この学校に女優の両儀式が遊びにくる。まあ彼女も学校があるから今日一日だけだが、もし会ったら挨拶でもしておけよ」

本当にくるのか……このことは白雪も知ってるのかな？

「1時間目は国語だから準備しておいてね」

そういえば明日奈さんの授業は初めてだな。どんな感じなんだろ。

1時間目が終わって今は休憩時間。トイレに行って教室に戻る途中、聞き覚えのある声が聞こえたからそこへ向かう。すると、そこにはなぜか喧嘩してるオルタと式がいて、それを止めようとしてる白雪がいた。

「あ、あんたね！なんなのよその態度!!」

「あ？何がだよ？」

「ぶつかっておいてその態度はなんなのって言うてるのよ!!」

「だから謝ってるじゃねえか」

「その態度がムカつくのよ!!」

「お、オルタさん落ち着いてください!!」

あー……なんかめんどくさそうだな。とりあえず止めるか。人も集まってきたるし。

「オルタ、とりあえず落ち着け」

「誰に言ってるの……って奨真じゃない」

「あ、奨真じゃん。おひさー」

「奨真さん！助かりました！今回ばかりはオルタさんを止められません!!」

白雪もクラスでは苦勞してるんだな……オルタが暴走しかけたらいつも止めてるって言うってたし。

「そ、それよりもこの女と知り合いなの!!」

「ま、まあな」

「奨真さんいつのまに……って……よく見たら両儀式さんだ!？」

「俺を知ってるのか？」

「知ってますよ!!高校生女優じゃないですか!!」

「あ、俺そっちの方が有名なの？てつきりどーでもいいことで知られてると思ってたよ。

例えばこの前の強盗の事件とか」

「どっちかって言えば女優の方が有名だろ」

「そうか？」

忘れてたけど、有名な両儀式が目の前にいるのに、周りの人たちは全く来ないな。オルタに怯えてるのか？

「つとそろそろ教室に戻るよ。じゃあな」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!!まだ話は終わってないわよ!!」

「お、オルタさん! 私たちも戻らないと! あ、両儀さん! あとで私たちのクラスに来てく
ださい!」

「苗字で呼ぶな。あまり好きじゃない。じゃあまた後でな」

俺も教室に戻るか。

教室の前まで来たけど……なんでなんだ？

「なんでついてくるんだ？」

「別にいいだろ？」

「まあいいけどさ」

教室に入ると、クラスのみんなが音に反応してこつちを見る。式に気がついたのか、全員目を輝かせて色紙を持ってこつちにきた。あ、これはやばいかも。

「きゃああああ!!!両儀式さんよ!!!」

「私ファンです!!サインください!!」

「お、俺もファンです!!」

「空の境界シリーズ全部見ました!!」

俺はおしくらまんじゅう状態になったところからなんとか脱出した。

「大丈夫?」

「なんとかな……」

「式大人気ね」

その頃の式はクラスのみんなにサインをしていた。

「く、くつつくな。書けないだろ。まあサインなんかうまく書けないから適当だけだよ」

「やべえええ!!本物の式さんやべええ!!」

チャイムがなってもクラスのみんなは席につかない。それ以前に騒がしいからそれに気づいた明日奈さんが駆けつけた。

「こらー!早く席につきなさい!」

「(ぎょ)ごめんなさい!」

「全くもう……あら?」

「あん？」

明日奈さんは式を見ると、全体をじっと見つめる。もしかして明日奈さんもファンなのか？

「あなた……どこかで……」

「奇遇だな、俺もだ」

な、なんなんだこの空気……。

「もしかして2人で会ったことがある？」

「その可能性はありそうだな」

「あっ!?思い出した!!空の境界シリーズよ!!」

それを聞いた瞬間、俺は椅子から転げ落ちた。さっきのあの空気はなんだったんだよ……。

「はっ?」

「私も見てたのよ! あ、よかつたら後でサインもらえないかな?」

「桐ヶ谷先生、仕事はまだ残ってますよ」

「あ、すみません!」

明日奈さんは他の先生に連れていかれていった。式はそれを見送って、教室の中に残っていた。

「式はあのままいるのかな?」

「自由だなあいつ。猫か？いや、ここはウサギのほうがいいか」

そんなことを言いながら、俺は次の授業の準備をする。

次の休み時間は式は白雪のところに行った。さらに次の休み時間、昼休み、放課後までずっと俺の教室にいた。

「結局ずっとここにいたな」

「まあな、出歩いて騒がれたら面倒だからな」

「あ、白雪たちを迎えに行く?」

「そうだな」

「オルタもいますしね」

「白雪にオルタ? あーあの白と黒か」

「サインあげたんなら名前覚えてやれよ……」

「な、なんか申し訳ない」

4人で1年のクラスに行くと、やはりここでも騒がしくなる。式がいるから当然か。

「両儀式さんだ！」

「あ、橘先輩と倉崎先輩もいる！」

「ジャンヌさんもいるぞ！」

な、なんか俺たちも言われてる気が……。式だけじゃないのかよ。

「お前らも人気者だな」

「あー!!あんたは!!」

教室の前に行くと、ちょうど白雪とオルタが出てきた。オルタが式に気づくと、不機嫌になる。白雪は涙目になりながら俺に助けを求める。

「奨真さん!もう私には今日のオルタさんは止めれません!!」

「こら、オルタ!白雪ちゃんを困らせたらダメでしょ!」

「うぐつ……そ、そんなことよりなんでこの女がいるのよ!!」

「別にいいだろ。面白そうだし」

犬猿の仲になるのか?いや、式は敵意は全くないみたいだしな……。

「ていうか今気づいたけど、お前どこが普通の高校生なんだよ。めちゃくちゃ有名人じゃねえか」

「はあ?ただ女優をしてるだけの高校生だろ?普通じゃねえか」

全然違うと思う。それともこれが式にとっての普通なのか?そんなことを考えてると、式は俺を見ながらこう言った。

「そんなことよりも、お前のほうがただの高校生じゃねえだろ」

「はい？」

「いや、お前だけじゃないな。ここにいるお前ら全員つて言ったほうが正しいか」

「どういうことだ？俺たち全員が普通の高校生じゃない？俺たちの共通点は………まさか。」

「まさか………お前も………」

「ふっ………そのまさかさ」

「奨真君、もしかして式も」

「俺の予想が正しかったら………式はパーストリンカード」

「ああ……」

「俺もそのバーストリンカーさ」

「「「「!?」」」」

でも、俺はバーストリンカーだってことをバレルようなことをしていない。なのに何で……何でわかったんだ？

「なんでわかった？」

「そういうのには敏感でな、なんとなくわかるんだよ」

そう言って不気味な笑みを浮かべる。その笑みを浮かべた式は、恐ろしく感じる。

「こう見えて強い奴には興味があつてね」

「何が目的なんだ？俺たちを倒すことか？」

そう聞くと、今度は黙り出した。すると、式は何故かため息をつく。

「悪い、ちょっとふざけた。別に目的なんかないよ。そりゃあお前らには興味あるよ。」

でも目的なんか聞かれてもなあ」

「えっ?じゃあ式は悪いリンカーじゃ……」

「んなわけねえだろ。あ、どうしても言うならひと勝負しても構わないぜ?」

「ふっ……その勝負……乗った!」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよ!」

オルタは俺の前に出ると、式と向き合った。そして式を指差し、式の挑戦に乗ると言い出した。

「その勝負、私が受けるわ!!」

「はあっ!?!」

「オルタ!？」

「へえ？お前か。いいぜ、なら早速始めようか」

「悪いわね奨真、このいけ好かない女と勝負したくなつてね」

「ま、まあ構わないけど」

「その前に場所を移動しましょう。ここだと目立つわ」

「そ、そうですね！ほら、オルタさん行きますよ！」

「ちよ、お、押さないでよ！」

「オルタはああやって白雪ちゃんに面倒を見てもらってるんですね。なんだか安心しました」

4人は場所を移動して、俺と式はその場に少しだけ残った。

「本当に悪い奴じゃないんだよな？」

「心配性だなあ。悪い奴とかじゃねえよ」

「ま、それもそうか。もし俺たちの敵ならこんな風に接触してこないもんな」

「いや、俺だったらこうするけど。それであの世界で悪さしてる集団をいくつか潰してるし」

「へ、へえ」

もしかして式って加速世界ではかなりやばいやつじゃ……。

「簡単に言えば裏の正義の味方って奴？いや、違うな。悪い奴ら専門の殺し屋って言っただ方がわかりやすいか？」

「なあ、お前って結構やばい奴なのか？」

「さあな。それは俺の実力を見てからだな」

「奨真くーん！早く早くー！」

「ほら、お前の女が呼んでるぜ」

「ちよつと喋りすぎたな。早く行くぞ」

「おう」

学校を出て、近くの喫茶店に寄ることにした。席につき、とりあえず人数分のコーヒーを頼む。俺はブラックしか飲めないからそれにしたけど、オルタもブラックが飲めるのか？

「オルタ、お前飲めるのか？」

「当たり前じゃない！私は大人だから！」

そう言いながらオルタはコーヒーを飲む。だが、舌を出し、かなり苦そうにしていた。

「言わんこつちやない」

「こいつ馬鹿なのか？」

「う、うっさいわね!!」

「砂糖を頼んであげるね」

楓子は店員さんに砂糖を貰い、それをオルタに渡す。オルタは受け取ると、それをコーヒーに入れる。

「あ、ありがとう楓子」

「どういたしまして」

ジャンヌは落ち着いてコーヒを飲み、白雪は熱そうにしながら飲んでいった。式は窓の外を見ながら飲んでいった。

「さて、そろそろ始めようぜ」

「そうね。叩き潰してあげるわ!!」

「俺を楽しませてくれよ」

「なら私たちは観戦ね」

「2人とも頑張ってくださいね！」

「お、応援してますー！」

式とオルタは直結して、叫ぶ。俺たちもそれに続いて叫ぶ。

「「「バーストリンク!!」」」

第8話 『直死の魔眼』

煉獄ステージの建物内。俺は遠くからオルタと式の戦いを見ることにした。もちろん俺だけじゃなく、楓子とジャンヌ、白雪もだ。

「さて、オルタはわかるけど、式はどんな戦いをするんだ」

オルタ s i d e

煉獄ステージね、私と1番相性のいいステージじゃない。あの女はどうくるのかし

ら。

「へえ、それがお前のアバターか」

「そういうあんたのアバターは？」

「自己紹介がまだだったな。俺はブラッドバニー。そうだなあ……ブラッドって呼んでもらおうかな」

「ダークアヴェンジャー。ダークよ」

アバターの色は赤。なら遠距離かしら？とりあえず距離をとろう。私は一度距離を取り、相手の出方を見た。

「一旦離れたか……。いい判断だ。だが……。……。その程度の距離じゃ離れたことにはならないぜ？」

「っ!？」

結構離れたはずなのに!?一瞬で目の前に!?

私は咄嗟に腰から剣を取り出し、あいつの攻撃を防ぐ。剣とナイフがぶつかり合い、私は剣に炎を纏わせる。これなら手は燃え移るはず!

「ふっ……」

あいつはナイフを私の剣から一度離すと、今度は炎を斬りつける。すると、私の剣に纏っていた炎が一瞬で消えた。

「な、なんで?」

「さあ?なんでだろうな?」

「くっ!この!!」

旗を振りかざすと、あいつはジャンプして避ける。そのまま宙を舞って、私の背後に着地する。私は後ろを振り向きながら炎を飛ばす。けど、さっきと同じようにあいつはナイフで炎を斬りつけると、また炎が消えた。

「なんなのよもう!!」

「そうカツカするな。わかるのもわからなくなるぞ?」

「うっさいわね!!あんたのその力がわかんないからムカついてるのよ!!」

「そりやそうか……。今まで俺の力を見破ったやつは1人もいないからな」

「は、はあ?」

「特別に教えてやるよ」

あいつはナイフを下におろすと、私に能力について話してきた。

「俺の目はね、物の死が見えるんだよ。例えそれが水や炎だったとしてもな」

「な、なんなのよそれ！」

「この目……アビリティの名前は……『直死の魔眼』。どんなものでも死を見ることができて、どんなものも殺すことができる」

こ、こんなバカげた能力を持つリンカーがいたなんて……。

「だから……生きているのなら、神様だって殺してみせる」

だったら……一気に決めにいくしか……ない!!

「やあああ!!!」

剣に炎を纏わせて、それを辺りに振りかざし、炎を飛ばす。

「物の死が見えるんでしょ。だったらここから脱出することもできるよね！」

私はジャンプして、屋根のヒビの入ったところを刺した。すると、屋根は崩れ始めて瓦礫が落ちてくる。私はすぐに脱出できるけど、あいつは炎を消さないと出れない。瓦礫に埋まったところを狙って必殺技でトドメを刺す。これが私の作戦。

「まずは脱出ね」

!!

私は建物から脱出すると、さっきまでいた建物内が崩れていく。そこを狙って決める

「ラ・グロンドメント・デュ・ヘイン!!」

最強の技を使って、瓦礫を炎で燃やし尽くす。いくら物の死が見えても、これを超えることは不可能ね。

「おおー、あんなものまともにくらったら終わりだな」

「っ!？」

な、なんで？あいつは瓦礫の中にいたはずじゃ!？」

「な、なんであんたがここに!!」

「決まってるだろ？逃げてきたんだよ」

「に、逃げ道なんかなかったはずよ!!」

「もう忘れたのか？俺はあの炎の死をみて、炎を殺したんだよ。そしたら建物が崩れてきたから脱出したんだ」

そんな……まさかあの一瞬で……。こいつ……強すぎる……。

「さて、お前もなかなか強かったが、俺の方が一枚上手だったみたいだ」

負けを認めるしかなさそうね……。

「ここがお前の死だな」

そう言つてこいつは私の胸のあたりをナイフで斬りつけると、私のHPは一瞬で消し飛んだ。まさか……一撃必殺が使えるリンカーがいるなんてね……。

オルタ side out

褒真 side

現実世界に戻ってきた俺たちは、とりあえず飲み物を口に運ぶ。コーヒーを飲み終え

ると、俺は式に聞く。

「見てたけど、あれはもう一撃必殺に近いな」

「直死の魔眼つて……か、空の境界に出てきましたよね!!」

「ああ、そうだぞ。どうやらフィクションが現実になってしまったみたいなんだ」

「フィクションが現実になるなんて……そんなことがありえるの?」

「実際に俺がなってるからありえるんだろ」

　　そういえば能力を見破ったものはいないって言ってたな。なら、王たちも見破れてないということか?それともまだ式の存在を知らないのか?

「なあ式。お前は七王と会ったことはあるのか?」

「七王？あーあいつらか。白の王はここににいるから、白を抜くと……黒以外は会ってるかな。無制限フィールドで」

会ったことはあるんだな。なら、王でも見破ったやつはいなかったってことになるな。

「さて、そろそろいこうぜ。日が暮れてしまう」

「そうですね」

「ここは俺が奢るよ。今日楽しませてもらったお礼だ」

式が俺たちの分も奢ってくれて、店の外に出た。式は俺たちとは帰る方向が違うから、店の前で別れることになる。

「あ、そうだ。………ほらよ」

式は指を俺の方に弾くと、俺のニューロリンカーに式の連絡先が送られてきた。

「何か用があつたらそこに連絡してくれ」

「あ、ああ」

式はそう言うのと、帰る方向に歩いていった。俺たちも帰るために歩き始めた。

「あいつ……桁違いだわ」

「オルタでも歯が立たなかったからな」

「悔しい……何もできなかったなんて……悔しすぎる」

「オルタさん……」

「絶対にあの女に勝ってやる！ギャフンと言わせてやるわ!!」

「あ、オルタ!!」

ジャンヌは声をかけるが、オルタはそのまま帰っていった。しばらく歩くと、白雪とも別れ、そのまま家についた。俺は部屋に入ってベッドに寝転がると、楓子が部屋に入ってきた。

「ねえ、奨真君。もしかしてだけど……式って……」

「ああ………あいつは………両儀式は………王じゃないけど………」

加速世界最強のリンカーに近いかもな」

第9話 白雪たちの尾行

午前10時、私白雪姫は待ち合わせをしています。誰と待ち合わせしてるかというところ……。

「白雪さん！」

「お、お待ちせ……しました」

繪さんとレミさんが来ました！今日は3人でお出かけです。ショッピングモールで買い物したり、お昼ご飯食べたり、おしゃべりしたり……。

「白雪さん？」

「はっ！すみません！それでは行きましょうか！」

私たちはシヨツピングモールに向かうために歩き始める。途中で見覚えのある2人を見ましたが、まあ気のせいでしょう。

シヨツピングモールの中にある服屋さんに来た私たち。私たちに似合いそうな服を探しています。

「あ、これいいですね！」

「それも真っ白……」

「白雪さん……らしいです」

白いじゃないですか。そういうレミさんの今の服装は……。

「レミさん服は少し胸元が開いてるんですね」

「に、似合ってますか？」

「「じー」」

「えっ？な、何？」

似合ってます……すぐ似合ってます。ですがそれ以前に……。

大きい……私たちよりも大きい……」

「し、白雪さん!?!どこ見てるんですか!?!」

「へっ!? 声に出てました!」

「は、はい」

「たしかに……大きい」

「ふ、2人とあんまり変わらないよお」

「こ、コホン。まあ冗談は置いといて……」

「似合ってますよ!」

「凄く……」

「ありがとう!」

私はこの白のワンピースを買うとして……あ、これは!

「レミさん！これはどうですか！」

私が渡したのは青いパーカー、今レミさんが着てるボーダーの服と似合いそうです！

「ちよつと試着してみますね」

試着室に入るレミさん。私と綸さんは試着室の前で待つことにします。すると、試着室からレミさんが出てきました。

「わあ……！よく……似合ってます」

「そ、そうかな。じゃあこれ買います！」

「えつと……綸さんはいつもスカートなので……たまにはこういうのもいいんじゃないですか？」

私は綸さんにジーパンを渡しました。それを受け取った綸さんはレミさんに入れ替わりで入っていききました。

「楽しみですね！どんな風が変わるのがか」

「はい！ガラツと変わるんじゃないでしょうか！」

数分後、試着室から綸さんが出てきました。

「ど、どう……でしょうか……」

「なんだかボーイッシュになりましたね！似合ってますよ綸さん！」

「うん！よく似合ってる！」

「あ、ありがとうございます……ございます……」

顔を赤くした綸さんは試着室に入っていていきました。きつと着替えてるんでしよう。

「綸さん……可愛いです……」

「本音漏れてますよ……」

照れた時の綸さんは本当に可愛いです……。

「白雪さん、鼻血鼻血」

私はレミさんからティッシュをもらい、鼻血を拭き始めました。鼻血が止まると同時に綸さんがジューパンを持って出てきました。

「私……これ……買います」

「それじゃあみんな買うものが決まったわけだし、会計を済ませよ！」

私たちは会計を済ませて、次はどうするか話し合う。

「そろそろお昼にしましょうか」

「あ！それなら良さそうなところ見つけましたよ！」

「そ、それじゃあ……そこに……行きましょう」

とあるお店に入った私たちは昼食を食べ終えて、紅茶を飲みながらお話をしています

た。

「ええ!?あの両儀式さんですか!」

「す、凄いです……サイン欲しかったです……」

「で、でもあの人もバーストリンカーですからいつか会えますよ!」

「嘘っ!?バーストリンカー!」

「はい……つてあれ?」

「どうか……しました……か?」

あの後ろ姿は……奨真さんと楓子さん!?あとあの方は初めてみますね……。他には……あの子は遊園地で奨真さんと一緒にいた女の子?

「奨真さんと楓子さんが誰かとお茶してます」

「えっ!?!」

2人は私がみてる方向を見た。すると、その誰かに気づいたみたいです。

「すごい美人ですね。あと……」

「「胸が大きい」」

奨真 side

「まさかこんなところでアイリさんに会えるなんて」

「ふふ、私もよ」

「奨真さんと楓子さんも買い物ですか？」

「イリヤったらわかってないわね、デートに決まってるじゃない」

クロエはなかなか鋭いな……。

「ふふ、デートよ」

「ええ!?! 本当にデートなんですか!?!」

「イリヤったら人のデートを見るのは初めてだもんねー」

「今そんなじやお兄ちゃんデートってなっても何もできないわよ？」

「な、なんでそこでお兄ちゃんが出てくるの!!」

「士郎君のことが好きなんだね」

「い、いや！別にそういうんじゃないよ！あ、でも家族としては好きですよ！でも男の人として好きとかは全然なくてですね！そりやお兄ちゃんは優しくてかっこいいから好きですけど！って何言ってるの私は!!」

士郎……妹にかなり好かれてるぞ。よかったな。

「この後2人はどうする？やっぱりこのままデートかな？」

「そうしようと思います」

「ならそろそろ失礼しようかしら。お代は私が出してあげるわね。それじゃあデート楽しんでね」

「じゃあね」

「ご、ごゆつくり！あとこのことはお兄ちゃんには内緒にしてね!!」

「わかったわかった。アイリさん、ごちそうさまです」

「ごちそうさまでした」

俺たちは店の外に出て、その場で別れた。

褒真 side out

奨真さんたちが店から出るのを確認して、私たちはどうするか考える。

「どうします?..」

「どう……しましょう……か」

「きつと2人が考えてることは私と同じはず……」

そう……私たちの考えはきつと同じ……

「「追いかけましょう!」「」

私たちの尾行という名の冒険が始まりました。その前にお会計……

さあ！早速追跡開始です！

「うーん、ブラブラしてるけど、店に入ろうとはしてませんね」

「買うものが……ないから……じゃないですか？」

あとをつけていますが、話しながら歩いてるだけのようですね。

「このまま後を追ってみましょう」

「あんたら何してるの？」

私たちは振り向くと、そこにはオルタさんがいました。あと今にも目玉が飛び出しそうなる人も。

「白雪さん、知り合いですか？」

「はい！こちらはジャンヌ・オルタさん。ジャンヌさんの妹です！」

「ジャンヌ・オルタ。オルタって呼べばいいわ」

「わたくしはジル・ド・レエ。ジルとお呼びください」

「立花伶弥です！」

「日下部繪……です」

皆さんは初対面なので自己紹介をしました。するとジルさんは私の方を見てきました。目玉が怖いです。

「あなたが白雪さんでしたか。いつもジャンヌから聞いております！仲良くしてください。さつてらつしやるのですね！ああ！わたくしは心配でしたのです！ジャンヌに友人ができるのが！でも安心しましたよ！ジャンヌはツンデレですが、気にせず接してあげてください！」

怖いです怖いです!!本当に今にも飛び出しそうです!!あと近いです!!

「バルス!!」

「おおおおお!!!」

オルタさんは手加減なしでジルさんに目潰しをしました。たまにあきらさんが白夜さんにしてるのを見ますが、絶対に痛いですよねあれは……。

「いちいちそんなこと言わなくていいのよ!!それで、あんたらはここで何してんのよ?」

「尾行……です」

「尾行?ははーん、さては奨真ね。白雪がいるってことはそうとしか考えられないわ」

「わ、悪いですか!オルタさんだって好きなくせに……」

「はあ!?!そんなわけないじゃない!!」

オルタさんをからかうのはこのへんにして……あれ?

「白雪さん……奨真さんたちを見失いました……」

「えっ!?!」

私は咄嗟にレミさんが見てる方を見ましたが、奨真さんたちはいませんでした。完全に見失いましたね。

「どう……します……?」

「見失ってしまったのはしかたありませんね。ショッピングを楽しみましょう!」

「じゃ、私は行くわ」

「何言ってるんですか! オルタさんですよ!」

「な、なんで私もなのよ!」

「荷物持ちならお任せください!」

「ジル!?!」

「ほらほら！ジルさんも言ってるんですから！」

「私もオルタさんのことをもっと知りたいです！」

「わ、私も……」

「わ、わかったわよ！」

オルタさんとジルさんも加わって、私たちはショッピングを楽しむことにしました。

白雪 side out

奨真 side

「さて……次はどこに行く?」

「雑貨屋さんに行きましょう!」

楓子は雑貨屋に行きたいらしく、俺たちは雑貨屋に目指すことにした。その途中、偶然明日奈さんと会った。

「あれ? 奨真君!」

「どうも」

「こんにちは! 1人ですか?」

「ううん！友達と来てるの！あ、言ったら来たわ！」

明日奈さんが手を振るほうをみると、眼鏡をかけた女の人が走ってやって来た。

「ごめん明日奈！銀行が混んで遅れたわ！」

「ううん！私も来たばかりだから気にしないで！」

「そう？あ、この子たちは？」

女の人は俺たちを見て、明日奈さんに聞いた。まずは自己紹介だな。

「あ、この子たちはね、私の学校の生徒なの」

「橘奨真です」

「倉崎楓子です」

「私は朝田詩乃。好きに呼んでちょうだい」

そう言ってくれたから、俺は詩乃さんと呼ぶことにした。自己紹介が終わったら、明日奈さんが一緒に店を回らないか聞いてきた。もちろん俺たちは了承して、一緒に店を回った。すると楓子は詩乃さんに質問をする

「詩乃さんってどんなお仕事をしてるんですか？」

「私？私はただのOLよ」

「確かりズと同じところだったよね？シノのんと一緒にリズから聞いたから」

「ええ、いつも給料増やせー！とか言ってるわ」

「あはは、明日奈さんの周りの人たちは愉快的な人たちばかりなんですわね」

「それを言うなら私たちもよ奨真君」

「そ、そうだな」

サツチとアルトリアは胸のことになったらうるさいし、白夜はあきらに目潰し、マシユは寿也に胸を揉まれ、これだけで十分愉快だな。

「そういえばシノのんのお子さんは旦那さんと一緒に家かな？」

「ええ、3人とも旦那と一緒に」

へえ、詩乃さんも既婚者なんだな。まあ綺麗な人だし、結婚しててもおかしくないか。

「3人もいるんですか？もしかして私たちと歳が近い子もいるんですか？」

「もちろん、真ん中の子がそうね」

「真ん中の子は確か……」

「私に似てFPS好きよ。今も家でやってるわ」

「なら詩乃さんもゲームやってるってことですか？」

「たまにね、昔は明日奈たちとよくやったものだけ」

「懐かしいわねえ。奨真君たちも友人とゲームしてるの？」

「え、ええまあ」

やばい……ブレインバーストのことはバーストリンカー以外は絶対に秘密にしなければいけない……。楓子を見ると、なんとか誤魔化そうと言った感じの顔をしていた。

「オンラインゲームで遊んでるんですよ」

「ALOみたいな感じかな？」

「今はニューロリンカーもあるし、アミスファイアなしでもフルダイブできるから便利よね」

「昔は違ってたんですか？」

「ええ」

「俺たちが生まれた頃にはもうニューロリンカーはあつたからなあ」

だからこそ、俺と楓子はブレインバーストをすることができたんだよな。

「そういえばユイちゃんは？」

「ユイちゃんは勉強中」

「ユイちゃん?」

「私の娘よ。私は旦那さんを合わせて6人家族なの」

「6人!?!」

「4人も産んだんですか!?!」

「そ、そのことについてはまた今度教えるね!」

俺たちはいろんな店を回っていると、いつのまにか夕方になっていた。

「今日は楽しかったね!」

「そうね」

「そうですね!あ、奨真君、自分のは持つわ」

「いいよいいよ。気にすんな」

「奨真君がそう言うなら……」

俺は自分の荷物と楓子の荷物を持っている。楓子は心配して聞いてきたが、大した荷物の量じゃないから大丈夫と言った。

「明日奈さん、今度ユイちゃんを紹介してくださいね！」

「俺も気になるんで」

「わかったわ、帰ったらユイちゃんに言っておくわ！」

「それじゃあ私はこっちだから」

「じゃあねシノのん！。奨真君たちもまたね！」

「さようなら！」

詩乃さんと明日奈さんは帰って行き、俺たちも家に帰ることにした。家に帰ると、まずは自分の部屋に荷物を置いてから楓子の部屋に荷物を置きに行った。すると、着替え中だったのか、上の服を脱いだ楓子がいた。俺はすぐに荷物を置いて部屋を出た。

「ふ、楓子！今のはわざとじゃないからな！」

「わかってるわよー」

しばらくして楓子が出てきて、俺の腕に抱きついた。そして俺の部屋までついてきた。そのあとは部屋で話をして、晩御飯まで過ごした。

第10話 幼馴染3人とその師匠

ハルユキside

うーん……今日もいっぱいエネミーを倒したなあ……。メドゥーサさんに習った体術も上手くできてたし、効率よく倒せたかな。

「最近メドゥーサさん見ないなあ。強くなつた僕を見せたいんだけどなあ……。まあいいや、移動しようかな」

僕は翼を広げ、その場から飛び立つ。しばらく飛行していると、見覚えのある紫髪ロングの女性を見つけた。僕は地面に着地して、その人のところに行く。

「メドゥーサさん！」

「っ!? な、なんだ……あなたでしたか……」

「どうかしたんですか？」

「あーいえ、ちよつと気配を消してるといふか……」

「あ、いた!!」

「見つかってしまいました……」

声のする方を見ると、そこには小柄の少女が2人いた。双子なのかな？めちやくちや似てます。

「メドウーサ！もう逃がさないわよ！今日こそこれを着てもらうわ！」

あれって……メイド服？

「そ、それは勘弁してください」

「あら？その銀の人は？」

「メドゥーサ!!まさか男じゃないでしょうね!!」

「ち、違います！こちらは私の弟子です！」

「ど、どうも」

軽くお辞儀をする僕。その前に、あのクールなメドゥーサさんがこんなに取り乱すなんて……

「クロウ、こちらは私の姉様。上姉様のステンノ、下姉様のエウリュアレです」

「ええっ!?!姉様?!」

「この子たちが!?!全然そういう風には見えません!!」

「なによ、なんか文句あるの」

「いえ、ありません」

なんとなくだけど、この子たちに逆らってはダメな気がする……。

「さて、エウリユアレ、メドゥーサを連れて行くわよ」

「そうね！それと、いい加減そのアイマスク取りなさいよ！」

エウリユアレさんはメドゥーサさんのアイマスクを取り外した。そういえばメドゥーサさんの素顔って見たことがなかったような……。

「か、返してください！」

「ダメよ！今日はその顔でこれを着て接客よ！」

メドゥーサさんの素顔……凄く綺麗だ。これは先輩や師匠にも負けない美人だ！

「メドゥーサさんすごく綺麗ですよ!!自信持ってください!!」

「え、ええ……」

「さ、行くわよー」

メドゥーサさんはエウリュアレさんとステンノさんに連れて行かれていった。さて、僕も移動しようかな。

ハルユキside out

タクムside

「あの……クー・フリーンさん」

「あ? どうした坊主?」

「何してるんですか?」

「みてわからねえのか? 釣りだよ釣り」

「それはわかってますよ！でもなんでアロハシャツなんですか!!」

「いいじゃねえか！これ俺のお気に入りでござい！」

お気に入りに入り込んで……いつも青タイツなのに……。

「それに、俺だって息抜きが必要なんだよ。今日だって師匠に殺されかけたし……」

「はい？」

「まったく……お前からも言ってお前が欲しいくらいだぜ。いい歳こいたババアがそんな衣装を着るなってよ……」

クー・フリーリンさんの師匠って……もしかしてあの人じゃ……

「誰がババアだ？ああ？」

っ?!この殺気は……振り向くことができない……。

「げっ!?師匠!?!」

「ゲイボルグ・オルタナティブ!!」

「ああああああ!!!」

「ランサーが死んだ!!」

このひとでなし!!って何やってんだ僕は……。でも、クー・フリーンさんが死んでしまった……短い間でしたが、お世話になりました。

「死んでねえよ!!」

「あ、生きてた」

「それより、貴様はこんなところで何をしておる」

「息抜きだよ！俺だって息抜きが必要なんだよ！」

「ほお？なら私が癒してやろう」

「いらねえよ、ババアの癒しなんか……………あ」

あ、今度こそクー・フリーンさんが死んでしまうかも…………。

「誰がババアだ!!」

「お、落ち着いてください!!」

「む？お前は誰だ？」

「シアンパイルです。クー・フリーリンさんの弟子です」

「影の国の王、スカサハだ。こいつの弟子か。よし、こいつの弟子なら私の弟子でもある。これから鍛えてやろう」

「なんでそうなんだよ……俺の弟子だったの」

「何か言ったか？」

「なんでもねえよ。それより師匠、加減してやれよ。あんたについてこれるやつなんかそうそういねえからよ。坊主、健闘を祈るぜ」

クー・フリーリンさんはそう言って手を振る。ちよつと待ってください、健闘ってなんですか!!スカサハさんの訓練ってそんなに過酷なんですか!!

「よし、時間が惜しい。いくぞ」

「嫌だあああああ
!!!!」

タクム s i d e o u t

チユリ s i d e

アタシは今、玉藻さんの自宅でくつろいでいる。なんでくつろいでるかかって？そりゃくつろぐよ！だってこんなにも過ごしやすいんだもん！まるで一つの家庭みたい！

「ちよつとベルさん、いくらなんでもダラけすぎな気がするんですけど?」

「いいじゃないですかー」

「言っておきますけどね、ここはあなたの家じゃねえんですよ!」

「だって玉藻さん私のママみたいなんだもん」

いや本当にその通りなんだよ。玉藻さん家事ならなんでもできるし、料理はめっちゃくちゃ美味しいし!もう良妻にふさわしいよ!!

「しよ、しようがねえですね。もう少しくつろいでいきなさい」

そして案外ちよろかったりもする。ちよろインという分類だね。

『ピンポーン』

「誰なんですかね?」

インターフォンがなり、玉藻さんはリビングを出る。今気づいたけど、この世界にインターフォンとかあるの?

「はいはい」

「余である!!」

「げっ!! 赤セイバー!!」

「合っておるが違う!! 余はネロだ!! 今日こそ勝負だキャス孤!!」

なんか騒がしいと思ってきてみれば、ネロさんと玉藻さんが揉めています。とりあえず止めますか。

「はいはいそれまで」

「な、なにをする!!余は今日こそキャス孤に勝つために」

ネロさんが言い終わる前に扉を閉める。ついでに鍵も閉めた。

「さて、戻りましょう玉藻さん」

「そ、そうですね!」

そしてアタシはまたゴロゴロして、数時間後に現実世界に帰った。

チユリside out

くオマケく

「カラー!!開けろー!!」

「騒がしいですね。ってあなたは赤セイバー」

「だから余はネロだ!!むっ?其方はキングではないか?」

「はい、何してるのですか?」

「ここにいるキャス孤に真の良妻をかけて勝負を挑みたいのだが」

「はあ……諦めてください」

「何っ!? 離せええ!!」

私はネ口を抱え、その場から離れる。この腕にあたる感触……………柔らかい……………

「ふん!!」

「ぬおおお!!」

私は思わずネ口を水辺に放り投げてしまった。何故なのでしょう、あの感触を感じると思わずぶん投げたくなりました。

「何をするのだ!! 服がびしょ濡れではないか!!」

「すみません、何故か投げたくなりました」

「なんだその理由は!!」

「キング？何しているのだ？」

ロータスもきましたか。あーロータスもあの感触を味わえば私と同じことをしそうですね。

「ううう……スケスケではないか」

「ピクッ」

私は何故ぶん投げてしまったのかわかりました。これですね。

「セイバー!!!!」

「うおっ!?!何故余の胸を揉むのだ!?!」

「キングが変なことを叫んだ……………」

「あなたは私とほぼ同じ顔なのになんなんですかこの差は!!これが格差社会か!!これが格差社会なのか!!!」

「さらつと自分の顔を言っている……………」

「ら、乱暴にするでない……………泣くぞ、余は泣くぞ……………」

「落ち着けキング!」

「うがー!!」

「この人をおいでよかっただけ……………トモエ!」

「お任せください!それ!!」

「なんで余なのだああ!!!」

うがー!! ってあれ？ ネロが星になった？

「それでは私も失礼します！」

私は何を……？ 一体何があつたんですか？

第11話 記憶喪失の青年

美早 side

今日は休日、私はいつも通り朝早くに店に行き、開店準備をする。店内の掃除、厨房のチェック、他にもやることは沢山ある。まずは入り口の掃除から。

(ガチャ……)

「あれ？開かない？」

店の中から入り口に出ようとしたけど、扉が開かなかった。仕方がないと思って、私
は裏から出て入り口に行く。すると、入り口の扉が開かなかった理由がそこにあった。

「人が倒れてる？」

このまま放っておくわけにはいかない。とりあえず個室に運ぼう。

美早 side out

???
side

頭が痛い……どこかで打ったのか……とりあえず起きなきや。僕は目を開けると、知らない天井があり、後頭部には何かがある？

「これって……クッション？」

「起きたのね、なら一安心」

扉が開いて、きれいな女が入ってきた。その人の手にはケーキがあった。

「起きたならこれ食べて」

「えっ……」

「お腹空いてるでしょ？なら食べて」

「で、でも」

「食べて」

「はい……」

……。
女の人の庄に押されて、ケーキを食べることになった。早速一口食べてみることに

「っ!?!おいしい……」

「口にあつてよかつた。ところでなんで倒れてたの？」

なんで倒れてたか……あれ？なんでなんだろう……思い出せない……

「わからない……」

「名前はわかる？」

名前……僕の名前……なんだろう……

「わからない……」

「記憶喪失……かもしれない。私は掛居美早。ここの店長をしてる」

「美早さん……僕の名前は……」

「無理に思い出さなくていい、ゆっくりと思い出せばいい」

「嵐」

「えっ？」

「僕の名前、苗字はまだ思い出せないけど、多分これが僕の名前」

「OK、よろしく。しばらくはここでゆっくりしてて」

僕は美早さんの言う通り、この部屋でくつろぐことにした。でもやることがない……
とりあえず寝ようかな。

嵐 s i d e o u t

美早 s i d e

嵐を個室に運んで数時間後、私は店を従業員に任せて、彼の昼食を買いに行く。近くのコンビニに着くと、弁当を買ってるあきらと遭遇した。

「ミヤア？珍しいの、ミヤアがコンビニ弁当なんて」

「色々あったの」

「色々？」

「そ、色々」

弁当を買い、あきらと別れ、店に戻る。個室に入るとソファで眠っていた嵐がいた。起こすわけにはいかないと思い、弁当だけ置いて、部屋から出る。

「あ、美早さん！おかえりなさい！」

「ただいま」

「今日もいつものお客様が来てますよ」

「OK、ありがとう」

受付の前で待ってるお客様の元へ向かう。

「よおパド！今日もいつもの個室に行つとくぜ！」

ニコはそう言って個室に行こうとする。私はいつもニコが食べてるケーキを持って個室に行こうとした。その時に気づいた。あの個室には嵐がいることを。

「ニコ！待って！」

「あれ？先客？」

「き、君は？」

遅かった……

「s o r r y 嵐。彼女は知り合いのニコ」

「う、うん。大丈夫ですよ」

「パド、こいつは？」

「今朝倒れてたのを助けた。名前は嵐、記憶喪失」

「記憶喪失ねえ……まあいいや、パド、この部屋使わせてもらうぜ。別に誰かがいても平気だしさ」

「嵐はそれでもいい？」

「大丈夫ですよ」

「じゃあニコ、これいつものやつだから」

「お、サンキュー！」

「ごゆっくり」

さて、閉店時間まで頑張って仕事。

美早 s i d e o u t

嵐 s i d e

僕は多分美早さんが買ってきてくれた弁当を食べていた。何から何までお世話になりっぱなしだ。

「嵐だったよな？」

「え、う、うん」

「記憶喪失って聞いたけど、何にも覚えてねえのか？例えば年齢とか、どこの学校とか」

「残念ながら、自分の名前しか……」

「それは災難だなあ。まあ見た感じだと、パドの一つ年下ぐらいか？」

「そうですね。美早さん、お姉さんみたいなどころがあるからたぶん僕のほうが年下でしょっつ」

「ニューロリンカーの使い方とかわかるのか？」

「うーん……なんとなく？」

「なら安心だな。それが使えなかったらこの先生きていくのは困難だからな」

「この首についてるやつが使えなかったらそんなに困難なのかな……。あ、そういえば僕家がわからない……。」

「アタシ暇だからさ、話し相手になってくれよ」

「僕でよければ」

それから数時間ずっとニコちゃんの話し相手になった。この子も楽しそうにしてるし、よかったかな。部屋の扉が開くと、仕事が終わったのか、私服に着替えた美早さんがやってきた。

「店を閉める。嵐、家はわかる？」

「わかりません……」

「じゃあしばらくは私の家に住むこと」

「え……ええっ!？」

「お、ラッキーじゃねえか!」

み、美早さんの家に住むって!?! 両親はいいの!?

「NP。一人暮らし、部屋も余ってる」

「み、美早さんがいいなら……お言葉に甘えて」

「ニコ、今日は送れない」

「いいよいよいよ！アタシも寄るところあるしな！」

「THX。嵐、私の家に案内する」

僕らは店を出て、ニコちゃんと別れ、駐車場に向かう。そこにあつたのは赤いバイクが一台だけだった。もしかして後ろに乗れってこと……？もしそうだったら、美早さんに抱きつくことになるんじゃない？

「どうしたの？早く乗って」

「は、はい！」

「しっかりつかまってて」

「そ、それじゃあ失礼して……」

僕は美早さんに抱きつくように捕まる。僕の心臓はもうバクバクと動いている。し

ばらくすると、バイクは停まり、駐車場に向かう。

「()ですか？」

「()」

アパートみたいなところです。一人暮らしならここが丁度いいですからね。

「上がって、好きなようにくつろいでいて」

僕は中に入ると、凄く綺麗に掃除された部屋でくつろぐことにした。

「シャワー浴びてくる。テレビかけておくから好きなように見て」

美早さんは脱衣所に向かってシャワーを浴びに行った。僕はテレビを見ていたけど、どうしてもシャワーの音が気になる。変なことは考えたらダメだと思い、頭を振って忘れることにした。

「嵐」

「は、はい！」

「申し訳ないけど、下着を取ってほしい」

「は、はいいい!?!」

「持って行くのをわすれた」

え、ええつと……下着つてどこに……いやいやそんなことより! いいんですか!?!で、でも美早さん困ってるし……し、仕方ない!

「美早さん、入りますよ」

下着を持って脱衣所に入ると、タオルで体を隠した美早さんがいた。僕は自然と視線

が下にいつてしまった。

「ど、どうぞ……」

「THX」

「それじゃあ……失礼……します」

僕はリビングのソファーに座り、テレビを見る。けど、さっきの光景が目には焼き付いて頭から離れない。

「美早さんって……優しいだけじゃなくて、スタイルもいいんだ……」

なんでこんなことを思うんだろう。今日初めてあの人に出会ったのに、あの人のことを凄く知りたいと思う。自然に目線があの人に向いてしまう……。でも、もし記憶を取り戻したら、この想いは消えてしまうのかな……。

「おまたせ、あなたもシャワー浴びてきなさい」

「わ、わかりました」

「これ着替え、私の中学の時のジャージ」

「ありがとうございます」

ジャージを受け取り、シャワーを浴びる。僕は長くシャワーは浴びないからすぐに出た。ジャージを着て、戻ると、エプロンをつけて夕食を作ってる美早さんがいた。

「もうすぐできる。座って待ってて」

座って待つてると、さっき作っていた料理とご飯の入った茶碗を持ってきた。もう一度戻ると、お皿とお箸を持ってきた。

「いただきます」

「い、いただきます」

野菜炒めを取り、口に運ぶ。口の中で野菜がシャキシヤキという。

「美味しいです！」

「まだあるから、遠慮せずに食べて」

「はいー！」

僕は止まらなくなり、あつという間に平らげてしまった。食器は僕が洗うと言って、美早さんにはゆつくりしてもらおう。洗い終えて、ソファに座る。

「嵐、ちよつとは思いついた？」

「いいえ、全く……」

「記憶が戻るまでここにいていい。戻った後でも構わない」

「え？それって……」

「好きただけここにいていい」

「あ、ありがとう………ごさいます………」

今日から僕の新しい生活が始まろうとしていた。ただ生活するだけじゃダメだ。ちゃんと美早さんに恩返しできるようにならなきゃ。

第12話 鑑賞。噂

『俺の目はね、物の死が視えるんだよ。お前と同じ特別製でさ』

『……………曲がれ』

『だから……………生きているのなら……………神様だつて殺してみせる!』

『曲がれえええ!!!』

今俺たちは式の家で『空の境界』の第3章を観ている。ちなみにネガ・ネビュラスや、他のみんなはもう式のこととは知っている。

「これが『空の境界』ですか！すごく面白いです！」

「うむ、姉さんが好きになるのもわかるな」

「サツちゃんもハマってきた!!今度DVDを貸してあげるわ!」

「私もDVDを集めようと思うの。びゃーくん、今度一緒に観るの」

「じゃあ今度観ような!」

みんなも楽しんでるみたいだな。たしかにこれは面白かったし。俺も買おうかな。

「あのさあ……今更だけだよ……」

「式？」

「なんで俺の家なんだ？別にどこでもよかつただろう？」

「それは……式の作品だから本人の家で観るべきだろう」

「なんだそれ……」

「それにしても式さんの部屋って何にもないですね……」

式の部屋にあるのは冷蔵庫、テレビ、DVDプレーヤーとダンスぐらいだ。映画の中で式の部屋みたいだった。

「悪いか……この方が落ち着くんだよ……」

「い、いえ！決してそういうわけじゃ……」

「こいつらも女優なんだよなあ……しかもアタシらと変わんねえし」

「いやニコ、お前は変わるだろ……」

「ねえ式、『空の境界』ってこの終章で終わりなの？」

「今の所はな」

（ピンポーン

「誰かきたみたいですね」

「お前らは待っていてくれ」

式は立ち上がり、玄関に向かう。式が扉を開けると、女性が無理やり中に入ってきた。

「なんだ橙子……今度は何の用だ」

「あ、あ、あの人って……蒼崎橙子さん!!」

「し、白雪さん？」

「お、落ち着いて……ください……」

「サイン！サイン貰わなきゃ!!」

白雪が暴走し始めた……。よっぽどファンなんだろうな。

「式！匿ってくれ！」

「また青子か？あと、そいつ誰だ？」

「な、なんで俺まで……」

「あれっ？蓮君？」

「君！あとそのみんなも静かに！」

俺たちはとりあえず静かにすることにした。数秒後、扉の前から女性の声が聞こえてきた。

『姉貴!! ったくあの馬鹿姉貴め……逃げ足だけは一丁前なんだから!』

姉貴? ってことはこの人は外にいる人のお姉さんか? それに塔子って……。

「塔子さんって……」

「楓子が思ってる通りだと思うよ、あの人は『空の境界』に出てる人だ」

「だよね」

「行つたみたいだ……助かったよ式」

「俺は何もしてない」

「ねえ！蓮君！なんで蓮君が橙子さんと一緒にいるの!!」

「お、お嬢！落ち着いて！俺はこの人に巻き込まれた側です！」

「で、橙子、こいつに何をした？」

「青子から逃げるために犠牲になつてもらおうと……でも」

うまくいかなかつたんだな……。蓮、色々どんまい……。

「どれだけ人に迷惑かければ気が済むんだよ。あといい加減金くらい返せ」

「か、返すよ……」

「つたく……そればつかじやないか。あ、橙子、自己紹介しろよ」

「蒼崎橙子、橙子さんって呼んでねー」

「俺もだな……烏野蓮、よろしく」

俺たち全員自己紹介をして、一息をつく。白雪は橙子さんのところに行ってサインをもらっていた。

「有名人2人からサインを!!あとは幹也さんと鮮花さんと、藤乃さんとそれからそれから!!」

「な、なんか白雪さんキャラ崩壊してませんか？」

「チーちゃん、シーツ！」

「全く、騒がしいんですけど？」

オルタは寝てたのか、目をこすってこつちをみた。

「おや、君はジャンヌの妹か何かか？」

「そうだけど何よ？」

「似てる似てる！ そうだ！ よかったら私の人形コレクションの一部にしてもアダ!!」

話の途中で式が頭を殴りつけた。頭を抑えた橙子さんは涙目で式を見る。

「痛いなあ……」

「お前のコレクションをこれ以上増やすな」

「ちえー。あ、シャワー借りるよー」

なんか楽しそうな人だなあ……つともうこんな時間か。

「もう遅いし、そろそろ帰るよ」

「そうね、晩御飯作らなきゃダメだし」

「そうだな、式、我々は失礼するよ」

「おう、気をつけて帰れよ。あと、最近無制限フィールドでへんなことが起きてるらしいから、それも気をつけろよ」

「わかったよ」

俺たちは式の家から出て、それぞれ家に帰ることになった。ジャンヌはオルタの家にいく準備をして出かけていった。俺の楓子は晩御飯の前に、俺の部屋で直結をする。

『とりあえず、一度ダイブするか』

『そうね、式が言ってたことも気になるし』

『『アンリミテッドバースト!』』

「変な噂？」

「エミヤ、何か知らないか？」

「……………変な噂って言えば、なにやら3人組のリンカーが無闇にPKをしてるって聞いたな」

「3人組？加速研究会じゃないの？」

「いや、関係ないと思う。私も可能性はあると思っただが、全く関係ないみたいだ。悪い連中は加速研究会だけではないということだな」

加速研究会を倒すのも苦労しそうなのに、他にも悪い奴らがいるのかよ…………。

「ウウ…………」

「あら？フランちゃん？」

「ウウ…………ウー…………ウ」

何かジェスチャーしてるな。バーサーカーだから上手く話せないのか、だからジェスチャーで伝えようと……。でもさっぱりわからん……。

「なるほど、その者たちは三銃士と名乗ってるのか」

いや、なんでわかるんだよ！俺もその能力欲しいよ！そんなことを思っていると、フラインケンシユタインはまたジェスチャーをし始めた。俺に伝わってないとわかったのか、近くの岩を壊し始めた。何か物で伝えようと？

「ウー！」

その岩はどこかで見たとある形だった。アバターだな、しかもこれってルーク？

「ルークはいないのかって？」

「ウウ」

フランケンシュタインは頷いた。弟子が気になるとか？

「今日はルークはいないのよ、ごめんね」

「ウウ……」

落ち込んでるな……そんなに鍛えたかったのか？

「ふん！」

「痛っ!?!」

突然レイカーに腹を肘で殴られた。なんでだ……。

「もう……わからないの?」

「な、何がだよ」

「フランちゃんがルークを気になる理由」

「鍛えたいからとかじゃないのか？」

「もう！会いたかったからに決まってるじゃない！」

「そ、そうなのか？」

「そうなの！」

女心ってよくわからん……。あと、俺が言う前に心を読んだのか？

「おい！あつちでなんかすごい戦いしてるぞ！」

「見に行こう！」

すごい戦い？気になるなあ。

「行ってみるか？」

「そうだなあ」

「気になるし、行ってみましょ」

「ウー！」

走って騒がしいところに来た。そこでは英霊級エネミーとブラッドが激闘を繰り広げていた。

「そこ！！」

「ふん！」

エネミーの剣は早くて見るのもやっとなのに、それについていつてるブラッドはすごい。

「なかなかやりますね。なら……」

「直死の魔眼……」

「一歩音超え……二歩無間……三歩絶刀……無明……三段突き!!」

「そこがお前の死だ!!」

エネミーは突き攻撃。ブラッドはエネミーの死を狙いにいった。すれ違うと、エネミーは血を吐き、倒れる。だが、ブラッドも膝をつき、その場に倒れる。

「エネミーの勝ちだ」

「相打ちじゃないのか？」

「たしかに彼女も攻撃を食らっている。だが、直撃を避けている」

「ならなんで血を吐いてるの？」

「あれは彼女の保有スキルだ」

「ウー！ウー！」

「フランの言う通り、彼女の元に行くとしよう」

俺たちは2人の元に向かう。まずはブラッドが心配だ。

「大丈夫か」

「な、なんとかな……。あのすれ違いで直撃を避けられるとはな……」

「あの娘はいつたい……」

「ゴフツ……」

「ちよつとみてくるわ！」

レイカーは彼女の元に向かうと、彼女は急に立ち上がる。それにビックリしたレイカーは尻餅をつく。

「沖田さん大勝利〜！」

「えっ？」

「あなた強かったですよー！私も久し振りに苦戦しました！」

「お前には敵わないよ……」

「ギャップがすごいな……」

「沖田……羽織……それに血を吐く……。あっ!?もしかして沖田総司!?!」

「いかにも!私は新撰組1番隊隊長、沖田総司です!」

なるほど……だからあんなにも剣筋がいいのか。あ、そうだ。沖田にも聞いておこう。

「なあ沖田、三銃士って聞いたことあるか?」

「三銃士?聞いたことはありませんが、詳しくは知りませんね……。あ、でも土方さんなら知ってるかも!土方さんのところに案内しますよ!」

「はやくも情報ゲットだな」

「ああ、俺はブラウンクリエイト。エイトって呼んでくれ」

「私はスカイレイカー、レイカーって呼んでください」

「ブラッドバニー、ブラッドだ」

「わかりました！それでは案内しますので、ついてきてください！」

俺たち5人は沖田についていった。歩いて五分ごとに軽く吐血をされるのは、ちよつと疲れた。

第13話 新撰組

沖田に案内をしてもらって、ようやく目的地に着く。到着したところは喫茶店のようなどころだった。ちなみに沖田は到着するまで20回くらい吐血して、その度に時間を割く。

「ここです。土方さーん！」

沖田は扉を開け、中に入る。俺たちも続いて入ると、そこには困った店員さんが1人の男性客を相手してる絵だった。

「ああん!!酒がねえだど!!なら補充してこいやああ!!」

「こ、困ります!いくらゲームの世界でも、ここでは調達しなくちゃダメなんですよ!」

「んなこと知るか!!」

「土方さん」

「なんだ!! っつて沖田か。何の用だ」

「お客さんを連れてきました」

「客?」

「あんたに聞きたいことがある」

俺は噂になつてる三銃士について聞いた。土方は考え込むと、思い出したのか、俺と向き合う。

「そいつらは3人で奇襲をかけ、PKをする奴らだ。3人のコンビネーションはもちろん完璧。一人一人の実力もあるとのことだ。そんなことを知ってどうする?」

「無闇なPKをしてると聞いたから、それを止めるために少しでも情報が欲しかった」

「PKつてのはこの世界ではあることなんだろう？それに死んでも復活するじゃねえか。ならPKもやっていいだろ」

「……………たしかにそれも個人の楽しみ方だ。でも、無闇なPKは許すわけにはいかな
い」

「ふっ……………なるほど、お前面白えな。ちよつと付き合つてやるよ」

「付き合う？どういうことだ？」

「とりあえず店を出るぞ」

俺たちは土方の言う通り、店を出た。店から少し離れたところに行くと、土方は剣を取り出した。

「俺と勝負しろや」

「ひ、土方さん!?!」

「なんでいきなり」

「急にお前と勝負したくなった。だから剣をとれ」

んな無茶苦茶な……まああの新撰組と勝負できるなんて夢のような話だし、挑戦を受けよう。

「エイトさん！土方さんはバレーサーカーですから気をつけてー！」

「ウー！」

「頑張っってねエイト！」

「死ぬなよー」

俺はガンブレードを構えると、土方はいきなり俺の目の前にきた。咄嗟に防御の構えをしようとするが、土方の斬撃が早すぎて、肩をもろに食らってしまった。

「があっ!」

「オラオラオラ!!! どうしたどうした!! そんなもんか! ああ!!!」

「クソ!!」

土方の攻撃を必死に防ぐ。だが、全然攻撃が鳴り止まない。こうなったら……

「ロー・アイアス!!」

「ああっ!?!」

目を覚ますと、心配してきてくれたレイカーとブラッド、エミヤとフランケンシュタイン、沖田がいた。

「全く歯が立たなかった……」

「いやいや、土方さんが強過ぎなだけですよ。エイトさんは十分強いと思います」

「沖田、たくあん拾ってこい」

「たくあんなんか拾ってこれませんよ!!」

「あいつ……本当に自由だな」

「バーサーカーだからあんな感じなのか？」

「さ、さあ？」

でも、さすが新撰組というか……英霊級エネミーというか……本当に強いな。

「おい坊主」

「お、俺？」

「お前だ、まだまだ俺には敵わねえが、よく耐えた方じゃねえか？」

「えっ？」

「今までのやつはすぐにくたばっちゃったからな。ここまで耐えたのはお前が初めてだ。それにお前はまだまだ強くなる。焦らずに強くなれ」

まだまだ……強くなれるのか。

「おいコラ沖田あ!!たくあんどうした!!」

「だから外に落ちてませんから!!」

「はあ……お前らには付き合ってられない。俺は帰る」

「あ、おいブラッド……」

「それじゃあみなさん、失礼します!」

俺とレイカーは帰って行くブラッドを追いかける。エミヤたちから離れたところに
来ると、PKされてるリンカーを目撃した。

「3人組が襲ってる……ならあいつらが」

「ああ、あいつらが三銃士だろうな」

「だったら、私たちが終わらせよう!」

「まずは俺が奇襲をかける。お前ら2人は俺に続け」

ブラッドは三銃士に突っ込むと、ナイフを投げる。ナイフに驚いた三銃士は襲っていたリンカーから離れる。俺はジェットレッグ、レイカーはゲイルスラスターで急接近してダメージを与える。

「なんだよお前ら！」

「俺たちの邪魔するなよ！」

「お前らが三銃士だな。無闇なPKをしていたのはもう知ってる。お前らはここで俺たちが倒す！」

「俺たちを倒す？ やってみろよ！ このアップルデイガーと！」

「サンドレックス！」

「……………アイスシルバ」

「3人揃って！三銃士!!」

「……………」

ノリノリなのは2人だけか……あと三銃士って聞いてたからダルタニヤンとかアトスみたいな感じのやつかと思っただが、それでもなさそうだな。

「エイト……こいつらって厨二病か？」

「俺に聞くなよ……」

「シー、聞こえたらどうするの」

「俺たちと勝負するんだな！どうせならサドンデスにしようぜ！」

「お前らは俺らを止めたいんだろ！そして俺たちは邪魔するお前らを消したい！どうだ！」

「その青いやつはどうする？こいつら勝手に言ってるけど」

「勝負はしても構わない。だが、サドンデスには参加しない」

そりやそうだ。サドンデスなんかしたらバーストポイントがなくなって、加速世界から永久退場だ。

「この弱虫が！だったら俺たち2人はサドンデスに参加してやるよ！」

ディガーとレックスはアイテムに賭けるポイントを入れて、俺たちに渡す。けど、流石に3対2じゃ不公平だな。

「どつするっ！」

「面倒だが、俺がいくよ。さっさと終わらせたいからな」

「ならもう1人は私が」

「わかった。絶対に勝てよ」

「もちろんよ！」

「当たり前だ」

レイカーとブラッドはポイントを入れて、2人の元へ歩く。

「待たせたわね」

「お前らは少々迷惑をかけすぎたな。だから、ここできつちりと殺しておかないとなあ
!!」

「死ぬのはてめえらだ!!」

「後悔しても知らねえぞ!!」

カウントはゼロになり、4人の戦いが始まった。

1周年記念 2人の恋物語

これはブレインバーストや加速、ニューロリンカーといったものが一切ないもしものお話です。ちなみにみんな同じ学校である。

朝がきた。俺は目を覚まして、制服に着替える。いつものように親と朝ごはんを食べ
て、学校に行く。

「行つてきます」

「いつてらっしゃーい！」

扉をあけて外に出る。いつもの道を歩いていると、突然視界が真っ暗になる。

「だーれだ？」

この声もよく聞く声だ。あと背中に柔らかい感触が伝わってくる。俺はすぐに答えを言う。

「楓子だろ。バレバレ」

「やっぱりわかっちゃうか」

幼馴染の倉崎楓子。今俺が想いを寄せてる相手だ。昔はただの幼馴染だと思っただけど、年が経つほど、だんだん魅力的になっていく楓子に俺は惹かれていった。

「變真君？私の顔に何かついてる？」

「えっ!?な、なんでもない！」

いつのまにか楓子のことをじっと見つめてしまっていた。それに気づいた途端恥ずかしくなって楓子から顔を逸らしてしまう。

「ほら、早く行かなきゃ遅刻するぞ！」

「ま、待ってよー！」

走って学校に行くと、靴箱にはみんながいた。

「おはよう2人とも」

「「おはようございますー！」」

「よっ！」

「おはようなの」

「おはようございますなのです！」

「グットモーニング」

「よお！お二人さん！」

「おはよう………ございます」

「あ、おはようございます！」

「おはようございますー！」

「おはようございます」

「おはよう！」

「おはようございます、今日も元気そうで」

「おはよう！今日も早いね！」

「今日も熱々ね……見てられないわ」

黒雪姫『通称サツチ』、ハルユキ、タクム、チユリ、白夜、あきら、ういうい、美早、ニコ、綸、白雪姫、レミ、マシユ、ジャンヌ、アルトリア、リサ、ジャンヌオルタ。ここにいるメンバーはいつも一緒にいるメンバーだ。挨拶をして、靴を履き替えると、また新たな人物が来た。

「あ、奨真。おはよう」

「皆さんおはようございます！」

「おはようございます……」

「おはよー」

「お嬢！放つていくなんて酷いじゃないですか！」

「蓮くん遅いんだもん！」

衛宮士郎、イリヤスフィール、クロエ、美遊、蓮がやってきた。どうやら蓮は白雪に置いてかれたらしい……。

「それじゃあ中等部組はこっちだから、失礼するよ」

「私たち初等部はこっちなので、しよーにい、フーねえ、またなのです！」

俺と楓子、白夜とジャンヌ、アルトリアと衛宮、白雪と蓮、マシユは高等部の校舎に

向かう。

白雪と蓮とは一年の教室で別れ、俺たち6人は2年の教室に入る。鞆を置くと、1人の女子が話しかけてきた。

「あの、橘君。明日って予定とかある……？」

「明日？明日はちよつと用事が」

「うう……わかった」

俺がそう言うと、落ち込みながら自分の席に戻る。すると、衛宮が俺に問いかける

「明日何かあるのか？」

「病院にいつて義手の調整をしてもらうんだよ」

そう、俺は若い頃に交通事故で右腕を損傷して、切り落とすことになってしまった。それからは義手を使って生活してきた。最初は慣れなかつたけど、日が経つことに慣れてきた。今では普通の腕のように扱っている。

「調整とか大変そうだなあ」

「そうか？」

そんなことあんまり考えないからなあ……。

「ねえ奨真君。調整って朝だけ？」

「えっ？まあ……そうだけど」

「それならお昼からどこかに出かけない？」

そ、それって……デート……？い、いや、よく考えろ。楓子は幼馴染として出かけよ

うと言ってるだけだ。一人で浮かれるな。

「昼からなら大丈夫だ」

「本当！やった！」

楓子は小さくガッツポーズをする。それを見た瞬間、ドキツとして心臓が飛び出しそうになった。

「いつもの病院でしょ？だったらお昼に迎えに行くから待っててね！」

「お、おう」

楓子はそう言うと、自分の席に戻る。俺も席に戻ると、明日奈さん教室に入ってきた。

「みんな、おはよう！今日は一週間最後の日だけど、元気いっぱい頑張っていきましょう
！」

「一週間の最後は土曜ですよー！」

「が、学校での一週間ってことよ！はい！ホームルームは以上！」

明日奈さんは黒板に文字を書く。その間にみんな授業の準備をする。俺も教科書とノートを取り出し、準備をする。

「それじゃあ授業を始めます！号令！」

「起立！礼！着席！」

「昨日の続きからね、50ページを開いてね」

そして放課後、俺は帰る準備をしてると明日奈さんに書類を一緒に運んでほしいという頼みごとをされた。

「今日のは多いですね」

「あはは……職員室の私の机の上いっぱい置かれてて……。しかも高等部、中等部、初等部って分けられてたし」

その内高等部よりは量が少ない初等部と中等部は俺が持っている。道中、俺は横を振り向くと、その先の廊下で楓子が告白されてる場面を見た。俺は思わず足を止めてしまい、その光景を見る。相手は頭を下げると、数秒後、楓子も頭を下げる。そして、相手

は走ってその場から立ち去っていった。きっと断られたんだろう。そう思った途端、俺は安心してしまう。すると、楓子は俺に気づき、手を振ってやってきた。

「奨真君、もしかして見てた？」

「あ、悪い。見てた……」

「全然気にしてないわ。あと、その書類の山は？」

「明日奈さんの書類だよ。手伝ってほしいって言われて」

「じゃあ私も手伝うわ！」

「あ、ありがとう」

俺は楓子に初等部の書類を持ってもらった。明日奈さんは結構前に歩いてたから急いで追いかけた。

「あら、楓子ちゃんも手伝ってくれるんだ！助かるわ！」

「困った時はお互い様ですよ！」

俺たちは初等部、中等部、高等部の書類整理室に運び終え、明日奈さんありがとうと言って職員室に戻っていった。

「俺たちも帰ろうか」

「ええ」

俺と楓子はお互い家も近い。だから帰り道も一緒だし、一緒に帰ることが多い。家に帰る時は必ず楓子の家を通り、そこで楓子と別れる。

「じゃあね、また明日」

「ああ」

そのまま家に着き、俺は自分の部屋に入って着替える。ベッドで寝転んでいると、携帯が鳴った。見ると、俺の担当の先生から電話がきていた。

「もしもし?」

『やつほー! 奨真君元気ー?』

「元気ですけど、急にどうしたんですか紺野先生」

『明日義手の調整があるの覚えてるかなーって思って電話したんだけど』

「覚えてますよ……」

『ならよかった! あ、調整のついでに面白い機能とかつけてあげようか?』

「いりませんよ。つていうかあなた医者ですよね？改造とかできるんですか？」

『もちろんさー！だってそれを作った人と知り合いだよー！』

「それ理由になつてます？」

「この人は全く……。」

「とにかく、明日必ず行くんで、よろしくお願いしますよ」

『はいはい！それじゃあねー！』

俺の義手を作った人……か。俺もいろんなものを作るけど、義手とかそういつたものは作ったことがないからな。どんな人か気になる。

「褒真ー！(´)飯よー！」

「はーいー！」

俺は下に行つて晩御飯を食べ、そして風呂に入つてそのまま寝ることにした。

次の日、俺は朝から病院に行き、受付をしてからいつもの部屋に行く。扉を開けると、もう先生は待つていた。

「来たね、じゃあ早速！」

「ちよつと待つてください。その変な手つきはなんですか？」

「だって脱がなきゃ義手が見れないじゃん」

「自分で脱ぎますから」

俺は紺野先生に脱がされる前に上の服を脱ぎ、椅子に座り、右腕を見せた。そして紺野先生はドライバーなどの工具を取り出し、義手をいじっていく。やっぱりこの人医者じゃなくて整備士なんじゃないのか？

「やっぱりあなた整備士じゃ？」

「んー？ボクは医者だよー？これはボクの特技みたいなものさ」

「特技でこんなことができます？」

「できるからできてるんじゃないか。はい、終わり！」

俺は試しに右腕を動かしたり手を開いたり、握ったりした。うん、どこも悪いところはない。

「ありがとうございます」

「いいよいいよ。それで、この後楓子ちゃんとデート？」

「なっ!？」

「あれ?もしかして当たってた?」

デートではないけど、なんでわかったんだ!?

「なんでそのことを……」

「いや、適当に言ったら当たっちゃったんだよ。それで、奨真君は楓子ちゃんのこと

「が好きなんでしょう?」

「だからなんでわかるんですか……」

「それくらい誰でもわかるよ? 気づいてないのは楓子ちゃんだけじゃないかな? あー見えて楓子ちゃんは鈍いからなあ……。奨真君の好意に全く気づいてないみたいだし」

「やっぱり、ストレートに言ったほうがいいんですか?」

「さあ? それは君次第だと思うよ? ボクは君じゃないからね。ボクがしてあげられるのは背中を押すくらい」

「でも……それで今の関係が壊れてしまったら……」

「ぶつからなきや伝わらないことだってあるよ。例えば、自分がどれだけ真剣なのか……とかね! 迷ったら当たって砕けたらいいんだよ!」

「く、砕けていいんですか？」

「砕けなくなかったら意地でも成功しろってことだよ！」

「無茶苦茶だ……」

「ほら、用事があるんだから早く言ったほうがいいんじゃないかな？」

「そ、そうですね！失礼しました！」

俺は部屋を出て、病院を出る。すると、病院の前には楓子が待っていた。

「結構早かったんだね」

「そこまで時間はかからないからな」

「ふふっ、それじゃあ行きましょ！」

俺は楓子に手を引かれ、そのままショッピングモールに行くことになった。ここで何か買うのかな？

「何買うんだ？」

「もうすぐ夏休みでしょ？だから水着を買おうと思つて！」

「あーそんな季節だな。つて水着なら去年のがあるだろう？」

「もう！奨真君はわかつてない！女の子は毎年この時期に気合いを入れるために水着を買うの！」

「そ、そうなのか？」

楓子の去年の水着は凄え似合つてたから別に買い直さなくてもいいのに……。そうしてらうちに店の前に来てしまった。

「楓子、いいのがあったら呼んでくれ。俺は中を色々見て回るから」

「わかったわ！」

俺は店の中で一旦楓子と別れ、中を見ることにした。俺は去年のがあるから買い直さなくても大丈夫だな。そうだ、楓子の水着を探してみようかな。そして俺は女性用の水着コーナーに行った。

「お客様、こちらは彼女さんにプレゼントですか？」

「えっ？えっど……彼女ではないんですけど、幼馴染に……」

「ちなみにどんな体型ですか？体型に合わせてオススメをご紹介しますが」

「えっど……背は俺より少し低くて、体も少し細く、あとは……胸が大きい……」

最後ははずかしくて、小声になってしまったが、店員さんはそれを聞き取り、水着を探す。

「スタイルがいいんですね。でしたらこれはどうでしょう？」

普通のビキニタイプの水着だった。色は水色で楓子によく似合いそうだった。これだったら喜んでくれそうだ。

「ありがとうございます。早速幼馴染のところを持っていきます」

俺は楓子を探すと、ナンパされてる楓子を見つけてしまった。

「どっか遊びにいこーぜ」

「楽しませてやるからよ」

「楽しませてくれるんですね？」

あ……楓子のたまにしか入らないドSスイッチが入ってしまった。普段は普通に断る楓子だが、しつこい相手にはスイッチが入ってしまう。ならあのナンパ男はしつこく楓子につきまತ್ತたんだろう。

「じゃあ……スカイツリーのとっぺんからバンジージャンプしてくれませんか？ それを見れたらすごく楽しくなれるんですよ」

「「えっ？」」

「他にもライオンと格闘するところとか、あとは……そうですね、命綱なしのロッククライミングとか」

んな無茶苦茶な……普通ならあり得ないことなんだけど、楓子が言うとは何故か恐ろしく感じる。まあそういういたオーラを出してるんだろう。

「に、逃げよう！」

「お、おう！」

2人は逃げていった。俺は楓子に近づき、軽く肩を叩いた。

「相変わらずスイッチが入ったら怖いことばつか言うな」

「逃げられちゃった。ん？ 奨真君、それは？」

「楓子に似合うかなっと思って店員さんに選んでもらったんだ」

「私のために？」

「も、もちろん」

「嬉しい！ ありがとう奨真君！」

「それでいいのか？」

「ええ！」

「じゃあ買ってくるよ」

俺は楓子の新しい水着を買うために、レジに行く。会計を済ませて、外で待ってる楓子のところに行く。

「自分の水着くらい自分で買うのに」

「いいんだよ。俺からのプレゼントとでも思ってくれ」

俺は楓子に水着が入った袋を渡した。楓子はそれを受け取り、ありがとうと言ってきいた。俺はどういたしましてと言って、昼ご飯を食べるためにフードコートに向かう。もちろん、昼ご飯代も俺が出した。

「あれって奨真さんですよ？」

「はい……」

「デート……なのかな？」

白雪、繪、レミの3人も水着を買いにきたところたまたま奨真たちを見つけたみたいだった。

「選んでもらったらよかった……」

そして午後も色々と店を回って行く。そして今、屋上の休憩所のベンチに座っている。

「ねえ、夏休みのいつぐらいに海に行くかまたみんなで決めないといけないね」

「そうだな」

それからしばらく沈黙する。数分後、俺がその沈黙を破る。

「なあ楓子、この前告白されたとき振ってたけど、楓子って好きな人とかいるのか？」

「私?.....いるよ」

っ!?その言葉を聞いた途端、俺は無意識に口が動いてしまう。

「どんな男なんだ?」

ダメだ.....聞いたらダメだ.....。

「その人はいつも優しくくて、私のそばにいてくれて、困ってる人を見つけたらすぐに助けに行く人」

そつか……俺じゃないのか……。やっぱり楓子から見たら、俺はただの幼馴染か……。

「素敵な人なんだな」

「うん、もしかしたら、私の運命の人なのかもしれない」

「その人と結ばれたらいいな。俺は応援するよ」

俺は立ち上がり、屋上を出ようとする。

「そろそろ暗くなる。その前に帰ろう」

「えっ？う、うん」

そしてそのまま、楓子を家に送ることができた。でも、俺は楓子の顔をまともに見ることが出来ず、ずっと目を逸らしていた。俺も家に帰り、ベッドに寝転がった。

「はあ……」

俺は振られたのか……話を聞く限り、俺がその男に勝てる要素なんかない。それだったら大人しく身を引いたほうがいいな。

楓子 side

あの時、思わず奨真君のことが好きだつてことを遠回しに言っちゃったけど、気づいてないのかな？けど、奨真君はそれで少し様子がおかしかった。

「結局帰り道、顔を合わせてくれなかったなあ」

私は枕元に置いてある写真立てを手に取り、それを見つめる。そこには私と奨真君の高校入学祝いのツーショットの写真が収められていた。私はそれをそつと抱きしめた。

「奨真君……私は……あなたのことが大好きよ」

楓子 s i d e o u t

次の日、俺は特に用事もないけど、外をぶらつくことにした。商店街に来た時、たまサッチと出会った。

「やあ、偶然だな」

「そうだな、買い物か？」

「うむ、食材を切らしてしまつてな。買い出しというわけだ」

「食材じゃなくて惣菜の間違いだろ？」

「ばっ！馬鹿にするな！私だって料理くらいできる！」

「そういうことにしておくよ」

それだけ言つて、俺はその場から立ち去る。サッチをからかうのも面白いな。

「やることないし、あの人のところに行くか」

「君ねえ……ここは病院だよ？こんなところに来て何も無いよ？」

「わかってますよ」

「それで、ここに何しにきたの？」

紺野先生は薬品棚を整理しながら俺に聞く。

「特にないって言ったら怒ります?」

「別に怒ったりはしないよ。でも退屈じゃないの?」

「先生の話し相手くらいはできますよ」

「まあボクも今は仕事がないから助かるけど。でも、本当はきた理由があるんじゃないの?」

「はあ……この人はなんでもお見通しか……」

「実は……相談があつて」

「なになに?」

「俺……振られたかもしれません」

「どういふこと?」

「楓子に好きな人がいるのか聞いたら、いるって言ってる。『いつも優しくして、私のそばにいてくれて、困ってる人を見つけたらすぐに助けに行く人』らしいんですよ」

(これ絶対奨真君のことを言ってるよね……その本人は気づいてない……か)

今思い出したらまた悲しくなってきた。失恋ってこんなに辛い思いをするのか。

「本当に振られたの?」

「えっ?」

「奨真君は本人に告白して、そして振られたの?」

「告白は……してないですけど」

「だったら振られたかどうかはまだわからないね。奨真君は楓子ちゃんのが好きなんでしょ?」

「ま、まあ……はい」

「それならちゃんと好きって気持ち伝えないと、伝わらないよ。それに、楓子ちゃんのことって人が君じゃないとは限らないじゃん」

紺野先生は次々にアドバイスをくれる。聞いてるうちに少しずつ希望がでてきた。

「だからさ、自分の思ってることを正直に伝えたらいいんじゃないかな。そのほうがスッキリすると思うしさ」

「……そうですね」

「アドバイスになったかはわからないけど、自信はついた?」

「十分つきました」

「よし！じゃあ当たって砕けちやいな！」

「砕けないように頑張ります！」

俺は一礼してから部屋を出る。病院を出て、楓子の家に走る。昨日は帰り道顔を逸らし続けたから、そのことも謝らないと。いつもの商店街を抜けて、曲がると向こうから歩いてくる人とぶつかりそうになった。俺は咄嗟に避ける。そして走ろうとした時、何故か足が止まった。それと同時に腹のあたりに痛みが走る。俺は腹を抑えると、液体のようなものが手につく感じがした。

「なんだ……………これ」

手の平を見ると、真っ赤な血で染まっていた。倒れそうになると、後ろから肩を掴まれ、俺は後ろを振り向かされた。それと同時に、腹にさつきと同じ痛みが走った。きつとナイフのようなもので刺されてるのだろう。もしかしたら、さつきぶつかりそうに

なった人に刺されてるのだろう。俺はその場に倒れて意識を失いかけると、俺を刺した人の声が聞こえる。

「お前がいるから倉崎さんは振り向いてくれない。それならいつそのこと、お前を消せば……」

それを聞くと、俺はそのまま意識を失った。

白夜
s i d e

「これだけあれば十分だろ」

「そうですね」

俺とマシユは晩飯の買い物に出かけてる。あきらも誘ったけど、アルバイトがあると
言つてて断られた。

「あの、なんか騒がしくくないですか？」

「商店街の外からだな。帰るのが遅くなるが、ちよつと寄つてくか」

人が集まつてるところに行き、その中心を見る。そこには血を流して倒れてる人を見
つけた。

「つ?!?おい!!大丈夫か!!」

俺はその人の体を起こすと、見覚えのある……いや、俺の親友の奨真がいた。

「おい!! 奨真しつかりしろ!!」

「白夜さん!! 一体何が!! つて奨真さん!!」

「マシユ! 早く救急車に連絡を!!」

「は、はい!!」

その前に人がこうやって倒れてるのになんで誰も救急車を呼ばないんだよ!!

「救急車が来るまで止血しなきゃ!!」

「こ、これを使ってちょうだい!!」

たまたま近くにいたおばさんがタオルを渡してきた。俺はそれをもらい、出血してる腹を抑える。

「白夜さん!!もう少しできます!!」

「わかった!!頼む奨真!!絶対に死ぬな!!」

救急車が来るまで、俺は止血をする。けど、出血は止まらない。数分後、救急車は来て、奨真は中に運ばれる。

「君たちも乗って!!」

「はい!!」

みんなに連絡をしてから俺たちも救急車に乗り、病院に向かう。

白 夜 s i d e o u t

楓子 side

私はベッドで寝転んでる時、グループにメッセージが届いた。差出人は白夜君で、内容を確認した瞬間、私は息が乱れた。

「奨真君が……出血多量で……意識不明……」

すぐに病院に行かなきゃ!!

私は部屋を飛び出し、家を出て病院を目指す。途中で何度か信号に捕まったけど、なんとか病院まで辿り着く。緊急手術と聞いたから、私は手術室の前を目指す。手術室の前にはもうみんなが集まっていた。

「フーねえ!!しよーにいが!!しよーにいが!!」

ういういは号泣して私に抱きつく。私も抱きしめ返して、白夜君に状況を聞く。

「どれくらい経ったの？」

「まだ十分程度だ。いつ終わるかもわからない」

「そう……」

手術が終わるまで、私たちは沈黙して待っていた。でも、いつまでたっても手術は終わらない。そして沈黙を破ったのがイリヤちゃんだった。

「このまま手術が終わらなかつたら……」

「イリヤ!!縁起でもないことを言わないで!!」

「い、いめん……」

「でも、長すぎる」

衛宮君はそう言った。きつと私だけじゃなく、みんなそう思ってるはず。そう思っていると、手術中のランプが消えて、中から紺野先生が出てきた。

「紺野先生!! 奨真君は!! 無事なんですか!!」

「とりあえず傷口は塞いだけど、それでも命に危険が迫っている」

「そんな……」

「安心して! ボクがいる限り、絶対に死人は出させない!! そのためにも君たちの協力が
必要なんだ!!」

私たちの協力……。

「奨真を助けるためならなんだってする!!その方法は何ですか!!」

「今奨真君は全然血が足りない、だからA型の血を分けてほしい!!」

A型……だったら!!

「私の血を使ってください!!!」

「俺もA型だ!!」

「私もです!!」

「わ、私も!!」

「俺の血を使ってください!!」

「僕のも!!」

私と白夜君、レミとイリヤちゃん、蓮君と鴉さんは前に出て言った。紺野先生はついてきてと言つて、私たちはその後を追う。とある病室に入り、輸血を開始する。数分後、輸血は終わり、奨真君の容体はかなりマシになったらしい。

「みんなの協力があつて助かったよ。一命を取り留めたけど、いつ意識を取り戻すかわからない」

「なんで……こんなことに……」

「刺された後があるとなると、襲われたということだな。手がかりは全くないが、犯人探しを始めよう。我々を怒らせたことを後悔させてやる」

「私はここに残るわ」

「えっ?!? 楓子姉さんなんで!?!」

「もし奨真君が起きた時に誰もいなかったら寂しいでしょ? だから、私はずっと彼の側にいるわ」

「うむ、私もフーコに頼もうと思っていた。よし、我々で手分けして探すぞ!」

「!」「!!」「!」

みんなは病室から出て、手がかりを探しに行く。私はいつ目覚めるかわからない奨真君の手を両手で包む。

「お願い……早く目を覚まして……」

奨真君が意識を失ってから一週間が経った。それでもまだ奨真君は目覚めない。それだけじゃなく、犯人の手がかりも掴めていない。私は学校が終わって、いつものようにお見舞いに行く。

「奨真君……」

「一週間が経ったね。でもまだ彼は目覚めない」

「紺野先生……」

「正直、彼が生きているのは奇跡に近いよ。普通ならここに運ばれた時点で死んでいた。でも、彼は何とか生き延びた」

「このまま目が覚めなかつたら……」

「それはないよ。奨真君にはやらなきやならないことがある。それを終えるまで、彼は絶対に死んだり、植物状態とかになつたりはしないよ。それに言つたでしょ？ボクがいる限り、絶対に死人は出させないって」

そうだった。紺野先生はすごい医者だった。先生がいる限り、絶対に死人は出させないっていうのは本当のこと。先生が患者の治療をしたらどんな病気や怪我也も治していた。そんな先生が失敗なんかするわけない。

「そうでしたね……。ならば彼がいつ目が覚めてもいいように側にいるだけ」

「そうしてあげて。彼もきつと……。いや、絶対喜ぶよ」

先生は言い直して、満面の笑みで答えた。絶対に喜ぶ……。か。

「あ、ここだったんだ」

「えっ？」

声が届いてきた方を見ると、この前告白してきた男子生徒が来ていた。でもなんで……。

「な、なんで……」

「ん？知り合い？」

「橘君が意識不明なのは本当だったんだ。チツ……」

「っ!?!君……何か隠してないか？」

「えっ？何のことですか？」

「とぼけても無駄だよ。君のその表情は作り物だ。お見舞いに来るだけなら作り物の顔をする必要はないはずだ」

どういふこと……彼は奨真君が意識を失ったことと関係があるの？

「あなたは何か知ってるの？」

「だから何もないうて。何でそんな風になるのさ」

「いろんな人たちを見てきたボクを舐めないでほしい。ボクは医者だ。人のいろいろな顔を見てきたさ。だから君のその作り物の顔だつてすぐにわかるよ」

「……………はあ、まさか君にここまですごい知り合いがいたとはね……………」

「何か知ってるのね。答えて」

「この人の前では嘘言ってもすぐにバレそうだし、本当のことを言うよ」

何なのこの人……一体何を知ってるの……？

「橘君を刺したのはね……」

「僕なんだ」

「っ!？」

それを聞いた私は驚きを隠せなかった。なぜ奨真君を刺したのか、何で殺そうとしたのか。私はどうしてもそれがわからない。

「何で……そんなことを」

「だって君は好きな人がいるって言って断つただろ。だったらその人がいなくなればいい」

「だからって何で奨真君を!!」

「君、橘君が好きなんだろう。そんなことくらい誰でもわかる。だから橘君を刺したのさ。けど、計画は失敗。橘君は見事に生き残った」

私は許せなくなった。だから私は彼に近づき、ビンタしようとした。けど、それよりも早く、紺野先生が彼に近づき、胸ぐらを掴んだ。

「ぐっ……」

「君……人の命を何だと思ってるんだ!!!」

「きゅ、急に何なのさ」

「告白を断られて、彼に嫉妬するのは構わない。けどね、自分の都合で人の命を奪おうとするなんてふざけてる!!!その行為はきつと誰も許さないさ!でも、医者であるボクは誰よりも君を許さない!!!」

「紺野先生……」

たしかに医者である紺野先生は許さないと思う。でも、私は紺野先生が思ってるよりも、彼のことが許せない!!

「いい!人の命ってね、1つしかないの!それを奪うということは、その人の夢も、何もかもを奪うことになるの!!君はそれがどれほど重いものなのかわかってるの!!!あと、これだけは言っておくよ……人の命ってのは奪うものじゃない、次の世代へと繋ぐものなんだよ!!!」

「紺野先生、彼を離してください」

「楓子ちゃん……」

私が言うと、先生は離してくれた。私は先生と代わって彼の前に立つ。

「ゲホツゲホツ……く、倉崎さん……僕の元に来る気になったのかい」

この人は……先生にあれだけ説教されたのに、まだ呑気なことを言ってるの？怒りを乗り越えて呆れてしまうわ。でも、私は1発ビンタをしないと気が済まない。だから、私は彼の頬を思い切りビンタした。

（バチン!!!）

「痛っ!!」

「二度と私や奨真君に近づかないで」

「え、な、なんで！」

「そうか、お前が犯人だったのか」

部屋の外から声がして、そっちを見ると、見舞いに来てくれた式と藤乃さんが来ていた。

「浅上、あいつらに連絡したか？」

「ええ、彼らだけじゃなくて、警察にも連絡しておきました。話を聞く限り、立派な殺人未遂でしたから」

「く、クソ!!」

「逃げても無駄だぜ。外に出る頃にはあいつらがいるからさ」

あいつらつって……きつとサツちゃんたちね。今頃彼はみんなから罰を受けてるに違いないわ。

「全く……あんなに心がイかれた人は初めて見たよ」

「先生、とても素晴らしいことを言っていましたよ」

「えっ……あーなんか恥ずかしいな」

「外で聞いてきましたが、とても素晴らしかったですよ」

「あれは誰でも心に響くと思うぜ」

私たちはそんな感じで話していると、サツちゃんたちが中に入ってきた。

「楓子、あの男は我々が痛い目に合わせておいた。今頃パトカーの中さ」

「当然の報いね」

犯人も捕まったし、あとは彼が目覚めるだけ。私は彼の手を両手で包み込むと、彼の指が少し動いた。勿論私はそれを見逃さない。奨真君に声をかけると、奨真君は少しずつ、瞼を開いていく。

「うう……ここは……」

「奨真君!!!」

私は嬉しくて、彼に抱きつく。奨真君は何があつたのかわからない感じで困つていた。

「ど、どういう状況なんだ？あと、楓子苦しい、離して」

「嫌！離さない！ずっとこうする！」

「目が覚めたのだな」

「やっと目が覚めたのか」

「よかったです!!」

「本当によかったです!!」

「目が覚めてよかったですよもう!!」

「よかったの!」

「しょーにいい!!」

「心配した」

「よかったです……です!」

「もう怖くて夜も眠れなかったんですよ!!」

「心配したよ全く……」

「もう！心配したんですよ!!」

「心配したんだよ！」

「ようやくお目覚めか……」

「本当によかったです！」

「目が覚めてよかった」

「よかった！本当によかった！」

「全く……心配したよ」

「ふ、ふん！心配なんか……じでないん……だからね！」

「痛みとかないか！」

「もう！お兄ちゃん！目が覚めたことを喜ぼうよ！」

「安心したわ」

「よかった……」

サツちゃん、白夜君、鴉さん、タクム君、チーコ、あきら、ういうい、美早、綸、白雪、レミ、ジャンヌ、ニコ、マシユ、アルトリア、リサ、蓮君、オルタ、衛宮君、イリヤちゃん、クロエちゃん、美遊ちゃんの順番で言った。オルタはあー言ってるけど、泣いてるじゃない。

「俺……確か刺されて……」

「白夜君とマシユが病院に連絡してくれて、紺野先生が治してくれたわ」

「ボクだけじゃないよ。君たちの協力があってこそだよ」

「そっか……みんな、助けてくれてありがとう」

「気にするな。それに、我々よりもフーコのほうが心配していたよ。久しぶりに2人だけになって話でもしてみるといい」

サツちゃんが言うと、みんな部屋から出て行った。式は私の方に向くと微笑み、藤乃は『ごゆつくり』と言って出て行った。みんなが出て行ったあと、少しだけ沈黙が続く。けど、それも一瞬、それを破ったのは奨真君だった。

「その……心配してくれてたんだな」

「当たり前よ！」

「うう……その、楓子に謝らなきゃいけない。この前出かけた時、その……途中で無視したりしてごめん」

「そんなこと気にしてたんだ」

「そんなことって！俺にとっては本当に悪いと思ってたんだ！」

「ふーん。なら、今度また出かけよう！それで許してあげるわ！」

「そ、それだけでいいなら……あと……その……」

「どうしたのかな？急に歯切れが悪くなったけど……」

「む、胸が当たってるんだけど……」

「えっ?」

私はあれからずっと抱きついてたせいで、奨真君の胸板に私の胸が当たっていた。そうだ、ちよつとからかってみようかな。

「あらあら、エツちな奨真君♪」

「うぐっ……」

「ふふっ冗談よ」

「やめてくれよ全く……あ、そうだ」

「どうしたの?」

「楓子、聞いて欲しいことがあるんだ」

楓子 side out

俺は目が覚めたばかりだけど、俺はあの日、楓子に会って言おうと思ってたことを言うことにした。

「楓子、俺……お前のことが好きだ。1人の女性としてだ。俺は、だんだん魅力的になつていくお前のことが好きなんだ」

「えっ?」

「ごめんな、お前にはもう好きな人がいるのに、告白なんかして……迷惑だよな」

でも、言うことを言った。俺は後悔していない。これで振られてしまったら、また新しい恋を見つけなければいい。そう簡単にはいかないと思うけど。

「迷惑じゃないよ」

「えっ?」

俺は驚いて顔を上げる。すると、目の前には涙を流した楓子がいた。

「だって……私の好きな人って……君だから。その君から告白されて、迷惑なわけないよ……」

「でも、俺は楓子の好きな人に全く当てはまってないよ」

「もう……鈍いんだから。あれは奨真君のことを言ってたのよ」

「そ、そうだったのか……それで……その……返事を聞かせてくれないか」

返事を聞かないや……たとえ両思いだったとしても、それだけは聞きたい。

「私もあなたのことが大好きです！私と付き合ってください！」

俺はそれを聞くと、楓子を抱きしめる。なんでだろう、今は楓子を離したくなくて仕方がない。

「なああ楓子。俺……我慢できなくなってきたかもしれない……」

「あ、ちよつと待っててね。紺野先生に病室の鍵をかけていいか聞かないや」

楓子は立ち上がると、一度病室を出る。数分後、楓子は帰ってきて、鍵を閉めて、カーテンを全て閉める。そして、ベッドに乗ると、布団の中に入って服を脱ぐ。

「初めてだから……優しくしてね？」

「それは大丈夫だ。俺も怪我は完治してないんだし」

それから俺と楓子は少しの時間だが、幸せな時間を味わった。

「なああ楓子……」

「なあに？」

「えつと……その……気持ちよかったな……」

「そうね、直接じゃなかったのは残念だったけど」

「そんなことして妊娠したらどうするんだよ……」

「私は構わないわよ？」

「俺がダメなの」

い。今、俺と楓子は同じベッドで寝ている。もう動けない……動いたら傷が開きそうで怖い。

「あー早く退院したいなあ」

「一週間後には退院できるわ」

「一週間かあ」

「夏休みが終わる前に、みんなで海に行きましよう！」

「まだ行つてなかったのか？」

「当たり前よ、奨真君一人置いてはいけないよ」

「あ、ありがとうな」

「ふふつ……ねえ奨真君、このまま寝てもいい？」

「構わないよ」

俺がそう言つて頭を撫でると、楓子は気持ちよさそうに眠つた。でも……本当によかつた。ぶつからなきゃ伝わらない……か。紺野先生、あなたのおかげです。

「ヘクチツ！うーん風邪でも引いたのかな……」

あれから1週間が経って、俺は無事退院できた。そしてみんなと海や夏祭りに行つて、新学期を迎えた。俺を刺した犯人は学校は勿論退学、そして家からも追い出された

らしい。今そいつがどこで何をしてるのかは誰にもわからない。

「しよーにい！遊んでほしいのです！」

「わ、わかったから……」

「ういちゃんって奨真さんのことが本当に好きだよねー」

「イリヤも人のこと言えないじゃない」

「な、なんでお兄ちゃんの話になるの!?!」

「あれくお兄ちゃんとは一言も言っていないんだけどなあく」

「イリヤ……」

ある日はういういたちと遊んだり。

「男4人で出かけるなんて久しぶりだな」

「いつもは女子の1人はいたからな」

「なんか新鮮だな」

ある日は俺と白夜、蓮と士郎の男4人で出かけた。

「先輩！体力危ないです！」

「なに、心配無用だ！」

「私が回復してあげる！」

「チーちゃんは僕が守る！」

ある日はサツチたちとゲームしたり。

「寿也！やん！そこはダメエ！」

「ちよ、ちよつと！やうん！」

「……………」

ある日は寿也に胸を揉まれてるマシユとジャンヌを見たアルトリアを慰めたり。

「……はこの公式を使って……」

「白雪さんの説明は……わかりやすいです」

「奨真さんとは全然違いよ！」

「悪かったなわかりにくくて」

ある日は白雪と一緒に綸とレミの勉強を見上げたり。

「おらー！」

「流石ニコ」

「百発百中なの」

ある日はニコとあきら、美早の3人と射的ゲームをしたり。

「奨真君！どこかに出かけよう！」

ある日は楓子とデートをしたり。

そんな感じの日常を過ごしてるうちにいつのまにか数年が経った。みんなは自分のやりたいことを見つけて、それに向かっていった。そして、みんな自分のやりたかった職業についた。俺は明日奈さんの旦那さん、和人さんのところで物の開発をしている。そして、その日の仕事も終えて、家に帰る。

「ただいま」

「おかえりなさい！」

「おかえりなさいーい！」

俺を迎えてくれたのは、妻である楓子と俺たちの子供だった。先にご飯を食べて、その後、風呂に入る。風呂から出てくると、楓子は子供達と何か見ている。

「それは？」

「アルバムよ」

「これパパとママなんだ！」

「懐かしいな」

「ねえねえ！パパとママはどんな風に結婚したの？」

「話すと長くなるぞ？」

「そのまま話しても面白くないから、物語みたいに教えてあげるわ」

「わーい！」

「じゃあ教えてあげるよ」

「これは

「パパとママが結ばれる恋物語」

………
完。

第14話 レイカー&ブラッド

俺はジルバのとなりに行き、4人の戦いを見ることにした。なんでかわからないが、こいつはあの2人とは違う感じがする。

「なああんた」

「……………なんだ」

「なんでPKなんかするんだ？」

「……………」

答えない……………か。まあ後で教えて貰えばいいか。さて、4人のデスマッチを見るか。

アップルデイガーとサンドレックス。どんな力なのかはわからないから、まずは様子を見ないと……。

「速攻でケリをつければいい！」

「あ！ブラッド待って!!」

「突っ込んできたか！俺たちのコンビネーション見せてやろうぜ！」

「おうとも！」

2人はブラッドから逃げながら、オブジェクトを破壊する。必殺技ゲージを溜めてるのね。私も今のうちに稼がせてもらおうかしら。

「よし！今だ！シロップシート！」

「っ!?な、なんだこれ……動けない……」

デイガーは粘液のようなものを吐き出し、足元につける。ブラッドはそれを踏むと、動かなくなった。

「そらよつと!!ストーンバレット!!」

動かなくなったブラッドに向かって、その辺に落ちてる石を銃弾のように投げつける。

「レイカー！手出しするな！」

「そのまま死ね!!」

「腕が動けば十分だ。俺には物の死が視える。そこだ！」

ブラッドはナイフを石に当てると、石はポリゴン状になり、消滅する。でも、ブラッドが動けないままじゃ不利ね。

「ウインドベール!!」

だから私は粘液を風で吹き飛ばした。これなら大丈夫。

「サンキュー」

「私がディガーをやるわ。ブラッドはレックスをお願い」

「いいぜ、そっちは任せた」

私たちは走り出し、距離を詰める。すぐに背後に回り込み、2人を引き離す。

「分散させる気だったのか！」

「あなたの相手は私よ。レベル8を甘く見ないでね」

「や、やってやるよ!!」

「バラバラにしてやるよ」

「できるならやってみるよ!!」

見たところ、デイガーはサポートするタイプね。さっきみたいに動けなくしたりする技を使ってくるかもしれない。なら、近距離でも遠距離でもどっちでもいけるわね。

「やあーせいー！」

「お、俺はサポート専門だつてのに！」

やっぱりね……バフの効果を長くするようにステータスを上げたみたいね。だから肉弾戦は不利みたい。なら、このまま押しきるのみ！

「まだまだいくわ!!」

「レックス！助けてくれ!!」

「無理だ!!こつちもやばい!!」

ブラッドのほうは余裕みたいね。私も負けていられないわ！

「ファイアーコンベクション!!」

「ぐああああ!!!」

最後に飛び蹴りをして、デイガーを遠くに蹴り飛ばした。私はゆつくりとデイガーに近づくと、デイガーは逃げるように離れようとする。けど、ダメージが大きいせいか、まともに動けていない。

「し、死にたくない……まだこの世界で死にたくない!!」

「そう思ってる人はたくさんいるわ。でもね、あなたはそう言ってる人を無視して無限PKしてたのよ」

「こ、心を入れ替えますから!!」

「もう遅いわ」

私は足を蹴り上げて、デイガーの頭を空に吹っ飛ばした。HPがゼロになったデイガーはポリゴン状になり、消えていった。

「デイガー!!!」

「余所見してるほどの余裕があるのか？」

「くそお!!」

圧倒的にブラッドが押ししてるわね……。でも、まだレックスのHPはかなり残ってるわ。じわじわと削ってるのかな？

「ふん、そんな見え見えの攻撃じゃ当てるのは無理だぜ？」

「なんで当たらないんだよ！」

「そんな豪快に腕を振り上げても当たるかよ……俺みたいにこうやらなきや」

そう言うと、ブラッドは素早くナイフで斬りつける。その動きには全く無駄がなかった。

「この野郎!!」

「ほら、頑張れ。俺はここにいるからさ、当ててみる」

「動くんじゃねえよ!!」

「動かない敵がいるもんか」

あれもう遊んでるようにしか見えないわ……。私の戦いは終わったし、エイトのところに行って見てようかな。

「はあ……もう終わりか？」

「はあ……はあ……くそ……なんで当たらねえんだよ……」

「そんなんでよく三銃士なんか名乗ったな……やっぱりただのごっこ遊びか……」

「お……俺は強い……強いんだよ！」

「いいや、お前は弱い。あのジルバってやつの方が強そうに感じるのよ。なんていうのかな……情報圧っていうやつか？」

「俺は……あいつよりも強い!!」

「おっと……怒らせちまったか……。こいつにとっては逆鱗みたいだな」

「誰よりも強い!!強い強い強い強い強い強い!!」

レックスの様子がおかしくなってるわ……。それに……あの感じは……

「負の心意……」

「エイトもわかるの……」

「前にクロムディザスターになった時に感じた。間違い無く、あれは負の心意だ」

なら、彼があのまま負の心意に飲まれれば、災禍の鎧みたいになるってこと……？

「ん？なんか変なものが出てきたな。ちよつとまずいかな」

「死ね!!!」

「おつと!?!」

負の心意を帯びた腕をブラッドに振り下ろすレックス。ブラッドはナイフで軌道をずらして回避したけど、振り下ろされた腕は地面に当たり、その跡は小さなクレーター

ができていた。

「やればできるじゃねえか」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ
!!!!!!!」

「けど、遊びは終わりだ。これも少し本気でいく」

遊びは終わり。ってことは、直死の魔眼を使うのね。

「直死……」

「死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね
!!!!!!!」

「死が………俺の前に立つんじゃない!!」

ブラッドはまるで線をなぞるようにナイフを振り、レックスを斬りつける。二人はす

れ違うと、レックスは止まり、体がボロボロに崩れていった。そしてHPはゼロになって、ポリゴン状になった。

「おい、終わったぜ」

「二人ともお疲れ」

「ありがとう！」

「……………見事」

えっ？この人…………敵の私達を褒めてるの？

「良い戦いだった…………」

「あんた…………俺たち敵だぞ？味方も永久退場なのに褒めるのか？」

「関係ない……。良い戦いに……。敵も味方もない……。それに……。俺は……。感謝もして
いる」

「「感謝？」」

「あいつらには……。無理やり付き合わされていた……」

「なら、PKをしていたのはそれが理由か？」

「もう一つ……。理由がある」

理由……。もう一つ理由があるというの？

「己の器を測るため……。だから、お前に勝負を申し込む……」

「俺？」

「エイトに勝負を申し込むというの？己の器を測るために……。エイトはどう答えるの？」

「望むところだ。こっちからお願いしようと思ってたしな」

「……………感謝する」

二人はさつきまで私たちが戦っていたところに移動し始める。私とブラッドはその勝負を遠くから見ることにした。

「あいつ……………結構強いぜ」

「どうしてわかるの？」

「情報庄だよ。あとは俺の勘」

情報庄ね……。でも、たしかに他の人にはない感じがする……。エイト、気をつけて。

第15話 ジルバの実力・新たな魔眼

「そろそろ始めようぜ」

「……………ああ」

背中のガンブレードを手に取り、構える。ジルバは強化外装を持っていないく、素手で戦うみたいだ。でも、もしかしたら必殺技が飛び道具の可能性もあるかもしれない。警戒しておかなきゃな。

「……………ゆくぞ」

「っ!?!速い!?!」

咄嗟に剣をクロスさせ、拳を防ぐ。そのまま押し返して、俺は蹴り上げる。ジルバは

後ろに飛んで後退し、俺の蹴りを避ける。

「速いみたいだが、そこまで重くはないんだな」

「……………」

「今度はこつちからだ!!」

俺は急接近して、両手の剣を振りかざす。だが、ジルバも対抗して、攻撃を仕掛ける。俺の剣とジルバの拳が激しくぶつかり合い、周りのオブジェクトは吹き飛んでいった。その時、俺の剣から嫌な音がした。

（バキン！）

「なっ!?!」

「……………もらった」

「があー！」

俺の剣が二つも真つ二つに割れ、ジルバに腹を殴り飛ばされた。地面を転がり、勢いが収まって殴られた腹を見ると、少し凍っていた。

「なんだ……これ」

「俺の強化外装、アイスグローブ」

「まさか……あの時に俺の剣を凍らせていたのか」

「強化外装はなくなった。さて、どうする」

武器の強化外装はないけど、俺にはまだ心意が残ってる。

『トレース・オン
投影開始』

俺はエミヤが普段使っている武器を投影した。ギルガメッシュとの戦い以降使つてなかつたが、やつぱりしつくりくる。

「まだ持っていたか……なら……それも壊すまで」

「同じ手を通じると思うなよ！」

俺とジルバは互いに接近して、攻撃を仕掛けた。さつきと同じように、ジルバの拳と俺の剣がぶつかり合う。だが、俺はさつきと全く同じことをしていない。俺は一度しやがみこみ、足を引っ掛けた。

「っ!？」

ジルバは驚き、そのまま倒れて、俺は剣を振りかざしたが、間一髪のところで避けられた。

「なぜだ……なぜお前の剣は壊れない」

「気づいてると思ってたけど、その様子だと、気づいてないみたいだな」

「なに……？」

「剣でお前の拳を防いでたと思ってただろ、正確に言えば、軌道をずらしていたんだよ」

「だから剣は凍らない……か」

「そういうことだ!!」

俺は距離を縮め、至近距離から攻撃する。流石にジルバも防げなかったのか、俺の剣が直撃する。クリティカルヒットは出ただろう。

「くそ………なら、軌道がずらせないようにするだけだ」

すると、ジルバは自分の拳を上上げると、その周りに氷が集まっていき、巨大な手となった。まさか、あれで攻撃する気か!?

「潰れろ」

ジルバの拳が目の前に迫る。俺は投影した剣で防ぐが、そのまま押される。もしこのまま建物と激突すれば、俺のHPはかなり消えるだろう。その前に踏ん張らなきゃ。

「いんのおおおおお!!!」

足を地面に思い切り力を入れ、俺は踏ん張る。けど、勢いは止まらない。地面が削れる度に俺の必殺ゲージは溜まっていき、やがて満タンになる。

「unlimited blade works!!」

固有結界を発動して、無数の剣で拳を防ぐ。やがて勢いは死んでいき、止まった。

「はあ……はあ……はあ……」

「しぶとい……」

「これでケリをつける!!」

俺は走り出し、接近する。もちろんジルバは構えるが、俺は滑り込み、下を取る。剣を振り、ジルバの両足を斬りつける。バランスを崩したジルバは膝から崩れ落ちそうになったが、地面に手をつけて体を回し、体勢を立て直した。だが、俺にとってそれは予想済み。剣を自由自在に操り、ジルバの背後から剣を刺し、俺はトドメを刺しに行く。

「まだまだ!!」

ジルバは拳を地面に勢いよく当てると、地面から氷でできた岩が飛び出してきた。けど、そんなものは俺には通用しない。飛び出してきた岩を両手の剣で全て斬り、ジルバとの距離はゼロ距離になる。

「……………無念」

「もらったああああ!!!」

ザシユツ

首を刎ねると、ジルバの体は倒れこみ、HPがゼロになってダウンした。それと同時に固有結界が解けて、元の世界に戻る。

「エイト!!」

「うおっ!？」

レイカーは猛スピードで俺に抱きついてきて、倒れそうになったが、なんとか耐える。その後ろからブラッドも近づいてきた。

「いい戦いだっただぜ。見てるこっちも興奮したよ」

「なかなかの強敵だったよ。さて、ジルバが復活するまで待つとするか」

それから1時間が経ち、ジルバは復活する。

「……………」

「立てるか？」

俺はそつと手を差し伸べると、ジルバはそれを掴んで立ち上がる。

「お前は……………俺の想像上の強さを……………持っている」

「お前も強かったぜ。次戦ったら、今度は負けるかもしれない」

「フツ……………あと気づいたが」

「ん？」

「お前には……………もう一つの力が隠れている。邪悪な力が……………」

「「っ!?!」」

「……………どうということだ……………。邪悪な力って……………まさか……………災禍の鎧の……………」

「でも、エイトの邪悪な力って災禍の鎧のことよね？それならもう取り除いたはずよ!!」

「自分の身から取り除いても……………心からは簡単には取り除けないとしたら……………どうする……………」

「そう言われても……………俺にはまだわからない。」

「俺なら克服するな」

「ブラッド？」

「だってそうだろう？ 取り除けないものなら、それをコントロールできるように克服するしかないだろ」

「それも一理ある。けど、コントロールなんて……災禍の鎧をコントロールするなんてできるのか？」

「今は……災禍の鎧が……覚醒しなくても……いつか必ず……どこかで出てくる……それまでに……どうにかすれば……いい」

「……」

「エイト……」

「ま、そういうのは仲間にも相談すればいいだろ？ お前には黒のレギオンの奴らがいるじゃねえか」

ブラッドの言う通りかもしれないな。一人で抱え込むよりも、仲間に相談した方がいいもんな。

「そうだな」

「俺は帰る……楽しめたからな」

「ジルバ、お前はレギオンに参加してるのか？」

「……………レオニーズ」

レオニーズ……青のレギオンか。

「なら、いつか領土戦をする日が来たら、また戦おう」

「……………望むところだ」

ジルバはそう囁くと、その場から去っていった。俺たちも帰るために帰還ポータルに向かう。その途中、ある人物と出会う。

「あれ？式さん？」

「おい……ここでリアルネームは禁止だ。藤乃」

「あなたも言ってますよ？」

「ブラッド。この人は？」

「アメジストマインと申します。リアルネーム浅上藤乃です」

「いやいやいや!!リアルネーム言ったらダメだろ!？」

「この人って天然なのか!？」

ん？浅上藤乃？どこかで聞いたような……。

「あ、空の境界の登場人物の人!？」

「ご存知なんです。なら、リアルネームを言っても問題ありません。あなたたちのことは式から聞いてます」

「どういうことだ？」

「ちよくちよく連絡を取ってな。その時にお前たちのことを教えた」

「近々会いに行きますので、その時はよろしくお願いしますね」

「お、おう」

「あ、その前に……盗み聞きとは感心しませんね」

マインは横を向くと、何か呟いた。

「凶れ……」

「ひっ!?!」

マインが凶れというと、近くの電柱がへし折れて、地面に落ちる。すると、その後ろから小さな悲鳴をあげて誰かが出て来た。

「ぬ、盗み聞きしてたわけじゃありません!! えつと! たまたまエイトさんと先生を見つけたのでおどろかそうかなーと思ってただけなんで!!」

「あ、アングル?」

「お前何してんだ?」

「な、何もしてません!! 今言った通りのことなんで!!」

「なるほど、エイトさんのご友人でしたか」

「そ、それより!!なんで電柱がへし折れたんですか!？」

たしかに気になるな……。凶れって言ったただけであんなことができるなんて……。

「ねえマイン。もしかして、あなたのアビリティって歪曲の魔眼？」

「ええ、よくわかりましたね」

「映画と一緒だからね。それに、ブラッドも直死の魔眼を持つてるから、もしかしたらと思っていたわ」

さすがレイカーの観察眼だ。そんなすぐには気づかないはずなのに、レイカーはすぐに気づいた。

「というかお前今鮮花と一緒にいるって聞いたけど」

「彼女なら少し出かけてるので、暇でしたから加速しました」

「なるほどな」

その人も空の境界に出て来た人だな。

「さて、そろそろ帰ろう。今日の目的だった三銃士も倒したし、当分何も起こらないだろう」

「ふふっ、そうね」

「ええ!?!三銃士を倒したんですか!?!」

「でも弱かったわよ?アンクルでも余裕で倒せたわね」

「そ、そうでしょうか？」

そんな感じで話しながら、俺たちは現実世界に帰った。

数日後……

俺たちネガ・ネビユラスやいつものメンバーで集まっていると、式が藤乃を連れてきた。藤乃は軽く自己紹介を済ませたが、俺たちはどうしても聞かなきゃダメなことがあった。

「初めまして、浅上藤乃と申します。あの……どうしてそんな目で見るんですか？」

「いや……だって……」

「うん……この人のおっぱいもいい!!」

「なんで寿也に胸揉まれて平然としてられるんだよ!？」

「」「うんうん!!」「」

これは全員が思ってることだった。だからこそ、言いたくなかった。

「えっ?あ、そういえばそうでした」

藤乃はそう言うけど、剥がそうとはしなかった。あとは……。

「白雪さん……落ち着いて……ください!」

「藤乃さんだ!!藤乃さんだ!!」

「あんたねえ!いいから落ち着きなさいっての!!」

綸とオルタが必死に白雪を抑えていた。あの二人も大変だな……

「ひゃうん!!」

少し目を離しただけなのに、いつのまにか寿也はマシユの胸を揉んでいた。

「ねえ奨真君」

「ん?」

「寿也君のあれってある意味才能なのかな?」

「……………だろうな」

将来役に立たない才能だと思っけどな。そんなことを思いながら、その日はみんなと楽しく過ごした。

第16話 訪問

俺と楓子、ジャンヌはいつものように学校で話していると、同じクラスの男子、『高橋』が急に話しかけてきた。

「なあ橘。明日奈先生ってどんなところに住んでんだらうな？」

明日奈さんの家か……。今までは全く気にしてなかったけど、ちよつと興味があるかも。

「この学校に来てるってことは遠くはないんじゃないか？でも急にどうした？」

「いやー遊びに行ってみたいなーと思って」

「私も行ってみたい!!」

「私も!!」

俺と高橋の会話を聞いた女子『上野』と『相葉』が急に出てきてそう言ってきた。

「でも、行きたいって言っても明日奈先生の許可を貰わなきゃいけないんじゃない?」

楓子の言う通り、いくら行きたくても本人から許可を得ないと行くことはできない。それに場所も知らないし。

「あ、じゃあ明日奈先生が来たら聞いてみたらどうでしょうか?」

ジャンヌが提案を出すと、みんなそれに同意する。もし行けたら白雪とオルタも誘うとしよう。

「みんな席につけー、出席を取るぞー」

担任の先生がそう言いながら入ってきて、その後ろから明日奈先生も入ってくる。今からホームルームだし、終わったら聞いてみるか。

「突然だが、席替えをしまーす」

「「「ええっ!?!」」」

急だな……。席替えだったら隣にいる楓子とは離れ離れになるかもしれない……。か。それは嫌だなあ。

「文句は無しだぞー。席はくじ引きだー」

一人一人くじを引いていき、俺の番が来た。箱から紙を一枚取り出し、担任に渡す。席は……。窓側か……。俺の2つ後ろがジャンヌか。

「奨真君の隣がいい」

楓子はそう言ってくじを引く。俺も楓子と隣がいい。担任は楓子に席を言うのと、楓子は大喜びしながら俺のところに来た。

「やった!! 奨真君の隣!!」

「また宜しく頼むよ」

「えええ！」

そして1時間目は席替えだけで終わってしまった。明日奈さんが教室を出ようとするところを見た俺は、朝みんなで話してたことを思い出して、呼び止めた。

「明日奈さん！」

「奨真君? どうしたの?」

「あ、実は高橋や上野たちが明日奈さんの家に遊びに行ってみたって言ってたから。」

明日奈さんさえよければ行ってもいいですか？」

「もちろん！今度ユイちゃんを紹介するつて奨真君と楓子ちゃんには言つてたし、家を教えるから今度の土曜日は是非遊びに来てね！」

「わかりました！」

明日奈さんの許可を得た俺は楓子たちに伝えてきた。もちろんみんな大喜びだった。放課後、白雪たちを誘いに行くか。

土曜日……

近くの公園で待ち合わせをした俺たちは全員集合して、明日奈さんに教えてもらった家に向かって行く。

「なあ橘」

「んー？」

「お前ってさー。倉崎さんっていう超絶美人の彼女がいるのに、なんで周りに可愛い女の子がいっぱいいるんだよ!!」

「は？」

「えっ？」

「か、可愛い!？」

高橋がそう言うと、オルタ、ジャンヌ、白雪の順番で三人は言った。

「そんなこと言われても……」

「ていうか白雪ちゃんなんか俺のドストライクゾーンだし!!なんで早く紹介してくれなかつたんだよ!!」

「お前のストライクゾーンが白雪とか初耳だ!!」

「全く……高橋は昔から変わらないわね」

「上野さんは高橋君とは昔からの知り合いなの？」

「そうよ！小学校の頃からの腐れ縁ね。ちなみに相葉とは中学の頃からの親友ね」

それも初耳だな。おっ？そろそろ着きそうだな。

「ちよつと奨真。まだなの？」

「もうすぐだ」

ニューロリンカーの地図を見ながら歩き続け、目的地に到着した俺たちは、明日奈さんの家を見た瞬間黙り込んだ。

「「「で、でかい……」」」

あの人ってこんな大きい家に住んでるのか？相当金持ちなんだな……。

「と、とりあえずベルを押そう」

扉の前に近づくと、ベルのマークが描かれた画面が表示される。俺はそれを押し、しばらくすると中からエプロンを着用した明日奈さんが出てきた。その姿を見た俺たちは思わず見惚れてしまう。

「いらっしやい！どうぞ上がって！」

「「「お邪魔します！」「」」

中に入り、明日奈さんにリビングに案内される。リビングもすごく広くて大人数でもくつろげるくらい広かった。

「す、すごく広いわね」

「そうだな……」

楓子もびつくりしてる。もちろん俺もびつくりしてる。

「明日奈先生、旦那さんは仕事なんですか？」

「ええ、今日は仕事だから夜にしか返ってこないわ」

明日奈さんの旦那さんか……。いったいどんな人なんだろう……。

「あ、奨真君これ」

「何かあったのか？」

「この写真立てに入ってる写真」

俺はそれを見ると、そこには明日奈さんと一人の男性、一人の女の子が写った写真があった。これは明日奈さんが若い頃の写真なんだろう。

「せっかくだから昼食も食べていってね！」

そういえば明日奈さんはずっと台所からは離れていなかった。

「明日奈、誰か帰ってきたんじゃない？」

「こらっ！オルタ！呼び捨てなんて失礼でしょ！」

「いいのよジャンヌちゃん。それより、オルタちゃんよく気づいたね」

「まあねー」

「ただいま戻りましたー！」

「お帰りユイちゃん！」

扉が開かれて、リビングに黒髪ロングの女性が入ってきた。年もきつと俺たちよりも

上だろう。それに明日奈さんはユイちゃんって言うていた。ってことはこの人が……。

「綺麗な人!!」

「俺好み!!」

上野と相葉、高橋はそう言った。うん、高橋。お前の好みの女性はなんなんだ？

「ママ、こちらの人たちはお客さんですか？」

「そうよ！ちゃんと挨拶してね」

「はい！初めまして皆さん！桐ヶ谷ユイと申します！」

ユイさんが自己紹介をして、俺たちも自己紹介をする。そうしてると、明日奈さんは昼食をテーブルに持ってきた。全員椅子に座り、手を合わせる。

「「いただきます！」」

明日奈さんが作った料理を口に運ぶ。すると、頬が落ちそうになるくらい感覚に襲われる。一言で言うとうまい美味いしか出てこない。楓子の料理もかなり美味しいけど、それ以上に美味しい料理なんて初めて食べる。

「私……明日奈先生に負けたかも……」

ちよつと落ち込んでるな……。

「あの！ユイさんは今大学生なんですか？」

「はい！将来のために勉強中です！」

「将来ねえ……考えたこともなかったわね……」

たしかにオルタはあまり考えなさそうだもんな。ジャンヌも何になりたいのかわか

らないし。

「ごちそうさまでした！」

早っ?! 食べるの早すぎだろ……。

「ママ、私は上で勉強してますので、何かあれば呼んでください！」

「頑張つてねー！」

ユイさんは上に勉強しに行った。俺たちは昼食を食べ終えると、庭で遊んだり、リビングでゆっくりしたりした。その時、玄関の扉が開かれた音がすると、リビングの扉が開く。

「たっだいまー！」

「おかえりストレア！今日はもう終わりなの？」

「うん！二教科だけだからねー！」

「明日奈先生、こちらの人は？」

「おお！お客さんがいっぱいだね！初めまして！私はストレア。今はこの家の居候ね
！」

「すっげえ美人。あと凄い胸」

高橋の言う通り、ストレアさんは楓子と同じくらい大きな胸を持っていた。しかも胸元は開かれてるせいで目のやり場に困る。

「美人さんがこんなにいたら私がしょぼく感じるわ……」

相葉、お前そんなこと言ってるけど、結構人気あるの俺と楓子は知ってるぞ？

「相葉さんと上野さんもモテてるの私は知ってるよ？だから自信持って！ね？」

「倉崎さーん……」

「あ、ねえねえ聞いてよ明日奈ー！今日またおっぱい触られたんだよー！」

「またー？」

またって……どれだけ変態の生徒なんだよ……。まるでマシユの胸を懲りずに揉み続ける寿也みたいだな。

「まあそこが寿也の可愛いところなんだけどねー！」

………ん？

「ね、ねえ奨真君。寿也ってあの寿也君だよね？」

「俺はあの寿也しか思い浮かばない。ストレアさん、その寿也つて子はもしかして……」
「雪ノ下寿也だよー！もしかして知り合い？」

「やっぱり……寿也は胸の大きい女性には目がないから……。マシユはもちろんだけど、楓子とジャンヌも揉まれてるわけだし、ストレアさんが揉まれてもおかしくないな。」

「まあ……はい」

「もしかして……君もお姉さんのおっぱい触ってみたいの？」

「は、はいいい!？」

「ダメよ奨真君!!触るんだったら私のを触らせてあげるから!!」

「とりあえず楓子も落ち着け!!」

「あはは！やっぱり君みたいな子をからかうのは面白いね！」

「ストレアさん！是非触らせてください！」

「君はダメー」

「なんで!？」

「くだらないわ……」

「今思ったんですけど、私がこの中で一番小さい気が……」

白雪は自分の胸をペタペタと触り始めた。いや、白雪は平均サイズだと思っただけど
……。

「さーて、久しぶりにALLOでもやろっかなー」

A L O って……昔大ヒットしたVRMMOだよな？アミユスファイアというハードを使ったゲーム。その元となったのがナーヴギアを使ったVRMMO『ソードアートオンライン』俺たちが生まれる前に起きたSAO事件は今でも有名なのである。

「ほどほどにねー」

「わかってるよー！」

それから俺たちは明日奈さんと話したりしていると、時間が過ぎていた。俺たちが帰る頃に明日奈さんの子供たちが帰ってきた。

「あれ？お客さんですか？」

中学生くらいの子が俺に話しかけてきた。その後ろには小学校中学年の子が二人いた。その時、高橋が前に来て俺の代わりに答えた。

「そうだよ！けど時間だから帰るよ！」

「は、はあ……お気をつけて」

「「お邪魔しました！」」

俺たちは礼を言つて明日奈さんの家を出て、それぞれの家に帰つていった。

明日奈 s i d e

「母さん、ストレアさんとユイねえは？」

「ユイちゃんは勉強、ストレアはゲーム中よ」

長男の和樹が私に聞いてきたから、私は答える。さて、晩御飯を作らなきやだし、奈々と健の遊び相手をしてもらおうかな？

「和樹ー、奈々と健と遊んであげてー！」

「はーいー！」

私は晩御飯を作るために食材を冷蔵庫から出すと、ゲームをやり終えたストレアがキツチンにきた。

「手伝おうか？」

「じゃあお願いね」

私とストレアで晩御飯の支度を始める。すると、ストレアが話しかけてきた。

「奨真や楓子だっけ？」

「えっ？」

「不思議な感覚なんだ。今日初めて会ったのに、前にどこかで会った記憶があるの。私だけじゃない。ユイだってそう思ってる。ここにはいないけど、キリトやみんなも、あの子たちにあつたらきつとどこかでそう思ってるはずだよ」

「……私もそんな感じがするかな。でもそのことについては思い出せない。それが何よりも辛いかな」

「きつと……思い出せるよ。何があつたのか」

「そうね……」

私とストレアは微笑み、晩御飯の準備を再開した。

第11章 神々の黄昏

第1話 新たな黒雲

「おかあさん！おとうさん！早くー！」

「走ったら危ないわよー」

俺とレイカーは、ジャックを連れて散歩に来ている。エネミーが出ないところだから戦いの心配はいらない。だからゆっくりと家族3人で過ごすことができる。

「だっておかあさんとおとうさんと一緒にお出かけなんて久しぶりなんだもん！」

「いろいろと忙しかったから、あまりジャックに構ってあげられなかったからなあ」

「そうねー」

ただただ散歩する俺たち。ふと空を見上げると妙な黒雲が見えた。

「なんだあれ？」

「まさかあの時の黒雲!？」

「雨でも降るのかな？」

あの時の黒雲かどうかはわからないが、どう見ても雨雲ではない。確かめなきゃ。

「レイカー、ジャックを頼む！」

「エ、エイト!？」

俺はジェットレグで飛び、黒雲に近づく。黒雲の中に入り、そのまま進み続けると、黒雲を突き抜けた。すると、そこには見たことのない景色があった。

「なんだ……(´▽｀)……」

ブレインバーストの世界では見たことのないものばかりだ。とりあえず戻ってみんなに報告だな。さつき来た道を通り、レイカーの元へ戻る。

「エイト、どうだった？」

「まだよくわからないんだ。あれを突き抜けたら、まるで別の世界に入ったみたいな感じだったんだ」

「わたしたちもいきたーい！」

「どんなところかもわからないのに、そんなところにジャックを連れてはいけないよ」

「おとうさんのケチー！」

「ジャック、わがまま言わないの」

「むう……いいもーん！おかあさんたちが帰った後ナーサリーと遊ぶもーん！」

ナーサリー、確かジャックの友達だったかな。英霊級エネミー、キャスターのクラス。真名は『ナーサリーライム』絵本のエネミーだが、普段は少女の形になっているエネミーだ。

「いつも言うけど、遅くまで遊んでちゃダメよ？」

「もーわかってるよー！」

俺たちは家に帰り、ジャックが遊びに行ったのを確認してから現実世界に帰った。

ハルユキの家……

俺たちの拠点となっているハルユキの家に全員集まる。そこで俺は加速世界に現れた黒雲について話を始めた。

「黒雲？またログアウトさせられる黒雲か？」

「俺もサッチと同じことを考えて、黒雲の中に入ったんだ。けど、ログアウトとかじゃな

くて、その先には見たことのない場所があつたんだ」

「ダンジョンとかですか？」

「そういうものでもなかった」

ハルユキはダンジョンと考えてたみたいだが、あれはダンジョンとかそういうものはなかった。本当に別の世界みたいだった。

「それならみんなでいけばどうですか？」

「僕もそれがいいと思います」

チユリが意見をだし、タクムがそれに賛成する。他のみんなも賛成して、作戦を練ることにした。作戦の内容は、空を飛べる俺とレイカー、ハルユキと空中を移動できる椅子をもつコスモスが一人ずつ抱えて黒雲に突入して、その先にある大地に放り投げる。そしてまた戻って、みんなが行き終わるまで繰り返す。

「かなり手荒だが、これが最適だろうな」

「サツチが思うのもわかるが、これしか方法がない。みんなも了承してくれてよかった。」

「では作戦は明日だ。皆万全の状態に挑むように！」

「俺たちはその場で解散して、家に帰ることにした。万全の状態っていつでも万全だからなあ。やることはない。」

「ねえ奨真君。黒雲の先、ちよつと楽しみだね」

「まあ……そうだな」

「じゃあ明日に備えて、今日はゆっくりと休みましょう！」

「だな！」

俺と楓子、ジャンヌは家に帰り、明日に備えて休むことにした。

次の日、とある世界……

ハルユキside

「せんばーい!!」

僕は大声をだして先輩を呼んでみるけど、返事は返ってこない。みんなより先に先輩と一緒に黒雲に入ったけど、何故か逸れてしまった。

「でも、こここつていつたい……」

辺りを見ると、緑に囲まれた綺麗な草原だった。

「ブレインバースト……じゃないよな」

ブレインバーストじゃないとしたら……ここはいつたいてどこなんだ？

「あれ？何だろうあれ？」

草原を歩いていると、草原とは全く合わない機械のようなゲートが見えた。僕はその中に潜ることにした。

ハルユキside out

???
side

「ん?」

なんだ……? 今何か気配を感じたが……気のせいかな?

「パパ? どうかしましたか?」

「キリト君?」

「あ、ああごめん。なんでもないよ」

俺は遅れを取らないように二人の元へ走る。すると、急に変なノイズが走る。

「っ!?!」

目の前が歪んだ? ラグか何かなのか……?

「キリト君、なんか様子が変だよ?」

「なあアスナ、なんかALOの世界がおかしくないか？」

「おかしい？何もおかしくないよ？」

「そうか？俺の気のせいか……」

「もう、変なこと言わないでよ！」

「悪い悪い！さ、ピクニツクの続きをしようぜ！」

「はいです！」

「ふふ、そうね！」

さつき起こったことを忘れることにして、3人でのピクニツクを始めることにした。

第2話 黒の王 v s 黒の剣士

雪で覆われた大地。俺は今そこに立っていた。周りには誰もいない。どうやらこの世界に入った時点でみんなとバラバラになったみたいだ。

「まずは情報の入手だな」

黒雪姫 s i d e

私はあるNPCに頼まれて、黒いコートを着た人物を探していた。数分歩いて、少し休息をとる。

「アルヴヘイムオンライン……か」

聞いたことのない世界に疑問を持つ。本当にブレインバーストではないのか。

「ん？」

休息を取っていると、目当ての黒いコートを着た妖精を見つけた。よし、早速倒すまでだ!!

「はあああ!!!」

「っ!? な、なんだこいつ!?」

ほお……私の攻撃を受けきるとは……。なかなかの実力の持ち主か。

「キリトくん!!」

「アスナ! 先に行け! こいつは俺がなんとかする!!」

「聞いた通りだな。やはり貴様たちが標的のエネミーというわけか」

「なんのことかサツパリだが、邪魔するなら容赦しないぞ!!」

そうやって彼は二つの剣を構える。なるほど、私と同じ二刀流か。これは面白くなりそうだ。

「いくぞ! 我が名は黒の王! 『ブラックロータス』!!」

お互い接近して、武器を交える。私の攻撃は彼に封じられるが、彼の攻撃も私には通らない。互角の戦いということだ。

「くっ!!なんなんだよお前!」

「なかなかやるな。そのほうが私も楽しめる!」

何度も何度も刃を交える。それを繰り返していると、お互いの体力も限界が近づいてきた。

「恐ろしいほどの実力の持ち主だな。剣の腕なら『ブルーナイト』や『グラフィイトエツジ』くらい……いや、それ以上か」

「お前との勝負に現を抜かしてる暇はないんだ!!」

「しまっ!?!」

油断して、彼の攻撃を軽く受けてしまう。その隙に彼は私を追い抜いていく。

「くっ！待て！」

黒雪姫 s i d e o u t

「お前ならここに来ると思っていた」

「あなたは……一体……」

魔女のような紫の服を身に纏う少女と白いワンピースを着た少女が向かい合う。その時、水色の髪の妖精がその場に現れる。

「っ!?あなた誰!?その子から離れなさい!!」

「ママ!危険です!この人に関わってはいけません!!」

「……………アスナ」

魔女のような少女はそう呟く。

「この電腦世界に様々な軌跡を呼び起こした輝きの一対…………」

「あなたは何者なの!さっきの黒いアバターの仲間なの!」

「……………妾は」

アスナが問いかけると、少女は名乗る。

「ペルソナ……。黄昏の魔女、ペルソナヴァアベルとでも覚えておけ」

「ペルソナ……。ヴァアベル……」

ヴァアベルはそれだけ言うと、彼女の能力か何かで、白いワンピースを着た少女、ユイを捕まえる。そしてそのままヴァアベルの後ろにある塔に引きずり込まれてしまう。

「ユイちゃん！ユイちゃん！！」

「これで邪魔な小妖精は封印できた。第1段階はクリアということだ」

「あなた、ユイちゃんをどうしたの！！」

「心配するな。あの小妖精はまだ無事だ」

「アスナ!!」

二人の元へ、キリトが駆けつける。それに続き、ロータスも辿り着く。

「キリトくん！ユイちゃんが……ユイちゃんが！」

「どういふことか説明してもらおうか、ペルソナヴァベル」

「ブラックロータス。貴様は十分役に立ってくれた」

「ほう、今までとは態度も全く変えたようだな。そして今のセリフ、己の悪行を認めるといふわけだな」

ヴァベルはロータスが言ったことを素直に認める。その態度を見たロータスは、ヴァベルは自分の敵だと認識する。

「好きただけ言え、黒き王。では、私はこれより、神々の黄昏の準備に移る」

ヴァベルはそれだけ言うと、3人の前から姿を消す。残された3人はリポップした敵 mob に囲まれた。

「アスナ！まずはこいつらを片付けるぞ！」

「う、うん……」

「妖精たち。すまない、話は後でさせてもらおうとして、ここは加勢させてくれ！」

「ブラックロータスだったか、信じていいのか？」

「ああ、どうか今だけは私を信じてほしい！」

「なら今はあんたを信じる！頼むぜ！」

アスナ side

私とキリトくん、ブラックロータスの3人でエネミーを倒していく。それにしても、ブラックロータスの戦闘スタイル、どこかキリトくんと似ている。同じ二刀流だから？
ううん、そんなことは後ね、まずはエネミーを倒さないと！

「やあー！」

「エンドリボルバー！」

「デスバイピアースング！」

「おいあんた！大丈夫か！」

「ふん、私の心配よりも自分の心配をしたほうが良いのでは？」

「言ってくれるじゃねえか！」

エネミーを倒すのに張り合ってる……。張り合ってるうちにエネミーも全滅しちゃった。エネミーが全滅した直後、ユイちゃんが吸い込まれた塔の前に巨大なエネミーが出現した。

「何……これ？」

「こんなバカデカイエネミーなんてありかよ……」

「二人とも！まずは逃げるぞ！」

ロータスの声を聞き、私たちは今いるところから脱出する。草原エリアに転移すると、そこには今まで見たことのない草原エリアに変化していた。

「……本当に草原エリアなの？」

「赤いビルのようなものはあるが、草原エリアなのは間違いないと思う」

「スヴァルトエリアの景色が……」

「風化ステージに似ている……」

「風化ステージ？あんたの言葉は聞いたことのないものばかり聞くが……」

キリトくんの言うことはわかる気がする。このALOで風化ステージとか聞いたことがない。

「ロータス、あなたは何者なの？」

「そのことなんだが、どこか落ち着けるとところで話したい」

それなら空都ラインが一番いいわね。まずはそこに移動しなきゃ。私たちは転移ポータルを指すと、誰かが私とキリトくんの名前を呼ぶ。この声は……

「リズー！」

「よかった！まだログアウトしてなかったのね！ってそのメカメカしい人何っ!？」

あー……初対面のリズからしたら不思議に思うよね……。

「ちよつと待ってくれ、この姿だと色々都合が悪そうだ」

ロータスはメインメニューを操作すると、黒いアバターから蝶のようなアバターに変

わる。

「うおあ!!」

「へっ!!」

「人型アバターに!!」

「どうやらこの世界では、デュエルアバターが鎧扱いのようだな」

デュエルアバター? これも聞いたことないわ。それにこの世界ではって……どうい
うこと?

「ん? ちょっと待って。そういえば街でこんな感じの人がいたような……」

「何っ!? それは本当か!」

「ええ。3人とも、街へ戻りましょう。この草原だけじゃなくて、街も変わってるのよ」

街も変わってるなんて……ALLOに一体何が起こったの……。私たちは一息つくた
めに、街へ戻ることにした。

第3話 協力

アスナ side

空都ラインに戻ってきた私たち。でも、私たちが見たのは見たことのない空都ラインだった。

「街も変わってるのよ、まあそんなことよりも、エギルのところに行くわよ。そこにその人の仲間かもしれない人もいるわけだし」

エギルさんの店を目指す。店に入ると、そこにはエギルさんとメカメカしいアバターの人がいた。

「あれ？あんたまたその格好になってるの？」

「その……視線が凄かったので……」

「いや、その格好でも十分視線を集めるから」

「ジャンヌ!?!」

「っ!?!その声は……黒雪ちゃん!?!」

やっぱり知り合いだったのね……アバターからしてそうだと思ったけど……。

「他のみんなは?」

「ここに来るときにバラバラになっちゃって……」

「そうか、ジャンヌは一人でここに?」

「ええ、街を歩いてると、お二人に声をかけられました」

なるほど……その二人がリスとエギルさんだったのね。あれ？ちよつと待って……
今この人のことジャンヌつて言わなかった？

「お、おい……ジャンヌつてあのジャンヌ・ダルクなのか!？」

「えっ？あ、はいそうですけど」

「「ええええええ!？」」

フランスで有名なジャンヌ・ダルク!?!そんな人がなんでこんなところに!?!タイムス
リップなの!?

「と言っても私はその子孫です」

「コホン……本題に入りたいのだが」

「あ、ご、ごめんなさい」

そうね、まずは本題に入らなきや。私たちはリズたちに、さつき起こったことを全て話した。

「ユイちゃんが!？」

「ユイちゃんは高度なAI、それに加えてNPCだ。大掛かりなクエストの一環なのかもしれない。いや……考えられないか」

「クエストならよかったんだが……あの様子じゃクエストではなかったのは確かだ」

「全部ペルソナヴァベルの仕業ってこと？」

「いや、まだそうと決まったわけじゃない」

情報が少ないのにこれ以上考えても無駄よね。次はロータスたちの話ね。

「我々は……とあるゲームからやってきた者だ」

「ブレインバーストってわかりますか？」

「『ブレインバースト？』」

聞いたことない名前ね。VRMMOなのかしら？

「我々はそのゲームからこの世界にやってきた。とある雲を通してな」

「私たちの世界で、突然黒雲が現れたのです。その先に進むとこの世界につながって、私たちはここに辿り着いたのです。そのときに仲間とは離れ離れになってしまいました。が……」

他の世界を繋げる黒雲……。これもALOで起きてる謎の現象の一つなのかしら？

「じゃあ君達は自分達の世界への戻りかたがわからないのか？」

「いえ、こちらでも黒雲は確認できたので、帰ることは可能です」

「だが、困ってる君達を放って帰るわけにはいかない。あの子があんな目にあつたのは私の責任でもあるからな」

「それは助かるけど……」

「アスナ、彼女達は協力してくれてるって言うてくれてるんだ。それに仲間が増えれば心強いだろう？」

でも……やっぱり彼女達にとっては迷惑なんじゃ……。私はそれが心配だった。

「なあ、君達は仲間と離れ離れになつたんだよな？なら仲間探しを手伝わせてくれないか？」

「いいのか？」

「君達は俺たちに協力してくれるんだろ。なら俺たちもそれくらい協力しなきゃな。俺もまだ残ってる仲間達を探さないといけないしな」

そうだ。彼女達は仲間と離れ離れになったんだった。なら探してあげなきゃ！

「私たちも協力するよ！」

「ありがとうございます！」

「よし！これで成立だな。改めて自己紹介をしよう。私は黒雪姫。デュエルアバターはブラックロータス」

「ジャンヌ・ダルク。デュエルアバターはアンバーフラッグ」

「俺はキリト」

「私はアスナ」

「エギルだ」

「リズベットよ、リズって呼んで」

私たちは自己紹介をして、空都ラインから草原エリアに移りました。

ア
ス
ナ
s
i
d
e
o
u
t

草原エリア上空……………

???
s i d e

うーん……なんでここから下に下がれないんだろう……。これじゃあ街に戻れないよー！

「リーファ、ここで悩んでも仕方ないわ。この仕掛けを解く方法を考えましょ」

「シノンさん……そうですね」

あたしは立ち上がり、シノンさんと一緒に移動を始める。シリカちゃんとも途中で逸

れちゃったし、草原エリアは変わってるし、完全に異常事態よねこれ。あれ？なんか悲鳴が聞こえる。

「シノンさん、向こうから叫び声が聞こえてきました！」

「えっ？何も聞こえないけど……あ、よく見ると走ってきてる人がいるわね」

「シノンさん、目いいですよね」

「リーファだって耳がいいじゃない」

お互いの種族の長所を活かして、走ってきた人のところに向かう。あたしはその人に何があったのか聞いた。

「どうしたんですか？」

「む、向こうにとんでもない力を持った奴がいるんだ！敵だと思って攻撃したら返り討

ちにあつた！あんたらも気をつけたほうがいい！！」

プレイヤーはそう言つて走つて逃げていった。あたしとシンソンさんは気になつて先に進んでいった。

リーフア side out

楓子 side

全く……いきなり攻撃してくるなんて失礼な人もいるものね。まあ返り討ちにしちゃったけど。」

「フーねえ、皆さんと合流できないのです」

「この辺りにはいないのかしら？ 下に行きたくても行けないし……困ったものだわ」

「きつと抜け道があるのです！」

抜け道があればいいのだけど……っ!?

「メイデン！ 避けて！」

「はいなのです！」

突然私たちの間に矢が飛んできた。それを察知して避けて、飛んできたほうを見ると、さつきとは別の妖精さんがいた。

「あらあら、いきなり攻撃してくるなんて、酷い妖精さんね」

「ネガ・ネビユラス4元素が2元素、スカイレイカーとアーダーメイデンの力を思い知らせてやるのです！」

「リーファ！弓使いは任せて！あなたはもう一人をお願い！」

「はい！」

それが一番正しい選択ね。なら私は金髪の彼女が相手ね。

「せい！」

「やあ！」

私は彼女が振りかざした剣を受け流し、蹴り上げる。でも、彼女は上に飛び、蹴りを

回避する。私も思い切りジャンプして距離を詰める。すると、彼女の剣が光り出した。

「もらった!」

彼女は素早い斬撃を繰り出してきた。私は咄嗟にゲイルスラスターを装備して、さらに上へと飛ぶ。もちろん彼女は私を追いかけてくる。だから私はゲイルスラスターを解除して、落下しつつ彼女に攻撃をする。

「はああ!」

「しまっ!?!」

彼女が持つてる剣を蹴り、手から離れさせる。そして私は彼女のお腹にかかと落としをする。凄い勢いで落下した彼女は地面に叩きつけられる。

「かはっ……」

「リーファ!!」

「余所見厳禁なのです! フレイムボルテクス!!」

「チツ!」

私はうまく着地して、彼女にゆっくりと近づく。

「どうしますか? まだやりますか、妖精さん」

「ケホツ……ケホツ……まだ……やれる!」

「ふふ、そこなくっちゃ」

私たちはお互い接近して、戦いを再開しようとした時、突然大型のエネミーが現れた。

「えっ!?!」

「こんな時に!!」

「フーねえ！」

「妖精さん！一時休戦よ！今はエネミーを倒しましょう！」

「え、あ、はい！」

私と金髪の彼女が接近戦。猫耳の彼女とメイデンが援護する形で戦うことになった。

第4話 共闘・黒雪はシリカタイプ？

レイカーとメイデン、リーファとシノンの前に突然虫型の巨大エネミーが現れた。4人は敵対していたが、非常事態のため、協力することになる。

「猫耳妖精さんとメイデンは弓で援護を！」

「任せて！」

「はいなのです！」

エネミーは爪で攻撃してくるが、レイカーとリーファはすんなりと避け、攻撃をする。リーファはソードスキル『ホリゾンタル・スクエア』、レイカーは必殺技『ファイアーコンピネーション』でエネミーのHPを削る。そして後ろからシノンのソードスキル『ヘイル・バレット』、メイデンは必殺技『フレイムトールンツ』でさらに削る。

「やあああ!!」

エネミーの頭を強く攻撃して怯ませたレイカーは後ろに下がり、リーファに指示をする。

「妖精さん!今です!」

「はあああ!!!」

エネミーの首元を斬りつけると、HPがゼロになり、ポリゴン状となる。一息つき、4人は集まって話をする。

「倒したわね」

「はい、エネミー撃退なのです」

その時、下に行けないようになっていた障壁が消えていった。

「わっ！障壁が消えてる!?あいつが障壁解除のキーだったんでしょか?」

「あんな大きい敵を倒さないと解除できないなんて、酷い仕様よね」

「あのお……少しお話しませんか?」

「そうですね、でもその前に……。ここを解除して……。……えい」

レイカーは指で何か操作すると、突然自分のアバターが光り始めた。すると、ダミーアバター状態のレイカー、楓子が現れた。

「なっ……」

「わっ！機械の人がいきなり美人さんになった!?!」

「フーねえ!」

「ういうい。こちらを理解してもらうには、まずは敵意がないことを示さないと」

「でも……」

「ここは加速世界ではなさそうだし、リアル割れよりもまずは目先の信頼を優先しましょう。きつと奨真君だつてこうするはずよ。だからあなたも」

「……わかったのです」

メイデンも指で操作して、デュエルアバターからダミーアバター状態のメイデン、謡が現れる。

「やくん！ 幼女だ〜！ 可愛い〜！」

「んー！ んー！」

リーファは謡を見ると、まるで妹ができたように抱きしめ、頭を撫でる。そのせいで謡はいつも楓子にされてる状態と同じようになる。

「リーファ！その子苦しがつてるから！」

「あつ！ご、ごめんね！」

「ふ、フーねえと同じ弾力なのです……」

「私たちが敵意がないことを示さないかね。リーファ、武器をストレージにしまいましょ」

「わかりました！」

リーファとシノンも武器をしまい、敵意がないことを示す。そしてようやくゆつくりと話すことができる。

「まずは自己紹介ね。私は楓子、この子は謡。可愛らしい妖精さんたち、よろしくお願ひしますね」

「私はシノン、こっちはリーファよ」

「さて、どこから話せばいいのか……」

「あの、あなたたちはこの世界の人ではないんですよね？」

「私たちはブレインバーストというゲームの世界からやってきたのです」

「ブレインバースト？聞いたことないですね」

「私もないわね」

「ブレインバーストそのものが一部の人にしかわからない……。あ、変なことを聞きませんが、今は西暦何年ですか？」

「へっ？今は2024年ですけど……」

「っ!?!」

2024年と聞いた瞬間、2人は驚きを隠せなかった。何故なら、楓子たちが今いる時代は自分たちが生きてる時代の23年前だからだ。

「リーファ、シノン。驚かないでね。私の予想が正しければ、私たちは今から23年後の未来から来たことになるわ」

「23年後?!」

「そ、そんな人がなんでこの時代に!?!」

「私たちはここに来る時に、ブレインバーストの世界に現れた黒雲を通ってきたの。どいう原理なのかわからないけど、その時にタイムスリップしたのかもしれないわね」

「ねえ、『私たち』って言ってたけど、他にもこの世界に来た人がいるってことなの？」

「ええ」

「でも、手がかりが全くないのです」

楓子と謡はALLOに来たばかり、この草原エリアについてもわからないことだらけだ。そんな2人が仲間を探すのは難しいことだろう、

「ここで会ったのも何かの縁だし、協力するわ」

「あたしも！」

「ふふっ、それは心強いわね」

「はいなのです！あ、リーファさん。強く抱きしめるのは禁止なのです！」

「ええっ!?なんで!？」

「謡が何を言いたいのか、わかる気がするわ」

謡とシノンとは楓子とリーファの胸を交互に見る。リーファは楓子と同じくらい胸が大きいため、謡は強く抱きしめられると、息ができなくなってしまう。シノンはそれを理解していたのだ。

「んん! とりあえず下に降りましょうって言いたいけど、しばらくはこの周りを探索することにしましょう」

「そうですね」

4人は下には降りず、辺りを探索することにした。

ア
ス
ナ
s
i
d
e

ストレアの居場所の情報を掴んだ私たちは、ダンジョンの中に入って奥へと進んでい

く。ダンジョンの中だから、エネミーはいっぱい出てくる。

「はあああ!!」

「おりゃああ!!」

ジャンヌとリズが前に出て、エネミーを撃退している。ジャンヌは旗でエネミーを倒してるみたいね。リズと同じ打撃型かしら。

「結構奥に来たな」

「だがストレアの姿は見えねえな」

「みんな、回復をするわ」

私は魔法のスペルを詠唱して、みんなのHPを回復させる。

「ふむ、これが魔法か。すごく便利だ」

「ブレインバーストにはないのか？」

「回復アビリティを持つてるのはライムベルと姉さんだけだからな。ブレインバーストにとつて回復アビリティはすごく貴重だ」

格闘ゲームに回復があつたら終わらなくなっちゃうから、ないのが普通だもんね。

「フランスの聖女様が前衛もできるとはね〜」

「私は聖女ではありませんよ？ご先祖様はそうでしたけど」

「彼女は主に後方支援か盾役だから、オールラウンダーというわけだ」

「タンクもできるならエギルの負担も減るかもしれないな」

「それは助かる！」

今は仲間は少ないけど、みんな集まったらすごいパーティーになりそうね。あっ!!? あそこにいるのは!?

「キリトくん! あそこ!!」

「あっ!!」

「やつほーキリトー!!」

奥へと進んでいくと、こっちに手を振ってるストレアを見つけた。私たちはすぐに駆けつけて、ストレアを囲む。

「あれ? その子たちは? またキリトが拾ってきたの?」

「お、おいストレア! 変な言い方はやめろって!」

「いいじゃない別に、あながち的外れでもないでしょ」

「いや外れすぎだろ!!」

「いつも通りのストレアね……。私たちは黒雪ちゃんたちのことをストレアに紹介する。」

「へえ、そうなんだ! ジャンヌはアスナタイプで、黒雪はちょっとヒンソーな感じだから、シリカタイプ?」

「むっ……。意味は全くわからないが非常に悪意を感じる」

「アスナタイプとはどういうことなのでしょう?」

「さ、さあ?」

ストレア……初対面の黒雪ちゃんにちよつと失礼な気がするんだけど……。あとシリカちゃんにも失礼だから！何がとは言わないけど……。

「と、とりあえずここから出ようぜ！」

「そうだな、引き続き仲間探しをしなくてはな」

ダンジョンから出た私たち。すると目の前にフェザーリドラのピナがいた。でもそこにはシリカちゃんはいなかった。リズは気になってピナに問いかけた。

「あれ？ピナ。シリカは？」

「キュル！」

ピナは私たちを誘導するかのよう移動を始める。追いかけると、樽の前で止まった。

『助けてくださーい!』

「こ、この樽の中から聞こえてくるぞ」

「とりあえず開けてみませんか?」

「よ、よし」

キリトくんは樽の蓋をあけると、中にはシリカちゃんが隠れていた。

「た、助かりましたあ」

「あんたなんでこんなところにいたのよ」

「そ、それが大きなモンスター出てきて、ここに隠れたら出れなくなっちゃって……」

「ストレアはさつき私のことをシリカタイプと言っていたが、私はここまで鈍臭くはな

いぞー！」

「そういうことじゃないよー！」

「あのお……こちらの人たちは？」

私たちはシリカちゃんに黒雪ちゃんたちを紹介する。

「あたしはシリカっていいいます。この子はピナです」

「きゅー！」

『キリト君、聞こえるかい？』

っ?!この声は菊岡さん!?現実世界から通信を送ってるの!?

「むっ?何か聞こえたが……」

「通信……ですかね？」

「菊岡？どうした？」

『ALLOに正体不明のデータが介入されたと聞いてね。ダイブしようにもできないから、キリト君たちに話を聞きに来たんだよ』

「それなら我々が説明しよう。そのデータとやらはこちらの世界のデータだからな、我々が説明したほうが理解しやすい」

黒雪ちゃんは今わかつてることを全て菊岡さんに話す。話を聞き終えた菊岡さんはすぐに状況を理解した。

『なるほど、それは大変なことになってるね』

「クラインたちはまだダイブ中か？」

『うん、クライン君だけじゃなく、フィリアちゃんやレインちゃん、博士にルクスちゃんもいるよ』

「博士……博士といえばタクム君だな」

「たしかに……」

そのタクム君って人はみんなに博士って言われてるのかな？

『みんな、くれぐれも気をつけるんだよ』

菊岡さんはそれを言うと、通信を遮断した。

「さて、シリカ。俺たちはクラインたちや黒雪の仲間たちを探してるんだ。心当たりとかないか？」

「それでしたら、近くの畑にゲートのようなものがありました」

「「ゲート？」」

「はい、まだ中には入ってませんが、もしかしたら黒雪さんの仲間がいるかもしれません」

これは十分な手がかりを見つけたわね。シリカちゃんが言っていたところは畑ね。ならそこに向かわなきゃ。

「よし、そこに行こう！」

「「「おお!!」」」

第5話 異界へのゲート

???
side

「ハックション!!」

うう……相変わらず寒いな……。ゲームの世界だから風邪は引かないけど、寒さは感じるからな……。

「みんなどこにいるんだよ」

???
side out

アスナ side

私たちはゲートを探しに畑に来た。そこには、見たことのない扉があった。もしかしたらアレが異界へのゲートかもしれない。

「シリカちゃんと言ってた通りね」

「みんな油断するな。この先は私たちもわからない」

黒雪ちゃんとジャンヌちゃんはデュエルアバターになり、私たちはそのままゲートに入る。目の前が光に包まれ、私は思わず目を瞑る。目を開けると、そこには草原エリアには全く違う荒廃した街があった。

「な、何よこれ!?!」

「ふむ、世紀末ステージか」

「く、黒雪は何か知ってるの!？」

「ああ、ここは私たちの世界の一つ、世紀末ステージだ。荒廃した街が特徴だぞ」

「不気味なところね。早くあんたたちの仲間を探して街に戻りましょう」

でも、なんでALOに黒雪ちゃんたちがいた世界が……。これじゃあまるで黒雪ちゃんたちがいた世界がALOを侵食していつてるみたい。

アスナ side out

黒雪姫 side

ハルユキ君……みんな……どこにいるんだ。

「ローちゃん？どうしたの？」

悩んでるとストレアが私に話しかけてきた。変な呼び方をしてきたが。

「ローちゃん？それは私のことか？」

「うんー！ブラックロータスって長いからローちゃん！可愛いでしょー！」

「う、うむ……。だがそれなら、短い愛称があるぞ」

そう、私には愛称というものがある。まあそれで言ってるのは旧ネガビュのみんな、
奨真君、姉さんだけなんだが。

「私を昔からよく知る者は、サツチん、もしくはサツちゃんと呼ぶ」

「じゃあサツチんだね！」

黒雪姫 side out

アスナ side

2人はもう仲良くなり、私たちの後ろで楽しく話しながら歩いていった。

「もう仲良くなってらわね」

「さすがストレアのコミュ力。キリトも見習いなさいよね」

「なんでだよ!!」

その時、突然黒雪ちゃんは倒れ、ストレアは頭を抱え込む。私たちは心配になり、2人に駆け寄る。

「2人とも大丈夫!?!」

「妖精と機械の戦士たち。聞こえますか?」

「「「えっ?」」」」

ストレアはいつもと全然違う口調で話し始めた。

「お前、ストレアじゃないな。誰だ!」

「そのことについてはまだ教えることはできません。ですが、私はあなたたちにあることを伝えなければなりません」

「あること?」

「のんびりしていると、あの小妖精は魔女に消されてしまいます」

「「「っ!」」」

ユイちゃんが……消される!?

「っ!?!もう限界のようです」

「待って!!なんでユイちゃんが消されるの!?!」

「それ……は……」

ストレアの中にいる誰かが何か言おうとしたけど、もういつものストレアに戻ってしまっていた。

「んん……アスナ？どうしたの？」

「ご、ごめんね！なんでもないわ」

ストレア自身は何も覚えてないみたいね。黒雪ちゃんの方を見ると、頭を抑えて膝をついていた。

「黒雪！大丈夫か！」

「あ、ああ」

よかった。黒雪ちゃんも怪我はないようね。その時、私は微かな殺気を感じ、後ろを振り向く。そこには銀色の人がビルの上に立っていた。

「先輩を傷つける奴は!!俺が許さない!!」

銀色の羽を生やして、私たちに突っ込んでくる。キリトくんが私たちの前に出て、銀色の人の攻撃を防ぐ。

「アスナ!後ろで黒雪たちを頼む!!」

「わかったわ!!」

アスナ s i d e o u t

キリト s i d e

くそっ！なんだこいつ！！細身の割に力はあるのか！！

「おおおお！！！」

「はあああああ！！！」

パンチとキックをうまく使って俺にダメージを与えにくる。俺はそれを全て避けた
り、剣で弾いたりする。

「先輩を返せ！！」

「話を聞いてくれ！！」

「うるさい！！よくも先輩を傷つけやがって！！」

「くっ！こうなったら手荒になるが大人しくしてもらおうぞ！！」

「エアリアルコンボ!!」

「スターバーストストリーム!!!」

拳と剣が激しくぶつかり合う。まさか俺のスターバーストストリームについてくるとはな。そして最後の一撃を放つと、一度後ろに後退する。

「まだまだ!うおおお!!!」

「クロウ!!やめるんだ!!」

「クロウ君!!ストップ!!」

「!?!」

黒雪とジャンヌは叫ぶと、銀色は止まる。クロウ、それがこいつの名前か?というかなんで黒雪たちは知ってるんだ?

「せ、先輩……ジャンヌさん……」

「彼らは仲間だ」

「お互いの仲間探しとある敵を倒すために共に行動してるのです」

「そ、そうだったんですか……。すみません、つい攻撃してしまって」

「いや、気にしなくていい。びっくりしたただけだからな」

「周りには何もいないし、クロウもダミーアバターになるといい」

俺は周りを見渡すと、たしかにエネミーはいなかった。

「ダミーアバター？」

「()をこうして……」

黒雪はクロウにやり方を教えると、ダミーアバターに姿を変える。クロウのダミーアバターは驚きを隠せなかった。

「え、ええ!？」

「ピンクの豚ね」

「デュエルアバターとは全然違うな」

「よし、まずはクロウの自己紹介と情報交換だな」

クロウは俺たちに自己紹介をし、俺たちも自己紹介をする。クロウ…ハルユキはここに黒雪と逸れてから探索をしたらしいが、特に何もなかったらしい。

「ジャンヌさんがいるということは、もちろん師匠や奨真さんもきてるんですね」

「その可能性は高いな。よし、まずはここから出るとしよう」

「そうだな」

俺たちはゲートをくぐり、草原エリアに戻ってきた。地上は探索したから、次は上だな。

「上に上がろうか」

「そうだな。ハルユキ君、いつものを頼む」

「はい！」

「ジャンヌちゃんは私の後ろに乗って」

「ありがとうございます！」

俺たちは上に上がって、空中に浮かぶ島に着陸をする。すると、そこにはリーファとシノンが見知らぬ人を連れていた。

「リーファちゃん!!」

「シノン!!」

アスナとリズが大声を上げると、2人は気づき、走ってこっちまでやってくる。

「お兄ちゃん!みんな!」

見知らぬ2人もこっちにやってきて、黒雪たちのところに行った。

「サツちゃん!!」

「サツチん!!」

「楓子！ういいうい!!」

お互いの名前を知ってるということとは、この人たちも仲間なんだろうな。これだけでかなりの人数が集まってきたな。

「よし、一旦街へ戻ろう」

「そうだな。楓子、街についたら自己紹介と情報交換をしてほしい」

「わかったわ」

俺たちは下に下がり、転移ポータルに向かって街に戻る。エギルの店に入り、情報交換を始めることにした。

キ
リ
ト
s
i
d
e
o
u
t

楓子 side

街に戻り、私たちはお店の中に入って一息つく。そして情報交換を始める。

「私たち4人は上空で神殿のような場所を見つけました」

「神殿？」

サツちゃんが疑問に思ってるみたいだから、私は説明を続ける。

「中に入って見たら、コンソールのようなものがあり、そこに何かをはめ込むようなくぼみがあったの」

「そんな神殿は初めて聞くな」

「アタシたちも初めてみたよ」

「今までのALLOにはなかったものね。アップデートかしら？」

「いや、私たちの世界が侵食しているのだ。たぶんその影響で生まれたものなんだろう」

　　そういえば、風化ステージにありそうなビルがたくさんあったわね。

「とりあえずもう一度草原エリアを探索しましょう。他のエリアに行きたいけど、なぜか草原エリアしかいけないみたいだし」

　　それならもう一度探索しなければいけないわ。もしかしたら他のエリアに移動できるきっかけを作れるかもしれない。そう思い、私たちは草原エリアに移動をし始める。

　　そういえばアスナって名前、どこかで聞いたような……。

第6話　まるで1つの戦争？

???
side

なんでだ……さつきもこの道を通った気がするんだけど……。

??? 「もう見てられませんか……」

??? 「ん？」

声が聞こえ、俺はその方を見る。そこには岩を椅子がわりにして座ってるアンクルがいた。

??? 「なんだよ」

アンクル「私さつきからここで見てましたけど、同じところをぐるぐる回ってただけ

でしたよ？」

いやそんなはずはない。俺は長時間歩き続けた。なのに同じところをぐるぐる回つてはるはずがない。

アングル「エイトさんの方向音痴はここでも健在ですか……」

エイト「うるせえ」

アングル「ということで私がエイトさんを連れていきます！」

何言ってるんだ……。ここをよく知らないアングルに任せたらほうが心配なんだが……。まあ俺もよく知らないけど。

アングル「エイトさん！逸れないでくださいよ！」

エイト「はいはい」

エイト side out

楓子 side

街を出て、私たちは草原エリアを探索する。その時、近くで爆発する音が聞こえる。

エギル「何の音だ？」

リズ「爆発？　　とかミサイルみたいな音ね」

爆発……ミサイル……。

楓子「ねえサツちゃん。もしかして」

黒雪姫「ああ、あいつだろうな」

「「「あいつ？」」」

私たちは爆発音のするところに向かうと、そこでひとつの戦争のような場面を見た。その理由は、インビンシブルを纏ったニコが2人もいたからだだった。

ニコ「おらおらおら!!!」

ニコ? 「さっさと落ちやがれ!!!」

アスナ「な、何これ!？」

シノン「ちよつと!! こんなのもう戦争じゃない!!」

アスナさんとシノンはそう言った。2人の言う通り、これはもう戦争に近いわ。その様子をしばらく見てると、2人のニコが私たちに話しかけてくる。

ニコ? 「おい!! 見てないでさっさと力を貸しやがれ!!」

ニコ「てめーら!! 手エ出したらただじゃおかねえぞ!!」

2人のニコは私たちにそう言ってきた。キリトたちはどうすればいいのかわかってないみたいね。けど、私たちはどっちが本物でどっちが偽物かはもうわかった。

黒雪姫「フーコ、みんな。もうわかっただろ?」

楓子・ジャンヌ「「ええ」」

ハルユキ「わかりました！」

ういいうい「はいなのです！」

「よし、では一斉に攻撃だ！」

私たちは2人のうち1人のニコに近づき、攻撃を仕掛ける。インビルシブルは解除され、本体が出てくる。

ニコ「この馬鹿!!手エだすなって言っただろうが!!」

黒雪姫「だからと言って見捨てる私たちではないことくらい、お前も知ってるだろう？」

ニコ「チツ!そーいやそーうだったな!!」

黒雪姫「キリトたちはジツとしているんだ！」

キリト「え、お、おう！」

私とサツちゃん、ういういと鴉さん、ジャンヌとニコの6人で偽物のニコに攻撃を仕掛ける。まずはジャンヌが倒れる偽ニコを旗で上にあげ、鴉さんがエアリアルコンボで攻撃、さらにういういが弓で追撃、その時偽ニコは落下して、サツちゃんが脚の連撃を繰り返す。最後に私が動かなくなった偽ニコに拳で重い一撃を与える。偽ニコはそのまま転がり、動かなくなった。

黒雪姫「弱かったな」

ニコ「つたりめえだ!!アタシをこんなカスと一緒にすんじやねえ!!」

キリト「お、終わったのか？」

岩の陰に隠れてたキリトたちが出てきた。あんなところに隠れてたのね。

??? 「終わったなら、私も出てきても大丈夫」

キリト 「うおあっ!？」

アスナ 「い、いつの間に背後に!？」

??? 「今」

キリトたちの後ろにはパドがいた。今のは私もびつくりしたわ。

ニコ 「よおパド。ちゃんと隠れてたみたいだな」

美早 「あれだけ騒がれたら嫌でも隠れる」

ニコ 「悪かったって。つとそうだ。これをこうして……」

ニコは指でメニュー画面を操作して、ダミーアバターになる。パドも続いてダミーア

バターになる。

キリトをこれで2人が仲間になったな」

ハルユキ「先輩！キリトさん！これみてください！」

鴉さんが急に叫び、サツちゃんときりトのところに行くと、何かを持って行く。気になって私もみに行くと、鴉さんの手には赤色のオーブがあった。

キリト「えつと……『プロミネンス』？それがこれの名前か？」

ニコ「プロミネンスってアタシのレギオンの名前だよな？」

ジャンヌ「もしかして、さつき偽ニコを倒したからドロップしたとか？」

このオーブの大きさ。あの神殿にあつたくぼみの大きさと似てる……もしかしたら。

楓子「ねえみんな。ちよつと試したいことがあるの」

黒雪姫「試したいこと？」

楓子「私とういうい、リーファとシノンがみた神殿の中にあつたくぼみ。そこにこのオーブをはめてみようと思うの」

シノン「なるほどね。あの大きさなら、このオーブがはまるかもしれないわね」

リーファ「くぼみの数は1つでしたし、オーブの数も足りませんね！」

キリト「じゃあ早速いこう！」

私たちは空中にある神殿を目指す。私と鴉さん、キリトたちは飛べるけどサツちゃんたちは飛べない。どうやっていくかを考えていたけど、どうやらこの世界では超ジャンプができるみたいだった。そのおかげで空中にある神殿に全員辿り着けた。中に入り、コンソールのある奥の方へと進む。

楓子「あつたわ。鴉さん、オーブを貸してください」

ハルユキ「はい！」

鴉さんから赤のオーブを受け取り、くぼみにはめ込む。サイズもぴったりで、なんかはめ込めた。すると、私たちの目の前に、ゲートのようなものが出現した。

シノン「この先へ進めってことかしら？」

エギル「たぶんそうだろうな」

ストレア「よし！じゃあ行こー！」

ストレアは走ってゲートの中に入る。私たちも続いて入ると、そこはさつきとは全く違う場所だった。草原ではなく、一面雪景色だった。

アスナ「ここってフロスヒルデ？」

リズ「そうみたいだけど、やっぱりここも侵食されてるわね」

ういうい「みなさん、ここのポータルは街と繋がってるのです。これでいつでも戻れるのです」

ハルユキ「あれ？いつのまにかオーブが手元に……」

ジャンヌ「きつとこの先も使うということでしょう」

ニコ「しっかしどこをみても雪だな」

シリカ「どうしますか？このまま探索を始めますか？」

シリカちゃんはそう聞いてきて、私はこのまま探索したいと言った。理由は、このエリアのどこかに奨真君がいるかもしれないって思ったから。

楓子「ここはどこかに奨真君がいるはず」

黒雪姫「何故そう思うのだ？」

楓子「勘かな？」

リーファ「あの一、ずっと気になってたんですけど。その奨真君って一体誰なんですか？」

黒雪姫「奨真君は我々ネガ・ネビユラスの一員さ。N O . 2でもある」

キリト「へえ、それは是非手合わせ願いたいぜ！」

楓子「ちなみに私の恋人よ」

「「「ええっ!?!」」」

リズ「あんた彼氏持ちだったの!？」

みんな驚いてるわね。そんなに驚くことだったかな？

キリト「ま、まあとりあえず探索をしよう

私たちは坂を下り、歩き始める。途中で凍った地面の上を通ったけど、なんとか割れずに済んだ。もし割れてたら下に落ちていたわね。

アスナ「洞窟の中とかに何かあるのかな？」

エギル「中に入るならそれなりに準備が必要だな」

ストレア「じゃあ一旦街に戻る？」

美早「K」

ニコ「じゃあさっさと戻って準備を終わらせようぜ」

私たちは一旦街へ戻り、準備をすることにした。

楓子 s i d e o u t

エイト s i d e

困った……非常に困った……

エイト「おいアングル」

アングル「な、何でしょう？」

エイト「思いつきり迷ったじゃねえか!!」

アングル「ぜ、全部私のせいですか!? 言っておきますけどね! 私が迷子になりそうになるエイトさんを止めたりしてなかったら今頃一人ぼっちですよ!!」

エイト「だからって何でこうなるんだよ!!」

アングル「知りませんよ!!」

??? 「あの一」

俺とアングルが口喧嘩していると、誰かが話しかけてきた。その人は黒髪で、少しだけ露出の高い格好をしていた。

??? 「もしかして道に迷ってますか？」

エイト 「そうなんですよ。こいつのせいで」

アングル 「ふん!!」

エイト 「痛ってえ!!」

アングルの野郎……本気で足を踏みやがったな!!

??? 「困ってるならこの辺りを案内しますけど……」

アングル 「是非お願いします!!もうこの人のせいで迷子になるのは嫌です!!」

エイト 「お前は口を開けたら俺の悪口しか言わねえのか!？」

??? 「あはは……。とりあえず自己紹介ですね。私はフィリアと言います」

アングル「タンタルアングルです！アングルと呼んでください」

エイト「ブラウンクリエイト。エイトでいいよ。それと、敬語は無しにしよう」

フィリア「わかった。アングルとエイトだね。よろしく！」

第7話 愛人？

E i t s i d e

フィリアとアンクルと共にこの雪原を探索している。それにしてもどこをみても雪だ。だ。

フィリア「そういえば2人は特殊なアバターだね」

アンクル「あ、忘れてました！これをこうして……」

アンクルはメニュー画面を開き何か操作を始める。するとアンクルのアバターはデュエルアバターからダミーアバターに変わった。アンクルのダミーアバターって名探偵ホームズみたいな格好だな。

フィリア「可愛い！」

レミ「あ、そうだ！この姿の私はレミと言います！ほらエイトさんも！」

俺はレミに手を取られ、メニュー画面を操作する。すると俺のアバターはデュエルアバターからダミーアバターに変化した。

奨真「こんな機能があつたのか」

フィリア「うわぁ……すごいイケメン」

奨真「鎧姿よりもこっちの方が動きやすいな」

フィリア「あれ？見たところ妖精っぽく見えないけど……」

レミ「私たちはここの住民じゃないんです」

奨真「俺たちはブレインバーストってゲームからやってきたんだ」

フィリア「ブレインバースト？」

聞いたことがない感じで言ってきた。まあ加速について知ってるのはバーストリンカーだけだからな。

奨真「簡単に言えば格闘ゲームだ」

フィリア「へえ、じゃあ戦闘に関しては強いのか？」

レミ「奨真さんは強いですよ！無数の剣を使って完全無双!!」

レミはそう言つて説明をする。まあ間違つてはないけど、なんか恥ずかしいな。

フィリア「あ、あそこに大きなモンスターが！」

レミ「奨真さん！よろしくお願いします!!」

奨真「俺任せかよ……」

まあフィリアが気になつてる俺の強さを見せるのに丁度いいか。

奨真「トレース・オン投影開始」

両手に干将・莫耶を作り出し、構える。俺はそれをエネミーに投げつける。そしてもう一度作り、そして投げる。その繰り返しだ。地味っぽく見えるが、これはエミヤもよくやる戦い方だ。

レミ「奨真さーん！そろそろゲージ溜まったんじゃないですかー!!」

奨真「よし！決めにいく!! アンリミテッド unlimited ブレード blade ワークス works!!」

必殺技で固有結界を作る。それを初めてみるフィリアは驚きを隠せないでいた。

フィリア「えっ？えっ？どうなってるの!？」

レミ「これは奨真さんの必殺技です！見ててくださいね！これからが本番です！」

奨真「速攻で終わらせる!!」

俺は周りにある無数の剣を操り、エネミーの上に雨のように降らした。エネミーは剣の雨の餌食になり、消滅した。敵がいなくなったのを確認して、結界を解除する。

奨真「あんまり歯ごたえがないな。ここのエネミーは弱いのか？」

フィリア「す、凄いよ！結界なんて見たことないよ!!」

奨真「そ、そうか？」

フィリア「でも無限の剣を使う子なら知り合いにいるよ？」

俺以外にもいるのか？それは気になるな。

フィリア「私の仲間たちと合流出来たら紹介するね！」

レミ「楽しみですね！」

俺たちはそんな感じで、雪原エリアを探索するのであった。

奨真 s i d e o u t

楓子 s i d e

私たちは街で少し休んで、次の探索に備えることにした。準備のため、私とキリトはアイテム補充に行くことになった。

キリト「悪いな楓子。アイテム補充に付き合わせてしまった」

楓子「そんなの気にしなくていいのに」

アイテム補充も完了して、エギルさんの店に帰る途中、女の子が私たちに話しかけてきた。

??? 「キリト。その人はキリトの新しい愛人ですか？」

楓子「あ、愛人？」

キリト「初対面の人に誤解を招くような発言はやめてくれプレミア!!」

私のことをキリトの愛人と言ったこの子はいったい……。キリトは名前らしきこと

を言っていたから知り合いだと思うけど。

キリト「あ、楓子は初めてだな。この子はプレミア。元々はNPCだったけど、この世界にプレイヤーとして連れてきたんだ」

NPCをプレイヤーとしてALOに連れて来るなんて……キリトって一体何者なの？そんなことよりもこの子に自己紹介ね。

楓子「私は楓子。よろしくねプレミアちゃん」

プレミア「はい、よろしくお願いします」

礼儀よくお辞儀をしてきて、私も同じようにする。まだ小さいのに立派な子ね。

キリト「プレミア、ティアは一緒じゃないのか？」

プレミア「砂漠で逸れてしまって……」

そのティアって子と砂漠逸れたらしい。でも砂漠はまだ行くことができない。草原エリアにあつた神殿のようところが雪原エリアにあるといいけど。

楓子「なら早くみんなのところに戻って雪原エリアに行った方がいいわね」

プレミア「はい。あ、言い忘れてたことがあります」

楓子「どうしたの？」

プレミア「私の種族はウンディーネです」

たしかキリトたちにはそれぞれ9つの種族があつたわね。サラマンダー、ウンディーネ、シルフ、ケツトシー、ノーム、スプリガン、インプ、レプラコーン、プーカがあつたはず。

プレミア「ですので、支援魔法は使えます。役に立ってます」

楓子「それは頼もしいわね。期待してるわ♪」

私たちは会話をしながらエギルさんの店に戻り、みんなにアイテムを配り、雪原エリアに転移する。

く雪原エリアく

リズ「相変わらず寒いわねー」

ういうい「うう……体が冷えるのです」

それを聞いた私は咄嗟にういういを抱きしめて暖をとろうとする。

楓子「ういうい、寒くない？」

ういうい「んー！んー！」

リーファ「楓子さん！ういちゃんが苦しそうですよ！」

リーファにそう言われて私は離れる。私ったらまたやつちやつたわ……。

「た、助けてくれええ!!」

「[[[[つ!?!]]]]」

突然の悲鳴に私たちは反応して、そつちをみる。私たちが見た方からプレイヤーが数

人、何かから逃げるようにやってきた。

キリト「どうした？」

「あ、あいつは何もしてないのに突然俺たちの腕や足をへし折ったりして不気味なんだよ!!」

よくみると、彼らは腕がなかったり足が片方なかったりしていた。

黒雪姫「とりあえず行ってみよう」

私たちは彼らが逃げてきた方に向かい、歩き続ける。でもなかなか人らしき影は見当たらない。

ハルユキ「誰も……いませんね」

エギル「あいつらはいったい誰にやられたんだよ」

??? 「さあ？誰でしょうね」

「「「っ!？」」」

急に声が聞こえてきて、私たちは振り向くと、そこにはさつきまで誰もいなかったところに誰かが立っていた。

??? 「凶れ」

シノン 「エギル!!」

シノンは咄嗟に弓を構えて矢を放つ。すると矢は急にへし折れた。この力つて……。
??? 「やりますね。ですが、私のほうが強い」

楓子 「藤乃、よく見て。私たちよ」

藤乃「……………あ、楓子さんたちでしたか。ではあなたたちは仲間というわけですね」
キリト「あ、ああ」

これで藤乃とも合流できたわね。まだ少ないけど段々と増えてきたわ。

シノン「ねえ、藤乃だっけ？あなたいったいどうやって私の矢をへし折ったの？」

藤乃「そのことでしたか。それは私の眼です」

シノン「眼？」

藤乃「私のデュエルアバターは見たものを凶げる力を持つてるのですよ」

シノン「へえ、不思議な力ね」

特殊な眼を持つてる藤乃。藤乃だけじゃなく、式も似たような眼を持っている。直死の魔眼と歪曲の魔眼。この2つはとても強力な力を持っている眼だった。

シリカ「じゃあオブジェクトを破壊し放題ってことですか？」

藤乃「破壊不能でなければ可能です」

破壊し放題だからこそ、必殺技ゲージを何度も溜めることができるのよね。

アスナ「ねえ藤乃さん。さっき襲った人以外に誰か見たりした？」

藤乃「直接はあつてませんが、赤い人がガイコツさんと一緒にバイクに乗ってるのを見かけました」

ガイコツさんって……アッシュのことね。赤い人つて言えばあとは式だけど、藤乃なら式のことを名前で呼ぶものね。ならこの世界の住人のはずね。赤の他人かキリトたちの仲間か。

アスナ「どの辺りで見ました？」

藤乃「ここからそう遠くない広場のようなところです。まだいるなら爆走してるはずですよ」

リーファ「行ってみませんか？そのガイコツさんって人はもしかしたら黒雪ちゃんの仲間かもしれないし、赤い人はクラインさんかもしれないし」

ストレア「さんせーい！」

私たちは藤乃が言ったところに向かうことにした。そこにいる人はたぶんアツシユだけど、もう1人はいつたい……

第8話 ガイコツさんと野武士面と最愛の人とツツコミ 役？

奨真 side

雪原をひたすら歩き続ける俺たち。そんな俺たちにもついに限界が訪れた。

レミ「奨真さーん、休憩しましょー」

フィリア「さ、賛成……」

奨真「休憩つて言つても休めそうなどころはないぞ？」

あたりは雪しかない。家や建物などが全くないから休めるところがない。まさか道案内をしていたフィリアもこの辺りのことを忘れてたとは……。

奨真 「もう少し頑張ろう」

フィリア・レミ 「「えー」」

少し嫌そうにする2人。俺だって休めるなら休みたいよ……。そんな時、雪の中から何かが出てきた。

奨真 「な、なんだこれ!？」

フィリア 「スノーゴーレム!?!ここじゃなかなか厄介な敵だよ!!」

レミ 「4体くらい居ますよ!?!」

まずはどんなやつなのか確かめるとしよう。俺は大剣を作って思い切り薙ぎ払う。

奨真 「どんなかんじだ!」

レミ「半分になりました！」

よくみると真つ二つに分かれていた。動かなくなっただと思っていたが、分かれた体がくつついて元の形に戻った。

フィリア「私に任せて！やあ!!」

フィリアは短剣を構えてスノーゴーレムを斬りつける。一撃で倒すんじゃないかと数で倒さなきやダメってことか。

フィリア「これで倒せるはずだよ！」

よくみると、フィリアが攻撃したゴーレムはバラバラになって動かなくなっただ。よし、ならあの技が一番だな。

奨真「unlimited blade works!!」

褒真 side out

楓子 side

藤乃と合流した私たちは、藤乃が言っていた広場のようなところを目指す。そこには藤乃が言った通り、バイクに乗ったアツシユとその後ろに赤い人がいた。

キリト「あれどうする？」

黒雪姫「あの赤い人はキリトの仲間か？」

キリト「あ、ああ……一応」

アスナ「あれだけ爆走してたら無理やり止めるしかなさそうだけど……」

シリカ「でも……クラインさんには申し訳ないですけど……今はスルーしたいです」

楓子「あらあら、うちの弟子がごめんなさいね。私が責任を持って止めにいくわ」

リズ「もうどんな方法でもいいから止めちゃって」

みんなに確認を取ると、構わないと言ってくれたから私はゲイルスラストアーでアツシユたちのところに向かう。そして全速力で接近して蹴りを入れる。バイクは転倒してアツシユと赤い人は転がり落ちた。

アツシユ「痛てて……し、師匠!？」

赤い人「だ、大丈夫かアツシユ」

アツシユ「俺はピンピンだぜミスタークライン!!」

あらあら、ここまで元気ならもう少しお仕置が必要みたいね。

キリト「クライン……」

クライン「お、キリの字！それにみんな！こんなところで何してんだ？」

アスナ「こっちのセリフですよ！クラインさんサラマンダーなんですから凍死してしまいますよ！」

クライン「俺は全然平気ハックション!!」

クラインという人は大きなクシヤミをする。こうなるまでバイクで連れ回してたのね。ならきついお仕置が必要ね。

楓子「アツシユ。あの人をあんな状態になるまで乗り回してたのね。そんなあなたにはきついお仕置きが必要ね」

アツシユ「オーマイガー!!それは勘弁してください!!」

クライン「その麗しいお嬢さん!この私は見ての通り平気です!ですから我が心の友、アツシユローラーを許してやってください!」

クラインさんは私にアツシユの許しをお願いしてくる。これは困ったわね。こうして頼まれたら断れないわ。

楓子「アツシユ。クラインさんに感謝しなさい」

アツシユ「ソウルフレンドミスタークライン!!ギガサンキュー!!」

楓子「でもちゃんと謝りなさい」

アツシユ「ソ、ソーリー」

楓子「ソーリー？」

アツシユ「ご、ごめんなさい……」

シノン「ていうかクライン。あなたいつの間にかこんなに仲良くなったのよ？」

クライン「俺とアツシユは出会ってすぐに意気投合したんだ！既に硬い絆で結ばれた友だ！よろしければ、あなたとの絆も培っていききたい」

そう言つてクラインさんは私に手を差し伸べてきた。これはどうすれば……。

リズ「あ、楓子気にしないで。これはこの馬鹿の挨拶みたいなものだから」

クライン「馬鹿つてなんだよ！俺は真剣だぜ!？」

リズ「あんたもあんたで出会ったばかりの女性にナンパするのやめなさい！」

あ、やっぱりナンパだったんだ……。でも見た感じクラインさんは大人に見えるけど……。そんなことを考えてると、辺りの景色が急に変わって荒野のような景色に変わる。

アスナ「えっ？ な、なにこれ!？」

リーファ「て、転移!？」

ストレア「でもでも、こんなところ見たことないよ!？」

ジャンヌ「この景色って……」

この景色は私たちは何度も見てる。間違いない……。この近くに彼がいる!! 私はいても経つてもいられなくなつて走り出そうとした。その時、私たちの近くに数本の剣が突き刺さる。そしてその中心に彼が上から降ってきた。

奨真「……………楓子がナンパされてる心配がした」

キリト「な、なんだこいつ!？」

彼の姿を見た私は我慢できなくなつて彼の前にいく。そしてそのまま抱きついた。私が抱きつくと、彼も抱きしめ返してくれた。

奨真「楓子、ちょっと待ってくれ」

楓子「うん」

私は彼が技を解き、ダミーアバターになるのを待つ。彼がダミーアバターになり終えると、私はもう一度抱きつく。

楓子「奨真君、会いたかった!」

奨真 「ようやく会えた」

私は彼の顔に自分の顔を近づけて唇を重ねる。彼は受け入れてくれて長い間キスをした。やがて息が持たなくなつて、私たちの唇は離れる。

楓子 「もう、心配したんだから」

奨真 「こつちのセリフだ。楓子がナンパされてる気配がしたからすつ飛んできたよ」

ストレア 「おおー！君イケメンだけじゃなくてすごーく大胆だねー！」

リズ 「まさかここにもバカップルがいるとは……」

クライン 「アツシュ……どゆこと？」

アツシュ 「アニキ!!最高にクールだぜい!!」

ういうい「しよーにい！」

ういういが走ってきて奨真君に抱きつく。この子も奨真君に会いたがってたからね。奨真君はういういの頭を優しく撫でる。

レミ「この先生馬鹿ー!!」

奨真「ぐへ!!」

突然横からレミが奨真君に飛び蹴りをした。そのせいで奨真君は雪の上を転がる。

レミ「スノーゴーレム倒した瞬間急に『楓子がナンパされてる!?!』とか言ってますっ飛んで行って!!私とフィリアさんは置いてけぼりですかこの馬鹿!!」

奨真「だからってやりすぎだろボケエ!!」

フィリア「ふ、2人とも落ち着いて！」

アスナ「フィリアちゃん!」

奨真君とレミの間に黒髪の女の子が仲裁に入る。アスナさんは知り合いみたいだけ
ど……。

フィリア「あ、みんな!」

キリト「この人たちと知り合いなのか?」

フィリア「道に迷ってるこの人たちを見つけてね。それから一緒に行動することになつたんだ。この人たちは?」

黒雪姫「我々はキリトたちの協力者だ」

キリト「すごく頼れる仲間だ」

！
キリトたちの中では私たちはもう信頼できる仲間になったのね。よかったよかった

リーファ「あの、この人が楓子さんが言っていた奨真さんですか？」

楓子「ええ、私の最愛の人よ！」

奨真「俺は奨真。デュエルアバターはブラウンクリエイト。エイトで構わない。そしてこの馬鹿がレミだ」

レミ「馬鹿とは失礼ですね！一度切り刻んであげましょうか？」

奨真「上等だ！やれるもんならやってみる！」

楓子「2人とも。喧嘩はそこまでよ」

奨真・レミ「す、すみません……」

さて、一度落ち着けたし、情報交換ね。アツシユたちはきつと何も収穫がないから……奨真君に聞いてみよう。

奨真「洞窟のようなところはいくつか見つけたな」

レミ「そうですね」

ストレア「とりあえず洞窟に潜ってみよ？」

アスナ「そうですね、もう少し探索しましょう！」

ういうい「しよーに、案内をお願いしてもいいですか？」

奨真「任せろ！」

レミ「いや私が！奨真さんだと道に迷いますので!!」

奨真 「はあ!？」

楓子 「奨真君、私から絶対に離れないでね!!絶対よ!!」

奨真 「は、はい……」

奨真君は方向音痴だから私がちやんと見ておかないと！道案内はレミに任せて洞窟を目指すことにした。

第9話 絶剣

奨真 side

レミが洞窟に案内して、早速中に入る俺たち。中は明かりが灯っていて進みやすく、敵もすぐに察知できる。

奨真 「はああ!!」

キリト 「おおお!!!」

主に俺とキリトが前に出て敵を倒してる。お互い2つの剣を同時に使うから、エネミーもすぐに倒れる。

キリト 「やるなあ!」

奨真 「キリトこそな！」

アスナ 「似た者同士ねえ……」

後ろからアスナさんの呆れ声が聞こえてくる。会った時からどこかで見たことある
と思つてたけど……気のせいかな？

リーファ 「あつ！みんな見て！……ここが最深部じゃない？」

リーファの声にみんな奥の方を見る。そこにはモンスターの絵が描かれた扉があつ
た。

アツシュ 「俺様が偵察に行つてくるぜ！！」

クライン 「アツシュ!？」

アツシユはバイクに乗り、扉を無理矢理こじ開けて中に入る。1人で行って大丈夫なのか？不安しか出てこない。

シリカ「あの……あの人大丈夫でしょうか？」

フィリア「助けに行ったほうが……」

藤乃「面白そうなのでもう少し後に行きましょう」

ハルユキ「藤乃さん……鬼ですね」

藤乃はそう言うが、やっぱり心配だ。俺たちは扉を開けて中に入る。中ではアツシユがバイクで暴走して、もう1人がゴーレム型エネミーに攻撃していた。黒い剣と炎を操る人物。

楓子「オルタ!？」

オルタ「あ、久しぶりね。悪いけどこいつは私が倒すからその辺で待ってなさい！」

シリカ「ひ、1人だと危険じゃ……」

ジャンヌ「シリカちゃん。ここはオルタの言う通りに。巻き込まれるよ」

手から炎を出し、それをエネミーにぶつける。視界を奪って剣で追い討ちをかける。斬りつけ、一旦離れると剣を上にあげる。すると頭上に数本の槍が出現し、オルタはそれをエネミーにぶつける。

オルタ「意外としぶといわね。なら、これを試すようにしましょう」

オルタは剣から炎を纏わせ、地面に何かを描き始める。するとその絵から黒いチェーンのようなものが立体化してでてきてエネミーに絡みつく。

オルタ「ヘルブレイズチェーン」

リーファ「わっ！チエーンから火が！」

シノン「いえ！それだけじゃないわ！」

プレミア「グイグイと締め付けていってます。つまり、拷問？」

アスナ「ご、拷問……うーん……近いっていえば近いかな……」

オルタ「そのまま裂けなさい!!あとあなたは邪魔!!」

アツシユ「あ、ソーリー」

オルタは手を握ると、チエーンの縛りがさらに強くなり、そのままバラバラに裂かれた。そしてさつきからバイクで暴走してたアツシユはオルタにとつては邪魔だったんだな。というか特に攻撃とかしてないし……。

オルタ「ふう……弱いわね」

キリト「あ、あんたすげえ強いな」

オルタ「当然よ。つてか誰？」

オルタにとっては俺たちバーストリンカー以外とは初対面だったな。キリトたちは軽く自己紹介とこれまでの説明をする。

オルタ「だいたいわかったわ。とりあえず人助けね」

黒雪姫「そうだ。あ、キリト。メンバーが全員集まれば改めて自己紹介をしよう」

キリト「いいぜ」

ニコ「んー、何にもねえな」

エギル「どうやら普通のボスじゃオーブは落ちないみたいだな」

ハルユキ「つてことは ニコの時みたいに偽物のバーストリンカーでしょうか？」

ジャンヌ「それはまだわかりませんね。他の王がでてきてオーブが取ればその可能性は高いですが」

フィリア「一旦街へ戻ろう。考えるのはその後だよ！」

フィリアの言う通りだな。ここで考えても仕方ない。街で情報収集をしながら考えたほうがいい。俺たちは洞窟を脱出して街に転移した。

く空都ラインく

一旦街へ戻り、エギルの店に入る。中に入ると、店中がピカピカだった。普段からこんな感じなのかな？

エギル「お、おいおい……なんでこんなにピカピカなんだ!？」

??? 「ん？お前がここの店主か？暇だったから綺麗にしておいた」

エギル「そ、そりゃあ助かるが……」

俺たちの目の前にいるのは黒服を着てカウンターの椅子に座っている蓮だった。

楓子「もしかしてそれが蓮くんのダミーアバター？」

蓮「そうだけど」

リズ「なんていうか……執事みたいね」

黒雪姫「蓮君は私の姉さんの護衛であり執事でもある」

アスナ「うわぁ……すごい」

プレミア「執事とお嬢様……禁断の恋の予感？」

蓮「その小さい君。それはないからね？」

とりあえず椅子に座る俺たち。机も椅子も何もかもが綺麗だった。アスナさんとエギルはキッチンへ向かうと、そこからも大きな声が聞こえてくる。

アスナ「キッチンもピカピカ!？」

リズ「ねえ蓮だっけ？何か料理とかもするの？」

蓮「一通りできるぞ。なんでも言っていていいよ」

リズ「じゃあパフエ！」

リーファ「あたしもー！」

シリカ「アタシもお願いします！」

蓮「パフエ3つだな。ちよつと待ってる」

蓮は3人からオーダーを取ってキッチンへと入る。それと入れ替わりでアスナさんとエギルが出てきた。

楓子「蓮君って料理もできるんだね」

奨真「まあ白雪の護衛だし、できてもおかしくないんじゃないか？」

プレミア「楓子は料理できるんですか？」

楓子「ええ。奨真君のために頑張ったからなんでも作れるよ！」

プレミア「奨真のためになんでも作れるようになった。つまり良妻」

楓子「あらあら、嬉しいことを言ってくれるのね」

リズ「甘いもの食べる前から甘いんですけど……」

レミ「今度奨真さんに新しいイタズラを試してみようかな」

シノン「あなた本当に彼をいじるのが好きね」

レミ……もし実行したら覚えとけよ……。そんな感じで待つてると、お盆にパフエを

3つ乗せて蓮がこっちにきた。

蓮「どうぞ。イチゴパフェとチョコレートパフェとマンゴーパフェだ」

3人「「お、お、美味しそう！」」

確かにどれも美味しそうだ。蓮って家事能力高いな。

アスナ「もしかして蓮君、料理スキルMAX？」

蓮「料理スキル？そんなものは使ってないけど？」

フィリア「スキルなしでこのクオリティ!？」

蓮「それより3人。食べないのか？」

3人「「いい、いただきます！」」

リズはイチゴパフェ、リーファはマンゴーパフェ、シリカはチョコレートパフェを一口食べた。3人は目を見開き、幸せそうな顔をした。

3人「「お、おいひい……」」

アスナ「わ、私も一口！」

フィリア「私も！」

キリト「お、俺も！」

クライン「俺にもくれ！」

エギル「俺にも一口！」

ストレア「アタシも〜」

シノン「一口もらおうかしら？」

プレミア「私にも一口ください。つまり、あーんです」

キリトたちは一齐にパフェを一口ずつ食べ始めた。全員幸せそうな顔をした。

楓子「そんなに美味しいのかな？」

奨真「あの反応だとそうなんだろうな……」

???「わー！美味しそうだなー！」

「[[[[?]]]]」

全員がその声に反応して外を見る。外には窓に張り付いた紫髪の女の子がいた。あの子どこかで見たことが……。

アスナ「ユウキ!?!」

アスナさんは走ってあの子のところに向かい、中に連れてきた。やっぱり見たことがある。それにユウキって……。

ユウキ「やつほーみんな！久しぶり！」

アスナ「久しぶりだけど……、それよりユウキ！体はもう大丈夫なの!?!」

ユウキ「っ!?!」

ユウキという名前、あの容姿、体のこと。やっぱりこの人は昔の紺野先生だ。当時の先生はまだ病気が治ってないのか。

アスナ「ユウキ！無理してダイブしてるの！ねえ！検査の結果はどうだったの！答え
て!!」

ユウキ「あ、アスナ……いつぺんに言わないでえ……」

アスナさんは一旦落ち着き、もう一度ユウキに聞く。

ユウキ「もう答えを言うね。検査の結果なんだけど、これを見て」

先生はメニュー画面から検査結果のような資料を俺たちのほうに送ってきた。アスナさんが最初に見て、俺たちもその結果を見る。

アスナ「っ!?!これって……」

結果を見たアスナさんは涙を流す。

ユウキ「ボクの病気はね、完治したんだ！これからずっと生きていけるんだよ！」

アスナ「ユウキ!!」

ユウキ「わっ！び、びっくりした……」

アスナ「よかった……よかった！」

奨真「先生の病気はこの時期で治ったんですね」

ユウキ「へっ？先生？」

俺たちは軽く自己紹介し、これまでのことを説明する。俺たちが未来から来たことを。

ユウキ「へえ！ボクって医者になるんだあ！でもボクって白衣とか似合うかな？」

奨真「先生の白衣はすごく似合ってますよ！」

楓子「それに先生は私たちの時代も今も変わらず可愛いですし！」

ユウキ「いやゝ照れるな。でもこれって子供っぽいつてこと？」

キリト「なあユウキ。久々にここに来ただろ？体はもう動かしたのか？」

ユウキ「それがまだなんだよ。誰か相手してくれないかな？」

そういえば先生は絶剣って呼ばれてたとは言ってたけど、それ以外のことについては全く教えてくれなかったな。これを機に先生がどれほどの力を持ったのか教えてもらおう。

奨真「先生、俺でよかったら相手しますよ」

ユウキ「いいの！やったー！」

蓮「デュエルもいいけど、パフエは最後まで食べてくれよ」

リズとリーファとシリカは、パフエを全て食べ終えて、闘技場に向かうために転移門に向かう。

第10話 戦闘という名のリハビリ

闘技場で俺と先生は向かい合う。まさか先生と戦う日が来るとはな。絶剣って呼ばれてたくらいだから相当強いんだろうな。

ユウキ「思う存分楽しもうね！」

奨真「全力で行きます！」

カウントが始まり、俺は干将・莫耶を投影する。ゼロになると同時にお互い突っ込む。

ユウキ「やあ!!」

奨真「はああ!!」

先生は通常より細い片手直剣で突き攻撃してくる。俺は両手に持つてる剣で受け流す。受け流した時の回転を利用して左足で蹴りにいく。

ユウキ「ガフツ……」

ダウンした時に攻めに行こうと思ったが、先生は受け身をする。俺は剣を逆手に取り、接近する。

ユウキ「てやあ!!」

奨真「っ!？」

先生は剣で四角形を描くような4連撃で俺に斬りつけてきた。防御に回ったが、一撃目で剣が破壊されてモロに食らってしまう。

奨真「……………流石、絶剣って呼ばれてただけはありますね」

ユウキ「ふん♪」

まさか、先生の剣があんなに速いとは思わなかったな。でも、まだ負けたわけじゃない。剣は破壊されたけど、また作ればいい。作るのもタイミングが大事だが。だから俺は投影せずに先生に突っ込むことにした。

ユウキ「素手だとキツイんじゃないかな！」

奨真「さあ？それはどうでしょうね!!」

先生が下から剣で斬りあげてくる。俺はそこを狙って干将・莫耶を投影して両手で跳ね返す。

ユウキ「っ!？」

流石に先生も驚いているか。

ユウキ「その剣はさつき壊したはず……」

奨真「だから作つたんですよ」

ユウキ「えー！そんなのずるい！」

ずるいつて……。

ユウキ「まあそのほうが面白そうだし、いっか♪」

奨真「じゃあ仕切り直していきますよ!!」

それからはお互い全力で戦う。広い闘技場をあちこち移動しては剣を交え、剣だけでなく体術も使ったりした。

ユウキ「はあ……はあ……」

奨真 「はあ……はあ……」

ユウキ 「こんなワクワクしたのアスナの時以来だよ！」

奨真 「俺も楽しいですけど、戦うことで精一杯ですよ……」

ユウキ 「まだまだボクには敵わないってことだね♪」

奨真 「それは聞き捨てなりませんね」

俺は剣を持ち直し、俺はある言葉を唱えた。

奨真 「トリガーオフ！」

俺の干将・莫耶は大きくなり、攻撃力も高まった。

ユウキ 「なにそれ!？」

奨真「魔法で言うところの強化ですよ」

俺は強化した剣で斬りつける。何度も何度も攻撃し、反撃の隙を一切作らない。先生も守ることで精一杯だな。このまま押し切る！

ユウキ「ここ!!」

俺が攻撃してる途中、先生は目に見えない速度で剣を操り、俺の攻撃を跳ね返した。

奨真「嘘だろ！あれが見えるのか!!」

ユウキ「はああ!!」

できる自信はないが、一か八かあいつが使ってたアレを試すでしょう。

奨真「天の鎖!!」

ギルガメッシュの時みたいに宝物庫からは出てないが、なにもないところから鎖が三本出てきて先生の腕を縛る。

ユウキ「っ!？」

奨真「やってみた甲斐があつたな」

でも5秒で鎖は消えた。やっぱりギルガメッシュが使ってる天の鎖やエアは特別なんだな。なら、俺の必殺技で。

奨真「u^アn^ンl^リi^ミm^テi^トt^ドe^ド b^ブl^レa^イd^ドe^ド w^ワo^ーr^クk^スs^ス!!」

ユウキ「わあ!景色が変わった!」

奨真「先生にはこれを防ぐ自身はありますか!」

俺は剣の雨を先生の頭上に降らせた。これを先生はどう捌くのか。

ユウキ「バーチカルスクエア!!」

ソードスキルを使って回避しようとしてるけど、無数の剣を捌ききることはできないか。

ユウキ「数が多い!なら、君自身を叩く!!ヴォーパルストライク!!」

先生はものすごいスピードで俺の方に突進してくる。咄嗟にローアイアスで防御するが、スピードが速いせい、ローアイアスにヒビが入る。

ユウキ「このまま一気に肩をつける!!」

先生の剣は紫色に光り、もう一度突き攻撃を仕掛けてくる。それもものすごいスピードで。

奨真「お、重……ローアイアスか」

ユウキ「やあああ!!!マザーズロザリオ!!!」

マザーズロザリオ。そうか。これがVRMMO界で伝説となった11連撃。こんな凄い技を食らって終われるなら、悔いはない。最後の一撃がくると、ローアイアスは砕け、そのまま俺に突き刺さる。

奨真「……………あれ、まだ生きてる」

HPを見てみると数ドットだけ残ってた。峰打ちで済ませてくれたのか。

ユウキ「立てる?」

奨真「ありがとうございます」

ユウキ「いやあ君強いね!」

奨真「先生のほうが上ですよ」

ユウキ「勝負ならいつでも受けてあげるからね！」

奨真「レベルアップしてから挑みます」

楓子「お疲れ様」

観客席で見てたみんなが下に降りてきた。

アスナ「やっぱりユウキは強いね」

ハルユキ「奨真さんが負けるなんて思いませんでしたよ」

キリト「どうだったユウキ？もう慣れたか？」

ユウキ「もちろん！これで思う存分戦えるよ！」

先生の準備運動も終わったし、転移門に向かおうとする。途中で先生は転移門で待つててと言って違う方に行った。多分買い出しだと思ったから先に行つて待つことにした。

奨真 s i d e o u t

ユウキ s i d e

ボクはみんなと一旦離れてある人物を追う。それは急にみんなの輪から抜けた蓮君

だ。何故抜けたのかはわからないから、とりあえず追いかけて呼び戻しに行く。

ユウキ「あ、いたいた！おーい！蓮……君？」

後ろから見ても蓮君の様子がおかしいのはわかる。咳き込んでいるし、右手を壁につき、左手で胸のあたりを押さえてた。

蓮「っ!?!ユウキ……さん」

ユウキ「胸を……心臓のあたりを押さえてたけど……」

蓮「なんでもないです。さあ、戻りましょう」

彼はなんでもないって言うけど、顔は辛そうだった。もしかして……。

ユウキ「ねえ蓮君。もしかして……君心臓が」

蓮「大丈夫です。まだ……大丈夫ですから」

ユウキ「あんなに辛そうだったのに？ボク、一回見ただけでわかるんだ。どれだけ強がっても、本当は辛いつてことくらい」

蓮「あなたも病気だったからですか？」

ユウキ「まあそれもあるかな。本当に辛かったらログアウトしたほうがいいよ。命は大事だからね。君たちの住む未来でボクは医者らしいから、帰ったら未来のボクに頼んでみるのもアリだと思うよ」

蓮「考えておきます。みんな待ってると思いますし、戻りましょう」

ユウキ「だね。あ、気になってたんだけど、蓮君ってボクたちには敬語だよね？」

蓮「まあ今日知り合ったばかりですし、これが俺の普通というか」

執事としての癖が出てくるのかな？でも奨真君たちには敬語じゃないし、よくわからないいな。そんなことを考えて、ボクたちはみんなと合流した。

第11話 白の王

奨真 side

街の転移門に来た俺たち。転移門付近はなんだか騒がしかった。その中心にいる人物は青色で体がでかかった。

ハルユキ「タク!!」

タクム「ハル!!」

キリト「彼も同じレギオンなのか？」

奨真「当たり前」

黒雪姫「タクム君だけなのか？」

???「あのー私もいるんですけど……」

タクムの後ろから真っ白なアバターが姿を現した。いつも座ってる椅子はないみた
いだな。そして2人はダミーアバターになる。

楓子「白雪!!」

レミ「白雪さんいつのまに？」

白雪姫「いや、ずっとタクム君の後ろにいたんですけど……。私ってそんなに影薄
かったかな……」

「そういえば最近白雪の出番が少なかったような……。いや出番ってなんだ？たしか
に久々に見ただけ。」

「アツシユ「オオウ!!マイシスター白雪!!全員忘れても俺様は絶対に忘れたりしねえぜ!!」

ういうい「マイシスターってアツシユさん、アツシユさんと白雪さんは兄妹ではないのです」

ういういがぶつちやけた……。アツシユはういういにそう言われると落ち込んで三角座りした。幼女には打たれ弱いのか？

ストレア「わーお!この子サツチんにすごく似てるね!」

黒雪姫「私の姉さんだからな」

ストレア「でもおっぱいの大きさは全然違うね!白雪はーファイリアタイプだね!」

ファイリア「わ、私!?!」

黒雪姫「おいストレア。ちよつとこい」

白雪は自分の胸を見てフィリアの胸と比べる。何故かホツとしてから次はストレアの胸に目を向けた。すると今度は絶望を見たような目をした。

ハルユキ「ひい!?せ、先輩がヤンキーみたいになつてる!？」

楓子「サツちゃん、ちよつと落ち着こつか」

サツチは楓子に抑えられてなんとか事態は収まる。

ストレア「よし!サツチんはサツチんのままで、白雪はシーちゃんだね!」

白雪姫「し、シーちゃん?」

ストレア「そ!白雪だからシーちゃん!可愛いでしょ!」

そういえば白雪があだ名で呼ばれるのって初めてだな。いや、そもそも白雪姫っていう名前があだ名か。サッチと同じように本名は誰も知らないからな。

ういうい「本題に入ってもいいですか？タクムさんたちがどうやってここに来たのが気になりますので」

タクム「僕と白雪さんはたまたまポータルを見つけたんだ。ってそうだ!!みんな！チーちゃんが大変なんだ!!」

ハルユキ「えっ!?!チュが!?!」

ニコ「おい!!どういう意味か説明しろ!!」

タクム「チーちゃんが………イエローレディオに攫われたんです」

イエローレディオ!?!もしかしてあいつのニセモノか？

ジャンヌ「タクム君！チユリちゃんはどこで攫われたんですか!？」

タクム「雪山にあるダンジョンでチーちゃんは拘束されました。多分ダンジョンの奥にいるはずですよ！」

キリト「よし！なら黒雪たちの仲間たちを助けに行こうぜ!!」

俺たちは転移門で雪山に移動することになった。

く雪山く

奨真「やっぱり寒いなーここは」

楓子「寒いなら私で暖をとる？」

奨真「できるならしたいけどみんながいるからなあ」

リズ「おおー熱い熱い。あんたら熱すぎてこっちまで熱くなってきたわ」

シノン「ういちゃん、この2人っていつもこうなの？」

ういうい「はいなのです！お2人はいつもラブラブなのです！」

レミ「先生には申し訳ないですけど、この時の奨真さんに飛び蹴りするの結構楽しいですね」

アスナ「レ、レミちゃん!?そういうのはかわいそうだからやめてあげてね！」

アスナさん、ありがとう。そしてレミ。なんか楓子と一緒にいるとき誰かに飛び蹴り

されてると思ったらお前だったのか。

楓子「なら我慢ね」

奨真「そうだな」

タクム「あ、ここです！」

タクムはチュリがいるはずのダンジョンを見つけた。俺たちは中に入ると、迷路のようだった。

リーファ「うわあ……これは探すのに苦労しますよ」

クライン「でも行くつきやねえだろ？」

エギル「とりあえずまだ全員で行動できるな。途中で道が別れたら分担すればいいし」

俺たちは先へ進む。何度も何度も迷いながら進んで行くが、途中から同じ道を何度も進むことになってしまった。

レミ「さつきから同じ道しか通ってない気がするんですけど」

ユウキ「んーボクもそう思う」

楓子「奨真君、ちゃんとしてきてる？」

奨真「楓子が抱きついてきてるからちゃんというよ」

ういうい「私もしょーにいに抱きつくのです!」

白雪姫「私も奨真さんに……はっ!?ダメダメ恥ずかしすぎます!!」

蓮「お嬢……」

キリト「えつと……みなさん？話がだんだんずれてる気がするんだけど」

オルタ「ねえ。私の勘が当たったらなんだけど。これってあの黄色の仕業じゃないの？」

黄色って……あいつか。たしかにイエローレディオならやりそうだ。

??? 『勘で当てられるのはムカつきますね』

突然俺たちの耳に聞こえてきた声。この声は間違いなくイエローレディオだ。

オルタ「ならこの変な手品を解きなさいよ」

レディオ『嫌って言ったらどうします？』

オルタ「ふん、こうするわ！」

オルタは先頭に出ると、剣を取り出した。何をするのか気になると、オルタは剣から炎を出して前に解き放った。

オルタ「ヘルブレイズバースト!!」

前は獄炎が広がり、道が塞がってしまった。

奨真「オルタ！これじゃあ進めないぞ！」

オルタ「ちゃんと考えてあるわ！藤乃！出番よ！」

藤乃「やっと私の出番ですね。……凶れ」

藤乃は魔眼を使って獄炎を捻じ曲げた。すると獄炎は捻じ曲がって少しずつ消えていった。

シリカ「あ、あれ？道が変わってる？」

オルタ「私たちは幻覚を見せられてたのよ。だったらその始まりに強い衝撃を与える。するとこのように元どおりになるってことよ」

楓子「力任せということね……」

ういうい「オルタさんらしいのです」

キリト「とにかく、ここでこんな仕掛けがあるということはゴールは近いということだ。さあ、行こうぜ！」

俺たちは先へ進むと、キリトの予想通り、ダンジョンの最深部だった。

奨真「チユリの姿が見えないな」

楓子「ここにいてると思ってたけど、もしかしてここに来るまでのどこかに隠されて

たつてこと？」

蓮「いやどこにも隠れるところなんかなかった」

シノン「つてことは……またあいつのせいとか？」

レディオ『失礼ですね！あなたたちがいるところはゴールじゃないですよ！』

レミ「答えありがとうございましたー！」

レミのやつ。完全にレディオのことを馬鹿にしてる。でもゴールじゃないってことはどこかにゲートがあるのか？

レディオ『ぐぬぬ……あなたムカつきますね』

レミ「だつていつもちよつかい出してる人いますから」

それ絶対俺のことだろ……。

レディオ『こうなったら……いきなさい！エネミーたち！』

俺たちの周りには大量のエネミーとそれを指揮するボスが出現した。

白雪姫「本当に嫌なことをしますね。イエローレディオだけは」

黒雪姫「同感だ」

リズ「かなりの数ね」

ユウキ「わあ！ワクワクするね！」

ストレア「よーし！張り切っていこー！」

フィリア「呑気だね……」

アツシユ「俺様の華麗なライディングテクニクを見せてやるぜ!!」

アスナ「相手の数も多いけど、私たちも負けてないわ!みんな!怯まずにいくわよ!!」

アスナさんはみんなに声をかけて、俺たちは一斉に前に飛び出してエネミーを撃退しにいった。

第12話 黄の王とドSモード白雪姫

大量のエネミーが俺たちに襲いかかる。だが、俺たちもそれに対抗するために武器を持ち、構える。相手の数も多いが、俺たちも人数は多い。だから二人一組で分散した。

俺とキリト、楓子とアスナさん、リズとジャンヌ、レミとファイリア、シリカとプレミア、エギルとオルタ、クラインとアツシユ、リーファとタクム、シノンさんとういうい、ストレアと藤乃、先生と蓮、白雪とサッチ、ニコとハルユキと美早で別れた。

キリト「いくぞ!!」

奨真「おお!!」

俺とキリトはエネミーのど真ん中に入り込み、回転して斬りつける。そして俺は高くジャンプし、空中で投影してエネミーに剣の雨を降らせる。キリトにも当たってしまうと思ったが、キリトは俺の剣を自分の剣や足を使い、軌道を変えてエネミーに当てたり

して避けていた。

キリト「エイト！もつと剣を降らせても構わないぜ！」

奨真「なら、お望み通りに！ちゃんと避けろよ！」

キリトの望み通りに剣の数を増やしていった。

ユウキ side

うわーあの二人すごいなー。ボクは呑気にキリトと奨真君の戦いを見ていた。あの二人のコンビネーションはすごいなあ。本当にチーターみたいだよ。あ、チーターはチーターでも動物って意味じゃないよ！

蓮「ユウキさん！ボサツとしてないで手伝ってください！」

ユウキ「あ、ごめんごめん！」

目の前の敵に集中しなきゃね。そういえば蓮君つて人形みたいなのを使つて戦うんだね。傀儡師？なんか面白いかも！

ユウキ「ボクを楽しませてよ!!」

ボクは高速でエネミーの目の前にいき、バーチカルスクエアを放つ。一瞬でポリゴン状になったけど、一体一体倒してたらキリがないかな。あ、そうだ！

ユウキ「パペット君！エネミーを一纏めにできるかな！」

蓮「できますが、何かあるんですか！」

ユウキ「それは見てのお楽しみ！」

蓮「なら。はあああ!!!」

蓮君は人形に繋いでる糸を抜くと、エネミーに放った。手先を器用に使い、糸をエネミーに絡めていって、大量のエネミーが一纏めになった。そしてそれをボクがまとめて倒す!!まだ未完成だけど、あの技を使おう!!

ユウキ「これがボクのもう一つのOSS、『コメットアーツ』!!」

マザーズロザリオよりは数が少ない5連撃のOSSを放つ。コメットアーツとマザーズロザリオの違いは単体と全体。マザーズロザリオは単体に特化していて、コメットアーツは全体に特化している。だからこそ、ボクはこの技を選んだ。彗星のように早く剣を使い、エネミーはポリゴン状になってボクたちの周りのエネミーは全滅した。

蓮「す、すごい……」

ユウキ「ブイ!」

さて、そろそろ他のみんなのところも終わってるかなー？

ユウキ side out

奨真 side

俺たちの周りのエネミーは全滅した。他のみんなのところはどうなってるだろう。周りを見ると、みんなも全滅したみたいだった。

奨真 「イエローレディオ！お前の駒はもうないぞ！」

レディオ 『ぐぬぬ……』

オルタ 「あ、なんか出てきたわ」

楓子「これって異界へのゲート？」

ストレア「そうみたいだね」

アスナ「もしかしたらこの先にいるかもしれないわね」

シノン「とりあえず進みましょう」

俺たちはゲートの中に入る。その先で待っていたのは、腐食林ステージだった。

フィリア「うう……なんか気持ち悪い」

美早「あの沼には迂闊に近づかないほうがいい」

ニコ「あのピエロにはうってつけの場所だな」

辺りを見渡すと、メリーゴランドのようなものが見えた。中心にはイエローレディオがいて、その近くにベルが倒れていた。

ハルユキ「ベル!!」

レディオ「くくくくく……よくたどり着きましたね」

オルタ「あんな雑魚を倒すだけなら苦労しないわ」

レディオ「ですが、こっちには人質がいます」

レディオは倒れたベルを無理やり起こして、首元に刃を向ける。ちよつとでも動けばベルが危ない。

楓子「どうすれば……」

レディオ「そうですねえ。黒と赤と白の王で殺しあってください」

黒雪姫「何っ!？」

ニコ「チツ!そうきたか……」

白雪姫「ですが、私たちが殺しあっても、あなたにポイントは行きませんよ?」

レディオ「そんなことは分かってますよ。残り一割になったら参戦させていただきます」

ニコ「相変わらずセコいやつだぜ」

3人はレディオのいいなりになってしまい、戦闘を始めてしまう。3人が時間を稼いでる間に考えろ。じやなきや本当に3人が死んでしまう。

キリト「俺に考えがある」

キリトはシノンさんとういうい、プレミアとオルタを連れて何か話していた。

キリト「4人と、頼んだぜ！」

4人は散らばり、キリトが考えた作戦が開始した。レディオが3人の戦いに夢中になつて居る隙に、プレミアが懐に入る。気づかれないようにベルを救出する。そしてレディオから少し離れた背後からオルタが黒い槍で攻撃する。突然の痛みに驚いたレディオは後ろを見るとオルタに気づく。オルタに気を取られてるうちに、さらに離れたところからシノンさんとういういが弓で追い討ちをかけた。

レディオ「うぐう……い、いつの間に……」

オルタ「あんたがああ3人の戦いに夢中になつて居る間よ」

プレミア「キリト、作戦成功です。つまり、私はできる子です」

キリト「よし、4人とよくやった！」

キリトは4人に作戦を伝えてみたいだ。でもなんでこの4人なんだ？俺は疑問に思い、キリトに問いかける。

奨真「なんでこの4人なんだ？」

キリト「そうだなあ。まずはプレミア。プレミアは体が小さいのもあるから、隠蔽スキルを使えばバレることはない。だからあいつの懐に入ってベルを助ける。そして攻撃のあるオルタがあいつを吹っ飛ばす。最後に遠距離攻撃のできる2人で追い討ちをかける」

楓子「でも追い打ちなら接近戦でもよかったんじゃない？」

キリト「いや、接近戦なら近づくのに少し間ができる。でも弓ならあらかじめ吹っ飛ばす位置に矢を放てば、そこにあいつが行けばすぐに攻撃が当たる」

アスナ「だからあの2人にしたのね」

なるほど。キリトの言う通りかもな。俺はレディオを見ると、背中に矢が何本か刺さって倒れていた。

レディオ「み、見事なコンビネーションですね。褒めて差し上げましょう」

白雪姫「そんなこと言う余裕がありますか？」

白雪はレディオに近づき、椅子から降りて思い切り蹴飛ばす。あれ？白雪ってあんなことする子だったか？

白雪姫「私たちにあんなことさせて、無事で済むと思ってますか？」

ハルユキ「あのお……コスモスさんってあんなキャラでしたか？」

タクム「笑ってますけど、絶対に心の中では笑ってませんよね……」

蓮「あれって……まさかドSモード」

全員「」「ドSモード?」「」

白雪のドSモードという聞いたことのない単語に俺たち全員は反応する。

蓮「1%というかなり少ない確率で出てくるモードです」

リズ「随分と低いわね」

蓮「お嬢のドSモードは本当にやばいですよ。俺土下座させられて頭踏んづけられましたから」

黒雪姫「あ……あれか」

一体何をしたんだ!?でもドSモードか……。楓子のドSモードもなかなかやばいかな。

リーファ「止めた方がいいんですか？」

蓮「いや、あのまま放置しておきましょう。下手に止めに入ると巻き込まれますから」

俺はチラッと白雪の方を見る。そこでは、白雪がレディオの背中に刺さってる矢を抜いたり刺したりしていた。あれだけ見るとかなりグロテスクだな。

レディオ「いいい痛いですよ!!あなたそんなキャラじゃないでしょ!!」

白雪姫「キャラ?今はそんなこと関係ないですよね?私は今あなたにお仕置き中なんですから」

フィリア「パペットの言う通りにした方がいいかもね」

プレミア「お仕置き……。つまり、調教中?」

プレミアアってそういう単語なんで知ってるんだろう。あ、今度は頭を踏んづけてる。しかもめちやくちや速い。

ジャンヌ「イエローレディオは大丈夫なのでしょうか？」

楓子「大丈夫……じゃなさそうね」

白雪が何度も何度も踏んづけたせい、イエローレディオの体が消滅した。そして黄色いオーブがドロップした。

白雪姫「あれ？イエローレディオは？」

蓮「お嬢、あなたが倒したんですよ」

シノン「なんか呆気なかったわね」

キリト「えっと、『クリプトコズミックサーカス』？」

レミ「あいつのレギオンの名前ですね」

アスナ「これで2つ目ね」

ストレア「あとは神殿探しだね」

チユリ「う、ううん……」

気を失っていたベルが目を覚まし、頭を押さえながら立ち上がる。パイルが心配して近づいた。

タクム「チーちゃん！大丈夫!?!」

チユリ「アタシは大丈夫。ってなんか人多いね」

キリト「そのことについては帰りながら説明するよ」

俺たちはゲートに入り、腐食林ステージを後にした。ダンジョンも無事脱出して、フィールドに戻る。街に戻るためにポータルに向かう俺たち。その時、誰かが小さな悲鳴をあげる。

奨真「誰か悲鳴をあげたか？」

キリト「俺も聞こえたな」

周りを見てみるが、俺たち以外誰もいない。そうになると、小さなエネミーか？その時、リーファが悲鳴をあげた。

アスナ「リーファちゃん!？」

リーファ「だ、誰かがあたしの胸を!？」

??? 「柔らかいなあ!この人のおっぱい!」

胸の大きい子の胸を揉む、そしてこの声は。

間違いなくあいつだな。そういえば俺と楓子はこいつも連れてきてるの忘れてた。

奨真「おい寿也。それ以上はやめろ」

寿也「ちえー」

リーファから引き剥がすと、寿也は残念そうな顔をする。

リズ「この子まさにドスケベね。ある意味尊敬するわ」

リーファ「リズさんがそんなこと言ったら冗談に聞こえませんか!!」

リズ「ごめんごめん」

でも寿也とアルトリアが一緒に行動してなかったのは幸運だな。あいつは間違いな

く暴走するからな。

ういうい「とりあえず街に戻るのです」

俺たちは街へ戻り、エギルの店に入る。一息をついてると、一般プレイヤーが何か話してるのを聞いた。

「草原に急に現れた剣士知ってるか？」

「どんな挑戦でも受けるってやつだろ」

「でも誰も勝ってないらしいぜ」

草原に現れた剣士か。ちよつと気になるな。

楓子「草原に行くの？」

奨真 「えっ？あ、まあ」

楓子 「気になるのはわかるけど、奨真君も休まないよ」

ういうい 「そうなのです！しょーには休むのです！」

奨真 「わ、わかったから」

ユウキ 「ならボクが行くよ！」

アスナ 「ユウキが？なら私も」

ユウキ 「アスナもゆっくり休んで。心配しなくても大丈夫！」

キリト 「1人だと危険だぞ？」

黒雪姫 「なら、私が付き添おう」

「サツチも行くなら安心だな。その剣士のことは2人に任せるとしよう。」

ユウキ「じゃあ行ってくるねー」

黒雪姫「行ってくる」

俺たちは2人の背中を見送り、ゆっくりと休むことにした。

第13話 鎧騎士

ユウキ side

ボクと黒雪ちゃんは2人で草原エリアにいる剣士を探していた。それらしき人は全く見つけられていなかった。

ユウキ「うーん、全然いないね」

黒雪姫「手がかりが少なすぎるからな。他のプレイヤーにもっと情報を聞けばよかったかもしれない」

その方がいいけど、転移ポータルからはかなり離れちゃってるから戻るのも面倒だしなあ。

ユウキ「もうちょっと歩いてみようよ。もしかしたら誰かと出会うかも！」

黒雪姫「ユウキがそういうなら」

ボクらは再び歩き始める。とりあえず騒がしい場所を探す。歩き続けると、遠くで騒がしい音が聞こえてきた。

黒雪姫「あそこが騒がしいな」

ユウキ「ちよつと行ってみよっか」

ボクらはその場所に向かう。到着すると、沢山のプレイヤーがいたから、その人たちを避けて前が出る。そこでは鎧を着た人がALLOのプレイヤーとデュエルしていた。

???「さあ、次です！」

プレイヤー1「なら俺が！」

プレイヤーが鎧騎士さんに突撃する。鎧騎士は軽々と避けて、両手に持つてる剣でプレイヤーを真つ二つにした。

プレイヤー2「あんな奴に勝てるのかよ」

確かに、あの人はめっちゃくちゃ強い。相手を一撃で倒すなんて簡単にできることじゃないからね。

黒雪姫「あいつは……」

ユウキ「黒雪ちゃん？」

黒雪ちゃんは鎧騎士さんの前に出る。すると、急に手を出して、握手をしようとした。鎧騎士さんも同じように手を出して、2人は握手をする。

ユウキ「えっ？ どういうこと？」

黒雪姫「彼女は我々の仲間だ」

??? 「むっ……? ちよつと失礼」

鎧騎士さんはそういうと、いきなりボクの胸を鷲掴みしてきた。つて他の人がいるのに!?! めちゃくちゃ恥ずかしいんだけど!?!

ユウキ「な、なにをするのさ!」

??? 「いや、失礼。私と同じ仲間かと思ひまして」

ユウキ「どういう仲間!?!」

もう、さつき会った寿也くんといい、黒雪ちゃんたちの仲間は胸を触る人ばかりなのー?!

黒雪姫 「ここじや目立つ。街へ戻ろう」

??? 「街ですか？わかりました。案内お願いします」

ボクらは鎧騎士さんを転移ポータルまで連れて行き、街へ戻る。みんながいるエギルの店の中に入ると、くつろいでるみんながいた。

奨真 「あ、おかえり」

アスナ 「どうだった？」

ユウキ 「多分この人だと思う」

黒雪姫 「ほら、ダミーアバターになるんだ」

??? 「こうですか？」

鎧騎士さんは指を動かしてメニューウィンドウを操作する。すると、鎧騎士さんが美少女剣士に変わった。

リズ「うわあ……これはまた美少女が出てきたわねえ」

キリト「なあ奨真。君たちのパーティーも男女比率が偏ってるな」

奨真「わかってるよ。そっちもかなり偏ってると思うけどな」

鎧騎士さんは自己紹介をする。彼女はアルトリアというらしい。

アルトリア「むむ、ここには私の仲間が少ないですね」

ハルユキ「えっ？レギオンのメンバーも集まってきましたけど……」

レミ「たぶん、そういう意味じゃないと思うよ」

どういう意味なんだろう。さつき胸を揉まれたりしたし、もしかしてそれが関係してる？

ニコ「アルトリアも加入したし、まずは状況整理だな」

リーファ「今あたしたちが持つてるオーブの数は2つ」

シノン「神殿はまだ見つけれないから、次は神殿探しね」

ジャンヌ「草原エリアと同じように、上空にあるかもしれないね」

ユウキ「かもね、早速行こう！」

白雪姫「あれ？蓮君は？」

アスナ「さつきまでここにいたんだけど……」

ユウキ「じゃあボクが探すから、先に雪山に行つてて！」

ボクは店から出て、蓮君を探しに行く。前と同じように裏路地に向かうと、胸を押さえた蓮君がいた。

ユウキ「本当に大丈夫なの？」

蓮「大丈夫です。すぐに良くなります」

ユウキ「白雪ちゃんがみたら悲しむと思うよ」

蓮「わかってますよ。だから人目のないところに來てるんですよ」

ユウキ「そっか」

やっぱり彼が心配だ。彼自身は大丈夫というけど、戦闘中に何かあったら大変だ。その時はこのことを知ってるボクがカバーしなきゃ。

蓮「みんなはもう雪山ですよ。俺たちも早く行きましょう」

ユウキ「うん」

ボクらはみんなが待ってる雪山エリアに転移して合流する。

ユウキ s i d e o u t

褒真 s i d e

先生たちも無事に合流して、俺たちはジャンヌが予想した通り、上空にあった神殿を見つけ出し、中に入ることができた。

黒雪姫「コンソールがあつたぞ」

キリト「必要なオーブの数は2つみたいだ」

奨真「よし、2つのオーブをはめよう」

俺はくぼみにオーブをはめる。すると、コンソールの向こう側に転移門のようなものが現れた。

アルトリア「この先に新たなエリアが……」

楓子「行きましょう。他のみんなもこの先にいるかもしれないわ」

俺たちは転移門をくぐる。その先に待っていたのは一面砂で覆われた砂漠だった。

奨真「寒いところの次は暑いところかよ……」

楓子「でも暗いからそこまで暑くないよ？」

アスナ「ここも侵食されてるね」

クライン「空には変なものが見えるような」

それを見ると、巨大な丸い玉のようなものがいくつか浮いていた。

白雪姫「っ?!みなさん!!後ろに気をつけてください!!」

全員「「「っ?!」」」

物凄い気配を感じて、俺たちは後ろを向き、とつさに離れる。そこには長い黒髪で仮面をつけた女がいた。

奨真「誰だ!!」

アスナ「ペルソナヴァベル!!」

キリト「やつと姿を現したな!!」

アスナさんとキリトが知ってるってことは、こいつがユイちゃんを攫った張本人ってわけか。

アスナ「ヴァベル! あなたの目的はなんなの!!」

ヴァベル「黄昏の魔女である妾の願いは、この仮想世界の黄昏の成就。それ以外にはない」

キリト「早くユイを解放しろ!!」

クライン「おうおう! あんたが仮面の美女……じゃなかった魔女か! あんたよ……キリトがな。ユイちゃんがいなくなってどれだけ心を痛めてるのかわかってるのか!?!」

ユウキ「ここはボクにも言わせて！クラインさんだけにはカッコつけさせないよ！」

蓮「ヴァベルだったか？ユウキさんが言う前に俺からも一っだけ言わせてもらおうか。誰かにとって大事なものの失わせて苦しませるような行為はクズがすることだ。それをわからないあんたでもないだろ？」

ヴァベル「……………」

蓮「凶星か」

ヴァベル「お前如きが妾の何がわかる」

蓮「わからないな。俺はあんたではないし、初対面だ。あんたのことなんか何一つわからない」

蓮は自分が思ったことを言い終わると、後ろに下がる。

アスナ「クラインさん、ユウキ、蓮君」

ユウキ「アスナ。アスナは凄く気丈に振る舞ってるけど、ボクは知ってるよ。ふとした時に泣きそうな顔をしてる。ボクに……生きる希望を持たせてくれたアスナを………あんな悲しい顔をさせるあなたを………ボクは許さない！」

流石先生の観察眼だな。誰も気づけないようなところにも気づけてる。

ヴァベル「………ふん。やはり何も気づいてないのだな。これは二乗的に膨らむ悲劇を止める第一歩」

ハルユキ「どういうことだ！」

ヴァベル「そこから先は自分で考えるがいい。いずれわかるさ」

ヴァベルはその場から消えようとするが、クラインと先生、アルトリアが逃さないように攻撃を仕掛ける。

クライン「どりやああ!!」

ユウキ「せやあああ!!」

アルトリア「はあああ!!」

だが、ヴァベルに攻撃は通らず、弾かれて3人は壁に激突する。

クライン「ぐおっ……」

ユウキ「ガフツ……」

アルトリア「ぐうっ……」

ヴァベル「お前たち如きが妾を倒せると思うな」

ヴァベルはそれをいうと、煙となり、姿を消した。さつきまでヴァベルがいたところには何もなかった。

キリト「消えた……?」

奨真「逃げられたか」

エギル「クライン!大丈夫か!」

シノン「ユウキ!しっかり!」

楓子「アルトリア!動ける!?!」

エギルとシノンさん、楓子はさつき吹っ飛ばされた3人を助けに行つた。

クライン「お、おう……。ありやなんなんだ……」

ユウキ「触れてもないのに弾かれた感じがしたけど……」

アルトリア「私の聖剣が通じないなんて」

白雪姫「今のままじゃ、ヴァベルに対抗するのは難しいですね」

フィリア「でも、どうすれば」

オルタ「今やることをやるだけよ」

シリカ「やれること？」

ストレア「あっ！オーブ探し!!」

オルタ「アタリ」

なるほど、確かに俺たちが集めてるオーブの力は未知数だ。もしかしたらヴァベルに

対抗できるかもしれない。

シリカ「ですが、その肝心なオーブはどうやって集めれば」

プレミア「あの、私の推理だと、前に戦った黄の王、赤の王のように色の王を倒せばよいのでは？」

楓子「そうね。これまでのことを考えればそれが一番正しいわ」

ういうい「なら七王を探すことから始めるのです！」

ストレア「ねえねえ、その七王？ってほかに何色がいるの？」

燐真「七王は赤、黄、紫、青、緑、白、黒の七色だ」

キリト「ならあとは紫、青、緑、白、黒の5人か」

アスナ「黒と白ってことは黒雪ちゃん和白雪ちゃんのダミーもいるってことよね」

白雪姫「そうなりますね。ですが私たちのダミーが出てきても容赦しないでください」

黒雪姫「私からも頼む。いくらダミーでも手を抜くと一瞬でやられるぞ」

サッチと白雪は七王の1人だ。いくらダミーでもそれなりに実力はあるだろう。だからこそ2人は手を抜かないでほしいと頼んだのだろう。

シノン「とにかく、この色々と変わってしまった砂漠から探さないといけないわね」

チユリ「なんか変なワープゲートみたいなのがあるね。どこに繋がってるんだろう？」

藤乃「おそらくこの砂漠のどこかに繋がってると思います」

この砂漠の周りを少し見てみたが、確かにそこら中に変なワープゲートのようなものがあつた。あんなにあればどれがどこに繋がってるのかわからないな。

エギル「おい、あのワープゲートから誰か出てくるぞ」

エギルがそう言つて、みんなが1つのワープゲートに集中する。そこからは白髪に近い髪の色をした女の子が出てきた。

??? 「やつと広いところに出られた」

キリト「ティア!？」

ティアと呼ばれた女の子はこっちに気づくと、近づいてくる。その時、プレミアが前に出てきて、ティアの前に立つ。

プレミア「ティア、どこを彷徨つてたのですか」

ティア「このワープゲートを辿って遺跡の中をね。そんなことより、この人たちは？」

俺たちバーストリンカーは軽く自己紹介をする。

アルトリア「遺跡というのが気になりますね。もしかしたら手がかりがあるかもしれません」

ティア「このワープゲートをくぐると迷う可能性は高いわ。分担するのはオススメしないわ」

奨真「そうか。なら固まっていこう」

俺たちは全員同じワープゲートをくぐり、遺跡を探すことにした。その最中、何回かみんなと逸れかけて、その度に楓子に説教されることになってしまった。

第14話 親友との再会

砂漠にあるワープゲートを潜り、遺跡の中を探索する。俺は何度か迷いかけてその度に楓子に怒られてきたが、ついに迷子になってしまった。

とりあえずみんなを探すためにあちこち探索するが、同じところをグルグル回ってる気がして全然探索できてなかった。

奨真「どうしよう。このままだったら楓子に怒られるだけじゃすまない！」

前にもこんなことがあって俺は一週間楓子に口を聞いてもらえなかった。あれはきつかった。もうあんな思いはゴメンだ。そのためにも早くみんなと合流しなきゃ！

??? 『うーん、君強いね』

??? 『こういうのは得意だね』

どこからか話し声が聞こえてくる。俺は声のするほうに向かう。近づくと少しずつ声の大きさは大きくなり、その声は大きめの穴から聞こえてきた。

それなりに大きいから少し屈めば普通に通れるかな。俺はその中に入ると、そこには赤髪の女の子と白夜がゲームみたいなのをやっていた。

奨真 「白夜!？」

白夜 「ん？奨真!？」

赤髪の女の子 「えっ？知り合い」

白夜 「さつき話した友達だ。あれ？奨真一人だけか？」

奨真 「みんなと一緒にいたんだけど、逸れてしまった。白夜はこの子と何してるんだ

？」

白夜「チエスをやってたんだ。暇潰しにはちょうどいいかなと思ってな」

赤髪の女の子「なかなか勝てないから悔しいな」

そう言つて悔しがる赤髪の女の子。あれ、なんかこの子見たことがある。実際に出会ったのはこれが初めてだけど、それでも見たことがある。

俺は白夜を呼び出して、あの子について話し合うことにした。

奨真「なあ、あの子見たことないか？」

白夜「俺も出会った時からそう思つてたんだよ。たぶんテレビか何かで見たと思う」

奨真「そうだよな。でも思い出せない」

赤髪の女の子「あの、何話してるんですか？」

奨真「い、いやなんでもないよ！」

赤髪の女の子「そうですか？あ、自己紹介がまだでしたね。私はレイン。よろしくね」

奨真「俺は奨真。アバター名はブラウンクリエイト。エイトでいいよ」

お互い自己紹介をして、握手をする。ちょうどその時、出口の方から多数の足音が聞こえてきた。それと同時に話し声も聞こえてくる。

楓子「ここから聞こえてくるわ。入りましょう」

あ……この声は楓子だ。勝手に逸れたから怒られる覚悟だけはしておこう。

アスナ「よいしょつ。あれ、レインちゃん!？」

レイン「アスナちゃん！みんなも！」

キリト「おつ、奨真も一緒みたいだな。あとその仲間っぽい人」

楓子「しょ・う・ま・君？」

奨真「は、はい……」

楓子「何かいうことがあるんじゃない？」

奨真「迷子になってごめんなさい。お願いだから土下座してる状態で上に乗らないでくれ!!」

俺は全力で土下座をして許してもらおうとする。そして楓子は土下座してる俺の上に乗る。

楓子「それは私が重たいって言いたいの？」

奨真「そんなことは断じて思っていないません!!ただこの状態が辛いだけです!!」

エギル「ありやあ将来尻に敷かれるだろうな」

レミ「ププ……あんなに慌てた奨真さん初めて見ますね」

シノン「あんた、地味に笑ってるわね」

楓子が俺の上座ってるから立ち上がることができない。みんな何か話してるみたいだけど、俺はこの状態で参加しなきゃいけないのかよ。

その時、チユリはレインを見たとき大きな声をあげた。

チユリ「あー!!女優の枳殻虹架さんだ!!」

レイン「えっ!?!なんで私の本名を!?!」

キリト「実は……」

（説明中）

レイン「そういうことなんだ。ユイちゃんが危険な目にあってるなら力を貸すよ！」

アスナ「でもレインちゃんが女優かあ。未来って凄いなだね」

ユウキ「ねえねえ。あれどうするの？」

やっとみんなこっちに気づいた。キリトがレインに説明してる間もずっと座られっぱなしだった。本当にこれいつまで続くんだよ。

白雪姫「あの、楓子さん？そろそろ奨真さんを許してあげたほうが……」

楓子「うーん、本当はもうちよつとだけ必要だけど、時間がないからまた今度ね」

えっ？白雪のおかげでなんとか解放されたけど、このお仕置きってまだあるの？

白夜「あれ？そういえばあきらの姿が見えないな」

ういうい「レンねえとはまだ合流できてないのです」

白夜はういういから聞くと残念そうにする。一方タクムとチユリはあきらの名前を聞くとなぜか困った表情をした。

2人なら何か知ってると思った俺は、2人に聞いてみることにした。待つていた回答は誰も予想することができなかった回答だった。

タクム・チユリ「あの、あきらさんって……誰ですか？」

それを聞いた俺たちは、驚きのあまりその場から動くことができずにただ突っ立つてることしかできなかった

第15話 あきらを探せ

チユリ・タクム「あきらさんって誰ですか？」

2人が言ったこの言葉には俺たちは声が出なかつた。今までずっとネガ・ネビユラスで一緒だったのに、そのあきらのことがわからないと言うからだ。

白夜「おい2人とも。冗談はやめてくれよ」

チユリ「冗談とかじゃなくて……」

タクム「本当にわからないんですよ……」

キリト「えつと……。とりあえずそのあきららつて子は君たちの仲間……。なんだよな？」

楓子「ええ。あきららは私たちネガ・ネビユラスの幹部、エレメンツ四元素の一人よ」

アスナ「幹部って凄い強いってことよね？そんな凄そうな人のことって簡単には忘れないと思うけど」

確かに、アスナさんの言う通りあきらほどの実力を持った人なら他のレギオンの人だって簡単には忘れたりしない。でも2人の記憶からはあきらについてのことは一切ない。

みんなで悩んでると、ハルユキは何か思い当たることがあるのか、俺たちに言ってきた。

ハルユキ「メモリーリークじゃないですか？」

クライン「め、メモリー……何？」

熒真「メモリーリーク。あきらの心意技の1つ。記憶の一部を封印することができるんだ」

ういうい「もしかしたら、お2人はそれで記憶からレンねえについてのことを封印されたのかもしれないのです」

リーファ「一体何のために？」

アルトリア「それはわかりませんが、理由もなく記憶を封印する彼女ではありません」
何でそんなことをしたかは直接あきらに聞くしかないか。でもそのあきらの居場所がわからないし手がかりもない。

いや、もしかしたらこの砂漠の何処かにいるかもしれない。白夜の時みたいにワープゲートの先にいるという可能性もある。

白雪姫「あきらさんを探さなきゃいけません、まずはここから脱出しなくちゃいけ

ません」

黒雪姫「そうだな。帰りのゲートもどこに繋がってるのかもわからない」

白夜「そんなことしなくても壁を壊せばいいんじゃないか？」

エギル「おいおい、そんなことができるのか？」

オルタ「私も同じことを考えてたわ」

楓子「む、無理矢理行くのね……」

まあ確かに無理矢理だが、壁を壊せば簡単に外に出ることができる。幸い壁は脆い。強い衝撃を与えれば壊れるかもしれない。

??? 「その仕事、僕がやろう」

ユウキ「っ!?その声は……」

声が聞こえたと思つたら、突然俺たちの後ろから誰かが猛スピードで走り、壁を壊した。正確に言えば切り刻んだか。

??? 「これでいいかい？」

レミ「えつと……貴方は？」

ユウキ「カムイ!？」

??? 「カムイ君だけじゃないわ」

また新しい声が聞こえて、後ろを振り向くと、俺たちが通ってきた穴から小さな女の子が入ってきた。

レイン「セブン!？」

セブン「プリヴィエート！みんな元気にしてる？」

ユウキ「カムイ！なんでここがわかったの!?!」

カムイ「お、落ち着いて。ちゃんと説明するから」

セブンとカムイは簡潔に説明してくれた。どうやら2人で出口を探してる時にたまここにたどり着き、その時に俺たちの声が聞こえて事情を聞いていたらしい。

オルタ「ま、とりあえず仲間も増えたし出口も作れたし一石二鳥つてところかしら？」

楓子「うーん、まあそんな感じかな？」

カムイ「ユウキ、君はもう平気なのか？」

ユウキ「うん！完全復活！何の心配もいらぬよ」

カムイ「そうか……よかった。本当によかった。君に何かあれば……僕は」

ユウキ「もう、カムイは心配しすぎだって」

カムイは先生のことをかなり心配してるみたいだ。それより、あの2人って一体どんな関係なんだ？

藤乃「あの、ここを飛び降りるんですよね？」

リズ「まあそうなるわね」

藤乃「このまま落ちればゲートに入ってしまうですよ？」

下をよく見ると俺たちが着地する場所にちょうどゲートがあった。入ってもまた帰ってきたらいいから何の心配もいらぬな。

クライン「よおし！なら俺が先に行ってくるぜ！」

アツシユ「ミスタークライン！俺様も行くぜ!!」

2人は先に落ちて、それを追いかける感じで俺たちも飛び降りる。そのままゲートに入ると、その先に待っていたのは大きな木が生えていた小さな空島だった。

辺りを見渡すと、紫色の電気のようなものが走る。それに気づいた俺はみんなに動かないように指示する。

???「軽く流したつもりだったけど、まさか見破られるなんてね。流石無限の剣製」

白夜「この声は……」

蓮「パープルゾーンか」

木の枝の上に姿を現したパープルゾーン。ゾーンはジャンプし、俺たちの前に着地し

た。

ソーン「数が多いわね。はああ!!」

ソーンは杖を振ると、地面からいばらのようなものが出てきた。俺と白夜、蓮は咄嗟に避けるが、他のみんなは捕まってしまい、身動きが取れなくなっていた。

ソーン「一気に相手するのは流石に不利だから、ちよつとずつ倒すことにするわ」

奨真「そうきたか。まあやることは変わらねえ」

白夜「俺ら3人で」

蓮「お前を倒す」

ソーン「簡単に倒せると思ってるの？笑わせんじやないわよ!!」

俺たちは武器を構えると、ソーンを倒すために走り出した。

第16話 3人のコンビネーション

ソーンの拘束から唯一逃れた奨真、白夜、蓮。3人は拘束された仲間を助けるためにソーンと戦うことになった。元々3人は実力がある。だが相手は七王の1人。そう簡単には倒すことはできない。

ソーンは杖を使って攻撃する遠距離型。近づけば有利だが、近づくまでが難しい。一般のバーストリンカーなら近づく前にやられている。

蓮「白夜。君は前でタンクを頼む。奨真。君は隙を見てソーンに近づくんだけ」

奨真「いいけど、お前は どうするんだ？」

蓮「安心しろ。俺だけ何もしないなんてことはない。一瞬だけでも隙を作ってみせるさ」

白夜「その隙に一気に叩き込む……か」

蓮「そういうこと」

蓮は2人に作戦を伝えると、後ろに下がる。そして手袋型の強化外装から糸を出す。白夜は盾を構え、奨真は干将・莫耶を投影する。

ソーンはずつと杖を持って退屈そうに待っていた。

ソーン「もういい？待ちくたびれたんだけど」

奨真「待たせたな」

ソーン「作戦を立ててたのかは知らないけど、無駄だつてことを教えてあげる!!」

杖に電撃を浴びせると、それを奨真に感電させるように流す。奨真はジャンプして避け、干将・莫耶をソーンに放り投げる。だがソーンは軽々と杖で弾いた。

ソーン「感電死するがいい!!」

蓮「させるかあ!!」

蓮はソーンの杖を持つてる方の腕に糸を絡ませ、動かさないようにする。そのおかげでソーンの攻撃は止まり、奨真は次の攻撃の準備を整えることができた。

奨真「ナイスだ！カラドボルグ!!」

弓を構えて、矢を飛ばす。物凄いスピードで飛ぶ矢はソーンに直撃しようとした。だが、ソーンはギリギリで急所から避け、矢は肩に命中する。

命中したソーンの左肩は衝撃で吹っ飛び、片腕だけの状態になる。

ソーン「チツ！やってくれるじゃない…」

白夜「後ろがガラ空きだぜ!!」

ソーン「っ!?!」

白夜はソーンの後ろに回り込み、盾で殴り飛ばす。咄嗟の出来事でガード出来なかったソーンはそのまま吹っ飛ばされる。その先には干将・莫耶を投影した奨真がいて、回転斬りを食らってしまう。

バタツと倒れたソーンは立ち上がることができなかつた。片腕をやらただけじゃなく、背中や身体中を痛みつけられたからだ。それを蓮は見逃さず、糸でソーンを完全に拘束する。そしてまるで縄で縛った物を振り回すように大樹にぶついたり、地面に激

突させたりした。

ソーン「グフツ……あんたたち……。この私を怒らせたわね……」

蓮「まだやるのか？」

奨真「諦めろ。その状態じゃまともに戦うこともできないぞ」

ソーン「こつちには人質がいるのよ。その人質に何も用意しない私じゃないわ」

ソーンは杖を地面に刺すと、杖から電撃が走り、他のみんなを拘束してるイバラに走る。そのスピードは速く、3人が今から走っても間に合わない。

それでも3人はみんなのところ走り、攻撃を防ぎに行く。電撃がみんなのすぐ近くにいき、もうダメだと思った時、誰かがみんなの前に立ち、水の壁を作り出して攻撃を防いだ。ソーンの電撃を防げる水は1人しかない。

白夜「あ、あきらら!？」

あきら「みんな、遅れてごめんなの。これからは私も一緒に戦うの!」

ソーン「面倒な女まで増えたわね!」

そう言いながら立ちあがるソーン。フラフラしながら杖を構えると、杖を頭上に上げ、振り回す。するとソーンの周りに雷の柱が数本現れて周りをぐるぐると回る。

ソーンは自分を中心に雷を周りに広げ始める。ガードは出来るが、感電の状態異常は防ぐことができない。だから奨真たちは技を完璧に防ぐことができなくて、逃げることはできない。だがそれは拘束されてるみんなを見捨てることになってしまう。

奨真「クソツ！ どうすれば……！」

あきら「びやーくん！ 盾を構えてほしいの！」

白夜「わ、わかった！」

白夜はあきらの言う通りに盾を構える。盾を大きく変化させ、あきらはその盾に触れ、盾に水を纏わせる。あきらの水はソーンの電撃を無効にすることができると特殊な水。だから雷を防いでも状態異常になることはない。

あきら「パープルソーン。私が来たからもう電撃は通用しないの」

ソーン「あ、あんたなんか肉弾戦で十分よ!!」

蓮「悪いが、もう終わりだ」

ソーン「えっ……」

いつのまにかソーンの後ろに回り込んでいた蓮。蓮はソーンの首に糸を巻き、思い切り締める。そしてそのままソーンの首を刎ねた。残ったソーンの体もポリゴン状になり、その場所にオーブが出現する。それと同時にソーンの拘束が解け、キリトや楓子たちは自由になった。

楓子「やったわね！」

奨真「ああ！これでオーブは3つ。あと何個集めればいいのかはわからんが」

黒雪姫「これまでのパターンだと、あと4つじゃないか？」

アスナ「今回のオーブは『オーロラオーバル』って書いてあるわ」

リズ「それで、その全身水で覆われているのが『あきら』でいいのかしら？」

キリトたちALLO組は一斉にあきらの方を見る。視線に気づいたあきらはダミーアバターになり、軽く自己紹介をする。そしてタクムとチユリにかけていたメモリーリークを解いた。

2人はあきらのことを思い出し、何故あきらがそんな行動をとったのかを問う。理由は2人を巻き込みたくなかったかららしい。

あきら「あ、そういえば」

美早「あきら？」

あきら「リサのことすっかり忘れてたの」

奨真「おいおい……」

ユウキ「おい！そのリサって人見つけたよー！」

ユウキはみんなから離れたところから大声で叫ぶ。全員がユウキのところに駆けつけると、そこには地面に捕まって、なんとかよじ登ろうとするリサの姿が。

奨真たちがいる場所は浮島。地面に足をつけることができない。だからよじ登るしかないのだが、リサはそれができなかつた。

リサ「た、助けて〜」

レミ「大丈夫ですか？」

レミはリサの手を握り、上に上げる。リサは疲れたのか、息を荒げていた。

リサ「あ、あきら……置いてくなんてひどいよお……。あ……。あとどうやって一瞬で上がったのよお……」

あきら「ひとつ飛びなの」

どうやらあきは水の勢いを利用し、上に上がってきたみたいだ。リサはジャンプで少しずつ上がってきたと言う。

キリト「よし、街に戻るか！」

リーファ「ここを飛び降りたらいいのかな？」

ニコ「それしかねえだろ」

レミ「あのワープゲートを通るのはもう懲り懲りですよ……」

クライン「飛び降りるっても、俺たちは羽があるけどさ。アッシュたちはどうすんだ？」

キリトたちは妖精のアバターだから羽があり、ゆつくりと降りることができる。だがデュエルアバターは奨真と楓子、ハルユキ以外はゆつくり降りることができない。

だがバーストリンカーたちは高所から飛び降りることに慣れている。今いるとこ

ろから飛び降りても何の問題もない。

黒雪姫「我々なら大丈夫だ」

リズ「いやいや、流石にこの高さだとダメージあるでしょ…」

蓮「なら俺が先に降りてネットを作る。それなら大丈夫だろ？」

リズ「んー…まあいけそうだけど」

蓮「よし。じゃあ先に行って準備してくる」

ティア「待って」

飛び降りようとする蓮を突然ティアが止める。蓮は振り向くと、ティアに肩を担がれるいつもクールな蓮だが突然のことに驚きを隠せない。

蓮「な、ななな！何するんだ!？」

ティア「何って、誰かが担がないと降りれないじゃない?？」

プレミア「ティア。1人より2人の方がいいと思います。つまりバディが必要」

ティア「ん、助かる」

蓮「えっ…俺は担がれるのは確定なの?」

プレミア・ティア「うん」

蓮は大人しく2人に肩を担がれ、そのまま下にゆつくりと降りる。地面に着くと、蓮

は糸を限界まで伸ばし、それで巨大なネットを作った。上にいるメンバーは下から蓮の
声が聞こえたと同時に少しずつ飛び降りる。ネットはまるでトランポリンのように跳
ねて、バウンドがなくなると、下に着地する。全員降りてきたかどうか点呼をとり、ちや
んと全員いたから蓮はネットを解体する。

リズ「しかしあんたの糸って便利よね〜」

蓮「そうか？」

白雪姫「蓮君の糸って丈夫だけじゃなくて壊れにくいもんね〜」

奨真「それ意味的に一緒だぞ」

白雪は急にボケて、それに気づいた時に顔を赤くした。大勢の前で急にボケてしまっ
て恥ずかしかったのだろう。それをみたキリトたちの反応は。

(((可愛い)))

この反応だった。そして街へ戻り、エギルの店に入る。それぞれ席に座り、体を休め
る。特にソーンと戦った奨真、白夜、蓮はヘトヘトだった。

キリト「それにしても3人のコンビネーション凄かったな！」

アスナ「うん！それぞれの長所を活かしていたわ！」

ユウキ「普段でもあんな感じなの？」

白夜「いや、3人での共闘は初めてだよな？」

奨真「そうだな。白夜とはよく一緒に戦ったりするけど」

蓮「俺は2人とは一緒にいることが少ないから」

シノン「嘘でしょっ!?!初めてであれなの!?!」

白雪姫「蓮君は頭脳派だからすぐに分析するんですよ」

楓子「だから作戦を立てるのも早いのよ」

シリカ「確かに、頭とか良さそうですもんね」

アスナ「ねえ蓮君。成績とかがってどんな感じなの?」

アスナは蓮が頭脳派と知り、その学力についても知りたくなった。それを聞いた他のみんなも耳を傾ける。蓮は特に嫌がらずに答えると、全員驚きを隠せなかった。

蓮の成績は国語、数学、英語、理科、社会の5教科全て90点以上という結果だったからだ。

フィリア「あ、頭いい……」

ストレア「それに家事も完璧!」

レイン「まさに完璧人間」

奨真「お前のこと改めて凄いなと思ったよ…」

セブン「神童じゃない」

蓮「そう呼ばれるのは好きじゃないかな。俺の場合お嬢に相応しい人間になるために

やっただけだし」

リズ「それだけ聞くと白雪の恋人に相応しい人間になるとしか捉えられないわ」

確かに今の蓮の言い方だと、その通りの意味になるだろう。それを聞いた蓮はそういう意味で言っただけではないと言いつくをする。

あきら「私も学力には自信があつただけ……」

白夜「気にすんなって。俺はどんなあきらでも好きなんだから」

楓子「あらあら、再開してすっかりラブラブね♪」

セブン「あなた達も人のこと言えないと思うんだけど」

今の楓子の状態は自分の膝に奨真の頭を乗せて、膝枕をしている状態だった。奨真と楓子の方がラブラブな気がすると思つたのはこの場にいる全員だろう。

カムイ「これがバカツプル……」

ユウキ「あつ！そういえば奨真君たちに確認を取らなきゃ！」

奨真「確認？」

ユウキ「奨真君たちの仲間はあと何人でどんな人物なのかってこと」

ALLO組は見つかつてない奨真たちの仲間について知るものはいない。だからキリトたちでもわかるように、あと何人でその特徴を知る必要があつた。

ユウキはそれを思い出して、奨真たちに聞いたのだろう。先にこの世界に来ていた黒

雪姫とハルユキはわからないらしい。

楓子「あとはマシユと式だけかな？」

奨真「そう…だな。俺たちが抱えてここに連れて来たのはここにいるみんなとマシユと式だからな」

シノン「アバターの色は？」

アルトリア「マシユは8割桜色で2割黒の二色。式は美早と同じ色です」

エギル「色さえわかれば探しやすくなるな」

フィリア「アルトリアの時みたいにもた草原にいたりして」

ニコ「ありえねえってわけじゃねえけどよ……」

ストレア「じゃあ順番に草原から行こ！」

順番に行くことに決めて、まずは草原に行くメンバーを編成する。行くことになったのはタクム、チュリ、アツシユ、オルタ、クライン、ストレア、カムイの7人だ。

オルタ「草原であの女と出くわしたくないわね…。私あいつ好きじゃないし…」

チュリ「まあまあ、文句言わずに行きますよ」

7人は店から出て転移門のところに行き、草原エリアに転移した。

第17話 天然お色気な子

草原エリアに転移してきたタクム、チュリ、オルタ、アツシユ、クライン、ストレア、カムイの7人。とりあえず辺りを探索し始める。だが、式とマシユらしき影は見当たらない。

なんの手がかりもなく探すのは無理とカムイは判断し、草原エリアにいる他の人から情報を得ることにした。

カムイ「すみません、この辺りに機械のアバターを見かけませんでしたか？ピンク色と赤色なんですけど」

プレイヤー「あ、あの変なアバターの人ならさつき見たよ」

クライン「どの辺かわかるか？俺たちそいつらに用があるんだ」

プレイヤー「その人なら谷にいたよ。今から行けばまだいるんじゃないかな」

ストレア「ありがとー！じゃあ早速行ってみるね！」

2人の居場所を突き止めた7人は早速谷へ向かう。今いる場所からはかなり離れるため、走ってでの移動になる。カムイは移動速度アップの魔法を全員に唱え、いつも

より早いスピードで走る。

その中でもダントツの速さを持つカムイは1番最初に谷に到着する。カムイが見た光景は機械のようなアバター2人がスライムの大群を相手にしているとところだった。

「ダメです！物理攻撃はあまり効きません！」

「やっぱり俺の出番か……」

1人はナイフを構えると、スライムに投げつける。そのまま貫通すると、その先にいるスライムにも刺さり貫通する。ナイフを投げた方向にいるスライム全てにナイフが貫通すると、ナイフを投げつけた人は先回りしてナイフをキャッチする。

次は走りながらナイフでスライムを斬りつける。そのスピードは目で追うのも難しく、いくらいのスピードだった。

カムイ「いくら弱いスライムでも一撃で倒すなんて……」

「きゃあああ!」

「っ!?! どうした!?!」

悲鳴が聞こえた方を見ると、スライムがもう1人を包み込んでるのが見えた。ただ拘束してるだけかと思っただが、突然アバターの姿が変わり、女の子が現れる。遅れてやって来た6人もその光景を見ると、アツシユたちは声を上げる。

アツシユ「おい！あの姉ちゃんはマシユじゃねえか!?!」

タクム「マシユさん！今助けます！」

タクムは谷底に降りてマシユの元へ駆け寄る。他のみんなも続いて降りて駆け寄る。7人が見た光景は目を見開く光景だった。何故ならダミーアバターに強制変更させられたマシユの服が溶けていつていたからだ。

クライン「おおお……」

カムイ「……」（顔を逸らし）

タクム「えっ……」

ストレア「わお……」

チユリ「ええ……」

アツシユ「なんじゃこりや……」

オルタ「うわ……エロ」

それぞれ感想を言うだけで全く助けようとしないう7人。それに気づいたマシユは大声で叫ぶ。

マシユ「見てないで助けてください!!」

カムイ「ぼ、僕が行こう！はああ!!」

カムイは剣でマシユに取り付いているスライムを切り刻む。そのままスライムはポリゴン状になり、マシユは解放される。だがマシユの服は溶けたままで腕で体を隠して

いた。

カムイは着ているマントをマシユに貸して、オルタとタクム、クラインと一緒にもう1人の助っ人に行く。

オルタ「苦戦してるじゃない。手を貸してやってもいいけど？」

タクム「式さん！手を貸します！」

式「別に必要ないけどな。ま、今は甘えるところか」

式はナイフ、オルタは黒い剣、タクムはシアンブレード、カムイは長刀、クラインは刀を構える。スライムの数は約30匹という物凄い数だが、5人なら一瞬で終わるだろう。

チユリはシトロンコールをマシユに使い、時間を巻き戻して服も含めて回復させる。

オルタ「ふん！大したことないじゃない！」

クライン「スライムは雑魚だからな！」

カムイ「油断は禁物です！」

タクム「よし、今こそ特訓の成果！その心臓、貫い受ける！」

式「スライムに心臓とかあるのか？」

式は突っ込むが、タクムはそんなこと気にしない。タクムのシアンブレードは槍に変わり、ジャンプしてそれを思い切り投げつける。

タクム「真似させてもらいます！ゲイ・ボルグ!!」

ゲイ・ボルグは形を変えて、数本になる。そして地上にいるスライム全てに突き刺さる。スライムはポリゴン状に変わり、ゲイ・ボルグも元に戻りパイロドライバーになる。

式「凄え」

クライン「なんじゃこれ……」

タクム「僕もみんなに遅れを取るわけにはいきませんから」

オルタ「あんた、ダミーアバターになりなさいよ」

式「お、そうか」

式はマシユと同じようにダミーアバターになり、軽く自己紹介をする。

クライン「それにしてもオメエらのメンツは可愛い子ばつかな!」

アツシュ「いやいや!ミスタークラインのメンツも負けてねえぜ!」

マシユ「とりあえず私は恥ずかしい思いしかしてません……」

オルタ「まあ……どんまい」

自己紹介を終えると、特にやることもないから街に戻ることにした。街にはまだ誰も戻ってなく、9人は店で待つことになった。

クラインはマシユに近づくとナンパするかのような感じで話しかける。マシユは困りながらも対応する。

クライン「マシユさんと申しましたね。わたくしはクライン。あなたを守る武士です」

マシユ「は、はあ……?」

クライン「あなたの美しさに惚れてしまいました。もしよろしければこの後お茶でも」

マシユ「えっ……えっとお……」

式「おい。こいついつもこんな感じか?」

ストレア「うん!だから気にしなくていいよ!」

カムイ「マシユさんが困ってますし、止めてきますね」

カムイは立ち上がり、クラインのナンパを止めに行く。そのクラインは嫌々立ち上がると、泣きながらマシユから離れて行く。

クライン「おいカムイ!いいところだったのに邪魔すんなよ!」

カムイ「マシユさん困ってましたよ」

マシユ「た、助かったのかな?」

ストレア「じー」

一息ついたと思ったマシユだが、ストレアに見つめられてなかなかゆつくりできなかった。気になったマシユはとりあえず聞くことにする。

マシユ「どうしました？私の顔に何かついてます？」

ストレア「マシユって可愛いだけじゃなくてスタイルもいいね！特におっぱい！マシユ「えっ!？」」

そう言われたマシユは顔を真っ赤にして思わず胸を腕で隠す。その直後、どこからか大声で何かを叫んでるような声が聞こえた。

オルタ「これってアルトリアよね？」

式「かもな。あいつ胸に関しては敏感でうるさいし」

オルタ「そういうあんたも全くないけどね」

式「俺は別に気にしてないさ」

オルタ「嘘ついちゃって。本当は羨ましいいくせに」

オルタは式を見ながらケラケラと笑う。だがその式は何も気にすることなく飲み物を口にする。カップを置くと、溜息をつきながら呟く。

式「逆にあつたら邪魔だろ？」

オルタ「何ですって!!」

ストレア「ええー!?!でもあつた方が大人の女って感じしない？」

式「そういう風に思うのはまだ早いだろ……。それに女つてのはスタイルだけじゃないぞ」

チユリ「といますと?」

式「家事など性格、その他色々出来てこそ大人の女じゃないのか?」

チユリ「おお……凄い」

大人の女について語る式。その話を聞いた女性陣は驚くことしかできなかつた。男性陣は話についてこれず、端から眺めていた。

カムイ「あの人凄いですね」

タクム「式さんはいつも落ち着いててクールな人ですから、自然とそう感じるんですよ」

クライン「俺もあんな女性に出会ってみたいぜ……」

色々とお話していると、他のエリアに向かつていた全員が戻ってきた。見慣れないメンバーはいなくて、その時マシユを見た寿也は目を輝かせて飛び込んだ。

寿也「マシユお姉ちゃん!!」

マシユ「きやん!? ちよ、ちよつと!?!」

マシユに飛び込んだ寿也は顔を胸に擦り付けるように抱きつく。そのまま谷間に顔を挟むとマシユの胸を堪能し始める。

フィリア「なんだろう……。この光景凄くエッチなんだけど」

楓子「あらあら♪」

アルトリア「また胸ですか……。やはり胸の大きい人は悪です」
アルトリアの目から光が消えてブツブツと呟く。それを聞いた黒雪姫とシリカはアルトリアのそばに行き慰める。

とりあえず一息つくためにエギルは全員に飲み物を渡す。雑談していると客が来たのか扉が開いた。入ってきたのは白いふわふわとした長髪の女の子だった。

???「こんにちは。席空いてますか？」

リーファ「あっ!? ルクスさん!？」

リズ「ルクスじゃん!？」

シリカ「お久しぶりです!」

ルクス「リーファ! リズ! シリカ! 久しぶりだね!」

奨真「新しい仲間か?」

入ってきたのはルクス。時々リーファとリズ、シリカと共にクエストに行くらしい。キリトたちの中でルクスのことを知ってるのもほんの一部らしい。

あきら「ふわふわとしたイメージなの」

アルトリア「たしかにふわふわなイメージがありますね」

ハルユキ「えつと…アルトリアさん? どこ見て言ってるんです?」

アルトリアの目線はルクスの胸へと行っていた。ルクスもリーファには劣るが、それ

なりに大きな胸を持っている。だからこそ目が行ったのだろう。

キリト「よし！ 奨真たちの仲間も俺たちの仲間も揃ったし、まずは改めて自己紹介だな！」

セブン「あ、ちよつと待ってキリト君。もうすぐ来ると思うから」

キリト「誰がだ？」

???「俺だ」

声が見ると、アスナと同じ髪の色をした男性が扉から入ってきた。その男性はキリトのライバル、スメラギだった。

蓮「凄い圧を感じる…」

奨真「ああ。ただのブレイヤーじゃないのはわかる」

キリト「セブンが呼んだのか？」

セブン「ええ！ フレンド欄でログイン中になってたから呼び出したの。彼の力もあつた方が心強いでしょ？」

スメラギ「ふん。せいぜい足を引っ張らないようにな」

オルタ「何よ偉そうに」

全員が席に座ると、キリトは立ち上がる。今度こそ全員揃ったことを確かめると、改めて自己紹介を提案する。全員がその提案に乗り、順番に自己紹介を始めることになつ

た。

第18話 改めて自己紹介

自己紹介をするために、全員は集まる。まずはバーストリンカーである奨真たちがキリトたちに自己紹介をする。黒のレギオン『ネガ・ネビユラス』から順番に紹介する。

奨真「まずは俺からだな。ネガ・ネビユラスの1人、奨真かブラウンクリエイトって呼んでくれ。長かったらエイトで構わない。武器の生成が得意だ」

黒雪姫「ネガ・ネビユラスのレギオンマスター。黒雪姫、またはブラックロータスと呼んでくれ。デュエルアバターでわかると思うが切断系が得意だ」

楓子「ネガビユの幹部。楓子です。スカイレイカーと呼んでも構いません。妖精さんたちと同じように飛ぶこともできるわ」

ういうい「同じく幹部の謡、アーダーメイデンなのです。シノンさんと同じ弓が得意なのです。それ以外は火を使った技が使えるのです」

あきら「私も幹部なの。あきら、アクアカレントって呼んでほしいの。水を使った攻撃が得意なの」

白夜「ネガ・ネビユラスの1人、白夜だ。それかルークって呼んでくれ。武器はこのでかい盾だ」

ハルユキ「僕はハルユキ、シルバークロウです。ブレインバーストでは珍しい飛行アビリティを持ってますよ！」

タクム「僕の名前はタクム、シアンパイルとも呼んでください。攻防どちらでもいいけますので頼りにしてください」

チユリ「アタシはチユリかライムベルって呼んでね。ハルとタツくんとは幼馴染なんだ。ハルとは別の珍しいアビリティを持つてるから、役にたつよ！」

レミ「はいはい！私はレミと言いまーす！タンタルアングルとも呼んでください！趣味は奨真さんを弄ることです！」

リサ「私はリサ、ナイトライドウニカとも言おうよ。踊りを使った戦いが得意だよ」

アルトリア「私はアルトリア、トパーズキングと言います。剣術には自信があるので、ぜひ手合わせ願いたいです」

ジャンヌ「ジャンヌです。もしくはアンバーフラッグと呼んでください。攻防どちらでもいいけます。主な武器はこの旗です」

マシユ「私はマシユ。サクラシルドでもどちらで呼んでくれても構いません。略すならシルドをお願いします。私も白夜さんと同じく盾で戦います」

ネガ・ネビュラス全員が終わると次はニコと美早の2人、プロミネンスの番だった。

ニコ「次はアタシらの番だな。アタシはニコ、赤の王スカーレットレインでもあるぜ」

美早「私は美早。ブラッドレパードとも言う。アバター名で呼ぶならブラッドではなくレパードで。略すならレパではなくパドで」

プロミネンスの次は白のレギオン、オシラトリユニバースの番だった。白雪姫と蓮は立ち上がり、話し始める。

白雪姫「白雪姫と申します。デュエルアバターはホワイトコスモス。サツちゃん、黒雪姫とは姉妹で私は姉です。よろしくお願いします。」

蓮「軽く済ませるぞ。俺は蓮、デスパペットだ。知ってると思うが基本なんでもできる」

残ったのは無所属のオルタ、藤乃、式、寿也と緑のレギオン所属のアッシュだけだった。無所属組から自己紹介を再開する。

オルタ「ジャンヌオルタ。ダークアヴエンジャーとも言うわ。さっき紹介したジャンヌは私の姉だから。私のことを呼ぶならオルタって呼びなさい」

式「俺は式。デュエルアバターはブラッドバニー。切り刻むのが得意だぜ」

藤乃「藤乃、アメジストマインと言います。私の目はなんでも凶ることができる特殊なアビリティを持ってます」

寿也「寿也です！シャドウアサシンとも言います！好きなのはマッシュお姉ちゃんです！」

アツシユ「俺様はアツシユローラーだぜ！最高にギガクールなバーストリンカー！！」
バーストリンカーたち全員自己紹介をし終わると、キリトがアツシユに気になったことを聞く。それはアツシユだけ緑のレギオンだったからだ。黒のレギオンと赤のレギオンは協力関係ということは知っているが、緑のレギオンとは敵対していると聞いていたからだ。

白のレギオンとは特に敵対はしていないが、常に協力関係ではない。マスターである白雪姫と側近の蓮は別である。

キリト「ん？アツシユだけ敵対してるレギオンなのか？」

アツシユ「まあそうなるが、そのカラス野郎とは長え付き合いだから協力してやってんだ」

クライン「そうだアツシユ！おめえのかっこいいダメーアバターを見せてくれよ！」

アツシユ「何言ってるんだミスタークライン！これが俺様だぜ！」

アツシユは何言ってるんだみたいな感じでクラインに返す。だがクライン自身アツシユが何言ってるのかわからなかった。そこに楓子がアツシユにクラインが言ってることを詳しく説明する。

楓子「アツシユ、指を下にスライドするようにして下にあるボタンを押しなさい」

アツシユ「えつと……こうか？」

言われた通りにするとアツシユの体は光、みんなと同じようにダミーアバターになって出てきた。バーストリンカーたちは特に驚いてないが、ALO組全員は目を丸くして驚いた。

綸「ほえ？」

何故ならガイコツのアツシユが突然小柄な女の子に変わったからだだった。特にクラインは開いた口が塞がらなかつた。

アスナ「えっ……？ど、どうなってるの？」

奨真「これが本来のアツシユなんだよ。色々あつてアバターはあんな感じなんだ」

クライン「てことは……アツシユは…ネカマの逆か……」

白雪姫「それは……合ってるのですか？」

綸自身がネカマの逆なのかは誰にもわからない。何故なら、アツシユローラーの正体は綸の実の兄で綸は兄のニューロリンカーを使つてためこういう風になってるのだ。

クライン「アツシユが……そんな……」

オルタ「何落ち込んでるのよ。中身はあなたの好きな女の子じゃない」

クライン「そういうことじゃねえんだよ…。あの男らしいアツシユがこんなか弱い女の子だなんて……」

相当ショックだったのか、クラインは萎れていく。キリトたちは少しだけかわいそう

と思っていた。

綸「えつと……ごめんなさい。デュエルアバターの時は兄さんですから……元氣出してください。あ、この姿では綸と……呼んでください」

キリトたちはバーストリンカーの奨真たちのダミーアバターを一人ずつ見ていく。

奨真は頭にハチマキを巻いた鍛冶屋の姿。

楓子は背中に天使の羽を生やした女神のような姿。

黒雪姫は黒い蝶の姿。

ハルユキはピンクのブタの姿。

白夜は西洋騎士のような姿。

あきらは帽子を被った探偵の姿。

ニコはお伽話に出てきそうな騎士の姿。

ういういは動物の耳を生やした巫女のような姿。

タクムはブリキ人形の姿。

チユリは猫っぽい姿。

レミはあきらと同じ探偵の姿。

リサは獣人化した白虎の姿。

美早は猫の尻尾を生やして黒いジャージを着た姿。

ジャンヌは紫の鎧みたいな姿。

アルトリアは鎧を着た騎士の姿。

マシュは体のラインがはつきりとする黒い鎧を着た姿。

綸は羊のような姿。

寿也は青色のジャージを着た姿。

白雪姫は女王様のような姿。

蓮はスーツをきた姿。

オルタはジャンヌの鎧の黒いバージョン。

式は着物に赤い革ジャンの姿。

藤乃は学校の制服のような姿。

全員こんな感じの格好をしていた。奨真たちの次はキリトたちの番だった。

キリト「俺はキリト。種族はスプリガンだ。武器は2本の剣を使う二刀流だ」

アスナ「私はアスナ。ウンディーネだよ。武器は細剣。回復魔法が得意だよ」

リーファ「あたしはリーファ。種族はシルフだよ。リアルでは剣道やつてるから剣術

には自信があるよ！」

シリカ「あたしはシリカといいます！種族はケットシーです。この子は相棒のピナです！ピナとの連携には自信がありますよ！」

リズ「リズベッドよ。リズでいいわ。種族はレプラコーンで鍛冶が得意よ」

エギル「俺はエギル。種族はノームで腕力は結構あるぜ！」

ストレア「あたしはストレアだよー！種族はエギルと同じノームで両手剣を扱えるよ
！」

フィリア「私はフィリアだよ。種族はスプリガンで、トレジャーハントが得意だよ」

ユウキ「ボクはユウキ！種族はインプでバトルが大好きさ！」

シノン「私の名前はシノン。種族はケットシーで遠距離攻撃が得意よ」

クライン「俺はクライン……。サラマンダーで…侍だぜ……」

落ち込みながら自己紹介するクラインをみんな哀れな目で見ていた。アツシユのこ
とでここまでショックを受けるとは思わなかったのだろう。

レイン「レインだよ。種族はレプラコーンで特技は奨真君と同じように武器を一気に
扱うことかな」

セブン「私はセブン。プーカつていう音楽妖精よ。槍と歌が主な攻撃手段ね」

スメラギ「スメラギだ。ウンディーネだが実力はある」

プレミア「プレミアと申します。種族はウンディーネで戦闘はまだ勉強中です」

ティア「ティアよ。種族はインプ。プレミアとは姉妹よ。武器は両手剣ね」

カムイ「カムイです。種族はインプで特技は早斬りです」

ルクス「私はルクス。種族はシルフで一応二刀流で戦えるよ」

ALO組も自己紹介を終えてひと段落つく。その時、メタトロンが出てきてハルユキの頭に座り何か豆知識的なことを言う。

メタトロン「下僕を除くバーストリンカーたちは新たな力が隠されています。ダミーアバターになる時のボタンを長押ししてごらん下さい」

ハルユキ「僕以外の人にはあるの？それっていったい……」

メタトロン「やる前に男の妖精たちには後ろを振り向くようにして下さい」

アスナたちはメタトロンに言われた通りキリト、クライン、エギル、カムイ、スメラギを後ろに振り向かす。確認してから奨真たちはダミーアバターになる時のボタンを長押しする。すると奨真たちの体は光り、その中から服が全解除状態のみんなが出てきた。

奨真・白夜・蓮「「は？」」

楓子「あら？」

黒雪姫「なっ!？」

ニコ「はあ!？」

チユリ・レミ・リサ「「へっ!？」」

美早・式「「ん?？」」

タクム・寿也「「えっ!?!」」

白雪姫・綸「ふえ!?!」

ういうい「きやあ!」

あきら・アルトリア「「っ!?!」」

藤乃「まあ……」

ジャンヌ「うえ!?!」

オルタ「な、ななな!?!」

マシユ「何ですかこれ!?!」

もちろん全員この反応である。服がいきなり全解除になれば誰だって驚くだろう。一方キリトたち男性陣は後ろを振り向いてるためどういいう状況なのかわかってない。

キリト「えつと……俺たち振り向いても」

アスナ「ダメダメ!絶対ダメ!!」

ユウキ「カムイ!振り向いたらマザーズ・ロザリオだからね!!」

カムイ「よ、よくわからないけど振り向かないよ!!」

パニックになつてる中、楓子は1人分析を始める。あきは白夜に今の状況を目に焼き付けないように目潰しをする。

あきら「えい」

白夜「目がああああ!!」

楓子「もしかしてデュエルアバターは装備でこのボタンを押せば装備を脱げる。さらに長押しすれば装備をさらに脱ぐことができるということかしら?」

奨真「いやいや呑気に分析してる場合か!?今の状況わかってるのか!」

奨真はなるべく楓子の体を見ないように自分の大事な場所を隠しながら近づく。それに気づいた楓子は顔を笑顔にして奨真に抱きつく。

奨真「な、何してんですか?」

楓子「見ての通り抱きついてるの♪」

奨真（いややそうじゃなくて!?ダメだ……楓子の柔らかい感触が伝わってくる!?）

レミ「この変態があ!!」

イチヤついてる2人を見つけたレミは、奨真に蹴りを放つ。恥ずかしさを捨てて楓子を手助けに行ったのだった。

レミ「何先生を襲おうとしてるんですか!!」

奨真「ちよつと待て!まず隠せ!!」

レミ「貧相な体を見られても何も思いません!!」

奨真「馬鹿か!!」

ハルユキ「メタトロン!!どうやって戻るのが!」

メタトロン「さっきのボタンを押すだけです」

黒雪姫「みんな聞いたか！もう一度ボタンを押すんだ！」

全員ボタンを押すと元に戻り、パニツクは治る。キリトたちにはもう振り向いてもいいことを伝える。

カムイ「一体何が……」

ユウキ「何にもなかったよ！何にも!!」

ユウキの圧に押されたカムイは渋々了承する。キリトの方もアスナに同じことを言われていたようだ。

シノン「まあ事故が起きたけど、これで終わりね」

アルトリア「そうですね…。じゃあオーブ探しに戻りますか？」

レイン「そうしよっか」

パニツクが起きた自己紹介になってしまったが、無事に終わることができた。そして再びオーブ探しに戻ることになった。

第19話 手がかりなし

再びオーブを探すために奨真達は雪原に来ていた。だがなんの手がかりも掴めてないため途方にくれることになる。

ストレア「もー!!全然先に進めないよー!!」

レミ「まさか手がかり一つも掴めないなんて……」

アツシユ「ハイハイー!落ち込んでたらラッキーがどこかにフライしちゃうぜ!!」

フィリア「たしかにそうかもしれないけど……これは流石に落ち込んだじゃうね」

その時、アルトリアは何か見つけたらしくみんなに知らせる。その見つけたものというのが変な形した石が壁に刺さっていると、という物凄くどうでもいいものだった。

オルタは『馬鹿なの?』という感じの目で見ていた。他のみんなはしつかり者のアルトリアが何故そんなものをわざわざ知らせたのかが不思議でたまらなかった。

奨真「それがどうかしたのか?」

アルトリア「いいですか?これをよく見てみてください」

楓子「何か変わったものなのかな?」

アルトリア「さっきこの石が動いたんですよ」

クライン「石が動く？新種のモンスターか？」

クラインは近づいてジッと見つめる。ジロジロと見るが全く動く気配がない。おかしいと思ったアルトリアはエクスカリバーで思い切り叩く。するといきなり地震が起きて全員ふらつく。さっきの石を見るとアルトリアが言った通り動き出し、その中から巨大なゴーレム型エネミーが出てきた。

アスナ「ううう埋まってたの!？」

レイン「あわわ！」

白夜「ゴーレム型かよ!？」

エギル「いや、よく見てみる！」

そのエネミーはただのゴーレム型ではなく、獣のような形をしたゴーレム型エネミーだった。基本動きがトロいゴーレム型だが、獣の形となれば話は変わってくる。そして早速エネミーは腕を振りかざし、そのまま下ろしてきた。盾を持つ白夜とマシユは前に出て盾を構える。攻撃を受けるがなんとか踏ん張る2人。それでも少しHPは削れてしまう。

マシユ「くっ！重いです…。何度も受け切れるどうか……」

白夜「流石に何度も受けけるとなると厳しいな」

キリト「なら、速攻で倒すまでだ！」

キリトとアルトリアは背後をとり、一撃を喰らわす。だがゴーレム型エネミーの防御力は高いため、攻撃はあまり通らない。

アルトリア「なら！これで！」

斬るのではなく刺すことにしたアルトリア。そして剣からは風が発生し、徐々に集まっていく。その風を一気にエネミーに放出する。

アルトリア「風よ、荒れ狂え!!『風王鉄槌』!!」
ストライクエテ

剣を刺したまま風を放出したから、エネミーの内部を攻撃したことになる。外が硬いエネミーだが、内部は普通のエネミーと同じだからかなりのダメージを与えただろう。アルトリア「流石に一撃では倒せないか。また風を集めるには時間がかかる」

スメラギ「下がってろ。今度は俺がやる」

今度はスメラギが前に出て、刀を構える。刀に力を貯めると巨大な刀に変化する。これこそスメラギの最強のOSS『テュールの隻腕』だ。スメラギは思い切り腕を振る。

スメラギ「テュールの隻腕!!」

一撃を喰らったエネミーは二つに割れて、動きが鈍くなる。普通のエネミーなら二つに分かれた時点で消滅するはずだが、どうやらしぶといみたいだった。

ストレア「てや!!」

白夜「うおおお!!」

ストレアと白夜がエネミーの上半身を武器で叩く。頭部を中心に攻撃してHPを削る。2人に続いて他のみんなも攻撃をする。だがなかなかHPはなくなならない。それにイラついたのかオルタの怒りが溢れる。

オルタ「ああもう!!鬱陶しいわね!!あんたらどきなさい!!」

ユウキ「えつとお……オルタ?」

オルタ「ラ・グロントメント・デユヘイン!!」

奨真「ま、待て!やるなら全員逃げてからやれ!!」

全員猛スピードでオルタの必殺技から逃げ始める。誰も巻き込まれずに済んだが、一歩間違えればHPはゼロになっていた。それくらいオルタの必殺技の威力は高い。エネミーのHPはゼロになってポリゴン状になる。それと同じように下半身もポリゴン状になった。

ジャンヌ「オルタ!危ないじゃないですか!」

オルタ「だ、だつてイライラしたんだもん!!」

式「まあまあ。誰一人怪我してないんだし、許してやれ」

式は妹のオルタを叱るジャンヌを落ち着かせる。ジャンヌも式がそう言うならと、いつて叱るのをやめる。オルタは嫌悪してる式に借りを作つたのが気に入らないのか、不満な顔をする。

オルタ「まさかあんたに借りを作ることになるなんて……」

式「別にんなもん作らなくていいよ」

オルタ「いい！この借りは必ず返すわ!!」

式「話聞いている？」

ルクス「彼女はかなり式さんのことを嫌ってるみたいだね」

プレミア「ですが、喧嘩するほど仲がいい」

楓子「ふふ、それもあるわね」

オルタ「仲良くない!!」

式「はあ……」

オルタは必死に否定して、式は溜息をつく。他のメンバーは急に現れた敵を倒して一休みしていた。

シノン「その辺のエネミーを倒しても、やっぱりオーブの手がかりは掴めないわね」

あきら「そもそもオーブは七王が持つてるの。七王の居場所なんて手がかりだけでも掴むのが不可能に近いの」

セブン「どういうことよ？」

あきら「もともとこの世界には七王なんて存在しないの。それなのにいきなり七王が現れたって言われてもどんな人物なのかもわからないに決まってるの」

スメラギ「なるほどな。だからどいつが七王かもわからないから手がかりも掴めないというわけか」

あきら「そういうことなの」

ユウキ「でも、それならどうするの？これってもう詰んだってこと？」

白雪姫「あつ！なら三手に分かれるっていうのはどうですか？」

白雪はそう提案してみる。手がかりが掴めない以上、その方法が1番効率がいい。もちろん全員その案に賛成して、あとはグループに分けるだけだ。

エギル「1番決めやすいとしたらクジ引きだが……。そんなものこの場にないしな」
チユリ「じゃあ戻ります？」

レイン「クジがないなら仕方ないかなあ」

クジがないため一度街へ戻ろうとする一行。その時、不気味なオーラを感じる。

奨真「っ!？」

楓子「この感じ……まさか!？」

キリト「嫌な感じがするが……一体何なんだ……」

アスナ「なんていうか……怖いよね」

黒雪姫「っ!?!みんな気をつけろ!!これは只者ではないぞ!!」

黒雪姫がキリトたちにそう伝えると、上から巨大な黒い何かが降ってくる。大きな音

を立てて着地すると大きな声を上げる。

??? 「グオオオオ!!」

ハルユキ 「そ、そんな!」

白雪姫 「な、なんで!？」

楓子 「あれは……あれはまだ奨真君の中に!」

奨真 「一体どういうことだ!!」

奨真達の目の前に現れた黒い何かはまだ奨真の中に眠ってるはずの災禍の鎧だった。もちろん奨真達バーストリンカーは動揺を隠せず、キリト達にALOPプレイヤーは災禍の鎧が何かもわからなかった。ただわかるのはとんでもない邪悪な感じがするということだった。

レミ 「災禍の鎧、クロムデザインザスター!!」

アツシユ 「アニキを苦しめたクソ野郎め!!」

黒雪姫 「皆!!すぐに戦闘態勢に入れ!!」

リズ 「ちよ、ちよつと待って!!どういうことよ!!」

式 「悪いが説明は後だ。お前らは下がってな」

藤乃 「ここからは私たちの戦いですので」

キリト 「奨真……後で聞かせてもらおうぞ」

奨真「ああ。どんな質問でも答える覚悟しとくよ」

バーストリンカー全員本気で戦闘態勢に入り、いつでも戦えるようにする。その中でも奨真と楓子は人一倍気合いを入れる。

奨真（確かに俺の中にはまだ災禍の鎧がある。なんで目の前にあいつがいるかはわからないが、俺の中の災禍の鎧があいつと共鳴して暴走しないように気をつけねーと）

楓子（クロムデイザスター。何度も奨真君を苦しめる鎧。あれも七王と同じ偽物だとしても、ここで確実に仕留める!!）

キリト達はいつもと違う奨真達の雰囲気についていけず、ただ見守ることしかできなかった。

第20話 災禍の鎧

クロムデイズスターと対峙するバーストリンカー。その目は今まで倒してきたエネミーと戦った時よりも険しかった。何故なら今日の前にいるのは全てのバーストリンカーの敵だから。

災禍の鎧「ガアアアア!!!」

アルトリア「皆さん！来ます!!」

マシユ「下がってください！ロードカルデアス!!」

災禍の鎧が左手で殴りかかってきたのをマシユが必殺技で防ぐ。一瞬防ぐことはできたが、災禍の鎧の一撃が重いいため、技が壊れてしまう。

ハルユキ・タクム「後ろがガラ空きだあ!!!」

ハルユキはキツク。タクムはシアンブレードで斬りかかる。一撃を与えたが、あまり攻撃が通った感じはしない。災禍の鎧の装甲が硬いため、あまりダメージを与えられなかった。災禍の鎧はタクムのシアンブレードを掴むとそのままどこかに放り投げる。

タクム「ぐあー!」

奨真「トレース・オン投影開始!!」

レミ「ライトニングゴスラッシュユ!!」

奨真とレミが追い打ちをかける。その2人と互角に戦う災禍の鎧。どれだけ不利な状況でも互角に戦うことができる人はそう簡単にいない。

楓子「2人とも下がって!!」

リサ「今度は!」

美早「私たちが」

あきら「相手なの!」

今度は体術が得意な4人が前に出る。楓子とあきは拳も足技。美早は爪。リサは足技で対抗する。

リサ「スノーインパクト!!」

リサは災禍の鎧に足を突き出して衝撃を放つ。ただ放つだけじゃなく、足に雪を纏っているため、凍らせることもできる。

あきら「ミヤアいくの!!」

美早「いつでも」

あきら「はあああ!!」

あきは抱えた美早をライフルの弾のように回転させながら投げつける。美早は爪を立ててそのまま回り続ける。たぶんその勢いで災禍の鎧を貫通するつもりなのだろう。

う。そして上手く腹に爪を入れることはできなかったが、それと同時に災禍の鎧は身動きが取れるようになり、美早を掴む。回転を止められた美早は災禍の鎧に掴まれてあきらの方に投げられる。

オルタ「この！動くな!!」

後ろからオルタが災禍の鎧を羽交い締めにする。動きを制限させることができたが、オルタと災禍の鎧では体格差がかなりある。だから普通に動き出そうとする災禍の鎧に追い打ちをかけるようにチユリとジャンヌが飛び込む。

チユリ「これで手足は動かさないよ!」

ジャンヌ「楓子ちゃん今です!!」

楓子は手に螺旋回転する風を纏っていた。みんなが攻撃してる間に身につけたんだろう。ゲイルスラスタで急接近してその手で殴りつける。

楓子「エアロドライブ!!」

風が螺旋回転してるため、災禍の鎧の腹は抉られるような感じになる。楓子の狙いはこのまま腹を貫通させることだった。だがそうなれば羽交い締めにしてるオルタも巻き込んでしまう。だから楓子はオルタに逃げるように指示する。

楓子「オルタ!私がつ数えたらすぐに逃げて!!」

オルタ「待ちなさいよ!こいつを離したら動き出すじゃない!!」

楓子「いいから!!」

オルタ「も、もう!!どうなっても知らないわよ!!」

楓子「ジャンヌとチーコもいいわね!」

ジャンヌ・チユリ「はい!!」

3人はいつでも逃げられるように準備をする。それを確認した楓子は合図を出す。

楓子「3・2・1・避けて!!」

3人は同時に避けると、楓子はさらに力を入れる。そのまま遠くに突き出すようにすると災禍の鎧は回転しながら吹っ飛ぶ。地面を転がるところを奨真が追い打ちをかける。その手には干将・莫耶じゃなく、真っ黒な剣だった。

奨真「お前の力を少し使わせて貰うぜ!!エビルカリバー!!」

エクスカリバーを投影させて奨真の中に眠ってる災禍の鎧の負の心意を流し込み、形と色を変える。それは大剣となったエビルカリバーだった。その大剣を災禍の鎧に叩きつける。

奨真「これならどうだ」

キリトたちも含めた全員が奨真のもとに駆け寄る。煙が晴れてきて、災禍の鎧の状態を見てみると、斜めに斬られた跡が残っていた。だが災禍の鎧は立ち上がり、その場から逃げるように立ち去って行く。

リズ「なんだったのあいつ？」

シリカ「皆さん全員でかかっても互角でしたね……」

アスナ「ねえ。さつき奨真君の中にも災禍の鎧があるって言ってたよね？ どういうことなの？ 災禍の鎧ってアレのことよね。もしかしてあなたもあんな風になるってこと？」

奨真「それは……」

楓子「アスナさん、大丈夫です。私たちがいる限り、奨真君は災禍の鎧にはなりません」

ティア「その根拠は？」

楓子「奨真君が災禍の鎧になる前に私たちが止めるから。だから信じてください」

アスナ「ごめんなさい。そんなつもりじゃなかったけど、ちよつと奨真君が心配で」

奨真「なんかすみません。心配かけてしまつて」

キリト「俺たちはもう仲間なんだから心配くらいするさ」

キリトは奨真の背中を軽く叩き、そう言う。アスナも敵ではないかと疑つたつもりはなく、ただ心配だったからだ。

黒雪姫「皆にも災禍の鎧について話しておかなければいけない。あれはとあるバーストリンカーが負の心意のせいで変わり果てた姿だ。それが災禍の鎧『クロムディーズ

ター』だ。討伐しても装備アイテムとして残ってしまい、装備すれば自身もあんな風になってしまう呪いの装備。まあ装備する前に捨てれば全て解決なのだが、己の欲求に負けて装備したものがいるため5代目まで誕生している」

クライン「5代目までつてことはあ……奨真が5代目か？」

黒雪姫「いや、彼は6代目だ。彼の場合はイレギュラーなんだ。以前我々が5代目を討伐し、装備アイテムも捨てたのを確認したのだが、討伐した時の破片が彼についてしまつて負の心意と共鳴してしまつたのだ」

リーファ「じゃあその破片を取れば大丈夫なんじゃないですか？」

楓子「破片なら取り除いたけど、どうやら彼の中に災禍の鎧の意思が入り込んでしまつてゐるらしいの」

式「そういやそうだったな。まあ俺の考えだが、もう災禍の鎧を克服するしかないと思つてる」

リズ「克服つてことは……？」

ストレア「慣れろつてことじゃないかな？」

奨真「そうだ。俺は少しずつだが、負の心意をコントロールしてる。さつき見せたあの剣も負の心意で作つたものだ」

エクスカリバーの反転バージョンはエクスカリバーモルガンだが、それはあくまで反

転バージョンなだけで負の心意ではない。だから奨真が作り出したのは負の心意を纏ったエクスカリバー、エビルカリバーなのだ。

キリト「それかなり強力な武器だよな？ ずっと使うことはできないのか？」

奨真「無理だな。使い続ければそのまま負の心意に飲み込まれてあなる」

プレミア「諸刃の剣です」

蓮「災禍の鎧がまたいつ出てくるかわからない。早いうちに別行動を取ろう」

ハルユキ「ですね。街へ戻って準備です！」

とりあえず一旦街へ戻り、アイテムの補充をする。そして三手に別れるため、くじ引きで決める。

草原エリアはアスナ、シリカ、ストレア、セブン、レイン、プレミア、黒雪姫、楓子、あきら、美早、白雪姫、リサ、藤乃、チュリ。

雪山エリアはキリト、シノン、リズ、クライン、ルクス、ティア、白夜、ハルユキ、ニコ、レミ、マシユ、ういうい、ジャンヌ、式。

砂漠エリアはリーファ、エギル、ユウキ、フィリア、スメラギ、カムイ、奨真、タクム、アツシユ、アルトリア、寿也、蓮、オルタ。

……で別れることとなる。転移門の前で一旦別れの挨拶をして、それぞれの場所へと転移した。

第21話 魔法少女

草原エリアを探索することとなったアスナ、シリカ、ストレア、セブン、レイン、プレミア、黒雪姫、楓子、あきら、美早、白雪姫、リサ、藤乃、チユリ。くじ引きで決めたメンバーだが、見事女性陣だけになった。

アスナ「ここに七王がいればいいけど…」

あきら「七王がいればすごい情報圧がするはずなの」

楓子「そうね。距離が近くなるほど感じるからね」

適当にエネミーを倒しながら辺りを探索する。その時、ストレアが狩りに飽きたのか話題を出してきた。

ストレア「ねえねえ！そっかえば楓子って奨真と付き合ってるんだよね？キスもしてたし！」

楓子「え、ええ」

ストレア「気になったんだけど、どうやって付き合うことになったの？やっぱ誘惑？」

ストレアは奨真と楓子がどういふ感じて付き合ったのかが知りたいようだ。もちろん楓子は隠す必要がないので答える。

楓子「誘惑じゃないけど。昔私と奨真君は喧嘩して数年間喋らなかつた時があつたの。喧嘩つて言つても私が彼を避けてただけだけど。ある日、彼にブレインバーストで勝負しようつて言つてきたの。彼が勝てば話を聞く、私が勝てばもう私のことは忘れてという条件付きで。私は彼と勝負して負けた。そして彼は事情を説明して、全て私の勘違いだつたつて形で終わった。その時に彼から告白されて付き合うことになつたつて感じよ」

シリカ「お二人が喧嘩なんて……意外です」

黒雪姫「そういえばそんな感じだつたな。あの時は我々も心配してたんだぞ？」

ストレア「なるほどなるほど。じゃあいきなり吹っ飛ぶけど、キス以上のことは？」
今度はかなり吹っ飛んだ質問をするストレア。その質問を聞いたみんなは驚くものもあれば顔を赤くするものもいた。ちなみに赤くなつていたのはアスナ、シリカ、セブ
ン、レイン、白雪姫、リサだつた。

楓子「それ以上？それなら」

アスナ「ちよ！ストツプストツプ!!楓子ちゃん別に答えなくていいから!!ストレアもそんな質問しない!!」

ストレア「ええー！いいじゃん！それにアスナだってSAOでキリトとしたんでしょー？」

アスナ「いやあああああ!!!」

いきなり黒歴史？を暴露されたアスナは草原の上を転がり回る。顔も耳まで真っ赤にして。止まった時にプレミアが近づき、追い討ちをかける。

プレミア「アスナ、グツジョブ」

アスナ「何が!?!」

アスナの完全なキャラ崩壊はとても新鮮だった。あそこまで取り乱したのはシリカたちも初めて見るらしい。ようやく落ち着きだしたアスナはいろいろと体力が奪われていた。

アスナ「はあ……はあ……と、とにかく！楓子ちゃんもあんなことは簡単に言っちゃダメ！」

楓子「わ、わかりました」

セブン「まあお遊びはこの辺で、さつきから変な音が聞こえない？」

全員「「変な音？」」

セブンのいう変な音とは、ゲームなどでよく聞く光線のようなものが何かとぶつかるような音だった。その音の数は2つ3つじゃなく、大量だった。

レイン「上から聞こえてくるね」

場所がわかり、早速上を目指す。もしかしたら七王かもしれないと思いつながら上に到着する。そこにいたのは七王ではなかった。いや、そもそもバーストリンカーでも妖精でもなかった。何に一番近いと聞かれると、全員が魔法少女と言うだろう。

???「ふえええ!! 虫ばっかり嫌なんですけどー!!」

大量の虫型エネミーを次々に倒していく少女は誰も見たことがない。その少女は武器のステツキを振って光の玉を作り、それをそのまま放ったり、斬撃を作り出したりしていた。

リサ「あれって助けたほうがいいよね？」

チユリ「でもパニックってるみたいだし、巻き込まれそう……」

プレミア「話してる余裕はないみたいです。完全に囲まれました。つまり、ピンチです」

少女に気を取られると、いつのまにかエネミーに囲まれて逃げられない状態となっていた。だが、楓子があの少女を助けるといい、敵に突っ込むとそのまま避けて突き進んでいく。少女に近づくと、肩をがっしりと掴み、冷静にさせる。

楓子「しつかり! ここは私たちも手伝うから!」

???「あ、ありがとう……ごさいます」

戦い慣れてるみんなはサクサクとエネミーを倒し全滅させる。ひと段落つき、少女はまずみんなにお礼を言う。

???「ありがとうございます！実はいきなりここに飛ばされてどうしようか悩んでたんです……」

アスナ「いいのいいの！困った時はお互い様だからね」

みんなこの少女とは初対面だが、楓子は見覚えがあるようだった。楓子だけじゃなく、少女も楓子のことを知っているようだった。

???「あの！もしかして楓子さんですか……？」

楓子「やつぱりイリヤだったんだ。どこかで見たことがあるような……って思ってたのよ」

シリカ「えっと……お知り合いですか？」

楓子「この子はイリヤ。リアルの友人の妹なの」

イリヤ「イリヤスフィールといいます！イリヤって呼んでください！」

イリヤは元氣いっぱいに自己紹介をして、全員イリヤに自己紹介する。楓子は何故イリヤがALLOにいるのかわからなくて、とりあえず聞くことにする。

楓子「イリヤはどうしてここに？」

イリヤ「実はクロと美遊と魔法少女系のフルダイブゲームをしてたら視界がいきなり

歪んで……。気づいたらここにいたんです」

リサ「私たちとはまた別のパターンだね」

白雪姫「そうですね。私たちの場合は黒雲を通ってきましたから」

レイン「ねえイリヤちゃん。ログアウトとかは試してみた？」

ブレイン「ログアウトから来たバーストリンカーたちはログアウトするには帰還ポータルを使わなきゃいけないが、イリヤがやっている魔法少女系のゲームのログアウト方法はわからない。だからログアウトできるかだけでも聞いてみることにした。それを言われたイリヤはすぐに右手を縦にスライドしてメニュー画面を出す。下の方を確認すると、ちゃんとログアウトのボタンがあった。

イリヤ「あ、ちゃんとログアウトはできるみたいです！でも私皆さんの手助けをしたんです！足は引つ張らないように頑張りますので！」

アスナ「ありがとうイリヤちゃん。じゃあ甘えてもいいかな？」

イリヤ「任せてください！頑張るよルビー！」

ルビー「お任せあれー！」

イリヤが杖にルビーと言って話しかけると、杖は動き出し、喋り出した。その光景は全員が驚いた。NPCとかじゃなくて、プレミアやストレアのようなAIのように感じるからだ。

ルビー「いやー相変わらずイリヤさんは困ってる人がいれば放っておくことができな
いんですね〜」

イリヤ「当然でしょ。困ってる人が助ける。それがお兄ちゃんからの教えなんだから」

黒雪姫「杖が……喋ってるのか!？」

チユリ「どんな仕組みなの!？」

プレミアア「これは凄いです。つまり、ビックリです」

ルビー「私はスーパーAIルビーですよ〜」

イリヤ「自称ね」

プレミアア「むっ……。私もユイヤストレアのような立派なAIになる勉強をしてま
す。スーパーAIと言われては私も黙ってません。つまり、決闘を申し込みます」

ルビー「いいですよ。けちよんけちよんに返り討ちです」

イリヤ「ええ!?!もうルビー!!」

突然プレミアアはイリヤ（ルビー）に決闘を申し込んだ。でもこれはイリヤの実力を知
るいい機会かもしれない。だからこそ誰もその決闘を反対しなかった。

楓子「私たちはイリヤの実力もわからないし、いい機会じゃないかしら?」

アスナ「そうね。イリヤちゃんさえよければどうかな?」

イリヤ「な、なんか変な感じでお披露目することになるなんて……。全部ルビーのせい

なんだから……」

プレミアはイリヤにデュエルの申し込み画面を送信した。ルールは《初撃決着モード》。すぐに終わらせるにはこれが一番いい。イリヤは承諾ボタンを押すとカウントが始まる。0になる前に両者は一定の距離を取る。プレミアはレイピア、イリヤは杖を構える。そして0になると、プレミアは突っ込み、レイピアを突き刺す。それをイリヤはジャンプして避け、足につけてるカードホルダーのようなものからカードを取り出す。イリヤはそのカードを杖にかざし、呪文を唱えた。

イリヤ「夢幻召喚!!」

イリヤの体は一瞬光り、その中からはさつき姿とは違うイリヤが出てきた。その姿は加速世界でいた青いタイツを来た英霊級エネミーと同じだった。姿が変わっただけで十分驚いたが、バーストリンカーたちは何故その姿になれたのかが不思議で余計に驚く。

イリヤ「最初から全力でいくよ!!」

第22話 イリヤVSプレミア

ランサー『クー・フリーン』の格好をし、槍を構えるイリヤ。それに対しプレミアはレイピアを構えて、一歩下がる。イリヤは槍を前に突き出し攻撃をするが、プレミアはレイピアで弾く。

アスナ直々に教わった細剣技術は並のものではない。その技術とプレミア自身の戦闘技術はうまく噛み合い、彼女を強くしている。だから単純な攻撃は通用しない。

イリヤ「突き攻撃を全部弾いてる…」

プレミア「終わりですか？なら今度はこっちから」

プレミアもイリヤと同じく突き攻撃をしかける。アスナには劣るが、プレミアの突き攻撃も中々速い。イリヤは槍で弾こうと考えたが、プレミアのレイピアのように槍は軽くない。全て弾くことができないと判断したイリヤは避けることを選んだ。

イリヤ「は、速い!?でも、私は負けない!」

槍の長さを利用して槍を長く持ち、バットのように思い切り振る。槍の持つ部分がプレミアの横っ腹に直撃してプレミアを吹っ飛ばす。地面を転がるプレミアに追い打ち

をかけにいくイリヤ。高くジャンプすると、槍に力を込める。

イリヤ「ゲイ・ボルグ!!」

プレミアはなんとか態勢を立て直す、早く逃げないと直撃する。羽を広げ、空高く飛んでゲイ・ボルグを回避する。一方イリヤはゲイ・ボルグを使ったと同時に変身が解け、魔法少女の姿に戻る。

プレミア「今のは危なかった。つまり危機一髪」

イリヤ「そつちも空飛べるなんて……こうなつたらもう一回」

イリヤはカードホルダーから一枚取り出してまた呪文を唱える。

イリヤ「インストール夢幻召喚!!」

今度はハルユキのもう一人の師匠であるライダー『メデューサ』の格好をして出てきた。アイマスクは片方にしかしていない眼帯タイプだった。

2つの鎖付きの短剣の片方をプレミアに投げつける。プレミアは避けて、そのまま突っ込む。けど、イリヤはそれを計算に入れて投げた方の鎖を思い切り自分の方に引っ張る。すると、短剣は戻ってきてプレミアの背中に直撃しそうになる。プレミアはそれを察知して振り向いてレイピアで防ぐが、そのせいで背中が空きになり、イリヤは変身して得た身体能力でサマーソルトを決める。体とレイピアが上に上がったプレミアにかかと落としを決めた。

イリヤ「そこだ!!」

プレミア「がはっ!」

大きな一撃をくらったため、決着がついたと思ったが、まだデュエルは終わってなかった。でも見た感じプレミアはまともに動ける状態じゃない。だからイリヤはさらに追い打ちをかけようとはせずゆつくりと駆け寄る。

その時、プレミアは目を開き油断したイリヤの足を引つ掛ける。そして誰から習ったのか体術を使ってイリヤを吹っ飛ばす。そして空から降ってきたレイピアをキャッチし、距離を詰める。

プレミア「これで……決める!!」

イリヤ「やらせない!!」

プレミアは渾身の『リニア』を放つ。イリヤは片方の短剣で防ぎにいき、もう片方でプレミアの胸のあたりを刺しにく。互いの武器がぶつかると同時に大きな爆風が起きる。その爆風の中からプレミアとイリヤは吹っ飛ばように出てきた。それと同時にデュエルは終了した。結果は引き分けという形になった。

プレミア「けほっ……けほっ……」

イリヤ「イタタタタ……」

アスナ「2人とも大丈夫!」

観戦していたみんなは心配して駆け寄る。アスナはプレミア、楓子はイリヤを抱える。プレミアの手にはレイピアはなく、イリヤは変身が解けていた。

プレミア「レイピア……落としてしまいました……」

レイン「プレミアちゃんのレイピアなら拾ってきたよ」

レインはプレミアのレイピアを拾って、プレミアに差し出す。プレミアはそれを受け取り、鞘に戻す。イリヤは立ち上がり、プレミアの方に歩み寄る。前まで来ると、手前に差し出す。

プレミア「……？」

イリヤ「戦いが終わった後は握手でしょ？楽しかったよ」

プレミア「なるほど、私も楽しかった。またやりましょう」

プレミアも手を差し出し、2人は握手をする。2人の顔は満足そうにしていた。

白雪姫「2人とも凄かったですね！」

黒雪姫「ああ、イリヤ君の実力も凄い。これはかなりの戦力になるぞ」

イリヤ「あ、ありがとうございます！」

イリヤという新たな戦力が加わり、再び七王を探し始める。その時、チュリは何かに気づき足を止めた。

皆も釣られて足を止めてチュリを見る。一方チュリは何かを見つめていた。それは

異界へのゲートだった。

シリカ「チユリさん？どうかしましたか？」

レイン「ゲートを見つめてるけど……」

チユリ「私の勘が当たったらなんだけどさ、草原エリアには七王はいないと思うの」
リサ「どういうこと？」

チユリ「ほら、今までのパターンだと七王は各エリアに1人だったじゃない？」

プレミア「草原エリアは赤の王、砂漠では紫の王、腐食林では黄の王」

チユリ「でしょ？どのエリアも1人しか現れてない。つてことは草原エリアにある異界ならいるんじゃないかって思うの」

たしかにチユリの言ってることは正しい。3人の王を倒しているが、3人とも場所はバラバラで同じところに出現はしていない。なら草原エリアからいける異界ならいる確率が高いだろう。

楓子「行ってみる価値はあるわね」

アスナ「行こう！少しでも可能性があるなら、私はそつちに賭ける！」

黒雪姫「よし！行くぞ！」

楓子達はゲートをくぐり、異界へと足を踏み入れる。その先は世紀末ステージであったりは荒廃としていた。

アスナ「前はあまり探索できなかったからじっくりと探索できるわね」

楓子「皆、あまり離れないようにね」

全員一緒に行動することにし、辺りを探索する。初めて世紀末ステージに来た人たちは新鮮な目でみる。

イリヤ「どこを見ても廃墟……」

レイン「戦争でもあったのかな？」

黒雪姫「っ!?皆止まれ!!」

セブン「とてつもない気配ね」

楓子「この庄は……」

楓子は歩道橋の方を見ると青い剣を持った人物、青の王『ブルーナイト』が姿を現わす。

藤乃「あれは、ブルーナイト」

ナイト「ようネガ・ネビュラス。あとは……知らんメンツだな」

アスナ「何……まるで団長のような……」

美早「気をつけて、少しでも油断するとやられる」

イリヤ「な、なんか凄そうだねルビー」

ルビー「これは一筋縄ではいきませんよ」

ナイト「おっ？ 戦う気はあるみたいだな。ダミーではあるが、相手してやってもいいぜ」

黒雪姫「お前は自分がダミーだってことは自覚してるのか？」

ナイト「んなこと気づくわ。力が思い切り使えないからな。でも、俺は強いぜ？」

どうやらナイトは自分自身がダミーアバターだってことに気づいてるようだ。

黒雪姫「そんなのわかってるさ。皆！絶対に隙は見せるな！いくぞ!!」

く 雪山エリアく

雪山エリアにきたキリト、シノン、リズ、クライン、ルクス、ティア、白夜、ハルユ

キ、ニコ、レミ、マシユ、ういうい、ジャンヌ、式。こちらでも手がかりは掴めていなかった。

シノン「ダメね。魔法で視力を良くしてみたけど、それらしき影は見当たらないわ」
ハルユキ「僕もいろいろと聞き込みとかもしたんですけど、これといった情報は……」
完全に行き詰まってしまったキリトたち。どうしようか考えてると、ういうい何かに反応した。

マシユ「謡さん？」

ういうい「何か聞こえるのです」

ルクス「うん、地面から何か聞こえるよ」

ルクスは地面に耳を傾けると、隙間風のようなものが聞こえてくる。地面の雪を掘ると、氷が張った地面が見えた。その下を見ると、空洞のようなものがあつた。

キリト「こんなところに空洞があつたのか？」

ティア「ならやることは1つね」

ティアは大剣を持って立ち上がる。キリトはすぐに嫌な予感がし、汗を掻く。ティアは地面に向かって思い切り大剣を振り下ろす。当然氷は割れ、その場にいた全員が空洞に落ちていく。

全員「「「うわあああああ!!!」」」

地面に激突する前に上手く着地をする。突然のことで皆驚き、キリトはティアに説教する。

キリト「やるときはせめて声かけてからやってくれ!!」

ティア「したじやない？」

キリト「いきなりすぎるんだよ!!」

説教するキリトとそれを聞かないティアを皆は呆れた目で見る。その時、何かがみんなのところろに接近していて、マシユだけがそれにいち早く気づく。

??? 「はあああ!!」

マシユ「させない!!」

マシユは襲撃者の前に出て攻撃を盾で防ぎ、跳ね返す。襲撃者の姿を見ると、楓子たちが出会ったイリヤと同じ格好をした少女だった。

??? 「やっぱり武器だけだとダメか……。なら!」

ういうい「美遊ちゃん!」

??? 「っ!? 譚!」

どうやらういういの知り合いで、名前は美遊という。イリヤが言っていた逸れた友達の人だった。美遊は事情を説明すると、キリトたちも事情を説明する。美遊はイリヤと同じようにキリトたちに協力することを選んだ。

美遊「あの、さっきは襲いかかってすみませんでした」

マシユ「ううん、気にしなくていいよ」

美遊「ありがとうございます」

キリト「それにしてもこんな場所があったなんてな」

キリトたちALO組も雪山エリアに地下空洞があることは知らなかったらしい。だからこの場所についてはまだ誰も知らない為、未知の領域だった。

クライン「ううう……さみい……。ここはもつと寒いじゃねえか……」

リズ「だらしないわねえ。男ならもつとシャキツとしなさいよ！」

クライン「さみいもんはさみいんだよ！」

式「んなことよりどうする？未知の領域ならバラバラに探索するか？」

式は1つの案としてバラバラに探索することを出す。一部はそれもやはりかと考えていたが、キリトはそれに反対する。

キリト「いや、未知の領域だからこそバラバラになつちやダメだ。合流が難しくなるかもしれない」

ハルユキ「僕も賛成です。せっかく集まったのにまたバラバラになったらダメです」

白夜「よし。じゃあまずはマップを見て位置確認だ」

白夜はマップを開き、全員で見れるように大きく拡大させる。位置を見ると、地下空

洞のちょうど真ん中だった。地下空洞はなかなかの広さで確かに迷子になれば探すのに苦労しそうだった。

シノン「広いわね」

レミ「どうします？端から順番に回ります？」

ジャンヌ「いえ、ここは近くから消化していくのがいいかと」

レミの意見とジャンヌの意見の2つに分かれる。ここは多数決を取るのがいいと判断し、レミの意見から順番に聞く。結果はレミの意見の方が多いため、レミの意見でいくことにした。

地下空洞の角には4つとも塔らしきものがあるためその中を探索する。1つ、2つ、3つと調べるが、特に何も無い。4つ目のところに向かおうとすると、ニコが何か異変に気付く。

ニコ「お前ら、気合い入れとけよ。この先に奴がいる」

ハルユキ「ニコ？奴っていったい…」

白夜「この圧はあいつしかいないな」

シノン「とりあえず気を引き締めていくわよ」

4つ目の塔へと向かうキリトたち。近づいていくとだんだん圧は強くなり、進むのが

難しくなってくる。それでもキリトたちは進み続け、なんとか塔の中へと入る。中で待ち受けていたのは、緑のゴツい体のバーストリンカー。緑の王『グリーングランデ』だった。

リズ「何あいつ……。今まで戦ってきた王とは感じが全然違うわよ」

式「へえ。青かと思っただが緑ときたか」

ういうい「これは一斉に攻撃しないと勝てないのです」

美遊「つてことは防衛はかなりあるということ」

キリト「よし！全員一斉攻撃で押し切るぞ!!」

第23話 その少女は剣を造る

砂漠エリアに探索に来てるリーファ、エギル、ユウキ、ファイリア、スメラギ、カムイ、奨真、タクム、アツシユ、アルトリア、寿也、蓮、オルタ。七王を探すために遺跡の中にいるが、ワープゲートのせいで見事に道に迷ってしまう。一度来た道に戻ろうにもどのゲートから来たのかもわからない。

オルタ「どうすんのよ……。完全に迷子になったじゃない!!!」

ファイリア「私のサーチャーもお宝しか探せないし……」

エギル「こりや参ったな」

完全に元の場所に戻れなくなり、とりあえず全員体を休めるため、座り込む。どうか脱出するために考えてると、ユウキは何か思いつき、カムイの方に駆け寄る。

ユウキ「ねえカムイ。カムイのあれは使えないの?」

カムイ「あれ?」

ユウキ「ほらあれだよ!道に迷ったときに使うあれ!」

カムイ「あーあれか!」

奨真「あれっ?」

コウキに言われて何かを思い出すカムイ。カムイはアイテムストレージから球体のようなものを取り出す。球体のスイッチのような部分を押すと、変形してコウモリのようになる。そのコウモリのようなものは空を飛ぶと、道案内するかのよう飛び立つ。

奨真「カムイ。あれは?」

カムイ「あれはダンジョンバット。こういうダンジョンみたいところで道に迷うと、出口に案内してくれるんだ」

リーファ「へえ。でもあんなの売ってる店なんて見たことないですよ?」

コウキ「そりやそうだよ。あれはカムイがタイムしたダンジョンバットの量産型だからね」

オルタ「そんな便利なもの持つてるならなんで早く使わないのよ!!」

カムイ「ぼ、僕も今思い出したんだから!」

アルトリア「とにかく、あのコウモリを追いかけましょう。ワープゲートをくぐりそうです」

ワープゲートに入っていくのを確認し、それに続いてどんどんゲートに入る。その先に行くとき、まだコウモリが先に進んでいた。急いで追いかけると、出口らしきものが見えてくる。その先に進むと外に出ることができた。コウモリは主人であるカムイのも

とに変わるかと思つたが砂漠のど真ん中に立つてる少女の頭に留まる。

??? 「あら？このコウモリ何かしら？」

カムイ 「はあ……またか……」

カムイ曰く、ダンジョンバットは大の女好きで、女の子を見るとその人の頭に留まる癖があるらしい。

カムイ 「失礼、そのコウモリは僕の子なんだ」

??? 「そうなの？ほら、ご主人様が来たわよ」

少女はすんなりとコウモリをカムイに返す。コウモリは元の球体に戻り、カムイのアイテムストレージに入る。そんな中、奨真はその少女のことをどこかで見たことがあると思ひ込む。その時、少女は奨真の存在に気づき、大きな声で呼ぶ。

??? 「あつ！奨真じゃん！こんなところで何してんのー！」

奨真 「思い出した!!お前クロエか!!」

オルタ 「あ、あんたあの時生意気なガキと一緒にいた双子の1人!!」

クロエ 「顔色が悪い人もいる！」

オルタ 「うっさい！元々よこれは!!」

イリヤの双子『クロエ・フォン・アインツベルン』がALOの砂漠にいた。イリヤと美遊もそうだが、何故3人はこの世界に迷い込んだのだろう。イリヤが言うにはいきな

り視界が歪んだらしい。もちろんそれを知ってるのはイリヤと合流してる楓子たちだけ。

とりあえず奨真はクロエに事情を聞くことにし、彼女に問いかける。

奨真「なんでお前がここに？」

クロエ「それがゲームにログインしたらいきなり視界が歪んでね。気がついたら砂漠のど真ん中にいたわけ」

タクム「どうしましょう？この子を放置するわけにもいきませんし、共に行動したほうがいいのでは？」

タクムはクロエを一人にさせないように共に行動する案を出す。もちろん全員それに賛成するが、クロエ自身の実力が気になる。もし戦えなかったら守りながら戦わなければならぬ。

とりあえず模擬戦をしてほしいと提案する。クロエは軽く了承し、誰とやるのか聞く。クロエに年齢や体格も似てる寿也が1番適任と考え、寿也が戦うことになる。

寿也「よろしくね！いきなり本気で行くから」

クロエ「そうこなくっちゃ」

デュエルのルールは『初撃決着モード』で寿也から対戦を申し込む。クロエは了承ボタンを押し、カウントが始まる。ゼロになる前にお互い準備をする。寿也は2本のナイ

フ。そしてクロエの武器が奨真にとって衝撃だった。

クロエ「私の力、見せてあげるわ！」

クロエは手を出すと、力を込める。クロエの手から2本の剣が作られる。その剣は奨真がよく使う武器『干将・莫耶』だった。もちろん奨真はそれにも驚いたが、それ以上にクロエが自分と同じ『投影』が使えることに驚いていた。

寿也「うわあ……奨真さんと一緒の武器だ」

クロエ「あなたの力、見せてもらうわ！」

そう言って走り出すクロエ。なかなかの速さで、すぐに寿也と距離を詰める。だが寿也は素早いタイプのバーストリンカー。距離を詰められてもまた距離を空ける。

側から見るとただの追いかけっこに見えるが、寿也も逃げてるだけじゃなく、飛び道具を使って対抗していた。

クロエ「飛び道具が多いわね。いったいどれだけ持つてるのよ……」

寿也「まだまだあるよ。けどあんまりダメージを与えられないからやつぱり近づかなきゃダメかな」

クロエ「ふふ、そうこなくっちゃ」

寿也はナイフを構えてクロエに近づく。対するクロエは余裕の表情を浮かべ、剣を構える。寿也はナイフで攻撃するが、クロエはそれを簡単に弾いてしまう。剣捌きも奨真

には劣るがなかなかのものだった。

寿也「正面からはダメだね。ならこれを使うしかないかな」

寿也は羽織っているコートのフードを被ると、姿が見えなくなる。いや、姿が見えなくなつたというより、気配が消えたと言つたほうが正しい。クロエはいつでも対処できるように目を瞑り身構える。

寿也の居場所を感知するため、極限まで集中する。すると突然背後から強い気配を感じ、後ろを振り向きながら剣で寿也のナイフを防ぐ。

寿也「ええ!? 僕のとつておきが!?!」

クロエ「残念でした♪私の方が一枚上手だったわね。じゃあ特別にわたしのとつておきをみせてあげる!」

クロエはさらに『干将・莫耶』を投影し、4本とも寿也に向けてブーメランのように投げる。寿也は捌くためにナイフを構えるが、クロエもただ投げただけではない。剣に気を取られてる隙に背後に回り込み、また新たに投影した『干将・莫耶』を振りかざす。

クロエ「鶴翼^{かくよくさんれん}三連!!」

寿也は背後からのクロエの攻撃をくらい、さらにクロエが投げた4本の剣もくらつてしまい、デュエルは終了した。結果はもちろんクロエの圧勝だった。

寿也「負けちゃつたな」

クロエ「あなたなかなか良かったわよ」

クロエは寿也に決めポーズのように投げキッスをする。デュエルが終わって見ていた奨真たちも2人の元へ駆け寄る。

奨真「クロエ……。お前なんで投影が使えるんだ……」

クロエ「ん？あたしの基本技よ？」

奨真「基本技……か」

答えではあるが、奨真はまだ困惑していた。そもそも奨真はクロエがどんなゲームをしているのかわからない。

オルタ「ま、いくら投影を使っても私の敵じゃないわね」

アルトリア「大人気ないですよ……」

オルタはまるで挑発するかのようにはクロエに言う。けどクロエはそんなことは全く気にしていなかった。効果がなかったせいかわかるとは少しムツとなる。その時、寿也はオルタの胸に思い切り飛び込む。

オルタ「わひゃっ!?!」

寿也「前から思ってたけどオルタさんってジャンヌさんと同じくらいのおっぱい持っているよね！」

オルタ「ちよっ！な、なにすんのよ！ひゃん！」

寿也はオルタの胸に顔を擦り付けながら胸を揉む。日頃マシユの胸を揉んでるせいか、いやらしい手つきがだんだん進化してきている。ジャンヌより力があるはずのオルタでさえ、力が抜けて抵抗できなくなっている。

オルタ「あ……あんたたち……見てんじや……ない……わよ……」

蓮「とりあえず男の俺たちは後ろを向いておこう。アルトリア、あとは頼んだ」

アルトリア「結局私ですか……。まあいいでしょう」

アルトリアはオルタから寿也を引き剥がし、力が抜けて色気が増してしまっているオルタの手を掴んで立たせる。

寿也「10点中10点!!マシユお姉ちゃんの次に素晴らしいおっぱいだ!!大きな、形、柔らかさ、揉み応え、香り、何もかもが完璧!!」

オルタ「うっさい!!!恥ずかしいことを大声で言ってるんじゃないわよ!!!」

リーファ「めちやくちや褒めてるけどそれでも2番なんだね」

ユウキ「うーん……やっぱり胸なのかな……」

カムイ「いや、そんなことはないと思うけど」

ユウキ「よかった。あ、とりあえずカムイは後でマザーズロザリオの刑ね」

カムイ「何で!?!」

何故かユウキからお仕置きをもらうことになってしまったカムイ。ALOメンバー

はこのくだりを知ってるからご愁傷様っていう感じだった。

クロエ「なんだか楽しい人たちね」

奨真「だろ。毎日が楽しいさ」

2人は騒いでる光景をじつと見る。見てるだけで楽しい思いながら、何か別の気配を感じ取っていた。その気配は、奨真は最初七王と思ったが、気配の種類が違った。殺気のような何かだった。

2人は気配を感じる方に振り向くと、奨真たちと同じバーストリンカーが1人、ゆっくりと近づいていた。赤色のアバターで腰には刀を持っていた。

奨真「誰だ。お前もダミーアバターか」

???「ダミー……。そう……。やっぱり私は本物じゃないのね」

その発言からして、バーストリンカーは七王たちと同じダミーアバターようだった。しかも本人はそれを自覚している。

クロエ「それで、何のようなの？」

???「単刀直入に言うわ。私と勝負しなさい」

奨真「理由を言え」

???「私は強くならなきゃいけない。ダミーアバターのこの体もそう言ってる」

奨真「……………なら名前を言え。勝負はそれからだ」

とりあえずクロエを後ろに下がらせ、奨真は相手に名前を名乗るように言う。相手も躊躇いなく名前を言う。

??? 「私はフレアエクス」

奨真 「ブラウンクリエイトだ」

エクス 「そう……。あなたが無限の剣製ね。相手にとって不足ないわ」

奨真 「そりやどうも。勝負内容は？」

内容を聞く奨真。エクスは何も言わずにウインドウを操作し、奨真の方に見せる。そこに書かれていたのは『半減決着モード』だった。言うよりも見せる方が早いと思ったのだろう。

奨真は承諾ボタンを押すと、カウントが始まる。エクスは刀を持ち、奨真は『千将・莫耶』を投影する。3・2・1・0とカウントがされるとお互い近づき、戦いが始まった。

カウントが0になる前の光景を遠くから見ていたリーファ達。奨真の構えは皆よく見ているから、さっきのクロエの構えは奨真と全く同じにしか思えない。次にエクスノ構えだが、もちろん皆初見だがリーファは見覚えがあるようだ。次は自分自身が一番それを知ってるからだ。

何故リーファがそう思うのか。それは自分自身が一番それを知ってるからだ。

リーファ「えっ……？？？なんで……」

ファイリア「リーファ？どうしたの？」

アツシュ「腹でも痛くなったか？」

タクム「アツシュさん失礼ですよ」

リーファ「だってあの構えは………私の剣道の構え」

第24話 呪いの力

エクスの構え方はリーファがよく使う剣道の構えだった。リーファはリアルで剣道をしているため、一般の構えはもちろん使える。だが、それとは別で自分のオリジナルの構えも作り出していた。

そのリーファオリジナルの構えをエクスはしているため、リーファ本人はどうしても驚きを隠せない。

リーファ「あの人……何者なの」

エギル「それはあの2人の戦いを見ればわかるんじゃないか」

全員視線を奨真とエクスに向ける。勝負はほぼ互角だが、少しだけ奨真が押ししている。それに対してエクスは刀を自在に操って対抗する。

それでも徐々に押されていくエクス。やばいと思ったのか、後ろに思い切り飛んで距離をとる。刀を持ち直すと、覇気のようなものを纏う。

奨真（なんだ……。この覇気は……？）

エクス「呪いよ……その力を刀に纏え」

やがてその覇気のようなものは刀に纏う。いや、これはもうオーラに近い。刀には

禍々しいオーラが宿り、確実にパワーアップしたに違いない。

エクス「まだ……終わらない。解放……『妖刀八咫鳥』!!」

さらに刀から禍々しいオーラが放たれ、よりオーラは濃くなる。エクスのオーラと刀のオーラは一つとなり、辺りの空気も変わっていく。

エクス「はああ!!」

奨真「何っ?!

エクスは奨真に斬りかかる。接近する速さと刀を振る速さはさつきとは比べものにならなかった。防御できなかった奨真は肩を思い切り斬られる。

奨真「これはまずいな……っ!?!」

突然奨真の肩の傷からとてつもない痛みが走る。それも無制限フィールドで味わう痛覚2倍よりも激しい痛み。

奨真「あ……熱い。痛みと同時に傷口からとんでもない熱さが……」

エクス「燃えるような痛み。それが呪い」

痛みで立てなくなってる奨真の元へ歩み寄るエクス。とどめを刺すために刀を上にあげ、思い切り振り下ろそうとする。

リーファ「ダメええええ!!!」

フィリア「リーファ!!」

リーファは飛び出し、刀が奨真に当たる前に彼を救出する。突然のことでエクスは驚き、リーファを見る。その時、エクスは動きを止めた。

エクス「そんな……あなたは……」

リーファ「大丈夫!？」

奨真「あ、ああ……助かったよリーファ」

エクス「リーファ……やっぱり……。あなたは……直葉さん？」

リーファ「ど、どうしてあたしの名前を……？」

エクス「こんな剣技……あなたにだけは見られなくなかった!!あなたが教えてくれた剣を私はこの手で汚した!!こんな呪われた剣をあなたにだけは見られなくなかったし知られたくなかった!!!」

エクスは頭を抱えて暴走し始める。それに対してリーファは混乱して何を言えばいいのかわからずにいた。

リーファ「お、落ち着いて!ね!」

エクス「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ずっと同じことを連呼して、エクスは刀を持って自分の首に近づける。嫌な予感があった。リーファはそれを止めようとする。けど遅かった。エクスは自身の首を斬り落とした。HPはゼロになってダミーの彼女は消滅した。

目の前で自殺した彼女を見てしまったリーファはどういうことかわからないまま呆然としていた。

リーファ「どういうこと？アタシあの子のこと知らないし、それに剣も教えた覚えはないよ!？」

蓮「もしかしたら俺たちの時代で知り合ってるかもな」

アルトリア「その可能性は十分あります。もし彼女の剣がリーファと同じならですが」

リーファ「未来……か」

寿也「そんなことより、奨真さんは大丈夫なんですか？」

全員が奨真の元へ駆け寄る。本人は斬られた肩を抑えて立ち上がった。まだ痛みがあるのか苦い顔をしている。

奨真「まだ痛むけど、少しマシになった」

スメラギ「やつは呪いとか言ってたな」

エギル「こりや戦闘は無理だな。しばらく休め」

アルトリア「なら奨真の護衛は私が」

さっきの戦闘で肩を痛め、しばらく戦えなくなった奨真。そんな彼の護衛にアルトリアが名乗り出た。探索を再開すると、オルタは上を見上げて隣にいるフィリアに聞く。

オルタ「ねえ、あの空に浮かんでる球体ってなんなの？」

フィリア「あれは……私にもわからないかな。いっぱいある球体の近くに浮島もあるみたいだけど」

タクム「かなり高いですね」

全員空を見上げて、浮島と球体を見る。リーファは魔法で視力を良くして何があるのか探す。

リーファ「んん………。ゲートみたいなのは見つけたけど、エネミーがいるよ」

オルタ「ふん、なら倒せばいいだけよ」

蓮「リーファ、どんなエネミーだ？」

リーファ「えつと……あれは犬……かな？」

ユウキ「犬のエネミーってなんかかわいいね」

アツシュ「ならさつさと終わらせようぜ!!」

ALO組は羽根で飛び、バーストリンカーはジャンプで上に上がる。地上からはかなりの距離があるため少し時間がかかる。数分後、全員浮島に着陸すると、目の前にさつき

の犬のエネミーが座っていた。

ユウキ「お手とかしてくれるかな？」

カムイ「危ないからやめなよ！」

ユウキが近づくと、犬はいきなり吠えて、姿を変える。その姿は巨大な狼、フェンリルだった。突然のことでユウキは驚き、猛スピードで離れる。離れる時に何かにつまづいたのか、転んでしまい、下に落ちそうになる。

けど、浮島の周りは少しだけ透明の床があつて落ちることはなかった。

ユウキ「あ、危なかつたあ……」

カムイ「だから言ったのに……」

リーファ「みんな！戦闘態勢!!」

リーファは全員に伝えると、瞬時に戦闘態勢に入る。奨真とアルトリアはみんなから離れたところで見守る感じになる。

アタツカーはリーファ、スメラギ、ユウキ、カムイ、オルタ。タンクはエギル、タクム。サポートはフィリア、寿也、蓮、アツシュ、クロエ。このフォーメーションでフェンリルに対抗する。

フェンリルは主にアタツカーの5人を狙う。5人はうまく攻撃を避けながら反撃をする。アタツカーが危なくなれば、蓮が糸でフェンリルの動きを止めたりして、その間に回避する。フィリアは補助魔法、寿也とアツシュは遠距離で攻撃する形になる。

アタツカーはユウキとカムイが両サイドから同時攻撃、リーファとオルタが隙のあるところを集中攻撃。そして一番攻撃力のあるスメラギが重い一撃を叩く。

ユウキ・カムイ「やあああ!!」

オルタ「死になさい!!!」

リーファ「てや!!」

スメラギ「お前らだけ!! 『テュールの隻腕』!!」

スメラギは『テュールの隻腕』を放ち、フェンリルのHPを一気に削る。だがフェンリルのHPは僅かに残っていた。そこへオルタが追い打ちをかけるようにフェンリルの頭に剣を突き刺した。

オルタ「これで終わりよ!!」

頭に刺した剣を扶るように回すと、フェンリルは力尽きてポリゴン状となる。エネミーがいなくなり、ゲートにも楽々と近づけるようになった。

ユウキ「可愛いワンちゃんがフェンリルなんて……」

カムイ「そもそもこの世界に普通のイヌ自体珍しいから」

ユウキ「ねえカムイ! ボク犬飼いたい!!」

カムイ「急にそんなこと言われても……」

奨真「先生。先生とカムイってどんな関係なんですか?」

奨真はユウキとカムイがあまりにも仲が良かったため、どういう関係なのかを聞き出す。リーファたちも知らないみたいで興味津々だった。

ユウキ「カムイとは幼馴染だよ。昔よく遊んだなあ」

カムイ「家も近かったからね」

ユウキ「カムイはボクが病気になっても週に2回は必ずお見舞いに来てくれたし、ずっとそばにいてくれたよね」

カムイ「君を1人にしたくなかったから」

ユウキ「ありがとう、カムイ！」

ユウキはカムイにお礼を言うと、カムイは顔を赤くしてユウキから目を逸らす。よっぽど恥ずかしいのだろう。そしてそれを聞いた奨真は少し考え事をしていた。

奨真（確か先生は既婚者。もしかして旦那さんってカムイなのか？）

スメラギ「さっさといくぞ」

スメラギは先へと進み、奨真たちも続いてゲートをくぐる。その先は燃えるような景色の煉獄ステージだった。

第25話 VS青の王

アスナ side

あの青の王って言われてる人、すごい気迫。少しでも気を抜けば押されそうになる。楓子ちゃんたちはこんな凄い人と同じ世界にいるなんて……。

ちよつとだけ気の差を感じちゃうな。ううん、弱気になったらダメ、今は目の前の敵に勝つことだけを考えなきゃ！

ナイト「どうした？来ないのか？」

アスナ「言われなくてもいくわ!!プレミアアちゃん、一緒にお願ひ!!」

プレミア「了解！」

私はプレミアアちゃんと一緒にレイピアを構えて青の王に接近する。同時に『リニア』を放つが、見切られて剣で捌かれてしまった。少し隙が出てしまい、私は思い切り蹴飛ばされてしまった。

アスナ「がはっ……」

レイン「アスナちゃん！」

レインちゃんが私の元へ駆け寄ってくる。手を出してくれて、私はその手を掴んで立ち上がる。

速さだけじゃあいつには勝てない。だからといって力だけでもダメ。一体どうすれば……。

黒雪姫「はあああああ!!!」

黒雪ちゃんが両腕で攻撃すると、青の王は剣で受け止める。跳ね返そうとしているが、黒雪ちゃんがそのまま押していた。

ナイト「少し腕が上がったんじゃないかロータス」

黒雪姫「ふん、こう見えて私は負けず嫌いだな」

青の王の動きが止まっている。なら仕掛けるなら今!!

私はレイピアを持ち直して、みんなに一齐に攻撃するように指示する。すると、みんなも同じことを考えてたようで、指示をしたと同時に走り出す。

レイン「ロータスちゃん避けて!! サウザンドレイン!!」

黒雪姫「っ!?!」

ナイト「なにつ!?!」

レインちゃんはOSS『サウザンドレイン』で遠距離からナイトに攻撃をする。黒雪

ちゃんはうまく避けてナイトだけがダメージを負う。

一瞬怯んだのを見逃さず、ストレアがソードスキル『アバランシユ』を、プレミアちゃんが『カドラプルペイン』で追い討ちをかける。さらにあきらちゃんと楓子ちゃんの2人はレーザーのような必殺技を放つ。

あきら「メールストロム！」

楓子「スワールスウェイ！」

2つの技に挟まれた青の王は身動きが取れてなかった。その隙を狙ってさらに追い討ちをかけようとする。私は『カドラプルペイン』を放とうとした時、青の王の異変に気付いた。

様子がおかしいと感じて、私は後ろに下がる。

ナイト「な……なめるな!!!」

青の王は気合だけで2人の技を跳ね返した。風圧で飛ばされた2人は建物に激突した。

楓子「ま……まさか、気合だけで跳ね返すなんて……」

あきら「これは予想外なの」

ナイト「手を抜きすぎたか。だがもう手加減しない」

2人が建物に激突した衝撃で、建物が少し崩壊する。瓦礫が落ちてきて2人は身動き

が取れない状態になってしまう。

シリカ「今助けます!!」

シリカちゃんは2人を助けるために走り出す。一番近かったあきらちゃんのように走っていくと、突然2人の前に青の王が姿を現わす。

アスナ「さつきまでここにいたはずなのに!？」

セブン「なんてスピードなの!？」

白雪姫「シリカちゃん!!逃げて!!」

ナイト「くたばれ!!」

シリカ「きやああああ!!!」

青の王の大剣をまともに喰らったシリカちゃんは物凄いスピードで飛んでいった。スピードは落ちることなく飛ばされ続けるシリカちゃんをリサちゃんが回り込んで受け止める。それでも止まることはなく、2人同時に地面を転がる。

イリヤ「大丈夫ですか!？」

イリヤちゃんは2人に声をかけるが、2人は反応しない。2人は気を失ってしまった。

まずいわ……。今の青の王はさつきとは違う。力だけじゃなく、スピードが恐ろしいくらい上がってるわ。

ナイト「全員同時に倒すとは厳しいな。一匹ずつ確実に始末してやる」

黒雪姫「やれるものならやってみる!!」

黒雪ちゃんも両腕で青の王に斬りかかる。青の王は大剣で防いで押し返そうとする。

……………!!?今のあいつは防御のために剣を使ってる。攻撃するなら今しかないわ!!

アスナ「はあああああ!!!」

私は全力のソードスキル『スターズプラッシュ』を放つ。プレミアちゃんも私に続いてソードスキルを放ち、青の王を追い込む。

けど、青の王は怯むことなく黒雪ちゃんを押し返した。それと同時に大剣を後ろに振り、私達を斬る。青の王はプレミアちゃんの腹を殴り、上にあげる。宙に浮いたプレミアちゃんはまともに動けず、青の王は飛んでプレミアちゃんを叩き落とす。地面に激突したプレミアちゃんのHPは0になり、リメインライトとなる。

ナイト「3匹目だ。次はお前だ」

ダメだわ……………勝てない……………。こんな化け物みたいな人をどうやって相手したらいいの？

青の王は私の前に立ち、大剣を掲げる。私はもうダメだと思い、目を瞑った。けどいつまで経つてもダメージは入らない。私は目を開けると、目の前に青の王の剣を受け止めてるストレアがいた。

ストレア「お、重っ……」

アスナ「ストレア!!」

ストレア「アスナ、諦めるなんてアスナらしくないよ?」

楓子「そうですね。あなたは簡単に諦めたりなんかしない」

後ろから私の肩を叩き、声をかけてきたのは、さつきまで瓦礫に埋もれていた楓子ちゃんだった。

楓子「ストレアが防いでる隙に離れますよ」

ストレア「長くは持たないからすぐに助けてね!」

ストレアが防いでる隙に私は青の王から離れる。息を整えてると、チュリちゃんが回復アビリティで回復してくれた。

チュリ「すみません、今ので必殺ゲージがなくなっちゃって……」

アスナ「大丈夫。チュリちゃんもしもの為に備えてて」

私はチュリちゃんにそう言うと、彼女は少し離れたところでオブジェクトを破壊し始める。

視線を青の王に戻すと、白雪ちゃんが青の王と一騎打ちをやっていた。でも、見る限りでは白雪ちゃんの方が押されてる。

ナイト「おいコスモス。お前弱くなつたんじゃねえか?」

白雪姫「っ!？」

突然白雪ちゃんの様子がおかしくなる。青の王に何か言われたのかわからないけど、力が緩くなってしまってる。それを見逃さなかった青の王は白雪ちゃんに斬りかかる。確かブレインバーストはレベル9同士が戦えばサドンデスルールになってしまう。もし白雪ちゃんが負ければブレインバーストをアンインストールされる!？」

藤乃「させません！」

大剣が白雪ちゃんに当たりそうになった時、藤乃ちゃんが彼女の前に現れて代わりに斬られてしまう。傷が深かったのか、HPはとんでもない速さで減っていく。

藤乃「最後の悪あがきです。凶れ」

ナイト「っ!?!しまっ!？」

藤乃ちゃんはアビリティを使って青の王の片腕をへし折った。最後の力を使ったせいなのか、藤乃ちゃんはHPが0になってしまった。

また仲間がやられてしまったけど、彼女のおかげで青の王の片腕を奪うことができたわ。

ナイト「油断したぜ。あいつはそういう力を持つてたな」

あきら「隙ありなの!!」

美早「ファーストブラッド!!」

瓦礫から脱出したあきらちゃんが美早ちゃんと一緒に背後から攻める。少し反応が遅れた青の王はそれに対抗する。けど、青の王は片腕を失っているから、2人の攻撃に押されていく。

ナイト「ぐわっ!?!」

2人の重い一撃が入り、青の王は吹っ飛ぶ。でも青の王はすぐに体制を立て直して地面を滑る。

ナイト「畜生……。やばいな」

黒雪姫「諦めろ。いくらお前でもこの人数を相手にするのは無理だ」

ナイト「誰が諦めるか。言っておくが俺はまだ心意も必殺技も使ってねえぞ」

その言葉を聞いた瞬間、私たちは体を震わせる。何故ならあれだけの力を見せられたのにまだ必殺技を使っていないから。

化け物みたいな強さなのに、必殺技とかを一度も使っていないなんて……。

ナイト「ペインキアラ痛覚遮断」

楓子「わざわざ諸刃の剣まで使うなんて。本当にケリをつける気ね」

ナイト「ああ。これ以上の長期戦は無理だからな。一気にいかせてもらう」

そう言うと、剣を持ち直す。すると突然青の王は叫びだした。その声からは怒りのようなものを感じる。白雪ちゃんは何かに気づいたのか、私たちに逃げるように言う。

白雪姫「皆さん逃げてください!!これはブルーナイトの最強技『獅子吼滅』レオナルド・デストロイです!!」
青の王は叫び終わると、一番近くにいたレインちゃんを狙い始めた。私は咄嗟にレインちゃんの元へ走る。けど間に合わなかった。

ナイト「おおおおお!!!」

レイン「くう…!だ、だめ!!」

レインちゃんは両手の剣で対抗するけど、一撃が重すぎるのかすぐに押され始める。レインちゃんは耐えることができず、青の王に斬り刻まれる。間に合わない私はその光景を見ることしかできなかった。

レインちゃんのHPは0になってリメインライトになる。でも青の王は止まらない。周りのオブジェクトを破壊し続ける。そしてその矛先は私に向けられた。青の王は剣を大きく振り、私を薙ぎ払う。剣は私の体を深く斬り、重傷を負ってしまった。

楓子「アスナさん!!」

セブン「アスナちゃん!!」

チユリ「急いで回復させないと!!でも今回復させたらいっつまで!」

イリヤ「とにかくアスナさんを助けないと!!」

私のHPは徐々に減っていき、0に近づいていく。それと同時に意識も遠のいていく。

私はここで終わるの？ ユイちゃんを助けられずに終わるの？ 何もできないまま終わるの？ そんなの嫌……。 私は……。こいつを倒してユイちゃんを助ける!!

アスナ「ぐっ……。まだよ。まだおわつてないわ!!」

私のHPは0になる寸前で止まる。消えかけた意識もなんとか覚醒する。

チユリ「アスナさん!! 今回復させます!!」

イリヤ「その間に時間を稼ぎます!! 『夢幻召喚!!』」
インストール

イリヤちゃんはカードを取り出し、杖にかざす。するとイリヤちゃんの格好は白百合の騎士のようになる。両手にはアルトリアちゃんが持つてる剣のようなものがあつた。

イリヤ「えええいいいい!!」

イリヤちゃんは青の王に斬りかかる。暴走している青の王の剣と直角に戦えてる。でもどこか苦しそう。体格の差もあるのか少し押されてる。

イリヤ「アスナさんがどれほどユイちゃんのことを思ってるのかはわかりません。でも本当にその子のことが大事だつてことだけはわかります!! だから私は……。何も諦めない!!!」

イリヤちゃんが剣を上にかざすと、剣の周りに光が集まる。その光が剣を覆うとイリヤちゃんは一気に光を放つ。

イリヤ「エクスカリバー!!!」

ナイト「っ!？」

その光は一気に青の王を飲み込んだ。青の王を飲み込むと、光は柱のように空に上がった。一気に力を使ったせいなのか、イリヤちゃんの姿は元に戻った。

光は晴れると、空から青の王が降ってきた。理性は元に戻り、暴走はしてなかった。

ナイト「はは……こりゃ一本取られたぜ」

アスナ「まだよ」

私は青の王に近づき、そう言う。私も青の王もHPは少ない。だから私は彼にあることを提案する。

アスナ「青の王、最後に私と一騎打ちしましょう」

ナイト「……………正気か？」

アスナ「ええ。お互いのHPも残り少ない。もうこれで終わらせましょう」

ナイト「……ふっ。いいぜ。あんたのそういうところ気に入った」

アスナ「始まりはこの石が地面についたと同時に」

私は足元にあった石ころを拾い、青の王に見せる。彼も了承し、お互い武器を構える。私は石の上に投げ、その石は地面に当たる。それと同時に私と青の王はお互い接近する。ポロポロなのに彼の剣は速い。それでも私は負けない!!

ナイト「防いでばかりじゃ勝てないぜ!!」

アスナ「わかってるわよそんなこと!!!」

私は防御を捨てて、攻撃に入る。レイピアを腕や足、肩などいろいろな部位の神経を突く。青の王は体制を崩し、隙ができた。私はOSSで決めにいく。

アスナ「はあああ!!!」

そのOSSの名は『スターリイティアー』星を描くような突進技で青の王のHPを0にした。

ナイト「見事だ……」

その一言だけ言うと、彼は消えていった。こうして青の王との長い戦いが終わった。

第26話 VS緑の王

緑の王『グリーングランデ』と対峙するキリトたち。向こうから仕掛けると思いい武器を構えるが、全く動く気配がない。

リズ「動かないわね……」

式「動かないというか、あいつは俺たちを待つてるんだ」

式はそう言いながら一度ナイフをしまった。その意味を理解できないクラインは問いかける。

クライン「どういうことだ？」

式「俺たちが攻撃するのを待つてるってことだ。あいつは基本自分からいかないタイプだからな」

白夜「けど、こつちからいったらそれこそあいつの思うツボじゃないか？」

ティア「そんなに警戒してたら終わらないじゃない。先に私がいくから、隙をみたら畳み掛けなさい」

ティアは大剣を片手で持ち、グランデに歩み寄る。真正面から大剣を振り下ろした。

グランデは盾で防ぎ、ティアは大剣を押し込む。でもグランデはビクともせず軽く押し返した。

ティア「なんて硬さなの」

キリト「だから謡は一斉に攻撃しなきゃダメと言ってたのか」

謡「グリーングランデは王の中でも、バーストリンカーの中でも最強クラスと防御力を持つてるのです。単体で対抗できるのは青の王だけなのです」

数年前、グランデとナイトは本気の勝負をしたことがある。その勝負は辺りの建物などオブジェクトが完全に崩壊するくらいの規模が出るほどだった。全力の斬り込みをするナイトに対してグランデは盾で防ぐ。それだけで衝撃波が放たれて辺りが吹き飛んだくらいに軽い災害のようなものだった。お互いサドンデスだからHPは半分で終わったが。

キリト「よし、まずは俺からいくからその後にどんどん続いてくれ!!」

キリトは二刀流でグランデに立ち向かう。いきなり大技の『スターバーストストリーム』を放つ。もちろんグランデは全て防ぐが、ティアの時よりも少し防ぎ方が違った。

ジャンヌと式はそれにいち早く気づき、式はキリトに伝える。ジャンヌはキリトの元に走り出す。

グランデ「ダブル・ベイハック倍増返済」

キリト「何っ!?グハア!!」

キリトは吹き飛ばされ、いち早くキリトの元に駆けつけていたジャンヌが受け止める。キリトのHPは満タンから一気に2割まで減ってしまっていた。

キリト「な、何なんだ今のは……」

ジャンヌ「今のは『ダブル・ペイバック倍増返済』自分が防いだ分の攻撃を倍にして返す技です」

ハルユキ「キリトさんのあの技は大技だったから余計にダメージが大きいんですよ」
美遊「なら一撃必殺の技を跳ね返されたらおしまい」

白夜「いや、『ダブル・ペイバック倍増返済』の攻略法ならある」

その言葉を聞いたみんなは一斉に白夜の方を見る。その攻略法を全員が知りたいため、一斉に問いかける。白夜は一度みんなを落ち着かせてから話し始めた。

白夜「こつちから攻撃してあいつが『ダブル・ペイバック倍増返済』をしてきたらその直前で防御技を持つてる人が間に入って技を防ぐ」

マシユ「防御技を持つてるのは私と白夜さん、あとはジャンヌさんですね」

シノン「でもそんな都合よくいくの？」

ニコ「都合よくいくとかそんなんじゃないやねえ。やるんだよ!!」

キリト「よし!!みんないくぞ!!」

まずはキリトとハルユキが先頭に出て、攻撃を仕掛ける。もちろんグランデは全て防

いでいく。タイミングよくスイッチをして、今度はリスとティアが攻撃する。するとグランデは『ダブル・ペイバック倍増返済』の構えをした。それを見た白夜とマシユ、ジャンヌはとつさに2人の前に出て防御技を發動する。

白夜「ホロウシールド!!」

マシユ「ロード・カルデアス!!」

ジャンヌ「リユミノジテ・エテルネットル我が神はここに在りて!!」

グランデ「ダブル・ペイバック倍増返済」

3人は『ダブル・ペイバック倍増返済』を防ぐがそれでもダメージはある。なんとか防ぎきりすぐにスイッチをする。

白夜「スイッチ!」

ルクス「任せてください!!」

ルクスはOSS『ソードサイクロン』を發動し、グランデを竜巻に巻き込む。そして自分も竜巻の中に入り、風の勢いを利用し剣で斬りつけた。2人が竜巻から出てきたときにもう一度スイッチをする。

ルクス「スイッチ!」

式「斬り刻んでやるよ!」

式はアビリティ『直死の魔眼』を使い、グランデの死の線を見る。死の線を全て把握

するとその線に沿ってナイフで斬りつける。グランデの動きを封じるために脚を切断し、さらに片腕も切断した。残った右腕も切断しようとしたが、盾で弾かれてしまう。

式「チツ！あとちよつとだったのに……」

リズ「でもかなり弱らせたんじゃない？」

ティア「動きを封じて、さらに腕の自由も奪った。私たちの勝ちね」

ういうい「皆さん、油断は禁物なのです」

美遊「っ!?!皆さん、あれを見てください！」

美遊に言われてグランデを見ると、グランデの様子がおかしかった。まるで残った力を全て吐き出すような。

グランデ「パーセク・ウオーレル光年長城」

グランデは盾を地面に叩きつけると、その周りに緑色に光る厚い壁が突然現れた。キリトは試しに斬りつけるが、ビクともしなかつた。式も魔眼で見えるが、その壁には死そのものがなかつた。

式「死の線が視えない!?!」

ハルユキ「式さんの眼でも視えないんですか!?!」

人や物には必ず死がある。式の『直死の魔眼』はどんなものにもその死の線を見ることのできる。だがグランデの心意技『バニヒク・ウオーレル光年長城』には死そのものがなかつた。

死の線が視えないとわかった途端、ハルユキたちバーストリンカーは絶望的な状況だと推測した。

クライン「お、おいおい!?! どうしちまったんだよ!?!」

ジャンヌ「あの防御を破るなんて……」

ういうい「もう………不可能なのです」

ティア「そんなのやってみなきゃわかんないじゃない!!」

レミ「バーストリンカー最強の防御力を持つ緑の王の最強防衛技ですよ……」

バーストリンカーたちはもうほとんど諦めかけていた。彼らは緑の王がどんな人物かもよく知ってる。だからこそ、あの防御を破ることなんてできないと思ったのだろう。

それでもキリトたちは諦めるなんて選択肢は取らなかった。シノンにはハルユキたちに自分が思ったことを口に出した。

シノン「私たちはあなたたちの世界のことやプレイヤーのことなんて全然知らないわ。でも知らないからこそ、私たちはあなたたちが言ってる最強の防衛技を破ることができるって思ってる。私たちはそうやって乗り越えてきたからね。そうでしょ? キリト」

キリト「ああ。俺たちだって何度も諦めかけたことはあるさ。どうやっても勝てない

んじゃないか？色々思ったことはある。でも、それでも俺たちは最後まで諦めなかった。だって俺たちには互いに信頼し合える仲間がいるから。仲間と一緒にならどんな困難だって乗り越えられる。そう思って俺たちは戦ってきた」

美遊「私もそうです。私もイリヤやクロ、謡がいたから諦めずにやってこれた。それにイリヤが教えてくれた。『諦めるのはすごく簡単なことでその先にある後悔はすごく辛いことだって。私は後悔したくない。私はもう、何も諦めない!!』って。だから私もどんな壁が立ち塞がっても何も諦めない!!」

クライン「美遊ちゃんも小さいのに凄えなあ。俺感動で泣きそうだけぞ」
リズ「何馬鹿なこと言ってるのよ。さっさとこの壁をぶち壊すわよ!」

キリトたちは武器を持ち、美遊はカードの力でバースーカーに変身する。そして、グランデに立ち向かう。心意技に武器をぶつけるが、ビクともせず跳ね返される。それでも退かずに攻め続ける。それを後ろから見てたバーストリンカーは目に希望が戻ってきていた。

白夜「諦めない……か。こんなところで諦めてたら他のみんなに笑われちゃうな」
マシユ「そうですね。あの人たちがしっかりといい格好はさせられませんね」
レミ「緑の王を倒して奨真さんをビククリさせてやります!!」

ニコ「おめえら!!あいつらに負けねえように気合い入れていくぞ!!」

式「俺も後から加勢する。先にいっててくれ」

ういうい「何か考えがあるのですね。わかりましたのです！」

式を除いたバーストリンカーはキリトたちの加勢に入る。何度もスイッチを繰り返して、心意技に攻撃する。それでも心意技に傷一つ入らない。

ティア「こうなつたら……全員退きなさい!!」

ティアの言う通りにし、一度グランデから離れる。するとティアは大剣を両手で持ち直し、グランデにOSSで攻撃する。

ティア「ブレイクバースト!!」

大剣を思い切り叩きつけるとグランデのいる地面にヒビが入り、そのまま大剣の重さで巨大なクレーターができる。心意技にはほんの少しだけヒビが入っていた。

だがその反動でティアのHPは減り、しばらくの間動けなくなった。

ティア「あとは……任せたわ」

式「十分だ！唯識……直死！」

式の『直死の魔眼』はいつもと違う雰囲気が出ていた。そして式の手にはナイフではなく、刀が握られていた。

式「眼の力を限界まで上げた!!今のお前は継ぎ接ぎだらけだ!!」

式はグランデの目の前までいき、目に見えない速さで刀を振るう。グランデの

『パーセク・ウォール光年長城』は死の線を斬られ、バラバラに崩れていく。その隙を狙ってキリトが懐に入り、ソードスキルを放つ。

キリト「ジ・イクリプス!!!」

ういうい「キリトさん! そのまま押し切ってくださいなのです!!」

クライン「いけえ!! キリトお!!」

全員「いけえええ!!!」

キリトは最後の一撃を放つと、グランデは吹っ飛び壁に激突する。手に握られていた盾は地面に落ち、大きな音がる。

キリト「はあ……はあ……はあ……はあ……」

リズ「や、やったああ!!!」

ルクス「い、いえ! 待ってください!!」

レミ「まだHPが残ってますよ!」

クライン「ならトドメは俺が!!」

クラインはグランデにトドメをするために走り出す。ソードスキルを放とうとする
と、グランデは盾を持ち直してカウンターの準備をする。

ハルユキ「クラインさん!!」

誰もがクラインがカウンターを受けてしまうとと思ってた時だった。誰かが後ろから

キリトたちを飛び越えて剣を地面に刺して叫んだ。

??? 「咲け!! 青薔薇!!」

グランデ 「っ!?!」

クライン 「うお!?! な、なんだこれ!?! お、お、俺まで凍っちゃまう!?!」

??? 「すみません! 今だけ我慢してください!」

白夜 「な、なんだこの氷!?!」

ジャンヌ 「青い薔薇……でしようか?」

グランデとクラインの周りには水でできた青い薔薇が咲いて、あたりを凍らせていた。その技を使える人物を知ってるキリトは名前を呼ぶ。

キリト 「ティーゼ!?! それにロニエも!?!」

ロニエ 「キリト先輩、お話は後でお願いします! やあああ!!!」

ロニエはソードスキル『ソニッククープ』で凍りついたグランデを斬りつける。HPが僅かだったグランデはポリゴン状となり消滅した。キリトは何故2人がALOにいるのかを問いただした。

キリト 「なんでお前らが……。それにその剣はユージオの」

ティーゼ 「はい。ユージオ先輩の意思を引き継ぎ、この剣を使わせてもらってます」

キリト 「で、でもどうやってこの世界に……」

ロニエ「菊岡という人が私とティーゼにアリスさんと同じように別の世界で生活できるようにしてもらったのです」

シノン「ロボットってわけね」

キリトたちは話が盛り上がっているが、ハルユキたちはちんぷんかんぷんの様子だった。ニコはとりあえず説明を要求する。

キリト「紹介するよ。赤髪の彼女がティーゼ。そして薄い茶髪の彼女がロニエだ。2人とも別のVR世界で知り合ったんだ。まあその世界について説明すると恐ろしく長くなるんだけど……」

ロニエ「ロニエです。よろしくお願いします」

ティーゼ「ティーゼです。そしてこちらが青薔薇の剣です。よろしくお願いします」
2人はみんなに自己紹介をする。グランデが消滅した時にドロップしたオーブを取ると、式に異変が起きる。

式「ぐう……あがつ……」

ジャンヌ「式さん!?!」

マシユ「両眼を押さえています!どうしたんですか!?!」

式「『直死の魔眼』を限界まで上げたから……その反動だ……」

式は立ち上がるが、手を前に出してフラフラと歩き始める。まるで何かを触れようと

してるように。

白夜「お前……目が視えないのか？」

式「……………言っただろ？反動だつて。しばらくすれば視えるようになる」

ニコ「んなこと言ってるけどフラフラじゃねえか！」

リズ「肩貸すから、目が視えるようになるまで休んでなさい」

リズとシノンのは式の肩を担ぎ、ゆつくりとみんなのところへ歩み寄る。そしてキリトはロニエとティーゼにユイが封印されたことを説明する。もちろん2人は手伝うと言った。

ロニエ「生まれ変わった私たちの力、お貸しします！」

ティーゼ「私とこの青薔薇の剣も協力します！」

ハルユキ「そういえばその青薔薇の剣っていったい何なんですか？」

その質問をされたキリトとロニエとティーゼは暗い顔をし出した。それに対してハルユキは悪い質問をしたと感じ、慌てて謝る。

ハルユキ「す、すみません！無理には言いません!!」

キリト「……いや、大丈夫だ。この剣は、さつき言っただ別のVR世界で出会った俺の親友『ユージオ』が愛用してた剣なんだ」

白夜「それでそのユージオって人の剣がなんでティーゼが？」

マシユ「そういえばさつき『ユージオ先輩の意思を引き継ぎ、この剣を使わせてもらってます』って言ってましたが……」

ジャンヌ「まさか……」

ジャンヌは何かを察して、言葉を失った。その反応を見て、他のみんなも察した。

キリト「……………ユージオは……………。死んだんだ」

全員「っ!？」

ティーゼ「ですが、ユージオ先輩の意思はこの剣に込められています。そしてキリト先輩がこの剣を私に渡したのです」

ういうい「そんなことがあったのですか……」

美遊「でも、キリトさんの心は強いんですね」

キリト「いや、俺の心なんか全然弱いさ……」

リズ「ああもう!!せつかくあいつ倒したのに暗くなつてどうするのよ!!この話はまた今度!!」

リズは話を中断させて、街に戻るように言った。リズに続いて、みんな空洞から脱出する。その時だった。美遊が何かを思い出したようにみんなに言った。

美遊「あの……………そういえばクラインさんは？」

全員「……………あつ」

2周年記念 倉崎荘の管理人さん

レミ「えつと……地図だとたしかこの辺のような……」

立花伶弥は一人暮らしのため、下宿先を探していた。地図を見ながら歩いていると、それと思われる大きな建物があつた。

レミ「倉崎荘……。ここみたいね」

レミは扉を開けて中へ入ろうとすると、タイミングが悪かったのかとんでもない場面に遭遇する。その場面とは若い男女が玄関でキスをしていたのだ。

レミは反射的に扉を閉める。目をこすり、見間違いと自分に言い聞かせもう一度扉を開く。だが見間違いではなく、玄関では本当に若い男女がキスをしていた。

レミ「もう……こんなところ誰かに見られたらどうするの？」

レミ「その時はその時だ」

レミ「なななな………何やってるんですか!？」

レミ「あら?あなたはレミね。いらっしやい♪」

レミ「もしかして……見たのか？」

レミ「見ましたよ!!玄関でガツツリやられたら嫌でも目に入ります!!」
とりあえず突っ込むレミ。その時にふと気付いたのが、何故向こうは自分の名前を
知ってるだろうということだ。

レミ「あの、なんで私の名前」

楓子「親御さんから聞いたわ。私は倉崎楓子。ここの管理人よ」

奨真「俺は橘奨真。同じく管理人だ」

レミ「ご丁寧にどうも……。立花伶弥です。よろしくお願いします」

レミは中に入り、楓子と奨真に部屋を案内してもらう。103号室と書かれた部屋を
中に入るとベッドと机、棚が置かれていた。

レミ「凄い……。一通り揃ってる」

奨真「クローゼットに着替えとかを自由に入れたらいいからな。後飯は決まった時間
にリビングで食べるようになってるぞ」

レミ「わかりました」

楓子と奨真はリビングに向かい、レミはキャリーバッグの中身を整理する。整理が終
わり、リビングに向かう。

扉を開くと、そこにはソファに座ってテレビを見てる奨真とキッチンで何か作業をし
てる楓子がいた。

レミ「リビング広いですね〜」

楓子「この建物自体大きいから、リビングも広めなのよ」

レミ「へえ〜」

奨真「楓子。課題は終わったのか？」

楓子「あっ!?!忘れてたわ……」

レミ「課題？」

奨真「学校のだ」

レミ「えっ!?!お二人って学生なんですか!?!」

奨真「そうだぞ? 何だと思っただけだ?」

レミ「いやいやいや!?!たしかに管理人さんにしては若すぎると思っていましたけど、それでも20前半だと……。というか学生が管理人っていいんですか?」

楓子「元々は私の母が管理人だったのよ。でも父の都合で遠くに行かなきゃいけないことになって、代わりに私が管理人をしてるのよ」

奨真「俺はこのこの住人だったからその流れで俺も管理人になった」

レミは驚きながらもそれを受け入れる。誰だって驚くだろう。高校生が管理人なのだから。その時、玄関の扉が開いて誰かが帰ってきた。その人物はそのまま玄関に入ってくる。黒い服を着て、顔色が普通の人よりも悪く見えるような人物。

オルタ「ただいま。つてあんた誰？」

レミ「は、初めまして！今日からお世話になります、立花伶弥です！」

オルタ「ふーん」

楓子「オルタ。ちゃんと自己紹介しなさい」

オルタ「うっ……、ジャンヌ・ダルク・オルタ。オルタって呼びなさい」

オルタは自己紹介すると冷蔵庫から牛乳パックを取り出す。椅子に座るとパックに口をつけて飲み始める。

奨真「オルタは俺と楓子の一つ下だ。ツンツンしてるがいいやつだから仲良くしてやってくれ」

オルタ「ツンツンは余計よ」

レミも椅子に座ってゆっくりしていると、また誰かが帰ってきた。レミよりも小柄で、見た目はまさに小動物といってもいいくらいだった。

綸「た、ただいま……」

楓子「おかえり、早かったわね」

綸「目当ての本が……すぐに見つかつたので……。あの……こちらの人は……？」

レミはオルタにした時と同じように自己紹介した。すると綸は緊張しながら自己紹介する。

繪「く、日下部繪……です。よ、よろしく……お願いします」

奨真「繪はレミの一つ下になるな。小動物みたいで可愛いだろ？」

繪「は、はうう……」

レミ「すみません、出会って全然経ってませんがあなたのこと天然タラシって呼んでもいいですか？」

奨真「何でだよ……」

奨真はイケメンだけじゃなく、平気でこういうことを言うため一部の人は『天然タラシ』と呼ばれている。こういうことを言われた女の子はすぐに落ちてしまうらしい。

楓子「もうすぐ晩御飯の時間だけど、他のみんなはご飯いるのかしら？」

奨真「サツチとニコはいるってメール来たぞ」

楓子「じゃあ全員分ね。奨真君、手伝って？」

奨真「はいよ」

奨真は楓子に頼まれた通り、キッチンに入って晩御飯を作る手伝いをする。晩御飯ができるまでの間、レミは繪と話していた。

レミ「そういえば奨真さんと楓子さんってどういう関係ですか？実は玄関でキスしてるのを見てしまったんですけど」

繪「あ……見てしまったん……ですね。私も……ここでの暮らし初日に……玄関で……見たんです……」

オルタ「あれはもう偶然じゃない気がするわ。私も見たからね」

レミ「オルタさんも見たんですね。それで2人の関係は？」

オルタ「夫婦という名のバカカップル」

レミ「恋人関係ですね」

オルタ「いや何かツツコミなさいよ」

少し拗ねてるオルタをスルーしてまた話し始める。しばらくしてから誰かが帰って来て、リビングに入ってきた。入ってきたのは全身黒の服で覆われた少女と赤髪の少女だった。

ニコ「黒いの！次こそは勝つからね！」

黒雪姫「フツ……いつでもかかってこい」

この2人は先ほどまでゲームセンターでゲーム対決をしていたらしい。戦績は5対4で黒雪姫の勝利。

2人は新入りのレミを見ると自己紹介する。レミも自己紹介をしてソファに座る。5人がくつろいで暫くすると、晩御飯が出来上がり、テーブルにおかずが並べられる。

レミ「うわあ！美味しそう!!」

奨真 「楓子の料理はそこらの飲食店には負けないからな」

レミ 「ちなみに奨真さんはどれを作ったんですか？」

奨真 「……………野菜を切っただけ」

オルタ 「奨真はここまで手の込んだ料理はできないからね」

ニコ 「料理音痴ではないんだがな」

机に並べられたのは野菜炒めと唐揚げ、そして一人一人に卵焼きと味噌汁が置かれていた。レミは野菜炒めを口に含む。

レミ 「っ!? 美味しい!!」

楓子 「口にあつてよかったわ。いっぱいあるからどんどん食べてね!」

みんな野菜とお肉をバランスよく食べる。そんなに時間は経っていないのに、おかずとご飯は空になってしまった。それほど楓子の手料理は美味しいのだろう。

レミ 「はあく美味しかった」

オルタ 「さて、食べ終わったし恒例の『アレ』でもやりますか」

奨真 「はいはい。準備するからちよつと待て」

奨真は立ち上がり、テレビのところに向かってケーブルのようなものを繋げる。テレビに繋がれたのは大人気ゲーム機だった。

レミ 「あのかから何を？」

黒雪姫「新しい子が入居してきた時は決まってこれをやるのさ」

レミはその『アレ』や『これ』が何かわかっていなかった。頭の中をハテナにしていると、綸が何なのか教えてくれた。

綸「スマブラです」

レミ「スマブラ!?!」

楓子「親睦会を兼ねてね。lon1のトーナメントよ」

オルタ「言っておくけど、全員強いわよ」

倉崎荘の住人は全員スマブラ経験者のため実力もかなりある。初心者の方はまず勝てないだろう。だがレミは違う。レミは以前からスマブラを経験している。

レミ「私も強いですから!」

奨真「よし。繋いだし、早速くじ引きでトーナメントを決めるぞ」

手作りのくじ引きの箱に新しくレミの名前が書かれた紙を入れてくじを引く。一回戦はニコVS奨真、オルタVSレミ、楓子VS黒雪姫、そしてシード枠に綸となった。

ルールはシンプルだ。ストック3でステージは終点。時間は無制限でアイテムなしだ。

ニコ「勝たせてもらうぜ!」

奨真「一回でも勝つてから言いな!」

ニコはサムス、奨真はロイを選択する。カウン트가0になって大乱闘が始まった。ニコは遠距離で攻めるが、奨真はそれをガードしたり避けたりして距離を詰めた。

ニコ「かかった！」

ニコはあらかじめチャージショットを溜めていて、接近されると同時に撃つ。だが奨真はニコのその癖を知ってるためカウンターを使う。

奨真「後は空中戦をするだけ」

吹っ飛んだサムスをロイが空中で何度も追い打ちをかける。やがてサムスは画面外に吹っ飛ぶ。

そこからニコも攻めるが、やっぱり奨真には敵わず3対0で奨真が勝つ。

ニコ「だあああくそ!!何で奨真には勝てねえんだよ!!」

奨真「ニコはわかりやすいんだよ……」

次はオルタとレミの番。オルタはアイク、レミはシークを選んだ。

オルタ「吹っ飛ばしてあげるわ!」

レミ「もともとそういうゲームですよ!!」

レミは速さで攻め、オルタは力で攻める。攻撃回数はレミの方が多いが、一発一発のダメージが小さい。それに対するオルタは連続技じゃないが一撃が重い。だから一発くらいだけで大ダメージになる。

オルタの方が有利に近いが、そんなオルタにも欠点がある。それは追い打ちと掴み技に弱い。レミは近づいて攻撃される前に掴み技で攻撃する。吹っ飛んだ後に追い打ちをかけにいくが、オルタも反撃する。

かなりの接戦になったが、結果は1対0でレミの勝ち。オルタはかなり悔しそうにしていた。

オルタ「まさかこの私が……」

レミ「あ……危なかった」

楓子「なかなかやるわね。次は私とサツちゃんね」

次は楓子と黒雪姫。どちらかが勝てば、シード枠の綸と戦うことができる。楓子はルカリオ、黒雪姫はマルスを選んだ。

ルカリオはダメージが蓄積されればされるほど強くなる。楓子はそれを頭に入れ、少しずつダメージを稼ぐ。マルスは剣先が一番威力が高いため、黒雪姫は剣先を頭に入れながら攻撃する。

それからは本当にどっちが勝ってもおかしくなくらしいの接戦だった。マルスが強攻撃すればルカリオのカウンターをくらう。それで倒しても復帰したマルスに一撃をくらって、た振り出しに戻る。

その繰り返しで残りストック1になった。互いのダメージは100を超えていて、

少しでも強い一撃をくらえば終わりだった。最後の1撃はほぼ同時に放たれたが、ほんの少しだけルカリオの方が早かった。

結果は楓子の勝利。シード枠の綸と戦うことができるのだ。

レミ「キャラの特性を活かしてましたね〜」

奨真「ピンチになったルカリオは化け物みたいに強いな……」

次は2回戦、奨真とレミ。キャラは変わらずにそのまま始まる。奨真はカウンターと強攻撃。レミはとにかく速さとトリツキーな動き。

それから……以下略。

結果はレミのギリギリ勝利。

奨真「お前相当やり込んでるだろ」

レミ「さあ? どうでしょうね〜」

そして次は楓子と綸。綸はピカチュウを選ぶ。綸のピカチュウは掴み技からのかみなりを当てるのがものすごくうまい。それだけじゃなく、とにかく掴み技がうまいのだ。避けたと思っても掴みの方が早かったりする。

楓子「やるわね綸」

綸「楓子師匠には……負けません……から」

今は綸が押している。けど楓子のルカリオはダメージを蓄積している。そしてピカチュウは軽量級。タメ技をくらはば無事では済まないだろう。

もちろん綸はそれを頭に入れ、早く倒そうとする。だが焦ったのか楓子に行動を読まれてしまい、見事にカウンターをくらってしまった。ピカチュウは吹っ飛び、ストックが2になる。

最終的には楓子がストック2残して勝利。決勝はレミと楓子となる。

レミ「綸ちゃんのピカチュウ強いですね!」

ニコ「アタシのサムス相手だと近づけないがな!」

楓子「さて、レミ。手は抜かないわよ」

レミ「望むところです!」

レミは速さで、楓子はダメージを受けながら徐々に攻撃する。ダメージが蓄積されたルカリオは掴み技を仕掛けるが、シークは緊急回避で避ける。そして掴み技で攻撃して上に投げる。チャンスと思いきやジャンプして攻撃するが、ルカリオはカウンターをする。シークは吹っ飛んでストックが減ったが、カウンターの勢いがありすぎたのか、そのまま画面外にいつてしまった。

制限時間があれば間違いなくサドンデスになるだろうが、ルールは無制限。決着がつ

くまで終わらない。約10分の激闘が終わり、決着がついた。

結果はギリギリで楓子の勝ち。レミはルカリオの横必殺技を掴まれた状態でくらったため、画面外に吹っ飛んでしまったのだ。

レミ「あー悔しいです!!」

楓子「惜しかったけど、まだまだだね♪」

奨真「それでレミ。楽しかったか？」

レミ「はい! すごく楽しかったです!」

楓子「これからよろしくね」

レミ「こ、こちらこそよろしくお願いします!」

その後ゲームは片付けて、もう夜も遅いため各自の部屋で寝ることとなった。だがレミは隣の管理人室から何か聞こえてため、いろんな意味で寝れなかったらしい。

数日後……

日付は6月の後半。期末テストの時期だ。レミは休日も机の上でテスト勉強。早速始めようとした時、携帯が鳴る。

レミ「誰だろう？」

電話の相手は有田春雪と書かれていた。レミは画面を横にスライドして電話に出る。

レミ「もしもーし？」

ハルユキ「あ、レミさん！今時間ありますか？」

レミ「これからテスト勉強しようと思ってたんだけど、めんどくさいんだよね」

ハルユキ「あ、あの！お願いがありました……」

レミ「なにになに？お姉さんが叶えてあげよう」

ハルユキ「ぼ、僕とタク、チュに勉強を教えてください!!」

レミ「それくらい全然いいよ。私がそっちにいった方がいい？」

ハルユキ「僕たちがそっちに行きますよ！お菓子とかも持っていきます！」

レミ「じゃあ待つてるね」

そう言つてレミは電話を切る。いつ来てもいいように部屋を片付ける。もともと部

「屋は綺麗なほうなのでどこを片付けるのかはわからないが。

来客用の小さい机を出していると、楓子が部屋に入ってきて来た。

楓子「あら？誰か来るの？」

レミ「ハルユキ君たちが勉強教えて欲しいって言ってきたので部屋で勉強会です」

楓子「そうなのね。なら後でお茶とか持ってくるわ」

楓子はニコリと笑って部屋から退出する。レミは準備を終えてベッドでくつろぐ。しばらくしてから玄関のベルが鳴る。レミは玄関に向かうと、もう楓子が出迎えていた。

楓子「こんにちは、鴉さん。タクム君とチユリちゃんも」

3人「こんにちは！」

レミ「いらつしやい！部屋に案内するよ！」

レミは3人を部屋に入れて、クッションも用意する。3人はクッションの上に座り、教材を取り出す。

タクム「今日はよろしくお願いします」

レミ「タクム君が勉強を教えてほしいって意外だね」

タクム「英語が少しだけ不安なので……」

チユリ「私なんて国語と社会以外全くだもん……」

ハルユキ「タクとチュはまだいいじゃん……。俺なんか全部わかんねえよ」

レミ「うーん……。私1人で教えきれるかなあ……」

レミの学力は良いか悪いかで言われると良いほうだ。けど人に教えるとなるとそれなりに限界はある。どうしようか考えてると、ちょうど楓子がお茶とコップを持って部屋に入ってきた。

楓子「お茶ここに置いておくわね」

レミ「あつ！ 楓子さん！ 3人に勉強教えるの手伝ってください！」

楓子「えっ？ いいけど……。あ、そうねえ。さっきまでジャンヌとお茶してたからジャンヌにも手伝ってもらおうかしら」

楓子はリビングにいるジャンヌを呼びに行く。部屋を出てそんなに立ってないのに、楓子はジャンヌを連れて戻ってきた。

ジャンヌ「楓子ちゃんから聞きました。数学以外は教えることができるので、わからないところがあれば言ってください」

レミはチュリに、ジャンヌはタクムに、楓子はハルユキに勉強を教えることとなった。ここまではよかつたのだが、6人で勉強会をやるため、レミの部屋にあった小さい机1つでは狭すぎる。だから楓子は自分の部屋から小さい机をもう1つ持ってきて、それをつくつけた。

チユリ「レミさん、この問題ってどうやって解くんですか？」

レミ「これは2ページ前に使った公式を使って……」

ジャンヌ「あ、タクム君。このスペル間違ってるよ」

タクム「え、本当だ……」

楓子「鴉さん、国語はまず文章をよく理解するんですよ」

ハルユキ「うう……頭が痛くなる……」

幼馴染3人はそれぞれ勉強を教えてもらってしばらく経った。ハルユキはふと顔を上げると窓に何かが上から降ってくるのが見えた。ガシャツと音がして、全員が反応した。レミとジャンヌ、楓子はこの音が何なのかよく知っているが、3人は何なのか知らない。3人は窓から顔を出して下を見ると、そこには人の腕が落ちていた。

ハルユキ「ひい!?う、腕!？」

チユリ「で、でででもガシャツて言ったよ!？」

タクム「どう見ても人の腕だよ!？」

3人は驚いていると、上から人の声が聞こえてきた。釣られて上を見上げると、そこには屋根の上にいる奨真がいた。

奨真「そこに俺の腕落ちてないか？」

ハルユキ「こここれって奨真さんの腕ですか!？」

チユリ「奨真さんってロボットですか!？」

奨真「誰がロボットだ!」

レミ「とりあえず、何で腕が落ちてくるんですか!!今日は屋根で何やってたんですか!!」

奨真「屋根の修理だよ!!それで腕はネジが取れて外れたんだよ!!」

レミ「とにかく投げますよ!!」

レミはいつのまにか外に出ていて、上にいる奨真めがけて思い切り投げる。奨真は片手でキャッチして修理にもどった。

タクム「そ、それより奨真さんのあの腕は?」

楓子「あれは義手よ。奨真君は昔事故で片腕をなくしちゃってね……」

ハルユキ「そ、そうだったんですね……」

ジャンヌ「平気で屋根の修理に戻ったみたいだけど、大丈夫なの?」

楓子「白夜君に連絡するわ……。紺野先生は今日休みだし……」

楓子は携帯で白夜に電話をかける。電話してからしばらくすると、白夜とあきらがやってきた。あきららは楓子が白夜に電話をかけた時、その場にいたらしい。

楓子「ごめんね白夜君。奨真君の手伝いお願いできる?」

白夜「任せとけ!」

楓子「あきらまも暇になると思うし、よかつたら勉強会に参加する？」

あきら「私でよければ」

あきららは3人の誰かに着くんじやなく、教えてるレミたちのサポートに回った。数時間後、あたりは夕陽で赤くなつてきていた。

ハルユキ「つ、疲れたあ……。もう頭が爆発しそう……」

チユリ「これで今回のテストも大丈夫そうです！」

タクム「今日はありがとうございます！」

3人は倉崎荘を出て、それぞれの家に帰っていった。4人はリビングに移動すると、そこには屋根の修理が終わつた奨真と白夜がいた。机の上には奨真の義手が置かれていた。

奨真「今日の飯どうやって食べるか……」

楓子「私が食べさせてあげるよ！」

奨真「嬉しいけど、またあの目で見られるのか……」

レミは知らないが、以前もこういうことがあり、その時は楓子が奨真に食べさせてあげていた。だが他の4人がジツと奨真を見ていたため、奨真はその目線に耐えられなかつたらしい。論は羨ましそうに見ていたという。

レミ「へえ〜」

奨真「おい待てレミ。俺はまだ何もしてもらってない。だからそんな目で見るな」
レミは奨真をジト目で見る。やはり奨真はその目線には耐えれないみたいだ。白夜とあきらも苦笑いをしていた。

奨真「一応紺野先生のところに行くよ」

楓子「義手落とさないように気をつけてね！」

奨真「わかってるよ！」

奨真は靴を履いて紺野先生がいる病院へ向かった。そしてちようど入れ違いで美早がやってきた。その手には自分の店のケーキが入った袋があった。

美早「楓子、今日いっぱいケーキが売れ残ったから持ってきた」

楓子「あらあら、わざわざありがとう！」

美早「賞味期限はもちろん今日まで。早めに食べることをお勧めする」

ジャンヌ「私たちも食べていいんですか？」

美早「もちろん」

白夜「ありがたくいただくぜ！」

あきら「いただきますなの」

ジャンヌと白夜はチーズケーキ、あきらは苺のショートケーキを取る。レミもケーキに手を伸ばしてチョコケーキを手取る。楓子はモンブランを取り、奨真の分はミル

フィーユを取る。早速一口食べると、口の中はケーキの甘さがいっぱい広がる。

あきら「やっぱりミヤアのケーキが一番なの」

レミ「おいひい！いくらでも食べれそう！」

それからは皆ケーキを食べるのに夢中になる。数分後、自分達が取ったケーキを食べ終えて、美早も家に帰っていった。ジャンヌも家で晩御飯を作らなきやいけないため先に帰った。白夜とあきは奨真が戻ってきたら帰るらしい。

レミ「そういえばお二人ってどういう関係ですか？」

あきら「恋人同士なの」

レミ「へえ〜……………えっ!？」

レミは一瞬驚いたが、すぐに落ち着きを取り戻す。なんとなくそんな風に見えていたようだったらしい。そんな会話をしていると奨真が誰か連れて帰ってきた。

奨真「お前も暇なのか？」

???「暇じゃないよ？生徒会の仕事もあるし剣道もあるし」

奨真「放つたらかしていいのかよ…………」

そのままリビングに入ると、楓子とジャンヌ、白夜がもう1人の人物に気づいた。他の2人は誰なのかさっぱり様子だった。

奨真「2人は初めてだな。俺の学校の生徒会に所属してる紺野悠花だ。俺が普段世話

になつてゐる紺野先生の娘なんだ」

悠花「紺野悠花です。よろしくお願いします」

レミ「ご、ご丁寧にどうも……」

この時レミは思った。悠花の容姿がスマブラに出てくるカムイ（女）にそっくりなのだ。

楓子「帰りに会つたの？」

悠花「ええ。せつかくですしこちらに遊びに行こうと思つて」

楓子「そうなのね！なら晩御飯も食べてく？」

悠花「迷惑にならないなら！」

楓子は台所に行き、悠花も楓子の手伝いをしに行つた。

白夜「さてと、俺らも帰るわ」

奨真「おう！お疲れ」

白夜とあきららは一緒に帰つた。入れ違いで黒雪姫たちが帰つてきた。

オルタ「げっ！生徒会じゃない」

悠花「うふふ、オルタちゃん。何が『げっ！』なのかな？」

悠花はニコニコと笑っているが、雰囲気はまるで笑っていないかつた。それも楓子と同じくらいの寒気がするほど。そしてオルタは逃げるように部屋に向かつた。

奨真「あいつを弄るのも程々にしろよ」

悠花「だつてえー。あの子の反応可愛いから♪」

ニコ「ツンデレの反応が可愛いっていう理由でかよ……」

悠花は引き続き楓子の手伝いをする。日頃のから紺野先生の手伝いをしてるからなのか、手際がいい。楓子もかなり楽に準備できたらしく、おかげが全て出来上がった。

オルタも戻ってきて、全員席について晩御飯を食べた。悠花の手伝いもあつたせいか、いつもよりも美味しく感じた。あつという間におかずは無くなり、食器を片付け始めた。

悠花「オルタちゃん。前も言ったけど制服はちゃんと着なきやダメだよ。校則違反だからね」

レミ「どんな風に着てるんです？」

悠花「胸元を開いてスカートの丈も短いよ。女の子なんだから視線とか気にしないと」

オルタ「あの制服キツイのよ」

レミ「なんかもう男子からの視線を集めてるようにしか思えないんですけど」

オルタ「んなわけないでしょ、燃やすわよ」

3人がそんなやりとりをしてると、ソファでくつろいでる奨真と楓子は、奨真の義手

を触っていた。

楓子「ネジもしつかりと締まってるし、当分は大丈夫じゃない？」

奨真「その辺は心配ないんだけど……」

レミ「何が心配なんです？」

奨真「変な機能がついてるかどうか……」

悠花「お母さんそういうの好きだからね」

紺野先生はよく奨真の義手を調整したりしている。元々この辺りの病院には義手などの調整ができる医者には紺野先生しかいないが。その紺野先生はいたずら好きでよく奨真の義手に変な機能をつけようとする。

奨真「前は手から味噌汁が出てきたからな……。何も無いことを願う」

レミ「それはそれで面白いです」

オルタ「その味噌汁は私が美味しくいただいたわ。次も出てきたら食べてあげるから感謝しなさい」

黒雪姫「手がトランスフォームしたらいいな」

ニコ「おお！お前もそう思うか！」

綸「私は……ロケットパンチ……」

奨真「なんで機能がついてる前提なんだよ……」

悠花「うふふ♪楓子ちゃん♪」

楓子「ええ♪」

悠花と楓子はそれだけ言うと、楓子は前から、悠花は後ろから奨真を抑える。奨真は抵抗しようとするが、前後から楓子と悠花の胸が当たってるためうまく力が入らない。楓子はもちろん学校で一番大きい方に入るが、悠花もそれなりにある。

奨真（2人の胸が……あ、当たって……）

そしてレミに奨真の義手についてる不思議なボタンを押すように言う。

レミ「これですね」ポチッ

奨真「ば、馬鹿!!」

奨真の義手はガタガタと変な音を出し始める。奨真は2人の高速から抜け出しすぐに庭に出て義手を古い物置に向ける。その時、義手は物凄い勢いのロケットパンチを放って古い物置に激突する。当然物置は壊れた。

綸「凄……本当に……ロケットパンチ」

悠花「ねえ楓子ちゃん。さっきの奨真君の反応って」

楓子「そうね。興奮してたね」

オルタ「うわっ」

奨真「してるか!!」

レミは義手を取りに行く、その義手の中から一枚の紙が出てきた。それと義手を
持つて奨真に渡す。紙に書かれていたのは。

『どお？ 楽しめた！ 楽しめたようね。だつてロケットパンチだよ！ 男の子なら誰もが
憧れるロケットパンチだもんね〜！ あ、義手は簡単につけれる仕組みになつてから安
心してね！ 紺野先生より』

という紺野先生がいかにも言いそうな感じが書かれていた。

奨真「楽しめてねえ!!!」

楓子「じゃあこの後私と楽しむ？」

奨真「それも今言うことじゃねえ!!」

ニコ「おいおい近所迷惑だぞ？」

レミ「それなんですけどエキサイトするなら音量落としてくださいね」

悠花「それくらい激しいのね♪」

オルタ「不純異性行為は許していいの!？」

悠花「それは特に気にしないので」

オルタ「それなら私の制服も許しなさいよ!!」

悠花「それはダメ」

そんな感じで適当に会話していると、綸が大きなあくびをした。時間はもう遅くなって

いてそろそろ寝る時間だった。

繪「私……そろそろ……寝ます」

ニコ「あたしも寝るわ」

黒雪姫「私は学校の課題を終わらせてから寝るとしよう」

オルタ「私はまだ寝ないわ」

奨真「悠花はどうするんだ？帰るなら送るけど」

悠花「ここに泊まるよ。お母さんにも言つてあるから」

楓子「部屋はいっぱい空いてるから好きなどころ使つてね」

悠花「ありがとう！あ、奨真君。楓子ちゃんを襲うのは全然構わないけど、間違つて

も私を襲いには来ないでね？」

奨真「行くかアホ!!お前俺で楽しんでるだろ!!」

楓子「奨真君？もし悠花を襲いに行つたり襲つたりしたら……どうなるかわかつてる

よね？」

奨真「襲わねえって!!襲うんだつたら俺は楓子しか襲わねえ!!」

この一言で場は一気に静かになる。それもそうだ。いきなり奨真が爆弾発言をしたからだ。黒雪姫、オルタ、悠花、レミは『なんで平気でこんなこと言えるんだろう』という感じで見て、楓子はまさかそんなことを言われるとは思つてなかつたみたいで顔を

赤くしていた。しばらくして奨真はようやく自分が何を言ったのか理解した。

奨真「あ、いや、これは……」

奨真が何を言えばいいか困っていると、楓子は奨真の手を引つ張つて管理人室に入つていった。

悠花「これからエキサイトするのかな？」

レミ「満面の笑みで言っちゃいますそれ」

オルタ「レミ、私の部屋ベッド一つしかないけど今夜だけ私の部屋で寝る？」

レミ「えっ？」

オルタ「あんたの部屋管理人室の隣でしょ？もしエキサイトしてるなら聞こえると思うし。あ、寝てる時変なところ触ったら燃やすから」

レミ「嬉しいですけどそれはなんか酷いような……。あと燃やしたら火事ですからね」

それからしばらくして、リビングでくつろいでたレミとオルタ、悠花の3人は部屋に戻る。レミは枕を取りに部屋に向かうと管理人室から声が聞こえた。

※中で何言ってるのかは言えないので想像でお楽しみください

レミ「エキサイトしてる……。早く枕とってオルタさんの部屋に行こ」

そしてレミは枕を手に取り、オルタの部屋に向かったのだった。

数ヶ月後……。

12月の末、そして年末でもある。どこの学校ももう冬休みに入っていて倉崎荘の住人はもちろん住人の友人もみんな家の中にいる。

レミ「こたついいですね〜」

綸「はい……あつたかいです」

白雪姫「2人ともダラけすぎですよ〜」

レミ「白雪さんも人のこと言えないですよ〜」

白雪姫もこたつの力に負けてかなりダラけてしまっている。リビングのこたつは大きめのものなので大人数で入ることもできる。

マシユ「今日は一段と寒いですね」

アルトリア「そうですね。雪が降ってもおかしくないですよ」

謡「雪が降ったら雪だるま作るので」

レミ「そういうえば大晦日ってこんなに人が集まるんですか？」

楓子「そうよ。大晦日は集まって年越しそばを食べるのよ」

奨真「今式と藤乃と蓮とリサが材料買いに行ってるからな」

この4人は倉崎荘に来る途中で材料を買ってから来るとの連絡があった。その間は机などの準備をする。準備が終わって今はくつろいでいるのだ。

アルトリア「ところでマシユ、どうすればあなたのように胸が大きくなるのですか」

マシユ「えっ？ええっ!？」

黒雪姫「ほほう、それは私も気になる」

アルトリアと黒雪姫はマシユに少しずつ近づいていく。その2人が近づくとたびにマシユは距離をとる。背中が壁についた時、逃げ場がなくなった。そしてアルトリアはマシユの胸を鷲掴みした。

マシユ「ひゃあ!？」

アルトリア「揉んだんですか!!それとも揉まれたんですか!!」

マシユ「な、なんで揉むこと前提なんですか!!そ、それより離してください!!」

アルトリア「それとも迷信と言われている牛乳ですか!!」

マシユ「わ、私は……特に何もして……ないです!」

黒雪姫もアルトリアに続こうとするが、こたつから出た白雪姫に止められる。

白雪姫「サツちゃん落ち着いて!!」

黒雪姫「なら姉さん!!どうすれば胸が大きくなるんだ!!」

白雪姫「わ、私も知りたいよ!!私も……小さいし」

黒雪姫「ほう?それは妹の私に喧嘩を売ってるのか?」

白雪姫の胸は黒雪姫よりも普通に大きい。というか平均サイズである。貧乳の部類に入るのは黒雪姫とアルトリア、そして今この場にはない式だけである。

リサ「こんにちは」

藤乃「お邪魔します」

蓮「失礼する」

式「邪魔するぜ」

騒いでると4人がリビングにやってきた。アルトリアと黒雪姫は式を見つけると一目散に駆けつけた。式はなんなのか全くわからなくて混乱していた。

式「な、なんだよ」

黒雪姫「式、君は胸を大きくしたいか？」

式「はっ？」

アルトリア「私たちはマシユにどうすれば胸が大きくなるのか聞いていたのだ」

式「そ、そうか。それでなんでマシユなんだ？胸なら楓子が一番デカイだろ」

アルトリア「あれは次元が違います。それよりも知りたくないんですか？」

式「別に。俺はそんなこと気にしないし気にしたこともない」

アルトリア「そうですか……。よし、黒雪。再開しますよ」

黒雪姫「ああ」

式「何さりげなくマシユのところに行こうとしてる。マシユのやつ怖がつてるだろ」

アルトリア「それなら藤乃」

式「藤乃にも行くな。お前らは大人しくしてろ」

式はアルトリアと黒雪姫を椅子に座らせた。そして2人の前に座って楓子が入れた

コーヒーを飲みながら監視する。

リサ「あはは……なんか大変だったみたいだね」

マシユ「全くです……」

蓮「楓子、いつから作り始めるんだ？」

楓子「そうねえ……。6時半ごろが丁度いいかしらね」

蓮「わかった」

場所は変わってハルユキたちのところ。ハルユキとタクム、チユリとあきら、白夜と美早の6人はトランプをしていた。トランプゲームは大富豪。

あきら「あがりなの」

美早「私もあがり」

白夜「2人連続あがりかよ」

タクム「どうしよう……。僕の手札全然減らない」

ハルユキ「あ、あがれた！」

チユリ「えっ!? ちょっとハル!ズルしたんじゃないでしょうね!」

ハルユキ「んなことするかよ!!チユリじゃあるまいし!」

チユリ「なんですって!!」

白夜「お、落ち着けて……」

それからは3人の白熱した勝負が繰り広げられる。結果はチユリ、白夜、タクムの順番であがった。

タクム「ま、負けた……」

チユリ「タツくん罰ゲーム!最下位は一位に年越しそばの天ぷらを1つあげる!」

あきら「タクム君いただきますなの」

タクム「それくらい全然構わないですよ」

それぞれが時間を潰していると、6時半になる。楓子と蓮は年越しそばを作る準備をする。2人が作ってる間に他のみんなは風呂に入りに行く。女性陣が最初に入って男性陣が後から入ることとなっている。

蓮「楓子、下準備は俺がやるから入ってくるんだ」

楓子「わかったわ」

女性陣は着替えとタオルを持って大浴場へと向かう。脱衣場で服を脱ぎ終わると大浴場に入る。まずは順番に体を洗い、最後に湯船に浸かる。

レミ「気持ちいいですね」

楓子「そうですね」

レミと楓子は隣同士で座る。レミはふと楓子の体をジッと見る。やっぱり自分とは全然違って大人っぽかった。特に胸に関しては。

レミ「本当に大きいですよね？」

レミは思わず楓子の胸を突いてしまう。楓子は苦笑いしながらレミにデコピンをした。

楓子「こーら。突いたらダメでしょ？」

レミ「ご、ごめんなさい」

突くのをやめてゆっくりとくつろぐ。その時レミは楓子の胸について思い出した。

レミ（柔らかかった。それだけじゃなくて弾力もある。もしかして奨真さんはエキサイトする時いつもあれを……）

楓子「さて、早くでて蓮君の手伝いしなきゃ」

レミ「あ、私も出ます」

楓子とレミは誰よりも早く出て、脱衣場で体を拭く。寝巻きに着替えてリビングに向かった。

楓子は台所に入り、レミはソファに座る。ゆっくりしていると女性陣みんな戻ってきて、入れ違いで男性陣も大浴場に向かった。

男性の入浴は女性よりも早く、10分程度で戻ってきた。蓮が戻る頃には半分以上の年越しそばが出来上がっていて、蓮も加入するとあつという間に出来上がった。みんなじゆうたんのの上に座って手を合わせた。

奨真「いただきます」

全員「いただきます」

皆そばを食べてる間はほぼ無言で、お腹が空いていたのもあったのかあつという間に食べ終わる。食べ終わるとテレビの特番を観て、それを観ながらみんなで笑いあった。

特番が終わった頃にはもう0時を過ぎていて、レミは周りを見ると、もうほとんどその場で寝てしまっていた。レミは隣で寝てる綸を起こさないように立ち上がり、奨真と楓子が座ってる椅子の向かいに座る。

奨真「みんな寝たな」

レミ「そうですね」

楓子「もう新年なのね」

奨真「レミ、ここでの暮らしはどうだ？」

レミ「とても楽しいです。毎日がお祭りみたいです」

奨真「そうか」

楓子「レミ、今年もよろしくね」

レミ「っ?!はい!!今年もよろしくお願ひします!!」

レミが倉崎荘にきて半年以上が経った。そして新年に変わったその時、外は雪が降っていた。その景色はとても綺麗だった。

第27話 黄金の騎士

煉獄ステージへと足を踏み入れた奨真たち。その目の前には病院のような大きな建物が建っていた。入口のような大きな穴から中に入ると突然影のようなものから誰かが現れた。

身構える奨真たち。その現れた誰かの正体は加速研究会の一人『ブラックバイス』だった。

アルトリア「あなたは……」

奨真「ブラックバイス!!」

バイス「おやおやこれはこれは。みなさんお揃い……ではないですね」

フィリア「この人もバーストリンカー……だよね?」

エギル「だと思うが、変な形のアバターだな」

バイスのアバターは普通の人型とは違う。板のようなものが集まって人型を保ったアバターなのだ。だからなのか自分の体を分離させても自由に動くことができる。

オルタ「あんたがオーブを持つてるのかしら? んなわけないわね。だってあんた王じゃないし」

バイス「酷いなあ。確かに僕は王じゃないけど、もしかしたらそのオーブを持つてるかもしれないよ」

蓮「黙れ。俺はお前に構ってる暇はない。さっさと失せろ」

皆の前に出て蓮はバイスに言った。その時の蓮は普段とは雰囲気違った。バイスに対して怒りが込められていた。

それもそうだ。蓮は白雪姫のことを誰よりも大事に思っている。その白雪姫がバイスとグレーマインドの手によって操られたのだから。

バイス「パペット君怖いよ？いつもの君ならもう少し冷静じゃないか」

蓮「話聞いてたか。黙れって言ってるんだ」

バイス「それとも僕を恨んでるのかい？君の王を利用した僕を」

蓮「黙れええええ!!!」

怒りが限界を超えて蓮は一人でバイスのほうに飛び出してしまった。奨真たちは止めることが出来なくて、自分たちも加勢しようとした。

だが突然天井が崩れてしまって、蓮とバイスがいるところに行けなくなってしまうた。

カムイ「まずいよ！彼一人に戦わせるのは危険だ！」

クロエ「そうは言ってもどうやっていくのよ！」

奨真「どこからでもいい！とにかくこの建物周辺を探索して中に入る方法を探すんだ！」

奨真たちは二手に分かれて蓮と合流するためにあたりを探索し始めた。

場所は変わって建物内。蓮はバイスと交戦していた。

蓮「チツ！逃げ回りやがって……」

バイス「やっぱり君はまだまだ僕には勝てないね」

蓮「っ!？」

いきなり後ろが声が聞こえたと思い、急いで振り向いたが遅かった。バイスは体の一部を板にして蓮を挟む。蓮は潰れないように耐えるが抜け出すことが出来なかった。

バイス「君は支援型。僕とは相性が悪いんだよ。いくら糸が強力でも当たらなかつたら意味はないしね」

そしてバイスは片腕を槍のようなものに形を変えてそのまま蓮の体を貫いた。急所だったのか蓮は力が抜けてしまい、板に潰されそうになった。その瞬間バイスは板を体に戻して、蓮は前に倒れこんだ。

蓮「あ……があ……バ、バイス……」

バイス「無駄なことを。これに懲りたらもう僕に勝負を挑まないことだね」

バイスは蓮の頭を片手で掴んで持ち上げる。そして上に放り投げると、また自分の体の一部を使って蓮を黒い箱に閉じ込めた。それだけでは終わらなかつた。最後の仕上げのようにバイスは何か呟く。

バイス「ブラックニードル」

蓮が入った箱の中から何かを貫いたような音が響いた。バイスは箱に近づこうとした時、奨真たちは合流した。

奨真「見つけたぞ！」

アルトリア「待つてください。パペットの姿が見えませんか！」

バイス「彼ならその中にいるよ。なんなら君達に見せてあげよう」

バイスは箱の一部を体に戻して中の様子を奨真たちに見せた。箱の中には無数の針

に貫かれて無残な姿になった蓮がいたのだ。

ユウキ「ひ、酷い……」

リーファ「こんな酷いことを平気でするの？」

寿也「僕も初めて見ました……」

オルタ「あんな残酷なことを平気でするのがあいつなのよ」

奨真「お前……お前は!!」

バイス「おつと。怒りに任せるとまた暴走するよ?」

奨真「うおおおおお!!」

奨真から怒りが溢れ出し、いた。その怒りからは禍々しいオーラも含まれている。

そのオーラこそ災禍の鎧。奨真はまた災禍の鎧に取り込まれてしまったのだ。

誰もが手がつけれなくなると思っていた。でも今回は違った。理由はわからない。

でもただの暴走ではない。今までなかった冷酷というものが今の奨真にはあった。

奨真? 「……………」

バイス「こ、これはこれは。今までにないパターンだね」

奨真の周りから出ていた禍々しいオーラはやがて奨真の体の一部となった。その時に奨真のアバターの色は茶色だけじゃなく災禍の鎧と同じ色が混ざってしまった。

彼の禍々しさにバイスは後ろに退いてしまう。それを見逃さなかった奨真はバイス

の背後から剣を作り出して逃げ場を無くした。

そしてあつという間に距離を詰めて、奨真は銃のようなものを投影して銃口をバイスに向けた。

奨真？「……………」

バイス「銃なんて珍しいじゃないか」

奨真はバイスに銃弾を放ち、避けきれなかったバイスは腕に直撃する。そして奨真は何か呟く。

奨真？「無限アンリミテッドの剣ロスワークス製」

聞いたことのない技を呟くとバイスの腕から無数の剣などの武器が貫いて飛び出してきた。もちろんバイスの腕は使い物にならなくなって、ポリゴン状となった。

それと同時に奨真の体から放たれていた禍々しいオーラは消えて、元のアバターの色に戻った。

奨真「……………あれ？俺はいつたい……………」

アツシユ「アニキ!!大丈夫ですか!!」

アルトリア「何も覚えてないのですか？」

奨真「あ、ああ」

さっきのことを奨真は全く覚えてないようだ。奨真はバイスの状態を見ると立ち上

がり、いつもの剣を投影する。前に歩き出すと、その隣にクロエも一緒に歩き出す。

奨真「どうした？」

クロエ「んー奨真さんとタッグ組んだらいったいどうなるんだろうかなーって思っ
ね」

奨真「さあな。ま、お前も投影を使えるみたいだけど、遅れるなよ？」

クロエ「ふふん♪こっちのセリフよ♪」

二人は一斉に走り出してバイスとの距離を詰める。バイスは地面に潜って逃げようとしたが、奨真は巨大な剣を作って地面に叩き潰した。地面という逃げ場がなくなつて落下するバイスは元の姿に戻って体勢を立て直そうとする。だが立て直す前にクロエがバイスの懐に潜り込んで斬り刻んだ。

そのまま下に落ちて地面に激突すると、奨真は追い打ちをかけるようにかかと落としを決めた。今度はバイスを蹴り上げて奨真とクロエは空中でさらに攻撃する。

奨真「はあああああ!!!」

クロエ「やあああああ!!!」

物凄いスピードでバイスを斬り刻む2人。そして最後は同時にバイスを遠くへと吹っ飛ばした。2人の攻撃はそれだけでは終わらない。2人は同時に弓を投影して矢を放った。

2人「カラドボルグ!!」

対するバイスは腕と足を板に変えて何層もの壁を作った。矢の貫通力は強力だが、最後まで貫通することはできなかった。

奨真「くそ……あと少しなのに」

クロエ「しぶといわね」

バイス「今のは危なかったね……」

バイスは体を元に戻して逃げるために異界ゲートを目指し始めた。奨真たちは逃さないために必死に追いかける。リーファたちが後ろから魔法で攻撃しようとしても地面に潜ってるため当たらない。

そしてバイスはゲートの前につくと地面から出てきて潜ろうとした。その時だった。突然黄色い花のようなものがバイスを襲ったのだ。

???「全く……。騒がしいと思ってきてみれば」

アルトリア「貴女は……?」

???「それは後です」

奨真たちの前に現れたのは猫耳をつけて黄金の鎧を纏い、黄金の剣を片手に持った女の子だった。バイスの元へゆっくり歩いて、倒れたバイスの前に立つ。

???「あんな嘘に引かかると……。私もまだまだですね。ここにユージオがいる

わけないのに……。まあいいです。あなたには聞きたいことがあります。なぜユージオのことを知ってるのです」

バイス「僕はなんでも知ってるからね。ユージオという人がどんな人なのか、君がどれほどユージオのことを思ってるのかとか」

???「意地でも答える気はないようですね。ならここで消えなさい」

女はバイスの首を掴むと、上に放り投げた。そして剣を掲げて叫ぶ。

???「巡れ花たち!!!」

剣の刃の部分が大量の花に変わってバイスを襲う。残り僅かだったバイスのHPは少しずつ削られて0になった。バイスはポリゴン状になって消えていく。

???「しかし、なぜあいつはユージオのことを？彼のことをよく知ってるのは私とキリトの2人だけなのだが」

オルタ「それで？あなたは誰なのよ」

???「申し遅れました。私はアリス。アリス・シンセシス・サーティです」

寿也「シンセシス……？」

アリス「アリスで構いませんよ」

リーファ「アリスさん!?アリスさんもALLOに残ってたんですね!!」

アリス「ええ。この世界がおかしくなってるのを見て放つては置けません。ところで

あなたたちは？」

アリスは奨真たちに自己紹介を求める。奨真たちは軽く自己紹介を済ませて、バイスにやられた蓮を診ているユウキの元へ向かう。

アリス「これは酷い。HPは残ってますが、このままにしていれば現実世界に支障が出るかもしれません。すぐに治療します」

アリスは魔法のスペルを言つて蓮を回復させる。HPと傷は治るが、蓮は目を覚まさない。

そこでアルトリアは何か気づく。

アルトリア「おかしいです。もし現実世界に支障が出るなら強制ログアウトさせられるはずですよ」

タクム「確かにそうです」

カムイ「もしかして、侵食の影響で強制ログアウトが機能しないんじゃないか？」

エギル「ありえなくはないな」

アリス「とにかく、早く街へ戻りましょう」

ゲートをくぐり、砂漠エリアに戻ってきた。それから少し歩くと、スメラギが何か気づいて上を見る。他のみんなもつられて上を見ると、椅子に座った真っ白なアバターが宙に浮いていた。

タクム「あれって……!!」

奨真「最悪だ……」

オルタ「つたくタイミング悪いわね!!」

フィリア「あの白いアバターって白雪ちゃん!?」

スメラギ「ホワイトコスモスカ」

ユウキ「でも雰囲気が違うような……」

アツシユ「ネーサーン!!」

奨真「馬鹿!止まれアツシユ!!」

バイクでコスモスのところへ向かうアツシユ。奨真は止まるように言うが聞こえてないのかそのまま進んでいく。コスモスは光の玉を操り、アツシユに攻撃しようとする。光の玉がアツシユに当たる瞬間、一時的に目を覚ました蓮が糸でアツシユを後方へ投げた。

蓮「全く……。世話が……。やける」

エギル「おい大丈夫か?」

エギルは背負ってる蓮に声をかける。まだ危ない状態だが蓮は口を動かす。

蓮「あれは……。お嬢じゃない……。操られてるのか……。何かが違うんだ……」

奨真「どうということだ?」

アルトリア「蓮が言ってた記憶操作なんじゃないですか!!人の記憶の操作は無理でも、ダミーアバターならできないこともないですし!!」

コスモス「邪魔するならあなたたち全員消してあげる!!!私の僕たち!!あいつらを消すのです!!」

コスモスは必殺技で今まで倒してきたダミーの王たちを蘇らせた。そこには楓子やキリトたちが倒したナイトとグランデも含まれている。

ユウキ「嘘でしょ？」

タクム「王たちを相手にするなんて……」

カムイ「この人数じゃ勝てるかどうか……」

アリス「何を怖気付いているのです!!目の前に敵がいるなら戦うだけです!!」

アリスはナイトに剣を振りかざす。ナイトは大剣で軽く受け止めてそのまま跳ね返す。アリスは受け身をしてナイトの攻撃を和らげた。その時にクロエは思いついたように言った。

クロエ「死んだやつを生き返らせて操ってるだけでしょ?それって元よりも弱いつてことじゃん?なら一人でその王を相手にするのもできないことはないと思うけど。その間に本人を倒せばいいんじゃない?」

クロエが言ってることも正しい。意思があるなら確かに強いかもしれないが、操り人

形なら元よりも弱い可能性も十分ある。それにコスモス本人を倒せば王たちを操るものも居なくなつて王たちは動かなくなる。

奨真「よし。ならナイトはアリス。グランデはスメラギ。ソーンはオルタ。レディオはフィリア。レインはクロエ。残りはコスモスを倒すぞ!!」

全員「!!」

バイスと戦つたばかりで疲れはまだ取れてないが、今は戦うしかない。奨真たちはそう思つて走り出した。

第28話 VS白の王

アリス「やああ!!」

アリス、スメラギ、オルタ、フィリア、クロエは王たちを追い詰めて1つに固めた。まずはフィリアがOSS『ダークネスカーニバル』で斬り刻み、クロエが投影した剣を王たち目掛けて発射する。次にオルタが紅蓮の炎で燃やす。燃えてる王たちにスメラギが『テュールの隻腕』を放って王たちを宙に浮かせた。そしてとどめはアリスが金木犀の剣を花に変えて王たちに攻撃する。王たちのHPは無くなり、ポリゴン状となった。一方でホワイトコスモスの相手をしてる奨真たちはコスモスが召喚する兵士たちの相手ばかりしてなかなか近づけないぞ!!

コスモス「私のパペットを返して!!!」

アルトリア「くっ!キリがないです!やはりコスモス本人を倒さないと無限に湧いてきます」

カムイ「でも近づこうにもこれじゃ近づけない!」

リーファ「それに蓮さんを集中的に狙おうとしてるので守る方に集中してしまいま

す」

奨真「エギル！死んでも蓮を渡すなよ！」

エギル「んなこと言ってもよお……。俺も武器が使えたらいいんだが、背負いながらじゃ逃げるのが精一杯だぜ……」

エギルは蓮を背負つてるため、武器を使うことができない。だから今は逃げることにできないのだ。それをリーファと寿也、タクムとアッシュがカバーする。

カムイ「こうなったら……」

ユウキ「っ!?ダメだよカムイ!!」

カムイ「ゆ、ユウキ？」

ユウキ「その力は強力だけど、とつても危険なんだよ……。竜石があるなら大丈夫だけど、肝心な竜石はない。暴走してカムイがボロボロになるだけだよ!!」

アルトリア「ユウキ、カムイはいったい何をしよう？」

ユウキ「カムイはスキルで竜に変身できるんだ。でもそれと同時に理性を失ってしまふんだ。力を使いこなしたら理性は失うことはないけど、簡単に使いこなすのも難しいんだ。だから竜石っていうアイテムがなかったら決して使ったらダメなスキルなんだ」

カムイだけが使えるスキル『竜化』は竜に変身し、強力な力を手にすることができ。だが代償として理性が失われてしまい、正気を取り戻してもボロボロになってしまうと

いう諸刃の剣なのだ。専用のアイテムで竜石を持っていけば理性は失わずにすむという。

そのスキルの恐ろしさを一番わかっているユウキは必死にカムイを止めたのだ。

カムイ「でも……」

ユウキ「もう……カムイがあんな目に会うのは……見たくないんだ……」

カムイ「………わかったよ。もう君を泣かせたりしない」

カムイは長刀から特殊な刀に入れ替えて両手で持つと、何か念じ始めた。

カムイ「頼む夜刀神。僕に力を貸してくれ!!」

夜刀神は少しづつ形を変えていき、刃の部分がチェーンソーのようになり、刃からオーラのようなものが溢れ出ていた。これがレジェンド武器『夜刀神』の最終形態らしい。

カムイ「奨真! 兵士を一掃できる!?!」

奨真「任せろ!」

奨真は弓を構えて空に目掛けて一本の矢を放つ。その矢はコスモス目掛けて落ちるが、一本ではなく複数になっていたのだ。コスモスは軽々と防ぎ、兵士たちは一時的だが全滅させることができた。

コスモス「矢なんかで私を倒せると?」

カムイ 「隙は見せないほうがいいんじゃないかい!!」

コスモス 「っ!？」

カムイは夜刀神で斬りかかる。不意をつかれたコスモスはギリギリ防御に回った。でも夜刀神は止まらない。チェーンソーになってる刃が急速に回り始め、コスモスの腕をじわじわと削っていく。

コスモス 「こ……のお……!!」

カムイ 「まだだああ!!」

カムイは必死に抵抗するコスモスに押し勝ち、片腕を切断した。そしてそのまま夜刀神で突き刺そうとするが、コスモスの兵士が盾になって失敗する。

コスモス 「今のは危なかったですね……。こうなったら私もとっておきを使うしかないですね」

そう言つてコスモスはまた新しい兵士を蘇らせる。だがその兵士はただの兵士ではなかった。その事に真つ先に気づいたのはアリスだった。

アリス 「っ!?! そんな……何故お前が……」

その兵士は青い剣と青い服をまとった金髪に近い茶髪の青年だった。その青年をアリスが見間違えるはずがない。

アリス 「質問に答えてもらどうぞホワイトコスモス。何故お前が彼を知っている!!!」

コスモス「バイスが教えてくれたんですよ。昔とある世界で黒の剣士の相棒がいたと。そのデータを元に色々探ったんですよ。何故バイスが知っていたのかは私も知りませんけどね」

オルタ「それであいつは誰なのよ！」

リーファ「お兄ちゃんの相棒？聞いたことある。もしかしてあの人か？」

アリス「ええ。彼の名は『ユージオ』。アンダーワールドで最高司祭との戦いで戦死したキリトの相棒です」

コスモス「先に言っておきますけど、彼も他の王たちと同様に意思などはありませんよ？ただの戦闘兵器ですから」

奨真「だろうな。そいつの目には光がない」

ユージオは無言で剣を鞘から抜き、剣を地面に突き刺す。すると剣から青い薔薇が咲き始め、奨真たちを襲う。青薔薇のスピードが速いため、みんな捕まってしまう氷漬けにされてしまった。

唯一逃げ残ったのは奨真とアリス、アルトリアとユウキだった。

ユウキ「みんなが一瞬で……」

アルトリア「凍ってしまいました」

アリス「奨真、教えてくれないか。ホワイトコスモスという女はこんなにも酷いこと

をするやつなのか……?」

奨真「いや、本物のあいつはもつといいやつだ。俺たちの目の前にいるあいつは本物とは正反対だ」

アリス「そうか……」

奨真「あんたはあのユージオってやつのが大切なんだろう? だったら早く解放してやろう」

アリス「無論そのつもりだ」

アリスは金木犀の剣を持ち直してユージオの前に立つ。そのアリスの隣に奨真も立つ。

アリス「ユージオ。すぐにあなたを解放してみせます」

奨真「俺とアリスでユージオを止める! 先生とアルトリアはコスモスを頼む!!」

ユウキ・アルトリア「了解!!」

まずは奨真とアリスがユージオの足止めをする。その隙にユウキとアルトリアがユージオを超えてコスモスへと近づく。

奨真は干将・莫耶でユージオに斬りつける。だがユージオはそれを軽く受け止めた。そのまま押し返し奨真に蹴りを入れる。

アリスも両手剣ソードスキル『アバランシユ』でユージオに斬りかかるが、これも防

がれてしまう。

アリス「くっ！やはり強い……！」

奨真「これは簡単にはいかないぞ」

アリス「でもやるしかない。私が……今度は私が彼を救う！」

テ
イ
ー
ゼ
s
i
d
e

クラインさんを解放して転移ポータルに向かっている時、突然私が持つてる青薔薇の剣が光り始めた。

白夜「おい、その剣光ってるぞ？」

ロニエ「本当だ！でもなんで？」

みんなは不思議がってるようですね。でも私にはわかります。この剣はきつとあの人を呼んでる。この世界のどこかにあの人がいる！そう思った私は転移ポータルに向かい転移場所を設定する。砂漠エリアに反応があったから、私は砂漠エリアに転移した。

テューゼ side out

ユージオの相手をする奨真とアリスは苦戦していた。どの攻撃も防がれては避けられるの繰り返しでまともに攻撃が当たってないのだ。そしてコスモスの相手をしてるユウキとアルトリアも苦戦していた。

ユウキ「はあ……はあ……」

アルトリア「やはり……他の王たちよりも厄介です」

コスモス「はあ……あなた達では相手になりません。さっさと終わらせてパペットを返してもらいます」

コスモスは球体を自分の前に構え、球体に光を集める。一定量集まり、その光は放たれる。

コスモス「ベネディクト!!」

アルトリア「っ!?!ユウキ!!私の後ろに!!」

アルトリアはすぐにユウキを自分の後ろに導く。エクスカリバーで防ごうとするが、ベネディクトの威力のほうを防御を上回っている。そして防御を崩されたアルトリアは瞬時にユウキを自分から遠ざけて、ベネディクトをモロにくらった。

アルトリア「うわあああああ!!!」

地面を転がるアルトリア。彼女のHPは数ドットとなり、力尽きてしまった。

ユウキ「これは……大ピンチだね」

一方奨真とアリスはユージオに押され始めていた。

奨真「くそ……速度が速すぎる」

アリス「防ぐのが精一杯です…」

そんな時だった。奨真たちの後ろからさつきユージオが使った技が迫ってきていた。

それはユージオがしたのではなく、砂漠エリアに転移してきたティーゼだった。

アリス「ティーゼ!？」

ティーゼ「アリスさん!」

ティーゼは急いで奨真たちのところに駆け寄り、前を見た。

ティーゼ「やつぱり……先輩だ。ユージオ先輩」

アリス「ティーゼ。あのユージオは敵です。白の王ホワイトコスモスが生き返らせたのです」

ティーゼ「わかりました。力になるかわかりませんが、私も手伝います!」

奨真「誰かはわからないけど、味方みたいだな。よろしく頼むよ」

奨真は干将・莫耶、アリスは金木犀の剣、ティーゼは青薔薇の剣を持ち直してユージオを見る。

奨真「まずは動きを止めないと、何度も防がれちゃ3人になっても意味がない」

ティーゼ「動きを止めればいいんですね?」

アリス「いけますか?」

ティーゼ「任せてください」

奨真「なら俺とアリスで隙を作る。チャンスが来たらやってくれ」

奨真とアリスはユージオに斬りかかり、その間にティーゼが力を溜める。

アリス「やあ!!」

奨真「せや!!」

やはり普通に攻撃しても簡単に防がれる。だがそれは2人はわかっていた。防がれても構わない。隙を作るのが狙いだから。

ティーゼ「リリース・リコレクション!!」

青薔薇の剣を突き刺し、青薔薇はユージオに襲いかかる。その速さはさっきのよりも数倍速かった。青薔薇はユージオを拘束し動きを止めた。

そして奨真はずっと溜まってここぞという時に準備をしていた必殺技ゲージを一気に使い果たす。

奨真「アンリミテッド blade ワークス!!」

景色は変わり、辺りには無数の剣が突き刺さっていた。奨真はその剣たちを手を使わずに自在に操り、ユージオに一斉射出した。

拘束されてるユージオはもちろん避けることも防ぐこともできずに無数の剣に串刺しにされる。そしてユージオは動かなくなった。

アリス「ユージオ……。たとえ今のあなたに心が宿ってなくても……。私はもう一度あなたに会えてよかった」

ティーゼ「先輩。私もアリスさんと同じです」

少しずつ体が崩壊していくユージオ。完全に消える寸前でユージオは微かに笑みを浮かべ、口パクで何か言っていた。それは『ありがとう』と言ってるようだった。

奨真「あとはコスモスだけだ」

奨真たちは急いでユウキの元へ走る。ユウキはかなりボロボロになっていて、HPもあと少しとなっていた。アリスはすぐにユウキを退がらせて、ポーシオンを飲ます。

奨真とティーゼは思い切りジャンプしてコスモスに攻撃しようとするが、当たる寸前で上に上がられて届かなかった。

奨真「くそ、あの椅子はホバリング機能がついてるから飛ばれたら厄介だ」

ティーゼ「私は羽があるからなんとかありますが……。あっ!？」

奨真「どうした？」

ティーゼ「奨真さんって盾とか作れますか？」

奨真「盾？まあできるが。でもそれがどうしたんだ？」

ティーゼ「私が盾を持って土台を作るので、奨真さんはそれで思い切りジャンプしてください！」

奨真「なるほど、わかった！」

奨真は盾を投影し、ティーゼに渡した。そしてコスモスに近づくために2人ともジャンプする。少しずつ下がっていくのを確認し、ティーゼが盾を構えて土台を作る。奨真

はその盾に足を置きさらにジャンプしてコスモスに近づいた。

コスモス「そんな!?!この高さまで来るなんて!?!」

奨真「もらったああ!!!」

奨真はコスモスにかかと落としを決める。頭に直撃したコスモスは椅子から落ちて落下する。その下にはティーゼが待ち構えていて、彼女は青薔薇の剣でコスモスを突き刺した。コスモスのHPは減り続ける。でも彼女はまだ動いていた。

コスモス「パペット……パペット……」

奨真「もう眠れ」

奨真は背中の中のガンブレードで這い蹲るコスモスにとどめをさした。彼女のHPは0になって消えた。

アリス「終わったんですか?」

奨真「ああ。後は凍りづけられたみんなを助けなきゃな」

ユウキ「氷ならもう溶け始めるから後少しでみんな解放されるよ」

しばらくすると、ユウキの言う通り氷は完全に溶けてみんな元どおりになった。

クロエ「ううう……寒……」

エギル「つたくツイテねえぜ」

カムイ「酷い目にあつたよ」

寿也「寒い！オルタさん温めて！」

オルタ「ちよっ?!どきくさに紛れて私の胸を触りながらしがみついてんじやないわよ!!」

スメラギ「俺としたことが……」

アルトリア「みんな無事でよかった。あとオルタ。あなたには胸の件で少々話が」

オルタ「待ちなさい。そのいかにも排除するみたいなのは？」

蓮「んん……あれ？」

エギルの背中にいた蓮は目を覚ました。

奨真「やつと起きたか」

蓮「お嬢の偽物は倒したのか？あとその2人は？」

奨真「とりあえず街へ戻ろう。紹介はその後だ」

奨真たちは体がボロボロなため、ゆっくりと転移ポータルに向かう。これでオーブは楓子たちが手に入れた『レオニーズ』。キリトたちが手に入れた『グレート・ウオール』そして奨真が手に入れた『オシラトリ・ユニバース』の3つが加えて6つになった。残るオーブは1つ。その1つを持つ黒の王は一体どこにいるのだろうか。

第29話 休息

各エリアに移動していた全員は空都ラインにあるエギルの店に戻ってきた。全員かなり体力を消耗して、そのまま次のエリアに移動するのは困難な状態だった。

青の王を倒したアスナたちは何人かは気を失ったりしたが、今はもう回復している。緑の王を倒したキリトたちは直死の魔眼の反動を受けた式がまだ回復していない。

ハルユキ「みんなかなり疲れてますね」

リズ「そりやあどこも激闘だったからね。疲れもするわ」

アリス「改めて自己紹介しますね。私はアリス・シンセシス・サーティ。アリスで構いません」

ロニエ「ロニエ・アラベルです！まだまだ未熟者ですがよろしくお願いします!!」
ティーゼ「ティーゼ・シュトリーネンです！ロニエ共々よろしくお願いします!!」

3人は自己紹介して、奨真は白の王との戦いでのお出来事を話した。何故か白の王が蓮に凄い執着心を持っていたこととユージオという男を復活させたことを。

キリト「ユージオが!？」

アリス「白雪姫、あなたはユージオを知ってますか？」

白雪姫「い、いえ……。その人の名前も初めて聞きました」

アリス「もう一つ聞きます。あなたは死んだものを生き返らせることができるのですか？」

白雪姫「それは……」

奨真「白雪、教えてやってくれ」

白雪姫「……わかりました。私はこのようなVR世界で命を落としたものの魂を呼び戻し、生き返らせることができます」

楓子「私たちの世界、ブレインバーストもその内の一つよ」

白雪姫はメイン・ビジュアライザーから全損に際して回収されたバーストリンカーのデータをサルベージして別のアバターに憑依させる《反魂》と呼ばれる能力を持っている。だから知っているデータなら死人を呼び戻すことができる。

白雪姫「ですが、たとえばアリスさんがそのユージオさんに会いたくても、私は決して生き返らせません」

アリス「っ!?それ何故です？」

白雪姫「凄く酷い言い方になりますが、そのユージオさんはもう死んだ人。死んだ人がいつまでもこの世にいつけることはいけないこと。だから、たとえばどんな理由があつ

ても死人を生き返らせるなんてダメなんです」

キリト「確かに白雪姫の言う通りかもな」

アリス「キリト……」

キリト「人の命っていうのは軽いものじゃない、物凄く重いものなんだ。だから、そう簡単に生き返らせたりしたらダメなんだ」

白雪姫「そういうことです」

アリス「お二人の言う通りですね」

違うところでは眼が見えなくなった式のそばに何人か寄り添っていた。

あきら「式、大丈夫なの？」

式「大丈夫だ。眼は見えないがな」

白夜「ダミーアバターにも影響がでるなんて」

シリカ「もしかして一生見えなくなるとか……」

クライン「そりゃないと思うが……だってゲームだけ？ 治らない状態異常とか聞いたことねえよ」

式は今ダミーアバターの状態で目隠しをしている。そのため周りを見ることができず、歩き出すとフラフラとする。

リーファ「無理に動いちゃダメです！眼が見えるようになるまで安静にしてください！」

リーファは式をソファに座らせる。その隣に自分も座って式に無理をさせないように見張る。

そして買い出しに行っていたアスナとチュリ、フィリアとマシユが帰ってきた。回復アイテムを全員に配り、4人は椅子に座る。

ストレア「もうう!!折角休憩してるんだから暗い話はナーシ!!」

レイン「そうだね。何か楽しい話とか？」

ストレア「はいはい！じゃあ奨真と楓子のラブラブな話をお願いしたいと思いまーす！」

ストレアは奨真と楓子のもとに向かいマイクを持つような構えをして2人に手を向ける。2人は最初は驚くが、話くらいなら構わないだろうと思いい、何を話そうか悩みだす。

奨真「俺と楓子が普段してることかあ……」

楓子「あら？いっぱいあるでしょ？キスとか『ピー』とか」

奨真「ちょっと待て!!今明らかにこの場で言っちゃダメなこと言わなかったか!!」

アスナ「キスは聞き取れたけど、その後はなんか変な音が入って聞き取れなかったけど?」

奨真「セーフ!!」

レミ「私は何言ったかわかりましたけどね。奨真さん後でブツ飛ばす」

ストレア「まあラブラブなのは知ってるけど、それより奨真。楓子のおっぱいって柔らかいの?」

奨真「んなこと答えてたまるか!!」

レミ「触ったことがあるのは否定しないんですね」

ストレア「あ、じゃあ私のを触る?」

奨真「だからなんでそうなる!?!」

ういうい「しよ、しよーにいにそんなことを答えさせません!私が答えるのです!」
ういういは楓子のところに向かい、そして楓子の胸に手を当てた。いつもは抱きしめられて顔で感触を確かめているが実際に触るのは初めてのういうい。触っていくうち
にみるみると顔が赤くなり、奨真のところへと戻った。

ういうい「柔らかいのです。大きなマシユマロを手を取ってるような感じなのです

……」

楓子「改めて言われると恥ずかしいわね」

黒雪姫「くっつ……まだだ……私だっ……いつかは……」

アルトリア「黒雪、牛乳を飲みましょう。そして世界中の巨乳という巨乳を排除するのです」

貧乳の黒雪姫とアルトリアは楓子をみて悔しがり、アルトリアに関しては最後に物凄く物騒なことを言う。

奨真「お、俺と楓子の話はここまでにして、次行こう！」

ストレア「じゃあ次はジャンヌ!!」

ジャンヌ「へっ!?わ、私ですか!?!」

突然話を振られるジャンヌ。まさか自分のところに来るとは思わなかったのだろう。

それもそのはずジャンヌは誰にも自分の恋愛話などを話したことがないからだ。

白夜「ジャンヌに振っても話とかなんじやないか?」

あきら「好きな人がいるのかもわからないの」

オルタ「なに?あんたたち誰も知らないの?姉さん彼氏いるわよ?」

ジャンヌ「お、オルタ!!」

オルタ「いいじゃない別に。減るもんじやないでしょ?」

アスナ「私も興味あるかなあ」

リズ「言っちゃいなさいよ〜」

ジャンヌ「わ、わかりました……」

顔を真っ赤にしながら覚悟を決める。ジャンヌは自分の恋人の名前を言い、どんな風に過ごしていたのかも話した。

ジャンヌ「私の故郷、フランスに恋人はいます。その人は『ジーク』君。一言で言う人と人を誰よりも大切にする人です。その人と知り合ったのは村で買い物をしてた時です。買い物途中で柄の悪い男の人に絡まれてるところを助けてくれました。私は彼にお礼をしたくて連絡先を交換して、それ以来よく会うようになりました」

フィリア「なんか漫画みたいだね」

レイン「それでそれで？」

ジャンヌ「最初は本当に仲のいい友人としか思ってませんでした。でも私の心のどこかでは何かモヤのようなものがありました」

イリヤ「モヤ？」

クロエ「イリヤってば本当に鈍いね〜」

美遊「私でもわかるかも」

ジャンヌ「そして私とジーク君の2人で旅行に行った時でした。まだ奴隷制度がある国を訪れ、奴隷を乗せた馬車を見つけた時に事件は起こりました」

（数年前）

ジャンヌ side

遠くから様子を見てると、何か騒がしかった。なんだろうと思い、私とジーク君はリュックから双眼鏡を取り出して何が起きてるのか見た。私たちの目に見えたのはハイエナの群れが馬車一台を襲ってました。

その馬車には勿論人が乗ってます。その中にはまだ幼い子供まで。私は助けたかったです。でも恐怖で動けなかった。他の馬車は犠牲になつてるうちに逃げる準備をしました。

それを見たジーク君は一目散に逃げようとして馬車に向かい、責任者を呼び止めた。

ジーク「おい！なんで助けようとしんない!!」

「あのハイエナの群れは餌に食いつけば周りは見えなくなる！その隙に逃げるのは当然だ!!」

ジーク「俺が聞いているのは逃げる逃げないじゃない!!なんで助けないんだと聞いているんだ!!」

「たかが数人の奴隷だ！1人や2人死んだところでなんの支障もない！さあ退け退け！それか手伝え！こっちは高い酒や食料も乗せてあるんだ！手伝えば金は払ってやらんこともない！」

責任者の一つ一つの言葉は最低でした。私は怒りが爆発しそうになった時、ジーク君は私よりも先に爆発して、彼の頬を思い切り殴りました。

勢いよく転がる責任者。彼は殴られた頬を抑えてジーク君を見る。

ジーク「お前の汚い酒や食料で人の命が買えてたまるかクソ野郎!!!」

ジーク君は馬車から木の棒を取り出してハイエナの群れに向かう。

私も何かやらなきゃ。でも何ができる？彼と同じように行っても足手まといにしかならない。ならどうすれば……。

悩んでる間にもジーク君はハイエナの群れを追い返そうとします。でも数が多いためジーク君もかなり体力を消耗する。その時、私は気づいた。ジーク君はハイエナの群れを馬車から離しすることに。私にできることは被害にあつた馬車を安全なところに連れて行くこと。

私は急いで馬車に向かい、馬車から落ちてる人たちを乗せて、手綱を持つ。他の馬車のところに連れて行き、私はもう一度ジーク君の元へ戻る。戻つた時にはハイエナの群れは逃げていて、ジーク君の周りには数匹のハイエナの死体が転がっていた。

ジャンヌ「ジーク君……」

ジーク「ジャンヌ？」

ジャンヌ「早く戻りましょう。手当が必要ですよ」

ジーク「俺は平気だ。それよりも彼らが」

ジャンヌ「いいから早く戻りますよ!!!」

私はジーク君の手を引き、馬車のところに向かう。鞆から救急箱を取り出し、彼の傷を消毒する。幸いにも転んだりした時についた傷だけだったから病気の心配はなかった。

ジャンヌ「全く……ジーク君はいつもそうです。人の気持ちも知らないで自分を犠牲にしようとする」

ジーク「すまない」

ジャンヌ「今回ばかりは本当に死ぬかもしれないなかったんですよ……」

私は静かに涙を流す。彼はいつもそうだ。彼のいいところは困ってる人を助けること。彼以外にもそれをする人は勿論たくさんいます。でも彼はそのことに關してはずば抜けてる。何故なら自分の命も犠牲にしようとしてしまう。例えるなら火事で逃げ遅れた人がいたら一目散に火の中に飛び込んで助けに行くとか。今までも何度かそういうことがあつた。

ジーク「君を心配させてしまったのは本当にすまないと思ってる。でも俺が犠牲になろうとしたから彼らは生きてる。俺は誰かが救われればそれでいい」

彼は笑顔で私に言った。その時に私の心の中のモヤがなんなのかわかってしまった。私は彼の誰にでも優しいところに着かれていた。そして自分の身を犠牲にする彼をそばで支えていきたいとも思った。

ああ……そっか。

これが恋なんだ。

ジーク「さて、長く居るわけにもいかないし、そろそろ行こう」

ジャンヌ「そうですね」

「お兄ちゃんたちもう行くの？」

小さい子供が私たちのところに走ってくる。その子は私たちにまだ居て欲しいのか、そんな目をしていた。

ジーク「すまない。俺は他所の国の人間なのに、この国の責任者を殴ってしまった。ここにいたら下手したら命を狙われるかもしれないんだ」

「もう会えないの?」

ジャンヌ「ごめんね。それもわからないの」

私たちは馬車から離れる。しばらく歩くと、さっきの子供が大きい声で私たちに叫んだ。

「絶対!!!いつか!!!会おうね!!!」

私は微笑んで手を振り、ジーク君は『またな』と言って手を振った。そして私たちは振り返ることなくその場を後にした。

ジャンヌ side out

ジャンヌ「それからはまあ色々あって、私が思い切って告白したらOKしてくれたってことです」

リズ「その色々ってのは気になるけどね」

たしかにジャンヌが説明したのは『ジーク』と出会い、どのように過ごしたのかだけだから。告白の内容については特に話してない。

マシユ「あつ！私フランスで料理の勉強をしていた頃、ジークさんを見たことがあります！」

シリカ「どんな方だったんですか？」

マシユ「見かけただけなので詳しくはわかりませんが、見た目は凛々しい感じでした」
ジャンヌ「そうです！見た目は凛々しいですけど、実はたまに甘えてくる感じがギャップ萌えというか!!」

オルタ「あ、やばいわこれ」

完全にキャラ崩壊して暴走し始めたジャンヌの脇を持ったオルタはそのまま外へと出て行った。

奨真「あんな感じのジャンヌは初めてだ」

キリト「完全にキヤラ崩壊だったな」

ユウキ「ねえカムイ。カムイもたまには甘えてもいいんだよ？」

カムイ「えっ？いや、それは………たまには………ね」

ユウキとカムイはまだ友達以上恋人未満という関係だ。だが、このやり取りはもう恋人がやるような感じ。なのになぜ付き合っていないのかが不思議でたまらない。

余談だが、ユウキがカムイに甘えて、カムイがそれを受け止めることが多いが、その逆は全くと言っていいくらいない。

アスナ「き、き、キリト君も……私にいつぱい……あ、甘えて……いい、いいからね？」

キリト「アスナ、無理するな」

ストレア「じゃあキリト！あたしにいつぱい甘えていいよ！」

キリト「お前はもう少し恥じらいというものを持って」

リズ「キリトー!!この前見た鍛冶用ハンマー買ってー!!」

キリト「どさくさに紛れて強請るな！しかもお前それ本気で欲しがってためちやくちや高いやつだろ!!」

リズ「ちえ……バレたか」

白夜「キリトはモテモテだなあ」

あきら「びやーくんには私がいるから」

白夜「だな！」

リズ「はいはいごちそうさまでーす」

皆の恋愛話を繰り広げると、店の扉が開いた。ジャンヌとオルタが戻って来たのかと思つたが、入って来たのはケットシーの女性だった。

???「ようキー坊。楽しそうにしてるナ」

キリト「アルゴ!?!」

そのケットシーの女性とは情報屋のアルゴだった。ついでにアルゴの後ろにはジャンヌとオルタもいた。実はキリトはアルゴにメッセージで今のALLOの情報を提供してほしいと言っていたから、アルゴはあちこちで情報を探っていたのだ。

キリト「俺のところに来たってことは、色々とわかつたんだな」

アルゴ「骨が折れたよまったく。地形は変わってるし見たことないものもあるしで大変だったんだヨ」

キリト「悪いな。俺たちもオーブ探しかで忙しかつたからさ」

アルゴ「別にいいヨ。さて、情報を渡すから、代金をくれ」

アルゴはウインドウを表示し、キリトに見せた。そこに書かれていた金額は現実世界

では大金レベルの金額だった。

キリト「に、20万!？」

アルゴ「キー坊金には困ってないだろ？それにこの情報はこれくらいで取引しなきゃオレっちが損するんだ」

キリト「わ、わかったよ……」

キリトは代金を払い、アルゴは受け取ると、情報をキリトに渡した。

アルゴ「じゃ、また情報が欲しくなったらいつでも言ってくれよ」

アルゴはそう言うと、手を振って店から出て行った。

式「情報とやらが手に入ったんなら、さっさと行こうぜ？」

リーファ「ま、まだ眼が視えないんですよね!？」

式「時間が経てば治る。それにあんたらは急がなきゃならないんだろ？」

アスナ「っ……………」

アルトリア「式なら私に任せてください。回復するまで私がサポートしますので」
ハルユキ「キリトさん、行きましょう!!」

キリト「みんな……ありがとう!よし、攻略再開だ!!」

皆それぞれ武器を持ち、立ち上がって店を出て、転移門で砂漠エリアへと転移した。

第30話 最後の島ニールハイム

砂漠エリアの上空に浮かんでる神殿に迫り着いた奨真たち。祭壇にオーブをはめ込む窪みが6つあり、オーブを全てはめ込む。すると、祭壇の奥に新しい扉が現れた。

キリト「あの扉の先に……あの時のボスが」

黒雪姫「あの巨大なやつだな」

楓子「たしかキリトとアスナさんとサツちゃんは見たって言ってたわね」

アスナ「あの時は挑めなかつたけど、今はみんながいる。絶対に勝てる」

クライン「つしやあ!! さっさと倒してユイちゃんを助けようぜ!!」

そう言つてクラインは思い切り扉の中に飛び込んだ。他のみんなもそれに続いて、扉の中へと入つていった。

最後のエリアに到着すると、目の前に大きな塔がそびえ立っていた。その前にさつきキリトたちが言つていたエネミーが待ち構えている。

アリス「あれが……」

ロニエ「大きいですね……」

ういうい「……皆さん! あそこを見てください!!」

ういういが指を指す方を見ると、真つ黒でメカメカしいアバターがいた。それは間違
いなく黒の王『ブラックロータス』だった。

エギル「巨大なボスの前に最後の王かよ」

リズ「でも数だと圧倒的にあたしたちの方が有利よ」

奨真「とにかくいいこう」

ブラックロータスのところへ走り出し、近くに行くのと突然上空から何か降つてき
た。その何かとは『ネガ・ネビュラス』の一員である『ブラウンクリエイト』と『エメ
ラルドルーク』と『オシラトリ・ユニバース』の『デスパペット』だった。

藤乃「……これは非常にまずいですね」

式「ああ……気配でわかるぞ」

リーファ「こんな時に……」

あきら「サツちんの偽物に近づくには、びやーくんたちの偽物を倒さない」と

白夜「自分の偽物は自分たちで倒す。だからみんなはサツチの偽物を倒すんだ」

蓮「全く……俺たちの偽物まで作るなんて、敵は悪趣味だな」

奨真「これは男として負けるわけにはいかないな」

奨真と白夜、蓮はみんなの前に立ち、戦闘態勢に入る。そして不意打ちではあるが、奨

真は高速で背中中のガンブレードを相手に投げて分担させた。

その隙にロータスのところに行くように指示して、3人はそれぞれの敵に走っていく。キリトたちも急いでロータスのもとへ向かい、対峙した。

黒雪姫「キリト、こいつは私がやる」

白雪姫「サツちゃん、1人じゃ危険よ。私も手伝う」

黒雪姫「っ!?!姉さん……」

キリト「もちろん俺もだ。3人で戦えば楽勝だ」

アスナ「じゃあ私たちはあのボスね」

黒雪姫と白雪姫、キリトはロータスと戦うことにし、残ったみんなは巨大エネミーの討伐となった。

キリトたちから少し離れたところでは、多くの武器がぶつかり合って火花を散らしていた。

奨真「チツ！俺が投影したものと同じものをぶつけてくる……。戦い方も俺と全く同じってことかよ!!」

今まで奨真がしてきた戦闘スタイルでいくと、相手もそれに対抗して同じ戦闘スタイルでくる。そのせいで隙を作ることもしかない。

それは奨真だけじゃなくて、白夜と蓮も同じ状態だった。白夜のほうはカウンターを使えば相手も同じタイミングでカウンター。蓮のほうは人形で戦えば相手も人形で、糸で戦えば相手も糸で。

白夜「このままじゃ倒せないぞ!？」

蓮「しかもこれはまずい……」

2人は蓮が言ったことがどういふことなのかわかってない。戦いながら理由を聞く。

蓮「時間がかかればかかるほど、俺たちの勝機は無くなっていく。あいつらの体力は無尽蔵かもしれないが、俺たちの体力は少しずつ消耗していく。持久戦になれば確実に負けだ」

奨真「どうすれば!!」

蓮「それは戦いながら考えるしかない!!」

考えながら戦う3人だが、いい案が浮かばず、少しずつ押され始めていく。奨真は剣の動きが鈍くなり、白夜は盾に入れる力が抜けて、蓮は糸を操るための集中さが無くなっていく。

それでもなんとか対応できるのは、普段自分が使ってる戦闘スタイルと対峙してるからだろう。自分自身を相手にして苦戦する要素が出るとしたら、きつと自分が知らない動きなのだろう。

そんな時、奨真は気づいた。相手に自分が今までしたことない動きをすれば、いくら自分自身でも対応できないんじゃないかと。

奨真「そうか! わかったぞ!! 2人とも、今まで自分がしたことない動きをするんだ! そうすれば、俺たちの偽物は対応できない!!」

白夜「そういうことか! 奨真! 武器交換だ!!」

奨真はガンブレード、白夜はダイヤモンドシールドをお互い交換する。奨真が盾を、白夜が二刀流という今までにない戦闘スタイルが出来上がった。一方蓮は糸を地面に突き刺して動かなくなった。

奨真は盾で相手の攻撃を全て弾きながら走って接近する。近づくと、盾で思い切り殴りつけて吹っ飛ばす。白夜はとにかく攻撃して、相手がカウンターを使ってくるのを待

つ。カウンターを使うときは必ずほんの少しだけ隙ができるから、白夜はそこを狙う。蓮は相手が近づいてきたときに地面に刺した糸を別の場所から飛び出させて相手を貫く。

3人「これでトドメだあああ!!!」

奨真と白夜はまた武器交換して、奨真はガンブレードで斬りつけ、白夜は盾で『ドレインクラッシュ』を、蓮は糸でそのまま拘束して、最後に体を思い切り捻った。

3人の偽物はそのまま碎け散り、跡形もなくなった。

3人 s i d e o u t

黒雪姫 s i d e

私は今、姉さんとキリトと共に私自身の偽物と戦っている。もちろん苦戦するのはわ

かっていたが、思ってた以上に奴は強かった。

黒雪姫「はあ……はあ……」

白雪姫「いつものサツちゃんよりも凶暴です」

キリト「そのせいなのかはわからないが、攻撃の速さが桁違いだ。まずはあれを崩さなきゃ、こつちから攻撃できない」

私の偽物はどうやら、姉さんの偽物の時と同じように操られてるらしい。今まで戦ってきた王はオリジナルと同じような感じだったが、私の偽物は私じゃないみたいだ。

ロータス「デスバイピアーシング」

黒雪姫「させない！」

突進してきた偽物の刃を私は両手でなんとか防ぐ。その隙にキリトが二刀流で攻撃をするが、偽物は私から離れてキリトの攻撃を全て捌いた。

キリト「今のもダメなのかよ」

白雪姫「プリフィケーション・レイ!!」

姉さんは偽物の頭上に光の柱を落とした。避けれたなかった偽物はジワジワとHPが減っていく。それに光の柱の中にいる限り、奴は上手く動くことができない。なら今がチャンス。

黒雪姫「今だ!!」

キリト「スターバーストストリーム!!!」

キリトは光の柱の中に入ってソードスキルを発動する。パーティメンバーである私たちは光の柱の中に入ってもダメージはない。だから思う存分奴を攻撃できる。そして私もキリトの後ろから心意技を発動した。

黒雪姫「スターバーストストリーム!!!」

私は16の星を相手に斬りつけるように放った。偽物に直撃して、奴は光の柱から出てきた。あとは一斉に攻撃すれば倒せる。だが私たちは油断してしまったのだ。

ロータス「デスバイバラージング」

2人「っ!」

白雪姫「サツちゃん!?キリトさん!」

私とキリトは咄嗟に防御体制に入って防いだが、私のほうが攻撃の回数が多かったのか、後方に飛ばされてしまう。キリトはガードを崩されて、奴の刃がキリトの体を貫いた。

ロータス「デスバイピアッシング」

キリト「がはっ……!」

刃をキリトから引き抜くと、キリトはその場に倒れた。

黒雪姫「キリト!」

ロータス「人の心配をしてる場合か？」

白雪姫「ルミナリー、力を貸して!!」

姉さんは椅子から降りて近接戦闘へと移る。近接戦闘は全くできなかった姉さんだが、英霊級エネミー『デイルムツド』との修行のおかげで克服することができたらしい。神器『ザ・ルミナリー』を2つに分離させ、槍へと変換させて、私と偽物の間に入る。奴の攻撃を防げたが、近接戦闘なら圧倒的に奴の方が上。姉さんに勝ち目はないに等しい。

黒雪姫「姉さんダメだ!!近接戦闘なら私の偽物である奴の方が上だ!!」

白雪姫「わかっているよ。でも足止めくらいはできる。サツちゃん、私があいつの相手をしてるうちに大技の準備をして」

黒雪姫「でも、私の『ジ・イクリプス』で倒せるとも限らない」

白雪姫「私が言ってるのはそれじゃないよ。とっておきがまだあるのを私知ってるよ」

黒雪姫「あれは発動するまでの隙が長すぎる!そのうちに奴にやられる!」

白雪姫「だから言ったじゃない、その間に私が相手するって。頼んだよ、サツちゃん」
姉さんはそう言うのと奴に向かって走っていった。たしかに私には『ジ・イクリプス』を超える技がある。だが姉さんは何故それを知っていたのだろうか……。いや、考えるのは

後だ。早く準備をしなきや。

私は両腕を上に掲げて、心意の力を腕に集中させる。両腕からは少しづつ雷が走っていく。この技は力を最大限まで溜めないと発動できない。だからまだまだ足りない。

姉さんのことは心配だ。だが、意識を途切らすわけにはいかない。今は姉さんの無事を祈ることと信じることだけだ。

半分まで貯めると腕が千切れるような感覚を襲う。以前モードレッドから言われたな。

モードレッド『今のお前じやこの技を使いこなすことは無理だ。必ず体に大きな負担が掛かっちゃう。使うとしても一発だけだ。連発は絶対にするな』

あいつの言う通りだ。これは相当やばいな。溜めれば溜めるほど体が痛くて仕方がない。それでもやめるわけにはいかない。

白雪姫「ゲイジャルグ!!」

ロータス「そんな変形させただけの武器が私に通用すると思うな!!」
白雪姫「きやあ!!」

前を見ると、姉さんが偽物に吹き飛ばされていた。このままだと奴はこつちに来る。奴はチャンスと思ってるようだが、それは間違いだ。むしろこつちがチャンスだ。もう最大まで溜めることが出来たからな!そして私は両腕を思い切り振りかざした。

黒雪姫「クラレント・ブラッドアーサー!!!」

私の両腕からは巨大な雷が走り、一気に奴を飲み込む。奴のHPは一瞬で消し飛び、その場で大きな爆発が起きた。土煙の中、私は膝をつき、両腕を抑える。普通なら泣き叫んでもおかしくないくらい痛い痛みが両腕を襲う。けど、弱音は吐いてはいられない。まだこの先も戦いがあるから。

キリト「終わつたみたいだな」

黒雪姫「キリト!?無事だったのか!?!」

キリト「なんとかな。白雪姫が回復させてくれたんだ」

白雪姫「サツちゃんも回復させるよ」

姉さんの回復アビリティで私のHPは最大まで回復した。けど、私の両腕の痛みは癒えることはなかった。

キリト「あれだけの大技だ。反動があつてもおかしくない。黒雪はしばらく戦闘を避けたほうがいい」

黒雪姫「それは断りたいが、変に戦って足手まといにはなりたくないな」

キリト「早く行こう。もう奨真たちも合流してるだろう」

私は姉さんとキリトに肩を貸してもらって、アスナたちの元へと急いだのだった。

第31話 塔の番人

超巨大エネミーと交戦してる楓子たち。数では圧倒的に有利なのだが、かなりタフでなかなかHPを削れないでいる。

まずは下の方にあるコアを攻撃して、エネミーのHPを半分まで減らさなきゃいけないが、そのコアからは超高火力のレーザーが放たれるため、なかなか近づけず、HPを減らせない。

楓子「スワールスウェイ!!」

あきら「メイルストロム!!」

ういうい「フレイムボルトクス!!」

3人の攻撃がコアに直撃する。ゲージ5本のうち、ようやく一本を削るが、一本だけでもかなり時間がかかった。このままじゃ半分削つても後半さらにきつくなって倒すのも難しくなるかもしれない。

アスナ「なんてタフなの」

イリヤ「シュナイテン斬撃!!近づいたらレーザーで遠距離でもレーザー。厄介すぎるよお!!」

美遊「それでもやるしかない」

クロエ「イリヤ！文句言つてないで手を動かす!!」

フィリア「まって！何か変だよ！」

エネミーは動きを止めると、下の方にあるコアが急に消えていった。それと同時に頭部を覆っていたバリアは消えて、無数の宙に浮いた腕が動き始める。

腕はバラバラに動き、楓子たちに襲いかかる。それに対抗しようとするが、思った以上に素早い。

エギル「くそ、攻撃が当たたらねえ」

ストレア「あーん！全然当たらないよお〜！」

クライン「なんつー速さだよ……」

タクム「はあ……はあ……」

ハルユキ「重たい武器だと当たらないってことなのか？」

ニコ「お前らうまく避けるよ！ヘイルストームドミネーション!!」

ニコは強化外装『インピンシブル』を装備して大量のミサイルを撃ちだす。楓子たちはそのミサイルを避け、ミサイルは腕目掛けて追いかける。

だが、それでもミサイルが当たったのは少しだけだった。

楓子「ニコ、遠距離攻撃は当たらないと思つてたほうがいいわ」

あきら「ミサイルや魔法攻撃だと余計にダメなの」

ういうい「たしかにそのほうがいいのです。でも私なら当てられるかもです」

アスナ「ういちゃん？何か策があるの？」

ういうい「賭けに近いですけど、これなら」

ういういは矢を持ち、弓を構える。一見ただ狙いを定めてるように見えるが、矢が少

しずつ光り始めていた。

ういうい「メディアさんとの修行で身につけた私の新しい技」

光が一定量集まり、ういういは腕のコアに目掛けて矢を放つ。

ういうい「光輪の矢!!」

その矢は名前の通り、光の速さで放たれる。矢は見事に腕のコアに命中してHPは一瞬で消し飛んだ。

シリカ「み、見えなかった……」

リズ「これならいけるんじゃない!？」

アスナ「でもういちゃんにばかり任せられるわけにもいかないわ。私たちもやるのよ」

ジャンヌ「はい。そのためにも作戦が必要です。皆さん聞いてください。あの腕はす

ごく素早いので、私たちが近づこうとしてもすぐに逃げてしまいます」

セブン「それはそうだけど、どうするの？」

ジャンヌ「逆に考えるのです。私たちがから攻めるんじゃないやなくて、向こうから攻めてもらうんです」

ロニエ「えっ!? それだとやられるんじゃないや……」

式「なるほどな。お前の作戦はもうわかった」

ジャンヌ「さすが式さん。さっきの戦闘でエギルさんやストレアさんのような重量系の武器を持つてる人は攻撃を当てるのはほぼ無理に近いことがわかりました。ならその人たちとマシユさんのように盾を持つてる人でタンクになってももらうんです。攻撃を受け止めてもらうてる隙に腕を攻撃するんです」

たしかにエギルたちはタンクに回ったほうがいいだろう。ジャンヌはそれを頭に入れてこの作戦を考えた。

クライン「お、俺タンクとかうまく出来る保証はねえぞ?」

エギル「刀でガードするだけだ。難しいことじゃねえ」

ストレア「ならタンクはアタシとエギル、クラインとスメラギ、あとはマシユとタクム、ティアとリズ?」

楓子「そうね。そしてジャンヌは後方から指示をお願いできる?」

ジャンヌ「任せてください」

式「ジャンヌ、追加いいか? 俺を含めた速さに自信があるやつに素早さ向上の魔法を

かけてやつに近づくのはどうだ？」

ジャンヌ「それもいい考えですね」

リーファ「ならあたしやるよ！」

ユウキ「ボクも！」

式「そして俺の3人だな」

そして作戦を実行するため、全員再び動き始める。タンク組は前に、アタッカーはその後ろ、そしてリーファとユウキ、式はアスナとセブンに素早さ向上の魔法をかけてもらう。

残り5本のうち一本が攻撃してくる。それに対してタンク組が前に出て防御する。その間にアタッカーたちが攻撃する。

だが他の腕がアタッカーたちを妨害しようとしてくる。それを邪魔させまいと他のタンクが防御する。

タクム「皆!!僕とエギルさんが持ちこたえてる間に腕を倒すんだ!!」

エギル「長くは持たねえ!!早くしろ!!」

シノン「ソードスキルを最大限でいくわよ!!」

タクムとエギルが邪魔をしてくる腕を抑えてる間に、ストレアとティアが抑えてる腕をシノンとシリカ、アルトリアとオルタがソードスキルと必殺技、心意技で攻撃する。

オルタ「ラ・グロントメント・デュヘイン!!」

アルトリア「ストライクエア!!」

2本目の腕を破壊したと同時に別の腕が攻撃してきた。今度はクラインとスメラギが防御に入る。アリスは金木犀の剣で、ティーゼは青薔薇の剣で攻撃する。そしてロニエはストレージからかつてキリトが使ってた愛剣『夜空の剣』を取り出した。

3人の連携プレーで腕のHPは急激に下がり始める。他のみんなもそれに続くが、それを邪魔するように2本の腕がものすごい勢いで突っ込んできた。素早さ向上の魔法をかけてもらったリーファとユウキ、式の3人は残り1本の腕の相手をしてるため、そつちを止めることはできない状態だった。

アスナ「くっ……、急にエネミーの動きが」

楓子「凶暴になった?」

カムイ「きつと腕の数が少なくなるほど、凶暴化するんだろう」

リサ「でもだったらリーファちゃんたちが相手してる腕が凶暴化してないのは?」

クロエ「3本までしか凶暴化できないってことじゃないの?」

そんな話をしてるうちに、リーファとユウキ、式はエネミーを倒して楓子たちと合流する。

それに続いて、自分たちの偽物を倒した奨真と白夜、蓮と偽黒の王を倒した黒雪姫と

白雪姫、キリトも合流する。

奨真「なんて速さだよ……」

白夜「あれじゃ防御はできても攻撃できねえぞ」

皆今の状況に絶望してきていた。たしかに目で捉えるのもやつとの動きをしてるエネミーに攻撃を当てるのは困難だ。ジャンヌも必死に戦略を立てようとするがなかなか浮かばない。

そんな時、突然誰かの笑い声が聞こえる。その声は奨真たちバーストリンカーが聞いたことのある久しぶりに聞く声だった。その声が聞こえてくる空を見上げると、黄金の戦艦のようなものに乗った金ピカの鎧を着た人物がいた。

???「フハハハハ!!無様よなあ雑種!!この程度のやつ相手に苦戦するとはおもわず笑ってしまいわフハハハ!!」

その人物とはかつて奨真と死闘を繰り広げた英霊級エネミー『ギルガメツシュ』だった。

「『ギルガメツシュ!?!』」

ギルガメツシュ「フハハハハ!!ここまで笑ったのも久しぶりだ!!貴様らの歴史に刻む
がいい!!『王腹筋崩壊』とな!!」

???「ギル、そろそろ彼らを助けてあげたら?」

楓子「他に誰かいるわ」

ギルガメツシユの後ろから、緑色の髪をした青年が姿を現わす。

黒雪姫「あれは誰だ？」

奨真「わからん。というかあの金ピカ友人いたのか」

オルタ「さあ？」

ギルガメツシユ「聞こえておるぞ雑種!!」

???「自己紹介は後でするよー!!」

ギルガメツシユ「我にとつては非常に不本意だが、今回は貴様らを助けてやらんこともない。光栄に思え」

そう言つて身を乗り出すギルガメツシユ。するとギルガメツシユの背後から無数の発射口が現れて、そこから大量の武器が雨のように巨大エネミーに向かって降り注ぐ。

近くにいた者は急いで後ろに下がり、避難する。エネミーの腕はあつという間にHPがゼロになり、残るは本体のみとなった。

レイン「す、凄い……まるで奨真君の必殺技みたい」

腕を全滅させたギルガメツシユは青年と共に戦艦から飛び降りて、奨真たちの前に移動する。すると今度は青年が自分の体から鎖を出現させて、エネミーの動きを封じる。

???「ギル、今だよ」

ギルガメツシュ「ふん、余計なことを。まあよい」

今度はエアを取り出してエネミーに向ける。エアが動き出すと、大地が大きく揺れ始める。

ロニエ「わわわっ！な、なんですか!?!」

ティーゼ「じ、地震!?!」

???「盾を使える子たちはみんなを守ったほうがいいよ」

そう伝えると、白夜とマシユは盾を構え、奨真は『ローアイアス』を投影する。

ギルガメツシュ「エヌマ・エリシュ!!!」

技が放たれると、エネミーは跡形もなく消し飛び、あたりの地形は衝撃によって一瞬にして変わってしまった。

???「さて、終わったことだし自己紹介だね。僕はエルキドゥ。そうだね、ギルのサポ―

ト兼ストッパーかな？」

ギルガメツシュ「こんな雑種ごときにエアを使わせよつて。貴様はこの我に勝つたのにもかかわらず苦戦したのか？」

楓子「奨真君は自身の偽物と戦ってたわ。エネミーの相手はしてない」

ギルガメツシュ「貴様はあの時の女か。ふん、そんなガラクタのような姿じゃあどんな女かもわからないな」

エルキドウ「ごめんね、ギルは女の人を見ると興味が湧いてくる性格でね」

キリト「とりあえず戦闘は終わったし、楽にしたらどうだ？」

バーストリンカーたちはデュエルアバターからダミーアバターへと切り替える。楓子の目の前にいたギルガメツシユは楓子を見るととんでもないことを言い出す。

ギルガメツシユ「ほう、なかなかの美人ではないか。よい、お前を私の妻にしてやろう光栄に思えフハハハハ！」

楓子「えっ？」

奨真「喧嘩売ってるのかおい。楓子は俺の彼女だ。お前の妻になんかさせるかよ」
ギルガメツシユ「この我に刃向かうのか？」

奨真「何度だつてぶっ倒してやるよ！」

アスナ「ちよちよちよ!!ストップストップ!!喧嘩してる場合じゃないでしょ!？」

エルキドウ「そうだよギル。とりあえず彼女に謝ろうか」

ギルガメツシユ「いだだだだ!?!エルキドウ!!貴様いつのまにそんな技を!!」

エルキドウはギルガメツシユにアイアンクローを決めていた。しかも顔は怒ってるのではなく笑っているから余計に怖い。

ハルユキ「あの、英雄王ってあんな感じの人……でしたっけ？」

黒雪姫「いや、違った……ばずだ」

いつまでもギルガメツシユとエルキドウがじゃれあつてるので、奨真はそれを止めに入る。

奨真「で？俺たちに何の用なんだ？まさか事情を知つてて助けに来たつてわけじゃないだろ」

ギルガメツシユ「わかつてるではないか。我はお前たちの手助けなどせん」

イリヤ「さつき助けてくれましたよね？」

エルキドウ「あれはギルの気まぐれだよ。僕はもともと助けに入るつもりだったけどね」

ギルガメツシユ「まあ我にもやることがあるからなあ。どうしても助けが欲しいと言うなら、エルキドウ、お前がいけ」

エルキドウにそう指示するギルガメツシユ。まさかあの王が手助けのために自分を使わせるとはエルキドウも思わなかったのか、驚きを隠せないうでいた。自分勝手な王は困つてる人がいても決して誰も向かわせなかった。その王が初めて人助けで誰かを使わせたのだ。

エルキドウ「驚いたな。まさか君がそんなことを言うなんて」

ギルガメツシユ「私の気分が変わらんうちにさつさと行くんだな。だが、そうだな、条件付きとしてエルキドウは援護のみだ」

獎真「それでも助かる。じゃあ行こうか。エルキドウ、よろしく頼む」

エルキドウ「任せておいてよ」

獎真たちはギルガメッシュに背中を向けて、塔の入り口に向かう。入り口にある窪みに7つのオーブを全てはめ込む。すると扉は開いていき、全員中へと入っていった。

第32話 バベルの塔

新たに『エルキドゥ』を加えた奨真たち。塔の中に入ると、そこは今までのダンジョンとは全然違う感じがした。

白夜「なんだここ？」

チユリ「なんかダンジョンというか……別の空間みたい……」

キリト「えつと……ダンジョン名は……『バベルの塔』」

各々で周囲を見回していると、黒雪姫はあることに気づき、キリトたちALOプレイヤーやイリヤたちに伝える。

黒雪姫「キリト。我々バーストリンカーには虚無を扱うものがある」

アスナ「虚無？」

黒雪姫「この世界には来てないと思うが、そのバーストリンカーの体内では、時間経過がなく、自身の感覚すらも消える」

黒雪姫の言葉に白雪姫が追加で答える。

白雪姫「その中で過ごすことで、周囲の時間を感じることなく、いくらでも時間を飛ばすことができます」

キリト「それって、お前らにとってかなり脅威なんじゃ……」

キリトのその問いにはハルユキとタクムが答える。

ハルユキ「はい、現実世界で加速してバーストリンクする僕らにとっては、その力は脅威です」

タクム「待ち伏せという行為ができてしまうのです。もちろん、簡単にPKを可能に
してしまいます」

シノン「もしかして、この空間がその虚無空間ってことかしら？」

藤乃「この塔の扉が閉じてる時はそうだったみたいです。現に微かにその感覚は感じ
ますが、今は効果がなくなってます」

アスナ「なら、ユイちゃんの時間はずっと止まってたってことになるのね」

黒雪姫「ああ、そういうことになる」

キリト「なら都合がいいぜ。ユイに『パパ、ママ、遅すぎます！』ってどやされない
で済むからな！」

エルキドゥ「でも、彼女の元にたどり着くのが遅かったらどやされるかもね」

余計な一言を言ってしまうエルキドゥ。それを言われたキリトは一瞬黙ってしまい、
困った表情をする。

レイン「エルキドゥ君、それは言っちゃダメだよ」

美遊「皆さん、あれを見てください」

美遊は何かを見つけたらしく、その方へ指差す。その先にあつたのは上へと繋がるワープゾーンのようなものだ。それをシノンが視力を上げて見てみると、あの中に入ると無重力になるように見えた。

シノン「あの中に入ると体が無重力になるみたいね。あれで上に上がっていきましょ」

ワープゾーンへと向かおうとする奨真たち。その途中でカムイが立ち止まり、後ろを振り返る。気になったユウキはカムイの元へ駆け寄る。

ユウキ「カムイ？」

カムイ「いい加減姿を見せたらどうだい？」

ユウキ「誰かいるの？」

カムイが声をかけると、物陰から人が出てきた。その人物は黒と紫をメインにしたドレスを身に纏い、顔には仮面をつけた女性だった。そう、ペルソナ・ヴァベルだった。カムイ「君がペルソナ・ヴァベルだね。まさかそつちから来てくれるとは思わなかったよ」

ユウキ「ヴァベル！」

ヴァベル「とうとうここまで来てしまったのね」

カムイ「ユイちゃんを助けるためだからね」

ヴァベル「そのユイがそれを望んでないとしたら？」

カムイ「何っ？」

ヴァベル「あの子が助けてほしいなんていつ言ったの？ 妾はずっとあの子と一緒にいたけど、一言もそんなこと言っていない。だから『それは彼らに心配をかけさせないためじゃないのかい？』……誰？」

ヴァベルの言葉を横から挟んだのは、皆と先に進んでいたはずのエルキドゥだった。ゆつくりとヴァベルのほうへと歩み寄るエルキドゥは敵意こそ出してないが、不思議な圧を放っていた。

ヴァベル「っ!? お前は……エルキドゥ!? 何故お前がこの時代に!？」

エルキドゥ「僕を知ってるのかい？ ああそつか。知ってて当然だよ。千年もこのV R世界にいればね」

ユウキ「エルキドゥ、君はいつたい」

エルキドゥ「彼女の正体がわかった気がするよ。たぶん彼女は千年後の」

ヴァベル「黙れ!!」

言いかげのところでヴァベルは大声で阻止する。彼女の正体に気づいたエルキドゥにそれを言わせないために。

エルキドウ「……………まあ今は黙っておくよ。けど、この塔の最上階でまた会えば、君自身も言わざるを得なくなるよ」

ヴァベル「それは妾が決めることだ」

それだけ言うと、彼女はうつすらと消えていった。その場に取り残されるようになった3人。ユウキはエルキドウにさっきの話を聞こうとした。

ユウキ「ねえエルキドウ。君はなんでヴァベルの正体がわかったの？」

エルキドウ「んーそうだなあ。答えは最上階で言うとして、ヒントを言うなら僕はこの世界ですつと生き続けてるからかな」

そう言うと、エルキドウは皆のもとへ戻るために足を進める。ユウキとカムイも続いて足を進め始める。

カムイ（この世界ですつと生き続けてる？まさか彼は……エルキドウというエネミーは奨真君のいた未来で誕生したんじゃない、それ以前から存在したのか？）

ユウキ「カムイ。たぶんだけど、ボクもカムイと同じことを考えてる」

カムイ「エルキドウ。君はいったい何者なんだ」

そう囁いたカムイだが、その声は決してエルキドウに届くことはなかった。

一方褒真たちはワープゾーンで上にあがり、先へと進んでいた。途中でエネミーと遭遇するが、難なく倒していく。

クライン「この中のモンスターはとびきり強いわけじゃねえな」
ハルユキ「そうですね。先に進みやすいですしラッキーですね」

中にいるエネミーは『ヴォークリンデ』『フロスヒルデ』『ヴェルグンデ』の3エリアにいるのと同じだった。先に進み続けていると、新しいワープゾーンが見えてきた。

白夜「おっ？見えてきたぞ」

クライン「よっしやあ！俺様が一番乗りだあ！」

キリト「あ、おい待て！」

クラインを追いかけるようにキリトも走り出す。その時、ワープゾーン付近に違和感を感じた蓮が糸を伸ばして止めようとする。だが間に合わず、キリトとクラインは見えない壁のような物に激突する。

キリト「ぶっ!？」

クライン「ゲボツ!？」

蓮「間に合わなかったか……」

アスナ「キリト君!?!大丈夫!？」

ロニエ「キリト先輩!？」

シリカ「キリトさん!？」

続々とキリトを心配する者は増えていくが、クラインの心配は全くされてなかった。クラインは激突のダメージよりも心のダメージの方が大きかった。

クライン「そりやねえぜ皆……」

ストレア「大丈夫？ おっぱい揉む？」

クライン「ええっ!？」

ストレア「うっそびよん！」

クラインをからかい、笑顔でキリトの元へいくストレア。その光景を見ていたバーストリンカーたちはクラインにジト目を向ける。

クライン「な、なんだよ……」

チユリ「いやあ……なんか単純な人だなあ〜って」

オルタ「エロに反応しすぎ」

レミ「オブラートに包んでキモいです」

クライン「包めてねえよ!？ 皆俺の扱い酷くねえか!？」

クラインは泣きながら隅っこで拗ねはじめる。それを見たエギルは慰めにいき、復活したキリトは壁の解除方法を探す。

キリト「何か方法は……」

リーファ「あ、お兄ちゃん!？ ここ見て!？」

リーファは壁の横にある柱に文字を見つめる。キリトは皆に聞こえるように声を出して読み始めた。

キリト「なにになに？ 装置の解除方法『異性同士でキス（5組）』以上」

全員「「はっ?」」

内容はダンジョンの雰囲気をつち壊すような内容だった。それもそうだ。バベルの塔は暗い空気が漂うダンジョンなのに、この内容はあまりにも似合わなさすぎる。

しばらく固まっていたが、その空気を破る者がいた。それは小刻みにプルプルと震えていたオルタだった。

オルタ「な、な、な、なんなのよこれ!?!?!」

ニコ「ふざけすぎだろ!?!しかも5組つてなんだよ!?!」

クロエ「なら私はイリヤと美遊とすればOKね。普段からやってるし」
アスナ「ま、まま待つて!?!ここに異性同士つて書いてる……けど」

イリヤ「そ、そうだよクロ!あとさりげなく皆に暴露するのやめて!?!」

リズ「あんたら普段からんなことやってるの?」

イリヤ「ややややつてませんよ!?!ねっ!美遊!?!」

美遊「えっ!?!えっと……うん」

顔を赤くし、目を逸らしながら美遊は頷く。実際イリヤたちがやってるゲームでは魔力供給のためにそういう行為をやったりしている。だがいくらゲームでもこのことは知り合いにバレたくない。だからイリヤは必死に嘘をつくが、イリヤと美遊の反応を見て、全員が気づく。

ストレア「んーとりあえず3組は確定じゃない？」

フィリア「とうと？」

ストレア「キリトとアスナ、奨真と楓子、白夜とあきら！」

キリト・アスナ「ええっ!？」

白夜「恥ずかしいが、まあいつか」

あきら「なの」

奨真「先に進むためだ。恥ずかしがってる場合じゃない……よな」

楓子「私はいつでもいいわ♪」

キリトとアスナはストレアの発言に驚き、奨真と白夜は恥ずかしがる。あきらと楓子に至っては4人と正反対の反応をする。

早速キリトとアスナはキスしようとするが、途中でやめてしまう。2人はギギギッと首を動かして他の皆のほうへ振り向く。皆はドキドキしながらその光景を見ようとしていたのだ。

キリト「あの……できれば見ないでほしいんだが……」

リズ「別にいいじゃない。さっさとしちゃいなよ！」

アスナ「り〜ズ〜?あと皆も後ろを向いてよ〜ね〜?」

全員「「は、はい……」」

アスナの黒い微笑みを見て、恐くなったのか全員言う通りにした。そして2人は気を取り直して、ゆっくりと顔を近づける。お互い唇を軽く触れさせる。そしてゆっくりと離していった。

アスナ「つ、次は……誰？」

楓子「では私と奨真君が」

入れ替わりで見えない壁の前に立つ奨真と楓子。キリトとアスナと同じようにしようと考えていた奨真だが、楓子がそうはさせなかった。楓子は舌で奨真の口の中をこじ開け、自分の舌を奨真の舌に絡めさせた。

最初こそ驚きはしたが、奨真はそれを受け入れて、自分からも舌を絡めさせた。1分ほど繰り返して、ようやくお互い離れた。

光景こそは見られてないが、音や声は聞こえるため、聞いていた人は顔を赤くしていた。

楓子「そこまで激しくしなくても」

奨真「最初にやってきたのは誰だ？」

アスナ「ふ、2人とも！もう大丈夫!?終わったの!？」

奨真「はい、終わりましたよ。じゃあ次は白夜たちだ」

白夜「おうよ！」

次の白夜とあきらは熒真と楓子のようなことはせず、軽く唇を当てる程度のキスで済ませた。3組はなんとか終わるが、まだ問題はあつた。残りの2組はどうすればいいのか。

リーファ「どうしましょう？」

ユウキ「なにになに？皆どうしたの？」

後ろから遅れてやってきたユウキとカムイ、そしてエルキドゥ。3人に事情を説明すると、ユウキたちは皆と悩み始める。

ユウキ「んーあと2組かあ」

エルキドゥ「僕は別にやつても構わないよ。それに僕は性別という概念がないから誰とやつても条件はクリアさ」

リサ「なんか私の師匠を思い出す」

式「あとデオンだな」

リサの師匠、それはシャルルマーニュ十二勇士の1人『アストルフオ』。理性が蒸発してる色々つぶつ飛んでる英霊級エネミーである。性別がわからないのはシユバリエ・デオンも含まれる。

アリス「私はそういうことをするならユージオとしかしません」

ティーゼ「わ、私もです！」

オルタ「ただそれのこと好きなのよ」

エルキドゥ「ユージオってこの人のことかい？」

そう言つてエルキドゥは自分の身体から鎖を出す時と同じように、自分の身体から青い服を着た少年を取り出した。

???「痛っ！全く……災難だよ。急に見たことないところに飛ばされるし、緑の髪の子に連れ去られるし、キリトやアリスとも逸れるし……」

その人物とはキリトやアリスがエギルの店で言っていた戦死したはずのユージオだった。そのユージオが死人として復活して戦った人もいるため、また蘇ったのかと疑い始める。

アリス「ユージオ!？」

ユージオ「あつ！アリス！それにキリトも！無事だったんだ！」

キリト「ま、待て！お前本当にユージオか？お前はあの時死んだはずじゃ……」

ユージオ「えっ？酷いこと言うなあ。僕はこの通り生きてるじゃないか。ってなんでロニエとティーゼが!?!カーディナルと一緒にいたはずじゃ……」

5人が会話してる別の場所で、奨真はエルキドゥに話しかける。奨真はユージオと戦っているため、倒したはずのユージオが何故この場にいるのかが疑問で仕方ない。

奨真「エルキドゥ、あいつはキリトたちが言うには死人のはずだが」

エルキドウ「うん、知ってるよ」

奨真「ならなんで生きてるんだ」

エルキドウ「簡単だよ。こう考えればいい。別の世界のユージオと」

ユウキ「つまり、別の世界線ということだね」

理解できた奨真たちはもう一度キリトたちの方を見る。彼らは彼らにしかわからない会話をしている。

ユージオ「全く、カセドラルは危険だつてあれほど言ったのになんで付いて来ちゃつたの！カーディナルと一緒にいけば安全なんだよ！」

キリト「ちよちよちよつと待つてくれ！一度説明してくれ！」

ユージオ「キリトまで何言つてるの？僕は禁忌を犯してセントラルカセドラルに連れていかれたじゃないか。それでアリスを探すために脱獄して、整合騎士と戦つて、やつとアリスを見つけたら何故かロニエとティーゼがその場において、別の整合騎士に襲われてるところをカーディナルに助けられたじゃないか」

キリト（過去にあつた出来事と全く同じだ）

ロニエ「その後のこともお願いしてもよろしいですか？」

ユージオ「えっ？あとはカーディナルに色々と聞かされて、アリスも僕らと一緒に戦うつて言つてくれて、再出撃までの一週間はゆっくり過ごしたくらいだけ」

ティーゼ（本物の先輩だ。でもそれなら剣が反応するはずなのに）

奨真「キリト、彼は別の世界線のユージオだ」

キリト「別の世界線？」

エルキドウ「パラレルワールドだよ。だって君たちの世界線ではたしかに彼は死んだからね。その証拠にティーゼの剣が反応してないだろ」

ティーゼが持つ青薔薇の剣は本来の持ち主が近くにいると強く反応する。持ち主であるユージオがすぐそばにいるのに反応しないのはそのユージオがティーゼが持つ青薔薇の剣の持ち主ではないからだ。

エルキドウ「とりあえず彼にも事情を説明するから、ちよつと借りるよ」

エルキドウは鎖でユージオを拘束して別のところに移る。しばらくして戻ってきた。

ユージオ「事情は色々聞いたよ。どうやら僕は君たちとは違う世界線から来たらしいね。とにかく、僕も協力させてくれ。親友の危機は放つて置けないからね」

キリト「ああ！お前がいれば心強い!!」

ユージオという強力な助っ人も加わり、さらに勢力は増していく。一方、別の場所では白雪姫が何かを真剣に考えている。

白雪姫「未来から来た私たちと別の世界線からやってきたあの人。この時代のVR世界に一体何が起きてるの？」

蓮「お嬢、あくまで俺の勘だが、ヴァベルが関わっているんじゃないか？ヴァベルが突然現れるようになって、俺たちも未来からやってきた。ありえないことがどんどん積み重なって行って、このVR世界の世界線までも歪んでいった」

白雪姫「ありえなくもないですね。あとはあのエルキドウというエネミー。強さだけじゃなく、素性も全くわからない」

蓮「一応警戒しておく」

白雪姫「お願いね」

こうしてユージオが加わり、そしてますます謎に包まれていくエルキドウ。だが皆忘れていた。まだあと2組残ってることに。

第33話 災禍再び

並行世界のユージオが加わり、戦力が増した一行。だがまだ難関が残っていた。

キリトとアスナ、奨真と楓子、白夜とあきらの3組のおかげで装置の解除の半分を終わらせることができた。しかし、まだあと2組残っていた。その2組をいつたい誰がやるのか。それについて今は話し合いをしている。

プレミア「同じ人とキスは効果がないみたいです」

ティア「残ってる男はクライン、エギル、カムイ、ユージオ、スメラギ、ハルユキ、タクム、蓮、寿也、エルキドウ」

エギル「俺はパスで。かみさんがいるからな。まあその前に俺は大人だからなあ」

スメラギ「俺も却下だ」

クライン「俺は全然いいぜ！」

オルタ「あんたは絶対却下」

クライン「ひでえ！」

アリス「1組目はここにいます」

アリスは手をあげてそう言う。1組目は誰と誰なんだろうと周りを見渡していると、アリスがユージオの元に向かう。そのままユージオの手を掴み、さっきのように手をあげた。

アリス「私とユージオです」

ユージオ「ア、アリスっ!」

ティーゼ「な、な、なっ!?!アリスさんずるいです!!私とユージオ先輩です!!」

ユージオはもちろん驚くが、ティーゼは対抗するかのようによろこぶようにユージオの右腕にしがみつく。アリスも負けないようにユージオの左腕にティーゼよりも強くギュツとしがみつく。2人に挟まれてるユージオは片方は鎧で感触はないが、右腕の方に感じる柔らかい感触に顔を赤くする。

ユージオ「ふ、2人とも落ち着いてっ!」

キリト「相変わらずモテモテだな」

クライン「くそお……このリア充があ……」

藤乃「爽やかイケメンは強いですね」

式「何言ってるんだ?」

2人は他の皆を放って互いに火花を散らして。アリスはティーゼが鎧なしで密着していることに気づき、自分も黄金の鎧を装備から外した。

アリス「あなたが色仕掛けで仕掛けるなら私も対抗します！私のほうが大きいですかー！」

ティーゼ「ああっ!?!私がい番気にしていることを言いましたねっ!?!言っておきますけどアリスさんよりロニエのほうが大きいですから!!」

ロニエ「ちよつとティーゼっ!?!」

リズ「へえくあんた大きいんだ？」

アルトリア「隠れ巨乳ですか。なら私の敵です。ティーゼは仲間です」

ティーゼの急な暴露でとぼちちりを食らい始めるロニエ。リズは手をワキワキとさせて、アルトリアは死んだ目をしてジリジリと寄っていく。

ロニエ「ティーゼえええ!!」

2人からとにかく逃げ回るロニエ。そんな彼女を放置して2人はまだ火花を散らす。

アリス「ロニエが大きいとか今はどうでもいいんです。問題はどっちがユージオにふさわしいのかです」

ティーゼ「そ、それは私です！ユージオ先輩とは修剣学院で共に過ごしましたし、告白もしてます！」

アリス「私は膝枕をしてあげています。添い寝もしたことあります！」

ユージオ「キリトっ！見てないで助けてくれ！」

キリト「ふ、2人とも一回落ち着こう。なっ？」

アリス・ティーゼ「ちよつと黙っててください！」

キリト「あ、はい……」

2人の威圧に押されるキリト。恋する乙女が強いというのはこういうことなんだろう。誰も彼女たちを止めようとするものはいなかった。何故なら、怖いからだ。

一方でロニエはリズとアルトリアに追いかけてまだ逃げ続けている。だがリズとアルトリアはロニエの体力の多さに参ったようで、諦め始めている。追いかけてもやつと終わると思い、ホツとしてるロニエに何者かが飛びついた。

ロニエ「きゃあっ!？」

突然のことで倒れるロニエ。その飛びついた人物は女性の胸が大好きで特にマシユの胸が大好きな寿也だった。そして手はすぐにロニエの胸へと伸びていった。

寿也「ほんとだ！大きい！」

ロニエ「えっ！ちよ、ちよつと待ってっ!？」

慣れた手つきでロニエの胸を揉んでいく。揉まれているロニエは必死に離れようとするが、力が抜けてしまう。

ロニエ「ダ、ダメえ……やん！」

寿也「ロニエさんのおっぱい柔らかい！」

オルタ「誰か止めなさいよ」

シリカ「オルタさんは力もあるしあつという間に止めれるのでは？」

オルタ「嫌よ。私までやられそうだし」

白夜「寿也やめろ！困ってるだろ！」

白夜が寿也をロニエから無理矢理剥がして遠ざかる。解放されたロニエは顔を赤くし、息を切らして寝転がっている。

ロニエ「はあ……はあ……」

ストレア「おおくエロいねえ」

ロニエ「な、何で私が……」

白夜「なんかすまん」

こつちでの騒動は収まるが、アリスとティーゼの戦いはまだ続いている。このままじゃ埒があかないと思い、キリトはユージオにある提案をする。

ユージオ「ええっ!?!何言ってるんだよ!?!それだと僕は確定じゃないか!?!」

キリト「いや、こうでもしないと終わらないと思うぞ?」

ユージオ「うう……わ、わかつたよ」

意を決したユージオは取っ組み合いをしてるアリスとティーゼに近づき、キリトに言われた通りに言う。

ユージオ「アリス！ティーゼ！じゃんけんで決めたらどうかかな！」

その言葉を聞いた2人は動きを止めてユージオをジツと見る。一度2人は顔を見合わせるが、また視線はユージオへと移る。

アリス「じゃんけんですか？」

ユージオ「う、うん。この方が公平だし早く決まるんじゃないかな？」

ティーゼ「たしかに公平ですが……」

ユージオ「どうかな？」

アリス「わかりました。ティーゼ、じゃんけんをしましょう」

ティーゼ「ま、負けません！」

2人はじゃんけんとは思えない、まるで抜刀するような構えをする。空気は少しずつ重くなり、緊張感が増していく。気合いを入れた2人は大声で叫ぶ。

アリス・ティーゼ「最初はグー！じゃんけん、ポン！！」

アリスはグー、ティーゼもグー。2人とも同じだからあいことなる。

アリス・ティーゼ「あいこでしょ！！」

また2人は同じのを出し、あいこになる。

アリス・ティーゼ「あいこでしょ！！あいこでしょ！！あいこでしょ！！」

何度も何度もあいことなり、なかなか終わりが見えてこない。2人は何度もじゃんけ

んをして息切れをしてきていた。

奨真「なあ、あの2人なんで息切れしてるんだ？」

楓子「気合いを入れてるからじゃない？」

アリス「こ、これではキリがありません。ティーゼ、私は次はパーを出します」

ティーゼ「そ、そうきましたか。なら私はチョキを出します」

アリスは心理戦にでて、ティーゼはそれに乗っかることとなつた。アリスは口ではパーを出すと言っているが、実際に何を出すかはわからない。だからティーゼもアリスを混乱させるためにチョキを出すと言ひ出した。

アリス（私はパーを出すと言ひましたが、ティーゼはチョキを出すと言ひ出しましたか。もし彼女の言つてることが本当なら私は負けてしまう）

ティーゼ（アリスさんのことですら本当にチョキを出してくるかもしれないと思つてるかもしれませんが。だからアリスさんはグーを出してくるかもしれませんが。ならここは……）

アリス・ティーゼ「あいこで……しよ!!」

この時、勝負は決まつた。アリスはパー、ティーゼはグーを出して、結果はアリスの勝ちとなる。

ティーゼ「なっ!？」

アリス「ふつ、ここはあえてあいこを狙いにいって正解でしたね」

ティーゼ「あいこ？」

アリス「私がパー、あなたがチョコキを出すと云ってから私はずっと考え続けました。もしお互いのことが本当なら私は負けてしまう。なら私はグーを出すしかない。ですがあなたはそれを読んでパーを出すと思いました。なら私はここはあえてあいこを狙えばいいと考えました」

ティーゼ「それは何故ですか」

アリス「あのまま私がチョコキを出せば間違いないあなたもグーを出してきた。だからその前のあなたの手を読んであいこを狙うためにパーを出したんです」

ティーゼ「先を見続けず、その前の手で勝負を仕掛けてくるなんて……参りました」
ティーゼは素直に負けを認め、アリスとユージオから離れる。見事勝利したアリスはユージオと向き合い、彼の両頬に両手を添える。

ユージオ「ど、どんとこい！」

アリス「あなたの世界の私はどう思ってるかはわかりませんが私はあなたのことが好きです」

ユージオ「アリス……」

アリス「……本当は私があなただを求めてはいけなかった。私とあなたは違う世界に住

む人間。私がどんなにあなたが好きでも求めてはダメなんです。でも……どうか今だけは……許してほしい」

アリスの瞳から静かに涙が流れる。今日の前にいる彼は平行世界のユージオ。アリスがいる世界線ではもうユージオはいない。本当なら彼のことを諦めなきゃいけないのに、どうしても目の前の彼を求めてしまう。アリスはそんな自分が醜くて仕方がないと思っっている。そんな彼女も今の自分とはサヨナラしたいと思っっている。だから最後にこの行為だけを許してほしいと願った。

ユージオ「泣かないで。この世界の君にどんな事情があるかわからないけど、僕はそれを受け止めるよ」

アリス「っ……ありがとうございます」

ユージオは目を瞑る。アリスは気を取り直し、自分の唇をユージオの唇に近づける。やがて重なる、あつという間にアリスは離れる。それはほんの少しだけのキスだった。アリスの顔はまるでトマトのように真っ赤に染まり、ユージオは少しだけだが顔を赤くしていた。

その時、先を阻んでいた障壁は少しずつ消え始め、約10秒ほどで完全に消えた。

リーファ「あれ？あと1組残ってたような」

ユウキ「きつと5組と見せかけて4組だったんだよ！さきつ！早く行こう！」

ユウキはみんなを急かすように先を進もうとする。なぜ急にこんな風になったんだろうと誰もが疑問に思っていると、奨真はユウキの顔と後ろにいるカムイの顔を見てあることに気づいた。

2人の顔は少しだけだが赤くなっていたのだ。何故赤くなってるんだろうと考えた。急に障壁が消えたことと2人の顔が何故か赤いこと。この2つの歯車が奨真の頭の中でちょうど噛み合った。

奨真（ああ……そういうことか）

それに気づいたのは奨真だけで、他の皆は全く気づかないままだった。でも奨真はそのことは皆に伝えず、自分の中に留めることにした。

上上がり、ワーブゾーンを見つけてはまた上上がるの繰り返しで、とうとう最後のワーブゾーンで上に上がった。その先あったのは何もなかったのフィールドだった。

ストレア「あれ？まだワーブゾーンあるね」

フィリア「あれが最後じゃなかったみたいだね」

レイン「じゃああれが本当の最後かもしれないね」

イリヤ「っ!?!あの先に何かいます!?!」

イリヤが見えたのは凶暴そうで巨漢の真っ黒なアバターだった。それを見た瞬間、全員の身が引き締まる。何故ならそのアバターこそがバーストリンカーたちにとっては

天敵であり、キリトたちにとっては初めて見た負の塊のAvatar『クロムディザスター』だったからだ。

オルタ「まさかこんなところにいたなんてね」

ロニエ「あ、あんな負の塊は初めて見ました」

ティーゼ「でも、やるしかない」

ユージオ「あれが何かはわからないけど、僕たちなら大丈夫！」

全員武器を構えていつでも戦えるように整える。そんな時だった。奨真は突然胸を押さえて苦しみだした。

奨真「ぐう……あが……」

楓子「奨真君っ!？」

ハルユキ「どうしたんですか!？」

奨真の体は少しだが、だんだんドス黒く変わっていった。それを見た黒雪姫はすぐにチユリに『シトロンコール』をするように指示を出す。

黒雪姫「チユリ君!すぐに『シトロンコール』を!」

チユリ「は、はい!シトロン!!コール!!」

『シトロンコール』を受けた奨真はドス黒かった部分が少しずつ元の色に変わっていった。

白雪姫「サツちゃん、これってまさか」

黒雪姫「ああ。彼の中にある災禍の鎧の一部が目前の災禍の鎧と共鳴してるんだ」

ヴァベル「察しがいいのね」

突然上空から声が聞こえて、上を見上げる。そこにはワープゾーンから下に降りてきてるペルソナ・ヴァベルの姿があった。

ヴァベル「この災禍の鎧の負の心意を極限まで高めて彼の中に眠る災禍の鎧と共鳴させて暴走させようと思ったんだけど、失敗のようね」

アスナ「ヴァベル……あなたはどこまでこんな酷いことを!!」

ヴァベル「まあいいわ。まだ手は残してるもの」

ヴァベルは手を上にかざして、奨真たちのところに振り下ろした。その時、地面から負の心意でできた柱が飛び出してきて、やがて檻となり奨真たちを閉じ込めた。唯一逃げ出せたのはキリトとユージオ、アリスの3人だった。

キリト「あの檻、初めからバーストリンカーたちを狙いにしてたみたいだ」

アリス「彼らが1番対処できるからでしょう」

ユージオ「でも、彼らからアドバイスは貰うことはできる」

ヴァベル「チツ……厄介な3人が脱出したわね」

ヴァベルはそれだけを言うとまた上に上がっていった。キリトは右手に『ユナイティ

フォークス』左に『フェイトリレイター』を、ユージオは『青薔薇の剣』を、アリスは『金木犀の剣』を持ち直してクロムディザスターと向き合う。

閉じ込められた他の皆は、なんとか檻を壊せないか色々試していた。奨真の方はチュリの『シトロンコール』のお陰でだいぶマシになってはいたが、まだ危ない状態だった。

楓子「奨真君！頑張って!!」

奨真「があ……俺は……っ!？」

キリト「楓子！奨真のことをなんとかできるのはあんただけだ！奨真を頼んだぞ!!」

楓子「っ!?!ええ!!任せて!!」

ユージオ「よし！やろう!!」

アリス「速攻で終わらせます!!」

キリト「2人も！いくぞ!!」

3人は吠えている災禍の鎧『クロムディザスター』に突っ込んでいった。

第34話 精神世界

アリス「巡れ花たち!!」

ユージオ「エンハンスアーマメント!! 咲け!! 青薔薇!!」

キリト「ヴォーパルストライク!!」

アリスとユージオは後方からキリトを支援し、キリトは片手剣上級ソードスキル『ヴォーパルストライク』でクロムディザスターに突進する。

キリトの剣はクロムディザスターの胸に当たるが、装甲が硬いため貫くことができなかった。腕を掴まれて自由を奪われたキリト。だがこれがキリトたちの狙いだった。後ろからユージオの青薔薇の剣の氷がクロムディザスターを覆い始める。このままではキリトまで凍ってしまうが、その前にアリスの花がキリトとクロムディザスターを分離させた。

キリト「黒雪の言う通りだったな」

アリス「ええ、奴は相手を捕食して力を蓄える。なら誰かがわざと捕まり、捕食される前に動きを止めればいいだけのこと」

ユージオ「そして囷の人は巻き込まれる前にもう1人が助ける」

3人「「俺（僕）（私）たちにかかれれば敵はいないも同然!!」」

3人がクロムデイズスターと戦っている他所では奨真が災禍の鎧の侵食を必死に耐

えていた。浄化の力を持つ謡でも、これだけ強力なら抑えられないようだ。

楓子「奨真君！負けないで!!」

エルキドウ「メイデン、僕と代わるんだ」

ういうい「で、でも！」

エルキドウ「いいから、代わるんだ」

ういうい「……はいなのです」

エルキドウは謡と交代し、倒れてる奨真の隣に座り、手を奨真の胸のあたりに置く。すると、エルキドウの身体から鎖が現れて奨真を拘束していく。

ういうい「エルキドウさん!？」

エルキドウ「まずは彼自身を動けないようにしなきゃいけない。大丈夫、この鎖は浄化の力も持つてる。あとは誰かが彼の精神世界に行けばかなり楽なんだけどね」

エルキドウはそう言って楓子の方を見る。彼がしてほしかった内容をすぐに理解した楓子は頷き、奨真の隣に寝転んだ。

楓子「エルキドウ、お願い」

エルキドウ「君ならすぐに理解してくれると思つてたよ。さあ、彼を助けてやるんだ」
黒雪姫「何をするつもりだ？」

エルキドウ「レイカーの意識をエイトの精神世界に移すんだ。僕の鎖は人の意識を他の人に移すことができるからね」

白夜「それで楓子に奨真を助けに行かせるといふことか」

エルキドウ「理解が早くて助かるよ」

エルキドウは楓子の額に手を置いて、楓子を眠らせた。そして奨真の身体に巻いていく鎖の一部を楓子の腕に巻きつけた。

エルキドウ「僕が抑えてる間に彼を助けるんだよ」

奨真「……ここは……？」

周りを見回す奨真。だが今自分がいるところがどこなのかが全く理解できてなかった。わかっているのは今いる場所はバベルの塔の中ではないということだけだ。

ピチャツ……ピチャ……と水溜りの上を歩いているような感覚。その感覚がどこを歩いてもずっとし続ける。

奨真「どこを歩いても水浸しだな」

しばらく歩き続けると、目の前にあるものが目に入った。それは奨真自身の中に眠っ

ている災禍の鎧だった。

奨真「なんでこいつがここにあるんだよ!?!とにかく早く壊さねーと!!」

奨真は心意技で武器を投影しようとするが、何故か投影できなかった。何度もなんども試すが、武器の形が出来上がる前に消えてしまうのだ。

奨真「な、なんで……」

???『無駄だ。今のお前では儂を壊すどころか得意の投影すらできん』
奨真「っ!?!誰だっ!?!」

どこからか聞こえてくる声。聞いたことのない声を聞いて焦り始める奨真。周りを
見るが、どこにも人影はない。

???『目の前にいるだろう?』

奨真「まさか……災禍の鎧?」

奨真に語りかけていたのは、目の前の災禍の鎧『クロムディザスター』だったのだ。災禍の鎧に言語能力があったとは誰も思わないだろう。

奨真「今の俺に投影すらできないってどういうことだ！」

災禍の鎧『なら教えてやろう。今のお前は儂に支配されてるからだ』

奨真「な、何言ってるんだ！俺はお前なんか支配されない!!」

災禍の鎧『現実ではお前は儂と一体化しつつあるのか？こうして儂がお前の前に現れたのはただあの小僧たちが戦っている偽物の儂と共鳴したからではない。お前自身の中にある憎しみもある』

奨真「俺自身の憎しみ？」

災禍の鎧『あの白いやつ……名前は忘れたが、あの女を助けられなかった時、金ピカに全く歯がたたなかった時、お前は自分の弱さを憎んだはずだ。そういう憎しみから消滅したはずの儂を呼び戻したんだよ』

奨真「それは……」

否定できなかった。何故なら災禍の鎧が言ったことは全部事実なのだから。ズバズバと正論を言われて、奨真はだんだん追い込まれていく。

災禍の鎧『小僧。力が欲しいか？誰にも負けない力が欲しいなら、儂に全てを任せてみるがいい。お前が守りたいものも守ってやる』

奨真「俺は……」

災禍の鎧は形を崩して、ドロドロになって溶けていく。泥となった災禍の鎧は奨真の身体を少しずつ覆っていく。奨真自身、抵抗するのもやめて全て災禍の鎧の意のままにしていた。

奨真（……ごめん皆…………ごめん…楓子）

何もかも諦めて、全部災禍の鎧に任せようとした時、一瞬だが光が見えた。その光は徐々に大きくなっていき、奨真を災禍の鎧から守るように覆った。寄生しようとしていた災禍の鎧は強制的に奨真と分離させられた。

災禍の鎧『何っ!?!』

???'「はあ……はあ……なんとか……間に合った……」

災禍の鎧『き、貴様は!? 創風神へズ!? いや、そんなはずない!! あいつら6人は封印されたはず!!』

??? 「誰と勘違いしてるのかは知らないけど、あなたに奨真君は渡さない」

分離させられた災禍の鎧は元の形に戻るが、まだ動揺していた。鎧が言う『創風神へズ』というのが何なのかはわからないが、鎧にとっては驚異的な存在なのだろう。

??? 「奨真君、大丈夫?」

奨真「……………だ……………誰……………だ」

??? 「私よ、楓子よ」

奨真「楓子……………楓子!」

思わず声を荒げて叫んでしまい、薄れていた意識が完全に覚醒した。それもそうだ。自分の精神世界に楓子がいるのは普通はありえないからだ。奨真は立ち上がり、楓子の元へ駆け寄る。

奨真「げ、幻覚なのか? それとも本物?」

楓子「もう、何言ってるの？本物よ」

奨真「でもどうやってここに……？」

楓子「エルキドウが手伝ってくれたの。もう少しすれば彼の鎖が鎧を拘束するはずよ」

災禍の鎧『貴様……よくそいつといる女か。何故貴様にヘズの加護があるんだ!!』

楓子「さつきから何を言ってるの？そんな人知らないわ」

災禍の鎧『忌々しい六神め！封印されてもなおそいつらの味方をするのか!!!』

さつきから災禍の鎧が言ってることは奨真も楓子も理解ができなかった。『創風神ヘズ』や『六神』など知らないワードがあつたからだ。災禍の鎧が声を荒げていると、突然鎖が現れて鎧を拘束する。

災禍の鎧『ぐお……この鎖は……エルキドウか!!』

奨真「さつきはお前に支配されそうになつたが、今度は俺の番だ」

災禍の鎧『ふん！貴様ごとき人間が俺の力をコントロールできるはずがなからう!!』
奨真「ああ、今の俺ならな。でも、全てじゃなく少量の力ならできるかもしれない」

楓子「奨真君……」

奨真「さつきお前が俺に言ったことは全部正解だ。俺は自分の力の弱さを何度も憎んだ。その結果、お前を呼び戻してしまった。お前は俺の憎しみで呼び戻されたってことは、お前と俺の憎しみは同じってことだろ？つまり、同じ憎しみを持つもの同士なら力もコントロールできると思うんだ。まあほぼ賭けだな」

一歩ずつ、少しずつ拘束された鎧に近づく奨真。目の前で止まり、話を続けた。

奨真「お前が俺たちバーストリンカーを憎む気持ちはわかる。憎しみや怒りなどの負の心意で勝手に呼び戻されて、倒されてを繰り返せば憎まないはずがないからな。でも俺はお前のその憎しみをどうにかしてやりたいと思いはじめた」

災禍の鎧『ふざけんじゃねえ!!そんな綺麗事並べて儂の機嫌をとる気か!!』

奨真「綺麗事と捉えてもいい。でも俺は本気だ。やり方はわかんねえけど、絶対に見つけてやる。だから、それまでは大人しく眠っててくれ」

奨真は自分の心意で檻を投影し、その中に災禍の鎧を封じ込めた。さらに鎖で繋がれているから、身動きも取れないだろう。動かなくなった災禍の鎧の頭部に奨真は手を伸ばす。触れると、少しずつ災禍の鎧の負の心意が奨真の中に流れていく。5秒ほど触れ

てから離すと、少量の負の心意が奨真の全身を覆った。その時の奨真のデュエルアターには少しだけ黒が混じっていた。

楓子「奨真君、その体……」

奨真「不思議な感覚だ。体に負の心意が混じってるのに自我を保てるし、力も感じる」

楓子「……飲まれたりしないよね？」

奨真「大丈夫だ。心配はいらない」

奨真は楓子の頭を優しく撫でる。すると今度は楓子の体に異変が起き始めていた。奨真の精神世界での活動時間に限界がきたのか、体が薄くなり始めた。

楓子「限界みたいね」

奨真「先に戻っててくれ。すぐに戻るから」

楓子「うん、待ってる」

そう言葉を交わすと、楓子の体は完全に奨真の精神世界から消えていった。奨真もその場から離れるように歩き始めていった。

先に戻ってきた楓子は目を覚ますと、すぐに体を起こした。そのまま奨真の方を見ると、奨真の体は先ほどと同じように茶色のアバターに黒色が混じっていた。楓子が目を覚まして数秒後に奨真は体を起こして目を覚ました。

黒雪姫「ほ、本当に奨真君なのか？」

白夜「ああ、奨真だ。アバターの色は変わってるが、間違いなく奨真だ」

エルキドウ「なんとか制御できたみたいだね」

奨真「一時的だがな。でも、もう大丈夫だ」

目覚めた奨真は手をグーにしたりパーにしたりして、感覚を確かめていた。その時、奨真の前にメニューウィンドウが現れ、画面にはこう書かれていた。

奨真「オルタナティブモード？」

アルトリア「なんですかそれは？」

奨真「わからない、たぶんこの状態のことを言うのかもしれない」

試しに心意で武器を投影してみる。いつも使ってる『干将・莫耶』を投影すると、見た目はいつもと同じだが、その質はかなりの物となっていた。

奨真「心意が強化されたのか？」

クロエ「わかんないけど私のものよりもいいものだってことはわかるわね」

奨真「よし、試してみるか」

剣を構えて、檻の前に立つ。剣を思い切り振りかざすと、檻は一瞬で切断された。耐久値が無くなった檻は粉々に砕け散った。

ハルユキ「す、凄いです！誰も壊せなかったのに一瞬で粉々です！」
奨真「キリトたちのところにいって来る」

奨真は災禍の鎧に苦戦してるキリトたちの加勢に向かう。駆けつけてきた奨真をみたキリトたちは驚きを隠せなかった。

キリト「奨真!？」

アリス「もう大丈夫なのですか？それにその姿は……」

奨真「説明は後だ。こいつは俺がやるから、3人は下がってるんだ」

ユージオ「1人でなんて危険すぎる!!あいつは桁違いの力を持つてるんだよ!!」

奨真「心配するな。あいつの相手は慣れてる。それよりも早く下がって休むんだ！」

ユージオ「でも！」

キリト「ユージオ、奨真の言う通りにするんだ。疲れてる俺たちじゃ奨真の足手まといにしかない」

ユージオ「……………わかったよ」

アリス「奨真。何かあつたらすぐに応援を呼んでください。すぐに駆けつけます」

奨真「そうならないようにするさ」

ユージオは渋々了承し、3人はその場を離れてアスナたちヒーラーに回復をしてもらいにいった。1人残った奨真は災禍の鎧と向き合う。

奨真「よう、さつきぶりだな」

災禍の鎧「……………」

奨真「つてこつち側じや喋れないんだつたな。さつきはお前の好きなようにされかけたけど、今度はそうはいかねえぞ」

災禍の鎧「グルアアアアア!!!」

叫び声を上げて襲い掛かろうとする災禍の鎧だが、奨真は来るのがわかってたかのよりに攻撃を避けた。避けただけじゃなく、すぐに反撃できるように体制も整えていた。

奨真「人の話は最後まで聞きやがれ!!」

干将・莫耶で災禍の鎧の背中を思い切り斬りつける。装甲の硬い災禍の鎧がいつも簡

単に傷跡がついた。それほど奨真の心意は強くなっただろう。だが災禍の鎧は負けじとワイヤーを伸ばし、奨真の腕に絡ませる。そのまま自分の方へ引っ張り、HPを吸収しようとする。

奨真「舐めるな!!」

喰われる寸前でワイヤーを斬り落とし、なんとか回避する。災禍の鎧の両足の間をスライディングで通り抜けて背後へ周り、何度も斬りつける。

奨真「先を急いでるんだ。もうこれで終わらせる!」

『体は剣で出来ている。血潮は鉄、心は硝子。幾たびの戦場を越えて不敗。ただ一度の敗走もなく、ただ一度の勝利もなし。担い手はここに独り。剣の丘で鉄を鍛つ。ならば、我が生涯に意味は不要ず。この体は、無限の剣で出来ていた!!』

「unlimited blade works!!!」

辺りは一瞬で荒野へと変わり、地面には無数の剣や斧、槍などが突き刺さっていた。必殺技もオルタナティブモードになったことで強化されたに違いない。干将・莫耶をポリゴン状に変換して、そのまま災禍の鎧に突っ込む。

キリト「まずいぞ！素手でいく気だ!？」

アスナ「待って！近くの武器が奨真君の手に吸い寄せられてるよ!？」

リズ「ちよ、ちよつとあれって!?!レジェンド武器の『魔斧アイムール』じゃない!？」

奨真の手にはリズが言った武器『魔斧アイムール』があった。両手で持ち直し、思い切り災禍の鎧に振り下ろした。だがその攻撃は見切りやすく、簡単に避けられてしまふ。斧は地面に叩きつけられると、その周りで軽く地震が起き、災禍の鎧は衝撃で浮き上がってしまう。

空中ではまともに動けない災禍の鎧に奨真はさらに追い討ちをかけるように斧で下からかちあげた。吹っ飛んだ災禍の鎧に大量の剣の雨を降らせた。まともに避けられない災禍の鎧は串刺しとなり、そのままピクリとも動かなくなつた。

レミ「もうチートですよねあれ」

シノン「完全に無双してたわね」

アルトリア「倒したのですしょうか？」

楓子「ちよつと行つてくるね」

楓子はそう言つて、一人で奨真のところへ向かう。辿り着く前に災禍の鎧は消えていったのが見えたため、安心する。奨真のところへ辿り着くと、彼のアバターは元の色へと変わつていった。

奨真「オルタナティブモードの効果は数分が限界か」

楓子「凄い力ね」

奨真「楓子？」

楓子「なんだか……私たちよりも先にいきすぎて見えなくなつちやうくらい……」

寂しそうな目をして俯く楓子を見た奨真は、そつと彼女のことを抱きしめる。優しく頭を撫でて安心させるように囁く。

奨真「大丈夫だ。どんなことがあると、俺は皆が見えるところにいるし、遠くにも

いけないよ」

楓子「……そうよね」

2人はデュエルアバターからダミーアバターになり、そのままキスをした。十数秒ほどのキスをして、2人は離れる。遠くから見えていたキリトたちはもちろん顔を赤くして、クラインは地団駄を踏み、エルキドゥはニコニコとしていた。

アスナ「ねえ……あの2人っていつもあんな感じなの？」

黒雪姫「ああ。我々黒のレギオンでは日常茶飯事さ」

あきら「見慣れたの」

イリヤ「なんていうか……高校生って凄いですね」

それぞれ感想を述べていると、ユーヅオが天上を見て円盤が降りてくるのを見つけて。すぐにみんなに伝えて、全員円盤に乗って上へと登る。

だがこの時、誰も思っただけでなかった。この後にキリトたちにとって絶望的な未来が待ち受けていることに。

第35話 絶望と希望

乗降盤に乗り、最上階へとたどり着いた翔真たち。すぐ側にはキリトたちがSAO時代に見かけたシステムコンソールがあった。動くのかどうか確かめるために、キリトはコンソールを調べ始める。

キリト「一応動くみたいだ」

シリカ「最上階に来ましたけど、ユイちゃんはいったいどこに？」

レミ「あ、あそこ見てください!!」

レミが指差した方には宙に浮いて、瞳を閉じているユイがいた。キリトとアスナは大声でユイの名前を叫び、自分たちがいるのを気づかせる。

キリト「ユイ!!」

アスナ「ユイちゃん!!」

ユイ「っ?!?……………パパ? ママ?」

アスナ「やっと……………やっと会えた!」

キリト「待てアスナ!この情報圧……………やつだ!」

ステージへと続く階段から、ペルソナ・ヴァベルが姿を現し、キリトたちのもとへ歩み寄っていく。一同構えるが、ヴァベルに戦う意志がないのがわかったのか、警戒を解く。

ヴァベル「……………ここまで来たか」

黒雪姫「ヴァベルよ。貴様の手の者は私たちが全て撃破した。お前の駒はもう誰もいないぞ」

ヴァベル「そうか。だが我が同胞は量子データとなり、我が元へと戻ってきた」

ハルユキ「同胞……今、同胞って言ったのか？ デイザスターが同胞って言ったのか!？」

ヴァベル「……………」

白夜「それに戻ってきた……か。災禍の鎧のコピーを作り、自分の中で飼っていたってことか」

アスナ「あなたの野望は潰えたわ！」

アリス「ユイを解放しなさい。そして、何故こんなことをしたのか、全部話してもらおう」

ずっと沈黙していたヴァベルはため息を吐き、全てを話そうとする。だが、その内容は前に言っていた内容と一緒だったが、途中でエルキドウが口を挟む。

ヴァベル「前にも話したとおり、この世界を黄昏へと導くことだ」

エルキドウ「いい加減本当のことを言えばどうだい？」

ヴァベル「……エルキドウ」

アスナ「どういうこと？」

エルキドウ「彼女の代わりに、僕が教えてあげよう。彼女はあの子を消すつもりなの
ゃ」

キリト「それは無理だ！ ユイは俺がSAOから持ち込んだ存在だ！」

ヴァベル「たしかにこの小妖精を消すのは厄介だ。だが、この世界に負荷がかかれば
どうなる？ 本来存在しないはずのコンソールが現れる」

ヴァベルはGMコンソールへ向き、遠隔で操作する。プログラムを実行すると、ユイの体は光だす。キリトとアスナは異変を感じ、急いでユイの元へ走り出し、エルキドゥは鎖でヴァベルを止めようとする。

エルキドゥ「マズイ！」

アスナ「ユイちゃあああああん!!!」

ユイ「パパ……ママ……」

やがてユイの体は粒子となり、完全に消滅する。キリトはもう一度ユイをサルベージするためにコンソールを動かそうとする。SAOの時のようにするが、何故かうまくいかない。

キリト「クソツ!!クソツ!!なんで!!なんで動かないんだよ!!!」

ヴァベル「フツ……サルベージされると面倒だからな。そう出来ないようにしたの

「さ」

シノン「でも、どうやってGMコンソール出したの？それに負荷ってなんなの!？」

メタトロン「負なる心意。つまり、七王やクロムディザスターの放つ心意の力です。本来、心意の力はこの過去の世界の器には耐えられない術式」

エルキドゥ「それを適量以上に、過度に、暴力的に注げば、あれが現れることになったのさ」

シノン「確かに心意なんてシステム度外視の技はこつちのアミスファイアでは使えないわ」

リーファ「心意なんて、アンダーワールドでしか使えませんでしたし……」

ヴァベル「そういうことだ。これで……やつと……消滅できた」

アスナ「ヴァベルーーツ
!!!!」

ヴァベル「ツ！」

アスナは怒りで頭が真っ白になり、ソードスキル『フラッシンググペネトレイター』でヴァベルに突進する。不意を突かれたヴァベルだが、破壊不可の盾を作り跳ね返す。

アスナ「ぐはっ!!」

楓子「アスナさん!!」

キリト「ヴァベル!!! 貴様あああああ
!!!!!!」

ヴァベル「無駄だ!!!」

キリト「がはっ!!」

奨真「キリト!!」

奨真と楓子は跳ね返された2人を受け止める。2人を跳ね返したヴァベルは宙を浮き、その場から姿を消そうとする。その時、ヴァベルは無意識に何かを呟いた。

ヴァベル「やっと……これで楽になれる。もう辛い思いをしなくて済む……」

イリヤ「えっ……?」

ヴァベルはキリトたちの前から完全に姿を消した。それと同時に、キリトたちの目は絶望していた。ユイが消滅してしまい、悲しみの感情が込み上げていくのだ。

キリト「……………ユイ……………」

アスナ「ユイちゃん……………」

リーファ「お兄ちゃん……………アスナさん……………」

シノン「まさか……………ユイちゃんが……………」

ストレア「ユイ……………嘘でしょ？」

シリカ「うっ……………くっ……………ふええ……………」

リズ「シリカ、やめなさいよ。本当に泣きたいのは……………ううっ」

クライン「ユイちゃんが消えちまったなんて……………そんなバカな……………」

エギル「信じたくねえが……………くそっ！」

ユウキ「アスナ……こんな時なんて声をかけてあげればいいのか……わからないよ……」

フィリア「仕方ないよ。こんな時どう言ったって……なんの慰めにもならないから……」

レイン「ううっ……ユイちゃん……」

黒雪姫「結局私たちは……なんの役にも立たなかったな」

奨真「……畜生……」

白夜「……俺……無力にも程があるだろ」

ニコ「ジメジメしたのは嫌いだけどよ……今は仕方ねえか」

美早「こんな時かける言葉が見つからない」

ういうい「こんな結末……あんまりなのです」

楓子「今の皆を見ているだけで、まるでこちらの胸まで引き裂かれるみたいだわ」

あきら「彼らとそのNPCの心の繋がりは、現実で育む絆と何も変わらないほどだった」

アルトリア「それくらい強固だったってことでしょう……」

チユリ「あたし達がここにきた理由って……なんだったんだろうね……」

タクム「悔しいよ……。これじゃあこれまで戦ってきた意味が何もないじゃないか……」

それぞれ悲しみと悔しさを吐き出す。その時、オルタがこの場に数人いないことに気づいた。この場にいなかったのはアッシュ、白雪姫、レミ、マッシュだった。

オルタ「ちよつと、ガイコツたちはどこに行つたのよ？」

オルタの一言で、全員が辺りを見回して、いなくなつた4人を探していると、ちょうど4人が帰つてきた。だがその表情はかなり焦つていた。

アツシユ「エブリバディー!! オウツ! ジーザアアアス!!」

白雪姫「た、たたた、たた大変ですうううう
!!!!」

レミ「そ、そそそそ外に来てください!!!」

マシユ「緊急事態です
!!!!!!」

かなり焦っている4人に急いでついていく。4人が案内したのはバベルの塔の外だった。外へ出ると、空から巨大なエネミーが3体降りてきた。別々に散らばると、空中にあるステージに着陸した。

リーファ「あんなモンスター……AL0で見たことありません……」

藤乃「あれは……神獣級エネミー……」

シリカ「神獣級って確か……い、一番強いんですよね」

奨真「強いとかのレベルじゃねえ。倒すのはほぼ不可能だ」

リズ「な、なによそれ……。どうしてそんなのがここにやってくるのよ？」

カムイ「あれには……僕たちが束になっても……勝てない」

式「その認識は正しい。あれは元々倒せることを前提に設計された代物じゃないから
な」

ユージオ「なんだよそれ……」

ジャンヌ「皆さん、絶対に手を出してはいけません」

リサ「でも、どうやって………っ!?まさかっ!?」

メタトロン「ええ、ビーイングたちはしもべたちの力の波動を感知し、ここまで引き寄せられてきました」

タクム「空を飛べるのはハルと楓子さん、奨真さんしかバーストリンカーは来られないと思ってましたが……」

チユリ「空を飛べるエネミーなら可能だったってこと……?もう、なによそれ……」

奨真「俺たちの前には絶望しかないのかよ……」

ユイの消滅に加えて、倒すのはほぼ不可能といわれる神獣級エネミーの出現で彼らの道は完全に潰えてしまった。そんな時……。

ストレア「うう！」

黒雪姫「ストレア！くっ！……これは」

突然2人は頭を押さえて倒れ込んだ。だがストレアはすぐに起き上がるが、目は別のものとなっていた。

ストレア？「妖精たちよ……この声が聞こえますか？」

キリト「あんたは……未来の……」

ストレア？「黄昏の魔女は……小妖精を消去……してしまつたようですね……」

キリト「なあ、あんた。ヴァベルはユイの抹殺を謀ってるって言つてたよな。君は……一体何を知ってるんだ？」

ストレア? 「それは……答えることはできません。未来は常に不確定……。過去のものに余計な知識を与えることで……。歴史への過度な干渉となってしまうことを……。避けなければなりません」

キリト「なら、これだけ教えてくれ。君は何者だ? 助言をくれるのはありがたいが、君の正体がわからないままじゃ俺たちはその言葉も信用できない」

奨真「俺からも頼む。俺たちは……あんたを信じたいんだ」

ストレア? 「……………ちよつとまってね……………元の口調に……………戻すから……………」

キリト「元の口調?」

ストレア? 「久しぶりだね……。キリト……………そしてアスナ。アタシ、ストレアだよ!」

キリト「まさか……………千年後のストレアなのか!?!」

未来から語りかけてくる者の正体は、千年後の未来のストレアだった。最初はおかしな口調だったから、誰も気づかなかったが、今の口調のおかげで全員が気づいた。

ストレア「えへへ、うん……そうだよ。ああ、この喋り方するのは久しぶりだなあ。今はもうユイの前だけしかしらないし」

キリト「ユイが……ユイがそっちにいるのか!？」

ストレア「うん……まだ生きてるよ」

エルキドゥ「だって、ペルソナヴァベルがユイそのものだからね」

エルキドゥの突然のことにキリトとアスナは呆然とする。それはそうだ。自分の愛娘を消した張本人が未来の結衣と言ってるのだから。

アスナ「エ、エルキドゥ君。冗談はやめてよ……」

イリヤ「冗談なんかじゃないと思うよ、アスナさん」

アスナ「イリヤちゃんまで……」

エルキドウ「君も気づいていたのかい？」

イリヤ「ううん、今エルキドウさんが言ったから気づいた感じかな。実はさつきヴァベルがあの場から消える前、妙なことを呟いてたのを聞いたんです。『やつと……これで楽になれる。もう辛い思いをしなくて済む』って。最初は何のことだろうって思いましたけど、エルキドウさんがヴァベルがユイさんって言った時に全部繋がったんです」

楓子「どういうこと？」

イリヤ「もし、ヴァベル自身が消えたいと思っていて過去の自分を消せばどうなると思いますか？」

ユージオ「どうって……まさか!？」

イリヤ「過去の自分が消えれば、未来に存在するヴァベル自身は自然に消滅する」

ティーゼ「でも、何のために……」

イリヤ「……わかりません」

キリト「ストレア、今のは本当なのか？」

ストレア「ごめん……それは私もわからないの。でも、尚更ユイに事情を聞かなきゃいけないね。幸いにもまだこっちではユイは消えてない。チャンスはまだあるよ！」

ハルユキ「でも、どうしてまだ消えてないんでしょう？」

ストレア「歴史の干渉がまだこっちまで追いついてないの。そこでキリトたちにお願
いがあるの。この未来の仮想世界に来て」

簡単にとんでもないことを言い出すストレア。未来に来てほしいというが、物理的にそういうことは不可能だ。

フィリア「そ、それは流石に無理なんじゃ……」

レイン「未来って……千年後だよね？」

ストレア「未来の世界に存在しているユイからなら、過去のユイの存在をロールバックさせられる！」

アリス「それなら、ユイのデータを復活させられたら、そのユイを連れ帰ることができるとはですか!？」

キリト「未来のユイから……ユイを復活させる？」

カムイ「まってよ、どうやって未来に行くんだい？」

ストレア「それは……ぐっ……また回線が……」

途中で回線が切れてしまった未来のストレア。結局方法が分からなくなってしまうが、その疑問もすぐに解決することに。

???「それならあのエネミーを倒せば何か得られるんじゃないか？」

突然知らない声が聞こえてキリトたちは困惑する。キリトたちは知らなくて当然だが、奨真たちはこの声をよく知っている。

奨真「エミヤ!？」

エミヤ「久しいな」

楓子「どうしてここに!？」

エミヤ「英雄王の船に乗せてもらったのさ。私以外にもいるぞ」

メディア「メイデーモン!!」

ういうい「メディア師匠!?!」

モードレッド「なんだなんだシケた面しやがって」

黒雪姫「モードレッド!?!何故お前が!?!」

モードレッド「ああ? いちや悪いか黒いの!」

スカサハ「なかなか面白そうなところだなセタンタ」

クー・フリーン「久しぶりに師匠に同意するぜ」

信長「わっはっはっは!!是非もなし!!」

沖田「沖田さん華麗に参ゴハツ!!」

アストルフオ「やつほー!ウニカ久しぶり〜!元気だった〜!」

エミヤ以外にもたくさんの英霊級エネミーが姿を表す。その背後からはガシヤガシヤと音を立ててギルガメツシユが歩み寄ってくる。

ギルガメツシユ「雑種、手を出せ」

奨真「ギルガメツシユ?」

ギルガメツシユ「これをつければ、あいつらに対抗できるであろう」

ギルガメツシユが奨真に渡したのは『ザ・トリニテイ』と呼ばれる指輪だった。しかも3つ全て揃えていたのだ。

奨真「これは?」

ギルガメツシュ「言ったであろう。我にはやることがあると」

アストルフオ「それを集めるために、僕たちが緊急で集まって探していたんだよ」

ギルガメツシュ「我がここに来た時から、あいつらはここに向かってきてたことには気づいていた。だから我がお前たちが変わって探していたんだ」

楓子「でもどうして？」

ギルガメツシュ「さあな……。我の気まぐれかもな」

リズ「ちよちよ！ちよつと待ちなさい！あんたたちって全員エルキドウと一緒にエネミーなんでしょ？なら、一緒に戦えばあいつらも倒せるんじゃない？」

信長「すまん……。それを集めるのに神獣級エネミーと数回戦ってきたんじゃない。体力も残っておらん。現に沖田のやつはそこで死んだるじやろ？」

沖田「チーン……………」

登場してすぐに血を吐いて倒れ込む沖田に信長は呆れる。奨真と楓子、式は沖田のこの症状を知ってるが、他の人たちは何がなんだかわからない状態で起きたを見続ける。

セブン「それで、そのアクセサリーはどういう効果なの？」

クー・フリーリン「俺たちもわかんねえんだ。お前ら調べれるだろ？」

クー・フリーリンはそういつてセブンに『ザ・トリニティ』を差し出した。セブンはメニューウィンドウを出して指輪についての説明を一通り読んだ。読み終わると簡単に説明し始めた。

セブン「この指輪の効果はつけた人がパーティーにいれば、全員に指輪の加護がついてあのエネミーに対抗できるみたいよ。ちなみに指輪を装備してる人はさらに強力になるわ」

エギル「指輪は3つ。誰がつけるべきか」

キリト「……………なあ皆。その指輪のことだが、俺が決めても構わないか？」

キリトのその問いに対して、皆少しだけ考えたが、すぐに任せると言った。

キリト「その指輪を装備するのは……。俺と奨真、カムイの3人で装備する」

奨真「お、俺っ!？」

カムイ「僕かい!？」

キリト「奨真が指輪をつけて武器を投影すれば、武器そのものも強化されると思うんだ。そしてその武器を他のみんなが装備すれば、かなり強力になるかもしれない。カムイは竜に変身すれば、指輪の力と合わさってとてつもない力が出ると思うんだ」

ユウキ「ま、待つてよキリト!!カムイは竜に変身したら、理性を失ってしまうんだよ!!エネミーを倒してもカムイ自身がボロボロになるよ!!」

キリト「それは十分わかってる。でもそれは竜石がない場合だ。あつたらカムイ自身に負担はなくなるんだろ?だからアルゴに竜石を俺たちのところに届けてもらえるように頼んである」

ユウキ「で、でも……。やつぱり……。それでもボクは……カムイには……」

キリト「いや、俺もすまない。ユウキの気持ちを理解してなかった。それにカムイは竜にならなくても十分強いから、無理にとは言わないよ」

カムイ「いや、構わない。僕はその指輪をつけて、竜になって戦うよ」

ユウキはおもわずカムイの方に振り向く。提案したキリト自身も驚き、目を見開いた。ダメ元で頼んだつもりだったが、まさか了承してくれるとは思わなかったのだらう。

ユウキ「カムイ!? 本当によいの!? 竜にならなくてもカムイは十分強いんだよ!」

カムイ「ユウキ。君が僕を心配してくれるのは本当に嬉しい。僕だってゲームなら無理に竜にはなろうとはしないよ。でも、今僕たちはこの世界でしているのはただのゲームじゃないんだ。アンダーワールドでの戦争もそうだっただろう? 今の状況はあの時と全く同じなんだ。だからこそ、僕は体を張ってでも戦わなきゃだめなんだ!」

ユウキは説得しようとしたが、カムイの目は本気だった。カムイの言っていることは正しい。ユウキはもう一度カムイにどうしてほしいかを考える。考えてるうちにユウキの目から涙が溢れ出していた。

ユウキ「カムイの言っていることはわかるよ……。でも……。やっぱりカムイが心配だよ……」

カムイ「大丈夫。さつきはあ言ったけど、僕は体は頑丈な方だから。だから泣かないで」

アスナ「カムイ君。本当に無理しなくていいんだよ？キリト君も無理にとは言わな
いって言ってたし」

カムイ「アスナも心配性だなあ。本当に大丈夫だから」

キリト「カムイ……無理言って本当にすまない」

カムイ「キリト、できれば僕は『ありがとう』って言ってくれる方が嬉しいかな。
なんて」

キリト「あ、ああ。ありがとう」

なんとかユウキを説得したカムイはキリトから指輪を受け取り、続いて奨真も指輪を
受け取った。あとはアルゴを待つことと、どう三組に分けるかの2つだった。

リーファ「じゃあアルゴさんが来るまでにグループを決めちゃいましょう」

チユリ「そうだね。まったくじ引きにする?」

シノン「それが一番手っ取り早いわね」

アルゴが来るまでにくじ引きをしてグループ分けをする。その結果1組目はキリト、アスナ、シノン、リズ、スメラギ、ロニエ、ティーゼ、プレミア、黒雪姫、ハルユキ、ニコ、美早、綸、オルタ、リサ、クロエ。

2組目は奨真、楓子、シリカ、リーファ、クライン、ユージオ、アリス、ティア、謡、白雪姫、蓮、レミ、マシユ、寿也、式、イリヤ。

3組目はカムイ、ユウキ、エギル、ファイリア、ストレア、レイン、セブン、ルクス、白夜、あきら、タクム、チユリ、アルトリア、ジャンヌ、藤乃、美遊。

このように分かれた。

奨真「あ、そうだ。エミヤたちはどうするんだ？元の世界に帰るのか？」

エミヤ「いや、私たちも疲れたから少し休憩していくとするよ」

アスナ「それなら街まで案内しますが？」

エミヤ「大丈夫だ。ここに来るときに見かけた。君たちにもやるべきことがあるだろう？」

エルキドウ「さて、僕も街で休憩するよ。短かったけど、楽しかったよ」

レミ「エルキドウさん！今度金ピカの弱点教えてくださいね！」

エルキドウ「ふふ、構わないよ」

ギルガメッシュ「聞こえておるぞ雑種!!!」

いつの間にレミとエルキドゥは仲良くなったんだと思った奨真たち。英霊級エネミーたちはギルガメッシュの船に乗り、空都ラインに向けて発進した。

あとはアルゴが来るだけとなり、その間に皆その場に座り込み、体を休めることにした。

第36話 神獣級エネミー

しばらく休憩しているとアルゴが下の方から飛んでやってきた。目的地にたどり着くと、息を整え始める。

アルゴ「ふう……やつと見つけたゾ。キー坊、頼まれてた物ダ。苦労したんだからお代はキツチリ払ってもらおうからナ」

キリト「わかってるよ。いくらだ？」

アルゴ「30万ユルド」

キリト「ま、待ってくれ!!それだと俺破産する……」

アルゴ「言っとくが値切ったりはしねえゾ。まあ流石に今すぐには可哀想だからつけ

ておいてやる」

情報料で20万、そして今回で30万ユルド。キリトは今お題を払えば間違いなく破産してしまう。アルゴもそれはわかって後払いでも構わないと提案したのだろう。

キリト「た、助かった……」

カムイ「よし、装備も完了した。いつでもいけるよ！」

奨真「待ってくれ。その前にキリトたちに渡したいものがある」

キリト「ん？渡したいもの？」

そう言うとき奨真は災禍の鎧と戦ったときになったオルタナティブモードになる。そして複数の武器を投影した。その武器は全部似たようなものだった。

アスナ「これは？」

奨真「指輪の力で強化された武器です」

リズ「こ、これって全部『英雄の遺産』じゃない!？」

シノン「英雄の遺産？」

リーファ「アツプデートで追加されたレジェンド武器です。入手方法は不明。持つてくる人はほとんどいないと言われてる武器なんです」

奨真が投影した英雄の遺産は『天帝の剣』『アイムール』『アラドヴァル』『フェイルノー』、『破裂の槍』『ルーン』『アイギスの盾』『ラファイルの宝珠』『打ち砕くもの』『テュルソスの杖』『雷霆』『フライクーゲル』『ブルトガング』と全て揃っていた。

リズ「これって全部本物？」

奨真「いや、全部贋作だ。あくまでイメージしたものを投影しただけだからな。でも、

ステータスは保証するよ。だから数は限られてるけど、好きな武器を選んでくれ」

各々英雄の遺産をジツと見てどれにするか考える。槍と斧は多いが、その武器を得意とする者は少ないせいか自分がうまく扱えるのかと不安に思う者もいた。

シノン「私はフェイルノートにするわ」

リズ「あたしはアイムール」

フィリア「私はこのブルトガングにするよ」

ストレア「アタシは打ち砕くもの！」

アスナ「私はテュルソスの杖」

ティア「私はこのフライクーゲルを」

セブン「私はルーンよ」

エギル「俺はこのアイギスの盾にするぜ」

スメラギ「なら俺は雷霆だ」

シリカ「あたしはこのラファイルの宝珠にします」

リーファ「私槍に自信はないけど、このアラドヴァルにします」

クライン「俺もねえけど、破裂の槍を使わせてもらうぜ」

キリト「じゃあ俺は……この天帝の剣を」

各々早速装備し、試しに使ってみる。一度しか使っていないのにキリトたちは驚きを隠せなかった。何故ならこんなに手に馴染む武器は今までなかったからだ。

リーファ「私槍なんて初めて使ったのに……なんでこんなに手に馴染むの？」

クライン「お、俺もだぜ……」

奨真「先に言っておくが、その武器の耐久値はあのエネミーと戦い終わるまでと思っておいた方がいい」

あくまで奨真が投影したものだから本物ではない。だから武器の耐久値は本物よりもかなり脆くなっている。

シリカ「あたしがつけてるこのラファイルの宝珠にも耐久値はあるんですか？」

奨真「ああ」

リズ「ラファイルの宝珠はちよつと特殊なアクセサリーなのよ。装備すれば大ダメージの攻撃も激減してくれるアクセサリーだから攻撃を食らえば食らうほど耐久値はどんどん減っていくの。アスナのテュルソスの杖も魔法の力を強化するもので、魔法を使

えば使うほど耐久値は減っていくわ。あとは英雄の遺産を装備すれば専用のソードスキルも使えるようになるけど、投影したものはいけるのかしら？」

リズはステータス画面を開いて武器のステータスを見してみる。するとステータス画面には専用ソードスキルという文字が書かれていた。

リズ「あ、あつたわ……。あんたのその投影ってどんだけ凄いのよ……」

奨真「んなこと言われてもなあ……」

キリト「よし、じゃあさつき分けたグループに分かれて、あのエネミーを倒すぞ!!」

全員「!!」「!!」「!!」

気合を入れて各々エネミーの元へ向かい始めた。キリトたちのグループは青い鳥『ルヒエル』。奨真たちのグループは緑の鳥『ラシエル』。カムイたちのグループは黒の鳥『サテツ』を討伐することになった。

キ
リ
ト
s
i
d
e

目的地に着いた俺たちは遠くからやつを観察する。外見は巨大な鳥のモンスターか。飛んでるだけで何もしてないということは、こちらから仕掛けない限りあのままということか。

キリト「シノン、当てなくていいから矢を放つて見てくれないか」

シノン「任せて」

シノンはフェイルノートを構えて、矢を放つ。矢はルヒエルのギリギリ横を通り過ぎていく。ルヒエルは驚いたのか、叫び始めた。叫び終わると俺たちに向かって突進し始めてきた。

キリト「当たらなくても攻撃すれば襲ってくるか」

ぶつかる前にバラバラに散らばり、俺はさつき考えた作戦を実行するために指示を出す。

キリト「アスナは魔法で援護！ニコは強化外装でバンバン撃ちまくってくれ!!それ以外はとにかく攻撃だ!!」

全員「「了解!!」」

俺も天帝の剣を持ってルヒエルに攻撃する。初めてこの剣を使うが、近接にも遠距離にもなるのか。俺は早速専用ソードスキル『霸天』を発動する。すると剣先が伸び縮みできるように分離し、蛇のように動き始めてやつに襲い掛かった。

ルヒエルに絡みつくと思ったが、鞭を打つような感じで攻撃していた。指輪の加護もあるせいかなかなりのダメージを与えられた。

ロニエ「私だつて!やあ!!」

ロニエは夜空の剣でエネミーの翼を攻撃する。すると今度はティーゼが後ろからロニエと攻守交代をする。

ティーゼ「スイッチ!!はあ!!」

ダメージを与えるが、ルヒエルが反撃し始めた。翼を仰ぐように動かすと、羽を飛ばしてきた。当然エネミーの目の前にいた2人は攻撃をくらってしまう。

ロニエ・ティーゼ「きゃあああ!!!」

ハルユキ「ロニエさん!ティーゼさん!」

アツシユ「オオウウ!!ヘーキか!」

ハルユキは飛んでロニエを受け止め、アツシユはバイクを走らせてティーゼが地面に落ちる前に受け止めた。

オルタ「リズ!! あんたのその武器であいつを怯ませるのよ!!」

リズ「任せなさい!!」

リズは奨真が使ったようにアイムールに思い切り力を込め始める。ルヒエルの頭付近に近づき、アイムールを振り下ろした。ドゴツという鈍い音となり、エネミーは地面に叩きつけられて動きが鈍くなった。

キリト「チャンスだ!! 一気に畳み掛ける!!」

各々最強の技を使って総攻撃を仕掛ける。それでもルヒエルのHPはなかなか半分にはならない。けど、この調子なら最速で倒せる!!

黒雪姫「ジ・イクリップス!!」

クロエ「鶴翼三連!!」

リサ「ブリザードワルツ!!」

美早「ファーストブラッド!」

オルタ「ラ・グロントメント・デユヘイン!」

プレミア「カドラプルペイン!」

黒雪は高速でルヒエルを斬り刻み、クロエは奨真が愛用してる剣を4本投げてさらに自分が持つてる2本でルヒエルを攻撃、リサは手足に冷気を纏い、踊るように攻撃する。

スメラギ「どけ!!テュールの隻腕!!」

スメラギの『テュールの隻腕』はもともと強力なソードスキルだが、あいつが装備してる『雷霆』の力も加わってさらに強力になる。

総攻撃してるうちにルヒエルは態勢を立て直し、今度は辺りを飛び回り始め、そして

俺たちに突進してきた。

ニコ「クツソ!!速えからミサイルの追尾も出来ねえ!!」

シノン「私に任せて!!フェイルノート、力を貸して!!」

シノンはフェイルノートを構えて狙いをルヒエルではなく、空に定める。何をするかと思っていると、そのまま矢を放った。

ハルユキ「シノンさん? いったい何を?」

シノン「大丈夫。私は狙った獲物は逃さないの。あの矢は確実にあいつを撃ち抜く」

ロニエ「ど、どういうことですか?」

ティーゼ「あっ!?!矢が落ち……て……?」

クロエ「放ったのって矢よね？」

リズ「でもあれはどう見ても……」

美早「流れ星」

たしかにシノンが放ったのはただの矢だったが、あれはどう見ても流れ星。いや、でもあの勢いやデカさはもはや隕石が落ちてくるのと同じ!?

シノン「これがフェイルノートの専用ソードスキル『落星』!!」

そしてその矢はまるでルヒエルの軌道がわかっているかのように落ちていき、直撃する。いや、矢が貫通した。撃ち抜かれたルヒエルは地面にたたけつけられた。

アスナ「私もこのテュルソスの杖で強化された魔法を!!」

アスナは魔法の詠唱を始める。アスナの杖から電気が集まり始めて、やがてそのエネ

ルギーは巨大になり始めた。

アスナ「みんな避けて!! 『トロン』!!」

エネルギーの球体からは一直線に伸びるようなビームが放たれた。俺たちは必死に避けて、当たるとはなかった。そのビームはルヒエルに当たると、エネミーに麻痺の状態異常がかかる。

キリト「よし!!これでトドメだあ!!!」

俺は片手剣ソードスキル『ヴォーパルストライク』でエネミーに突進した。倒したと思ったがあと少しだけ残ってしまった。もう一度ソードスキルを使おうとするが、肝心な時に天帝の剣が壊れてしまった。

キリト「クソツッ! 剣のダメージが大きかったか……」

ロニエ「キリト先輩!!これを!!」

ティーゼ「私からも!!」

ロニエは夜空の剣を、ティーゼは青薔薇の剣を俺に向かって思い切り放り投げる。だが、距離がかなり空いているせいか、このままだと俺のところには届かない。俺は急いでキャッチしに行こうとするが、俺とロニエたちの間にハルユキと黒雪が入ってきた。

黒雪は剣先を手を変えて夜空の剣を掴み、ハルユキは青薔薇の剣を掴む。そして俺の方へ投げてきた。

ハルユキ「キリトさん!!お願いします!!」

黒雪姫「思いきりやれ!!」

キリト「ああ!!」

俺は2つの剣をキャッチし、剣に力を込める。

キリト「スターバーストストリーム!!!!」

二刀流上級ソードスキル『スターバーストストリーム』で一気に決めにいく。HPは勢いよく減り、最後の一撃を放つと0になった。そして倒した時に何かアイテムがドロップしたみたいだった。確認は……街に戻ってからにしよう。

リズ「やったわね！キリト！」

黒雪姫「見事な剣技だ」

ハルユキ「僕たち神獣級エネミーに勝ちましたよ!!」

アスナ「みんなのおかげよ!!」

シノン「それとこの子たちもね」

シノン は自分の手に持つてゐるフェイルノートを見せる。武器は奨真が言つてたように、この戦いが終わったと同時に壊れ始めていた。

シノン 「よく頑張つたわ。ゆっくり休んで」

リズ 「あんたもお疲れ、アイムール」

アスナ 「ありがとう、テュルソスの杖」

スメラギ 「ふん、案外使いやすかつたぞ、雷霆」

完全に壊れた英雄の遺産のレプリカの破片は地面に落ちて、やがて土に還つていった。俺も心の中で天帝の剣に感謝した。あの剣がなかつたら危うかつたかもしれないな。そうだ、ロニエとティーゼに剣を返さないとな。

キリト 「ロニエ、ティーゼ。ありがとう。2人が咄嗟に渡してくれたおかげでとどめをさせたよ」

俺はそう言つて2人に剣を返す。2人は顔を赤くしながら受け取つた。

ロニエ「えへへ、お役に立ててよかつたです！」

ティーゼ「私もです！」

黒雪姫「皆、かなり疲れたと思うがまだ終わつてないぞ。早くみんなと合流するんだ」

キリト「そうだな」

俺たちは事前に決めていた合流地点に向けて走り出した。俺たちはエネミーをなんとか倒したが、皆も無事でいてくれよ。

キリト s i d e o u t

褒真 side

キリトやカムイたちのグループとは別れて、俺たちは緑の鳥型神獣級エネミー『ラシエル』がいる所までやってきた。ラシエルはまだ俺たちに気づいてないのか。飛び続けるだけだった。

マシユ「まだ私たちには気づいてませんね」

クライン「そうだけどよお……あいつ何も動かねえから調べようにも調べられねえぜ」

ユージオ「誰かが囷になって、その間に調べるしかないとか」

奨真「なら素早い人の方がいいだろう。寿也、式。頼めるか？」

式「了解だ」

寿也「任せてください！」

イリヤ「私もいきます。遠距離攻撃もあるかもしれない」

式と寿也、イリヤの3人が囷となり、ラシエルの攻撃パターンや動きを分析する。まずはこの作戦でいき、パターンがわかってきたらすぐに加勢する感じしていくことにし

た。

式「寿也、アサシンらしく素早く動けよ」

寿也「式さんよりも早く動きますよ！」

イリヤ「援護するので、思い切りいってください！」

式と寿也が同時に走り出し、ラシエルの行動範囲内に入った。2人を探知したラシエルは雄叫びを上げ、2人に突進する。2人は別れるように左右に飛んで突進を回避する。ラシエルはそのままイリヤの方へ突進していく。

一方イリヤは杖を構えてエネルギーを貯めているようだった。そして杖を水平に振ると、エネルギーは刃へと変わって杖から放たれる。

イリヤ「シユナイデン!!」

ラシエルに当たるが、ダメージが少ないせいも全く怯まなかった。イリヤも予想外だったのか、反応に遅れてしまう。このままじゃ激突すると思ったが、ティアが大剣の上にマシユを乗せて大剣を振り、マシユをイリヤの目の前に移動させた。

マシユ「イリヤさん！3秒だけ持ち堪えるのでその間に逃げてください!!」

イリヤ「は、はい!!」

盾で耐えるが、空中にいるせいか踏ん張ることができない。だから完全に防ぐことができないのだろう。でもその一瞬でなんとかイリヤは逃げられたみたいだ。

マシユ「きゃあ!!」

式「寿也！一気にいくぞ!!」

寿也「はい！」

ティア「私もやるわ！」

式はナイフで攻撃し、寿也は2本のクナイで攻撃、ティアは英雄の遺産『フライク^グゲル』で攻撃した。だが、両方ともダメージはあまりないみたいだ。

アリス「やはり並みの攻撃じゃダメージがない」

奨真「分析は終わりだ！一気に叩くぞ!!」

クソツ！いつもならこんなに慎重にいかないのに、俺らしくねえ！相手は神獣級エネミーだ。分析なんかしてもほとんど意味ないのに！

楓子「奨真君はまだいつちやダメ」

奨真「な、なんでだよ！相手は神獣級エネミーだぞ！全員で一氣にいかなきゃダメだ
！」

楓子「だからこそよ！今のあなたはいつものあなたじゃないわ！そのまま戦闘に入ればあなたはやられるわ！」

楓子の言っていることがわからない。今のままじゃやられる？そんなわけない、今の俺にはオルタナティブモードもある。だがそのオルタナティブモードにも時間制限があるからすぐに倒さなきゃいけない。早く倒さないと逆にみんなが危ない。

いろいろ考えてる時、楓子が両手で俺の両頬をパチンと叩いて手をそのまま添える。

楓子「奨真君、一回落ち着くの。いろいろ考えることは見ててわかるわ。でもそのせいでまともな判断ができなくなってしまってる。そんな状態じゃ逆に危険よ」

奨真「……………ごめん。目が覚めたよ。もう大丈夫だ！」

楓子「じゃあ気をとりなしていきましよう！」

俺たちはもう合流して戦ってるみんなのところに向かい、戦闘態勢をとる。リーファ

と白雪には後方で回復役を頼み、援護してもらおうことにした。

謡「フレイムトールンツ！」

イリヤ「フオイヤ!!」

ういういとイリヤも援護射撃をしてもらっているが、やっぱりダメージは少ないか。やっぱり重い一撃を叩くしかないか。

リーファ「白雪さん！少しでも回復役1人をお願いします！」

白雪姫「えっ!?!リーファさん!?!」

リーファ「クラインさん！あの槍を装備してください！」

クライン「お、おう！」

リーファとクラインは俺が渡した武器を装備し、ラシエルの翼まで一気に飛んで近づく。2人は槍を構えて翼に刺し、刺激を与える。元々武器の攻撃力も高いせいかな、もがき苦しみ始める。

クライン「き、効いてる？」

リーファ「皆さん今です！」

ユージオ「僕がさらに動きを止める！ 咲け！ 青薔薇！！」

蓮「俺もやってやる！ いけ、人形！」

ユージオは青薔薇の剣を地面に刺し、ラシエルを凍らせ、蓮は三体の人形でラシエルの翼と頭を拘束する。さらにシリカがピナにバブルブレスを命令し、ラシエルは少しずつ眠り始めた。

楓子「スワールスウェイ！！」

謡「フレイムボルテクス!!」

2人の技でラジエルにダメージを与える。ラシエルのHPゲージは残り一本になるが、今の衝撃で目を覚ましてしまい、ユージオと蓮の拘束から逃れてしまった。でも残り一本なら全員で畳み掛ければ!

奨真「みんな!あと少しだ!!」

寿也「こうなったら僕のとっておきを使ってやる!」

寿也は両手に持ってたクナイをラシエルに向けて投げる。投げたクナイは光を浴びていて、寿也は何か印のようなものを結ぶ。

寿也「クナイ影分身!!」

寿也が投げたクナイは何十個にも増えてラシエルに襲いかかる。寿也の戦いはあま

りしつかりと見たことがなかったが、こんな技を持つてるのか。

寿也「連続心意技！影分身!!」

今度は寿也が3人に増えてラシエルの方へ走り出した。いや、ラシエルに向かつてるんじゃないかってラシエルに投げたクナイに向かつてる。何をするのかと思っていると、そのクナイを手を取ってはまた投げたり、斬ったりの繰り返しを3人でやり始めた。

式「凄えな」

レミ「私も速さには自信あるんですが……」

このままなら倒せると思っていたが、ラシエルが翼を大きく羽ばたかせて寿也を吹き飛ばした。その衝撃で寿也の分身が消えてしまった。

寿也「いたた……あともう少しなのに」

奨真「いや、よくやったぞ！」

俺は背中からガンブレードを引き抜き、ラシエルの方へ走る。途中でラシエルは竜巻を起すすが、俺はそれを全部避けてラシエルの真下にたどり着く。ガンブレードを逆手に持つてラシエルの翼を下から斬り裂く。両翼を失ったラシエルは地面に落ちて、空中にいる俺は左に持つてるガンブレードをラシエルの胴体に向けて投げる。

奨真「これでもう動けない。トドメだ！」

右手のガンブレードに心意を溜める。その心意をラビエルに向けてX字に斬るように放つ。

奨真「Xブレイド!!」

残り少なかったHPはゼロになって、ラシエルの体は砕け散った。俺が最後にトドメをさしたからか、何かドロップしたみたいだが、確認は後でいいや。

あ、やばい空中でバランス崩した!?!いつもこんなことないのになんで今回はなるんだよお!?

そして俺は地面に激突してしまい、余計なダメージを負ってしまった。

レミ「あはははは!!奨真さんダサすぎですよ!!」

ティア「何してるのよ……」

アリス「大丈夫ですか?」

仰向けに倒れてる俺にアリスが手を差し伸べてくれた。その手を掴んで立ち上がり、強く打った背中をさする。

奨真「いてて……」

楓子「いつもならそんなことにならないのにね」

奨真「俺もわかってるけど……って楓子笑うなよ」

楓子「ごめんなさい、面白くて」

ユージオ「それにしても奨真って本当に凄いね。底が知れないというか、なんかキリトみたい」

アリス「ユージオもそう思いますか？私も何故かキリトと似てると思ってました」

シリカ「キリトさんに似てるのはわかりますけど、私はカムイさんにも似てると思います！えつとオルタナティブモードでしたか？なんか変身するところはカムイさんと同じですし」

クライン「あーアンダーワールドのときに童に変身してたもんな！じゃあさ、奨真はキリトとカムイを足して2で割ったってことでいいんじゃないか？」

奨真「その言い方じゃまるで俺がキリトとカムイの息子みたいじゃないか……」

ていうかキリトもカムイも男だし……。どっちが俺を産むんだって話だよ。いや、俺まで何変なこと考えてるんだよ……。

イリヤ「えっ？まさかキリトさんもカムイさんもそういう関係ですか!？」

今度はイリヤが変な勘違いをし始めた。ていうか本人がいないところで何変なこと話してるんだよ俺たちは。

ティア「んなわけないでしょ」

ツツコミ役がいて助かる。俺と蓮だけじゃ辛い。

蓮「とりあえず一度合流しよう」

式「だな。つとそうだ。寿也、後でお前のクナイ捌きを見せてくれよ」

寿也「いいですよ。そのかわりおっぱい揉ませてくださいね」

式「さらつとセクハラ発言してるが、まあいいや。好きにしろ」

楓子「奨真君は触らなくていいの？」

奨真「はっ？何を？」

楓子が突然何か言ってきたが、何のことだかさっぱりな俺は聞き返す。すると楓子はいつものようにとんでもないことを小声で言ってくる。

楓子「私のおっぱい」

奨真「なっ?!? なななな何言ってるんだよ!?!」

楓子「えっ? だから私の」

奨真 「言わなくていい!!その話はまた後で!!」

アリス 「ユージオも触りますか？」

ユージオ 「なんとなく話が見えてきた……とりあえず遠慮します」

そんな感じでぐだぐだしながら、俺たちは合流地点に向かい始めた。

番外編 入れ替わり

ある日、奨真と楓子はいつも通り奨真の義手のメンテナンスのためにユウキが勤めて
いる病院に来ていた。特に異常もなく、メンテナンスはすぐに終わる。

待ってる楓子は棚の薬品などを見ると、何か気になるものを見つけてユウキへと
質問する。

楓子「あのお先生。この薬品は何ですか？」

ユウキ「ん？あーそれはラベルが書いてある通りのものだよ」

奨真「なにになに……『入れ替わりの薬』？」

奨真は薬品を手に取り、ラベルを読んでみた。ちなみにその薬は1つだけじゃなく2
つ置いてあった。

ユウキ「その薬は飲んだ人の体が入れ替わるようになって開発したんだ。まあ実験してくれる人がいなかったから未完成に近いんだけどね」

奨真「めちやくちや怖いんですけど……」

なぜ実験してくれる人がいないのかというと、ユウキはよく自分が面白そうと思ったものを作るが、他の従業員は怖くてその実験にだけは付き合いたくないそうだ。

普段のユウキはいろんなドクターやナースさんに慕われているが、この手の時は恐れられているのだ。

楓子「何だか面白そう」

楓子は薬品の蓋を開けてグイッと飲んだ。それを止めようとする奨真だが、気づくのが遅かった。気づいた時にはもう楓子は飲み干していた。

奨真 「何で飲んだんだよ!!」

楓子 「面白そうだったから」

奨真 「くう……こうなったら俺も飲むしかないのか……」

奨真も薬品の蓋を開けて楓子と同じように飲み干す。空になった瓶はユウキの机の上に置かれた。

ユウキ 「うーん、この薬品の効果は飲んだ2人にしか表れないから楓子ちゃんだけ飲んでも効果なかったのに」

奨真 「それ先に言ってくださいよ!!!」

楓子 「まあまあ」

ユウキ 「でも効果が表れるかはわからないから気にしないでいいよ」

奨真 「それが一番気になるけど……もういいや」

奨真は鞆を持って扉の前に立つ。礼を言つて病室を出て家に帰り始めた。

楓子 「ねえ奨真君」

奨真 「なに？」

楓子 「もし本当に入れ替わつても、変なところ触つちやダメよ？」

奨真 「入れ替わらないよ……」

楓子 「もう……夢がないんだから」

奨真 「現実を見てると言つてくれ」

そんな何気ない会話をしていると家につき、いつも通り風呂に入って晩ご飯を食べて、ジャンヌも誘って3人でテレビゲームをしていつもの時間に寝た。

だが次の日に事件は起こった。

次の日

???
s
i
d
e

??? 「ふああ……そろそろ起きるか」

朝になっていつもの時間に起きる俺。ん？待てよ？俺って声高かったか？

まあいいや……。さつさと着替えよう。

俺は立ち上がろうとするが何か違和感を感じる。それは今まで全く感じたことのない

い感覚。何故か胸がものすごく重く、下の方がスースーするのだ。

??? 「ん？胸が重い？」

視線を落として自分の手で胸を持ち上げてみる。この感触や重み、これは絶対俺にはないもの。

??? 「嫌な予感がする……。まさか!？」

俺は急いで部屋の鏡の前に立つ。そこには俺の姿はなく、楓子の姿が映っていた。

??? 「な、な、な、なんじゃこりやあああああああ
!!!!!!」

??? 「奨真君!?!どうしたの!?!」

俺が叫んでるとその声を聞いた誰かが部屋に入ってきた。扉にはなんと俺が立っていた。

??? 「へっ？私？」

??? 「とりあえず部屋に入ってくれ。そして扉を閉めてくれ」

俺は俺？を部屋に入れてベッドに座らせる。まずは冷静に考えよう。まず俺の姿は楓子。そして目の前にいる俺だが、これは楓子で間違いないだろう。

??? 「まず確認をとるぞ。楓子だよな？」

楓子 「う、うん。じゃあもしかして……」

奨真 「俺は奨真だ」

楓子 「ねえこれって……入れ替わってるよね？」

奨真 「それしか考えられないだろ。とりあえずあのマッドサイエンティストに問い詰

めねーと」

奨真はそう言いながらニューロリンカーの電話帳から連絡先を探し出して電話をかける。ちなみにマッドサイエンティストとはユウキである。

何故マッドサイエンティストなのかというと、ユウキは薬剤師の資格も持っていて薬を作ったりもしていて、いつもとんでもない薬を作ってるからだ。

ユウキ「はあい……もしもし？」

奨真「おいマッドサイエンティスト。これはどういうことだ？」

ユウキ「どうしたの楓子ちゃん……。いつもの楓子ちゃんの口調じゃないよ？あとマッドサイエンティストは酷くない？」

奨真「あんな薬作ってる時点でマッドサイエンティストだろ!!あと俺は楓子じゃねえ!あんたの薬で体が入れ替わった奨真だよ!」

ユウキ「本当に入れ替わったんだ……。まさかの成功!？」

奨真「呑気に喜んでる場合か!!こっちは大変なんだよ!!」

ユウキ「それより、奨真君ちよつと怖いよ?前までそんな風に話さなかったじゃん。ボクのこと慕ってくれてたじゃん」

奨真「話をすり替えようとするな。とにかく、この入れ替わりの効果はいつまでなんですか」

ユウキ「24時間に設定して作ってあるから次の日には元どおりだよ」

奨真「ホツ……。よかった。話はそれだけです。それじゃ」

きる直前何か涙目で訴えようとしてたけど……。まあろくなことじゃないか。

楓子「とりあえず今日1日はこの姿で乗りきるしかないわね」

奨真 「そうだな。とりあえず制服に着替えなきゃ……」

楓子 「もちろん奨真君は私の制服を着るのよ」

奨真 「えっ？俺がああのスカートとか履くのか!？」

楓子 「当たり前じゃない。奨真君は今私の姿をしてるのよ。大丈夫、スカートの履き方やブラの付け方はちゃんと教えるから」

はあ……黒歴史ができてしまった……。

楓子 「とりあえず今私が付けてるブラを渡すね」

楓子はそういうと自分の服の中からブラを取り出して俺に渡してきた。さて、なんで俺の体から!？」

奨真「なんで俺の体から出てくるんだよ！」

楓子「だって私寝る時は付けて寝るから。ほら、付け方教えるから服脱いで」

楓子はそう言うが、今服脱いたら楓子の胸が露わになる。俺は見るわけにはいかない
と思い、目を瞑りながら服を脱ぎ始める。

楓子「奨真君？目瞑ってどうしたの？」

奨真「なんでもないから早く付けてくれ」

俺は楓子にブラをつけてもらい、制服も貰って着替え終える。楓子も俺の制服を着替
え終わったようだ。

あとは……ニューロリンカーの交換か。

奨真「楓子。ニューロリンカーも交換しないと変だ」

楓子「そうね」

ニューロリンカーを交換してお互いの首につける。これで完全に入れ替わったな。

奨真「今日1日は楓子として過ごさなきゃいけないのか。口調とかも気をつけないと」

楓子「そうだな。ボロを出さないようにしないと」

奨真「俺の真似上手いな」

楓子「そう？あ、そういえば今日体育あるから体操服も渡さなきゃ！」

奨真「えっ？」

マジかよ……よりによって今日体育あるのかよ……。

褒真
s i d e
o u t

学校……

奨真（今のところバレてる様子はないな）

奨真は周りをかなり気にしている様子だが、楓子はその逆で全く気にしてはいなかった。気にしていたら余計に変な風に思われると思っただけなのか。

楓子（奨真君の体で1日過ごすのって楽しい！）

いや、何も考えてない様子のようにだ。むしろ奨真と体が入れ替わってることを楽しんでた。なのにバレる様子が全くないのは普通に凄い。

そして一番の問題である体育の時間。奨真たちが通う学校の体育の時間は2クラス混合で男女別で行われる。普段なら奨真は普通に男子更衣室に入るが今回はそうはい

かない。

今の奨真の体は楓子。だから楓子が男子更衣室にいるのはおかしいことなのだ。つまり奨真は女子更衣室に入らなければいけないのだ。

奨真（はあ……なるべく端っこで着替えないと）

楓子は何事もなく男子更衣室に入り、奨真は女子更衣室へとトボトボと入っていく。奨真が中に入った頃にはもう女子生徒たちは着替え始めていた。

一般の男子生徒なら眼福ものだろうが奨真の場合は違う。彼はこう見えて紳士的なのだ。例えば風でスカートがめくれても彼は絶対に別の方を向くのだ。

なるべく見ないようにして端っここのロッカーに移動して体操服に着替え始める。着替える時も自然に楓子の胸や下着が目に入ってしまうがなるべく見ないようにする。着替え終えてホツとした時にジャンヌが突然話しかける。

ジャンヌ「楓子ちゃん？どうしたの？」

奨真「えっ!?!な、何が!?!」

ジャンヌ「なんだか様子がいつもと違うけど」

奨真「そ、そ、そんなことないわよ！ほら、ジャンヌも早く着替えて遅刻しないようにね！」

奨真は急いで更衣室から出て先生のところに向かう。

奨真（やばい心臓に悪すぎる……）

楓子 s i d e

男子の体育は走り幅跳びかあ。私記録あまり良くないから心配……。そんなこと思っていると私の番が来ちゃった。

「次、橘」

楓子「はい！」

こうなったら何も考えずにただ思い切り跳ぶだけ。私はいつも通り思い切り地面を

蹴って走る。

あれ？体が軽い？体というより胸が軽い？

なんだかいつもよりも早く走れてる気分になる。白線ギリギリで思い切り踏み込んでジャンプする。結構跳んだけど何メートルだろう？

「5. 6 m。少し伸びたか」

奨真君の体ってすごい。私の記録は4 mいくかないくらいなのに。

「これで運動部に入っていないなんてもったいなえなあ」

楓子「えっ？そうか？」

「そうだぞ！今度野球部の助っ人してくれよ！」

楓子「い、いや俺野球やったことないし」

「基礎は教えるから!!」

楓子「……考えておく」

もしかして奨真君っていつもこんな感じで助っ人を頼まれてるのかな？運動できる人が運動部に入っていないとこんなことになるのね。

あ、そういうえば奨真君のほうは大丈夫かな？たしか女子の体育は持久走だったような……。

楓子 s i d e o u t

奨真 side

女子の体育は持久走だつて聞いたから大丈夫かと思つてたけど大間違いだつた……。今の俺の体は楓子。つまり楓子の体で長距離を走ることになる。最初は体が楓子でもいつも通りにすればいけると思つてたけど、走り出したらかなり辛いことに気づいた。

胸が重りをつけてる感じでめちやくちや辛い……。走るたびに上下に揺れるしその反動で体力は削られるし……。楓子つていつもこんな重いものを胸につけてたとは……。楓子の体になつてその大変さが思い知つたよ。

奨真「はあ……はあ……」

「倉崎さん大丈夫？いつもよりペース遅いけど」

奨真 「っ!?だ、大丈夫大丈夫!ただ今日は調子悪いだけ……」

「ならいいけど。なんだか辛そうに走ってるからちよつと心配で」

奨真 「ほ、本当に大丈夫よ。わざわざ心配してくれてありがとう」

「気にしないで。無理はしないでねー」

そう言ってクラスメイトは先に走っていった。楓子ってこんな重いものつけてるのに速いんだな。やっぱり慣れてるからか?

俺も無理せずに早く走って終わらせよう。ペースを上げようと急に走り出したが事故が起きた。

奨真 「うつ……も、もげる……」

本当に胸がもげそうになり、俺は立ち止まって胸を押さえて蹲る。あまりの衝撃で自然に涙が出てきた。

奨真「もう嫌だ……早く自分の体に戻りたい」

なんとか立ち上がり、俺はゆつくりのペースで残り3周を走り切った。やっと体育が終わり、あとは国語だけ。……と思っていたが、まだ着替えが残ってた。

更衣室の端っこに移動して体操服から制服に着替えるために上の服を脱ぐ。その時、俺は楓子の胸に目がいつてしまった。

こうやってよく見たら本当に大きいよな……。思わず手で胸を持ち上げてそう思う。ただ重いだけじゃなく、弾力もあつてすごく柔らかい。これは世の中の女性たちが欲しがるものなんだろうなあ。

「倉崎さん？何してるの？」

その言葉で俺は我に返り胸から手を離す。声のする方を見ると、さつき俺のことを心配してきたクラスメイトがいた。

奨真 「べ、別に何もしてないよ！」

「胸を持ち上げてたけど……。うわあ……。近くで見たら本当に大きいし、すごく柔らかそう」

「なにになに？ 倉崎さんの胸の話？」

「どんな感触なのか知りたいから揉ませろ！！」

まずいぞ……。この流れだともみくちゃにされそう……。そうなる前にここから逃げ出さないと。まだ着替え終えてないけど……。仕方ない、トイレで着替えよう。

俺は素早く制服と脱いだ体操服を手に取りその場から逃げ出す。廊下に出たら普通なら間違いなくいろんな生徒に半裸の俺を目撃されるが、幸いにも今はまだ授業中。こ

これから一番近い女子トイレに駆け込めば誰にもバレずに済む。

なんとかトイレに駆け込んだ俺は制服に着替えて中から出る。その時、男子トイレの中からちょうど楓子が出てきた。

奨真「よ、よう楓子。偶然だな」

楓子「奨真くん？私の体で、しかも校内で何してたか正直に話してくれない？」

奨真「へっ？」

楓子「私の気のせいならいいんだけど、下着姿の私が走って女子トイレに駆け込んでいくところを見た気がするんだけど」

奨真「い、いやあ……それは……」

楓子「ど・う・な・の？」

奨真「……………はい、本当です。ごめんなさいいろいろあつたんですだから許してください」

俺はその場で誰もが感心するような綺麗な土下座をする。まさか楓子に見られてたとは…………。

楓子「全く…………私の体は奨真君のものなんだから、胸やお尻を触られるのは全然気にしないけど下着姿とかはあんまり他の人に見られたくないの」

奨真「いや、でも着替える時とかは見られるだろ？」

楓子「男子に見られたくないの。レギオンメンバーとかはあまり気にしないけどね。あまりね」

まあ…………レギオンメンバーには加速世界でトラップに引つ掛かった時にあられもない姿を見られたことあるし。楓子だけじゃなくて全員がなったからお互い様みたいな

感じだったけど。

楓子「さて、教室に戻ろっか」

奨真「あ、ああ」

俺と楓子は教室に向けて足を進める。

楓子「そういえば奨真君。持久走大丈夫だった？」

奨真「あーそのことなんだけど。お前よくこんなもの身につけながら走れるよな」

楓子「あら、失礼よ。それは女の象徴なのよ。こんなものなんて言っちゃダメ。うーん、私はやっぱり慣れかな？」

奨真「慣れかあ。本当にもげるかと思ったよ」

??? 「たしかに不慣れな人だともげそうになるよね」

奨真・楓子 「ん?」

俺と楓子は思わず振り返る。俺たちの後ろに立っていたのは悠花だった。

悠花 「やつほ。入れ替わって大変そうだね」

奨真 「待て、なんで知ってる」

悠花 「お母さんが家で言ってたから。すごく喜んでたよ。お父さんはそんなお母さんをみて呆れてたけど」

うん、ひとごとのように喜んでる先生と呆れてるカムイが思い浮かぶ。カムイ、頼むから一度先生を思いっきり怒ってやってくれ。

楓子 「それでどうしたの?」

悠花「ううん、入れ替わった2人がどんな感じかなあって思ってた声かけただけ」

悠花はそれだけ言うところか走っていった。さすが先生の娘というか自由なやつだ。

俺たちは教室にたどり着くと、扉の前には白雪が立っていた。近づくと俺たちに気づき、こっちに走ってきた。

白雪姫「あ、奨真さん！駅前のお茶店で新作のパフェが出たんですけど、それがカップル限定みたいでして……、今度一緒に来てくれませんか！」

奨真「ああいいぞ」

白雪姫「えっ？楓子さん？」

楓子（奨真君……）

しまったあ……いつもの癖で返事してしまった……。
今俺が返事したら楓子が返事したことになるのに……。

奨真「つて奨真君なら言うよね!!」

楓子「えっ!?あ、ああいぞ!先に読まれたか」

白雪姫「変なの……。じゃあ日にちが決まったらまた連絡しますね!」

楓子「おう!」

白雪はパタパタと走って自分の教室へと戻っていった。うつかりボロが出てしまったけどなんとか誤魔化せたみたいでよかった。

楓子「奨真君……。もう少し慎重になろうねえ」

奨真 「ごめんなさい……」

体が入れ替わっても相変わらず楓子には頭が上がらないなあ。そのまま教室に入り、席に着くと明日奈さんが入ってきて授業が始まった。

奨真 s i d e o u t

放課後。

いつもの帰り道を通っている奨真と楓子。公園の横を通り過ぎようとした時、公園から謡とイリヤと美遊とクロエが出てきた。

楓子はいつものように謡に抱きつこうと足を進めようとするが奨真に止められた。

奨真「今の俺たちは入れ替わってるんだ。今楓子が俺の姿で抱きついたらいろいろおかしくなる」

楓子「ご、ごめんなさい……つい癖で」

謡「あ、しよーにいとフーねえ！」

謡は奨真たちに気づくと手を振りながら歩み寄ってきた。それはとてもかわいらしい。イリヤたちも続いて歩み寄ってきて挨拶をしてきた。

イリヤ「こんにちは！」

美遊「帰宅中ですか？」

楓子「ああ、さつき学校が終わって家に帰るところだ」

クロエ「あれ？そういえばいつもの楓子ならういちゃんに抱きつくのに今日はしないんだ」

奨真「えっ!?!ほ、本当なら今すぐにでも抱きつきたいんだけど今日は我慢してるの！
なんかいろいろ止められなくなりそうだし！」

謡「そんな状態で抱きつかれたら本当に窒息死してしまいます……」

楓子「あはは……。でもういうい家遠いのによく来たな」

謡「遠いって言っても電車だとすぐなのです」

イリヤ「ごめんねういちゃん。いつも来てもらって」

謡「大丈夫なのです。学校がある日はいつもこつちで遊んでるんですから、休みの日はそつちに行きたいのです！」

謡とイリヤたちは同じ小学校に通っている。謡は地元だが、イリヤたちの地元は俺たちと同じ。だから学校は遠いから美遊の家の車で送り迎えしてもらっている。謡たちは学校がある日は学校の帰りにそのまま謡の地元で遊び、休みの日はイリヤの地元に遊びに行くという感じにしてるらしい。

謡たちの遊び事情を聞いてると後ろから声をかけられる。振り向くとそこにはイリヤとクロエの兄である衛宮士郎が立っていた。

士郎「よう2人とも。さつきぶりだな」

奨真「士郎君？」

楓子「さつきぶり」

イリヤ・クロエ「お兄ちゃん!!」

イリヤとクロエは士郎を見るとすぐに抱きつく。楓子と謡と美遊は微笑みながらその光景を見て、奨真は士郎の背後の方から何かに向かってきてるのに疑問を浮かべながら見続ける。

その正体は同じ学校に通うちよつとした問題児の2人だった。

??? 「衛宮君!! 追いついぐへえ!!」

???
「シエロおお!!先に帰るなんて酷いですわ!!」

士郎「おわあ!!ルヴィアさん!」

ルヴィア「わたくしずっと生徒会室の前で待ってましたのに窓を見たらシエロが帰る姿が!!それをみたわたくしはすぐに飛び出したのですわ!!」

奨真「どうでもいいけどなんで凛にジャーマンスープレックスきめたんだよ」

ルヴィアよりも早くに士郎の所についた遠坂凛だが、ルヴィアにジャーマンスープレックスをきめられて今はピクピクと小刻みに動いている。

意識がはつきりとした凛は立ち上がりルヴィアの髪の毛を思い切り引っ張る。

凛「こんのおお!!!!よくもやってくれたわねこの金髪ドリル!!」

ルヴィア「痛たたた!!あーら遠坂凛いたのですね!全然気づかなかったですわ!!」

凜「なあにが『気づかなかったですわ』よ!!思い切りジャーマン決めてよく言うわ!!」

楓子「ルヴィアのプロレス技って本当にキレがいいよね」

奨真「金持ちお嬢様からは想像がつかないな」

ルヴィアは渋谷で有名なエーデルフェルト家の当主。物腰優雅で白鳥の美貌、気品溢れる言葉遣いのお嬢様。成績はトップ10の中に入り、運動もそれなりにできる。そして美遊はエーデルフェルト家の養子なのでルヴィアは美遊の姉になる。ちなみに趣味はプロレス。

ルヴィア「そんなことより、奨真と楓子。あなたたちなんだか口調が変ですわよ?」

楓子「そ、そそそんなことねえって!な、楓子!」

奨真「え、ええ!気のせいよ気のせい!」

凜 「ルヴィア!! 今日という今日は許さないわよ!!」

ルヴィア 「いい度胸ですわね!! なら決着をつけましょうか!!」

士郎 「け、喧嘩はやめろって!」

凜とルヴィアはその場で決闘しようとするが士郎が止めようとする。すると2人はケロつと態度を変えた。

ルヴィア 「シエロがそう言うなら仕方ありませんわね!」

凜 「衛宮君がそう言うなら……」

奨真・楓子 (「チョロい……」)

クロエ 「相変わらずチョロいわね」

見てわかると思うが、凜とルヴィアは士郎のことが好きなのだ。学校の登下校や昼休憩の時はいつも争ってるのだ。士郎本人は全く気づいていないみたいだが。

士郎「そろそろ帰らないと。イリヤたちはどうするんだ？」

イリヤ「わたしたちも帰るところだよ」

楓子「ういいういは俺たち一緒に行こうか」

謡「はいなのです！」

奨真と楓子、謡は士郎たちと別れ、駅へと足を進める。本当なら奨真はバイクで送ってあげたいが、今は2人は入れ替わってるためそれができない。楓子は中型バイクの免許を持ってないため、奨真の体でも運転はできない。

駅に着いて奨真は楓子に自分のニューロリンカーから電車代を渡すように言った。

楓子は奨真のニューロリンカーから電車代を引いて謡に渡す。

謡「どうしたのです？電車代ならあるのです」

奨真「いやあ……本当ならバイクで送ってあげたいんだけどな。今俺と楓子の体が入れ替わっててできないんだ。だからせめて電車代くらい出してあげたいと思ってさ」

楓子「私中型免許持ってないから……。車もお母さんが使ってると思うし」

2人は事情を謡に話す。謡はすぐに納得して電車代を受け取る。

謡「そうだったのですね。だからフーねえはいつもみたいに抱きつかなかったのですね」

楓子「本当なら今すぐにでも抱きつきたいけど……今日は我慢」

謡「できれば自分送ってほしいですが……。送ってくれてありがとうございます。」

さよならなのです！」

謡はホームへと向かい、奨真たちは家へと帰ろうとするが途中であることに気づいた。入れ替わつてることを親に伝えた方がいいのかということ。

奨真「……………どうする？」

楓子「ジャンヌにも説明してなかったもんね……………」

奨真「ジャンヌには言えないだろ。今言ったら俺女子の着替えを覗いてたことになるぞ。でも親に説明するのもなんか……………嫌だなあ」

楓子「そんなこと言っても晩ご飯食べてる時にはバレるかもしれないよ？」

奨真「なら今日は外食にしよう。ジャンヌには『あら、奨真と楓子じゃない？』ん？」

2人は歩いていると、前からオルタとジルが買い物袋を持って歩いてきていた。袋か

ら見える材料から見て鍋の材料だろう。

楓子「おーオルタか。それは……鍋の材料か？」

オルタ「そうよ。今日は姉さんも呼んで3人で鍋でもしようと思っただけ」

その言葉を聞いた2人はナイスタイミングと思った。バレるのを覚悟でジャンヌを外食に誘うつもりだったからだ。

楓子「そうなのか。ジャンヌはもうそっちにいるのか？」

ジル「はい。先ほどわたくしが倉崎家にお迎えにあがりました」

オルタ「姉さんあんたたちに連絡するとは言ったけどきてないの？」

楓子はジャンヌからのメッセージを見て確認をとった。そこには今日はオルタたちと晩ご飯を食べると書かれていた。2人にとってはバレずに済むみたいで結果オーライ

イというところだ。

楓子「来てるみたいだ」

ジル「そうでしたか。では、わたくしたちはそろそろ行きますよ。支度をしなくては
いけませんので」

オルタとジルはマンションへ向かい、奨真たちは親に外食することをメールし、ファミレスへと向かう。ファミレスの近くまで来ると、入り口に見覚えのある赤髪の女性が見えた。

その女性は『ティーゼ・シュトリーネン』

大気女優だった。その隣には夫の『レンリ』と娘のステイカとリーランもいた。

レンリ「家族で外食なんて久しぶりだね」

ティーゼ「たまにはいいでしょ。リーラン、美味しかった？」

リーラン「うん！でもママの料理が世界一!!」

ステイカ「だつてき、よかったねママ」

奨真「ティーゼとレンリ！久しぶりだな！」

ティーゼ「奨真君！久しぶり！」

レンリ「楓子さんも久しぶりだね。……あれ？なんか2人ともいつもと感じが違うけど」

奨真・楓子「あつ……」

2人はティーゼとレンリに事情を説明する。すると2人は納得した感じで頷いた。

ちなみに2人はALOでティーゼと知り合ったが、レンリと知り合ったのは2人が買い物してる時にティーゼと一緒にいるところを目撃したからなのだ。

ティーゼ「ユウキさんはいつも通りだね」

レンリ「あはは……」

ステイカ「あまりあの人をいじめちゃダメですよ？」

奨真「いじめはしないよ。成敗だよ成敗」

ステイカ「笑ってるけど目が笑ってない」

2人はティーゼたちと別れてファミレスの中に入る。2人はメニューを見て品を決めて注文し、談笑しながら食事をする。

ファミレスから出てそのまま家に帰って2人は一緒に風呂に入った。何故2人一緒に入ったのかというと、奨真は楓子の裸を自分で洗うわけにはいかないと思ったため。だから風呂に入ってる間の奨真は常に目隠し状態だった。

風呂から出てパジャマに着替えた2人は部屋に戻って寝ることにした。

次の日……

2人は元どおりになっていた。それに気づいた奨真は歓喜の声を上げる。その声を聞いた楓子は奨真の部屋に入る。

奨真「よっしやあ!!元どおり!!」

楓子「ふふ、1日だけだったけど楽しかったよ」

奨真「俺はもうごめんだ。それより、今日も昨日の朝も大声あげたのになんでジャンヌや母さんたちは気づかなかったんだらうな？」

楓子「ジャンヌはぐっすり寝てたみたいだし、お父さんはもう仕事に行つて家になかったし、お母さんは朝ご飯作るのに忙しかったから気づかなかったんじゃない？」

奨真「なるほどな。さて、今日は土曜日で学校もないし、着替えて出かけるか」

楓子「どこに？」

奨真「軽いお仕置きをしに」

その時の奨真の顔は楓子が言うには少し、いやかなり邪悪な顔をしてたそうだ。これはロクでもないことを考えてそうと。

病院……

カムイ「全く……自分の弁当を忘れるなんて。仕方ないなあ」

カムイは病院にユウキのお昼ご飯の弁当を届けにきていた。隣には娘の悠花も同行していた。カウンターでユウキの仕事部屋を聞いて、お礼を言つて部屋へと向かう。

悠花「今日は仕事ないんだね」

カムイ「土曜日は月に一度だけ休みだからね。今日がその日なんだ」

親子で他愛もない会話をしているとユウキの部屋の前にたどり着いた。コンコンとノックしてユウキがいるかどうか確認する。声は聞こえてきたが、何故か涙声が聞こえてきた。

少し疑問に思いながら扉を開けると、そこにはユウキが床に（座布団は敷いている）正座して足の上にコンクリートの塊を置かれていた。

ユウキ「えーん！助けてよカムイ〜！」

カムイ「……………とりあえず何があつたの？」

カムイの問いには一緒に部屋にいたナースがユウキの代わりに答えてくれた。さつき奨真と楓子がやってきて、奨真がユウキに座布団の上に正座してくださいと言って、両手を後ろで縛り、さらにその上に持つてきていたコンクリートの塊を乗せて動けないようにしたのだ。

何故奨真がそんなことをしたのかというと、先日入れ替わりの薬のせいで酷い目にあつたため、ユウキには少し反省してもらおうと思つたかららしい。事情を聞いたナースは止めることはしなかった。

悠花「新しいプレイなのかと思つた」

ユウキ「こんなのただの拷問だよ!!というかこれ外してよ!!ボク仕事できないよ!」

ナース「先生には少し反省が必要だつて彼も言つてたじゃないですか。先生の仕事は代わりに私がやっておきますから」

ユウキ「うう……カムイいい……」

カムイ「こればかりは僕も何も言えないかな」

ユウキ「そんなあ……」

カムイ「それで、いつまでこの状態なんだい?」

ナース「たしかお昼休憩が終わるまでつて言つてました」

ユウキ「こんな状態じゃご飯も食べれないよ!!しかもボク今日弁当忘れちゃったし

!!
」

カムイ「弁当なら持つてきてあげたよ。ご飯も食べさせてあげるから」

ユウキ「あ、ありがとう」

悠花「私はお邪魔かな？じゃあ私は帰るね。ごゆっくり」

悠花は部屋から出て病院の出入り口に向かう。病院を出て家に帰る途中で悠花は眩
いた。

悠花「本当、いつまで経ってもラブラブな2人ね」

第36話 変身と犠牲

サテツの元へいき、すぐに戦闘態勢に入ったカムイたち。すでに暴れまわってるサテツは無差別攻撃を仕掛けていた。

カムイ「隙を見つけるのは大変そうだけど、もう一氣にいくしかないね。英雄の遺産を持つてる人は積極的にいこう！エギルと白夜は防御をお願い！」

カムイは指示を出し、各自役割を真つ当する。前衛はユウキ、フィリア、ストレア、レイン、セブン、ルクス、あきら、タクム、アルトリア。後衛は藤乃、美遊。サポートがジャンヌ、チユリ。そして防御がエギルと白夜となる。その間にカムイはあるコマンドを打ち込む。

そのコマンドとはカムイのみが使えるコマンド『種族変更』だ。ALOは妖精が主役

だが、カムイはとあるクエストの報酬として妖精から竜人に種族を変えることができるのだ。

カムイ「はあああああああ
!!!!!!」

ユウキ「カムイ!？」

カムイ「準備完了!!」

カムイは夜刀神を持って暴れまわってるサテツへと近づく。サテツはカムイを察知すると空高く飛び上がった。それに対してカムイは竜の翼を広げてジャンプと同時に高く飛び上がった。一瞬でサテツの元へと近づいたカムイは自身の左手を竜の口に変えて、その口から水玉のようなものが現れ、カムイの竜人スキル『竜穿射』を放つ

モ口に食らったサテツはスタン状態になり、動きが制限される。そのチャンスを見逃さなかったカムイは左手で思い切り噛みつく。その衝撃でスタンが解けたサテツは声を上げて怯んだ。さらに追い討ちをかけにいくカムイ。今度は左腕を槍のように尖ら

せてサテツに突き刺す。

カムイ「貫け!!」

タクム「あれはいつたい……」

ユウキ「あれはカムイの竜人スキル『竜穿』だよ。片腕を槍のように尖らせて相手を貫く技。リーチが長くて先端に当てれば威力は絶大」

チユリ「凄い……。でも暴走とかしてなさそうだし、ユウキさんが心配してるようなことはないんじゃない?」

エギル「いや、あれはまだその域に達してないだけだ」

ユウキ「あれは竜人になっただけで、完全に竜にはなっていない。体も完全に竜になったら、カムイは理性を失う」

そう……。カムイはまだ種族が竜人になっただけで体はまだ完全に竜にはなっていない。竜になってるのは体の一部だけ。だが全身が完全に竜になれば今のカムイは理性を失う。

ルクス「ソードサイクロン!!」

ストレア「やああああ!!!」

セブン「せやああああ!!!」

フィリア「はああああああ!!!」

ルクスはOSS、ストレアとセブンは英雄の遺産でサテツにダメージを与える。サテツのHPは半分をきり、このままいけば難なく倒せる感じになってきた。

ユウキ「いける!」

カムイ「っ!?!ユウキダメだ!!引くんだ!!」

さらに攻めようとユウキは突っ込んだが、サテツは態勢を立て直してユウキに突進した。それにいち早く気づいたカムイはユウキを止めようとするが遅かった。ユウキは剣で防ごうとするが、サテツの勢いが強すぎたせいでかなり吹き飛ばされてしまった。

ユウキ「がはっ……」

白夜「大丈夫か!?!」

白夜がユウキの元へ駆け寄った時、またサテツはユウキ目掛けて突進し始める。今度は白夜が盾でガードしてサテツの突進を受け止めた。ただ受け止めただけじゃなく、衝撃を盾に吸収していたのだ。

白夜「お前の攻撃、倍にして返すぜ!!ドレインクラッシュ!!!」

白夜のカウンター技が炸裂し、サテツは大ダメージを負う。だが惜しくもHPゲージ

は1本残ってしまった。もう一度全員で攻めようとするが、サテツは飛び上がって回転しながら空中を移動する。ただ動き回ってただけなら狙いを定めればいいのだが、サテツは自分の体から爆弾のようなものを撒き散らすため、近づくことが難しい。

美遊「はあ!!」

アルトリア「ストライクエア!!」

美遊とアルトリアは遠距離で攻撃してみるが、的は大きく外れてしまい、降ってくる爆弾の餌食になりそうになる。なんとか避けて距離を取るが、それでもサテツの攻撃範囲から逃れたわけではない。

美遊「当たらない……」

タクム「それに近づくこともできない……」

あきら「近づく前に避けるのに精一杯なの」

フィリア「せっかくあともう少して倒せるのに……」

近づくことができず、遠距離でも当てることができない。避けるのに精一杯になつて
るせいで戦況が悪くなる一方だ。だが、カムイは何か策があるようであらう。まずはサテツの動
きを観察していた。

カムイ「なるほど、あいつは8の字を描いて飛び回つてるようだね。爆弾をばら撒く
タイミングは決まつてるわけではなく、適当にばら撒いてるのか」

レイン「あの爆弾が一番厄介だね」

カムイ「そうだね。強行突破なら爆弾の餌食、慎重にいけばHPは削れても何時間か
かるかわからない」

藤乃「その二択なら私は強行突破のほうがいいと思います」

白夜「俺もそう思う」

カムイ「どうしてだい？」

藤乃「たしかに強行突破なら私たちはボロボロになって、最悪全滅の可能性がありません」

白夜「けど、逆に何時間もかけても俺たちが全滅しないとも限らない。それに俺たちのメンタルにもダメージはある」

フィリア「そ、それじゃあどうやっても結果は同じってこと？」

藤乃「いいえ、賭けにはなりますが、私の考えなら全滅は免れます」

ユウキ「考え？」

藤乃「カムイさん。カムイさんは竜に変身できますよね？ 竜人ではなく、完全なる竜

に」

カムイ「あ、ああ。それがどうしたの？」

藤乃「私の考えでは、カムイさんがキーマンになります。まず第一の目的はエネミーの動きを止めること。それにはカムイさんは必須です。カムイさん、あなたにはあのエネミーに突進して動きを止めてもらいます」

ユウキ「ま、まっつてよ！そんな簡単に言うけど、それじゃあカムイが1人で特攻するのと一緒だよ!!」

フィリア「そ、そうだよ！たしかに全滅しなくなるかもしれないけど、カムイ1人が傷つくんだよ!!」

藤乃の作戦はたしかに特攻に近い。それを聞いてユウキとフィリアは抗議する。けど、藤乃の作戦はまだ説明の途中だ。レインとストレアはそんな2人を宥めて作戦の続きを要求する。

藤乃「いいえ、カムイさんには万全の状態です。突進してもらいます。そこで私たちの出番です。私たちがカムイさんを爆弾から守る盾になるんです」

タクム「ボクたちが盾にですか？」

白夜「ああ。けど、これにはカムイ自身にも突進する以外にも頑張ってもらわないところがある。それは俺たちがいくら傷ついても、決して振り返らずに前だけ進み続けること」

カムイ「……………僕は……………やるよ。やってみせる」

ユウキ「カムイ！」

アルトリア「ユウキ、気持ちはわかりますが、これはカムイにしか頼めないことです。そのために私たちが彼を守る盾になるんです！」

ユウキ「でも！」

アルトリア「ユウキ、カムイのことを信じれませんか？」

ユウキ「えっ？」

アルトリア「ユウキがカムイのことをそこまで心配する理由はもちろん知ってます。ですが今はカムイの力が必要なんです。無理強いするつもりはありませんが、カムイ自身も了承してくれました。あとはカムイが成功するのを信じて、私たちが盾になるだけです」

カムイ「アルトリアさんの言う通りだよ。これは僕がやらなきゃいけないんだ。ユウキ、僕は大丈夫だから。今は僕を信じてくれ！」

ユウキ「……………わかった。けど、ボクがカムイより前にいつて、先に道を作る。他の皆はボクが仕留め損ねた爆弾をお願い」

なんとか了承してくれたユウキだが、今度は無茶なことを言い出す。カムイよりも無茶な行動を取ろうとするユウキを止めようとする、ユウキは誰よりも先に口を開いた。

ユウキ「大丈夫。僕はカムイを傷つけさせない。そう思えば思うほど、なんだか力が湧いてくるんだ」

白夜「よし、じゃあユウキを先頭にいくぞ！ジャンヌとチユリは回復を頼む！」

ジャンヌ・チユリ「了解!!」

ユウキがサテツに向かって飛ぶと同時に他の皆もユウキに続く。カムイも完全なる竜に変身して、後を追う。順調に近づいていくが、カムイは少し違和感を感じた。何故こんなにも順調に進んでるのか。爆弾をばら撒くタイミングはバラバラのはずなのに、誰もダメージを喰らっていない。

カムイ（あまりにも順調に進みすぎて……。これはいったいどういうことだ？）

そう考えると、ちょうど自分たちの前に爆弾がばら撒かれた。それに対応する前に、誰かが爆弾を一掃したのだ。その誰かはカムイは一瞬で理解した。前衛で戦ってるの1人しかいないから。

ボクはカムイたちに傷一つつけさせないために、自ら一番前という危険なところにいる。最初の作戦ではカムイだけを無傷でエネミーに近づけるために皆で盾になる作戦だったけど、カムイたちと作戦前に少し話した後、ボクが一人で盾になる作戦に変更してもらった。

もうカムイばかりに無茶はさせない。その思いが込み上がってきた。そしたらボクの中から凄い力が湧いてきて、今なら何でもできる気がした。

ユウキ「はあああああああああ
!!!!!!」

エネミーが爆弾をばら撒くと、ボクは瞬時に爆弾を斬って破壊する。その速さは今までに出したことがない速さだった。もしかしてこれがキリトが言ってたシステムを超える力？

この力なら、いける!!!

ユウキ side out

カムイの背中に乗ってるバーストリンカーたちはユウキのあまりの速さに困惑していた。その中でも白夜とアルトリア、藤乃は特に困惑していた。

アルトリア「あの速さは……ありえない」

白夜「何でユウキが……心意を使えてるんだ？」

タクム「ユ、ユウキさんが心意を!?!」

藤乃「あれは間違いなく心意です。本人は無自覚かもしれませんが、彼女の強い思いが具現化してます」

タクム「具現化って……いったい何を…？」

アルトリア「速さです。ユウキは圧倒的な速さを具現化しています。ですが、心意はあくまでも私たちバーストリンカーが使える力です。ALOプレイヤーであるユウキが使えば、どうなるかわかりません」

心意はバーストリンカーが引き出せる能力。それを本来使えるはずがないALOプレイヤーが無理に使えば、どうなるかはわからない。最悪の場合、脳にダメージがあるかもしれない。

タクム「な、なら早くやめさせないと!!」

カムイ「それはダメだ!!そんなことすれば、僕たちはユウキの思いを踏みにじることになる!!それだけは絶対にしたくない!!だから、ユウキの負担が少しでも減るように、素早くケリをつける!!」

ユウキが前衛で頑張ってくれてるおかげで、予定よりもだいぶ早く近づけた。それと同時に全員散らばって、残りの爆弾を一掃する。スキだらけになったサテツにカムイは狙いを定めて突進した。

カムイ「おおおおおおおおお
!!!!!!」

突進をモロに喰らったサテツは地面に落下してダメージを受ける。衝撃で怯んだサテツに、今度はユウキが追い討ちをかける。

ユウキ「はあああああああ
!!!!!!」

ユウキの剣が紫色に光り、同時に目にも止まらない突きを放つ。それはユウキのOS『マザーズ・ロザリオ』だった。

ユウキ「マザーズ・ロザリオ
!!!!!!」

最後の11連撃目をサテツに放つ。マザーズ・ロザリオを全て食らったサテツのHP

はゼロになり、ポリゴン状へと変わっていった。カムイたちは急いでユウキの元へ向かう。

無意識で心意を使ったユウキの状態は誰が見てもひどい状態だった。目は充血していて、身体中の血管が浮き出していた。VR世界で普通なら絶対にならない状態なのに、今のユウキはそんな状態だった。

アバターに支障が出てる場合やアバターの持ち主の命に関わるなら強制ログアウトになるはずなのだが、今のALOは加速世界と混合してるせいでバグが発生して、強制ログアウトが発動しないのだ。

カムイ「ユウキ!!」

ユウキ「……………カムイ? ボク…やったよ?」

それだけ言うと、ユウキは静かに後ろに倒れそうになる。カムイは元の姿に戻り咄嗟にユウキを受け止めて、ゆっくりと寝かせた。

カムイ「なんで……なんでこんな無茶を」

ユウキ「なんでって……？君を……守るためだよ。アンダーワールドでは……ボクに力がなかったから……君はボロボロになるまで戦い続けた。あの時……ボクは凄く……後悔した。だから……今度はボクが……君を守るんだって」

カムイ「ユウキ……」

ユウキ「ねえ……今度は……君を守れたかな？」

カムイ「何言ってるんだよ……。僕はいつも君に守られてるよ。今回も……君のおかげで勝てたんだよ」

ユウキ「えへへ……よかった」

残った体力で言葉を絞り出して、ユウキはそのまま眠った。全員がユウキの体のこと

を心配したが、カムイが大丈夫と言った。疲れが一気に襲っただけで、今のユウキは安心したように眠っているのだ。カムイはユウキを抱えて皆の方に振り返る。

カムイ「街へ戻ろう。きっと皆もエネミーを倒して戻ってるはず」

エギル「だな。それにユウキを安全なところで休ませてやらねえとな」

白夜「俺たちもしっかりと休まないといけないな。皆、戦いが終わったばかりで疲れてると思うが街までの辛抱だ」

疲れが溜まった重い体を動かして、街へ戻るために転移門を目指す。皆がどんどん転移門に入っていくが、カムイだけは中に入らなかった。そのまま後ろを振り返ると、そこには街で休憩してるはずのモードレッドがいた。

モードレッド「お前らの戦い、見せてもらったぜ」

カムイ「何か用？そんな物騒なものを構えて」

モードレッド「そう怖い顔すんなよ。暇だったからその辺の雑魚を狩ってたただけだ。んなことよりその女どうした？」

モードレッドは剣をしまい、抱えられてるユウキを覗き込む。ユウキの状態を見たモードレッドは顔を険しくした。

モードレッド「どうみても運がよかったとしか言いようがねえ。この世界じゃなかったら確実に死んでるぞ」

カムイ「わかってるよ。ここが別の世界なら、ユウキはいない。もしアンダーワールドでこんなことが起きたら……」

A L Oはゲームの世界だから痛覚はないし、命に異常が起きるようなことは絶対にならない。現実世界の体やアバターに支障があれば強制ログアウトさせられる。だが、今のA L Oはバグが多く起きていて強制ログアウトが作動しない。それでもユウキが無事なのはアバターがこんな状態でも現実世界の体に異常がないからだろう。現実世界の体

が死ねば当然アバターは消失するからだ。

モードレッド「しけたツラしてんじやねえよ。次はテメエがそいつを守ればいいだけだろ」

カムイ「でも、僕が無茶をしたらユウキはもつと悲しむ」

モードレッド「だあああ!! だったらお互い助け合えばいいだけだろ!! おまえらどんだけめんどくせえんだ!!」

呆れたモードレッドは大声でカムイに向かって叫ぶ。突然のことでカムイは驚いた。もちろん事実だったため、何も言葉は発せなかった。

モードレッド「はあ……。ま、適当に頑張れよ」

カムイ「……ありがとう」

カムイはモードレッドに向けて感謝を伝える。それを聞いたモードレッドはカムイに振り向かず、そのまま転移門へと入っていった。カムイもユウキを抱えて転移門を潜って街へ戻った。

空都ライン

先に戻っていたキリトや奨真たち。エギルの店でエミヤたちと話したりして休んで

いると、白夜たちが戻ってきた。

キリト「おかえり。やつぱりそっちもボロボロになったか」

白夜「まあな。でも倒してきたぜ」

アスナ「そうみたいだね。あれ？カムイ君とユウキは？」

アルトリア「……………あの、ユウキのことなんですが」

カムイ「僕が説明するよ」

アルトリアがユウキのことを伝えようとする前に後からやってきたカムイが先に口を開いた。そしてカムイに抱えられてるユウキを見た全員が驚愕した。

アスナ「ユウキ!!!」

奨真「先生!! いったい何が……」

カムイ「ユウキは……君たちが使う心意を使ったんだよ。本来は心意なんか使えるはずがない。けど、無理矢理使ったせいで、ユウキはこんな状態になったんだ」

アスナ「命に別状はないよね!! そうだよね!!」

カムイ「バグで強制ログアウトが機能しないとはいえ、ここにユウキがいるからその心配はない。でもユウキはこれ以上戦えない。いや、戦えさせない」

クライン「そのほうがいい。これ以上はユウキちゃんが危険だ。戦力が減るのは辛いが、人の命には変えられねえ」

キリト「そうだな。カムイ、ユウキのこと頼んでもいいか?」

カムイ「もちろん。言われる前からそのつもりだよ」

ユウキとカムイの戦線離脱は決定した。ユウキは状態から見てもちろんだが、そんなボロボロな状態のユウキを一人にするわけにはいかない。だからカムイ自身も離脱する道を選んだ。

カムイはユウキを部屋に連れていく時、白雪が部屋でユウキの状態を詳しく見たいと言った。カムイは了承して、部屋へと向かった。部屋について、早速ユウキをベッドに寝かせて、白雪はユウキの状態を見た。

カムイ「何かわかったのかい？」

白雪姫「……………カムイさん。この世界で傷を負うと、傷はどんな風に表されますか？」

カムイ「えっ？傷を負ったら、傷口にエフェクトが出るけど……………こんな風に」

カムイはアバターが傷を負った時の傷口の写真を一枚、白雪に見せた。それを見た白雪はやっぱりというような表情をした。

白雪姫「バグなのかわかりませんが、ユウキさんの状態がどこかおかしいです。腕

や脚の傷は普通の傷ついた時のエフェクトですが、目や鼻から出血したような跡があるところは、これはエフェクトじゃなくて、本物の血のように見えます」

カムイ「っ!？」

白雪姫「カムイさん、今すぐユウキさんをログアウトさせるべきです」

カムイ「……それはできない。ユウキはそんなことを望まない」

白雪姫「何故ですか!!アバターに異常が出てる以上、現実世界でも危ないかもしれないですよ!!」

カムイ「そうかもしれない。でもユウキならこうして眠ってる間でも、皆がユイちゃん助け出すところをこの世界で見守っていたいと思うんだ」

白雪姫「………そうですか。そこまで言うなら、私は止めません。ですが、少しでも危険と感じたらすぐにログアウトさせてください」

カムイ「わかったよ、約束する」

白雪はそう言うと、部屋から出て、奨真たちの元へと戻る。部屋に残ったカムイはベッドで寝てるユウキの髪をそつと撫でる。

カムイ「ユウキ……。無茶すぎだよ、せつかく完治したのに……。お願いだ、僕の前からいなくならないでくれ……」

消え入りそうな声でカムイはユウキに向かって言う。その目からは静かに涙が流れていた。その時、眠ってるはずのユウキから声が聞こえた。

ユウキ「泣かないで……。カムイ。ボクはいなくならないよ。ずっとボクを一人にしないでくれた君を置いていなくなるわけじゃないじゃん」

突然のことに驚いたカムイは顔を勢いよく上げた。カムイの目に映ったのは、カムイをじつと見つめて優しく微笑んだユウキだった。

カムイ「ユウキ!!」

ユウキ「はは……動けそうにないや。もうアスナたちの役には立てそうにないかな」

カムイ「皆には僕とユウキが離脱することは伝えてあるよ。今はゆっくり休んで」

ユウキ「むぐう……カムイ? そんなに強く抱きしめられたら息できないよ……?」

カムイ「ごめん……でも今はこのままでいさせてくれ」

ユウキ「………わかった」

ユウキは子供をあやすようにカムイの頭を撫でて、ゆっくりと眠りについた。こっそりとドアの隙間から見てた白雪は安心した顔でその場を後にした。